
我が業炎は霸王の剣

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が業炎は霸王の剣

【Nコード】

N3485P

【作者名】

ぱっつあん

【あらすじ】

ネギま！の世界で『業炎の剣帝』として名を馳せた俺は最終決戦で死んじまった。ようやく休めるな。……、は？ 今度は『真・恋姫十無双』？ なんだそれは？ 『真・恋姫十無双』を知らない彼はこの世界でどう動いていくのか……。では、始まるぞ！！

第零話 『業炎の剣帝、主人公設定をすること』 (前書き)

訂正しました。

ではござい…！

第零話 『業炎の剣帝、主人公設定をすること』

魔法界での名前：ジークフリート・D・B・ファナリスト

本名：龍崎桜牙りゅうしきさくらが

年齢：百歳以上

身長：186cm

体重：78kg

性別：男

一人称：俺

容姿：

黒眼黒髪で当初は長い黒髪をポニーテールにしていた。
だが『第参話』にてバッサリ切り捨てる。

髪型は『BLEACH』の黒崎一護より少し長めな感じ。

顔は上の下で女に間違われることも度々ある。

筋力：EX+(B)

耐久：EX(A)

俊敏：EX(B)

気：EX+(S)

魔力：EX+(D)

・強さランク

(E X > S > A > B > C > D > E)

性格：

基本的には適当だが、やるときはやる。

仲間思いの優しい性格。

敵には情けをかけない。

頼まれるとあまり断れない。

主従を誓った人がバカにされたりすると、自分のことのようにブチ切れる。

スキル

・真祖の吸血鬼

ハイデライト・ウォーカー

不老不死にして回復能力に徳化している。

・肉体年齢操作

自由に自分の肉体を変化させることができる。

男にも女にも年寄りにも赤ん坊にもなれる優れもの(?)

・時空の歪み

この中は四次元になっておりどのようなものでも収容可能。

現在は手袋などの日用品しか入っていない。

空間と空間をつなぎ移動することが可能

時空の歪みの中から外の状況をリアルタイムで見ることができない。
また食料などの無生物の時間はとまり腐ることがない。

・魔獣念話

修行している間になぜか身につけていたスキル。
魔獣ならドラゴンだろうとなんだろうと話することができる。

・魔法具精製

魔法具を創るための魔法陣に魔力を流すことにより即席の魔法具を創ることができる。

魔力を込めれば込めるほど強度、切れ味上がる。

備考：主人公

『業炎の剣帝』の二つ名がある。

現在は力にリミットがかけられているため、能力値が（ ） になっている。

自分で外すことは最高でも一つしかできない。

世界が違ふことにより魔法の精霊が反応せずに魔法が使えない。

・強さランク

桜牙 >> 呂布 (恋) > 夏侯惇 (春蘭) 、 関羽 (愛紗) > 趙雲 (星)

・数値化 (恋姫 ver)

龍崎桜牙 (5000)

呂布 (3 5 0 0)
夏候惇 (3 2 0 0)
関羽 (3 2 0 0)
趙雲 (3 0 0 0)
一般兵 (0 . 5)

ただこの状態の

桜牙はリミットが掛けられてる場合で、完全にリミットが無しで魔法が使えるとなると『恋姫武将』が全員で戦っても軽くあしらわれるレベル。

ちなみに恋姫verで『ジャック・ラカン』を表すと『10000000』

これはあくまでも作者の見方です。必ずしも当てはまるとは限りません。

と、こんな感じですよ。

アンケートなんですけど、一応ハーレム(予定)となっておりますが、ヒロインを決めた方がいい、またはこの人がヒロインがいい、と言っのがあったらドシドシ送ってください。

では感想待ってます!!

第巻話 『業炎の剣帝、霸王に出会うのこと』 (前書き)

最初の部分が分からない場合は、

『真祖の吸血鬼と業炎の剣帝の』E p 1 1 最終決戦』を見てみて
ください！

ではどうぞ！

第巻話『業炎の剣帝、霸王に出会うの』

「ジーク大丈夫か!!」

造物主に俺の全力をぶつけ完全に戦闘不能になった俺の元にナギが駆けつけてきた。

「大：丈夫…に見えん…のか…。…あとは…任せ…たぜ…」

「ああ！任せろ！」

ナギは俺にそう答えると造物主に向かっていった。

そして俺の体は造物主の攻撃を受けすぎたからなのか真祖の吸血ハイデライト・ウォーカーの不老不死の意味もなく消滅した。

それと同時に俺は死んだと確信した…。

~~~~~

右、異常なし

左、異常なし

後、異常なし

前、神様がいた

「よお、久しぶりだな。これでようやく俺は天国とやらに行ける

のか？」

「いや、無理じゃ」

は？ 無理？なにこのおっさん。

無理だつてなら俺はどうすればいいんだよ……。

「主はこれまでにたくさんの者を救ってきたな」

「いや、まったく身に覚えがありません」

「……。たくさんの者を救ってきたんじゃ」

「このおっさん言い直しやがったぞ……。」

まっ、今さらどうでもいいんだけどな。

「そんなんは俺が適当にやっただけだろ？」

「その適当でも十分に救われた者もいるのだ。じゃから特別に三度目の生をお主にやることにしたのだ」

「へっ？」

三度目の生ってことはアレか？

つまりまた転生しろってことなのか？

別に構わないんだが何回も転生なんかやらせてもいいのかよ……。

いやあ、あれだな。運がいいって奴だな。

「で、どこの世界に行くんだ？」

「恋姫無双じゃ」

……………知らん。恋姫無双ってなんだっけ？

「お主もしかして知らんのか？」

「だからなんだよ。教えてくれ」

「……………おもしろいことになりそうだから嫌じゃ」

「こいつおもしろ半分で俺を転生させようとしてんじゃねえだろっつな……………」

ふざけやがって……………。魔法でぶっ飛ばしてやるっか？

「ちなみにお主が行く世界ははっきり言つとネギま！に比べれば可愛い世界じゃ」

「ふーん、で？」

「じゃからお主が本気を出したら誰も止められないと言つことじゃ」

なるほどな、つまりは俺様無双ってわけだな。

恋姫無双と名前が似ているな。

ふっ、前の世界じゃ戦いが大変すぎて休む暇なんかなかったからな。今回は休めるかな。

「では、行ってくるのじゃ」

と、神様が言つと前回同様に足の真下に黒い穴が出てきた。

そして俺はそれに落ちるのと同時に意識を失った。

~~~~~

意識を失った俺は突如として自らに襲いかかってきた浮遊間に気づいて目を覚ました。いったい何事だ？ とか思いながら周りを見渡してみると、なんと絶賛スカイダイビング中であつた。

おいおい、俺がチートだからってこんな扱ってねえんじゃないか。さすがにこのまま落下したら痛いっつうの。そんなコトを思いながらどうやって着地しようかを考える。

『虚空瞬動』は足の裏に気を集中させて空中で爆発的に移動する言わば歩方で、すげー便利なんだけど空中に止まることが出来るわけじゃないしせめて勢いを和らげることが出来るくらいか。残念ながら空中に浮くことが出来る『浮遊術』は使えないんだよね。

はてさて、ここまで来るとどうやって着地しようか分からなくなってくるな。なんか魔力は沸いてくるけど『魔法』はなんか使えないみたいだし。何でかは分からないけど……。

そんでそんなコトを考えて試行錯誤しているといつの間にか地面

がかなり近づいてきて、そのまま頭から落下したのであった。

「痛ったあーっ!?!」

あんだけ上空から落ちて痛いだけで済んだのは俺のチート能力のおかげなんだろうが、痛いものは痛いんだよね。それにここはドコだっただけ?

雲ひとつない晴天の下で周り一面何もない荒野の真ん中に俺は腰を据えていた。立ち上がって周りを見渡してみても周りに広がっていた風景は山に荒野……、俺がいた世界では見たことがないような風景。

「たたくよ、あの神様はもう少しまともな場所に落としてはくれなかつたのかよ。つーかその前に何で前みたいにそつと置いてくれるようなやり方じゃなくて、落下型なんだよ。すげー痛かっただろうが。」

と、まあ、やられちまったことに対して怒っても仕方はないのだがとりあえず俺はこの場所にていたい何をやればいいんだろうか。そう思いながら体の調子を確かめるのだが、なんだか微妙に違和感が……。

「おい嬢ちゃん、珍しい服着てるねえ。一緒にいいことしねえか?」

んなことを頭の片隅で考えていると、後ろの方から野太い男の声がかして、振り向いた。しかしなんだこの男の格好? コスプレか?

男は頭に帽子のようなものをかぶり、半袖長ズボンのような格好だったが、着ているすべてが黄色のものだった。

コスプレか？……、ん？ 嬢ちゃんつてもしかして俺のことか？
まあ、自分で言うのは悲しいが女顔だし髪も長いからな。……、
切る暇なかったし。

「おうおう！ アニキが話かけてなのに無視してんじゃねえよ」

「そうなんだな、いいことするんだな」

「おい、何とか言わねえか」

今の状況に理解しようとする間にアニキと呼ばれる男が剣を抜き
喉元に剣を突きつけて言ってきた。おいおい、いきなり人に向かっ
て刃物突きつけてくるとは何事だろうか。

ん？ この刃物になんか血が付いてるな。乾いて何日も経ったよ
うなところもあれば、まだ乾ききってないような場所である。よ
く分からんがこいつら……、敵だな。

そう思った俺は刃物を手で鷲掴みにしながら兄貴と呼ばれた奴に
向かって言う。

「喧嘩を売る相手を『待たれえい！』……は？」

喧嘩を売る相手を間違えたなクソつたれ共、と言おうとすると突
如として後ろから女の子の声が聞こえてきた。振り向くとそこには、
少し切れ目で後ろ髪が結んであり宙に浮いているような女性が立っ
ていた。

「お主らのような、たった一人を相手に三人がかりで襲い掛かる

など言語道断！！ そんな貴様らに名乗る名前など、ない！！」

女性は言い終わると同時に槍を持ちきりかかっていた。よくは分からんが、とりあえず近くにいと巻き込まれそうなので避難しておく。

「ぐふっ！！」

そんでその女性が放った槍での一撃はは太った男の肩辺りにあたり、太った男は吹っ飛ばされて気絶していた。おお、すげーな。

「デブ、この野郎！！」

デブが攻撃されたことに気づき、チビが女性に飛びかかって行った。

「甘い」

女性はそうつぶやくと今度は横に槍を振りチビを一撃で仕留める。にしてもホントによく飛んでいく奴らだな。

「残るはあなた一人どうしますかな？」

女性は残る一人の長身に向かって余裕の笑みをみせながら言う。にしてもあの格好であんな色っぽい笑みを浮かべるとなんかアレだな、うん。

「お、覚えてやがれ」

女性に言われ立っていた長身の男は倒れている二人を担いでさっ

さと逃げて行つた。男たちとの戦闘が終わり少女がこっちに戻ってくるのが見えた。

「大丈夫であつたか？」

さっきの戦いで怪我などしてないか心配してくれるような表情で聞いてくれた。まったく、俺がボッコボコにしようとして助けに来てくれたんだよな。

「大丈夫だ、ありがとう。アンタ、強いんだな」

とりあえず助けてもらつたのだから、俺は笑顔で精一杯の礼をしたが。お礼をしたはずなのだがその瞬間に少女は俺を見たくないかのようにうつむいてしまった。

「どうかしたか？」

少女が急に真っ赤になつてしまい不安になつてしまう。もしかして笑みが引きつってただろうか、それで笑っているのだろうか。

だつて俺の顔を意識してみないようにしてるみたいなんだぜいくらなんでも落ち込むだろうよ……。まあ、気にしてたらラチが開かないからどうでもいいがな。

「い、いいえなんでもありません。これぐらいの武が無いと今の世の中生きていけませんよ」

「いやいや、星殿の武は一国の将ぐらいあると思いますが」

「そうです。星ちゃんがそう言うなら風たちなんてとっくの昔

に死んでいきます」

女性の後ろから眼鏡のきりつとした少女と頭の上に人形をのせた
少しおっとりとした少女が来た。

「いやいや、風たちには風たちにはしかできぬことがあるだろう」

どうやら三人は知り合いのようで笑いながら話をしている。

「ところでアンタ……いやいや、アナタ達の名前は？ 俺は……」

そう言えば普通に名乗ってもいいんだろうか……。魔法が使えない
い辺り、この世界には魔法の概念が無いのかもしれない。だったら
あの名前じゃなくてもいいかもな。

「龍崎桜牙だ、よろしくな」

「珍しい名前だな。姓が龍、名が崎、字が桜牙か？」

なんだか名字が変なところで区切られてるような気がするんだが
……。

「違う違う。姓が龍崎で名が桜牙。字はないんだ」

「そうなのか。本当にかわった名前だな。私の名は趙雲だ」

「風は程立と言います」

「私は戯志才と名乗っております」

戯才つて、いかにも偽名つて感じがするんだが……。えーつと……、趙雲と程立つて確か両方とも男だったような気がするんだが、……何故に女になってるんだ？

趙雲と程立は三国志の中に出てくる有名な武将だからよく覚えていたが、男だったので、この子たちから言われたことが正直信じられなかった。

「しかし、娘一人で旅とはなかなか危くないか？ 流れ星が降っていったので来たからいいもの」

心配して言ってくれた言葉だったのだが娘か……。とうとうこんな美人な女の人にまで女に間違われるほどになったか。それに流れ星ってなんだ？ まあ、どうでもいいか。

「趙雲、一ついいか？」

「どうした？」

「残念ながら俺は男なんだ」

それを言うと趙雲だけじゃなくて後ろの二人も驚いたような表情になっていた。

女に間違われるのは別にもう慣れてるから構わないが、驚かれるのはさすがにへこむぞ。

「そう言えば程立、風つて呼ばれてなかったか？」

「なっ！？」

僅かに抱いた疑問を言った瞬間に趙雲の槍が俺を殺すかのようにと迫ってきていた。だが俺は今までの経験からとっさにバック転の要領でその場から距離を置く。

「いきなりなにすんだ」

槍は俺の頭があつた部分を的確に貫いており、あそこにいたんなら確実に頭をぶち抜かれていただろうな。にしても、あいつの槍捌き……、並の実力じゃないな……。

「何故いきなり真名を言った!!」

「は？ 真名？ 何じゃそりゃ？」

と言うことで俺は趙雲から真名について教えてもらった。真名つつうのはこの時代の人間にとっての神聖な名前らしい。だからそんな神聖な名前を呼べるのは心を許した者だけであつて、それ以外の奴らがその名を呼べば殺されも仕方ないと言う構図が出来上がるわけだ。

そんなのもつてその真名を呼んでしまった俺は万死に値するってわけだ。そう言う習慣があるのが知らなかったとはいえ、悪いことしちまったな。

「悪いな。そのこと知らなかつたんだ」

「いえいえ、分かつてくれたなら、これからはいきなり真名を言わないようにしてくださいね」

程立は俺の言ったことに満足したように笑顔で先ほどのことを許してくれた。

「星殿、風。官軍の軍がこちらに来ます。早めにいきましよう」

そう言って指さした先の荒野の向こうからかなりの数の人間が来るのが見えていた。軍隊か？ 軍隊なのか、あれは？

「そうだな、それでは桜牙殿も達者で」

「お兄さ〜ん、それじゃまた逢う日まで〜」

「桜牙殿も達者で」

三者三様に笑顔で俺に向かって言うとその場からまるで逃げるかのようにどこかへ走って行った。

「行っちゃまったよ」

こっちに来てから初めて会った人達だったので、もう少し一緒にいて情報を聞き出したかったのだが、そんな自分勝手なわががままは言ってもらえないな。しかし程立、俺のことを何でお兄さんって呼んだんだ

「しかし、あれはなんだったのだ？」

俺は何故か俺の作り笑いで赤くなっていた趙雲のコトを思い出すのであった。うん、まあ、分からないことは分からないつつうこと
で気にしないでおくか。

三人が去ったあとに俺がどこに行こうか考えていると、後ろのほうから馬に乗って女性たちがやって来るのが見えた。しかもその中の黒髪の女性がなぜか怒った様子で『その変な格好をしている者待て！！』と言ってきた。

確かにあつちから見たら俺は変な格好をしているのかもしれないのだが、俺から見たらアンタの方がよっぽど変な格好だつづのとにかく変な格好をしているってう意識はあるから、立ち止まりあいつらが来るのを待つ。

「姉者そのような言い方では……。すまぬそのお方、少し待っていただけぬか？」

もうすでに立ち止まってるのにも関わらず青髪の美人がそう言うてきた。うん、さっきの黒髪の人もこつちの人もすげー美人だな。

「この辺りに流れ星が落ちてこなかった？」

二人の後ろから来た金髪で髪をクルクルにした幼じ……いや、少女が話しかけてきた。

「つーか今幼じ……ゲフンゲフン……、とにかく言おうとした瞬間に何か背中に今までに掻いた事がないような冷や汗が出てきたんだけど……。」

「わからないな、気づいたらここに居たんだからな」

「ここに居た？ あなたは何を言っているの？」

金髪少女はこんな場所にいるはずがない、と思っている様子で信

じられないような表情をしてくる。本当の口トと言えば本当の口トだから仕方がない。

まさか転生してここに落下してきましたー、なんて言ったとしても変な奴みたいに見られるだけだしな。

「まあいいわ、私の名は曹孟徳と言うはあなたの名は？」

「曹孟徳……、まさか魏を創ることになる元になるあの曹操だつて言うのか……？」

俺は半信半疑と言った感じにつぶやく。いやだってあの赤壁までは天下だったあの霸王・曹孟徳がこんな少女なんだぞ？　いくら何でも信じろつつうほうが難しいだろ。

あつ、でもさつき趙雲つて名乗ってた奴も女だったしあり得ないつつことはないな。

「なつ！？　いきなり華琳様の名を言うな！！」

「待て姉者、しかしなぜあなたは華琳様の名を知っている？」

黒髪美人はどっから出したか分からないが、大剣で俺に切りかかってくる。それに対して俺は回避の行動に出ようとするが、青髪美人に黒髪美人は止められたので俺も踏みとどまる。

だが確かに青髪美人の言うとおりだな。名乗ったはずの名前を呟かないで、知ってるはずのない名前を呟いちまったんだからな。警戒されるのも無理はないな。

だが曹操は特に驚いた様子ではなかった。肝が座ってるんだかそれとも固まっているだけなのか、それとも俺を品定めしているのか……。

「華琳様どうかいたしましたか？」

「貴様、華琳様に何をした！！」

しかもそんな曹操の様子を見て俺が何かをしたのではないかと思つた青髪美人は大剣をまた振り上げ襲いかかってきた。

ちっ、墓穴を掘つたせいで面倒なことになったもんだな。俺はそう思いながら対抗しようとした。

「待ちなさい春蘭」

「華琳さま！？」

だが曹操の一言に黒髪美人の動きは止められ、あの太剣が俺に向かって振り下ろされることはなかった。だが何故曹操は止めたのだろうか。

「あなた何で魏のことを知っているの？ 魏のことは私しか知らないはずよ」

「華琳様それはどういう意味ですか？」

金髪少女の言葉に青髪美人が不思議そうな表情をしながら訊ねた。

「魏と言うのは私が作ろうとしている国の名の候補の一つなのよ

「？」

なるほど……。まだこの時期には魏は創られてないってわけか。だったらその曹操しか知らない国名を董卓の馬の骨ともしれない俺が知ってるんだから、警戒するわな。

「あなたいったい何者？」

んでやっぱりこうなるか。にしてもこんなに小さいのが曹操か……。

「何か？」

心の声なのにまるで聞こえたかのように殺気が言葉に込められていた。おいおい、お前は心読者かって言いたくなるんだが……。

「いや、何でもない」

「そう」

にしてもなんだったんだか。今の首筋に鎌が当たっているような殺気の冷たい感じは……。別にビビったとかそう言うわけじゃなく、あんな小さい奴からなんつー殺気が出るんだつつつ話だ。

とりあえずは名乗っておくとしよう。また女と間違えられても面倒だしな。

「俺は姓は龍崎、名は桜牙、字はない。そんでもって女じゃなくて男だからな」

「アナタ男だったのね、驚きだわ。少し話をしてみたいから一緒に城に来ない？」

驚きだつて言う割にはあんまり驚いたようには見えないんだがな。

「こんな得体のしれない奴を城に行かせるんですか!？」

「春蘭、別に大丈夫よ、彼(?)に殺気はないわ」

やっぱり信用してないみたいだな。だつて?マーク入ってるもの、ちよつと首傾げちゃってるもの。

「姉者そう言うことだ、ソナタもそれでいいな？」

「別に、構わねえよ」

ともかくにも、こうして俺はこうして霸王・曹孟徳と出会つたのだつた。

第卅話 『業炎の剣帝、霸王に出会うのこと』 (後書き)

感想待ってます！

第貳話 『業炎の剣帝、説明をすること』

side 桜牙

曹孟徳と出逢い、この世界についていろいろ違和感があったが、
ともかくにも今は曹孟徳についていくことにした。この世界につ
いたばかりで俺は何も知らない、だったら有名な武人についていっ
て情報を集めるのが先決だな。

しかし、なぜ曹操たちは女になってんだ？ そこだけが疑問なん
だが、あいつらに問いかけても分かるわけじゃないし早めになれる
としよう。

そして俺は曹操の玉座の前に立っている。曹操の玉座の脇には黒
髪美人と青髪美人が構えてて、黒髪美人は何故か噛みついてきそ
うな勢いでこつちを睨んできていた。……俺が何をした？

「それじゃ改めて、私の名は曹孟徳、この陳留の刺史をしている
わ」

そんなコトを考えているうちに曹操が改めて自己紹介をやってき
た。

「俺は龍崎桜牙。んで曹孟徳さんは俺から何を訊きたいんだ？」

俺がそう言うと黒髪美人が何かよく分からんことを叫びながら斬
りかかってきそうになるが、青髪美人に止められる。それを見た曹
操が口を開く。

「まずは何故魏のことを知っていたのかと言うことと、私の名を当てたことね」

思ったよりも簡単な質問で助かったが、そんなコトでいいのか？

まあ、とにかくここで自分は未来なら来たと言っても信じてもらえないだろうし、第一に過去じゃなくて異世界だろうな、まあ、いいか。

「まず俺は現在の後漢王朝末期から数えて約1800年後の人間だと思う。俺にとって、曹操や夏侯惇、夏侯淵というのは、史書の中に登場する人物なんだ」

さすがに突拍子の無さすぎる話だったかと、俺は若干心配になりながら三人の顔を見る。とりあえずホントのことを言ったんだが、曹操と青髪美人は案の定信じられないように驚いていた。

「それはどういうことかしら」

さすがは後世にも名が残る者と言うべきか、すぐに冷静になって考えてきたようだな。

青髪美人は頭の中で必死に状況の整理をしようとしているのか、口に手を当てて考えているような格好で押し黙ってしまった。

黒髪美人はさっきと変わらないような顔で突っ立ってるが、分かっているのか？ 分かっているなら、多分。

「そうだな。曹操にとっては何らかの事件に巻き込まれて劉邦りゅうほうとかから保護されたところか？ それで分からねーんだったら、

昔に迷い込んだってところだ」

とりあえず残ってる知識からこの時代の人にも分かりやすそうな例えを絞り出した。ってアレ？ そう言えばこっちに来てから魔法世界に行く前の記憶が戻ってるぞ？

どおりでこんな例えを出来たわけだ。ネギま！の世界じゃ修業ばかりで勉強する暇なんざなかったからな。

「……なんとなく状況の理解はできたが。華琳様、もしやこの者が天の御使いでは？」

「そうね。しかし、あなたが本当に未来から来た人物だと言える証拠はあるかしら」

曹操は少し顔をほころばせながら言った。まるで答えなんて関係なしで楽しんでるだけのようだな。悪趣味な奴だな、会ったばかりなのにこんなコトを思うなんてな。

「そうだな、これから起こることだと時間がかかるし、魏のことと名を証拠にできなねえのか？」

「それは無理ね、密偵ならそれくらいできるでしょう」

おいおい、せっかくの人の提案をバツサリと切り捨てやがったよ。つたく、めんどくさいな。

「なら曹操の隣の二人の名を当てたら信じてもらおうか」

「春蘭、秋蘭まだこの者に名は名乗ってないわね」

俺がにやりとしながら言つと曹操はちつとばかりムツとしたような顔をしながら二人に言った。

「「はい!!」」

曹操の問に対して側近の二人は元気いと言つかなんと言つか、とにかくバカでかい声で返事をしていた。

「言つてみなさい」

そこで今度は曹操が俺を試すかのようににやりとしながら言ってきた。つたく、つくづく挑戦的だな。

にしても、曹操の側近の二人組か。普通に考えるってんなら、幼い時から関わりがある夏侯家のだろうな。………間違つてたらどうしようか。

「夏侯惇と夏侯淵だな」

「「なっ!?!」」

俺がビシツと指を指しながら言つと案の定二人は驚きの声を上げていた。曹操はこうなるのがわかっていたみてえだな。まったく、つくづく人が悪い金髪少女だな。

「これだけだと信用してもらえなさそうだな。じゃあ、曹操には二人の妹(?)で曹子廉そうしれんに曹子考そうしこうがいるだろ?」

まあ、ホントは弟なんだろうけど曹操が女なんだから弟にあたる

奴らも多分女だろうな。

「なんでそこまで知っている!!」

夏侯惇は俺が主である曹操の姉妹のことを知っていたことに驚き、これからの不安要素と感じたのかどうかは分かんが殺気を放ってきていた。

やれやれ、いくら夏侯惇つつつてもここまでの殺気を放てるなんてスゴいな。

「コレ、落ちつけ姉者。華琳さまこれは……」

「そうね秋蘭。あの二人はまだ戦には出てきていないから、名が売れているわけでもない。それに曹家と夏侯家以外で知っている者はいないはず。……こいつが知っているはずもない、いいえ、知ることなど出来ないはずだわ」

秋蘭と呼ばれた女性、多分夏侯淵だろうけど夏侯惇を沈めながら曹操に言う。

しかもそのあと三人からの視線が俺に一気に突き刺さる。夏侯惇と夏侯淵に至っては未だに俺を怪しんでるように見える。

「はあ……。こんな話で信じてもらえるとは思ってなかったが、ここまでとはな」

俺はそう言いながら頭をポリポリと搔く。そんな俺を見た二人はさらに警戒心を高めるが、曹操は相変わらず俺を見ているだけである。

「曹操、筆貸してくれないか？」

「貴様！！ 華琳さまになんと言つ口の『春蘭』華琳さま……」

春蘭と呼ばれた女性、こっちは夏侯惇だな。とにかく夏侯惇の言葉を遮り曹操が言葉を発した。

曹操が手だけを動かして後ろにいた兵士に指示をすると、兵士の一人が俺に筆を持ってきてくれた。そして俺はその筆で両手の手のひらに魔法陣を書いていく。とりあえずは簡単なでも構わないだろうな。

「よく見ておきな。こいつが俺が未来から来たつつう証拠だ」

俺は墨が乾いたことを確認しながら魔法陣を書いた手のひらを胸の前で合わせる。そしてその二つの魔法陣に魔力を流し込む。

魔力を流し込んだあと両手を離す。すると両手の魔法陣から一対の短剣が現れる。片方は真つ白の短剣、もう片方は真つ白な短剣とは対照的に真つ黒な短剣、名前は『魔法具・白羽黒羽』とでも呼んでおくとするか。

そして俺が魔法具精製をすると今度は二人だけでなく、曹操までも驚いていた。

「これで信じてもらえるか？」

「さすがに驚きね……。じゃあアナタを『天の御遣い』って宣伝してしまつコトにしましょう。」

アナタが何者であっても確かめる手段なんて持ってないのだから大丈夫でしょう。

それに昼間なのに流星が落ちてきた。そこに行って見たら、見たこともない格好をした人間がいた。

それに私たちの目の前で不思議な技をやったと言うのは状況証拠としては十分と思えるものだわ」

とりあえずは分かってもらえたのかもしれないな。『天の御遣い』つてのが引つかかるが、訊くまでのことはないだろうな。

「か、華琳さまはこの者の言うことを信じるのですか？」

「完全に信じたわけじゃないわ。でも、嘘を言ってるようには見えない。第一に、私達しか知り得ないことを知っているのを敵に回しても、面倒なだけだしね」

面倒なだけってどんだけ適当なんだよ……。俺も人のことを言えるような性格ではないがな。

「それは華琳さまの勘ですか？」

「悪いかしら？」

悪いかと聞きながら、声にも表情にも曹操は悪気をまったく出さない。それに対して夏侯淵は首を振る。

「そう言うわけだから天の御使いとしてここにいてもらうわよ」

どういうワケだかは分からないが、まあいいだろう。

「別に行く宛があるワケじゃないから有り難く居させてもらおう

か

ようやく解決かなと思いきや夏侯惇がいきなり口を挟んできた。

「待ってください華琳様、こんな無能そつな奴を配下に加えるのですか？」

うむ、確かに武器を創り出しただけで戦えるかどうかって言った
らまだみせたワケじゃないから分からないわけだ。

だからって俺に勝てると思ってもらっても困るな。つーか夏侯惇
は俺が創り出した『白羽黒羽』をそんなに見つめて何してんだよ。

「それもそつね。だったら春蘭には武官として、秋蘭には文官と
して試験してもらいましょう」

どうやら、曹操は適性試験でもやっておきたいのか、それとまた
だ面白そうだからそうだからか、それとも俺の力を見たいのか言っ
たのかは分からないが、少し笑っていた。

うん、あれは絶対おもしろ半分で言っつてやがんな、決定だ。そん
なコトをため息混じりで考えていると曹操が言ってきた。

「試験は明日でいいわね」

「ああ、別に構わない」

「それでは部屋に案内するわ」

曹操は玉座から立ち上がると俺の部屋になる場所まで案内しても

らうことになった。んなこと侍女にでもやらせればいいのだろうと思っただが、俺が不審者だつつうことを思い出して納得してしまった。

しかし、警戒されたままではコレから何をすることも面倒だし、とりあえず訊いておくでしょう。

「曹操、試験以外の時間は何をしてもいいのか？」

「城の中にいるぶんには別にいいわよ」

なんだかあっさり承諾されてしまった。俺が曹操に対して謀反を起こすとは思わないのかとか思ったりしたワケなのだが、『この曹孟徳がいる城でそんなことをできるのならね』と言っているかのような後ろ姿に思わず訊くきが失せてくる。

そんなコトを思いながら曹操達の後ろをついて行くのだが、改めて曹操の背丈を自分の背丈と比べてみるのだが小さいな。身体も小さかったが胸も……、

「何か変なこと考えてない？」

「いーえ、なーんにも」

俺の考えたことを再び見透かしたかのように言ってくる。「こ、怖い、あの目が素晴らしいくらいに怖いぞ……」。

目で人を殺すとは言いが、まさに今の曹操のような奴のことを言うのだろうな。

「部屋に着いたわよ、後のことは使いの者に伝えるから」

そうこうしている間にも俺の部屋に到着したらしい。中を見るがこの時代の屋敷……ならば特に変わったところはなく普通の作りをしていた。

「分かった」

俺がそう言うと曹操達はその場から去って行ってしまった。とりあえず三人の姿が見えなくなるのを確認した俺は部屋の中に入る。

そしてとりあえずベッドに寝転がり今までの状況を確認する。えーっと、まずは俺がとばされた世界は三国志の世界で俺が拾われたのは魏の曹操。

曹操は曹操なのだが何故かこの世界の武人は知っている限りは全員が男から女へと性別が変わってると言うんだが、ここがおかしい。

考えたところで分かるわけではないのだが、とりあえずおかしいと言っただけは分かる。

「はあ……、何が何なのやら……」

俺は転住を見上げながら呟いた。さて、明日は夏侯淵による文官のテストで夏侯惇による武官のテスト……か。武官の方は何とかなるとして文官の方は読めるかが問題になってくるよな。

文字さえ読めれば作戦とかは立てられるんだが読めなきゃ意味はない。

「……面倒だし、寝るか」

俺は考えるのを放棄してそのまま眠りについた。

第貳話 『業炎の剣帝、説明をすること』 (後書き)

感想待ってます！

第参話『業炎の剣帝、試験をやるの』(前書き)

どはむいびー！

第参話 『業炎の剣帝、試験をやるのこと』

side 桜牙

目に入る光により俺は目を覚ました。どのくらい眠っていたのだろうか、と思うのだがあいにくと時計があるワケじゃないから時間を確認することができない。

こう言つところをよくよく考えてみるとホントに昔に来たんだなつてつくづく思わされるな。ため息混じりで思いながら太陽の位置がドコら辺にあるのかを確認する。

うゝむ、太陽はまだそんなに昇ってないみたいだし、その前にもの中からする気配で動いてるのはあんまりないみたいだ。つまりはまだ朝になって間もないみたいだな。

そんなコトを思いながら身体をほぐしていく。今日は文官と武官の試験があるんだつたよな、正確な時間は教えてはもらってないけど、そのうち誰かが動き出すだろ。

身体をほぐしたあとに部屋に置いてあつた墨と筆を取り出して、時空の歪みから手袋を出した後に、両手に違う魔法陣を書いていく。最初っから武器出しておくのはいいけど、やっぱり多彩な武器使つてみたいからな。

「……よし、こんなもんか」

俺は魔法陣を書いた手袋を乾かしながら言う。この魔法陣は少し

でもブレると意味がなくなって武器が出せなくなるからな。まったくホントだったら消えないようにしたいんだが生憎と今の技術じゃそんなコトは出来ないからな。

だから今は使い捨てでもいいからすぐに武器を使えるようにしないと。そして魔法陣を書いた手袋が乾いたことを確認すると、俺は身体を動かすための場所を探すために、自らの部屋を出た。

「あー、どっか身体動かせるところはねえのか？」

俺はそう呟きながら城の中を散策していく。にしてもバカみてえに広い城だな。城って言えばこんな大きさなのかもしれないが、にしたって大きすぎやしないか？

慣れたら迷うってコトはないんだろうけど今の俺じゃドコに何があるかなんてまったく覚えられないぞ。そんなコトを思いながら城の中を歩いて回っているのだが、全然外に出られるような気がしない……。

迷ったか、迷っちゃまったってのか、おい。ため息混じりで歩くこと数分後、ようやくちょうどいいくらいの広さの敷地を見つけた。

「さて、大分身体も鈍ってるし少しきつめに動いておくか」

俺はそう呟きながら両手を合わせて魔力を手のひらに集める。そして両手に集めた魔力を手のひらにさつき書いておいた魔法陣に魔力を流し込む。

今回創った魔法具は昨日創った『白羽黒羽』ではなく、今回は槍の魔法具『雷獣』を創る。雷獣って言うのが別に雷とかを出せるワ

ケじゃないんだけどね。

そして槍を構えると目を閉じてイメージを固める。イメージする相手は、今の自分と同等の力を持つ……あーんと、ジャックにしておこうかな。とりあえず強さは今の俺くらいに……。

そこまでするとようやく頭の中から感覚的にイメージが見えるようになった。

「ふう……。よし、はあっー!!」

そして俺はイメージに向かって槍を一直線に突き出す。だがイメージはそれをあっさりと避けて俺に殴りかかってくる。

それを俺は槍を軸にして飛び越えるようにイメージの後ろに回り込む。そしてイメージに向かって槍を横風振るうが、イメージはそれを先読みしてしゃがむことでそれを回避して俺に向かって蹴り出してくる。

俺はそれを受け流すかのように槍を構え、弾く。実際には当たってないからなんとも言えないんだけど、身体を動かすにはもってこいの相手だ。そして身体をひねり槍を振るう。

だがイメージは真上に飛躍してそれを避けさらに俺に向かって連続で蹴りを放ってくる。それを俺はギリギリで見切り、反撃の糸口を見つけて出す。

しかしイメージの連続攻撃には接近戦で戦うには隙がないため、一旦後ろに飛躍して距離を置く。こいつ相手に槍は不利だったか。

なので俺は再び手のひらに魔力を集中させ魔法陣に魔力を流し込み、『白羽黒羽』を精製して構え直しイメージに向かって走りだした。右の白羽を切り上げ、左の黒羽で雑払い連続で双剣による乱舞を放つ。

さらには白羽でイメージの攻撃を防いでいきながら黒羽で切り裂いていく。だがイメージとはいえ仮にもジャックが相手だ、なかなか致命的にはならない。だが俺はそこで片方の短剣を破棄してイメージを消して息をつく。

「ふう……。準備運動はこんなモンでいいだろうな」

息を整えたあとに今は結んでいる髪を短剣で切ろうとすると、後ろの方から拍手のように手をたたく音が聞こえた。

後ろを振り向いてみるとこっちを見ながら壁に体重を預けている曹操がいた。

「曹操か。どうしたんだ、こんな朝から」

「アナタを偶然見つけたから見てただけよ。それにしてもなかなかの動きね」

「そりゃ、どうも」

俺は曹操に言うところ今度こそ髪を切るために手を後ろに伸ばすと曹操が言ってきた。

「あら、そのキレイな髪切っちゃうの？」

「ん？　なんか問題でもあるのか？」

俺が訊くと別に、と素っ気ない答えだったがダメだったのだろうか？

まあ、何はともあれ切ってはダメって言われてないから切っちゃってもいいんだよな。そう思いながら俺は髪を切る。長い黒髪が結ばれていることにより、地面にボトリと落ちる。

俺はそれを拾い上げ、バラバラにならないように人結びしてから捨てた。

「で、どうしたんだ？」

「さっきも言ったでしょ。偶然見つけただけよ。でもちょうどいい時間帯だし、試験を始めましょ」

曹操についてきなさいと言われて曹操の後ろをついて行った。そして到着したのは昨日も入った玉座の間だった。

中にはいるとすでに文官の試験をするための準備が整っており、夏侯惇と夏侯淵もすでに玉座の間に来ていた。

そして机みたいなものの上に紙のようなものが置かれていた。

「文字の読み書き、それと私からの質問に答えてもらおうか」

俺が机のところ立つと夏侯淵が俺に向かってそう言ってきた。

「あーんと、そのことなんだけど……、文字は書けないし読めな

い

「ふむ、ならば私の問いに答えてくれるだけでよい」

「悪いな」

どうやら読み書きの方はあとにでも学べばいいと言っことらしい。多分質問って言うのはこの戦局だったらどういいう動きをするんだ、とか言うのを訊かれるんだろうな。

戦局の指示とかはなれてはないが、この局面ならばどのよういに動けばいいかとか、こうするのが得策だ、とか言うのは分かる。

分かると言ってもあくまでも俺視点になっちまうからどうしても困るってのが本音なんだよなあ……。さすがに俺視点で軍での動きとなると自爆は間のがれるコトは不可能なんだよね。

俺一人だったらどうとでもなるけど、さっきの準備運動で分かつたんだが俺の力にはなんかのリミットが掛けられてて、本気出せないんだよなあ……。

それで夏侯淵からの質問が始まった。手元には分かりやすいように資料的なものが渡されている。

「この状況のときはどうする」

「俺だったら、正面突破は……無理だから様子を見る」

「うむ、ならばこの場合は……」

「これは右翼と左翼に分けて挟み込む」

「だったらこれならどうする？」

「これだったら正面突破で行けると思うな」

と、こんな具合に質問は何分にも及んで繰り広げられた。正直夏侯淵の表情はあんまり変わらないから、コレが得策なのか間違っているのかが分からないんだよな。

それにときたまふむ、と悩むような素振りも見せてくるしこりや多分文官の試験は落第って奴だな。なるべく集団的行動を基本とした頭で考えたんだが、アレで精一杯だったな。

あとは武官の試験をクリアするしかないな。そんなコトを思っていると夏侯淵が曹操と何かを話しているのが見えた。しかも新たに資料を持ってこっちに来たんだが、追加でやるのか？

「このことについて意見がほしいんだが……」

「ん？ どれだ」

内容は区画整理に近いものだった。どうやらこの街が大きくなりすぎたせいか、一度はつきりと整理するつもりらしい。

しかし、案件を見るとかなり無理があるように見えた。曹操も見てまとめたらしく、かなり完成されている。だが魔法世界で生きていた俺には未完成に見えた。

「そうだな、この国の君主は曹操で周りに夏侯淵たちがいる状況で考えていいのか」

とりあえず訊いてみる。じゃないと政策を実行する君主やその周りによってかなり内容が変わる内容だからな。

「そうだ」

「そうだな、だったらここをもう少し詰めた方がいいと思うな。あとこっちも直せばよくなるはずだと思う」

俺はとりあえず案件を見ながら直した方がいいと思ったところを書き直していた。しかし、この時代であれだけものを作るとは、さすがは曹操と言ったところだろうか。

「こんなんでどうだ？」

俺が言つと夏侯淵は信じられないのか、目の前のことに少し驚いている様子だった。

まあ、俺が居た世界の知識を使ってるんだから思いつかないのも仕方がないのだろうが、そこまで素直に驚かれると俺が考えたわけじゃないから後ろめたいな……。

「結果の方は武官の試験が終わってから伝える」

「ああ、分かった」

夏侯淵の言葉により我に戻る。と、とりあえず言わなきゃバレないんだし、よしとしようか。

そして夏侯淵は俺が書き足した内容を曹操に見せるために立ち去

ってしまったのだが、今度はウキウキと言つかウサウサと言つか…
…。とりあえず落ち着きのない夏侯惇が俺に近づいてきた。

「次は私の番だ！！ ついて来い！！」

「あいよ」

俺は気合い十分と言わんばかりの夏侯惇の後ろをついて行く。そんな俺の後ろを曹操と夏侯淵がついてくるわけだが、曹操は何故か俺を興味津々げに見てきている。

そこまで俺と夏侯惇の戦いが楽しみなのか……。そんなコトを思いながらやってきたのは訓練中の兵士がいるところだった。

どうやらここで武官としての試験を始めるらしい。夏侯惇はどっから取り出したか分からんが、出会ったときに持っていた大剣をすでに構えている。

あの大剣に対していろいろ策を講じることは出来るが、あいつは俺の武器を双剣しか見てないし双剣使わないとフェアじゃないよな。そう思った俺は手袋に書いた魔法陣に魔力を流し込み『白羽黒羽』を創り出し構える。

「では、始めなさい！！」

俺たちが構えるのを見た曹操が戦闘開始の合図を発した。それと同時に夏侯惇は俺に向かって踏み込んできて、大剣を俺に向かって一気に振り下ろしてきた。

「はあああああっ！！」

それに対して俺は白羽黒羽を真上で交差させるように構えて夏侯惇による一撃を受け止める。ガキーン！！と鉄同士がぶつかり合う独特の音が響き渡る。

うおっ！？ 試しに受け止めてみただけだっつうのになんつー一撃の重さだよ。さすがにあんなもんリミットの掛けられた今の状態で受けてられねえぞ。やれやれ、さすがは夏侯惇將軍と言ったところだな。

そう思った俺は白羽黒羽で受け止めている夏侯惇の大剣を一気に押し返す。夏侯惇は俺が押し返したことに驚いたのか一瞬だけ体勢を崩す。しかしそこはさすが夏侯惇と言うべきかすぐさま体勢を立て直して、俺に向かって大剣を横風振るってきた。

それに対して俺は右手に持っていた白羽で受け止める。ギリギリになっちまったがなんとか受け止めることに成功した。そして俺は夏侯惇に向かって黒羽で斬りつけるが、素早く大剣を引き戻した夏侯惇は大剣の腹で黒羽の一撃を受け止める。

「なかなかやるな、龍崎！！」

「アンタもなかなかのもんだなア！！」

俺はそう叫ぶとリーチの長さをカバーするために極接近戦に持ち込む。こっちの素早く動かせると言う長所を生かして、連続で白羽黒羽を振るっていく。夏侯惇は俺の攻撃に対して守りにはいるだけで攻撃に転じることが出来ない。

当たり前だ、俺がちよいと本気を出しさえすれば攻撃に移させな

いなんつーのは簡単だつっつの。

「まだまだだ!!」

「は？ うおっ!？」

なんつーバカ力だんだよ……。力業だけであの形成を一気に変えちゃったんですけど、しかもこっちは魔力を込めて創った魔法具だつて言うのに輝が入っちゃってるし……。

バカ力にもほどがあるだろうによ……。仕方ない、作戦変更だ。目には目を、歯には歯を、力業には力業ってな。そう思った俺は『魔法具・白羽黒羽』を破棄して再び両手を合わせて魔力を錬る。

「どうした？ 私の強さに恐れ入ったのか？」

「いや、確かにアンタは強いが負ける気なんざさらさらねえんだよ」

そう言った俺は手の甲に書いた魔法陣に魔力を流し込み、『魔法具・流鎖刃月』を創り出す。

流鎖刃月は基本的な日本刀の形をしているが全部が真っ白で統一され、さらには柄の部分には鎖がついている。

「本番はこっからだ。……行くぞ」

俺はそう言い小手調べを終わりにして、結構本気で行く。さすがに瞬動は使わないが一気に夏侯惇との距離を縮めて『流鎖刃月』を夏侯惇に向かって一気に振り下ろす。夏侯惇は驚いたような表情を

しながら、大剣を盾代わりにして俺の一撃を防ぐ。

さらに俺は切り返して今度は真横から夏侯惇に向かって斬りかかるがまたもや夏侯惇は反応してそれを防ぐが、俺の一撃の勢いを殺しきれずに後ろに後ずさる。

その隙を見逃さずに俺は夏侯惇との距離を一気に詰めて、『流鎖刃月』を一気に振り下ろそうとしたが……、

「両者そこまで！！」

俺が振り下ろした刀の刀身が届く前に曹操がいきなり終わりを宣告した。さすがに寸止めで終わらせる気だったのだが、俺がマジで斬ると思ったのか？

そう思いながら振り上げた刀を肩に担ぎながら曹操を見る。

「華琳さま！！ 何故ですか、まだ勝負は終わっていません！！」

夏侯惇は立ち上がり曹操のもとに駆け寄りながら抗議をする。

「春蘭おちつきなさい、これは勝負ではなく試験なのよ。それにあのままだったら確実に負けてたでしょ？」

「う……」

曹操の言葉が自分も思ってたことだったようで言葉に詰まっていた。

「まあいいわ、それじゃ試験の結果を言っわ。桜牙には武官と文

官両方さらに戦の時は将をやってもらおうわ」

「いきなりだな。しかも将までやれって、おい」

しかも試験の結果は文官の方は纏まってるかもしれないが、まさか武官の方まで決められるとはな。

「何を驚いているの」

「そりゃ驚くだろ、いきなり来た新入りがいきなり両方さらに将なんて普通はなるもんじゃないだろ」

「別に優秀なら誰でも取り立てていくわ。それに今、家には将が勤まるのがいないの」

確かに魏にいる將軍はまだ少ないと思っではいたが、いきなり言われてもなあ……。

「それで武官の仕事がある時は武官、それ以外の時は秋蘭の仕事を手伝ってもらいたいの」

「あいよ」

と言うことはとりあえず文官の方は文字を覚えてからってことだな。

「それじゃ改めて、私の名は曹孟徳、真名は華琳よ」

「私の名は夏侯惇、真名を春蘭と言っ」

「私の名は夏侯淵、真名を秋蘭と言つよろしくな」

「俺は龍崎桜牙。真名はないから、龍崎でも桜牙でも好きな方を呼んでくれ」

こうして俺は正式に魏に使える将になったのであった。

第参話 『業炎の剣帝、試験をやるの』 (後書き)

現在、一刀を出すか悩んでいます。

なので皆様の意見をください！

感想、意見待ってます！

第肆話 『業炎の剣帝、買い物に行くの』

side 桜牙

俺が試験を受けて見事に合格してから数日が経過した。その数日に俺のことは知れ渡ったようで、兵士達がたまにすれ違つと緊張していた。

まあ、多分俺が春蘭に勝ったことが広まっちゃまったんだろうな。春蘭は魏の中でも最強の武人、その春蘭に勝った俺は事実上、魏の中で最強つてことになるからな。

俺的には緊張されるよりフレンドリーに接してくれる方が嬉しいんだが、言つのも面倒だしな。

さて、そんなことはさておき今の俺は自室にて絶賛お眠り中だ。と言つのも最近はこの時代の文字の知識を頭にぶち込むために徹夜なんか書類的なものを纏めたりと疲れているワケなんだ。

だから何にも指示を受けてない今日はぐっすりと寝ていたいわけなのよ。つーことで、おやすみなさい……。

とか思つてると無駄にデカい足音が聞こえてきて、通り過ぎ……あれ？ 俺の部屋の前で足音が急に止まったぞ？ とか寝ぼけ半分で思っていると人の部屋のドアがノックもなしに勢いよく開け放たれた。

「龍崎桜牙！！」

それと同時に俺の名前を叫ぶ春蘭の声が聞こえてきた。そっちの方に顔を向けると、武装していない春蘭と秋蘭が立っていた。

春蘭はいつもそうなのだが、今回に限っては秋蘭からも戦に出るときのようなピリピリとした雰囲気伝わってきた。武装していないって時点で戦とかではないとは思ってたが、いったい何があったって言うんだろうか……。

「んで、どうしたんだお二人さん。他国でも襲撃してきたのか」

俺は眠気の覚めていない頭を振りながら二人に訊ねる。

「そんなわけなからう。それに襲撃してきたのなら、貴様より華琳さまのところにいくだろう」

「うむ、大人しく我々について来てもらおう。悪いようにするつもりはないが……逆らえば、分かっているな？」

二人からもはや威圧感に近いものを感じながら話を聞く。もしこの状況で『めんどくさいので、嫌です』なんぞとふざけたことを言ったらとすれば間違いなく春蘭が大剣を振り回し、秋蘭からは矢の嵐が来るだろうな。

俺自身は守りきれぬ自信はあるのだが、暴れられて部屋がボロボロにされるのも面倒だしな。にしても俺なんかやらかしたか？ 怒られるようなことはやってないはず南田がな……。

「俺なんもやってねえぞ？ なのになんで捕まえられなきゃいけないんだ？」

「うるさい！ 言い訳はあとで聞く。付いてくるのか、来ないのか！！」

「行かないなんて言ったらお前、俺のこと斬るだろ？」

「当然だ、何か文句があるのか？」

文句なんか言い始めたらキリがないから言わないが、とりあえず危ないから従うことにするか。しかも殺気丸出しだから、いつ斬りかかってくるかわかんないし。

「分かった、分かった」

俺は軽口を叩きながら立ち上がり体を伸ばす。そして俺は二人に引っ立てられるかのごとく部屋から引き吊り出されるのだった。

で、引き吊り出された俺なのだが俺が連れられてこられたのは華琳の玉座の前でなければ取締室でも牢屋と言っわけでもない。俺が連れられてこられたのは城から出た街だった。

アレだけ殺気丸出しで俺を連行したくせに俺を連れてきた場所は街ってどういうことなんだ。

「どうした？」

そんなコトを思っていると主に俺を連行してきた春蘭が俺に訊ねてきた。

「どうしたもこうしたもねえだろ。取り調べがあるんじゃないのか」

「……取り調べられるようなことをしたのか？」

と秋蘭が言ってくるがアレぐらいだったんなら身に覚えがなくてもなんかやったんじゃなかったと思うだろうが。

「はあ……。んで、俺をこんな街中に連れてきて何するつもりなんだ」

ため息混じりで秋蘭と春蘭に訊ねる。

「どうするも何も、買い物に来たに決まっているだろう。普通、今までの流れで分からんか」

「……」

今までの流れでコレが買い物への誘いだつつうのを悟れって言うのならば、どんな奴でも不可能だと思っただけど……。

つーかその前に人の誘いかたつつうのを春蘭は根本的に間違っているような気がするの俺だけだろうか……。

「何を黙っている。言葉が通じなかったか？ 買い物だと言ったのだ、買い物と。言葉は通じるのだろう？ か・い・も・の！！」

「それは分かる」

それはようやく分かったんだが、あんな殺気丸出しで言われた日にゃ、殺されるんじゃないかと思っちまうわけだ。

そしてそんなコトを思っている俺を見て春蘭は自分の誘い方に間違いがあったと思ったのか、隣にいた秋蘭に話しかけていた。

「秋蘭、わたしは何か間違っていたのか？」

「いや、ごく普通だと思ったが……？」

「ほら！ 秋蘭が普通だと言うなら、わたしは間違っておらん！ おかしいのは貴様の方だ！」

いやいやおかしいだろ、それ。ドコの時代だってこんな誘い方をする奴はいないだろう。それに秋蘭から間違っていないって言われたからって自信満々に言わなくてもいいだろうに。

しかもいつも表情の変化に乏しい秋蘭だからあまり気づかなかつたが、こめかみの辺りが何だかピクピクしてるじゃねえか。秋蘭の奴め、思いつきり春蘭で遊んでやがるな。

「貴様がドコの国に住んでいたかは分からんが我が国には我が国のしきたりがあるのだ！ 貴様も華琳さまに拾われた身ならば、その流儀になれてもらおうか！」

「分かった、分かった。じゃあ俺も春蘭をなんかに誘うときは殺気丸出しで誘っていいってコトだな」

「別に殺気など出してはおらんだろ！」

この人絶対自分が殺気丸出しで部屋に入ってきたってコトに気づいてないな。言ったとしても反論されるのはこの数日で分かるようになったし、あえて言わないようにしよう。

「二人とも、漫談はその辺りにしておけ。吟味する時間がなくなってしまうぞ」

「む、それは一大事だな」

吟味する時間が掛かるってコトは選ぶのに相当気を使う特別な買い物ってコトか。

「そんな大事なのか？ 秋蘭」

「何故わたしじゃなくて秋蘭に訊くのだ!」

いやだって春蘭に訊いてもなんやかんやで秋蘭の方に話が流れてくと思うし、とは言えないのでスルーして秋蘭をみる。

「そうだな。時間が許すなら、我々の吟味に意見をもらえると助かるのだが……構わんか？」

「ああ、別にかまわない」

だいたいこんなところに連れてこられて断る気にもなれん。それに今日はなんも予定が無かったわけだし、二人に付き添うのもいいだろうな。

さらにはこの二人は黙ってればかなりの美人なわけで、俺としてもなかなかないシチュエーションなわけよ。あつ、でも秋蘭は普通に美人だな、うるさいのは春蘭だけだな。

「貴様、今変なことを考えなかったか」

そんなコトを考えていると春蘭が眉間にしわを寄せながら俺に言ってきた。

「別に。じゃあドコに行くかは知らんが行こうか」

「ああ、そうだな」

「貴様！ 私を置いていくな！」

とこんな会話をしながらようやく買い物が始まった。

で最初に向かったのは鍛冶屋だった。どうやら武器を見に来たようだったのだが、俺はあいにくと魔法具精製術を使えばいくらでも武器を創り出せるからどうでもよかった。

次は露天で馬具を流し見てたのだが俺にはどれがいいものなのかがさっぱり分からなかった。

「あれはなかなか掘り出し物だったな、秋蘭」

「だな、次の会議に掛けて華琳さまの判断を仰ぐことにしよう」

んで現在の乾物屋で三件目なのだがどうやら保存食の話をしてきたみたいだが、もちろん全部軍用の備品の話だった。

あそこまで行くと俺が口出しなんぞ出来ないというワケなので俺は黙って二人が店から出てくるのを待ってたワケよ。訊かれても答えられないからな。

「おお、秋蘭。あんな所にあつたぞ！」

「ほほう、これはなかなか……」

二人はどうやらまたもや目的の物を見つけたようだった。武器、馬具、保存食ときたから、今度は何を見るのだろうか。

「龍崎、貴様も来い」

「あいよ」

俺は春蘭の言葉に一言だけ答えて二人の元に向かう。そして中を見たのだがどうやら服屋のようだった。

にしてもこの二人が普通の女の子のようなことをするとは失礼なのだが、正直言ってすげー驚きだ。

「龍崎、お前に見て欲しいのはコレなのだが……」

「……どう見る？ 似合うか？」

秋蘭が取り出したのは何重にも重なったヒラヒラの生地に、豪勢なフリフリがたくさん取り付けられてて見た瞬間甘々雰囲気を感じさせるような可愛さ全開って感じの服だった。

うーむ、どうだって訊かれても何が何だかさっぱり分からないんだけど。あの服を誰が着るかによって似合うかどうかが決まるからな。

「その服って春蘭が着るのか？」

「な……………っ!？」

「ふむ、それも悪くないな」

俺と秋蘭がそんなコトを言っていると春蘭がうるたえていた。あんな春蘭を見たのは初めてかもしれない。

「春蘭が着るにしては寸法が小さいような気がするんだが、春蘭に合う大きさを出してもらうか？」

「わ、わたしのを買いにきたのではない！ だいたい私の服など別にどうでもよいわ!」

春蘭は今にも噛みついてきそうな顔をしながら俺に言うてくる。

「……………お前も少しは洒落た格好した方がいいと思うけどな」

「うむ、龍崎の言うとおりだぞ、姉者」

とりあえずは春蘭の服じゃないってコトは秋蘭の服でもないってコトだろうな。

この二人がわざわざ他の人のを買いにくるってコトは、華琳のものだな。

「華琳のを買いにきたわけか」

「うむ。この服が華琳さまに似合うかどうか、たまには男の視点からの意見が聞きたくてな」

それで手近なところで俺ってコトか。どうせ春蘭はいらないって言ったんだろうけど、大方秋蘭に丸め込まれたんだな。

「華琳さまの服を選ぶなど男として名誉なことはそうそうないぞ？ 光栄に思えよ」

「分かった、分かった」

「で、龍崎は男としてどう見る？」

秋蘭が俺にそう訊ねてきた。男として……か、ただでさえ幼女体型な華琳がこんな可愛い服を着たらか。確かに華琳は元はずいー可愛いからな。

俺がああの服を華琳が着ているところを頑張ってイメージしていると春蘭が言ってきた。

「おい！！ 言っておくが、華琳さまのお姿をそのイヤらしい妄想まみれの脳味噌で想像したら今すぐ叩き斬ってやるからな！！」

「やれるもんならやってみろ。あんとき俺に負けたのは誰だったかな？」

俺は意地悪い笑みを向けながら春蘭に向かって言う。

「うつ……。あ、あのときは油断してたのだ！！ 次戦ったら負けはせん！！」

「へいへい、分かった、分かった。それはいいが想像しないことには分からないぞ？」

「それはそうだが、男なら何とかしてみせろ!!」

「いや、無茶言つなよ」

春蘭が言ってることはむちゃくちゃだな……。ようするに華琳が着るところは考えないで、着たあとの姿を考えればいいんだろうに。

「姉者のことは放って置いて良いから、忌憚のない意見を聞かせてくれるか？」

「分かったけど、華琳の服なら俺じゃなくて華琳本人を連れてきた方がいんじゃないか？」

俺はふと思つたことを二人に言ってみた。似合ってるかどうかのこのよりも、本人が着たいか着たくないかが重要になってくると思うんだけどなあ。

「それでは意味がないだろう！」

「……」

何の意味がないと言つのだろうか……。

「華琳さまはお忙しい身。買い物にでる暇もそれほど取れるわけではない」

「だから我々が華琳さまの代わりとなって、華琳さまにより似合う服がないか探して回ってるのだ」

なるほど、それで買い物に来たときにさりげなく薦めてみるってコトか。

短いつきあいだけど華琳はこういうことされても気づいてそうだけど、まあ、多分秋蘭あたりは気づいてるってことを気づいてるだろうな。

「華琳の家臣ってのも大変なんだな」

「ふふっ。こちららも華琳さまの為ならばこそ。愉しくこそあれ、苦になどならんよ」

まあ、それだけ華琳が春蘭や秋蘭に慕われてるってコトだよな。

「よし。店主、それを一着貰うとしよう」

「……はあ？」

「どうした、変な顔をして。ただでさえ変な顔が台無しだぞ？」

……変な顔が台無しってやばい大変なことになってるような気がするんだけど……。

「つか俺の顔変って言われたの転生する前とした後で初めてかもしれない……。」

ちよつとつて言うかメチャクチャショックだ……。ガラスのハートが砕けた……。

「……、何で買ったんだ？」

華琳の代わりに下見するだけって言ったのに買ったら意味ないだろ。

第一に華琳に買って持って行ったとしても受け取らないと思うし。

「こんな店頭で見ただけで、本当に華琳さまに似合うかどうか分かるものか。ならば、実際に試してみるしかあるまい」

……さっきと言っていることがすげー矛盾してるんすけど。さりげなく薦めてみるって言ったのになんで買ったっちゃうんだろっか

「どういうコト？ 秋蘭」

「私に聞けよ！」

いや、あなたに訊いても分からなかったから秋蘭に訊いてるんじゃないか。

っーか春蘭に説明とか任せると全然わかんないし……。

「その服はだな、華琳さまの身代わり用なのだ」

「身代わり？ 影武者か」

確かに華琳くらいになれば狙われることもあるだろうし影武者を用意しておくのは当たり前か。

でも影武者って華琳とどのくらい似てるんだろっか。

「馬鹿か貴様は！ 華琳さまに代われる者などいるはずがなかるう！」

「姉者は黙っていてくれ。話がややこしくなる」

何だか春蘭は俺を馬鹿扱いをしてきたのだが、秋蘭によって一蹴されてしまった。そして秋蘭よ、俺もお前と同じ意見だ。

「で、結局身代わりって何のことなんだ？」

「身代わりと言っても人形だがな」

なるほど、そう言うことか。華琳に似せた人形に買っていった服を着せて似合ってるか確かめてるってわけか。

それなら服をわざわざ買っていくのにも納得がいくな。

まあ、人形遊びの歴史は古いつて言うがこの時代でもすでに人形遊びの歴史が始まっていたのか。

「一つ訊いていいか」

「何だ。人形とは言え華琳さまのお姿ゆえ、着せ替えの現場には立ち合わせれんぞ？」

俺にロリコンの趣味はねえ……とは言い切れないが見るつもりはサラサラねえ。

「それはいいんだが、その華琳さま人形って誰が作ったんだ？」

「わたしだ！」

そういつてふくよかな胸を張る春蘭。ただでさえバインバインなんですから、そんな刺激の強いことはやめてください。

周りにいた男達の視線があなた様のそのバインバインな胸に釘付けでございますよ。気づいてはないみたいだけど。

「へー、すげーな。結構驚いたぞ」

「なぜ驚く？ わたしが作ったと言っでは不服か？」

「いや、別に」

いくら華琳好き春蘭とは言えあくまでも春蘭が作ったものであって、それに服を着せたとして華琳の代役なんかつとまるんだろうか……。

「私が言つのも何だが……凄いで」

俺が春蘭に対して失礼なことを考えていると、俺の考えを察したのか秋蘭が言ってきた。

あの秋蘭が言ってくるくらいだから本当に凄いらるうなあ。人目でいいから華琳さま人形を見てみたいモンだ。

「さて、ここでの用事は済んだ。次に行くぞ、次」

「うむ」

買い物を終えた春蘭がそう言ってきた。

まあ、女の買い物は長いつて言うし、何よりまだ一着しか買っていないんだから他の店に行くつて言うのは当たり前か。

「姉者、今日はどのくらい回るとしようか？」

「そうだな、まだ日も高い。ゆっくり回つてもう十軒は固いだろう」

十軒も回るつてのか！？ 体力的には問題はないが、精神的にキツイものがあるぞ！？

「姉者……」

そんなコトを思っていると秋蘭が言葉を発していた。

よし言つてやつてくれ秋蘭。さすがに十軒は回りすぎだろうつと言つてやつてくれ。

「……もう五軒は回れるだろう。弱音が過ぎるぞ」

はい、あなた方性格は全然違つても姉妹でしたね。あなた方に淡い期待を持ったワタクシが阿呆でした。

「そうだな、すまん。このわたしとしたことが、余りに弱気な発言だったな。ならばもう二十軒は回るぞ！」

「うむ、さすがは我が姉者」

「俺は帰り。次も正直な意見を頼むぞ、龍崎」……はい」

どうやら逃げるのは不可能らしいです……。はぁ……。今日は休もうと思ったのだが、どうやら休みはないようだ。

「ありがたく思え！ だが、変な妄想をしたらその場で叩き斬るからな！ 覚悟しておけよ！」

「……」

俺に負けたって言うのにずいぶんとアレだね……。

こうして俺は店を巡らなければなるのであった。

《夜》

結局何軒回っただろうか……。二十軒くらいまでは数えてはいたんだがそれからはまったく数えてない。だけど確実に数えた数の倍くらいは店を巡ったような気がする……。

「いまいちだったな今日は」

春蘭よ、そう言う割には見つけた端から片っ端から買っているわけで、荷物持ちの宿命を逃れることが出来なかった俺の手には服がどっさり積まれてるんだけど……。

「うむ。めぼしい収穫はなかったな」

……さりげなく春蘭より買ってる数が多かったような気がするんだけど。

だいたい1日でどんだけ買い込んでるんだよ。

「なんでそんな元気なんだよ……」

俺は未だに元気な二人に問いかける。

体力的には全然問題がないのだが、精神的に疲れている気がする。それな女の子の買い物付き添いなんかやったことないし……。

「やれやれ。鍛錬が足らんど、龍崎」

「そうだぞ。華琳さまの為に働いたのだからもう少し嬉しそうにしたらどうだ」

「あー。十分に嬉しいよ」

もう二度とやりたくないくらいにね。

「だが、市井の服の質が落ちたな。この程度では華琳さまのお眼鏡にかなうことは難しかりう」

「そうだな……。やはり、国を大きくして腕の良い職人を招くしかないか……」

俺にしてみたら華琳に似合いそうな服はゴマンとあったのだが、どうやら二人にはお気に召さなかったらしい。

と言うか二人のハードルの設定した場所が高すぎるのかもしれない、否、高すぎるんだ。

「ええい、そんな時間があるものか！ 華琳さまはこの一瞬も気高く、優雅に成長しておられるのだぞ！ 今この時を美しく着飾れる服を手に入れるためには、今をなんとかせねばならんだ！」

「……ふむ。確かに」

「納得するんだな、そこは」

俺は思わずと言った感じで秋蘭にツッコんでしまった。

「龍崎。私は姉者の言うことに全て反論したいわけではないぞ？」

とは言っているが反論したところはかなり見てきたが、賛成してるとこなんかほとんど見たことがないんだが。

「それに龍崎。お主としても、華琳さまのより愛らしいお姿が目に来るのだ。悪い話ではあるまい」

まあ、確かにそこは否定しないけどな。俺も仮にも男、いや正真正銘の男だ。

可愛い女の子の姿を見たくないわけがない。むしろ見たい。

「で、龍崎。貴様は何か良案はないのか？ 天の国とやらの知識役に立てるのは今しかないぞ？」

「じゃあ言うが俺がいた国にはこんな格言があった。『無ければ作るしかない』と……」

「無いものは!?!」

「作るしかない!?!」

「そのままではないかーっ!?!」

俺が決めながら言うと春蘭にツッコまれてしまった。

ふっ、まさか春蘭にツッコまれる日がやってくるとは……。

「仕方ないだろ。そんな案ならまだしも、俺が服をサクサクと作れるワケがない」

「ん? 龍崎、案なら出せるのか?」

「作り方は知らんが、こんなのがあったぞ、くらいには教えられるな」

「ならば、それを教えてもらおう。具体的な形が指示できるなら、今いる職人達で何とか出来るやもしれん」

なるほど、確かに秋蘭の考えは一理あるけど、どんな服があるか考えとかないといけないみたいだな。

「よし、ならば今からすぐに行くぞ!?!」

「なぬ!?!」

「まだ夜は長いぞ! 秋蘭も構わんな?」

「見損なうなよ、姉者」

「うむ、それでこそ我が妹！」

おいおいおいおい。なんだかお二人さんだけでお話進めておりますが、案を出すのはワタクシ何でございますよ？

今から行くって言われても困るんだけど？

「行くぞ！ 秋蘭！ 龍崎！」

「うむ！」

二人はそう言つと俺の首根っこを走り出していた。

こうして俺は徹夜で案を捻り出すことになったのは言うまでもなかった……。

チクシヨー！！ 墓穴掘ったあーっ！！！！

第肆話 『業炎の剣帝、買い物に行くのこと』 (後書き)

一刃についての意見待ってます！

感想待ってます！

第五話 『業炎の剣帝、猫耳軍師に出会うこと』

side 桜牙

「にしても何度見ても愉快的な光景だな」

俺は城壁の下を走り回る完全武装の兵士を見下ろしながら一人呟く。束ねられた槍は薪のように積み上げられ、その隣には槍山をふたまわり小さくした束が、さらに大きな山を築いている。弓兵隊の使う矢だ。

そんで、俺は華琳になんか頼まれたような気もしてたのだが、あまりにも愉快的な光景に見入ってしまった。

別にすごいなー、とか言う意味で見入ってしまったのではない。特くすげー面白いなっつう意味で見入っている。魔法世界にもあんな感じの軍隊的な組織はあったが、あそこまでそろってる動きは見たことがない。

あつちの世界の連中は魔法とかで敵をぶっ飛ばしていくから、特に団体行動は必要なくなるし、あまりにも強い力を持った奴の場合だったら個人か少数のチームで戦った方が有利だからな。

その代表的な例が俺も所属していた『アラル紅き翼ブラ』なんだよな。そう言えば、あいつらどうしてるかなあ……。

「どうした、そんな間の抜けた顔をして」

こんな風に感慨に老けているといつの間にか近づいてきたのかは分からないが、春蘭が言ってきた。

「いや、ずいぶんと愉快的動きをしてるなあ、ってな」

「そんなに愉快か？ 統率されたいい動きではないか」

「ああ、そうだな」

俺は城壁から完全武装の兵士たちを眺めながら春蘭に言う。

アレを見るとこの時代にも戦いがあるんだなってつくづく思わせるな。

戦いなんつーのはあるよりないほうがいいに決まってる。だって俺は華琳に協力して戦争が起こらない国作りをしないと。

「……なにを無駄話をしているの？」

春蘭と話をしているとまたもや誰かがやってきた。声のした方に振り向いているとそこには、華琳と秋蘭がこっちに向かって歩いてきていた。

「か…っ、華琳さま…！ これは龍崎が！」

「先に話しかけてきたのはお前だろうか」

俺は春蘭がいていた言い訳に思わずボソツと呟いてしまう。

春蘭の言い訳を聞いた華琳はため息混じりで春蘭に言った。

「春蘭、装備品の確認と兵の確認の最終報告、受けてないわよ。数は揃ってるの?」

「は、はい。全て滞りなく済んでおります! 龍崎に声を掛けられたため、報告が遅れました!」

まだ人のせいにならなくて……。俺は城壁に腰掛けながら二人の会話を耳にしながら文句を言う。

そんなコトを考えていると今度は華琳の矛先がこっちに変わってきた。

「……その桜牙には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよ、言うておいたはずよね?」

「……おお、何か忘れてると思ったならそれか」

俺はよくあるような手をポンと打つ思い出したポーズをやりながら華琳に言う。実際のところ城壁の下の動きを見てて忘れてたんだよ。

いやあ、なに忘れたんだろうかと思ってたんだがわかってすっきりしたぜ。

「忘れてたじゃないわよ。早くしなさい。アナタが遅れることで、全軍の出撃が遅れるわ」

そう言えば討伐任務に行くんだったな。だから糧食の確認をしないといけなかったんだったな。

「悪い悪い、今すぐ行ってくるよ。んで、監督官……だっけ？
そいつドコにいんの？」

「監督官なら、今馬具の確認をしているはずだ。そちらに行くといいいい」

「おう。ありがとう、秋蘭」

俺は城壁から立ち上がり降りながら秋蘭に礼を言う。

にしても馬具の確認をしているのか。はっきり言ってまだこの城の中を把握しきったワケじゃないから、時空の歪みを使うのはやめといた方がいいかもしれないな。

俺はそう思いながら華琳たちのところを後にして馬具が置いてあるはずの場所に向かって走り出した。

そこで馬具がおいてある場所に到着したのはいいんだが、そう言えば俺、監督官って奴の顔知らなかったな。うゝむ、まあ、何とかなるよな。

「いつまでダラダラやってやがる！ 馬に蹴られて山の向こうまで吹き飛ばされてえかー！」

「は、はい……」

出撃前ってコトでどの兵士もピリピリしてやがんな。一つだけ言いたいんだが、馬に蹴られた程度じゃ山の向こうまでなんか吹き飛ばされねえっつうの。

とりあえずどいつもこいつもピリピリしてるみてえだし、なるべくピリピリしてねえ奴に訊かねえとな。なんか言われるとめんどくさいし。

そんなコトを思いながらちょうどよく視界に入った、猫耳少女に監督官がドコにいるのかを訊ねることにした。

「その少女よ、ちょっといいか？」

「……」

「おい、その猫耳少女ー」

「……」

うーむ、どうやら聞こえてないみたいだな。周りは馬の鳴き声やら人の声やらでうるさいからな。聞こえないのも無理はないだろうな。

「ちょっといいっすかぁーっ!!」

俺は腹に力を込めて思いっきり少女に向かって叫ぶ。

すると少女はようやく呼ばれることに気づいたのかこっち向き直った。けどなぜかいきなり不機嫌なんだがどうしたんだろうか？

いや、やっぱり出撃前だからきつとあの子もピリピリしているに違いない。

「聞こえてるわよ！ さっきから何度も何度も……、いつたい何のつもり!?」

やっぱりピリピリしてたよ。すげーピリピリしてたよ。まあ、ここで冷静な行動をするのが大人の行動ってモンだろうな。

なんたって俺は不老不死のおかげで二百年以上も生きてるんだ。こんな対応造作もない………はず、自信はないが。

「聞こえてんなら返事の一つくらいしてくれてもいいんじゃないのか？」

「アンタなんかにはないもので、そんなに呼びつけて、何がしたかったわけ？」

目の前の猫耳少女は偉そうな口調で俺に言ってきた。しかもどことなく軽蔑の眼差しで見られているような気がするんだが気のせいだろうか。

「糧食の再点検の帳簿を受け取りに来たんだが、監督官って人がドコにいるか知らないか？」

「何でアンタなんかそんなコト教えてやらないといけないのよ」

すげー偉そうにできてムカつくのは俺だけじゃないはず。落ちて着け、クールになれ、俺は大人つつつか爺で相手は子供。

ここで怒ったら爺としての面目が立たないぞ。

「何だと訊かれると華琳に頼まれたからだ」

「なつ!?!? ちょっと、何でアンタみたいな奴が曹操さまの真名を読んで……!?!?」

俺が華琳の名前を呼ぶと猫耳少女は心底驚いたような表情をしながら俺に言ってきた。

「ん? まあ、色々あるんだよ。別にいいじゃねえか」

「良いわけないでしょ! 曹操さまのお耳に入ったらアンタなんか叩き斬られるわよ!」

「ふーん、心配してくれるんだ?」

「なつ!?!?」

俺は猫耳少女の発言にちょっと意地悪を試してみる。どうやらアンタとか言ったり、軽蔑の眼差しとか送ったりするが根は優しいみたいだ。

「気にすんな。華琳自身から呼んでいって言われてんだ」

「信じられない………なんで、こんな猿に………」

「………初対面の奴に向かってムチャクチャだな、お前」

俺はさっき自分が思ったことにちょっとだけ疑問を抱きつつ、ため息混じりで言う。

にしても女扱いはされたことはあるが猿扱いをされたのは生まれ
てから初めてだな。

「アంత、この間曹操さまに拾われた天界から来たとか言う猿で
しょ？ 猿の分際で曹操さまの真名を呼ぶなんて……あり得ないわ」

「どうやら猫耳少女はどうしても俺を猿として認定したいらしい。
ついでにその猿が華琳の真名を呼んでいることを信じたくないらし
い。」

「で、何？ 私も暇じゃないんだけど？」

「そうだった。糧食の帳簿を監督官から受け取ってくるように華
琳に言われたんだが、監督官つてのがドコにいるか知らねえか？」

「曹操さまに？ それを早く言いなさいよ！」

華琳に持つてくるように言われたと言つことを言つと猫耳少女は
さっきとは全く違う様子で俺に言ってきた。

「やっぱり華琳に言われたつて言えばここにいる奴らは大抵焦るよ
うに動くんだな。」

「で、ドコいんの？」

「私よ」

「ドコいんの？」

「だから私つて言ってるの」

「はあ……。俺も忙しいから遊びに付き合ってる暇はないんだが？」

俺はやれやれと付け足しながら猫耳少女に向かって言う。

アレ、猫耳少女の肩が小刻みに震えてるんだが寒いのかな。

「だから私だって言ってるでしょ！！何か文句あるの！？私
がここの監督官をしている事でアナタの人生に何か致命的な問題があると言いたいわけ！？」

猫耳少女は殴りかかってきそうな勢いで俺に向かって叫んできた。

ああ、こんなことをしている間にも華琳の機嫌が悪くなっていつ
てるんだろうなあ……。もうこいつの愚痴を聞いているのも面倒だな
……。

「もしあるって言うならそのところを論理的に説明してみなさいよ！！そうしたら納得してあげるからさ」

「はあ…、君が早く監督官の居場所を言わないと華琳がキレるから。キレた華琳に俺の首がはねとばされるから。コレでいいか？
お遊びに付き合ってる暇はないから早く教えてくれ、な？」

俺はすでに若干キレかかりそうになりながら目の前の猫耳少女に
それを気取られないように必死に隠しながら言う。

さすがにこれ以上誤魔化されるんだったら他の奴に訊いた方が
まだ早いからな。

「アンタの首がはねられるのはいい気味だけど、曹操さまが怒りになるのはマズいわ。その辺に置いてあるわ。草色の表紙が当てであるからすぐに分かると思うわ」

「ああ、ありがとよ」

結局監督官つてのには会えなかったが、とりあえず再点検の帳簿が手に入ったからよしとするか。

そして再点検の帳簿を手に入れた俺は結構時間が掛かってしまったので、急いで華琳たちがいる城壁に走り出した。

そして階段を駆け上がり華琳たちがいる場所にようやく到着する。

「悪い、遅れた」

「待ちくたびれたわよ。早くみせなさい」

「ほら」

華琳に言われた俺は草色の表紙が当てられた紙束を渡す。

草色の表紙が当てられた紙束を華琳は受け取ると早速中を確認し始めた。

確認し始めたのだがページをめくって内容を確認していく度に華琳の表情は険しいものになっていき、遂には怒っている表情になった。

「秋蘭。この監督官と言うのはいったい何者なのかしら？」

「はい。先日志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、今回の食料調達を任せてみたのですが……何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

華琳が言つと秋蘭は俺がさつき走ってきた道を今度は秋蘭が走つていった。

にしても……空気が異常に重い。ここまで空気が重いとふざける気にもなれないな。つーかあの帳簿の何が悪かったんだろうか。

「なあ、華琳。どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも無いわ。コレを見てよ」

そう言つて華琳は俺がさつき受け取ってきた帳簿を見せてくる。

……ああ、なるほどそう言うことか。

華琳が怒っている理由は今回の出撃の物が半分ほどしか用意されてないことにあるようだった。

「まあ、大丈夫じゃないか？ これぐらいで大丈夫だと思つぞ？」

「あら？ それはどうしてかしら？」

華琳はさつきまでの怒っているような雰囲気はなく、まるで俺を試すかのようにうつすらと笑いながら俺に言ってきた。

だがそのうつすら笑顔の中に、適当なことを言ったら殺すわよと言わんばかりの威圧感があるんだから恐ろしいことこの上ないだろう。

そんな威圧感を受けながら俺は半分ほどしか用意しなかった理由を俺の考えに過ぎないがとりあえず言っつ。

まず糧食などが減れば進軍の速度が上がり、結果的に糧食の量を減らすことができること。さらにそれを可能にするコトが出来る軍師の存在がこの帳簿の数値を表している。

だが俺的にはもう少し持つて行った方がいいんじゃないかと付け足しをしながら俺の考えを述べる。

「じゃあ桜牙はこの監督官が何故このようなことをしたかわかる？」

こいつ、自分で答え分かってるくせにわざわざ俺に訊ねて試してるみたいだな。

「さあ？ 他人のことは分かんねえけど、こんな事するくらいだから、自分の存在を示すためじゃないか？ おそらくはこれをやった監督官は自分を軍師にしてほしいんじゃないかと思う」

「別に今でなくてもいいんじゃないかしら？」

「出撃の時に好印象でもつけて、出撃後の作戦立案なんかで功を立てて一気に華琳の軍師にでもなろうとしてんじゃないか？ こんな策を用意するくらいだから、かなりの策士みたいだし」

と俺は華琳に言いながら春蘭の方を見たんだが話について来れない様子でチンプンカンプンと言う感じの顔をしていた。

説明を終えた俺は再び華琳に視線を戻すと華琳は笑い始めていた。

「あはははは、相変わらず桜牙は面白いわね」

「面白いか？」

「面白いわよ……監督官があなた以下のことを考えていたらその監督官を殺すけど構わないわね？」

「殺すのは可哀想だろ。だから俺がぶん殴る、思いっきりぶん殴る、盛大にぶん殴る」

そしてそれを言い合った後に同じタイミングで笑い始めてしまった。笑い終えたのだが未だに秋蘭と監督官が来る気配はしない。

まだそれほど時間が経ったというわけじゃないが、こんな策を考えた策士様の顔を早く俺としては拝みたいわけよ。

「そうだ華琳、俺と同じ考えだったらどうするんだ？ 正直あの帳簿を見るだけじゃこれ以上の策は思いつかないと思うんだが」

「別に。桜牙と同じなら軍師にするわ」

「ふーん。少し意外だな」

「何が意外なの」

「俺の考えをそんなに高く評価してくれたところ」

「正直私も同じ考えだったからよ」

「なるほどねえ」

俺の考えを高く評価してくれたのは良かったんだが、やっぱり俺の考えと同じだったじゃねえか。

そしてこの話を終えるとようやく秋蘭が監督官をつれてきて帰ってきたようなのだが、隣にいたのはあのときの猫耳少女。

もしかしてあの猫耳少女は最初っから本当のことを言ってたのか。

「曹操様、連れてまいりました」

「お前が食料の調達を？」

秋蘭がそう言ったときの華琳はすでにさっきとは違いまるで怒ってるぞ、と言わんばかりの威圧感を醸し出していた。

「はい。必要十分な量は用意したつもりでしたが、何か問題でもありましたでしょうか？」

「必要十分って………どういつつもりかしら？ 指定した量の半分しか準備出来て無いじゃない！」

華琳は俺に言ったときのように帳簿を見ながら猫耳少女に向かって言い放った。

「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになる所だったわ。そうだったらあなたはどう責任をとるつもりかしら？」

「いえ、そうはならないはずです」

こうして説明を始めるのかと思いきや、納得できないなら首をはねてもらっても構わないとか言い出した。

さすがにそこまでされるのは気分が悪いのでホントにはねそうになつたら止めに入るか。

んで結局猫耳少女が言ったのは俺がさっき華琳に言つて、華琳も考えていたこととまったく同じ物だった。そして説明を終えた猫耳少女は言った。

「曹操さま！　どうか荀イクめを曹操さまを勝利に導く軍師として、麾下にお加えくださいませ！」

荀イクねえ。このチビッコが曹操の軍師とは……。

まあ、曹操も夏侯惇も夏侯淵も女だったら有り得なくはなかったが、見事に女だけが揃っていくなあ。

「荀イク、アナタの真名は」

「桂花にございます」

「桂花。あなた、……この曹操を試したわね」

「はい」

おおおう、よくこの場面でどつどつとそんなコトを言えるなあ。

そんなコト言ったら春蘭が黙ってるわけないだろうに。

「な……っ！ 貴様何をいけ『まあ、落ち着け』龍崎止めるな！
」！

俺は春蘭が大剣を抜こうとするのを制しながら言う。

「まあ、見とけて。こっからが面白いところだ」

「むう、今回だけだ。次からはやめぬぞ」

「ああ、次は止めないさ」

どうせ次はないとは思ってからな。春蘭とそんな会話をしてるうちに華琳と桂花の会話も進んでいた。

「ならば、その力、私のために振るうことは惜しまない？」

「初めてみた瞬間からそう決めておりました。もし不要ならこの場で首を切り落としてください」

桂花のその言葉を聞いた華琳は自らの武器の大鎌を春蘭から受け取り、桂花の首筋に刃の部分当てながら言う。

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試されると言うこと。……分かってるかしら？」

「はっ。そこをあえて試さしていただきました」

「そう……。ならばこういうことをする事もあなたの手のひらの上と言う事よね……」

華琳はそう言うと桂花の首筋に当てていた大鎌を一気に振り上げて、桂花の首筋に向かって大鎌を振るった。

しかし華琳が振るった大鎌は桂花の首を切り落とすことはなく、わずか手前でピタッと静止していた。

もちろん春蘭や秋蘭、ましてや俺がそれを止めたのではない。さらには桂花にはそれを止める術は持ち合わせていない。つまりは華琳が自分の意志で大鎌を止めたと言うことになる。

「寸止めねえ。ずいぶんとえげつないな、華琳」

「当然でしょう。……けれど桂花、もし私が本当に振り下ろしていたらどうするつもりだった？」

「それが天命と受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

まあ、華琳が本当に振り下ろすつもりだったんなら俺がそれを止めてたけどな。

今回は寸止めするって分かってたから動かなかったけどな。

「……嘘は嫌いよ。本当のことを言いなさい」

「曹操さまの気性からして、試されたのなら試し返すに違いないと思いましたが、避ける気など毛頭ありませんでした」

桂花が言つと華琳は首に突きつけていた大鎌をゆっくりと首から話して下ろす。

すると華琳はどうやら桂花のコトを気に入ったのか笑いながら桂花に話しかけていた。

「アナタの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらうことにする。いいわね？」

「はっ！！」

「ならまずはこの討伐行成功させて見せなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから、もし不足したらその失態、身を持って償ってもらうわよ」

「御意！！！」

おいおい、せっかくの軍師を失敗したら切り捨てるのかよ。まあ、俺も華琳も同じ考えなんだから失敗しないって考えてるんだろうな。

何にしても華琳は軍師を手に入れたのであった。

第五話 『業炎の剣帝、猫耳軍師に出会うこと』 (後書き)

早速ですがアンケートです！

この小説内に『北郷一刀』を出すか出さないかのアンケートです！

- 1、出さない
- 2、出して『呉』に
- 3、出して『蜀』に

の三択をお願いします！！

では感想、アンケートの解答待ってます！！

第陸話 『業炎の剣帝、天真爛漫と出会ったこと』

side 桜牙

「……お前、ホントに監督官だったんだな」

「だから何回も言ったでしょう！ あんたが信じてなかっただけでしょ！」

桂花の事件が解決して出撃することになり、門の前に集まっていたときに俺は桂花に話しかけていた。いやだってこんなチビッコが監督官なんてやってると思わなかったし、その前に結構ムカついてたし……。

にしても華琳相手に試すようなマネをするとは勇気があるというか命知らずというか……。まあそれだけ華琳の軍師になりたいってことなんだろうけど、心臓に悪いから今度からやらないでもらいたいもんだ。

そんなコトはさておき、さっきも言ったように出撃前と言うことで折れや桂花だけでなく、華琳や春蘭、秋蘭。その他兵士たちが集合していた。

「華琳、出撃前に自己紹介をしておかないか」

俺は隣にいた華琳に話しかける。

「そういえばそうね。私の名は曹孟徳、真名は華琳よ」

「わたしの名は夏侯惇、真名は春蘭だ」

「私の名は夏侯淵、真名を秋蘭と言う」

「俺は龍崎桜牙だ」

俺が自己紹介をすると桂花はブスツとしたような表情になったが、華琳の前と言うことでそんな態度をとるわけにもいかないと思っただのか、桂花は渋々と言った感じで自己紹介をやり始めた。

「まあいいわ、私の名は荀文若、真名を桂花と言うわ」

「じゃあ、みんな。桂花のコトは真名で呼びなさい。桂花も同じようにみんなのコトを真名で呼びなさい」

「御意!」

桂花は華琳の言葉に嬉しそうな顔をしながら返事をしていた。

帳簿を取りに行ったときに話したんだがこいつの華琳に対する尊敬度つてのは相当だったな。そんな桂花が華琳から直接真名を呼んで良いって言われたんだから、嬉しくないはずがないんだろうよ。

そして自己紹介を終えた俺たちは城から出撃した。馬に乗っての出撃だったので乗れないかなとか思ってたんだが、案外あっさりと乗れた。

「にしてもあんな無茶なコト言って大丈夫なのか？ 桂花ちゃん？」

俺は桂花が乗っている馬と平行して走りながら、桂花に向かって意地悪い笑みを浮かべながら言う。

それに対して桂花は俺をキツと睨みつけてきた。あの性格からして男に真名で呼ばれたのが嫌だったんだな、絶対。

「なんでアンタなんか真名で呼ばれないといけないのよ!」

それきた。ホントに分かりやすい性格してるよな、こいつ。

「華琳が言ってる？俺や秋蘭達のことは真名で呼ぶって。それに桂花も俺たちのことは真名で呼べって言われたる?」

「確かに言ってたけど、覚える気にもならなかったわ」

なに言ってるんだこの猫耳軍師は。どうやらこの人は男に対して厳しいみたいです……。

「それに古参の夏侯淵ならともかくとして、何でアンタなんか真名で呼ばれなきゃならないのよ!私の大切な真名をアンタなんかに汚されてたまるもんですか!訂正しなさい!」

こ、このクソガキ……。俺が何もしいと思ったら大間違いだったの。

「そんなイヤならもっと呼んでやるよ!桂花、桂花、桂花、桂花、桂花!」

「あー!ー!ー!もっつるさい!ー!ー!」

「ぐはっ!？」

桂花をいじめていると桂花から見事なドロップキックが放たれ、俺の顔面を見事にとらえた。

そんで俺は思いっきり気を抜いていたのでそれを防げるはずもなく、馬から蹴り落とされて地面を転がった。

くっ、あんな猫耳軍師にやられるなんて……。この龍崎桜牙、一生の深くなり……。

にしても桂花のドロップキック、なかなかのもんだったな。

うんうん、と一人でうなずいているとそんな俺の隣に春蘭がやってきた。

「龍崎。貴様、何を遊んでいるのだ！」

「いや、遊んでないし」

「いいわけをするな！」

いいわけをするなって言われてもホントのことなんだが、言ったとしても信じてもらえないんだろうなあ……。

やれやれと言った感じで立ち上がり俺が乗ってきた馬に再び乗る。にしてもこの馬偉いな。わざわざ俺を待っててくれたのか。

うーむ、魔獣念話つつうのは魔獣とかにしか使ったこと無かった

けど、普通の動物にも使えんのか？

『馬よ、聞こえるか？』

『おお！！ 兄ちゃん、わいの言葉分かるんか！？』

おお！！ はこっちのセリフでもあるんだけどな。まさか馬とも話せるとは思わなかったぞ……。

『まあな。お前の名前は？』

『そんなないわ。せや、兄ちゃんが決めてくれや』

なかなか話せる奴だな。うむ、こいつはなんかガツシリしてる感じするし、どことなくジャックに似てるような感じがするな……。

『よし、おまえの名前はジャックだ』

『おお！！ じゃっくか！！ なんやゴツツええ名前やんか！！』

俺が言うと馬の速さがいきなり早くなった。行きすぎるのもダメなのでなんとか引き戻す。

『気に入ったか？』

『おう！ であんさんの名前は？』

『俺か。俺は龍崎桜牙だ、よろしくなジャック』

『おう！ よろしくな龍崎の旦那！』

こうして俺は馬もといジャックと打ち解けるのであった。

うん、今度華琳に言ってジャックを俺直属の馬にしてもらおう。

そんなコトを思っていると俺の隣にいた春蘭の元に兵士がやってきていた。

そのあと俺にも何があつたかを報告してくれたところ、どうやら前方に大人数の集団がいるらしい。その大人数の集団をどうにかするために華琳から召集が掛かっているようだった。

「龍崎、わたしが秋蘭と桂花を連れてくる。お前は先に華琳さまの元へ行くのだ」

「ああ、分かった」

俺は春蘭に一言だけ答えて急いで華琳の元に向かった。華琳の元についた俺は偵察部隊が帰ってきて、状況確認するまで待機するよりに言われた。

しばらくすると春蘭が呼びに言っていた秋蘭と桂花もこっちに来るのが見えた。それとほぼ同時に偵察部隊が帰ってきたようだった。

「遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰ってきた所よ。報告を」

偵察の報告によれば行軍中の前方集団は数十人ほどで、旗が無いためドコに所属しているかが分からないらしい。だが格好がそれぞれ

れバラバラと言つことからドコぞの野党か山賊と言つ判断をしたらしい。

そして報告を受けた桂花が少しだけ考えたそぶりを見せた後に俺と春蘭を指差しながら言ってきた。

「もう一度偵察隊を出しましょう。夏侯惇、龍崎、あなた達が指揮を執って」

「おう」

「了解」

俺は桂花に一言だけ答えてジャックに乗る。すると桂花がそんな俺に言ってきた。

「アンタに頼むのは尺だけど夏侯惇の抑え役をしてちょうだい」

「おい！ それではわたしが敵と見ればすぐ突撃するようではないか！」

桂花の言葉に春蘭は怒鳴るように叫んでくる。

「違うの？」

「変わらないでしょ？」

「すみません。俺も桂花と華琳と同じ意見です……」。

なんつーか春蘭は例えるなら猪みたいに思えてくるんだよねあ〜。

「私も出るとこちらが手薄になりすぎる。それにもし戦闘になった場合も姉者や龍崎の方が適任。……そういう判断だな、桂花」

「龍崎の強さは知らないけど、そうよ」

確かに俺の強さを知ってるのは華琳に春蘭に秋蘭と、極少数の兵士くらいのもんだからな。桂花が分からなくても仕方ないってのもうなずけるな。

そんなコトを思っていると華琳が俺と春蘭に言ってきた。

「行ってくれるでしょ？ 春蘭、桜牙」

「はっ！ 承知いたしました！」

「了解。任せときな」

俺たちは華琳にそう言うのと春蘭の隊をまるまる偵察部隊に割り切って、華琳の本体から離れて先行して移動を始めた。

さらに春蘭の隊の最前線には俺と春蘭が率先して立っている。

「まったく。先行部隊の指揮など、わたし一人で十分だと言うのに……」

そして春蘭は俺の隣で愚痴をこぼすかのように俺に言ってくる。

「偵察も兼ねてんだ。通りすがりの傭兵部隊とかだったら、突っ込むなよ？」

「貴様なんぞに言われるまでもないわ。そこまでわたしも迂闊ではないぞ」

そうは言ってくるがその迂闊があるかもしれないから桂花に俺がつけられたわけで、春蘭の言つとおり迂闊じゃないんなら俺も来なくて済んだんだよ。

にしても会つたばかりなのに春蘭の性格をこんなに早く理解できるってあたりはさすがは軍師つてだけのコトはあるな。

そんな失礼なコトを思っていると一人の兵士がこっちにやってくるのが見えた。

「夏侯惇さま！ 見えました！」

「ご苦労！」

見つかったはいいんだが行軍してるつて言っ感じには見えないな。向こうの集団は一カ所に集まって、何やらよく分からんが騒いでいるように見える。

騒いでいるように見えるつて言っても酒盛りのようなわいわいとした雰囲気ではない。普通はこんなとこで酒盛りはしないだろうけど……。

「何かと戦ってるみたいだな……」

「貴様もそのように見えるか。実はわたしもだ」

と春蘭と会話をした瞬間、人だかりの一部が高く打ち上げられた。

おいおい、いくら何でもこの時代であんだけ高く人が打ち上げられるの見ることになるなんて、あり得ないだろ……。

だけど俺が転生したって言うこともあるし、有り得ないってことは有り得ないってことだな。

「なんだアレは!？」

それに春蘭も驚いてるところを見るあたりあれが普通ってワケじゃないみたいだしな。

「誰かが戦っているようです！ その数……一人！ それも子供の様子！」

「なんだと!？」

その報告を聞くが早いか春蘭は馬に鞭を振り、一気に加速させていく。

「はあ……。やっぱり一人で行きやがったか。誰か華琳たちにこのことを報告！ 俺と春蘭であれを撃退するからその追跡！」

俺は周りにいた兵士に向かってそう叫ぶと春蘭と同じように馬を加速させていく。

そしてジャックから飛び降りて子供の周りにいる奴らに向かって飛びかかる。

「おらあつー!!」

俺は力任せに思いつきりそいつをぶん殴って、春蘭の元に行く。

俺が駆けつけたときにはすでに春蘭が半分ほどの奴らをボコボコにしていた。

そして春蘭の武を目の当たりにした奴らはすでに怖じ気ついており、撤退の準備に入っていた。

「退却！ 退却ーっ!!」

野党の一人がそう叫ぶと今まで戦っていた野党達はまるで逃げるかのように撤退していく。

しかし春蘭の性格からしてそれを逃がすとは到底思えない。どうせ追いかけて始めるに決まってる。

「逃がすか！ 全員、叩き斬ってくれるわ!!」

あー、やっぱり追いかけてようとしてるよ。あの大剣を振り上げて今にも斬り殺しそうだよ。

「まて春蘭」

「龍崎！ なぜ止めるのだ!!」

なぜ止めるのだったってこの人、俺たちの任務忘れてるんじゃないか？

「俺たちの仕事はあくまでも偵察だ。その子を助けるために戦う

のは大いに結構だ。だが敵を全滅させるのが、俺たちの目的じゃないだろ？」

「ふんっ、敵の戦力を削ってなにが悪い！」

今にも俺に斬りかかってきそうな威圧感で俺に向かって叫んでくる春蘭。

「まったく、あの猫耳軍師にこいつのお目付役をやるように言われて正解だったな。」

「それもやるべきコトだが、今はあいつらを追跡して敵の本拠地を見つけた方がいいだろ？」

「おお！ それはよい考えだな！ 誰か、誰かおらんか！」

今さら偵察部隊を出そうとしてるのか周りにいると思っっている兵士に向かって叫ぶ春蘭。

「だがあいにくと春蘭の速さについてこられる兵士は居ないわけ。ここには俺たちしかいない。」

「もう何人が偵察に出した」

「むう、貴様にしてはなかなかやるな」

「それはどうも」

にしてもコレが魏最強の戦力か……。確かに強いんだが後先にも考えない行動がアレだな……

そんなコトを思っていると春蘭が助けた女の子が話しかけてきた。
どうやら見た目的には怪我はないようだった。

「怪我はないか？ 少女よ」

「はい。ありがとうございます！ おかげで助かりました！」

少女は律儀に頭を下げてくるワケなのだが、どうやったらこんな小さい体でこんなバカでかい鉄球を振り回せるんだらうか……。

にしてもこんな子供がどうして戦ってたんだらうか。

「なあ、君。なんでこんなところで一人で戦ってたんだ？」

俺はなるべく優しく怯えさせないように少女に話しかける。

「はい、それは……」

少女が口を開こうとするとちょうど向こうから華琳たち本隊がやってくるのが見えた。

少女は本隊の姿を見るとなぜかいぶかしげな顔をして、それを見つめていた。

そして華琳は俺たちの所に到着すると早速さっきの報告に行かせたことを話し始めた。

「桜牙。謎の集団とやらはどうしたの？ 戦闘があったという報

告は聞いたけれど……」

「あいつらなら春蘭の勢いに負けて逃げたよ。一応偵察も行かせてるから、すぐに本拠地が分かるはずだ」

「あら。なかなか気が利くわね」

どうも、と俺は華琳の言葉に一言だけを告げる。

するとさつきまで黙っていた少女が華琳を指差しながら叫んだ。

「あ、あなたは……!」

「ん？ この子は？」

少女は華琳の問いを無視して言葉を続ける。

「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ!？」

「まあ、そうな『下がれ!』うおっ!？」

俺は春蘭が答えようとするのを遮り、白羽黒羽を瞬時に作り出してそれを重ねて盾にするように構える。理由は簡単だ。少女が春蘭に向かって手に持っていた鉄球で攻撃してきたからだ。

くそ、あの小さい体からは想像できないほどの重い一撃だ……。春蘭でも防げたと思うが、なんでいきなり攻撃してきたんだ……。

「貴様なにをする!」

春蘭はそう叫ぶと少女に斬りかかりそうになる。なので俺は白羽黒羽を動かして鉄球をはじめ返した後に、斬りかかりそうになる春蘭を制する。

「春蘭、相手は子供だ。斬るんじゃない」

「だがあいつはわたし達に反撃してきたのだぞ！」

「分かってる。いいから話を聞くんだけ」

俺が言つとしぶしぶと言つた感じで納得して、大剣を下ろす。

俺も白羽黒羽を構えるのを止めはするが、さすがにまだ攻撃されたらたまらないのですぐに動けるようにはしておく。

「国の軍隊なんか信用できるもんか！ ボク達を守ってもくれないクセに税金ばかり持って行って！」

少女は叫ぶと俺がはじき返した鉄球を再びこっちに向かって振り下ろしてくる。

後ろには華琳たちがいるために避けることも、受け流すことも出来ない俺は、力だけを受け流しながら鉄球自体は受け止め言う。

「だから君は一人で戦つてたつつつうのか？」

「そうだよ！ ボクが村で一番強いから、ボクがみんなを守らなきゃいけないんだ！ 盗人からも、おまえたち……役人からも！」

少女はよりいっそう強く叫ぶと俺にぶつけていた鉄球を再び振り

上げて、攻撃しようとしてくる。

ちっ、ろくに魔力を込めてない白羽黒羽じゃもう一回あの一撃を防ぐのは不可能か……仕方ない。

俺は白羽黒羽を破棄すると両手を合わせて魔力を錬る。そして事前につけていた手袋に書いておいた魔法陣に魔力を流し込み、再び白羽黒羽を作り出して少女の一撃を防ぐ。

だが華琳の街を見る限りにはそこまでヒドい感じじゃなかったはずだ。もしかしたら、外の街じゃムチャクチャな重税を掛けているのかもしれない。

もしくはあの少女の村を治めてるのは華琳じゃなくて他の奴なのかもしれない。それを知らないで、攻撃を仕掛けてくるって言うならつじつまは合う。

何にしても誤解を解かないことには始まらない。少し荒っぽいけど……。

「二人とも、そこまでよ!!」

俺は少女に一気に近づこうとして足に力を込めた瞬間、華琳の静止命令が俺の耳に届いた。

「剣を引きなさい! その娘も! 桜牙も!」

「は、はい!」

華琳の迫力に圧されたのかさっきまで軽々と振り回していた鉄球

を少女はその場にドスンと落とした。

それを見た俺は武器を持っている必要はないと思い白羽黒羽を破棄して、少女に近づいていく華琳を見る。

「春蘭、桜牙。この子の名前は？」

華琳は少女の目の前に立つと少女を指差しながら俺たちに訊いてきた。

「え、あ……」

「……知らん」

どうやら春蘭もこの少女の名前を知らなかったようなので代弁する。

「き、許緒と言います」

こういう威圧感のある相手は初めてだったのか、許緒と名乗った少女は完全に華琳が醸し出す雰囲気にもまれてしまっていた。

つか許緒って言ったらブクブク太ってるようなイメージだったんだが、全然違うな。小さいし、小柄だし、可愛らしい少女じゃないか。

「そう……」

許緒の名を訊いた華琳がとった行動はその場にいた全員を驚かせるものだった。

「許緒、ごめんなさい」

華琳のその行動にその場にいた春蘭も桂花も口をパクパクとさせている。

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの街で陳留の刺史をしている者よ」

「山向こうの……？ あ、それじゃっ！？ へ、ゴメンナサイ！」

どうやらこの少女は自分が勘違いしていると言っコトに気づいて頭を下げてきた。

「山向こうの街の噂は聞いてます！ 向こうの刺史さまはスゴク立派に人で、悪いことはしないし税金は安くなったし、盗賊も少なくなったって！ そんな人にボク……ボク……！」

「構わないさ。誰にでも間違いなんてものはあるさ。な、華琳」

「ええ。それに今の国が腐敗しているのは刺史の私が一番よく知っているもの。官途聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

なるほどねえ。話を聞く限りじゃ華琳のそこは治安がよくなってきたみたいだが、その外はまだまだ苦しい状況にあるみたいだ。

だからこんな小さい子まで戦いなんてものに身を投じてるってコトか……。

「で、でも……」

それに人違いだとは言え俺たちに攻撃してしまったことを後ろめたく思っているらしい。

「だから許緒。アナタの勇氣と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え……？ ボクの、力を……？」

それを聞いた許緒はきよとんとした表情で聞き返してきた。

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど今のわたしの力はあまりにも少なすぎるわ。だから、村の皆を守るために振るったアナタの力と勇氣。この私に貸してほしい」

「曹操が王に……。曹操が王になったら、ボク達の村も救ってくれますか？ 盗賊もやっつけてくれますか？」

許緒はまるで神にでもすがるかのような表情をしながら華琳に言っていた。それは許緒が村のみんなのことをそれだけ大事にしているってコトだろうな。

かつて俺も守りたいものがあつたからその気持ちは痛いほど分かる。

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでなく……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「ずいぶん大きく出たな、華琳。でも嫌いじゃないぜ？」

「当たり前よ。私は大陸の王となり、みんなが安心して暮らせるような国にするの」

さすがは華琳と言ったところか。こいつがこつこつ奴だったから、俺は華琳について行きたいって思ったんだな、きつと。

そんなコトを思っていると俺が偵察に出していた兵が帰ってくるのが見えた。

「曹操さま！ 偵察の兵が戻りました！ 盗賊団の本拠地はすぐそこです！」

桂花は偵察部隊から聞いた情報を華琳に告げる。

「判ったわ。……ねえ、許緒」

「は、はい！」

華琳になにかされるとでも思ったのか許緒は緊張気味に返事をする。

まあ華琳のコトだから許緒をどうこつこつすることはないだろうな。

「まず、アナタの村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。それだけでいい、アナタの力を貸してくれるかしら？」

「はい！ それならいくらでも！！」

「ふふっ、ありがとう。桜牙、許緒はひとまずアナタの下につけ

る。判らないことは教えてあげなさい」

「了解」

俺は軽口を叩くように華琳の言葉に答える。

すると許緒が俺の方に向き直ってなにやら言いつつそっぴりしながら話しかけてきた。

「あ、あの……桜牙……さん」

「ん？ どうした。さっきのコトなら気にしてないからいいぞ？
あと、別にさん付けじゃなくていいから」

「じゃあ……兄ちゃん……」

「ああ、それでも構わないさ。それより、頑張れよ？」

「うん！」

「いい返事だぞ」

俺は許緒の頭をガシガシとなでながら許緒に言う。

許緒もさっきまでの緊張がなくなったのか無邪気な笑顔で返事を
してくる。

「うん、やっぱり子供は笑顔がないとな。子供は笑ってくれるのが
一番良いぞ。」

「では総員、行軍を再会するわ！ 騎乗！」

華琳のかけ声と同時に兵士達が一斉に馬に騎乗する。

「行くぞ」

「うん！」

俺は許緒が乗るための馬がないため、ジャックに乗せることにした。そして偵察部隊からの報告にあった盗賊団の隠れ家に向かって走り出した。

第陸話 『業炎の剣帝、天真爛漫と出会うこと』 (後書き)

アンケートは12月31日の23時59分まで実施します！

それまでで一番多かった意見を採用して、同票だった場合は作者の独断で決めさせてもらいます！

感想、アンケート待ってます！

第漆話』さあて、たまにはバグキャラらしいことやってやるつじやねえか!』

side 桜牙

許緒を一時的に仲間に加えた俺たちは偵察部隊が見つけたと言っ、盗賊団の本拠地に向かって馬を走らせていた。

華琳は兵士に守られるように配置され、春蘭は敵が来たらすぐに対応できるように前線を、秋蘭はその春蘭を援護できるように後方には位置されていた。

俺はと言うとドロにでも対応できるだろうし、許緒も連れているのだから好きに動いたらいいだろうと言うことで春蘭と同じように前線を走っていた。

「ねえ、兄ちゃん？」

「ん〜？ どうした〜？」

そんなコトを考えているとジャックと一緒に乗っている許緒が話しかけてきた。

「さっきからどうしてボクの頭撫でてるの？」

そう、俺は許緒が前に乗ってからずっと頭を撫でているのだ。

おい、そこで変態だとか思った奴……、ちょっと面貸せやゴリラ。

「そつだぞ貴様！ 許緒にイヤらしいことでもやるつと考えているのだから！」

許緒が言つとどうやら春蘭も気にしていたようで、許緒の発言に便乗して叫んできた。

「つか耳元でそんなに叫ばれたら鼓膜が裂けちまうつつの。」

「別にイヤらしいコトなんてやるつと何か考えてねえよ。そういう風に考えてる春蘭が考えてるんだろ？」

俺は春蘭に対して意地の悪い笑みを見せながら、からかうように言う。

「貴様と同じにするな！ わたしがそのようなことを考えるわけなからう」

そいつはどうか。それに俺ってなんにもしてないのに変態キャラの位置付けになっちゃってるわけ？

別になにもしないからいいのだが、あんまりそういう風に言われると評判が悪くなるような気がするのだが……。

そんな会話をしていると盗賊団の本拠地と思われる砦が見えてきた。砦は山の陰に隠れるようにひっそりと建てられており、そういうコトが無い限り見つかからないだろうと言う感じだった。

とりあえず砦を見つけたので、具体的にどういう風に動くのかを指示してもらつたために華琳の隣まで春蘭と許緒と共に下がる。

「なあ、許緒。盗賊団つてのは他にもいたりするの？」

「ううん。この辺りにはあいつらしかいないから、兄ちゃん達が探してる盗賊団つて言うのもあいつらだと思っよ」

なるほどねえ。ホントにここにしか集まってなかったのかそれとも、ここら一带の無法者の集団が集まったかは知らないが、一カ所に固まってくれてるってんなら好都合だ。

いちいちマチャムぶっ倒してくのなんて時間が掛かりすぎるからな。

「敵の数は把握出来る？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

三千つつつたら俺たちの軍は千くらいだから、だいたい三倍つて所か。

数が不利とはいえこっちは訓練された兵士であつちが雑魚が集まった烏合の集に過ぎない。つまりは数でのアドバンテージはほとんど意味がないってコトだ。

「桂花、もちろん策はあるのでしょうか？ 糧食の件、忘れてはな
いわよ」

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、
すでに私の胸の中に」

相当自信があるのか桂花の顔は自信にみなぎっているように見え

た。いや、アイツのことだからエライ自信があるんだろうなあ……。そんなコトを思っていると服が引つ張られるのを感じた。そつちを振り向くと許緒が何かいいたげな顔をしていた。

「兄ちゃん、糧食の件って何のこと？」

「糧食の件ってのはあそこの猫耳軍師が華琳に取り入れてもらうために、華琳を試すようなマネをしたんだよ。んで、それが糧食を少なくするってもんだったんだが、失敗したらお仕置きなんだとさ」

俺が言うと許緒はへえ、と感嘆の声を上げていた。

まああれだけ自信たっぷりそうなんだから失敗するなんてコトは有り得ないだろうな。

「ちよつとアンタ！ 今の話聞いてたの！」

許緒と話していると桂花が俺を怒鳴るように叫んできた。

「いや、全然」

「……もう一回だけ説明してあげるから、ちゃんと聞いてなさい」
そんで桂花から聞いたのは盗賊団をどのように蹴散らすかの作戦だった。

まず華琳は少数の兵を率いて砦の正面に展開して、その間に春蘭と秋蘭の夏侯姉妹が残りの兵を連れて後方の崖に待機。

本体が銅鑼を鳴らして盛大に攻撃の準備を匂わせれば、相手は何の志も持たずに武を役立てることもしないで盗賊なんてものに身を投じる輩は挑発に乗りやすく、必ず外に出てくるはず。

油断したところに伏兵が現れれば敵は混乱してさらに倒しやすくなり、討伐の時間も短縮できるとのことらしい。

誘いに乗らなかった場合はこの近辺で拠点になりそうな場所はすでに揃えてるようで、そこを拠点にして城の内部から攻め落とすよ
うだ。

それで俺は春蘭と秋蘭と同じように伏兵部隊に入り、許緒と桂花はもしものときのために華琳について行くそうだ。

にしてもなんつーか用意周到と言うか……とりあえずすげな。

「分かったかしら？」

「分かった。ようするに華琳が誘き出した盗賊団を俺達がぶっ飛ばせば良いつてコトだろ？」

「そういうこと。理解が早いじゃない。まっ、それぐらいは当たり前前よね」

相変わらず嫌み全開の桂花だったが、あの作戦を立ててるあたり軍師としては間違いなく大物だろうな。

そして桂花が俺に作戦を伝え終わったのを見た華琳が言った。

「では作戦を開始する！ 各員持ち場に着け！」

華琳の力強い号令と共に皆が動き出した。

あいにくと俺は許緒と共に行くことは出来ないため、許緒は華琳の馬に乗せてもらうことになった。

俺は許緒に近寄って一言だけ伝える。

「怪我しないように気をつけろよ、許緒」

「うん！ あとボクのことには季衣でいいよー。春蘭さまと秋蘭さまも真名で呼んで良いつて言ってくれたし」

あいつら、いつの間そんなコトを言ったのだろうか。

そんなコトを思いながら季衣に一言だけ告げた後に春蘭達と共に待機することにした。

さて、華琳たちが帰ってくるまで随分と暇になっちゃったな。ここで気を抜くのはダメだとは思うが、気が抜けるなあ……………。

そんなコトを思いながら待機していると早速銅鑼の音が聞こえて……………ん？ 銅鑼の音だけじゃなくてなんか野郎の声も聞こえてくるような気がするんだが気のせいだろうか……………。

いやいや、でもまさかこっちの銅鑼の音を出撃の合図と間違えたとかは、さすがに盗賊団だからって有り得ないよな……………多分。

そんなコトを考えると俺たちの元に一人の兵が近づいてきた。

「報告！ 曹操さまの本隊後退してきました！」

ああ、やっぱりアレは聞き間違いじゃなかったみたいだな……。

「やけに早いな。ま、まさか……華琳さまの御身に何か!？」

「心配しすぎだ姉者。隊列は崩れていないし、相手が血気に迷ったか、作戦が予想以上に上手くいったか、そういうところだろう」

焦り気味の春蘭とは違って秋蘭は相変わらず冷静だな。

春蘭を完全に抑えられるのは秋蘭しかいないし、彼女には冷静でいてもらわないと困るな。

「多分、あいつら勘違いしたんだと思うぞ？」

「なに？ それはどういうコトだ？」

「銅鑼の音が聞こえたと思ったらむさ苦しい野郎共の声が聞こえたんだよ。大方、こっちの銅鑼を出撃なんかと間違えたんだろ」

俺がそう言うと二人は微妙に驚いたような表情になったんだが、いったい何を驚いてんだ？

「龍崎、あの距離の銅鑼の音が聞こえたのか……?」

秋蘭がそう言うのも無理はない。なんて言ってもこっから敵の本拠地まではかなりの距離があり、聞こえるはずがないからだ。

だがそこはバグキャラの違いよ。不可能なことも可能にするのが

バグキャラさ。

「俺に不可能の文字はない。ほらもう見えてきたぜ」

「そ、そうだな。……ならば総員、突撃準備！」

さっきまではふざけているような雰囲気だった春蘭だが、さすがに戦いとなれば真面目になる。そんな春蘭のかけ声と同時に軍は動いていく。

そしてだいぶ近づいてくると華琳と季衣と桂花の無事な姿が見えてきた。にしても隊列もへったくれもねえ、ただの暴徒の群れっもんだ。

「ふむ……。そろそろ頃合いかな」

「まだだ。横殴りでは、混乱の度合いが薄くなる」

「ま、まだか……？」

「まだだ」

「……」

どうやら春蘭は今にもあの暴徒の輩をぶっ飛ばしたくてたまらないらしい。それを秋蘭がまだだと言って抑えてるけど、正直俺も突撃したいッス……。

だってあいつら隙がありすぎて、やらないのがバカバカしくなってくるんだよ。くそう、今の春蘭の気持ちは痛いほど分かる……。

「もういいだろ！　もう！」

「まだだと言っているに……もう少し落ち着け姉者」

「だが、これだけ無防備にされているとだな、思い切り殴りつけたくなる衝動が……」

春蘭がそう言ったとき俺は春蘭の肩をガツチリと掴みながら言う。

「春蘭、その気持ち痛いほど分かるぞ……！」

「おお！　分かってくれるのか……！」

「あたぼうよ！　アレだけ無防備にされるとボコボコにしてやりたいよな！」

「龍崎、分かっているではないか！」

俺たちはそう言いあうとガツチリと握手をした。

これがまさに洗淨の中に生まれる友情と言う奴だな。春蘭とはこれからも気が合いそうだぜい……！！

だが秋蘭はそんな俺たちを呆れたような目で見ていたが気づいてない振りをする。

「よし！　そろそろいいよな！」

「そうだ秋蘭！　もういいな！」

「うむ。遠慮なく行ってくれ」

秋蘭の言葉を聞いた俺は誰よりも早く飛び出して盗賊団の群に向かっ
ていく。そして華琳たちも追い抜いて、盗賊団と向き合う。

あいつらは季衣の村の奴らを苦しめてたつつうんだからそれだけで万死に値する。だったら今こそバグキャラの力を使うときだ。

「テメエらア！！ 喰らいやがれエ！！」

俺はそう叫びながら右腕を後ろに大きく引いて氣を集中させる。リミットが掛かっているとは言え氣には大したリミットは掛かってないみたいだ。

それに魔法は使えないみたいだが氣による攻撃なら問題ないだろ。そして氣を溜めていると俺の右手を中心に渦巻くように風が唸る。

「ジーク……」

そんで今から使うのは俺のかつての仲間、『ジャック・ラカン』が使っていたを俺用の技みたいにただ改名しただけのムチャクチャな技だ。

「インバクトオオオオ！！」

俺は氣を集中させていた右腕を一気に振り抜く。すると腕からはもはや破壊光線としか呼べないような、氣による光線が盗賊団に向かって放たれる。

俺が放った『ジーク・インバクト』は盗賊団の目算でだいたい八割ぐらいの盗賊団は巻き込んだろうな。

手加減してコレだけってのはまあまあだろうけど、盗賊団だけじゃなくて味方まで驚いてるみたいだな。すると近くにいた華琳が言ってきた。

「お、桜牙……。今のはいったい何かしら……？」

「天界の技だ」

俺が言ったのと同時に盗賊団は一気に戦う気がなくなったのか撤退していくのが見えた。

誰か追撃するのかと思えば、誰も追撃していかなかった。

「華琳、追撃しなくていいのか？」

「え、ええ、そうね。逃げる者は道をふさぐな！ 後方から追撃を掛ける、放っておけ！」

華琳の叫びにより兵士達が一斉に追撃を開始した。

もちろん春蘭たちも追撃に出て行ったのだが、俺の一撃が相当効いたのか城を落とすまでにほとんど時間が掛からなかったのだった。

《夜》

盗賊団の城を落とした俺たちは、夜になってしまったため一時停

滞して休憩をとることになった。

だが『ジーク・インバクト』を放ってから俺に誰も話しかけてくれなくなった。華琳や春蘭たちは普通に接してくれるのだが、兵士達は俺を怯えたような目で見てくる。

しかも中には破壊神とか、悪魔とかヒソヒソと話してる奴がいる。やっぱりあそこはバグキャラを披露しないで自重すべきだったか……。

まあ、やっちゃったもんは仕方ないし後悔はしてないんだけど、隣で飯を食ってる季衣がスゴすぎるんですけど……。

なんつーかすげー食いつぷりで見てるだけで腹が一杯になるような感覚になるほどだ……。

「な、なあ、季衣？」

「どうしたの？ 兄ちゃん」

「いや、そんなに食べて腹壊さないか？」

「なに言ってるのさ、このくらい平気だよ」

そう言って再び食べ始める季衣。こんな小さい身体のドコにコレだけの食料が入っていくんだ？

腹の中にブラックホールでも装備されてるんじゃないの？ っつうくらい勢いで食料を食べてんだよ。

残りの食料見てみたけどかなり減ってたなあ……。もしかすれば桂花が言ってた食料じゃ足りなくなるんじゃないか？

そんなコトを思っているとこっちに春蘭と秋蘭がやってきた。春蘭はなにやら言いたげな顔をしている。

「龍崎、貴様！ 何だったのださっきのは！！」

「さっきのって？ 俺が腕から出した奴？」

「そうだ！ 貴様、なぜわたしとの戦いときにアレを使わなかったのだ！」

「いや、使えないから」

アレは遠距離でしかも威力を抑えて撃ったから誰も死んでないし、大したことない怪我で済んだけど普通アレ喰らったら怪我じゃ済まないつつの。

たぶん春蘭は手加減されたとも思ってた怒ってるんだよなあ。手加減したってのはあながち間違いじゃないのだが、言わないとバレないだろ。

「貴様、まさかとは思いが手加減していたとかではないだろうな！」

「んなわけねえだろ。あの技は三日に一回しか使えないんだよ。だから試験で使ったら勿体無いだろ？ それに剣技については本気だった」

はい。今いったこと全部嘘です。実際『ジーク・インバクト』なんか一日で何発も撃てるし、俺の本職の武器は短剣による二刀流じゃないくて春蘭みたいな大剣の方が使いやすんだよね。

だから遠まわしに言っちまうとあの戦いは手加減したコトになるわけだ。

「そうなのか？ それだったとしてもわたしは負けを認めたくはないからな！ 次やったらわたしは勝つ！」

「へいへい。だけど春蘭とはもう戦わないよ」

「なんだと！ 貴様、勝ったまま逃げると言うのか！」

顔をずいっと近づけてきてより一層デカい声で叫んでくる春蘭。

春蘭め、どんだけ声デカいんだよ……。耳がすげーキーンとしてきたじゃねえか。

そしてその後俺は延々と春蘭から戦えとせがまれるのであった。

余談にはなるが、俺と春蘭が話している間も季衣は食べ続けていたと言っ。

どんだけ食べるんだよ！？

《数日後》

俺たちが華琳の城に戻り始めてから数日が経過した。その間には様々な村に立ち寄りたり、出会った盗賊団を退治したりと色々なコ

トがあった。

色々なコトがあったのだがわざわざ軍を動かすのは面倒だろうと思ひ、俺一人で盗賊団を千切つては投げ、千切つては投げととりあえずぶつ飛ばしてきたのだがその間にどうやら俺には二つ名とも呼べる異名がついてしまった。

『武器製造機』コレは魔法具を作り出して戦つてたから。『自重しない男』コレは盗賊団などを問答無用で思いつきりぶつ飛ばすから。

『破壊神』コレはとりあえず俺が暴れるとそこら一帯が破壊されるかららしい。ちなみに村は破壊してないから間違わないように。

と、まあ色々な異名が付いたんだが一番気に入つてるのが『剣帝』つてのだな。コレは剣を振つてる様子がまるで舞のようだったからついたようだ。

「なあ、華琳。そう言えば太平要術の書とかつて見つかったの？」

あるとき俺は『ジーク・インバクト』を放つてから城には入らず、追撃をしていたのでそれを知らない。

しかもこの数日はさっきも言ったようにウジャウジャ出てくる盗賊団をボコボコにしたから聞く暇がなかったんだ。

「いいえ。無知な盗賊に薪にでもされたか、落城の時に燃え尽きたのか。まあ、代わりに桂花と季衣と言う得難い宝が入ったのだから良しとしましょう」

華琳も言ったとおり季衣はどうやら華琳についてくることになった。

季衣がいた村を華琳が治めてくれることになり、今度は季衣が華琳の力になりたいからと自ら言ってきたのだ。

しかも季衣は今回の武功を認められて華琳の親衛隊を任されることになったようだ。

俺がほとんどぶっ飛ばしたのにも関わらずなかなかの戦いっぷりだったらしい。

「さて。後は桂花のコトだけれど、最初にした約束、覚えてるわよね?」

「……はい」

「城を目の前にして言うのも何だけれど、私……とてもお腹が空いているの。分かる?」

結果的に言えば賭は桂花の負けだった。昨夜に食料が尽きてしまったのだ。

桂花の策が狂ったのは間違いなく人の何倍も食料を消費する季衣が原因だろう。まあ、季衣が悪いとはいえないがこの場にいる全員が朝飯抜きである。

もちろん華琳とて例外ではない。ただ、こちらの損害が少なすぎた。兵士は想像以上に残った。

「ですが、曹操さま。一つだけ言わせていただければ、それはこの季衣が……」

「桂花さんよお。そいつあ、言い訳にすぎねえぜえ？ 不可抗力や予測できない事態を言い訳にしちゃあ、いけねえなあ。それに戦場を言い訳にするのは、無能者がやることだぜえい？」

俺は今までの皮肉をたつぷりと込めながら桂花に向かって言う。もちろんのこと嫌みつたらしいスマイルは忘れずに付属させる。

むっふっふ、いい気味だぜ。

「うるさいアンタは黙ってなさい！！」

だけど俺の言葉は桂花の一言にバツサリと切り捨てられる。

「だけど桜牙の言うことは正しいわ」

だがそこに華琳が助け船を出してくれた。

さすが華琳だ、こんなときまで俺を助けてくれるとは感激だ。

「た、確かにそうですが……」

さすがに華琳に言われると言い詰まってしまう桂花だが、そればかりは仕方がない。

なんせ華琳に逆らえばなにがあるか分からないからな。それに正論を言ってるわけだし……。

まあ、こいつの指揮はかなり使える。こんなところで失うわけにもいかないし、ここらで助け船でも出しておくか。

「華琳、今回の遠征が成功したのは桂花の計画のおかげなんだし、あの約束はなしにしてもいいんじゃないか？」

「どんな約束でも反故にすることは私の信用に関わるわ。少なくとも無かったことにすることだけは出来ないわね」

そう言いながら俺の目を見据えてくる華琳。しかしその目には明らかに首をはねるとか言う意味は籠もってない。

なるほど。最初から華琳は桂花の首をはねるきは無いつてコトか。

「……分かりました。最後の糧食の管理が出来なかったのは私の不始末。首をはねるなり、思うままにしてくださいませ。ですがせめて……最期はこの夏侯惇などではなく、曹操さまの手で……」

桂花は目にわずかに涙を溜めながら華琳に言ってくる。その桂花の表情に誰しも口を閉じる。

そんな桂花の表情を華琳は少しの間見つめるとフツと笑いながら言った。

「とは言え、今回の遠征の功績を無視できないのもまた事実。今回は死刑を減刑して、おしおきだけで許してあげる」

華琳がそう言つと春蘭と秋蘭の表情がわずかに変わる。

何というか羨ましそうな表情に見えるんだが、お前等はおしおき

されて嬉しいとか言う趣味の持ち主なのか？

「それから、季衣と共に私を華琳と呼ぶことを許しましょう。より一層、奮起して仕えるように」

「あ、ありがとうございます！ 華琳さま！」

「なら桂花は城に戻ったら私の部屋に来なさい。たっぷり……可愛がってあげる」

相変わらず羨ましそうな表情で桂花を見つめる春蘭と秋蘭に、何のことだかさっぱり分かってなさそうな季衣。

おしおきつてのはそう言うことが……。季衣は知らなくても良いことだと言っておこう。

「それより兄ちゃん。ボク、お腹空いたよー。何か食べにいこうよ」

「だな。俺も腹減ったし、片付けが終わったら食いに行こう」

「やったあ！ それじゃ、早く帰りましょう！」

季衣は嬉しそうな顔でそう言うと俺を引っ張り始めた。

金に関してはちゃっかり貯金してたりしてるので問題なかったりする。

こうして俺たちは新しい仲間を二人手に入れたのだが、俺の財布は空になるのだった。

「はあ……、不幸だ……」

第漆話』さて、たまにはバグキャラらしいことやってやるんじゃないかねえか!-!』

感想、アンケート解答待ってます!-!

第八話 『業炎の剣帝、人助けをやるのこと』

side 桜牙

あの出来事から一週間が経過した。俺は城に戻ってから街の警備と共に事務仕事に追われる身になっていた。

この前に討伐した盗賊団に情けなくも恐れて逃げた奴らの代わりに華琳が州牧に任命され、その事務処理などに追われる羽目になっていたのだ。

俺が事務仕事をしている書類の数はもはや小山が出来るほどの量で、この三日間くらいはずっと徹夜で事務仕事を行っている。

三日間やったつてのに俺の机の上には小山が出来上がってるし、さらには処理を終えた処理も二つほど小山が出来ている。

なんでこんなに事務仕事をやってるのかと言えば、華琳に拾ってもらった身なのだから出来ることはなるべく多くやろうと事務仕事を多めにもらった。

さらには春蘭は事務仕事をやらないため、秋蘭がやるうとしていたのも俺が無理矢理もらい受けてやったんだが思いつきり後悔している……。

それに事務仕事をしていく上で今までの州牧がしてきた悪政の状況も見えてくるワケなんだよね。こんなことをしてれば反乱が起きるのも当然ってもんだ。

はあ……。それにしてもどんだけ仕事あるんだよ……。自分から貰ったつてのにすげー大変だよ。まあ、コレで華琳に仮が返せるっ言うのなら軽いもんなんだが、今度からは控えめにしよう。

じゃないと目が保たない。集中力が保たない。

「ヒヤッホオーイ！！ お仕事楽しいなあ〜！！ はあ
...」

そうとでも思ってたやらなければ俺の身が確実に破滅へと向かうだろう……。頑張ってたんだんだけど悲しくなってきたな。

「そうか。そんなに楽しいか」

「おわっ！？」

俺はいきなり後ろから聞こえてきた声に思わず驚きの叫びをあげてしまう。さらにはイスから転げ落ちそうにもなったが、ギリギリで止まる。

誰だ、勝手に俺の部屋な入ってきたのは。と思いながら振り返ると秋蘭と季衣が俺の後ろに立っていた。

「まったく、いつの間に俺の部屋に入ってきたんだ？」

「お前ら、ノックくらいしてくれ」

「のつく？ なんなのだそれは？ 天の国の言葉か」

そう言えばこの時代には俺がいた時代で普通に使ってた言葉も通
用しないときがあったんだよな。

今まで結構普通に話が通じてたからすっかり忘れてた。

「ノックするのは部屋に入るときに部屋の戸を軽く叩くんだよ。
まあ、それをしないまでもせめて声を掛けてくれ。正直心臓に悪い
から」

「えー、声なら秋蘭さまがちゃんとかけてたよ？ 兄ちゃんがそ
れでも反応しないから入ったんだよ？ ね、秋蘭さま」

「うむ、季衣の言うとおりだ。何度声を掛けてもお主は反応しな
かったのでな、入らせてもらったよ」

声掛けられてたのか……。全然気づかなかった。それに近くに
たつてのに気配すらも気づいてなかったし、相当疲れが溜まってる
みたいだなあ……。

それに秋蘭と季衣の二人もいたの……。あれ？ 珍しく春蘭の姿が
ドコにもないんだがドコ行ったんだ？

「なあ、秋蘭」

「どうした？」

「春蘭がいないみたいだけどどうしたんだ？ どこかに出掛けて
るのか？」

「うむ、姉者は任務で外に出ている。今日は帰ってこないのだ」

そついや春蘭ってあんなんでも武官なんだからそつ言う仕事は回ってくるんだな。

「で、俺になんか用か？ ま、まさかまだ仕事があるって言うのか！？」

「冗談じゃないぞ！？ これ以上仕事が増えたと思った日にゃあ頭が大爆発起こしちゃまずぞ！？」

「ははは、さすがに龍崎にこれ以上仕事を押しつけるわけにはいかないさ」

「そ、そうか。手伝いたいが、正直ありがたい……」

「うむ。龍崎、ここ最近は何に出ないだろ？」

「ん？ まあ、な」

事務仕事が多すぎたて終わりの目処が立たなかったからな。

期限もあるし、一分一秒も無駄にしたいくないってときに街になんか出てられないよ。

「だから息抜きにご飯食べに行こうよ！ 兄ちゃん！」

「だけど俺まだ仕事残ってるし」
季衣には悪いけど事務仕事が終わるまでは外に出る気はないんだよね。

「それは、我々とは共に食べに行きたくないと言っことか？」

「えー、兄ちゃんヒドいよー」

俺がそう言つと秋蘭の矛が突き刺さつてきた。しかも秋蘭は冗談で言つたはずなのに、季衣はそれを真に受けて文字通りブーブー言つてるし……。

なんかこのままだと俺間違ひなく悪者だよね？ つーか悪者に仕立て上げられてるよね、コレ。

「はあ……。分かつた。じゃあ街に行くか。ちようど飯にしようと思つてたところだし」

「やつたあーっ！ 兄ちゃん、秋蘭さま！ 早く行こう！」

「お、おい、そんなに急がなくても……」

「まったく、季衣は元気だな」

秋蘭、のんきなこと言つてないで助けてくれ。そんなコトを思いながら俺は季衣に引き吊られていくのであつた……。

季衣に引き吊られてたまま俺たち三人は街にやつてきたのだが、相変わらず街は賑わつている様子だつた。

「兄ちゃん、秋蘭さま。何が食べたいですか？」

「私は季衣に任せよう」

「俺も季衣に任せるよ」

俺は秋蘭の言葉に便乗して言う。

だいたい俺、この街にどんな店があるとかまだ把握しきってないから分かんないんだよね。警備の仕事やってるけど、まだそんなにやってないからどっちにしる分かんない。

「う〜ん……。じゃあ最近出来たラーメン屋さんの屋台に行こうよ。あそこスツゴくおいしいんだよ！」

「そうか。季衣がそう言うんなら旨いんだろうな。秋蘭もそこで問題ないだろ？」

「うむ、大丈夫だ」

と言うことで俺たちは季衣を筆頭にラーメン屋の屋台を目指すことになった。

そして何気ない会話をしながら歩いていくと、不意に俺は誰かにドン！！とぶつかられる衝撃に襲われた。

だがぶつかつた場所は大人からしたらかなり低めの位置だったの
で、子供かなと思いつつかられた方を見ると、季衣と同年
くらいかちょっと年上くらいの女の子が転んでいた。

「悪いな、大丈夫か？ 怪我とかしてないか？」

俺はなるべく怖がらせないように笑顔を見せながら女の子に手を
伸ばす。

「っ／＼／＼／＼／」

するとその女の子は顔を何故か、ゆでだこのように真っ赤にさせたあと、スミマセンと一言言つとその場から走つて立ち去つてしまつた。

「何だつたんだ？ ん？ なんか落ちてる……」

女の子が転んだ拍子に落とされたのか女の子が転んでいた場所にお守りのようなものが落ちていた。

この街の子供なら警備するときにも見つかるだろうから、そのとき渡せばいいか。と思いつながらとりあえずお守りのようなものを拾い上げポケットにしまう。

「兄ちゃん、早く早く〜!!」

「おう、今行く」

そんなコトをしている間に先に屋台に秋蘭と共に入っていた季衣が俺に叫んでくる。

それに俺は一言だけ答えて急いで季衣の所に向かう。

「兄ちゃん、どうしたの？」

「いや、ちょっと人とぶつかつてな。もう頼んだのか？」

「うん。兄ちゃんにはボクの一押しのを頼んでおいたよ！」

そうかそうか。季衣の一押ししてことはかなり旨いんだろうな。

なんせ食の量は人の数倍で、さらには味にもこだわる季衣が選んだものなんだからな。

期待せずにはいられないでございますコトよ。

と思ったのだが、季衣の一押しが俺の前に置かれてから俺は後悔した。自分で頼めば良かった、と。

なぜなら季衣が頼んだラーメンはかなりの量でおそらく季衣が食べるくらいの量なのではないかと思わせる量だったからだ。

「龍崎。食べきれるのが、それ」

秋蘭が俺の前に置かれたラーメンを見ながら言ってきた。

正直に言おう。メチャクチャキツいと。

「大丈夫だよー。ボクだって食べられるんだから、兄ちゃんでも食べられるよ」

「そ、そうか」

季衣は汚れの知らない無垢な笑顔でそう言ってくる。

つーか季衣よ、このメチャクチャな量を食べたお前の身体はいつたいていどういう構造になってるんだよ。

そしてそんな期待に満ちた目で俺を見つめないでくれ……。

(龍崎。これで残したとあれば大変情けない醜態をさらすことになるぞ?)

秋蘭はニヤニヤとわずかに笑いながら俺に小声で言ってきた。

くっ、秋蘭め。コレを見て楽しんでやがるな。畜生、こっぴごうなったらやっつてやるぜ。

(任せておけ。俺に不可能はねえ)

(男に二言はないな? 龍崎)

(当たり前だ。男に二言はねえ)

俺は断言してしまったので残すことも出来なくなり、楽しい食事の時間が苦しい拷問の時間になってしまったのは言うまでもないだろう。

そんな俺の脇では秋蘭と季衣がうまそうに、さらに楽しそうに会話をしながらラーメンを食べているのであった。

そして俺がようやく食べ終わる頃にはすでに二人は食べ終わっていた。

「兄ちゃん、おいしかったでしょ?」

「あ、ああ。すげー満足した」

腹がはちきれそうだって言う意味でだけどな。

「飯も食べ終わったし、事務仕事の続きでもするか……」

俺は凝っていた首をポキポキと鳴らしてほくしながら独り言のよう
うに呟く。

すると秋蘭が俺に向かって言ってきた。

「今日は警備の仕事があるではなかったか？」

「あつ……」

秋蘭に言われて思い出したけど、そう言えばそうだったっけな。
はあ……、事務仕事もまだ残ってるって言うのにこれから街の
警備か……。

今から警備をやったとしたら帰れるのは日が沈んでから。つまり
はそれからしか事務仕事は出来ないから、今日も徹夜決定かよ……。

「じゃあ俺は警備の仕事してから帰るから、二人は先に帰ってて
くれ」

「うん。兄ちゃん頑張つてね！」

「おう」

季衣の言葉に笑顔で答えながら俺は二人が帰るのを、見送ると警
備の仕事に行くことにした。

警備の仕事は主に街で起こる暴動を鎮圧したり、道に迷っていたりする人に道案内をしたり、不正な方法で店を出してる奴らの取締など、さまざまな役割がある。

一番多いのが道案内などなのだが、たまに暴動があったりしてそれを鎮圧したりするのが意外と面倒だったりする。

そんなコトを思いながら警備をしていると、誰も通らないような裏路地から声が聞こえてきた。何やらゴツツイオッサンらしき声と女の子の声みたいだが、こんな場所で何やってんだ？

そう思いながら俺は裏路地に入っていく。するとそこには五人くらいの男に囲まれている女の子がいた。しかもあの女の子、さっき俺にぶつかってきた子じゃないか？

何にしても間違いないくあれは嫌がってる女の子を連れて行くようにしてるみたいだな。だったら、一応警備をしてるんだし助けるしかないな。

「オラア！！」

そう思った俺は一番手近にいた奴に向かって問答無用で拳を叩きつける。すると俺にぶん殴られた奴は、凄まじいスピードで吹っ飛んでいく。

それを見て呆けている奴らの隙を見計らって女の子を自分の後ろに隠す。するとそこでようやく我に返ったのか、俺に向かって叫んできた。

「テメエ！！いきなり何すんだ！！」

「ああん？ いきなり何するんだア？ こんな子供に盛ってる奴が生意気言ってるじゃねえよ。発情期なんですか、コノヤロー」

「うぜえんだよ。そいつは俺たちの商品なんだ。勝手にとられちゃ困るんだよ」

商品……。つまりはこいつらはこんな女の子を買収したってコトか。

「この子が何か悪いことでもしたか？」

「ああ？ 知らねえよ、んなもん。いいから商品を渡せ」

この子が何かしたってんなら話は変わってくるが話を聞く限りこの子は買収されて、何かをしたワケじゃない。

だったらそんな罪のない子供を売り物なんかにしよつとするゲスヤロウにこの子を渡すわけにはいかねえ。

「商品だかなんだか知らないが、ぶっ飛べ！！」

俺はそう叫ぶと問答無用で残りの四人をぶっ飛ばした。

文字通りこいつらを瞬殺したわけなんだが、とりあえず牢屋かなんかにぶち込んでおくとするか。

そんなコトを思っていると俺が助けた女の子が俺に抱きついてきた。それで後ろを指さしたので振り向いてみると、俺がぶっ飛ばした奴らの仲間らしき集団がいた。

「よくもやってくれたな。テメエ、生きて帰れると思うなよ?」

そこでそいつらのリーダーらしき男が俺に向かってそう言ってきた。

俺に抱きついていてる女の子は俺に抱きついたまま震えていた。俺はそんな女の子を後ろに隠すように立たせた後に、怖がらせないように笑顔を作りながら言う。

「大丈夫、安心しろ。君は俺が守るから」

「っ／／／／／」

俺がそう言うのと顔を真っ赤にしながらもうなずいてくれた。その後には俺は集団に視線を変えて、手招きをしながら言う。

「来いよ。遊んでやるからよ」

「はっ、一人でこの人数を相手に出来ると思ってんぐハッ!？」

俺は男が何かを言い終える前に問答無用で男の顔をぶん殴る。こんな子供に何かしようなんて奴には情けを掛ける必要はなし。

よって同じようにそんな奴らの話を聞く必要もないってわけだ。なので俺はそのあと何かを話そうとする奴の話を聞かないでぶん殴っていく。

ふはははははははは!! 俺を相手に勝とうなんて言う甘っちょろい考えを持つなんてのは二百年早いんだよ!!

そして俺が自重しないでぶん殴りまくること数分後、裏路地には人間の山が出来上がったとき。そして俺をたまたま目撃した兵士はこう言った、破壊神と。

そんなコトはさておき、さっき助けた女の子を近くの飯屋に連れて行き、なんでこうなったかを訊ねることにした。

「俺の名前は龍崎桜牙。君はなんて言うんだ？」

「な、名前は除晃で字は公明です……」

除晃か。やっぱりどこの武将も女の子になっちゃってるのね……。

「除晃。何で君は追いかけてたんだ？ 商品だとか言われてたけど……」

「……」

俺がそう言うと除晃の表情が急に暗くなり、どうやら訊かれたくないことを俺は訊いてしまったらしい。

だが除晃は顔をすぐにあげて俺にどうしてこうなったかを教えてくれた。

除晃と両親と住んでいた村に盗賊が来た。自分は母からもらったお守りを持って隠れたが、見つかり捕らえられてしまった。そのとき除晃の父親も母親も除晃を取り戻そうと、抵抗したのだが、殺されてしまった。

自分や他の子供は殺されず、人売りされるようで牢屋に入れられており、売られる時に隙を見つけ除晃は逃げだしてきた。その時点で、除晃が住んでいた村は半壊状態だった。

そして追われている間に傷つきながらも街にたどりつき、逃げているところに俺にぶつかってお守りを落としてしまった。

そしてこれからのことを考えているところで、盗賊に再び見つかって裏路地に逃げ込んだが、逃げ場がなくなってしまった。

そこにちょうど俺が助けに来てくれて今に至ると言うことだった。

そんな辛い過去を話し終えると除晃は泣き出してしまった。思い出したいくないコトを思い出して泣いてるのだろう。事情を自分から訊いたからとは言え悪いことしたな……。

「除晃、君はコレからどうするつもりなんだ？」

「分かん……ない……」

除晃は泣くのを堪えようとしながらなんとか答える。

どうやら逃げることに精一杯でコレからのことは何も考えてないみたいだ。

それもそうだろうな。こんな子供があれだけ怖い目に遭ってきたんだ。考えてる余裕なんかあるわけがない。

「だったらさ、俺のところに来いよ」

「桜牙さんの……ところ…?」

俺がそう言うと除晃は不思議そうな表情をしながら俺に言った。

「俺のどこって言っても俺が仕える人のところだけだな。州牧をしている曹操、聞いたことあるだろ?」

「う、うん…。その人のおかげで暮らしが豊かになってるって…。でも曹操さんと、桜牙さんは知り合い…なの?」

「まあ、一応その武官だからな」

俺がそう言うと今度は驚いたような顔になる。

この子、表情がコロコロ変わっておもしろいな。

「そこなら何とか仕事が見つかるかもしれないしな」

「ありがとう、桜牙さん…」

俺は除晃の言葉に一言だけおう、と答えると警備を他の人に頼んだ後に華琳の城に除晃を連れて戻った。

城に戻ると先に戻っていた秋蘭や季衣に華琳がドコにいるかを訊いて華琳がドコにいるかを訊くとどうやら玉座の間にいるらしい。

なので俺は除晃を連れて玉座の間に向かった。

「あら、桜牙。どうしたのって、その子は？」

玉座の間に入るなり華琳は除晃を訝しげな目で見ながら俺に訊ねてきた。

まあ、いきなり部下が見ず知らずの子供を連れてきたんならそうなるわな。

「この子の名前は除晃、字は公明だ。実はな……」

俺は除晃の名前を教えた後にコレまでのことを説明した。

除晃の村が盗賊に襲われてほとんど壊滅状態になったこと。その子供が売られることになったこと。

そのうちの一人の除晃が逃げ出して、ここに命からがらに逃げ延びてきたこと。そして俺が除晃を助けてここに連れてきたことなど、全てを華琳に説明した。

その上で俺は華琳に訊ねる。

「除晃を城で雇ってくれないか？」

「無理ね」

まさかの即答。少しくらいは考えてくれても良いはずだろうに華琳は全く考えてくれてない。

俺が言った直後に言ってきたところを見ると、俺がこう言っの分かってたみたいだな。

俺はどうにかして華琳の気を変えさせる方法はないかと頭を捻っている。華琳が言ってきた。

「ただし、あなたが除晃の面倒を全て見ると言うのなら特別に許してあげるわ」

「本当か……？」

「ええ。ただし、これからより一層働いてもらうわよ？」

「ああ、それくらいおやすいご用だ」

「そう？　なら特別に許しましょう」

華琳はそう言う。と俺に微笑んできた。それはまるでコレは貸しだぞ、と言わんばかりの笑みだったがそんなコトおやすいご用だ。

すると華琳は今度は俺ではなく徐行に言ってきた。

「除晃、アナタの真名を教えてください。構わないかしら」

「も、もちろんです。私の真名は、雪ゆきと言います」

「そう。雪、アナタはしばらく桜牙の部屋で暮らさない。しばらくしたら、アナタの部屋を用意しましょう」

「は、はい。ありがとうございます……」

こうして除晃もとい雪は正式にここにもいいことになった。

ちなみに雪はかなりすばしっこくて、視力もよくてなかなか気配を察知する能力が高いので偵察隊に加えたいんだが、すげー恥ずかしいがり屋だからとりあえず鍛えてからにしようと思う。

うむ、めでたしめでたし。

「桜牙、事務作業は明日までに終わらせなさいよ？」

しかしどうやら俺はめでたくないようだった……。

第八話 『業炎の剣帝、人助けをやるのこと』 (後書き)

感想、アンケート解答待ってます！

第玖話 『業炎の剣帝、視察に向かうのこと』

side 雪

私が桜牙さんに助けてもらってから数日が経ちました。その間に私は桜牙さんの仕事をしている様子を見てきましたが、とても大変そうです。

朝から晩まで机に向かって事務仕事をしています。たまに外に出るときは街の警備をしないといけないなど、桜牙さんは仕事を頑張っています。

私はそんな桜牙さんのお手伝いが出来ないかと事務仕事の内容を見ましたが、全然分かりませんでした……。

桜牙さんや華琳さまがやっている仕事は私には出来そうにないので、せめて私に出来ることをやろうとお茶を淹れたりしています。

あとはお部屋のお掃除をしたり、桜牙さんがお寝坊したときなどに起こしたりしています。

特に最近は夜遅くまで事務仕事をやっていたり、何日も寝ないで事務仕事をしたりして寝過ごすことが多いみたいなので私も起こすことが多くなりました。

それに今日も桜牙さんは夜遅くまで事務仕事をして、全部終わったのが明け方だったと思います。

本当なら寝かせてあげたいのですが、今日は午後から華琳さま

や春蘭さん達と視察に行くそうなのでもう起こさないといけません。
ちなみに華琳さまや春蘭さん達に私は真名で呼んでいいと言われ
ました。

「桜牙さん、起きてください！ もう時間ですよ！」

私はそう言いながら毛布にくるまっっている桜牙さんを揺するん
ですが、全然起きる気配がありません。

むう、今日の桜牙さんは一段とお寝坊さんみたいです。

「桜牙さん、起きてくだ…ひゃあ!？」

私が起こそうとすると桜牙さんが寝ぼけて抱きついてきました。

は、恥ずかしいよう……。それに力が強いし抜け出せないよう…
…。

「お、桜牙さん。起きてください／＼／＼／＼」

「……zzz」

だ、だめです……。全然起きそうにもありません……。

誰か助けてくださいよう……。

そんな私の願いが叶ったのか、いきなり扉が吹き飛んでいきまし
た。

「龍崎桜牙！！ 貴様、雪に何をしているのだ！！」

そこに立っていたのは大剣を構えている春蘭さんでした。

side 桜牙

ドガーン！！ といきなり扉がぶっ飛ばされた音で俺は目を覚ました。

つたく、誰だ。いきなり扉をぶっ飛ばした奴は……。昨日でようやく華琳に頼まれてた事務仕事が終わってゆっくり寝れると思ったのによぉ。

秋蘭や季衣にはノツクのコトを教えたから、あの二人じゃないとして華琳と言う考えも尚更有り得ない。

つーことはこんなコトをやる奴なんざ、あとは一人しかいないわけだ。それに最初から考えれば思い当たる奴は一人しかいない。

「龍崎桜牙！！ 貴様、雪に何をしているのだ！！」

そうこんなバカでかい声で叫んできて大剣を振り回す奴なんか俺は一人しか知らない。

「春蘭。お前、いきなり人の部屋の扉をぶっ飛ばしやがって、どういうつもりだ？」

「どういうつもりも何もない！！ 貴様は雪に抱きついて何をしている」と訊いているのだ！！」

はあ？ 雪に抱きついて何をしているって言われても抱きついてもないし、何もしてないつつうの。

そう思いながら何かを持っていると感じて視線を下に向けると顔を真っ赤にした雪がいた。

なるほどなるほど。どうやら俺は寝ぼけて雪に抱きついちまってたみたいだな。そんでそこにちょうど春蘭が来てしまったから勘違いされたわけだ。

まあ、密室の部屋で男が女の子に抱きついてるって状況を考えれば春蘭じゃなくてもそう思うよな。

「すまん、雪。俺が悪かった」

「い、いえ、大丈夫です。……………それに嫌じゃなかったし……」

「何か言ったか？」

「い、いえ。何でもありません／＼／＼／＼」

何故か雪は顔を真っ赤にしながら胸の前で残像が残るくらい素早く手を振っていたが、なんにも言っていないなら言っていないんだろうな。

にしても春蘭はなんで雪がこんなコトになつてると分かったんだ。雪が大声を上げたんなら俺が起きるはずだからな。なんか用事があったって入ってきてあんなコトになつてたから助けたんだな。

だけど何の用事があったんだ？ 今日には確かなんにも無かったと

思っ……………あ。そう言えば今日、華琳たちと視察に行くとか言ってたな。つまりは俺を連れて行くために入ったところだったわけだ。

「貴様、わたしを無視するな!!」

「うおっ!? そう言って剣を振り下ろしてくるんじゃないっ!!」

俺は春蘭が振り下ろしてきた大剣を真剣白羽取りの要領で受け止める。魔法陣を書いている手袋もしてないから武器出せないから仕方がないんだよね。

「春蘭、危ないから!? 怪我しちゃうから!? つーか何しに来た!？」

ホントは分かっているんだけど自分の目的を思い出させないと、この人ずつと剣振り回してきそうだからな。

「そうであった。こんなコトをしている場合ではなかったのだ。華琳さまが来る前に集まるぞ。もう皆が集まっているからな」

「ああ、分かった。すぐに準備するから待っていてくれ」

とりあえず剣は引いてくれたみたいだな。ふう、春蘭が単純な奴で助かったぜえ……………。

「早く済ませろよ? 華琳さまが来る前に集まっておくのだ」

まあ、華琳を待たせるわけにもいかないからこうして迎えに来てくれたのか。

と言うことで俺は今着ている寝間着を脱いで、この世界に来るときに着ていた黒い服を着ようとしたんだが……、

「き、貴様！ 何故いきなり脱ぎ出すのだ!？」

「桜牙さん、いきなり脱がないでください……」

何故か春蘭と雪に叫ばれてしまった。

なんで着替えてダメなんだ？ とりあえずよく分からないがすぐに着替えを終わらせることにしよう。

「そう言えば華琳はどうしたんだ？ もう日も高いから飯も終えたくらいの時間なんじゃないか？」

俺は袖に手を通しながら部屋の外にでている春蘭に訊ねる。

「まあ、そうなのだが、髪のとまりが悪いとかでな。今、秋蘭に整えさせている」

「ふーん」

あのツインテールのクルクルが整ってないのか。にしても女の子がメイクとかに時間を掛けるのは過去も未来も現在も、異世界も同じってコトか。

まあ、州牧にもなった奴がだらしない格好でうるついてたら示しが見つからないからな。そこは仕方ないって言えば仕方がないな。

「まっ、逆に華琳が寝癖ぼさぼさの頭で出てこられた方がビックリするってもんだろ」

俺は着替えを終えた後に春蘭と雪のところに行き、ふざけながら言う。

「華琳さまがそんなコトをするものか!」

するとやはりと言うべきか春蘭は俺の耳元で叫んできた。

「まったく、春蘭の声はただでさえデカいんだからそんな耳元で叫ばれたら破裂しちまうっつうの。」

そこんところをもっ少し考えてもらいたいもんだ。

「分かってるから叫ぶな。雪がビビってんだろ?」

それに春蘭の大声を聞いた雪はビビって俺にしがみついてきてる。

「一緒に部屋で生活してて気づいたんだが雪はかなりの怖がりで、夜も寝るまで灯りが消せないみたいだった。」

だから俺が寝るのは雪が寝静まってからになってる。

「うっ………済まぬな、雪」

「だ、大丈夫です…春蘭さん」

そうは言ってるが俺から離れてくれそうにはなかった。

このままだと華琳が来ちまいそうだし、雪を引っ付かせたまま行

くしかないみたいだな。

「行くか、春蘭、雪。華琳が来ちまうかもしれない」

「お、おう。そうだな。華琳さまを待たせるわけにもいかないな」

俺たちはそう言いながら待ち合わせの場所に向かった。

待ち合わせにした場所は街に出るときに使う門の前だったのだが、俺たちがそこに向かった時にはまだ桂花しか来ていなかった。

どうやらあのクルクルを整えに時間が掛かってるみたいだな。

「遅いわよ。春蘭、雪、龍崎」

「ああ、悪いな。華琳はもう来たのか？」

俺が訊ねると桂花が首を振ったのでホントに髪を整えるのに時間が掛かってるみたいだ。

「にしても昇進するのは大変なんじゃないのか？ 華琳はすぐに州牧になったみたいだけど」

「華琳さまにはすでに陳留刺史としての十分な実績があるだろう。州牧など低いくらいの評価だ」

「へー、そうなんだ」

「当たり前だ。本来の州牧が逃亡した非常時でもあるしな。中央にも、わざわざ人を選別して派遣するより、有能な華琳さまに任せ

ようと思つた見る目のある奴がいたのだらう」

「それに、中央にも知り合いは何人かいたしね」

中央の知り合いって、それって華琳ベースの話ってワケじゃないよな。そう言えば桂花は元々は袁紹のところの軍師だったって話だな。

「つーことは桂花は袁紹のところで中央の知り合いがあつたってコトだよな。」

「袁紹のところで中央の繋がりがあつたのか？」

「まあ、そんなところね。扱いはスゴく悪かつたけどね」

「それってさ、華琳が知ったら怒られるんじゃないか？」

華琳にそう言つことやってるのバレたらすげー怒られそうなんだけどな。

「別に起こらないわよ」

そんなコトを思っていると不意に後ろから華琳の声が聞こえてきた。振り向くといつも通りの華琳と秋蘭がいた。

「なりふりを構っていられるほど、今の私たちに力も余裕もないでしょう。使えるものなら天の国の知識でも、部下繋がりで遠慮なく使わせてもらつわ」

見た目もいつも通りなのだが、それにクルクルの調子もいつも通

りのようだ。

にしてもあのクルクルってどうやってセットしてるんだ。すげー
気になる……。

「何？」

そんなコトを思いながら無意識に華琳を見つめていたのか、華琳
は不思議そうな顔で俺に言ってきた。

いや、どちらかと言えば不機嫌目に見えるな。

「春蘭から聞いたんだけど、髪の毛とまりが悪いって……」

「雨でも降るのかしらね。いつもと違うようにしかまとまらなか
ったのよ。……どう？ アナタから見て変じゃないかしら？」

変じゃないかしらって訊かれても、いつもと違いが分からないん
だがドコに納得がいつてねえんだよ。

「大丈夫だ」

俺がそう言うと雪が俺の服の袖を引っ張ってきた。

何事かと思いつながら俺は雪の話の話を聞くために、しゃがみ込む。

（桜牙さん、華琳さまのクルクルいつも通りに見えるんですけど、
私がおかしいのかな……）

（大丈夫。俺もいつもと同じように見える。雪はおかしくなんか

ない)

(そうですか。よかったです……)

雪はそう言って安堵したように息を吐く。

多分あの華琳のクルクルの違いが分かる奴なんて言うのは、春蘭や秋蘭くらいのもんだな。もしかすれば桂花あたりも分かるかもしれないが、少なくとも俺には分からないな。

まあ、華琳のクルクルはどうでもいいが華琳が州牧になったおかげで季衣との約束も守れたわけだし言うことなしだな。

「そう言えば季衣はドコ行ったんだ？」

「今朝、山賊のアジトが分かったと言う報告が入ってな。討伐は私が姉者、もしくは龍崎を叩き起こして出るから街を見てこいと言ったのだが、聞かなくてな」

「そ、そうなのか……」

俺を叩き起こして出撃させるって俺をどんだけ働かせようとしてるんだよ。

昨日は事務仕事が終わってぐっすり寝てたから仮に叩き起こされてたら山賊だけじゃなくて、他にも被害が拡大してたかもしれないなあ。

季衣のコトだから自分と同じような目に遭ってる人を放っておけなかったみたいだな。

「頑張ってる季衣にお土産くらい買ってやらないとな」

「なんだ考えることは同じか」

「どうやら春蘭も頑張ってる季衣にお土産を買おうとしてたみたいだな。」

「あんたたち、観光に行くワケじゃないのよ？」

「分かってます。視察もやりますし、その上で季衣さんにお土産を買います。ね、桜牙さん？」

「なにやらヤケに誇らしげに桂花に言う雪なんだが、お前。恥ずかしがり屋じゃなかったのか？」

「つか自分と同じ年くらいの桂花だから言えるみたいだな。そう言えば雪と季衣がいるところを最近をよく見るな。」

「そうだな。仕事をちゃんとやるならいいだろ？」

「ええ。それなら構わないわ。さて、揃ったのなら出掛けるわよ。桂花、留守番よろしくお願いね」

「華琳がそう言うつと桂花は露骨に不満そうな表情をしながら、俺を指さしながら言うてきた。」

「華琳さまあ……。なんで龍崎こりは連れて行くのに私はお留守番なんですかあ……………」

桂花め、人を物扱いしてんじゃねえよ。

「残念だったな。お前より俺の方が頼りにされてんじゃねえのか？」

「な、なによ！ 少しくらい活躍したからって、偉そうにしないでよ！」

「ホントのコトなんだから仕方ないだろ。悔しかったら、俺を驚かせるような策の一つでも立ててみるってんだ」

「言ったわね！ だったら次の戦いときあんたを驚かせてやるんだから！」

お前のその言葉は負け犬の遠吠えにしか聞こえねえよ。

まあ、華琳のコトだから非常事態のときのために桂花を残しておくんだらうな。

あとは雪に街を案内させるって言う目的もあるんだらうよ。そんなコトを思いながら俺たちは街に出るのであった。

街に出ると旅芸人がいた。秋蘭が珍しいとか言っていたが、旅芸人自体が珍しいのではなく南方から女の子三人で来たのが珍しいらしい。

商人のように安全な街道が確保されているワケじゃないから、ここに来れたと言うことはそれだけ俺達の働きが認められてたってコトか。

「桜牙さん。歌、キレイですね」

「ああ、そうだな。俺がいた国にも歌はあつたけどな」

「ホントですか？　じゃあ今度私に教えてください」

「ああ、構わない」

「ただ俺がいた世界の歌とは少し違ってるみたいだし、教えても歌えるか分かんないけどな。」

「そんなコトを思っていると華琳たちの視線がこっちに集まってるのが見えた。」

「桜牙、雪。私たちは旅芸人の演奏を聴きに來たわけではないのよ?。」

「あ、ああ。そうだな」

「そう言えば俺たちは季衣の土産を買いに……じゃなくて視察に來てたんだつたな。」

「狭い街ではないし、時間もあまりないわ。手分けして見ていきましょうか」

「では、わたしは華琳さまと……」

「春蘭と一緒に行きましようとも言おうと思っただらうな。」

「だがそんな春蘭の言葉を遮り、華琳が俺に言ってきた。」

「桜牙は私に付いてきなさい」

「はい？」

「えー……」

華琳が俺に自分についてくるように言うと春蘭はものすごく残念そうな声を上げていた。

と言うか何故に俺なんだよ。この場合だったら春蘭か秋蘭でも別に構わないだろうに。

「諦める姉者。私達三人の中で一番強いのは龍崎だ。それに、今日は雪もいるのだ」

「うう……。そういうことか……。龍崎」

春蘭は俺に恨めしそうな表情をしながらこっちを向いた。

「つかよほど華琳のコトが好きなんだな。視察ごときでコレだけ悔しがるとはね。」

「どうすれば貴様のように強くなれるのだ……」

「春蘭は十分強いだろ」

俺がそう言ったが春蘭は納得してないようぶつぶつ独り言を呟いていた。

この際無視しておこう。めんどくさいし。

「華琳さま。私は街の右手側、姉者には左側を回らせませす。それでよろしいですか？」

「問題ないわ。では、突き当たりの門の所で落ち合いましょう」

華琳のその言葉で俺たちは春蘭や秋蘭と別れて回るようになった。

俺と雪と華琳が担当する街の中央部は真ん中を通る大通りに、そこに並ぶ市場がメインになりワケなんだが、何故か俺たちは大通りを回らずに小さな店や住宅が並ぶ裏通りに入ってきていた。

大通りの情報はあとから黙っても集まるが、こういうところは直接回らなければ分からないようだ。

「にしても雪の奴、生き生きしてるな」

「ええ、そうね。スゴく楽しそうだわ」

「まあ、あいつがここに来たときは追われてて見れなかったし、そんなに街に出ることもなかったから楽しいんだろっな」

俺と華琳は楽しそうにいろんな店に入っていく雪の後ろ姿を見ながら会話をする。

いろんな店とは言うがここには料理屋が多いため、すぐに出ては他の店に入っっていつてる。

その後も視察をして回っていると雪がある店に見入ってる姿があ

った。

そこには露天商らしき少女がいてその周りには竹かごがズラリと並べられている。んで雪が見入ってるのはその脇にある謎の木製の物体だった。

箱状のフレームの中に木や金属で作られた歯車がゴチャゴチャとぶち込まれていた。

この時代にしてはなんと近代的な機械みたいだな。

「桜牙さん、華琳さま！ コレすごいですよ！」

雪は目をキラキラとさせながら俺と華琳に言ってくる。

あまりの元気さに俺たちは若干苦笑いをしながら近づいていく。

「コレってなんだ？」

「これはウチが開発した全自動かご編み装置や」

「全自動…かご編み装置？」

少女が発した言葉に華琳は頭の上に？をプカプカと浮かべるといふ愉快的状況になりながら呟いている。

「せや！ この絡繰の底にこう、竹を細う切った材料をぐるーっと一周突っ込んでやな……」

少女は絡繰の使い方を実演しながら説明してくる。

にしてもあんな材料で無理な作り方して壊れないのかねえ。

「嬢ちゃん、やってみるか？」

すると少女はキラキラとした目で見ている雪に言ってきた。

「いいの？」

「かまへんかまへん。じゃあこつたの取っ手持ってや」

少女に言われたとおりに雪は取っ手を機会のハンドルを持って回してみる。

するとセットされた竹の薄板が機械に吸い込まれていき、しばらくすると装置の上から編み上げられた竹のカゴの側面がゆっくりとせり出してきた。

「ほら、こつちやって竹カゴのまわりが簡単に編めるんよ」

「桜牙さん、華琳さま！ コレすごいです！」

確かにこの時代にすればスゴいかもしれないが、思いつきり手動だぞ？

「底と枠の部分はどつするの？」

「あ、そこは手動です」

「そつ。まあ、便利と言えば便利ね」

「全然全自動じゃないけどな」

俺は華琳の言葉に思わず心の中で思った感想を口にしてしまった。

「う、兄さん。ツッコミ敵しいなあ……。そこは雰囲気重視っちゃうことでひとつ」

まあ、雰囲気重視とは言うがこれだけでカゴが編めるってんだからこの時代にすれば画期的だよな。

そして雪はずっと機械のハンドルを回し続けてるんだが……。何やら怪しい音が……。

「あ、ちょ！嬢ちゃん、危ないっ！」

少女が叫んだと同時に俺は雪の首根っこを掴んで後ろに引く。

するとそれとほぼ同時に機械は爆発した。あとは各部分が周りに吹き飛んだようだが、幸いなことに被害はその機械だけで済んだようだった。

「雪、大丈夫か？」

「あわわわわ……。がくっ」

あー、あー。いきなり目の前で爆発が起こって気絶しちまったみたいだな。

「やっぱダメやったか。やっぱ普通に作ると竹のしなりに強度が

追いつかんねやな」

話を聞く限りこの機械はまだ試作品段階の品でまだまだ問題点が多いらしい。

それで爆発してしまつらしいが、そんな危ないもんを置かないでもらいたい……。

「置いとつたら目立つかなと思てんけど、ダメやつたな」

「ならここに並んでいるカゴはこの装置で作つたものではないの？」

華琳はさつきまで原型を留めていた機械があつた場所をチラツと見ながら少女に言った。

「ああ、村のみんなの手作りや」

少女はそう言つと今度は何故か俺の方を向いてきた。何やら怪しい笑みを浮かべながら……。

「なあ兄さん。せつかくの絡繰を壊したんやから、一個くらい買って行つてえな」

壊したのは俺じゃないんだけどな。それにあんな危ない物を使わせといて買えつていうのはあんまりじゃないか。

「まあ、一つくらいなら。買ってあげなさい、桜牙」

「買うんだ……」

まあ、この中に雪を入れて運べば一応邪魔にはならないしいいか。と云うことで俺は一つだけ購入した。その後も視察をして回り時間はあると云う間に過ぎていった。

集合場所は突き当たりの門の所。俺たちが行ったときはまだ誰も来てはいなかつたがそれほど待つことなく全員が集まった。

だが何故か全員が竹カゴを装備していた。春蘭に至っては何やら服を買い込んでるけどあれってやっぱり華琳の為なんだよなあ……。

秋蘭は、部屋のカゴの底が抜けているのを気づいたかららしい。まあ、なんとも几帳面な性格なこと……。

とりあえず視察も終えたし、帰ろうかなと話をしているところに不意に後ろより話が掛けられた。

「そこの若いの……」

その声には俺は後ろを振り向くとそこにはローブを着て顔は見えないが、かなり年寄りと言った感じの奴がいた。

しかも何とも言えない雰囲気だし、いったい何者なんだ。

「強い相が見えるの……。希にすら見たことのない、強い強い相じゃ」

「いったい何が見えるの？ 言うてごらんさい」

謎の占い師のいきなりの言葉に華琳以外の二人が口をふさぎ、俺もそれを見守っている。

「力のある相じゃ。兵を従え、知を尊び……。お主が持つは、この国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事の出来る強い相……。この国にとって、稀代の名臣となる相じゃ」

占い師はだがと一旦言葉を切ると、静かになるのを見計らったように再び口を開く。

「お主の力、今の弱った国の器には収まりきらぬ。その野心、留まるを知らず……。あふれた野心は国を犯し、野を侵し……。いずれ、この国の歴史に名を残すほどの、類い稀なる奸雄となるであろう」

その言葉を聞いた瞬間。普段はほとんど表情を崩さない秋蘭の顔に俺でも分かるほどの怒りの感情が見て取れた。

「貴様！！ 華琳さまを愚弄する気か！！」

「落ち着け、秋蘭」

「し、しかし、龍崎」

「いいから。いつものお前らしくないぞ」

秋蘭がいきなり怒鳴ったことにより眠っていた雪が起きる。

俺的には春蘭が暴れ出すかと思ったが、いつもの姉妹とは反対に春蘭は落ち着いていた。と言っかなにが何だか分からない顔をしている。

「そう。乱世においては、好雄になると……?」

華琳はまるでその占い師の言葉を楽しむかのように、顔には笑みがこぼれている。

「左様。それも今までの歴史にないまでのな」

「……ふふ、面白い。気に入ったわ。……秋蘭、この者に謝礼を」

華琳はわずかに笑うと秋蘭にそう言った。

「は……?」

最初に華琳に言われたことが理解できなかったのだろう。

秋蘭にしては珍しい間抜けな声を出していた。

だが華琳はそんな秋蘭の様子にもお構いなしで言う。

「聞こえなかった? 礼を」

「し、しかし華琳さま……」

「……桜牙」

「へいへい」

俺は華琳に言われたとおりに占い師が置いていた茶碗の中に入れてる。

秋蘭は占い師に華琳が悪く言われたコトが気に入らないらしく、占い師をずっと睨み続けている。

そんな秋蘭の様子に怖じ気づいたのか雪は竹カゴから出てきて俺にしがみついている。

「乱世の奸雄大いに結構。その程度の覚悟もないようでは、この乱れた世に覇を唱えることなど出来はしない。そういうことでしょっ？」

さすが曹猛徳と言ったところだろうな。見た目はアレでも考えることは寛大だ。

ふおっ！？　なんか背中に物凄い殺気が送られてきてるんですけど……。ヤバイよ、振り向いたら殺られるよ、文字通り……。

「それから、お主……」

すると占い師は俺に話しかけてきた。

「この物語は永久に終わらないはずじゃった」

「……どういう意味だ」

なかなか興味深い話が聞けそうだな。そう思った俺は占い師の目を見据える。

「今までお主の役に選ばれた者は全てが最期には消え去り、そこで物語は再び巻き戻される」

物語の最期には消え去り再び巻き戻される……。それはどういう意味だ……。

その前に今の俺の役に選ばれた者とはどういう意味だ。ここが外史の平行世界パラレルワールドと言うのは分かる。

おそらくは他の平行世界パラレルワールドで『天の御遣い』に選ばれた者のコトを言ってるのかもしれない。

「しかし予定外イレギュラーとして紛れ込んだお主の力があれば、この物語は終幕を迎えられるかもしれない」

「で？」

「自らの力を過信し道を踏み外せば、その道の行き先は……」

言われなくても分かる。俺が道を踏み外せば、その瞬間に俺は『この役』になつて消えた奴と同じように消え去るのだろつ。

はっ、上等だ。やってやろうじゃねえか。

「助言ありがとよ。俺に不可能は、ねえ」

俺はそう言いその場を後にした。

終わらない物語か。と言うことは俺が来る前にも何回も同じコトが繰り返されてきたんだろつ。

そして華琳たちは終わることのないシナリオを延々と繰り返させ

られてきた。

だったら、俺が使い回してきたシナリオを終わりにして新たな物語がを始めさせてやる。

そう心に誓うのであった。

余談にはなるが、やはり春蘭は好雄の意味が分かってなかったらしく、帰りにあの占い師を斬るために帰ろうとしたのを俺が止めようとしたのは言うまでもないだろう……。

第玖話 『業炎の剣帝、視察に向かうのこと』 (後書き)

感想待ってます！

第拾話 『業炎の剣帝、出撃すること』

side 桜牙

華琳が州牧になって以来、政治をしつかりと行っているため華林の政策が行き届く範囲の民衆からは特に大きな不満の声は聞こえてこなくなつた。

まあ、元の州牧が悪徳なコトをやつてきていたから不満の声が多かつただけで、しつかりとすればこれが普通だと思ふかもしれないが、そのしつかりとすればが大変なんだよな。

それをあつさりとやつてのける華琳はさすがだと思つ。

だがそれでも元から居る盗賊がいきなりいなくなるということではないらしく、華林から盗賊が暴れているからそいつらを討伐をしてこいと言われてしまい出かけていた。

まあ、いきなり君主が変わつたから盗賊団はいなくなりましたは有り得ないよなあ……。

そんなコトを思いながらも少しづつ平和になればと思ひ今回もめんどくさがらずに盗賊の討伐に来ているんだがな。

だがまあ、当たり前前つて言えば当たり前なんだがそう簡単にはいかないみたいだ。

しかし、最近何やら賊の数が増えてきているような気がするんだ

が気のせいかな？

そんな疑問は今回の賊の討伐に来ていて思ったことだ。

しかもそいつらの服装の一部には何かしら必ず黄色の布がついている。俺がみた限りは全員が全員つけていた。

実力的には大したことは無いんだが、ここまでウジャウジャいるとウザったくなくなってくるんだよね。しかも殺していいなら、躊躇なく刃を振るうコトが出るんだが生憎とあいつらはただの町民。さすがに殺すわけにはいかないんだよね。

ったく、俺たちは雑魚を潰す訓練をしに来てるワケじゃねえんだけどな。だいたい何なんだよあの動き……。隊列も連携も全然成ってねえ。三割ぐらいはお互いにお互いを潰してるようなもんだぞ。

そんなコトを思いながらため息をついた後に『流鎖刃月』を創る。

「ぶっ飛べえーっ！！」

そして相変わらずの自重しない男の二つ名の通りに俺に切りかかってくる奴らに対して、問答無用で一閃を振るう。

俺が流鎖刃月を振るうと当たった奴らは思いっきりぶっ飛んでいく。まあ、一応峰打ちでやったから死にはしないだろうが、少しぐらいは怪我するだろうな。

「ハアーハッハッハアーツ！！ この俺様に喧嘩を挑もうなんざア、二百年早えんだよ！！ 一昨日来やがれ！！」

ろっな。そんな口トを思いながら振り向くと味方が何故か俺を見て怯えてるように見えた。

うむむ、まさか俺のさっきの脅しでこっちまでビビっちゃったわけ？ ビビるのは構わないが戦いに支障が出ると俺が怒られるんだよなあ……。

ため息をつきながら撤退するための準備のために一応連れてきた雪のところに向かう。だが雪も同じようにビビっている様子だった。

「雪、お前を取って食うワケじゃないからそこまでビビらなくてもいいと思うんだが？」

「そ、そうですね、アレだったら桂花さんや季衣さんが見ても怖がると思いますよ……」

雪は苦笑いを浮かべながら俺に言ってくる。だけどその中には華琳や春蘭や秋蘭が入ってないところを見ると、やっぱり見てきた戦の数は少なくともあの三人の強さが分かるんだろうな。

にしても最近は雪の奴戦によく出るようになったが、戦えないのにいったい何で出たがるんだろうかねえ。まあ、そのうち鍛えてやるうとは思ってたんだが思いの外、雪は戦いに向いてないんだよね……。

「とりあえず引き上げるか。撃退は終わったからな」

「そうですね。私、疲れましたし」

「いや、雪なんもやってないだろ？」

俺が言ったが、雪はそれをスルーして帰ろうとして春蘭達と合流していた。どうやら春蘭や季衣、秋蘭も戦い終わったみたいだな。

「よし、撤退するぞー」

「……………は、はい!!」「……………」

……微妙に統率が楽になったようだがビビられてることもあるし、なんだか微妙な心境だ……。

そんなコトを思いながら俺たちは城に戻っていくのであった。

城に戻り1日休憩して次の日の朝に春蘭や秋蘭、季衣、桂花、雪、その他の奴らが玉座に召集されて群議が始まった。議題にあがるのはやはり黄色の布をつけた奴らの存在だった。

どうやら春蘭や秋蘭が戦った奴らも同じように黄色の布をつけているようだった。さらに最近の暴徒たちも黄色の布をつけていることから、どうやら同じ統率者がいる可能性が高いコトを意味している。

さらに言えば黄色の布の集団は陳留だけに留まらず各地で同じように暴れているらしい。

「一団の首魁の名前は張角と言っらしいのですが、正体は全くの不明だそうです」

「正体不明？」

桂花の言葉に華琳が眉をしかめながら聞き返す。

「捕らえた賊を尋問しても誰一人として話さなかったか」

なるほど……。それを聞く限りでは張角はかなりの信頼があるみたいだな。もしくは張角がいればどうとでもなると言う表れか……。どっちにしても言えることは……。張角も女の子だろうな……。

今までの主要メンバーがほとんど女の子だったってことから張角も女の子だろうコトが分かる。多分このぶんだと蜀も呉も女の子揃いなんだろうな……。

はあ……。分かったつもりではいたが改めて考えてみるとなんつか戦いにくいよなあ……。

「なあ、華琳」

「なに？ 何か分かったことでもあるの？」

「いや、分かったことってワケじゃないんだがこの黄色の布をつけた集団に名前つてあるのか？」

「いいえ、特にないわ」

「なら黄巾党って呼ばないか？ 俺がいた世界の呼び方なんだが、名前があつた方がいいだろ？」

「それもそうね。なら黄巾党と呼ぶことにしましょう。それで他に新しい情報はないの？」

華琳の言葉に誰も言葉を発さないところを見るとこれ以上は何の情報もないのだろうな。それに俺の知識を華琳に言うのはダメだ。

それでは華琳自身がやるのではなく俺が俺の知っている外史に華琳を強制的に行かせることになっちまうからな。とりあえずなんとなく気の抜けた空気が漂ったとき、いきなりドアが開け放たれた。

普段ならば入ってきた兵士は斬首とかにもなったのかもしれないが、入ってきた兵士の慌てようからただ事ではないことを一瞬で感じ取った俺たちはすぐさま気を引き締める。

「会議中失礼いたします！ 南西の村で新たな暴徒が発生したと報告がありました！ まだ黄色の布の連中です！」

兵士の言葉に華琳はため息をつきつつも、気を引き締めた表情で口を開く。

「さて、情報源がさっそく現れてくれたわけだけれど、今度は誰が行ってくれるのかしら？」

「はい、ボクが行きます！」

華琳の言葉に季衣がいち早く手を挙げる。だがそんな季衣に対していつもならば即断即決の華琳のだが珍しく言葉を続けないでいる。

「季衣、お前は最近働きすぎだぞ。ここしばらく休んでおらんだろ？」

そう。春蘭の言つとおりここ最近の出撃では必ずと言っていいほど季衣は出撃をしているためにほとんど休んでいない。

おそらくは自分と同じような目に遭っている人たちを救えるようになったのだからその人たちのためになりたいと言つ気持ちで季衣を動かさせるんだろうな。

「華琳、俺が出る。季衣は休んでくれ」

「何でだよ兄ちゃん！ ボク全然疲れてないよ！」

季衣は俺を睨みつけるかのように見上げながら叫んでくる。だがそんな季衣の表情には明らかに疲労が溜まっていると思わせるような表情になっている。

「そうね。今回の出撃、季衣は外しましょう。確かに最近の季衣の出撃回数は多すぎるわ」

「華琳さま！」

「季衣。あなたのその心はとても貴いものだけれど、無茶を頼んで身体を壊しては元も子もないわよ」

「無茶なんかじゃ……ないです」

季衣は自分でも少し無謀だと言つことを本当は分かっているのだろう。わずかに口ごもつたのが何よりの証拠だ。

華琳は無茶だと季衣の言葉を切り捨てるがやはり季衣は自分と同じように困ってる人を助けたいと言つ気持ちが大きいんだろう。ま

だ華琳の考えを変えさせようと粘っている。

「一つの無茶で季衣の目の前にいる百の民は救えるかもしれないけれどそれは、その先の救えるはずの何万と言う民を見殺しにする事に繋がることもある」

「だったら……その百の民は見殺しにするんですか！」

「するわけ無いでしょう!!!」

季衣の言葉に対する華琳の怒声は季衣だけでなく百戦錬磨の春蘭や秋蘭すら身を縮ませるほどのものであった。さらに雪に至っては気絶するほどの迫力だった。

それほどに今の華琳の言葉は力強かった。

「季衣、お前が休んでる間は俺が百の民を救う。俺の剣が届く範囲では、誰も死なせない。だから、季衣は休んでくれ」

俺は季衣の頭を撫でながらなるべく優しく子供をなだめるように言う。しかし季衣は納得してないように唸る。

はぁ……。やれやれ、随分と強情な娘さんだな。

「季衣。俺は今日の百人も助けるし、明日の万人も助ける。だがもし助けが必要になったとき、助けなくなったら意味ないだろ？」

「そ、そうだけど……」

「いざとなったら無理にでも動いてもらうさ。だけど今はまだそ

の時じゃない」

俺がそう言うが季衣は下を向いたままにも答えようとはしない。

季衣の気持ち分からないわけじゃないが、それでも今の季衣を戦わせるわけには行かない。そう判断した俺は季衣を撫でるのを止めると華琳に目で合図を送る。

「桂花、編成を決めなさい」

「御意。では秋蘭、龍崎。あなた達が行ってちょうだい」

俺と秋蘭か。まあ、華琳の側には戦いに本領を発揮する春蘭に季衣、策略にて本領を発揮する桂花がいるんだから問題はないだろうな。

それにこっちは戦いに関しても情報収集にも長けている秋蘭がいる。俺はいざと言うときの保険みたいなものだな。

「決まりね。秋蘭、桜牙。くれぐれも情報収集は入念にきなさい」

「は。ではすぐに兵を集め出立致します」

「だな。行くか」

華琳の言葉に俺と秋蘭が返答をするときまで俯いていた季衣が顔を上げて呼んできた。

「ボクに分までよろしくお願いします！」

「うむ。お主の想い、しかと受け取った。任せておけ」

「季衣は俺たちの分まで休んでおけよ？」

俺は意地悪い笑みを浮かべながら季衣に言う。それに対して秋蘭が何かを言いたそうにしていたが、この際スルーさせてもらう。

そして俺と秋蘭は兵を集めるために玉座の間を後にした。とりあえず準備するのは武器を出す魔法陣だけを何とかすれば大丈夫だ。

いくらか時間が経過して全ての準備が整った俺たちは華琳の城から黄巾党が現れたと言う情報があった場所に向けて馬を走らせた。

side 雪

私が華琳さまの怒声で気を失って起きたのは、すでに桜牙さんと秋蘭さんが出撃する事が決まった後のことでした。

春蘭さんから話を聞いた限りでは季衣さんをなんとか説得して、出撃させるのは何とか引き留めたみたいでした。

私も戦えることなら皆さんのお役に立ちたいので戦いたいですが、私は季衣さんや春蘭さんみたいに戦うことは出来ません。ですからせめて皆さんのお役に立てるようなことを自分で見つけないといけません！！

そんなコトを思っていると部屋の扉が開いて桜牙さんが入ってきました。

「雪、起きたのか」

「はい、ご迷惑をお掛けしました……」

「ん？ 別に構わないさ。あんな聞いたら普通は驚くからな」

驚くってことはやっぱり気絶まではしないってコトですか……。
やっぱり私は臆病なんでしょうか？ 最近は戦にも出てこの臆病な性格を治そうと思ってるんですけど、治ってないみたいです。

そんなコトを想っていると桜牙さんがまた不思議な模様を書いていました。まほうじん、と言つらしいのですがあれを書かないと武器が作れないらしいです。

あれが天の国の技なのでしょうね。なんだかスゴいように見えます。

「なあ、雪」

「は、はい」

「季衣がさ、もし落ち込んだりしたら話し相手になってやってくれないか？」

「え？ 季衣さんの話し相手にですか？」

桜牙さんの話によると今回の出撃が出来ないことと、さっきの話のことで落ち込んでるかもしれないから、気持ちを楽にしてあげてほしいとのコトでした。

年も同じくらいだから話し相手にはちょうど良いだろうとのコト

でしたが、私の方が年上ですよ。

「じゃあ、そろそろ出撃しなきゃな。さっきのこと頼んだぞ？」

「はい、分かりました」

桜牙さんは私が答えるのを確認した後に笑顔を見せて部屋を出ていきました。

うう……。いきなりのあの笑顔はいくら何でもヒドいです……。
とつても恥ずかしいじゃないですか……。じゃなくて桜牙さんが出撃するんだからお見送りに行かないと。

そう思った私は桜牙さんや秋蘭さん達のお見送りをするために急いで城壁の上に向かいました。するとそこには既に先客の季衣さんがいました。

やっぱり桜牙さんが言ってた通り落ち込んでるみたいです。私はそんな季衣さんの隣に行く。

「季衣さん、お隣よろしいですか？」

「あ、雪……。うん、いいよ」

そう言う季衣さんは元気がなくてなんだかおかしな気分です。

「季衣さんが落ち込むなんてらしくないですね」

「ボクだって落ち込むことくらいあるよう……」

ぼんやりと城壁に腰掛けて足をブラブラとさせている季衣さんには、やっぱりいつもの元気はドコにもなくて頭のお団子も心なしかしておれているように見えます。

……あのお団子って気分によって変わるのでしょうか？ じゃなくって、相当さっきのことで落ち込んでるみたいですね。

こんなときってどういう風に話しかければいいんだろ……。うう……。簡単に引き受けなきゃよかったよう……。

「ボク、全然疲れてなんか無いのに兄ちゃんや華琳さまは疲れてるって……」

「それは皆さんが季衣さんを心配してくれてるんですよ」

「分かってるけどさ……。ボクみたいに困ってる人を放っておけないんだよ。雪にもそう言うとき無い？」

私……。私も桜牙さん達に村を助けてもらったけどお父さんもお母さんも死んでしまった……。私に力があつたら助けられたのって思った……。

「私にもそう言うときはありますよ。ですけど、無茶をして季衣さんがもしも死んでしまったら、皆さん悲しみますし、そうなってほしくないから季衣さんを止めたんだと思いますよ」

「そりゃ、わかってるけど……」

「それに今は黄巾党の張角の正体を突き止めるための情報を集めるときです。季衣さんが働いてもらうのはその人たちの正体が分か

った後だと思えますよ?」

「うん……」

「だから今は休みましょう。なににも出来ない私と違って季衣さんは皆さんのお役に立っています。こんな騒動を起こした人をやつつけるための力を溜めておきましょう」

……何とか慰めることはできたんでしょうか……。こんなこと言っの初めてですからよく分かんないです……。それに自分で言ってて少しだけ悲しくなってます……。

桜牙さん。私、こんな感じの言い方で間違ってますでしたか?と聞いても桜牙さんは出撃するので答えてはくれませんが……。

「……分かった」

季衣さんは元気よく答えると城壁の上にひよいと飛び乗りました。危ないかとも思いましたが、季衣さんなら大丈夫だろうと思いいえて声は掛けません。

すると季衣さんは城壁の上で歌を歌い始めました。私も他の人のことは言えませんが、あんまり上手くないみたいです。それにドコかで聞いたことがあるような歌です。

それに門を出て行く兵士さんたちがこちらに手を振ってくれています。

あっ、桜牙さんも手を振ってくれています。

「良い歌ですね。なんと言う歌ですか？」

「えーっと、ちょっと前に街で歌ってた旅芸人さんの歌なんだけど……。確か、名前は張角……」

「へえ、張角さ……」

「「張角!？」」

街で歌ってた旅芸人さんの名前が張角で黄巾党の人も張角……。これってもしかして……!？

「季衣さん！ 華琳さまに報告しましょう！」

「うん！」

こうして私たちは急いで華琳さまのところに戻りました。

side 桜牙

俺たちが情報収集から帰ってきた夜に急遽、主要メンバーだけを集めての報告会が開かれていた。

話によれば季衣と雪が何気ない話をしているときに、歌を歌う旅芸人の一人の名前が張角だと言うことを思い出し華琳に報告したことから報告会が開かれたようだ。

さらに言えば今日に俺と秋蘭が行った村でも三人組の女の旅芸人が立ち寄ったと言う情報があった。さらには桂花が季衣たちから聞いたコトを元にその周辺にの村に調査を向かわせたところ大半の村

で同じように目撃例があったようだ。

つまりは季衣たちが言う旅芸人と俺たちが聞いた旅芸人はおそらくは同一人物……。

「その旅芸人の張角と言う娘が黄巾党の首魁と言うことで間違いないようね」

「張角の正体判明か……。にしてもまさか張角が旅芸人だなんてな」

「ええ、旅芸人だなんて予想してなかったわ。だけれど正体があっただけでも前進でしょう」

「だが正体があっても目的が分からねえな。歌を歌ってるだけって言うなら本人たちは悪気はなしにやってて、周りが勝手に暴走してるだけかもしれねえしな……」

ちよつと冗談のつもりで大陸が欲しいのー、とかほざきやがったりしてそれを真に受けた周りの熱狂的ファンがそのために動き出した……とかあったりして。

「だとしたら余計に夕チが悪いわ。大陸制覇の野望でも持つててくれていた方が遠慮なく叩き潰せるのだけれど」

「確かにそうだよな。………まあ、叩き潰すこと前提なのはこの際気にしないが」

「都から軍令が届いたのよ。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね」

「今さらか……」

いくらなんでもこんな大騒ぎになってから出すような命令じゃねえだろ。どんだけ曇った瞳で物事を見定めてやがんだ。

まあ、それだけ今の朝廷の力が弱いつてコトか。だがこれで大規模な戦力を動かせるようになったわけだ。今までの討伐は俺や季衣や秋蘭達の大きくても中規模の部隊だったからな。

「華琳さま！」

そんなコトを思っていると兵の準備をしている春蘭が入ってきた。

「華琳さま、また件の黄巾の連中が現れたと報告がありました。それも数は今までにない規模だそうです」

「……そう。一歩遅かったということか」

華琳は忌々しげにつぶやく。後手に回されたのが悔しいのだろう。華琳は後手に回ってしまった怒りを吐き出すかのようにため息をつつく。

「春蘭、兵の準備は終わっているの？」

「申し訳ありません。最後の物資搬入が明日の払暁になるそうです……」

どうやら兵士たちはすでに休息をとっているらしい。かなり間の悪いときに集まってくれたもんだな。

おそらく黄巾の連中はいくつかの暴徒が集まって出来たんだろう

な。しかも偶然でなく、計画的に。しかもその暴徒の中には指揮官がいると言つことになる。

仮にいたくともそれだけの集団があれば一人くらいはいるもんだ。おそらくはそいつが指揮をとって行動を起こしてるんだな。

どうするかを悩んでいると今まで黙っていた季衣が口を開いた。

「華琳さま、ボクが行きます！」

やはりと言つべきか、季衣が一番に名乗り出たな。俺は季衣の頭に手を乗せながら言う。

「休めと言つたる？」

「だけど兄ちゃん！」

季衣は俺の目を真っ直ぐと見据えてくる。その目には覚悟が見えていた。だからこそ俺は言う。

「だけど今が行くときだよな。今日救える百も救い、明日救える万を助けるためにな」

「兄ちゃん……」

俺がそう言うとき季衣の表情が明るくなるのをみた。いつもの元気にあふれた季衣の笑顔を見て俺もニツと笑いかけた後に華琳に向き直る。

すると華琳も分かったとばかりにふつと微笑むと春蘭に言った。

「春蘭、すぐに出せる部隊はある？」

「当直の隊と最終確認をさせている隊はまだ残っているはずですが……」

「季衣、それを率いて先発隊としてすぐに出発しなさい」

「はい！」

季衣は華琳の言葉に元気よく返事をする。今の季衣はもう戦うときの目をしている。

「指揮官には桜牙が入りなさい！」

「ああ」

そして次々と役割が決められていき、俺たちが出撃できる準備が整った。

雪だけはなにも言われてなかったからおそらくは待機しているっ
てだろうな。今の時点では雪は何もすることは出来ないからそれが
妥当だろうな。

だがそんなコトを思っていると雪が俺の服の袖を引っ張ってきた。

「桜牙さん、私も連れて行ってください」

「ダメだ。今回はっかりは危険だからついて行かせられない」

守りきれないと言うことはないが危険があることには違いない。そんな場所に自分の身すらも守れない雪を連れて行くわけにはいかない、と言うのが俺の考えだ。

すると季衣も俺に言ってきた。

「兄ちゃん、ボクからもお願いだよ」

二人は俺に瞳を向けながら頼み込んでくる。そんな二人を見た俺はため息をつきながら言う。

「はぁ……分かった。だけど俺から絶対離れるなよ？」

「はい!!」

そして俺たちは先発隊として出撃した。

第拾話 『業炎の剣帝、出撃すること』 (後書き)

感想待ってます！

第拾壹話 『業炎の剣帝、三羽鴉と出会つること』

side 桜牙

先発隊として華琳の城を出た俺と季衣と雪は賊徒が出たと言う場所に向けて急いで馬を走らせて向かっていた。今回の賊徒の数は今までの比でないのに対して、こっちはいつもの中規模部隊より少ないくらいの兵力しかない。

戦い方次第ではどうにでもなるが、今回の戦いは賊徒を討伐すると同時に襲われている村の人間の安全を確保しなければならぬ。つまりは必然的に今回の戦いは今までの戦いと比べても格段に難易度が高いことになる。

義勇軍でもいてくれたのなら対処の仕方が変わってくるが、いるかいないかの義勇軍に賭けるよりも、今の兵力でどのくらいのこと出来るかを考えた方が良く決まっている。

だが相手の戦力がこちらより高いと言うことしか分かってない今の状況じゃ、どんな風に部隊をわけてどんな風な戦い方をすればいいかなんて大まかにしか作戦は立てられない。

やっぱり最初は俺が道を切り開いてから、あとで作戦を考えるしかないみたいだな。そんなコトを思っていると一人の兵が俺に近づいてきた。

「桜牙さま、もう少しで賊徒が現れた村に到着します」

「ああ、分かった。みんなに気を引き締めるように伝えてくれ」
「は!!」

その兵は返事をするはずさま後ろにいる部隊に声をかけに向かっていた。とにかく今は死人を出さないのが先決だ。勝つための作戦はあとから立てれば問題ないだろう。

「季衣。相手がもしも複数の部隊に分かれてたときは、お前がこの隊の半分を連れて鎮圧に向かえ」

「えっ、ボクが？」

「ああ。お前なら出来るはずだ。必ずしも勝たなくてもいい。不利だと思ったら必ず退け」

「うん！ 分かった！」

季衣が返事するのを見届けると視線を再び前に向ける。すると村に接近している賊徒の大群の姿が見えた。目算だとだいたいざっと数は三千以上は固いな。

しかも複数の部隊に分かれて向かってるみたいだな。賊徒が村に接触するのはもう少し時間がありそうだな。だったら今のうちに民間の避難を急がせるしかないな。

「お前ら!! 急ぐぞ!! 季衣、雪ももう少し早めに行くぞ!!」

俺は季衣と雪にそう叫び、急いで村の方に向かった。そして俺たちは村に到着すると民間人の避難を始めた。

なにやら避難を手伝ってるような奴らがいるがまさか義勇軍か？
いるのは助かったが数はあんまりいないみたいだな。

どっちにしる村の中で戦うわけにはいかないし、義勇軍がいるなら協力しないてはないだろうな。俺がそんなコトを思っていると、不意に声が掛けられた。

そちらの方を振り向くとそこには顔や体の至るところに傷があり、白髪を後ろで三つ編みにしている少女がいた。その少女からは春蘭や秋蘭達と同じような武人の感じがする。

「あなた達、何者ですか……」

その少女は俺たちに対抗するかのようには構えながら訊いてくる。暴徒が近づいてきてるって言うんだから警戒するのは当たり前だろうな。そんで警戒をするってコトはこの子は義勇軍ってことか。

「警戒しないでくれ。俺たちは君達の敵じゃない。むしろ味方だ」

「……」

俺はそう言うが目の前の少女は警戒を解かないままこちらをジッと見据えてくる。確かに言われただけじゃ信じられないのは仕方ないな。

信じさせるにはやっぱり華琳の名前を出すしかないか。華琳の名前は大分広まってるはずだし、言えば分かるだろう。

「俺の名は龍崎桜牙、こっちは許緒だ。俺たちは曹猛徳のところ

で武官をしてる者だ」

「龍崎桜牙……。まさかとは思うが、破壊神の龍崎桜牙…か？」

あー、まさか華琳の名前の方じゃなくて俺の名前に反応しちゃった？ つーかやっぱり俺って破壊神って異名で知れ渡っちゃってるみたいなんだね……。

ある意味華琳よりも有名になってるみたいだな……。とっていると季衣が言ってきた。

「兄ちゃんってそんな風に呼ばれてたの？」

「まあ。なんつーか、そうなんだよね……」

「確かに桜牙さんが戦うとあちこちが破壊されてますからね……」

雪。そんなツツコミはわざわざ入れなくていいんだよ。つーか雪ってたまに人の傷口抉ってくるよね？

そんな会話をしている俺たちを見て目の前の少女はなにやら声をかけづらそうな顔をしている。とりあえず気を取り直して話を戻すことにするか。

「で、俺たちが敵じゃないってコトは信じてもらえたか？」

「はい。あなた方から敵意は感じられませんが、何よりも州牧をしている曹操さまの将なのですから疑うところはありません」

どうやら少し興奮しているのか最初に出会ったときの冷静沈着な

感じとは裏腹に少しだけ、嬉しそうな表情で話していた。

とりあえず信じてもらえたと言うことで義勇軍のところ以案内してもらおうとするか。まあ、その前にやることがあるんだけどな。

「ちよつといいか？」

「は！！ 何でしょうか！！」

俺が一番近くにいた兵士に話しかけると兵士が近くに寄ってきた。

「コレから夜を通して戦うことになるはずだ。おそらくは苦戦することになる。だから華琳にはなるべく敵と接触しないで増援に来て欲しいと伝えてくれ」

「は！！ 分かりました。では『待つてください』どうなされましたか、除晃さま」

報告の早馬を出そうとしたのだが、何故か雪がいきなり報告に向かおうとした兵士を呼び止めた。

「いったい何のために呼び止めたんだろうか。何か他に報告し忘れたことでもあったか？ そんなコトを考えている間に雪が兵士に言った。」

「華琳さまには今ので大丈夫だとは思いますが、春蘭さんには特にと伝えてもらえませんか？」

「は！！ 了解いたしました！！」

その兵士は雪の言葉に返事をするに急いで華琳達のところに行くために馬を走らせた。

なるほど。確かに華琳は大丈夫だろうけど、春蘭には言っておかないと危ないな。まあ、秋蘭がいるんだから言わなくても大丈夫だろうけど、保険としておけば問題ないだろうな。

にしてもよくこのタイミングでそれを言ったもんだな。もしかすれば雪は武官としてより文官としての方があってるのかもしれない。

「雪、よく気がついたな」

「はい。春蘭さんのいつもの行動から見えて言っておかないとダメだと思ひまして……」

春蘭よ。こんな子供にまで言われるなんて、お前はみんなから相当猪として見られてるな……。

「よし。じゃあえっと……」

俺はとりあえず報告に行かせたので、義勇軍のところに案内してもらおうと目の前の少女に向き直ったのだが、俺ってはこの子の名前知らねえじゃん。

とか思っていると、少女がふつと微笑みながら言ってきた。

「私の名前は楽進と言います。桜牙様、よろしくお願いします」

楽進って言えば確か義勇軍をまとめてて曹操に認められて軍にはいるんだっただよな？ つーことはもしかしたらこの戦いで力が認め

られるかもしれないってことか。

て言うかやつぱり楽進も女の子だったか……。一人くらいは男がいてくれても問題は無いような気がするんだがな……。

にしても随分と可愛い笑顔だな。今思うと俺の周りって美人揃いじゃね？ ハーレムウハウハだよ。

「どうされましたか？ 桜牙様」

「いや、なんでもない。つか様付けはやめてくれ。呼び捨てか、せめて、さんにしてくれ」

「いえ、曹操さまの将の方にご無礼は働きませんので」

どうやら楽進は見た目通り頭が堅い性格のようだ。まあ、この方が軍にもまとまりが出るしむしろこっちの方がいいだろうな。

「さて、じゃあ本題にはいるが楽進は義勇軍の者か？」

「は、はい、そうです」

俺が言うと楽進は急に緊張したようになったんだが、どうしたんだ？ そこまで深刻な顔をした覚えはないんだけどな……。

「じゃあ民間人の避難はどれくらい終わってるんだ」

「だいたいは避難は終わりました。もう少しで完全に避難が終わります」

なるほどね。どおりで俺たちが来てから人をあんまり見ないわけだ。どうやら義勇軍はなかなか出来るみたいだな。

「ちなみに義勇軍はどのくらいの兵がいるんだ？」

「だいたい百くらいだと思います」

百か……。義勇軍がいてくれたのは嬉しい誤算ではあるが、数的にはほとんど変わらないな。俺たちの部隊を合わせたとしても数の差は埋めることは出来なさそうだな。

俺たちの部隊をあわせて数はだいたい五百から七百前後ってところだろうな。相手は複数手に分かれての進軍になっているから部隊を分けなきゃいけないんだが、コレだとさすがに捌ききれなさそうだな。

俺がうっん、と唸っているのに楽進は何か不安を覚えたのか心配そうな表情で俺に訊ねてきた。

「あ、あの……なにを考えてるですか……？」

「ん？ ああ、コレからどう動こうか考えてたんだ」

「なら義勇軍が集まってる場所に来ますか……？」

楽進の言葉に俺がいいのか？ と訊ねると楽進は一回だけうなずいてどこかに向かって歩き出した。俺たちもそれにならない楽進の後ろをついて行く。

「ここです」

ついていった先には楽進が言ったとおり、百くらいの義勇軍がいた。村で避難誘導をしている兵士の数を合わせると、だいたい百ちよつとつてどこか。何にしても少ないな。

俺のところには兵は要らないとしても、楽進と季衣には兵をつけなければならぬ。そうすると少ない兵士がさらに少なくなるんだよなあ……。とか思っていると、楽進のところへやってくる二人の女の子が見えた。

「風。あり？ その人達はどないしたんや？」

「風ちゃん、その人達どうしたの？」

一人は関西弁を使うなんとも男の目を引きそうな巨乳で、さらにそれをあまり隠そうとしない水着のような格好をしている女の子。

もう一人はこの時代には珍しい近代的な格好をしているオシヤレで、なにやらまつたりとした口調の女の子だった。

「真桜に沙和か……。いや、この方達を案内してきたんだ」

「そうやったんか、わいの名は李典つうねん。よろしゅうな……
つてあんさん達はあん時の！？」

ん？ どこかで会ったことがあったらどうか……。なにやら李典が俺たちを指差しながら叫んできた。すると今度は雪が言ってきた。

「この人あのとときの絡繰のお姉さんだよ？」

「絡繰……。ああ、あのときのか」

「ようやく思い出してくれたんか」

「真桜ちゃん、知り合いだったの？」

「ちよつとな」

関西弁を使う絡繰職人の女の子が人懐っこい笑みを浮かべながら迂禁に言う。しかし何で関西弁なんだ？ だいたいこの時代に関西弁なんてないだろうに……。

「私は于禁っていうの。よろしくね」

こつちの子は比較的普通そうだけど、服装にこだわりすぎな気がするな。こんなんじゃ戦えるんだろうか。

「じゃあ楽進には名乗ったけど、改めて名乗らせてもらうか。曹猛徳のところで将をやらせてもらってる龍崎桜牙だ」

「ボクは許緒だよ！」

「私は除晷と言います。よろしくお願いします」

俺たちが言うと、楽進はさっき聞いたからさすがに驚いてはなかったが初めて聞いた李典と迂禁はかなり驚いたような表情をしていた。

まあ、それだけ華琳の名前が知れ渡ってきてるってコトだよな。

「ま、まさか曹操さまつちゆうたら、あの曹操さまか……?」

「他にどなたがいると言っただ。正真正銘曹操さまの将だ。しかもあの龍崎桜牙様だぞ?」

「えっ!? あの破壊神と呼ばれてるあの龍崎桜牙さんなの!?」

「それはえらいこっちゃ……」

……やっぱり俺は破壊神と言っ名前前で認識されているみたいですよ……。

「その桜牙さんがなんでこないなところにおるんや? まさか一緒に戦ってくれるんか……?」

李典はまさかとは言わんばかりに期待をかなり込めた眼差しで、だけどあり得ないと言っ表情で俺に訊いてきた。

「もちろんそのつもりだ」

「やっぱ戦ってくれるわけ……ってあるんかい!？」

おお!? まさかこの時代の人にツッコミを入れられるとは思わなかつたぞ!？」

だけど李典はツッコミを入れた後しまったと言わんばかりの表情をして、楽進と迂禁はヤバイと言わんばかりの表情をしていた。

「す、すみません桜牙様」

「すみません。ついいつものクセで……」

「謝るから食べないで欲しいの……」

「いや、食べないから」

迂禁は俺をどういった奴だと認識してんだよ。さすがに人は食わねえっつうの。

「別に謝るようなコトはしてないだろ？ 俺が曹操の将だってコトを意識してるんだったらそんなもんは犬にでも食わせてやれ」

俺がそう言うのと三人はホツとしたような表情と共に肩の力が抜けたみたいだ。さっきまでのガチガチな表情じゃなくて柔らかい表情になってるからな。

さて、とりあえず自己紹介も終えたことだし本題に入ることにするか。

「とりあえず俺たちもこの村を守るために戦うんだが、それでも数の差は圧倒的だ」

俺が言うのと楽進や迂禁達だけでなく季衣や雪の表情も引き締まる。

「義勇軍には軍師はいるか？」

「いません……」

将が揃っているのならばあとは軍師の存在が大きくなってくる。将がいくら強くても作戦もなしに突っ込んだりすれば、いくら勝つことが出来ても損害が大きくなる可能性が高い。

さらに今回のような数の差がある場合は、なんにしても考えて行動しなければならぬ。だが今の俺たちのところには、軍師となり得る存在がいない。

うむ、こいつはかなり厄介なコトになってきたな。相手の攻め方は幸か不幸かは分からないが四方向からの一気攻め。

一つは俺が一人で何とかすれば大丈夫だが、残り三方は他の奴らに任せなきゃならないし只でさえ少ない隊をさらに分けなきゃならない。

そうすれば自ずとどこかから攻められちまうことになる。多分俺が本気を出したとしても間に合うか分からないな。俺の力にはかなりのリミットがつけられてるからな。

そんなコトを考えると雪が口を開いた。

「あ、あの……地図ありますか……？」

「あるけど、何に使うん？ 嬢ちゃん」

「私に考えがあるんです」

李典は雪の言葉を聞いた後に机に地図を広げた。

雪の考えは、四方向から仕掛けてきていることが分かるんだから、

その四方向にバリケード、つまり防壁を作り足止めをしながら弓による遠距離射撃で相手の兵力を減らすと言うものだった。

ただ問題点があり、防壁を作るための時間と材料が足りるかと言うことだった。確かにこんな作戦会議をしている間にも黄巾の奴らは攻めてきている。しかし今、軍師がいない状況で夜を乗り切るにはこれしか方法がないだろうな。

「みんな、この作戦で行きたいんだが、どうだ？」

「私は構いません」

「うちもかまへんよ」

「沙和も大丈夫なの」

「ボクもいいと思うよ」

みんなの同意を聞くと雪はホツとしたような表情をした。それによほど緊張したのか、言い終わるとへなへなと座り込んでしまっていた。やっぱり雪は軍師に向いてるな。

なんにしても作戦が決まったんだから行動に移さないと。そう思った俺はみんなに言う。

「奴らが来るまでもう時間がない。各員急いで防壁の制作に取りかけれ。東門は李典と季衣、南門は迂禁と雪、西門は楽進の指示に従って制作に取りかけれ」

俺が指示を出すと楽進が俺に言った。

「北門はどうするのですか？」

「北門は俺が一人で何とかする。各員急げ！！」

俺が叫ぶとみんなが一斉に動き出した。俺も北門の防壁を作るために地図で位置を確認した後にそこに向かう。

北門につくと黄巾の奴らかなり近くまで迫ってきていることが分かった。こりゃ、早くやらないと間に合わないな。そう思った俺は地面に魔法陣を書いていく。

防壁の大きさを大きくするためには魔法陣の大きさも大きくしないといけないし、大きくすればするほど俺の魔力の消費が大きくなる。今の俺は只でさえ魔力が少なくなってるんだから無駄には出来ないしな。

そして書き終えた魔法陣に両手をつけて魔力を流し込むと防壁が完成した。北門を作り終えた俺は他のところも手伝い、即席だがなんとか防壁を完成させることが出来た。そして俺たちは最終確認のために集まっていた。

「とりあえず防壁は完成した。戦術としては防壁の上からの射撃と接近戦、接近戦は無理をしないで退くときはちゃんと退くんのだ。」

北門は俺が一人で何とかするから、東門は李典と迂禁、南門は季衣、西門は楽進で兵を率いて守ってもらおう」

「凧で構いません」

するといきなり楽進が言ってきた。

「それって真名じゃないのか？」

「はい。ですが会ったばかりの私達のためにここまで懸命に頑張ってくださいってるのですから、それくらい当然です」

楽進もとい凧がそう言いながら微笑む。すると李典と迂禁も言うてきた。

「じゃあうちも真桜でかまへんよ」

「沙和も同じくなの!!」

三人が真名を俺に授けてくれるってコトは俺を信頼してくれている証なんだろうな。

だったら俺はこの三人の期待に応えてやるのが筋ってもんだ。

「分かった。凧、真桜、沙和任せたぞ」

「「「はい!!」」」

三人はそう返事をする手持場に向かっていた。季衣も同じように持ち場に向かい残ったのは俺と雪だけになった。

「あの……私はやっぱり足手まといですか……？」

雪は自分が戦略外とされたと思って沈んでいるみたいだが、俺はそんなことはしない。

「雪、お前には隊全体を指揮する軍師をやってもらう」

「えっ！？ 私が軍師ですか!？」

「ああ、さっきのお前の策がなかったら今ごろはヤバかったかもしれない。そんな策を出せたお前には軍師をやってもらう。大丈夫、お前ならやれる」

俺は優しく言いながら雪の頭をなでる。すると雪は決意したように顔を上げながら言う。

「分かりました。私……やってみます!!!」

「おう、その意気だ!! じゃあ任せたまぞ」

俺は雪にそう言い残すと俺が守る北門に向かった。するとそこにはすでに黄巾が攻め込んできていた。

俺は黄巾の奴らの前に立つと『白羽黒羽』を構えながら言う。

「曹猛徳が将、龍崎桜牙……推して参る!!!」

第拾壹話 『業炎の剣帝、三羽鴉と出会うこと』 (後書き)

アンケートと言うか、出したいキャラが言ったら感想欄に書いて送ってもらっても構いません!!

その場合は私はあまり三国志に詳しくないので姓、名、字をお願いします!

また真名は私が考えたオリジナルでいいなら構いませんが、意見があつたらお願いします!

感想待ってます!

第拾弐話『俺の右手が（返り血で）真っ赤に燃える！！貴様ら倒せと轟き叫ぶ！

うおおーっ！！ まさかの3日連続更新だぜえい！！

ではんげー！！

第拾弐話 『俺の右手が（返り血で）真っ赤に燃える！！貴様ら倒せと轟き叫ぶ！』

side 桜牙

「はあああああああつ！！」

俺は現在目算にしてみればだいたい千五百人くらいはいるかと思われる敵の軍と交戦中です。まあ、何故かと言えば前話を見てくれれば分かると思うがこの方が効率がいいからだ。

ここの防壁は俺が魔力を込めて創ったものだからそう簡単には壊されたりしないから一人で十分だ。さらに言えばこんな数、俺からすれば少ないくらいなんだよ。

にしてもなんか身体が微妙にダルいんだがコレが魔力切れって奴なのか？ 今まではチート魔力で魔力切れなんて無かったから分かんかったけど、魔力が無くなってくると身体が重く感じるんだね……。

とまあ、こんなコトを考えている訳なんだが実際は人を斬って斬って斬りまくってる最中なんだよね。昔ならコレだけで吐いてたけど転生して戦いまくってたからもう慣れた。こんなコトに慣れたくは無かったが仕方のないことだ。

「はあああああああつ！！」

「ぐあつ！？」

暴徒は俺に向かって攻撃を仕掛けてきている。

「ジーク・インパクトオオオオ!!」

そして俺は近づいてきた奴らに向かって『ジーク・インパクト』を躊躇なくぶつ放す。俺の右腕から放たれた破壊光線は、流星のごとく一直線に駆け抜けて、通った場所に大規模な破壊を施していた。

もちろんそれに巻き込まれた奴らは只では済まずに、怪我をしなから地にひれ伏していた。いくら手加減をしたとは言え、アレだけの質量の光線を受けて生きているのは奇跡だろうな。

それに『ジーク・インパクト』を放ったおかげで只でさえ俺を赤に染めていた血はさらに俺を赤く染めていた。さらに相手は俺の技に怯えて攻撃を躊躇してしまっていた。

しかも頭らしきむさつ苦しい男を無防備にさらしながらだ。俺がそんな隙を見逃すはずがなく、そいつがいる場所に向かって瞬動を使って一気に距離を詰める。

俺が目の前にまで来て男はようやく我に返ったみたいだが、すでに時遅し。その男の首はすでに俺が一瞬のうちに精製した白羽黒羽によって切り落とされていたからだ。

「お前等に告げる……」

俺は周りにいる奴らに殺気を与えながら、静かになった空間にてつぶやく。静かにだが誰にでも聞こえるように……。

「その命……天へと返すがいい!!」

俺がそう叫んだ瞬間隊列が一気に乱れた。頭を失ったという統率力の低下と、自分も頭のように殺されてしまおうと言う恐怖から、隊列が乱れたんだろうな。

中には俺に立ち向かってくる奴がいるが、俺はそいつらを簡単に斬り捨てて地にひれ伏させる。残りは、俺を見て逃げていく奴らだけだ。俺は心を無にして逃げ出した奴らを追いかけて、一人残らず切り裂いた。

数10分前にはあれだけの数を誇っていた奴らの中には立っている者は誰一人といなく、残ったのは俺の周りに血を流して屍となった暴徒の姿だけだった。おそらくはこいつらは前菜程度の奴らではないんだろうな。

統率がとれていたとは言え強さは大したことがなかったし、策略も特に作戦があつたわけでもなかった。多分こいつらで義勇軍の情報を集めて、それを上回るくらいの力でねじ伏せにくるに違いないな。

俺は返り血で真っ赤に染まった顔を服で拭きながら考える。華琳達がかつちに来るとしても、朝までは俺たちで何とかしなくてはならない。まだ戦いは始まったばかりだが、あとから今の比ではない数の敵が来るだろうな。

そんなコトを思っていると一人の兵士が俺に駆け寄ってきた。その兵士はたったあれだけの時間でしかもこの数を一人で倒したのかと驚いたような表情をしていた。

「除晃さまより伝令です。西門の楽進部隊が苦戦中のこと、今す

ぐ援軍に向かってください」

「分かった。お前も早く持ち場に戻れ」

「は!!」

俺が言っていると兵士は急いで自分の持ち場に戻っていった。そして俺も凧が戦っている西門に向けて走り出した。

side 凧

桜牙さまに西門を任されたのだが、思いのほか敵の数が多く私たちは苦戦を強いられていた。くっ、数による差がなければこんな奴ら……。

私はそんなコトを思いながら兵達に指示を出しながら攻撃を放つていく。それでも数はあまり減った気はせずにもしろこっちだけが減っているようにすら見える。

「はあああああああ!!」

私は氣による攻撃で敵兵を次々に倒していく。こちらでも敵兵を倒せてはいるが、明らかにこちらの方の減りの方が早い。

このままでは防壁を突破されて中にまで被害が及んでしまう……。それだけはなんとしても避けなければならぬ。私はそう思い拳を振るっていく。

「死ねえええええ!!」

だが私は目の前の敵だけに集中しすぎていたせいか後ろから敵が来ていることに全く気づいていなかった。振り向いたが、そいつはすでに私に向かってすでに刀を振り下ろしてきていた。

避けるのは距離的にもう無理だ……。そう思った私は目をつむってしまった。しかしいつまで経っても私には何の痛みもこない。

私は恐る恐る目を開けるとそこには私を守るように立っている桜牙さまがいた。桜牙さまはいつの間にか持っていた刀で相手を切り裂くと私に言ってきた。

「凧、怪我はないか？」

「は、はい。桜牙さまが助けてくれたので問題ありません」

「そうか。凧に怪我がなくてよかった」

「ツノノノノノ」

私が言つと桜牙さまは不意に笑顔を浮かべながらそう言ってきた。

うつ、元から桜牙さまはカッコイイとは思ってたがいきなりあんな顔をするなんて卑怯です。きつと顔赤くなってるんだろっな……。

私は戦いの最中だと言うのにそんなコトを思ってしまった。

side 桜牙

俺が凧が戦っている西門にたどり着くと、確かに兵士の報告にあったとおり凧たちの隊はかなり苦戦を強いられていた。凧の部隊

はほかの部隊と違って将が一人しかいなかったからな、苦戦するの
も仕方ねえ。

そんなコトを考えた後に助太刀しようと凧のところに向かおうと
したのだが、凧は前の敵に集中しすぎているのか後ろから切りかか
られていることに気づいていなかった。

こんなところでまた大事な仲間を失ってたまるかよ!!

そう思った俺は瞬動を使って凧と敵兵の間に急いで入り込む。そ
して敵兵の刀を受け止めるために『流鎖刃月』を創りだして刀を受
け止める。

俺は流鎖刃月で受け止めた刀を切り裂くとそのまま敵兵も切り裂
いた。その後体が硬直しているのか動けない凧に言う。

「凧、怪我はないか」

「は、はい。桜牙さまが助けてくれたので問題ありません」

「そうか。凧に怪我がなくてよかった」

「ッ／／／／／」

俺が笑みを浮かべながらそう言うとき凧の顔が急に真っ赤になった。
やっぱり戦いで疲れたか、なんかしたのかもしれないな。

そんなコトを思いながら俺は凧の前にたちながら言う。

「俺も戦うから、頑張るぞ。他のみんなも戦ってるはずだ」

「はい!!」

俺は凧が返事をするのを確認すると敵兵に向かって走り出した。俺と凧は少なかった部隊をさらに二つに分けて、挟み撃ちをするように部隊を配置した。

いきなりの動きに対して反応できなかったのか、敵兵の統率が一気に崩れた。その隙を俺や凧が見逃すはずがなく敵兵を一気に叩き潰した。

どうやら何人かは逃がしてしまったみたいだが、だいたいの鎮圧は成功した。あとは気になるのは将一人で全体を指示している季衣のところだが、伝令が無いってコトはうまくやってるんだろうな。

「あの、桜牙さま……」

そんなコトを考えていると凧が話しかけてきた。

「どうしたんだ？ 凧」

「いえ。先ほどは危ないところを助けていただきありがとうございます」

凧はそう言うと俺に頭を下げてきた。

どうやら俺がさっき助けたことを気にしてるみたいだが、俺からしたら仲間を助けるのなんか当たり前のことだから、そこまで改まらなくてもむず痒いな……。

「気にすんな。風はもう俺にとって大切な人なんだから助けるのは当たり前だからな」

「大切な人……ですか？／＼／＼／」

「そう。大切な人だ」

風がなんか顔を赤くしてるけどホントにどうしたんだ？ まさかこんなときに風邪でもひいたのか？ そんなコトを思いながら中に入ってしまった。

中に入り義勇軍の本部に行くとすでに敵の撤退を終えた季衣や真桜、沙和が休んでいるのが見えた。しかもかなり体力を消耗したのが出撃したときよりも元気がない。

雪はどうしたのかと思っただが、怪我をした兵士達の手当てなどをして忙しく動き回っているようだった。

こんな疲れてるときに言うのは嫌なんだが、俺一人じゃ守る範囲は限定されてくる。守りたいものを守るにはみんなで力を合わせるしかないからな。

「みんな疲れてるところ悪いが、作戦を立てるぞ」

「うん……」

「分かったわ……」

「うんなの……」

「分かりました」

うわぁ……。見た目よりもずいぶん疲れてるみたいだな。風もなるべく表に出さないようにしてるけど、かなりキツイみたいだな。

だけど休んでる今しか作戦を話し合うことは出来ないし、無理にでも聞いてもらわないといけないな。

そう思った俺は風たちを近くに集めて作戦会議を始めた。

「みんなも分かるかもしれないが、第二波が来る。たぶん今度は四方向からじゃなくて二方向、または一つを攻めてくると思う」

俺の作戦はこうだ。門の外には見張りの兵がいるため攻めてくれば伝令に来るだろう。その伝令の報告によって部隊を分散させる。

おそらくは四方向からの攻めがダメだと分かれば同じようなことは繰り返さないはずだ。ならば部隊をあまり分散させずに複数の方角から攻めてくる作戦を取るだろう。俺だったらそうやって攻めるからな。

そして夜が明ければ華琳達が援軍に来てくれるはずだから、それまでは無理に敵を倒すのではなく牽制しておき華琳達が来た後に一気に叩き潰すのが俺の作戦だ。

華琳達が来てくれさえすれば数による差はあつという間に埋めることが出来て、数の差のアドバンテージがなくなつた敵兵に俺たちが後れをとるはずがない。だから負けるはずがないんだ。よって頑張りどころは夜を守り抜けるかどうかと言つところだ。

「曹操さまが来てくれるまでの間、私達は牽制をすればいいのですね？」

俺が説明を終えると確認のためか凧が訊ねてきた。

「ああ、無理をする必要はない。無理をして怪我をされたら元も子もない」

「でも曹操さまが助けに来る宛があるんか？」

華琳達の口トについて何の説明をしてなかったために真桜が訊いてきた。

説明しなかったら来るか来ないかの分からない華琳に掛けるこの作戦をやるのは無謀だからな。たぶん真桜はそのところを気にしてんだらうな。

「そのことなら大丈夫だ。俺がこうなるかもしれない可能性を考慮して事前に伝令を出しといた」

「そうやったんか。抜かりないな、兄さんは」

「こ、こら真桜。そんな口のききかたしたら……」

凧が真桜の話し方に何かマズいと思ったのか焦ったように真桜に言っていた。

そう言えば華琳って結構偉いからその将である俺に対して関西弁あんな言葉使いたからマズいと思ったのか。ったく、そんな口ト気にならないっつうの。

「別にそんなかしこまらなくてもいいぞ。そんなん気にしないから」

「で、ですが……」

「ええやんか、凧。兄さんがええって言うてんからそれでええやん」

「そうなの、凧ちゃん。凧ちゃんは堅物なの」

「さ、沙和まで!?!」

うっん、さつきまで血なまぐさい戦いをやってたって言うのに、女の子三人がワイワイしていると場が和みますなあ。これが戦場とかじゃなかったらずっと見ていたい気分だ。

それに隣にいる季衣も雪もだいぶ落ち着いてきてるみたいだな。まあ、季衣も頑張ってもらってるし雪もあの時に指示が来たってコトは頑張ってるみたいだな。

「じゃあ、お前達は敵が来るまで休んでくれ」

俺はそう言いながら立ち上がり体をほぐす。

「兄ちゃんはどつするの?」

すると俺の隣にいた季衣も立ち上がりながら訊ねてきた。それに凧たちもいつの間にかワイワイするのをやめて、俺の方に向き直っていた。

やれやれ、そこら辺はやっぱり武人と言つべきか真面目な顔つきになつてるな。大したことじゃないつてのに……。

「俺は見張りに行つてくるだけさ。敵が来たらすぐに動けるようにな」

「だったらボクも『ダーメ』うつ……」

俺はついてこようとする季衣のおでこを指で押してやりながら言う。

「お前達はさっきの戦いで体力を消耗してんだろ？ だったら見張りなんか俺に任せておけ」

「しかし桜牙さまも疲れているのは我々と同じでしょう」

すると風まで俺に言ってきた。やっぱり沙和や真桜が言うとおりこいつの頭は堅いんだなあ。

「俺はぜんぜん疲れてないさ。だから休む必要はなし。じゃ、行つてくるからな」

俺はそう言つて義勇軍の本部を後にした。とりあえず俺が圧倒的な実力の差を見せつけた北門からは攻めてこないだろうと判断して、最初は東門に向かった。

それにもし挟み撃ちで攻めてこようとしているなら北門からは来ない以上南門にも来ないと判断をして俺は東門に向かったのだ。東門に向かうとすでに見張りをしている兵がいた。

そいつらも疲れているようで眠そうな顔をしていた。俺はそいつらに近づいて話しかけた。

「敵の部隊は見えたか？」

「お、桜牙さま！？ い、いえ、敵の部隊の姿はまだ確認されてはいません！」

俺が話しかけると兵士は分かりやすく動揺しながら報告してきた。いつもの俺だったらからかったりしたりしたんだろうけど、今の状況下でそんなことをしてる場合じゃないのは分かっている。

それに変にからかったりして味方の士気を下げるわけにもいかないからな。

「分かった。じゃあ引き続き見張りを頑張ってくれ。もし敵の姿が一瞬でも見えたら義勇軍の本部にいる俺達に伝えに来てくれ」

「は！！ 了解しました！！」

俺は兵士がそう言うのを確認すると東門をあとにして、今度は西門に向かった。西門に到着すると、こっちには見張りの兵がいなかった。

まあ、見張りの兵の分担とかしたわけじゃないから居なくても仕方がないか。そう思った俺はとりあえず見張り台に登り、見張りをする事にした。

「にしても、コレだけ静かだと戦いがあったなんて嘘みたいだな

……」

「そうですね」

「ああ、そうだな。……………ん？」

あれ？ 今、この場にいるのは俺だけのはずなのに誰が俺の独り言に反応してくれたんだ？ まさか幽霊なのか？ 俺が斬りまくって幽霊になった奴が俺に恨みを晴らすために化けて出てきたってのか！？

べ、べべ別に幽霊とか全然怖くないし。だって俺、吸血鬼だから幽霊の親戚みたいなもんだし？ つーか幽霊なんかいねえし！？

俺はそう自分に言い聞かせながら声が出た方を振り向く。するとそこにいたのは、義勇軍の本部で休んでいるはずの雪だった。

「なんだ雪か……………」

「む、私じゃいけませんでしたか？」

雪は可愛らしく頬を膨らませながら怒ったような表情を浮かべながら言ってきた。そんな顔されても萌え萌え、としか言いようが無いんだけどな。

まあ、とにもかくにも俺に声をかけてきたのが幽霊とかじゃなくてよかった……………。

「そんなふてるなよ。雪が来てくれて嬉しいよ」

「…………ホントですか？」

雪は上目遣いで言ってきたんだが、こんな状況下じゃなかったら絶対抱きしめてたってくらいに可愛い…………。

今思うとなんでこの世界の武將たちは可愛い奴らしかいないんだよ。会ったばかりの凧たちも普通に可愛いしよ。ホントにどうなってるんだよ。

「ホントだよ。それでどうしたんだ？ 休むように言ってただろ？」

「はい。ですけど西門に見張りをつくように指示しておくのを忘れてたので、私がやるうかと思ってきたんです」

まさか東門への見張りの指示を雪が出していたとは…………。雪、恐ろしい子…………。

「そうか。じゃあせつかくだし二人で見張りしてるか」

「二人で…………ですか？／／／／／」

そう言うつと雪は何故か顔を赤く染めていた。夜風が冷たいのか、と思いながら実は先ほど着替えて羽織っていた上着を雪に着せる。

「寒いんだろ？ 顔赤くなってるし」

「赤くなってますか？」

雪の問いかけに対して俺はああ、と一言だけ告げる。すると雪が

不意にうつむきながら俺に言ってきた。

「桜牙さん……。こんな無意味な戦い、いつまで続けなければならぬんでしょうか……」

「……」

「こんな無意味な戦いが続けば私みたいな子がきつといっぱい出るはず……」

雪は盗賊に村の人を殺され、親を殺され自分は売られようとされていた。偶然にも俺が助けたから雪はこうしているが、もし助けなければ今頃、雪がどうなっていたかは分からない。

たぶん雪はこれからの戦いで自分のような人が出てくるのを我慢できないのだろうな。

「こんな無意味な戦いを無くすには誰かが国を治めないといけない。話し合いでそれがうまく行くなら話し合いでなんとかしたいが、そんなコトは絶対に不可能だ。そんなコトはただの幻想だ」

「じゃあやつぱりこれからもたくさん犠牲者が……」

雪の表情は見えないけどたぶん泣きそうになってるかもな。俺はそんな雪の頭を撫でながら言う。

「雪の言つとおり犠牲者が出ることには変わらない。けど華琳が国を治めれば、治めなかったときよりも雪のような目に遭う奴は少なくなる、絶対に」

「華琳さまが、国を治める……？」

「ああ。だから俺たちが華琳に協力して国を治めてもらって平和にしてもらうんだ」

雪は俺を見上げてくる。その瞳にはわずかに涙が浮かんでいる。ホントに優しい子だな、雪は。

「そのための戦いは無意味な戦いじゃない。意味のある戦いだ。雪のような犠牲者を出さないように頑張ろうぜ」

俺は泣きそうな雪を安心させるために笑みを浮かべながら言う。俺が言っていると雪も笑みを浮かべながら頷いてきた。

だがそれと同時に俺たちの視界の端に大勢の人がこっちにやってくるのが見えた。俺はなんとも空気の読めない奴らの登場に頭を掻きながら言う。

「つたく。しんみりさせる暇もなしってか。雪、季衣たちのところに戻るぞ……！」

「はい……！」

そして俺たちは季衣たちがいる義勇軍の本部に向かって走り出した。

本部に到着するとそこには東門にいたはずの兵の姿が見えた。報告によれば東門からも敵兵の姿が見えたらしい。数にしてみれば三千以上……もしかすれば五千くらいいるとのことだった。

俺たちが西門で見た敵兵もそのくらいいたし、一気に畳み掛けてきたか。

「季衣、凧、沙和、真桜、雪は全兵を連れて東門の守りにつけ。西門は俺が一人で何とかする」

「桜牙さま、さすがにそれは無茶です!!」

「コレばかりは凧に同意や。さすがに何千の敵兵を相手に出来るわけ無いやん」

「凧ちゃんと真桜ちゃんの言うとおりなの」

「そっだよ兄ちゃん!」

つたく、凧も真桜も沙和も雪も言いたい放題言いやがって……。俺も無茶は承知でやってるんだつつつの。

「無茶でもなんでもやるしかない。東門は雪の指示に従って動いてくれ。雪ならお前等に適切な指示を出せるはずだ」

俺はそう言つと雪が俺の服の袖を掴んできた。

「桜牙さん、怪我しないでくださいね……」

「ああ、分かった」

俺は雪にそう言つとここに集まってきた兵士に叫ぶ。

「テメエらは除晁の指示に従って動け!! 朝になれば曹操が助

けに来る！！ それまで持ちこたえろ！！」

「「「「「「「「オオツ！！」「」「」「」

「出陣だ！！」

俺はそう叫ぶと西門に向けて走り出した。

こうして第二波が始まった。

第拾弐話『俺の右手が（返り血で）真っ赤に燃える！！貴様ら倒せと轟き叫ぶ！

感想待ってます！！

第拾参話『俺の剣と翼、あんたに預けよう』(前書き)

誤字訂正しました。

ではございませー…

第拾参話 『俺の剣と翼、あんたに預けよう』

side 桜牙

俺が全員に出撃命令を出してから俺は自分が守ると分担した門の前にまでやって来たんだが、こりやある意味絶景だな。

俺と雪が視界の端で捉えた敵の隊はほんの一部で本隊の数は少なくとも八千は余裕に越えていた。にしても、まあよくもこれだけの数を集めてたもんだな。確かにこれだけの数が揃ってたら守りきるのは無理だったかもしれないな。

俺がいなければの話だがな。俺ならこのくらいの数の相手なんか余裕に相手に出来るし、負ける気もしない。もしかすれば華琳たちが援軍に駆けつけてきてくれる前に全員ぶった斬ってるかもしれないけどな。

そんなコトを思っているウチに敵の隊は俺の目の前にやってきて停止した。そしてその隊を率いている頭らしき男がにやつきながら俺に言ってきた。

「テメエがさつき送った下見部隊を一人でぶっ潰した野郎か？」

「だったらなんだ、ゲスヤロウ」

俺は余裕綽々な笑みを浮かべながら頭らしき男に向かって言い放つ。だがそいつは全く反応せずに呑気にクッククク、と笑っている。

まったく、どいつもこいつも数に物を言わせて強くなってる気でいるみたいだな。所詮個人の力が上がるワケじゃないし、時として集団での行動が災いを呼ぶことがあるってのによ。

「そんな余裕な態度をとってられんのも今の内だぜ？ 何せこっちの部隊は八千を越えてる。それに対してテメエは一人だ。どっちが勝つかなんて目に見えてんだろ？」

頭らしき男が言つと後ろにいる兵士もニヤニヤと笑い始めた。男どもが集団でニヤニヤ笑ってることほど気持ち悪いコトはねえわな。それにどっちが勝つかなんて端っから決まってるつつつの。

「ああ、そうだな。俺がテメエら全員を斬り倒して俺の勝ちだな」
俺がそう言つとついに敵兵は笑い始めた。

「テメエ。分かってんのか？ この数に勝てるやつなんかいるわけねえつつつの！」

「そうか。じゃあ見せてやるよ。この数に勝てる奴を」

俺は相変わらず余裕綽々な態度を貫き通していると頭らしき男は笑うのをやめて俺をにらみつけてきた。

「テメエ、いつまでも調子こいてんじゃねえぞ！！ テメエが大人身くしてれば危害を加えるつもりはなかったが、気が変わった。テメエを徹底的にぶっ潰してやるよ！！」

「そうか、そうか。そうしてくれると俺も有り難いよ」

はっはっはっ、と俺は笑いながら言った後笑うのをやめて殺気を全開にしながらい放つ。

「そうすれば容赦なく……殺せるからなア……」

俺はそう言うのと白羽黒羽を精製して構えこそしないが、両手で握る。そのうちの白羽を頭らしき男に向けて突きつけながら俺は言う。

「選択肢は二つ。攻めることを諦めて無様に尻尾を巻いて逃げるか、それともここで全員俺に殺されるか……。選択肢は二つに一つ、第三の選択肢はない。さあ、好きな方を選びな」

「んなもんテメエをぶっ殺して行くに決まってるだろ!!」

頭らしき男がそう言い放つと全員が手に持っていた武器を構え、俺に向かって突撃してきた。俺はそいつ等に向かってさつき精製した白羽黒羽を投げつけて、とりあえず二人を始末する。

そのの一瞬のことに気を取られた奴らは足を止めて呆然とした。そのときに俺は再び白羽黒羽を精製する。

いや、それだけでなく事前に用意をしていた魔法陣に自らの魔力を流し込み、剣を一带に精製しながら俺は言う。

「ごらんのとおり、貴様達が挑むのは無限の剣、剣戟の極地……恐れずしてかかって来い!!」

俺はそう言い放つと両手を動かして自らの魔力を流し込んだ剣を

宙に浮かせる。自らの魔力を媒体とした武器ならば俺の意のままに操ることが出来る。

そして俺は腕を振り下ろすと、宙に浮かんだ剣は敵兵に向かってまるで雨のように降り注いでいく。見たこともない現象に気を取られていた奴らは、俺が動かした剣を防げるはずもなく血にひれ伏していく。

さらに俺が創り出すぶんには無限に創り出せるが、この場にあるのは無限の剣じゃないから少なくなったら俺は魔法陣に魔力を流し込み武器を創っていく。

ぶっちゃけ、さっきの言葉言ってみただかつたのとこの技が使えるか試してみたいから決めてみただけなんだけどな。

そんなコトはさておき俺の攻撃により敵兵の二千人くらいは削ることが出来たみたいだが、相手の数はまだまだ多い。今の俺の魔力はほぼ無限にあるワケじゃないから、あんまり使っていると魔力切れになりそうだな……。

別に直接戦ったとしても負ける気はさらさらないし、勝てる相手にわざわざ時間かけて戦うのもアレだが、魔力切れになってぶっ倒れたところにブスブス刺されたらたまつたもんじゃねえからな。

不老不死の体ってコトは、死ぬようなダメージを受けても死なない代わりに死ぬような痛みを治るまでずっと味わわなきやいけないんだよね。だから魔力切れなんかになったら嫌なんだ。

まっ、この戦いは俺だけの戦いってワケじゃないし自分の事情だけを言っても仕方ないか。そう思った俺は刀の魔法具の『流鎖波

月』を精製して奴らに向かって走り出した。

「はああああああああ！！」

そして俺は目の前にいた奴に向かって流鎖波月でぶった斬ったあとに流鎖波月をその場で回転させて周りにいた奴らを切り裂く。鮮血が舞い、俺の顔や衣服を赤く染めていく。

「テメエら何やってやがんだ！！ 相手は一人だ！！ 矢を放て、矢を！！」

頭らしき男がそう叫ぶと俺に向かって矢の雨が降り注いできた。俺はそれを流鎖波月ですべて斬り落としていく。

ギギギギギギギギンツ！！ と金属を打ったような音が響き渡りすべての矢は地面に落ちた。俺が全ての矢を斬り落とした後には弓による攻撃は来なくなった。

どうやら矢がなくなったこともあるみたいだが、相手の士気は見るからに落ちてきている。まあ、一人に対してかなりの人数で掛かってきてるってのに未だに傷一つ付けれてないんだからな。

あいつらじゃなくても普通はかなり士気が下がるはずだ。だがそれでもあいつらは俺に向かって来やがる。元から一人も逃がす気はなかったからちよつと良いか。

「静かに眠れ。天より曹猛徳が国を治める様をとくと拝むが良い」

俺はそう言い放つと一方的な残虐行為を開始した。

「楽進、迂禁部隊は右翼に！！ 許緒、李典部隊は左翼から回り込んで牽制してください！！ 負傷者はすぐに救護班のところへ送ってください！！」

今私たちは攻めてきた敵軍と交戦中です。桜牙さんが隊全員をこちらの防壁に回してくれたおかげで私たちはなんとか防ぐことが出来ています。

こちらの隊の総員数は二千くらいしかいないのに対して、あちらは三千くらいと少しだけ数の差がありますが、凧さんや季衣さん達のように一人で何人分もの力を発揮してくれる将のおかげで押し返すことが出来そうです。

ですが元々疲労が溜まっていた私たちは今何とか押し返すことが出来そうな雰囲気なのですが、このまま長引いてしまえば、こちらの体制が崩れるのは目に見えています……。

増援を期待しても桜牙さんは一人で戦っているので増援の期待は出来ませんし、やっぱり華琳さま達の増援まで頑張るしかありません。

「弓兵隊は各部隊の援護をしてください！！ くれぐれも仲間を射ないようにしてください！！」

「「「「はっ！！」「」「」

私がそう指示すると弓兵隊の皆さんが答えてくれました。いつもだったら喜んでいるところですが、今はそんなコトを言っている場

「ありがとうございます！！ あっ、華琳さま。西門で桜牙さんが一人で戦ってますので援軍を！！」

「分かっているわ。そちらには秋蘭を向かわせたわ」

「そうですか…。ありがとうございます…。」

そこまで言うと私は緊張の糸が切れてしまったのか、意識がなくなりその場に倒れ込んでしまった。

side 秋蘭

私は華琳さまの指示を受けて龍崎が戦っていると思われる西門に隊を率いてやってきていた。西門にやってきたはいいのだが、私はそこで驚くべき物を目にした。

西門の前には何千もの敵兵が血を流し倒れていた。数にしてみれば軽く五千を越えているが、驚くことはそれ以外にもある。

戦いの後と思われるその地にはいつも龍崎が不思議な力を出していた白と黒の短剣が、無数に突き刺さっていたのだ。まさかとは思うが龍崎はコレを使って敵兵を倒したのか？

私はそう思いながら周りを見渡したのだが、その龍崎の姿がどこにもなかった。あの姉者にも勝った龍崎が簡単に死ぬはずがない…。私はそう思いながら再び周りを見渡した。

すると西門の防壁の前辺りの血の海の中に龍崎の姿があるのに気づいた。だが龍崎は座っているとかではなく、地にひれ伏していた。

まさか龍崎が……。いや、まだ生死を確かめたワケじゃない。もしも生きているのなら救護班に渡せばなんとかなるかもしれない。そう思った私は急いで龍崎の元へと駆け寄る。

龍崎には目立った外傷はなかった。むしろ眠っているように見えた。

「龍崎、生きてるか!!」

私はそう叫びながら倒れている龍崎の胸に耳を当てる。すると龍崎の心臓が動いていることが分かった。

「救護班!! すぐに龍崎を中へ運ぶのだ!!」

私は救護班にそう指示して急いで龍崎を中に運んだ。中には義勇軍の本部らしきところがあり、そこには華琳さまや姉者、季衣や桂に雪、その他には義勇軍の将をつとめていた者達がいた。

そして私が龍崎を連れてきたことを見た華琳さまが私の方にやってきた。

「秋蘭、そっちは終わったのかしら?」

「はっ! 私が向かったときにはすでに敵兵は全て全滅しておりました。ですが龍崎が……」

「桜牙がどうかしたの?」

私が桜牙のコトを口にすると華琳さまの表情が変わっていた。おそらくは龍崎のことを心配なさっているのだろう。

「見た感じでは外傷はありませんでしたが、意識がないようです」

「そう。なら今すぐ桜牙のところに入れて行きなさい」

華琳さまが私にそう言うてきたので私は華琳さまを龍崎が運ばれた場所に連れて行った。

そこには私が見つけたときと同じように横たわる龍崎がいた。今は拭かれていたが、あそこにいた龍崎は血にまみれていた。

「桜牙……」

華琳さまはそうつぶやき龍崎の元に歩み寄っていった。自分が間に合わなかったからこそこうなったのだと華琳さまは思っているのかもしれないが、私はそうは思わない。

元はといえばこんな戦いがあるから犠牲者が出るのだ。私はこんな国を治めるために力を振るう華琳さまについて行くのみだ。

「桜牙、目を覚ましなさいよ。まだあなたの役目は終わってないでしょう?」

華琳さまは未だに目を覚まさない龍崎に向かってそう言い掛ける。

「桜牙!」

華琳さまがそう叫んだときに龍崎の目がパチッと開いた。そして華琳さまの表情が明るくなったのだが、龍崎は驚きの一言を叫んだ。

「うるせえーっ!! 眠れねえだろうがあーっ!!」

龍崎がそう叫んだとき龍崎の顔面に華琳さまの鉄拳が飛んでいた。

side 桜牙

「超痛え……」

起きた後に何故か俺のそばにいた華琳に思いつきりぶっ叩かれたんだが、何故に俺はぶたれなきゃいけないかったんだ……。

実のところあの後俺は敵兵をばったばったと斬り殺して行ったんだが、全員を斬り殺しても未だに援軍も来なかったから暇になったんだよね。さらに言えば魔法具の創りすぎで魔力が無くなって、ダルくなってたんだよね。

雪達の方は数も将も揃ってるから大丈夫だと思って、俺はいざという時のために体力を回復させようと眠ったわけよ。それで眠っていると耳元で人の名前を何回も呼んでくる奴がいたから、うるさくて眠れないから叫んだ。

すると俺の名前を呼んでた奴は華琳だったわけで叫んだ後に思いつきりぶたれた……。畜生、一人であの大軍と戦ったつてのに誉められるわけでもなくぶたれるってどういコト？

俺なんか悪いことでもしましたか？ いやいや、何にも悪いことはやってないはずんだけど……。そんなコトを思っていると近くにいた秋蘭が話しかけてきた。

「龍崎、いきなりあれはないと思うぞ?」

「いや、まさか華琳だとは思わなかったんだ。でもだからってぶつことないと思わないか？」

俺がそう言つと秋蘭は何故かため息をついていた。

「華琳さまはお主のことを心配なさっていたのだ。それなのにいきなりあんなコトを言われれば怒りたくもなるさ」

「あー……そう言うことが」

つまりは心配してたのにうるさいって言われてムカついたわけか。やれやれ、いきなりやつちまうとは我ながら間抜けだな。

「そう言えば雪達の方はどうなったんだ？」

「雪達なら華琳さまや姉者の助力もあつて勝利したよ」

「そうか」

まあ、あいつらが負けるとは微塵にも思わなかったから当然の結果と言えば当然か。その後にも秋蘭から話を聞いたんだが、どうやら華琳さま達と凧達は真名で呼び合う仲になつたらしい。

そんで何故か凧達は俺の配下になって、『龍崎隊』が結成されたみたいだった。そんで物資の配給の準備が終わつたら、今後の方針を決める軍議を開くらしい。

なんとも俺がない間にいろいろ決まってるみたいだが、別に俺に損のあることはないことだし構わないか。

そして秋蘭はそれを言い終わると自分もやることがあると言つた。となので、俺がいるテントから去っていった。

さて、とりあえず華琳でも探すことにするかな。そう思った俺はテントから出て、華琳を探し始めた。

にしても俺がいない間にホントに変わってやがんな。テントはそこから張ってあるし、準備も整ってるし。

そう思いながら探していると凧を見つけた。

「おゝい、凧」

「あつ、隊長」

凧は俺の声に気づいてこっちを見ると俺に駆け寄ってきた。つか隊長って言われると何だか、照れるような言い方だな。

「隊長、お体は大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫さ。凧こそ大丈夫か？」

「はい、華琳さま達が援軍に来てくれましたのでなんとか」

確かに凧にも目立った外傷はないようだった。それにホントに真名で呼び合う仲になってるみたいだな。

「そう言えば凧、華琳の姿見なかったか」

「華琳さまですか？ 確かあちらのテントの方にいたと思います
が」

「そうか。ありがとな」

俺は風になんか言おうと風が言っていた華琳がいると言つてテントに向
かった。中にはいると風が言ったとおり華琳がいた。

だけど華琳の顔はムスツとしていた。しかもなんか睨みつけてく
るかのようになんか見てるし。あー…やっぱりさっきのことまだ根
に持っていていらっしやるのでございませぬのね……。

「よ、よお。華琳、元気か……？」

「……何か用でもあるの？」

ヤベーよ。華琳さま、すげー怒ってるよ……。そんなコトを思っ
ていると不意に華琳が口を開いた。

「心配したんだから……」

「……。悪かったな、心配かけて」

俺がそう言うと二人っきりのテント内に沈黙が流れる。

ヤバイヨ、なんかすごーくヤバイヨ。なんだかスゴく気まずい雰
囲気なんだヨ……。

こうなったらなんかカッコいいこと言っ……いやいやいや、今
すぐにカッコいいことなんか言えないっつうの。

いや待て。主人公補正でなんか、こっ、天からの閃きが来るかもしれないぞ!?

よおし、来い!! 誰か俺にカッコいいセリフを与えてくれ!!

「桜牙」

「お、おう」

そんなコトを考えていると華琳が話しかけてきた。

「桜牙、私が国を治めるまで死なないと誓いなさい」

「ああ。誓ってやるよ。お前が国を治めるまでだろうが、治めたあとだろうとな」

「それでいいわ。軍議が始まるわ。行きましょう」

「ああ」

な、なんとか華琳の機嫌を直すことが出来たみたいだな。

さて、仮にも負けないって誓ったんだから誓いを破るわけにはいかないな。

「華琳」

「何？」

俺は華琳を呼び止める。華琳は俺に呼ばれたことにより振り向いた。

俺はそんな華琳の前で膝をつき、言う。

「俺の剣と翼、あんたに預けよう」

「……いい心掛けね。じゃあそれに恥じない働きをしてもらおうよ」

そう言った華琳の笑顔は俺が見た華琳の表情の中で、一番生き生きしているように見えた。

第拾参話『俺の剣と翼、あんたに預けよう』（後書き）

ハーレム（予定）となっておりますが、ヒロインを決めた方がいいですかね？

その方がいいと言う方は意見と共に、誰をヒロインにしたいか意見送ってください！！

今のところまだ完全にヒロインとなるキャラはいません。

感想、意見待ってます！！

第拾肆話 『業炎の剣帝、旗刺し勝負をするの』 (前書き)

投稿する順番間違いました(汗)

改めてごっぞー！

第拾肆話 『業炎の剣帝、旗刺し勝負をするの』

side 桜牙

俺が華琳に改めて力を貸すことを誓ってから軍議にやってきた。軍議に集まるとそこには春蘭や秋蘭、凧達や雪、季衣が集まっていた。

華琳に集まるときに聞いたのだが、雪は軍師として指示していたのだが、華琳たちが来たことで緊張の糸が切れたのか気絶してしまっていたらしい。

だが今ここにいると言うことは気絶から立ち直ったのだろう。まあ、華琳が来るまで持ちこたえられたのはさすがと言うべきだろうな。

雪には悪いけど俺的には中盤くらいで気絶してしまうと思ってたんだけどな。そんなコトを思っていると俺のところは季衣がやってきた。

「兄ちゃん、怪我大丈夫なの？」

どうやら季衣も俺が寝ていたのは怪我して気絶してたと思っただけらしい。確かにかすり傷とかはあったけど、それぐらいなら俺の《真ハイデ祖イライトウオーカーの吸血鬼》の力があれば簡単に治るからな。

「ああ、怪我なんか大丈夫さ。この通りピンピンしてるぜ」

俺は二カツと笑いながら季衣に向かって言う。すると季衣も俺に負けなくらいの笑みを浮かべてきた。

うーん、これが天真爛漫って言うんだろうなあ。見てるだけで癒されるってのはまさにこのことだなあ。

「桜牙。お取り込みのところ悪いんだけど、そろそろ軍議を始めてもいいかしら？」

「ああ。大丈夫だ」

俺が言うと華琳はみんなの方に視線を向けて話を始めた。

「さて、これからどうするかだけれど。新しく参入した風たちもいることだし、一度状況をまとめましょう。……春蘭」

……何故そこで春蘭をチョイスするんだ華琳よ。春蘭がそんなコトを理解しているわけがないではありませんか。

と言うか春蘭が分かっていたらむしろ病気なんじゃないかと思っ
てしまう。

「はつ。我々の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。細かいことは……秋蘭、任せた」

早いな、おい。説明するのは無理だとは思ってたけどもう少し粘って欲しかった……。秋蘭も同じ気持ちだったのかやれやれ、と呟きながらも説明を始めた。

黄巾党の構成員は若者が中心で散発的に暴力活動を行っているが、

特に主張らしい主張はなく、現状では連中の動きの目的は一切不明とのコトだった。

さらに首領の張角も旅芸人の女、と言う点以外の何一つ分かっていない。

目的とは違うかもしれないが凧たちの村では地元の盗賊団と合流して暴れていたらしい。

「陳留のあたりではそのあたりは違っているのですか？」

凧はそう言って華琳に質問してきた。

「同じようなものよ。凧たちの村のようないもあるように、事態はより悪い段階に移りつつある」

華琳の言うように事態はだんだんと悪い方向へと進んできた。

少し前あたりまでであれば、ただのバカ騒ぎをしているだけの烏合の衆だったのだが、ここに攻めてきた大部隊を見るように、盗賊団やそれなりの指導者と結びついて組織としてまとまりつつあるのだ。

言い換えれば少し脅した程度では敵も逃げて行かなくなったと言うことだ。とにもかくにも今までのように一筋縄では行かなくなつたと言うことなのだ。

やれやれ、これからもこんな戦いが続くかと思うと面倒になつてくるな。

「ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだっただけ……これからの案、誰かある？」

華琳が言つと桂花が少しだけ曇つたような表情を浮かべながら言う。

「この手の自然発生する暴徒を倒す定石としては、まず頭である張角を倒し組織の自然解体を狙うところですが……」
桂花はそう言つと言葉を切る。

「肝心の張角の居場所が分からないってコトか」

張角が旅芸人と言つ情報はあつたが、逆に旅芸人だつたと言つせいもあり正確な居場所が掴めていない。

旅芸人は各地を転々として回るために決まつた拠点は持たないんだが、これだけの大軍となれば拠点が決まってくるようなもんだがな……。

「つたく、本拠地が不明でどこからともなく湧いて出てくる敵……ねえ。だから俺たちが苦労するんだよなあ。攻めようがないなら、攻められないし」

「そうよ。でもだからこそ、その相手を倒したとなれば、華琳さまの名は一気に上がるわ」

まあ、確かにそんなのを倒したとすれば華琳の名声は一気にあがるわな。

だが本拠地を見つけ出さないことにはなんにも始まらないよな。

「すいませーん。軍議中失礼しますなのー」

そんなコトを考えていると妙に間延びした声が緊張していた場に聞こえてきた。街に出ていた沙和の声だ。

うん。妙に緊張感を無くしてくれる声だな。雰囲気ぶち壊しだぞ

E

「どうしたの沙和。まだま黄巾党が出たの？」

「ううん、そうじゃなくてですねー」

……雰囲気をぶち壊しにしてくれるのは一向に構わないんだが、さっさと用件を話してくれないか……。

あんまり焦らされるとすんげえイライラしてくるから。それは春蘭も同じようで沙和を見てイライラしているようだった。

そんで話を聞いたところ沙和が町の人に配っていた食糧が足りなくなってしまうらしい。だから代わりに行軍用の糧食を配って良いかと言うことだった。

「桂花、糧食の余裕は？」

「数日分はありますが、義勇軍が入った分の影響もありますしいや、待て……何？」

俺が桂花の言葉を遮って言うと桂花はイラついたかのように俺を

にらみつけてきなから言っ。

「華琳、俺たちに義勇軍が加わって糧食が足りなくなるようにあつちも同じように糧食が足りなくなってるんじゃないか？」

「いいところに気づいたわね、桜牙」

俺が説明した考えはこうだ。俺たちに義勇軍が入り糧食が足りなくなつて来ているように、あちらもこつち以上の規模で動いている以上、糧食の減りは早い。

つまりは現地調達だけで武器や食料が確保できるわけがなく、どこかに必ず連中の物資の集積地点があるはずだ。そこを見つけたすことが出来れば一気に畳み掛けることが出来ると言うことだ。

「華琳。今すぐに偵察部隊を出して情報を集めたいんだが構わないか？」

「ええ。秋蘭！」

「御意。すぐに各方面に偵察部隊を出し、情報を集めさせます」

秋蘭はそう言うが早いか情報収集に集めさせるために兵を集め始めた。さらに他の者も偵察に駆り出された。

桂花は周辺の地図から物資を集積出来そうな場所割り出し、偵察の経路はどこでも同じくらいの時間に戻ってこられるようにと華琳からの指示だった。

で俺はと言つと……。

「桜牙は沙和に作戦の詳細を伝えておいて。食料の配給作業はあなたが引き継ぐように」

食料の配給作業と言うなんとも地味な仕事をする羽目になってしまった。

「華琳さん？　なんで俺が配給作業なんかやんなきゃいけないんだ？」

俺は華琳にジト目を向けながら訊ねる。

「桜牙は仮にもけが人なんだから黙って配給作業をしていなさい」

もつともなことと言えばもつともなことなんだがもつと他に仕事がないのかよ……。はあ……。配給作業なんつー地味な仕事をやる羽目になるとは夢にも思わなかった……。

まあ、決められたもんは仕方ないしやるしかないかあ……。と俺は溜め息混じりで思いながら沙和を探し始めた。

沙和を探すために街に出てきたのだが、義勇軍や街の人が中心になって街の復興作業が既に始まっていた。俺たちが戦ったとは言え完全には防ぎきれなかったようで、街に被害が出ていた。

だが見た目ほど被害があるわけではなく、早い段階で復興作業は終わりそうだった。そこでそんなところにいい匂いが漂ってきたのでそちらに行くと沙和が配給作業をやっていた。

「おーい、沙和ー。話があるんだがいいか？」

「どうしたの隊長？ はっ、まさか！」

「いや、何考えたかは分かりたくないがそんなコトは一切合切考えてないからね」

「まったく、なんで俺ってばそんなキャラになっちゃってるわけ？俺ってそんなにスケベな顔しちゃってますか？」

「そんなコトはさておき、沙和には偵察任務に出てもらう。軍議で決まったからな」

「それじゃあ配給作業はどうすればいいの？」

「……………俺が代わりにやる」

「言いたくはないが言わなきゃダメなんだ。こ、コレは仕事なんだから別に笑われるようなことは一切ない。」

「行き先の指示は桂花がしてくれるから本部で確認してくれ」

「偵察かあ…………。分かったの」

「あんまり納得してる感じじゃないみたいだな。確かに武人らしい風やその辺を気にしてない真桜と違って、沙和は普通の女の子って感じだからな。」

「嫌なら俺が代わってやるっつうの。っーか是非とも代わらせてください。」

「配給作業の方がいいか？」

「偵察だったら戦わなくて良いから別にそれでもいいの」

はあ……、やっぱりか。沙和はもともと春蘭や秋蘭、季衣や凧たちとは違って戦い向きの性格じゃない。

だから戦いになるのはあまら好まないんだろうな。

「沙和はどうして義勇軍に入ったんだ？ 凧や真桜が戦闘好きってわけでもないだろうが沙和は3人のなかで一番戦う嫌だろ？」

まあ、真桜は戦いって言うよりも開発専門みたいなもんだがな。

「別にそれに深い意味はないの〜2人とも少し抜けているところがあるから私が面倒見なきゃいけないの〜」

沙和に言われるようじゃあの二人もドコか抜けているんだろうなあ。だけど真桜はともかく、凧のドコが抜けているって言うんだ？

凧は見るからに真面目だし行動も真面目。だけど見たことがあるのは少しだけだし、どっか抜けてるんだな。うん。

「でもそれだったら後方支援の仕事の方がいいんじゃないの？」

「ああ〜それは考えてなかったの〜」

やっぱりこの子も人が死ぬような戦に巻き込んだじゃいけないようなタイプの人間なんだろうな……。

「だったら華琳に頼んでみるか？ 今ならまだ間に合うだろう」

「ん〜でも今まで3人一緒だったからこれからもずっと3人一緒がいいの〜」

ずっと一緒……か。甘いと言えば甘いんだが、それで割り切れるようなコトじゃないだろう。

それにその気持ちがあれば誰かが欠けると言うこともなくなるだろうな。

「そうだな。これから、みんな、一緒がいいよな」

あー、甘い甘い。甘すぎて胸焼けしちまうよ。

「そうなの〜。じゃあ偵察任務に行ってくるの」

「ああ、気をつけるよ」

俺が沙和にそう言うと沙和は偵察任務に向かうために桂花達のところに向かっていった。

さて、俺は俺でやるべきコトを始めるとしようかね。そう思った俺は配給作業を開始した。

まずは街の人に配る糧食を軍から三日分出すように密かに指示されていたが、俺は必要最低限の糧食を残して、そのほかの糧食は全部配ることにした。

長期に渡って張角の居場所が分からないとなれば、かなりマズい

ことになるが、あいつらが動いてんだからすぐに張角の居場所は分かるだろう。

そうならば、残っている糧食は必要なくなるわけで、焼くか持つて行くか、配ることになるだろう。

だったら今の内に糧食を少なくしておいて、張角の居場所が分かったときのために、すぐに動けるようにしておかないとな。

そんなコトを考えながら糧食を配っていたのだが、配給作業ってホントに地味だね。めんどくさいし……。

配給作業をやること数時間後、俺は配給作業を終えたので義勇軍の本部に向かったのだが、なぜかいきなり桂花に石を投げつけられた。

まあ、別にキャッチしたから痛かったワケじゃないが、なぜいきなり石を投げつけられなきゃいけないんだ？

「このバカ！！ 何やってるのよ！！」

「何って配給作業だが？」

「そんなコト見れば分かるわよ！！ 私が言いたいのはなんで糧食をほとんど配ったかって言ってるのよ！！」

ああ、なるほど。そう言うことか。何の説明もしてないから、俺がバカなコトをやっているとしか思えないか。

「春蘭達が敵の陣地を見つけてこなかったら野垂れ死にするとこ

るだったわよ!！」

「見つかったのか。ならちよつど良い、計画通りだ」

「どついつコト?」

俺は桂花になぜこんなコトをやったかを説明した。まあ、さっきも言ったと思うが、糧食が少なくなれば移動時間が速くなる。

桂花の話によればここから半日ほどのところに、敵の陣地があり、既に物資の移動を始めていた。だから早く行かなければ、マズいことになるだろう。

つまり糧食があつた状態のままだった場合、いろいろと時間が掛かるからな。

「なるほど……。あなたにしてはなかなか良い考えじゃない」

「お褒めに預かり光栄です、桂花さん」

俺は悪戯じみた笑みを浮かべながら言う。

「さすが桜牙ね。残しておいて正解だったわ」

そんな会話をしていると後ろから華琳の声が聞こえてきた。

振り向くとそこには華琳と春蘭がいた。どうやらさっきまでの俺と桂花の話聞いていたらしい。

「つーか、俺を残したのってそれが理由?」

「半分はそうね。半分は人が偵察任務に行かせるわけにはいかないと言ったところね」

さすが華琳だな。俺がなんか考えてると思って残しとくあたり、さすがは未来の霸王と言ったところか。

「すぐに陣を撤収するわ。皆、急いで支度なさい」

「まだ秋蘭と沙和が戻ってませんが……」

春蘭の言うとおり秋蘭と沙和の姿が見当たらなかった。おそらくはまだ偵察任務に出ているのだろうか。

「待つ時間も惜しいわ。現地で合流するように使いの者を出しなさい」

華琳がそう言つと兵士の何人かが遣いに向かった。

「総員、可能な限り急いで撤収、終わった隊から出発なさい。春蘭。撤収はいいから先頭で案内なさい。一番遅くなった隊は、夏侯惇隊の撤収をさせるわよ！！」

おいおい、それはないんじゃないの？ まあ、別に構わないけどな。

それから数時間後、てわ終えた俺たちは半日の行程をわずか数時間で駆け抜けて、山奥にポツンと立つ、古ぼけた砦にたどり着いていた。

どうやら既に廃棄された砦のようだが、ずいぶんいい場所を見つけたもんだな。どうりで見つけれないわけだ。

敵の本体は近くに出た官軍を追撃しに行っているようで、ここに残っている兵はだいたいせいぜい一万ぐらいが良いところだろうな。

「官軍が来たぐらいで砦を捨てるってのは勿体ないよな」

「そんなわけなかるう。華琳さまのご威光に恐れをなしたから、わざわざ砦まで捨てようとしているのだらう」

はいはい、華琳さま大好き春蘭のお話は素晴らしいですね。

まあ、大方連中は中に捨ててある物を使っているだけだからそう言う感覚が薄いんだろうな。あと一日遅かったら、ここはもぬけの殻だったはずだな。

「秋蘭、こちらの兵はどのくらいかしら？」

「義勇軍と合わせて八千と少々です。向こうはこちらには気づいていませんし、荷物の搬出で手一杯のようです」

「それじゃあ、今が絶好の機会だな。今をおいて砦を落とす機会はないな」

「そうね。ならば、一気に攻め落としましょう」

華琳がそう言い号令を掛けようとする、桂花が華琳の言葉を遮り言った。

「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立たせてから
帰らせてください」

「なるほど。この砦を落としたのが誰か分かりやすく示すためか」

確かに『曹』の旗が砦中に刺してあつたら、曹操に砦が落とされ
たのが分かるな。

それに黄巾の本隊と戦っている官軍の狙いもここだろうし、曹旗
があれば諦めて帰ってくだらうな。

そう言えば俺のいた世界でも誰かそんなコトをやったような気
がするな。

「面白いわね。その案採用しましょう。軍旗を持って帰った隊は、
厳罰よ」

華琳がそう言つと真桜がニヤリとしてこついった。

「なら、誰が一番高いところに旗を立てられるか競争やね」

凧に不謹慎だぞ、と言われるが春蘭も季衣もやる気満々のご様子
だった。

さらには華琳までもが一番高いところに旗を刺した隊に褒美を与
える、とか言つたからさらに盛り上がった。

にしても春蘭よ、お前は大人気ないな。少しぐらい我慢してやつ
ても良いだろうに。

「華琳さま。余った食料って待ちに持って帰っちゃダメなの？」

「ダメよ、糧食は全て焼き尽くしなさい」

確かに持って帰りたい気持ちはあるが、糧食を奪ってしまったも華琳の風評はあがるどころか傷つくだけだ。

糧食も足りないのに戦に出た曹操軍は下賤な賊から食料を強奪して食べました、ってな。それに仮に持ち帰って渡したとしても黄巾党の復讐対象になるだけだ。

勿体ないかもしれないがこうするのが一番だ。

「ならこれで軍議は解散とします。先鋒は春蘭に任せるわ」

「はっ！ お任せください」

「ならこの戦を持って、大陸の全てに曹猛徳の名を響きわたらせるわよ。我が覇道はここより始まる。各員、奮励努力せよ！」

華琳がそう言うと軍議が終了した。

部隊の配置の段階になったのだが、義勇軍の配置は風、真桜、沙和の三人がやってくれてるおかげで、まとめ役になっている俺は思った以上にすることが無かったりする。

まあ、せいぜい報告を聞くぐらいが俺の仕事だ。

「隊長。楽進隊、布陣完了しました」

「おう、お疲れ。なあ、凧。旗刺し勝負で勝つたらさ、華琳に何
お願いするんだ？」

「私ですか？ いえ、私はそんなコトはやるつもりはないのです
が……。隊長は何をお願いするんですか？」

「俺？」

そうか。もしも俺が一番高いところに旗を刺したとしたら、俺も
願いを聞いてもらえることになるってコトだったな。

そう言えばなんにも考えてなかったな。別になんにも望むことは
ないけどな。

「じゃあ凧と一日すこさせてもらえるように、仕事を一日休みに
させてもらおうかな」

「えっ、私と……ですか？」

「そう。凧と……だ。嫌か？」

「い、いえ。嫌ではありませんが……」

あー、困ってる凧たんの顔、萌え〜。

でもあんまり困らせるのはコレからの戦いに、影響が出そうだし、
こちら辺でやめておこうかな。

でも凧って結構可愛いよな。凧だけじゃなくて他の奴らも可愛い
けど。

「ゴメン、冗談だ」

俺がそう言うとき少しだけ残念そうな顔を浮かべていたが、大丈夫だろうな。

「ホントはな」何、面白い話してるん？」真桜が

俺が言おうとすると準備を終えたのか真桜がやってきた。

「準備が終わったのか？」

「そやさ。で、何の話しとったん？」

「旗刺し勝負で勝ったら何をお願いするかって話だ。真桜は何を頼むんだ？」

「ウチか？ そんなん秘密や」

真桜に秘密にされるとなんだかいろいろな意味で恐ろしいような気がする。

放っておいたら何をしでかすか分からないからな、真桜は。

「で、隊長は何お願いするん？」

「私も気になります」

そう言って凧と真桜が近づいてきた。するとその二人の後ろから沙和がやってくるのが見えた。

しかもこっちを見つけると頬を膨らませていじけたような顔にな
ってるし。

「みんな何お話してるのー。布陣終わったんだからわたしも混ぜ
てなのー！」

そう言っつて沙和もちやつかり混ざってきてるし。次から次へと忙
しい奴らだな。

「おお、ええとこに来たな。この戦が終わったら、隊長がウチら
の歓迎会開いてくれるって」

おい、んなこと一言も言っつてないだろうが。

「ホントに？ やったあー!!」

ふざけんなよ。こちとら安い給料で働いてて、そんなコトをする
余裕はねえんだよ。

サラリーマンなめんじゃねえぞ、バカヤロオ。

「言っつたよな。凧」

そつだ……。俺には凧がついていたではないか。

凧が一番常識のあるまじめな奴だ。こんなコトを止めてくれるに
違いない。

「……ああ」

前言撤回、ダメだこりゃ。

「はぁ……。仕方ない。特別に許してやろう」

俺が言つと沙和と真桜の二人は喜んでた。まあ、凧だけはそれほど喜んでるようには見えなかったが、表情がうつすらと嬉しそうな顔をしていた。

歓迎会を開かれて嬉しくない奴はいないか。そんなコトを思っていると、凧が話しかけてきた。

「隊長。さっきのことまだ聞いてなかったんですが、何をお願いするつもりなんですか？」

「ん？ それはだな……。秘密だ」

「秘密……ですか？」

凧は秘密だと言つことにあんまり納得していないような顔だった。

別に今教えることもないだろうし、いいだろ。

「いつか教えてやる。俺の願いを」

俺はそういいながら凧の頭を撫でた。

やべ、頭撫でるのもしかして癖になってるんじゃない？

「ッ／／／／／」

しかも風の顔が赤くなってるし。多分男にこんなことされたこと、あんまりないから、恥ずかしいんだろうな。

俺は風の真っ赤になったその表情を見てそう思うのと同時に、早くこんな戦いが終わればいいなと思った……。

第拾肆話 『業炎の剣帝、旗刺し勝負をするの』 (後書き)

感想待ってます!!

第拾伍話『頂点？ そんなもの興味ないね。ホ、ホントだからな！』

side 桜牙

「さて、もう一回訊くが布陣は終わったんだな？」

結局あのあと雑談に花を咲かせていた俺は、三人が布陣の完了を知らせに来たと言うことを思い出し、もう一度訊ねた。

確か凧は終わったことを聞いたけど、真桜や沙和のはなんやかんやで曖昧になってたんだよな。まあ、ここに来たってコトは終わったってコトだよな。

なんだかんだ言っただけに凧には失礼だが、全員抜けているところがある。

だけど後世に名を残すほどの武将になるのだからかなり優秀な部類に入るんだよな。実際にこの三人が戦っているところを見たわけじゃないから分かんないけど。

まあ、凧以外の二人はもう少し自分から考えさせないといけないが……。なんつーか残りの二人は脳味噌にシワが無さそうだ……。

「はっ！ 楽進隊準備整いました！」

「うちも用意できたで〜」

「私も準備完了なの〜」

……せめて、せめて報告の時くらいは上官に対する言葉を選んで欲しい……。俺がそんなコトを思っていると凧が2人を叱っている……。凧よ、君は本当にいい子だね。そんな君が素敵で仕方がないヨ……。

「隊長!? なぜ泣かれていますか!？」

「お? 表情に出ていたか。失敬、失敬。いや、凧があまりにも素敵だったものでな……」

「す、素敵!？」

俺がそう言うとなぜか凧はすつとんきよな声を上げていた。はて、俺は何か変なことでも言ったのだろうか。

「隊長……。それは新手の口説きなんか……?」

「隊長、やるなら時と場合を考えて欲しいの……」

いやいやいや、新手の口説きとかじゃないから。

つーかなんでそんな人を哀れむような目で見てらっしやるんだよ。俺、なんか悪いことでもしたのか……?」

「何を考えてるか分からないが、口説いてるワケじゃないから。君たち二人が、もう少し考えて動いて欲しいと思ってるだけだからね」

「それと口説きに何の意味があるん?」

確かに何の繋がりもないが、口説いてないつつうの。つーか何故に真桜さんは俺をそんなナンパ野郎に仕立て上げたいわけ？

俺ってばナンパ野郎になんかならないから。あんな軟弱野郎になんかならないからね。

「俺は華琳に準備が出来たことを知らせてくるから、三人は自分の隊のところに戻ってくれ」

「了解です、隊長」

「了解や」

「了解なの〜」

三者三様で答えると三人は自分の隊のところに、戻っていった。さて、俺も華琳に伝えに行くとするか。

そう思った俺は春蘭や秋蘭、季衣に桂花に雪が集まっている場所に向かった。

「楽進、李典、迂禁部隊、準備完了だ」

「そう。なら行くわよ。春蘭!!」

「御意!!」

春蘭はそう返事をする的一步だけ前に出て息を大きく吸って叫んだ。

するといきなり凧の腕にオーラののようなものが現れて、それを飛ばして攻撃をしていた。

おお、まさかこの時代で『氣』を使える奴がいるとはねえ。少々驚かされたよ。だけど、まだまだ荒削りで力を出し切れではないみたいだな。

だけど、独学であれぐらい使えるようになったって言うなら、大したもんだ。よし、今度俺が鍛えてやるう。俺はそう思いながら、戦っている凧の元に行く。

「そこそこ『氣』を使えるみたいじゃないか、凧」

「隊長、どうされたのですか？」

凧はわずかな隙を見計らって俺に言ってきた。

「凧を手伝いに来たんだが、良いものが見れたもんでな。ちなみに俺も氣を使えるぞ？」

「本当ですか!？」

俺がそう言うと凧は目をキラキラと輝かせながら言ってきた。

「あ、ああ。まあ、見とけ」

俺はそう言うと右腕に氣を集中させる。

そしてちょうど良いくらいまで溜まったので、引いた拳を思いっ

きり振り抜いた。

「ジーク・インパクト!!!」

俺の右腕から放たれた気による一撃は地面を抉り、敵を盛大に巻き込んだ。俺が放った気の一撃により、敵のほとんどが地にひれ伏していた。

そのあとに隣にいた凧を見たのだが、放心状態に陥っていた。

「どうだ？ 結構すげーだろ？」

「す、スゴいなんてものじゃありませんよ……。私とは桁違いだ……」

凧は放心状態になりながらなんとか言葉を絞り出したとばかりに
呟く。

それほどに俺が放った気はショッキングだったんだろうな。これぐらいだったら前なら驚かれなかったんだが、驚かれるとなんだか照れるな。

「この戦いが終わったら稽古でもやる？」

「はい!!! ぜひ!!!」

うおっ!? ここまで積極的な凧を初めてみたような気がする。
初めてって言うっても会ってから、そこまで時間が立ってるわけじゃないし、見たことがない部分があっても可笑しくはないか。

「じゃあ、まずは終わらせるか」

「はい!」

そして俺たちはさらに進み始めた。

.....
.....
.....
.....

まあ、結果的に言えば俺たちの圧勝、完全勝利ってコトで今回の戦いは幕を下ろした。

春蘭たちの部隊でももうタジタジだったのに、そこに俺たちが奇襲を仕掛けたことによって、抵抗することすら出来ずにいた。

それに残党の処理……と言っても春蘭や季衣、それに俺の技を見た風達でほとんど倒したため、やることは無かったんだけどね。

ちなみに俺は今城壁の上にいる。この時代にこの城より高いものが周りにないので、空を見るのに遮るものがなく、ただ一面に青い空が広がっているだけだ。

元居た世界……と言っても、一回目の転生後を元居た世界と言って良いか分からないが、とにかく変わっているところがなかった。

にしても逃げ回るだけの奴らを、後ろから斬るつてのは胸糞悪いな、畜生。

そう思ったあとに嫌な考えをしている思考を止め、城壁からあたりを見渡したが、こちら側にはほとんど被害が出ていなようだ。

あー、あんなところに火が上がってるヨ……。あれは糧食を燃やしてる火だヨ……。とつても勿体ないヨ……。

そんな様子を、真桜や沙和が火を見て、なんだか納得していないような目をしてるが、ここは納得してもらおうしかない。俺も納得は出来ないヨ……。

「はあ……。腹減った……。つーか旗刺してなかったし……」

俺は手元にある『曹』の旗を見つめながらつぶやく。もう動くのもめんどくさいし、そこら辺に刺しておくか。

刺さないと厳罰を与えろとか言ってたし。

「兄ちゃん!!」

そんなコトを考えているとドコからもなく季衣の声。ドコだ、ドコにいるんだヨ!?

……。このなんとかだ『ヨ』って癖になってきてるような気がする……。

「季衣ドコだー？」

「上だよ、兄ちゃん!」

上？ 上にいるってまさか……。俺はまさかのコトを考えながら

上を見上げると、案の定季衣が砦のてっぺんに上がっていた。

よくもまあ、上がったもんだなあ。

「そんなところにいると危ないぞ?」

「このくらいへっちらだよ! それに華琳さまが言った軍旗を刺す競争もあるし、ここに刺したら良いかなって思ったんだ!」

「……なるほど、確かににそこに刺せば季衣が一番だろうな」

他の奴らももう刺し終えたみたいだし、このまま行けば間違いなく季衣が一番だろう。

そんなコトを思いながら虚空瞬動を使って、季衣が居る場所まで行く。

「じゃあ、俺も刺させてもらっけどいいか?」

「うん、もちろんだよ」

そう言っつて季衣は笑みを見せてくる。あゝ、この笑顔はとても癒されるヨ……。抱きついて頭を撫でてやりたいくらいだよ……。

とりあえず季衣が許してくれたので俺も砦のてっぺんに旗を突き刺す。

「ありがとな、刺させて貰って今度なんか奢るよ」

「うん、ありがとー兄ちゃん!!」

あー、天真爛漫つてのは季衣のためにあるようなものだよね。よくよく考えてみるとうちの武将つて変なのが揃ってるし。まあ、なんかそこで、考えるとあとが怖そうだから考えないがな。

「さて、降りるか」

「うん。……うわっ!？」

俺はそう言つと季衣を抱きかかえる。

そして抱きかかえたまま砦の床に向かって飛び降りた。もちろん衝撃を緩和するように着地したが、季衣は突然のことで目を回していた。

うゝむ、ちよいとやりすぎてしまったか。にしても季衣は優しいよな。

「とりあえず報告に向かうか……」

俺は一人つぶやき華琳の元に向かった。

華琳の元に向かうと、すでに皆が揃っており撤退をするようだった。とりあえず俺も撤退の準備をして、報告はあとにすることにした。

撤退の準備はあつという間に終わり俺たちは城へと向かったのだが、帰りまでの道中で、華琳は俺たちを集めて、簡単な会議らしき

ものを開いていた。

特に急ぎの用事はなかったが、帰ったら片付けに専念してすぐに休めるように、との華琳の気遣いのようだった。

華琳らしいつちゃあ華琳らしいな。それに俺も今日はグッスリと休みたい気分だからな。

「皆もご苦労様。特に凧、真桜、沙和。初めての参戦で、見事な動きだったわ」

華琳の労いの言葉に笑みを浮かべながら嬉しそうにする三人。

まあ、とにもかくにもここら一帯の活動を牽制する事が出来たはずだから、しばらくは大きな活動は出来ないだろう。

ただ、もともと本拠地を持たない連中だったわけだし、今回の攻撃も時間稼ぎ程度にしかならないだろうけどな。

だから連中の動きが鈍くなった今の内に、連中の本隊の動きを掴む必要があるんだが、正直今は休みたいツス……。

「しばらくは小規模な討伐と情報収集が続くでしょうけど、ここらの働きで、黄巾を私達が倒せるか決まると言っても良いわ。皆、一層の努力奮闘を期待する。以上!!」

「ちよーつと待ったーっ!!」

「何かしら?」

俺は華琳が言い終わっただのを見計らって待ったを掛ける。

「旗刺し勝負のこと、忘れたワケじゃないぜ？」

「そうだったわね。それで誰が一番だったのかしら？」

「華琳さま、おそらくアレかと……」

秋蘭は呆れたように指を咎のてっぺんに向けながら、華琳に伝える。そして秋蘭の指の先には二つの旗が刺さっていた。

もちろん俺と季衣が刺した旗だ。まあ、あんなところに刺したのは俺と季衣くらいしか居ないし、当たり前っちゃん当たり前だよな。

「……あれは誰の旗かしら？」

「あつ！ あれは僕と兄ちゃんですよ！！」

季衣は嬉しそうな笑みを浮かべながら言う。

「ならその勝負は季衣と桜牙の勝ちで良いわね。季衣、何か欲しいものはある？」

「うーん……特にないです。兄ちゃんのご飯を奢ってくれって言うってくれたし」

季衣がそう言うと全員視線がこっちに来る。

「あら、そんなこと約束したの？ 桜牙」

「まあな。もちろん全額俺持ちでな」

「だいじょうぶなの？ そんなこと言って。季衣の食べる量は尋常じゃないのよ」

確かに言われてみると季衣の食べる量はハンパ無かったような気がする。

「別に一回分ぐらいなら、なんとかなるだろ。季衣は食いたいもの食っていいからな」

「やったあ！！ 兄ちゃんありがとう！！」

俺がそう言うのと季衣はすげー喜んでいた。

あー、すげー癒されるなあ。この笑顔のためなら自分、頑張れるッス。

「それで桜牙は欲しいものがあるのかしら？」

今度は華琳は俺にそう言ってきた。

すると凧と真桜が口を開いた。

「そう言えば隊長は何かお願いがあるのでは？」

「なんや秘密とか言つてたけど、まさか……ッ！？」

「いや、何考えてるか予想はつくけどそんなコト考えてないから」

俺が言うとなんや、つまらんなあ、とか言っていた。別にそんなこと頼んだって楽しくないっつうの。

「つか真桜は俺をそんなにスケベなキャラとして定着させたいわけ？ 言っておくが、そんなキャラには絶対にならん、断じてだ。」

「それで隊長は何を頼むんですか？」

「そうだな。じゃあ休みをくれ」

俺が言うとは何故か沈黙が走ったんだが、俺ってばなんか変なことでも言ったか？

別に割と普通なことを言ったような気がするんだが、何故何だろうか？

「アハ、アハハハハ。やっぱり面白いわ。桜牙」

とか思っていると華琳がいきなり笑い始めた。同じように秋蘭も微笑を浮かべてるし、春蘭や桂花に至っては勿体ないといったげな顔をしていた。

そして微笑を浮かべていた秋蘭が言ってきた。

「欲のない男だな。今ならもっとましなことを頼めるのだぞ？」

ああ、なるほど。ようするにこいつらは、せつかく何でも頼めるのに休みをくれ、なんつー頼み事をしたからそんな風になってるのか。

「ただ俺としたら随分と贅沢なご褒美なんだけどなあ。」

「いいわ。じゃあ桜牙には少しばかりだけれど、休暇を与えるわ」

「ああ、ありがとよ」

「じゃあ兄ちゃん、その休みの時にご飯食べに行こうよ!」

「ああ、そうだな」

なんにしてもこうして、物語の歯車は着実と終末へと向かっていくのだった。

余談になるが、案の定俺の財布の中身は空になるのだった。

まあ、あんないい笑顔を見れたんだから、よしとするか……。

第拾伍話『頂点？ そんなもの興味ないね。ホ、ホントだからな！』(後書

感想待ってます！！

第拾陸話 『業炎の剣帝、歓迎会を開くのこと』 (前書き)

新年あけましておめでとつございます!!

今年もジャンジャンバリバリ頑張ります!!

とつこと新年一発目!!

ちよつと物足りないですが、とつぞ!!

第拾陸話 『業炎の剣帝、歓迎会を開くのこと』

side 桜牙

「あー……。もう朝か……」

皆様、おはようございます。華琳の元で将を勤めさせてもらっている、龍崎桜牙です……。って言わなくても分かると思うけど、一応言わせてもらおうか。

さて、ワタクシが何故さつきあのような言葉を発したかと申されますと、昨日の夜に華琳に頼まれた書類を纏めたり、風達が明日から……。と言うかももう今日なんだけど、とりあえず街の警備隊を指揮を華琳に任されたので、案を考えたりしてたんだよ。

だけど意外と案が思いつかなくて、朝まで掛かったりしてたりする。そのおかげですっかり寝不足なんですよ。それに風達の歓迎会をやるっても言ったし、そのことも考えてたりしたんだよな……。

「眠い、眠いです、眠いでございますの三段活用！……
眠い」

……って三段活用にもなっていないし……。つーか言ってる悲しい……。とりあえず、玉座の間に風達に集合するよつに言ってたし、待たせるのもアレだからな。

さっさと行ってちゃちゃっと済ませて、夢の国へご案内……。っ

てな。そんなコトを思いながら、フラつく足取りで玉座の間に向かっていく。

なんか玉座の間に行くまでに、いろんな奴とすれ違ったような気もするんだが、華琳じゃなかったらこの際無視しても構わん……。

今の俺には些細なコトは気にならないのでございますコトよ……。日本語、おかしい……。そしてようやくたどり着いた玉座の間の扉を開いて中に入る。

するとそこには主不在の無駄に豪華な椅子を背景に、凧達が横並びに整列をしていた。やれやれ、話をしていると言うことはあの三人を待たせてしまったらしい。

「揃ってるみたいだな……。じゃあ始めるぞ」

俺は欠伸をかみ殺しながら三人に向かって言う。

「どうしたん、隊長。なんや眠そうやないか」

「まあな。昨日は徹夜で一睡もしてないんだ……」

俺は眠い目をこすりながら真桜に言う。まあ、んなこと言ってたってなんにも始まるワケじゃないし、サクツと説明とか終わらせるか。

「えつと……。俺とお前ら三人は華琳の命で街の警備隊の指揮を任されることになったんだが、とりあえず案を考えてみたんだが、どうだ？」

俺はそう言っただけで徹夜で考えた案をまとめた、書巻を勢いよく広げて見せた。

「隊長ってそういうの考えたりするんや？」

「ちょっと意外なの。隊長は戦場でばったばったと敵を倒すだけかと思っただけ」

まあ、今はどんな風に思われてもツツコミを入れる余裕がないから、スルーさせてもらう。いつもの調子でも疲れるのに、今の状態でツツコミんだりしたら、確実にお陀仏だ……。

「沙和、真桜。隊長がせっかく我らのために頑張ってるって言うのに、その言いぐさは何だ」

おお、風よ。俺の代わりにツツコミを入れたりしなくても良いからね、今日ばかりはツツコミを入れたりしなくても良いからね。

「ごめん、ごめん。ちょっと意外やったから言ってみただけやん」

「ごめんなの」

口では謝ってはいるものの、全く誠心誠意が籠もってない謝罪だった。

「わかれば良い。さ、隊長。続きをどうぞ」

「ありがと、風。この調子で、二人を抑えてくれ……」

「分かりました。どうぞ、ご指示を」

なにやらいつにも増してキツイような気がするんだが気のせいだろうか……。

「風。なんやいつにも増して怖ないか？」

「きつと隊長の前だから真面目っ子なの」

「カタいなあ……。冷えた米粒くらいカタいつー！」

「どんな例えだよ……」

あまりにもツッコミ要素満点な真桜の発言に思わずツッコミを入れてしまった……。

「そーゆうトコも風ちゃんらしくていいけどね」

とりあえずそんな会話は、俺にも聞こえてるといふコトは、俺より近くにいる風にも聞こえてるわけで……。あ、睨まれてる。

しかも笑って誤魔化してるし。何つーかなんてまとまりのない俺たちなんだろうか……。そして果てしなく眠い……。

このままでは何もしないまま一日がダラダラと過ぎて、俺が休む時間がなくなりそうだ……。

「とりあえず、ちゆうも〜く」

俺が手をパンパンと鳴らしながら言うと、三人が一齐にこちらを向く。

「ここで話をしても埒が明かないので、とりあえず本日は四人で街を回ることになります。じゃあ、ついてきてくれ……」

「なんや隊長、やる気ないな？」

「もしかしてまだ眠いの？」

もしかしてじゃなくても眠いんだよ。だって一睡もしてないんだよ？ 眠くないわけ無いじゃないか。

そんなコトを思いながら俺たち四人は、華琳の城を出て街に向かうのであった。で、街に出てきたはいいんだが妙に様子がおかしい……。

「隊長、難しい顔をされてどうしたのですか？」

「ん？ いや、別に大したことじゃない……」

実際、いつも一人で歩いてると街の人が声を掛けたりしてくれるのだが、今日は掛けてこられない、ただそれだけだ。

それ以外には別段変わった様子もないし、事件が起こったって言う感じでもない。まあ、この街にいる奴らなら、この街で事件を起こせばどうなるか身にしてみてるだろう。

なんせ俺が取り締まってんだからな。フッフッフッフ……。

とりあえず声を掛けられないのは、目立つ風達が後ろにいるからだろう。一般人からしたら武装してる奴らがいたら、物騒で近づけ

ないからな。

そんなコトを思っていると、俺の周りにわらわらわらわらと子供が駆けよってきた。うっ……また来たのか……。

「お兄ちゃん、また遊びに来てくれたの？」

「今日はどんなお話聞かせてくれるの？」

「おばあちゃんが菓子用意してくれてるから一緒に食べよう？」

あー……、止めてくれ。そんなキレイな目を向けなくてくれ。……。そんなキレイな目で接されると、溶けてしまっうっうっ！！

だって俺つてば吸血鬼だもの！！ もっと濁った目で接して！！ と頑張つてテンション上げようとしてるんだが、やっぱり無理です……眠いです。

「ねえ、後ろのお姉ちゃん達って誰？」

「兄ちゃんの彼女？」

「変な格好」

子供達が尻達を指差しながら言う。やっぱり子供は興味津津なのね……。

「この三人は俺の……友達だ。今日は遊びに来たんじゃなくて、仕事で来たんだ。また今度にしような」

俺は二カツと笑いながら言う。

「お仕事なら仕方ないね!!」

「お兄ちゃん、お仕事頑張ってね〜!!」

「またなあ〜!!」

「おう！ 気をつけて帰れよ！ ……疲れた」

俺は子供たちが帰るのを見送ると、体にドツと疲れが来るのを感じた。

俺ってば子供の相手の仕方なんか分からないから、あんな感じではないのかな。

「隊長、ウチらの格好ってそんなにおかしいか？」

「さあな。見る人から見ればおかしくも見えるんじゃないか？」

さっきの子供の発言をまだ引きづってるのか真桜が訊いてきた。

あんなことを言ったが、正直言うと真桜の格好はかなりおかしいと言うか、目立つ。

主要部分しか隠されていない必要最低限の服装、もとい大胆な格好は街の男の心を鷲掴みにする。それに案の定、顔も可愛いし、スタイルもいい。

「でも沙和に見とれてるだけかもしれないの〜」

「はははっ！ 無い無いー」

真桜はそういうが、沙和の格好は街娘に好評のようだ。ドコの時代、ドコの世界の年頃の女の子は可愛いものが好き。

沙和の格好はそんな可愛いものが好きな女の子に、注目を浴びるような格好をしているのだ。案の定、沙和も可愛い。

「不審者、不審者……」

それで相変わらず一人真面目な凧はと言つと……、一言で表すなら見るからの武人。胸を隠すための防具と籠手は明らかに、武人と示しているような格好だ。

周りから見れば何かあったのかと不安にさせるような格好だが、さっき説明した二人と俺が居ることではないようだ。再三にわたり言うが、凧も可愛い。

ともかく三人のうち三人ともが目立つような格好をしているのは変わらないと言つことだ。

「さて、無駄話『あー！ー！ー！』……今度は何だ？」

突然叫んだ沙和は俺の問いに答える前にどこかへと走り出していた。

とりあえず俺はのんびりと走って、急いで沙和を追いかける二人を追いかける。

それでたどり着いた場所は書店だった。何やら食い入るように沙

和は一冊の書物を見ている。

「『阿蘇阿蘇』……か」

「隊長知ってるの!？」

「まあな」

雪と街に来たときにその書物、まあ雑誌みたいなもんだが、とにかくそれについて色々教えてもらったからな。

『阿蘇阿蘇』には古いや今時の服装の流行などを記していて、街の女の子達にはすげー人気の一品だ。人気すぎて売り切れるのが早く、それを求めて本屋を探す人に道案内を頼まれたりする。

「うーん……。隊長、仕事運が最悪みたいなの〜」

そんなコトを考えると沙和がそんなコトを呟いていた。

あー、確かに最悪だよ。早く帰って休みたいつつのに、まとまりがなくて挙げ句の果てに寄り道なんかしてる部下が居るんだからな。

「あつ、でも恋愛運は絶対調みたいなの〜」

恋愛運なんざいらねえつつつ。そんなものいらなから、俺に睡眠をするための時間を与えてくれ……。

「おーーーーっ!〜!」

「……………今度は何だ」

俺は頭を掻きながら真桜の声が聞こえてきた向かいの店に向かう。すると真桜はすげー小さい……………春蘭を手に持って感動しているのが目に入った。

「販売中止になった超絶からくり夏侯惇や！！ 見てみて隊長、ホンモノや！！」

「見れば分かるさ。で、それにどんな価値があるんだ？」

正直、毎日ホンモノの春蘭を見てるから、今更からくり夏侯惇なんか見たって珍しくもなんともない。

「これはな許昌のからくり師が勇名轟く春蘭さまのからくりを是非とも作りたいっちゅーコトで作られてんけど……………」

「大方春蘭が気に入らなくて発売中止になったんだろ？」

俺がそう言うと真桜は勿体ないとばかりに大きくうなずく。確かにこのからくり夏侯惇は、ドコとなく春蘭に似てはいるが迫力に欠ける。

それにこんなものを売らせるのなんか春蘭じゃなくても嫌つつうの。もし俺が頼まれたとしても、絶対にお断りだね。頼まれることはないと思うけど。

……………つーかどうでもいいから、さっさと仕事に取り掛かるっぜ……………。

「待てっ!!」

すると今度は凧の声というか怒声が聞こえてきた。

「はぁ……今度は何だ、何です、何なんですかア!!」

俺がそんなことを叫びながら凧の声がした方を振り向くと、店先から飛び出してきた不審な男が俺の脇を走り去って行った。

「あつ、桜牙さん！ 盗人だよ、盗人！ 店の売り物かたっぱしから盗んで行きやがったんだよ！」

ブツチン

「待てや……ゴラア……!!」

店主の言葉を聞いた俺はぶち切れて、そう叫びながら俺の脇を通り抜けていった盗人を追いかける。

盗人を追いかけていた凧を一瞬で追い抜いて、俺は盗人の首根っこを掴む。

「は、離しやがれ!!」

俺が首根っこを掴んで、盗人を持ち上げると、逃げだそうとしてジタバタともがいていた。

「バタバタ暴れんじゃねえよ。今の俺は機嫌が悪いんだ」

主に寝不足でわざわざ出向いてきてるって言うのに、全然まともでない三人のおかげでな。

「だいたい、テメエ。この街で盗みをするたあ、いい度胸だな」

「ま、まさかテメエは……」

俺が誰だかと言うことに、盗人が気づいたみたいだったがもう遅い。

「今さら気づいても遅いんだよ、クソツタレ。人生百万回……やり直してきやがれえー……っ!!」

俺はそう叫びながら盗人を思いっきりぶん投げた。距離にすれば五十メートルは軽くとばしたな。

盗人の勢いが止まると盗人は目を回して、泡を吹きながら気絶していた。とりあえずあいつは誰かに任せることにしよう。

「はあ……。畜生、無駄に疲れた……」

俺がそうつぶやきながら後ろを振り向くと、凧は俺を尊敬したような眼差しで、真桜は呆れたような眼差しで、沙和は怯えるような眼差しで俺を見つめていた。

街の人は最近ではめったに俺が人をしょっぴくコトはなくなりました。前まではこんな人は日常茶飯事だったため、別段と驚いた様子はなかった。

「……コレが警備の仕事だ。分かったか？」

「はい、分かりました！」

「今のでいいんかい……」

「沙和にはちょっと無理かもなの……」

凧は返事したことから出来るとは思うが、残りの二人には期待しないでおこう。

せめて寄り道しないで、普通にこなしてくれさえすればいいだろうな。

「さて、一応仕事の説明はしたし。三人の歓迎会でもやるか」

「隊長……ですが」

「ええやん凧。隊長がやる言うてんから、な？」

「そうなの、隊長がいつって言うてるんだからいいの」

真桜と沙和はなんとか凧を説得していたようだ。もちろん二人の説得にかなうはずもなく、凧は折れるのであった。

「今日はお前らの好きなようにしてくれて構わん」

「「やった〜!!」」

喜ぶ二人の脇で凧だけが納得してないような顔をしていたが、嬉しそうな顔もしてたので問題ないだろう。

まあ、言ったあとで後悔したんだが、財布の中身が飛んでいくの
であった。

今はそんなコトどうでもいいか。だって眠いし……。では皆さん、
おやすみなさ……。zzz

第拾陸話 『業炎の剣帝、歓迎会を開くのこと』 (後書き)

次回、呉の方に遊びに行きます！

三話ほど呉での出来事を書きます！！

そのうち蜀にも行く……かも。

感想待ってます！！

第拾漆話 『業炎の剣帝、孫呉の王に出会うのこと』 (前書き)

今回から三話ほど呉でのストーリーです。

ではじまりー…

第拾漆話 『業炎の剣帝、孫呉の王に会うつ』

side 桜牙

「ふう……。こんなもんだな」

現在、俺は華琳の城の一番広いところで最近毎朝の日課となりつつある鍛錬を行っていた。右手には白羽で左手には黒羽を持ち、相変わらずのイメージとの戦いを終えたところである。

ホントなら朝は凧か春蘭と鍛錬を一緒にする予定だったのだが、今日はあいにくとそのどちらもが予定が入っており、朝から出かけているようだった。

そうなれば他の実力者である秋蘭や季衣と鍛錬をしたいところなのだが、秋蘭には文官としての仕事があるし、季衣は朝が苦手なようで無理。

つまりは必然的に俺が一人でやらなければならなくなると言うことになる。イメージでもある程度感覚を取り戻すことが出来るが、人間ってのはイメージだと無意識に自分より弱く相手を設定してしまうものだ。

だからイメージを相手に鍛錬するのは俺的にはあんまり効果的じゃないと思うんだよな。それでも少しは鍛錬になるんだから、この際イメージで我慢しよう。

さて、そんなコトはさておき、皆様は旗刺し勝負のことを覚えて

いるだろうか？ あのあとに俺の望み通り休暇を貰うことが出来た。しかも一週間分も。

これは普通に考えたら絶対に有り得ない数値の休みなのだが、結局休めたのは季衣と街にご飯を食べに行った日のみ。他の日は全てに俺も出なければならぬほどに、手が空いてる奴がいなくて休みを返上して出向くことになった。

つまりは結局休みは一日だけで残りは他の時に回されたつつうことだ。で、最近は結構落ち着いてきてるから休みをもらいたってワケなんだよね。

そんなコトを思っていると、後ろから声を掛けられた。振り向くとタオルを手にした雪が立っていた。

「おはよう、雪。どうしたんだ？」

「おはようございます。いえ、桜牙さんが毎朝ここで鍛錬しているのは知っていたので、汗をかいていると思ってタオルを持ってきました」

雪はそう言うと天真爛漫な笑みを浮かべながら俺にタオルを差し出してきた。ああ……やっぱり天真爛漫な笑みってのは心が癒されるよなあ……。世間のゴタゴタなんかキレイさっぱり忘れられそうだヨ……。

「サンキュー、雪」

「さんきゅー……？ それって天の国のお言葉ですか？」

俺がタオルを受け取りながら、何気なく言うと雪が首を傾げながらそう言ってきた。そう言えば、慣れてきてたけど、やっぱり英語は通じるわけ無いよな。

「まあ、ありがとって言う意味だ。改めて、ありがとな。雪」

俺は笑みを浮かべながら、雪に向かって言う。

「はい！／＼／＼／＼」

なんで顔が赤くなったか分からないけど、とにかく可愛いヨ……。天真爛漫って良い言葉だとは思わないか？ 確かにバインバインな春蘭や秋蘭もいいが、やっぱり癒してくれるのは汚れない無垢で天真爛漫な笑みだヨ……。

ん？ 華琳や桂花はどうしたって？ いやあ、あの二人も確かに顔はいいけど、華琳は女の子好きだし桂花も華琳さま好きだし。それに二人とも幼児体型……。せめて幼児体型でも癒やしを与えてほしい。

「さてと、今から華琳のところに行くんだが雪もついてくるか？」

「華琳さまのところには？ 何をしに行くんですか？」

「旗刺し勝負のときのご褒美を貰いにな」

俺は雪にそう言うと華琳が居ると思われる玉座の間に向かって歩きだした。玉座の間の前まで行くと、中から人の気配がした。

扉を開けるとそこには無駄にデカイ玉座に腰を掛けている華琳が

いた。それを確認した俺は中に入っていく。

「おはよう、華琳」

「ええ、おはよう。あなたの方から来るなんて珍しいこともあるのね」

華琳は不思議そうな表情を俺に向けながら言う。

そう言えば俺って朝の軍議とかでしか自分から華琳のどこ来たこと無かったな。他には報告書を私に来るときくらいのもんかな。

「まあね。華琳、旗刺し勝負のコト覚えてるか？」

「もちろん覚えてるわ。あなたは休暇が欲しいと言っただけで、結局一日しか休めなかったものね」

「そこでだ。俺に休暇を与えてはくれないだろうか……？」

俺は華琳に確かめるように言う。やっぱり一日休んだからダメだとか言われるんだろうか……。それだったら確かに一日休んだんだから反論はできない。

一日とはいえ俺の望み通りに休暇が与えられたんだからな。まあ、その休みの日は俺の金が羽をつけて財布から飛び立って行ったただけだったんだけどね……。

「別にかまわないわ」

「やっぱり無……え？ いいのか？」

「なんでも言わせないで。私がいいと言ったのよ？」

ま、まさかこんなあっさりと許してくれるとは思わなかったぞ……。自分から言い出しておいてアレだが、俺はほとんど諦めてちゃったりしてたんだよね。

で、なんでそんなにあっさり許可を出してくれたかを訊いたところ、今のところ大きな動きも見れてないし、文官の仕事も秋蘭や桂花だけで事足りるからだそうだ。

警備に関しては凧達だけにやらせてみるのも勉強になって、為になるかららしい。なんつーか色々と考えてくれてるみたいだな。さすが、霸王と言つところだな。

「それにあなたは皆の数倍の仕事はこなしているでしょ？」

「いいえ、そんな覚えはありません！」

まあ、たまに秋蘭から仕事をもらったり、凧達から警備の仕事を代わってもらったりはしてるがそこまで働いてるとは思わない。

だいたい何にも分からない俺を華琳は拾ってくれたんだから、その恩を返すためだったらこれくらいしないな。

「自覚してなかったのね……。皆も言っているわ、桜牙は働きすぎだと。だから休暇を与えるわ」

「ありがとう」

別にそこまで働いてるとは思わないけど、みんながそう思うんなら働いてるんだよな。雪も俺の脇で、うんうん頷いてるし。

「だけど、もしもの時はすぐに戻りなさい」

「それぐらい分かってるさ。華琳が困ってるのに、休んでられるかっつうの」

俺がそう言うと満足げに微笑む華琳。とりあえず休暇は貰えたので、色々なところを回ってみるとしよう。さすがにずっとここら辺だけだと、飽きてくるからな。

そう思いながら振り返り、玉座の間から出ようとしたのだが、ピタッと首筋に何やら冷たいものが当てられていた。よくよく確認してみると、華琳の武器の鎌《絶》が首筋に当てられているもの正体だった。

「か、かかか華琳さん！？ い、一体何故にワタクシは首に、そのようなものを当てられなければならないのでございましょうか……！？」

「あら、心当たりがないかしら？」

「な、何もやった覚えも言った覚えもないのですが……」

「ふうん。そうなんだ。じゃあ、訊くけど一体誰が幼児体型なのかしら？」

ぶっ！？ な、ななな何故俺の心の中の言葉が華琳に読まれてんだよ！？ 明らかにおかしいだろ！？

ま、まさか華琳は実は人の心を読むことが出来る女の子だったと言うのか！？ くっ、華琳にそんな力があつたなんて……。この龍崎桜牙、見誤ってしまったぞ……。

「そんなコトは断じて思っていない。俺が華琳に対してそんなこと思うわけ無いじゃないか」

こうなったら誤魔化すしかない。いや、誤魔化すんだ。俺の演技力で！！

「そう。なんだかそんなコトを言われたような気がしたのだけれど、気のせいだったみたいね」

華琳はそう言うとうようやく《絶》を納めてくれた。とりあえず助かったみたいだ……。

そして一難をなんとか切り抜けた俺は愛馬である《ジャック》に乗り、一週間の小旅行に出ることにした。

出ることにしたのは良いんだけど、何故に俺の行く先にはこんなしかないのかねえ……。

今の状況を説明させていただこう。何やら俺の目の前では戦いが起こっております、以上！！

えっ？ もう少し詳しく説明してくれだって？ うむ、やっぱり適当じゃ分かりにくかったか。じゃあ説明すると、小旅行にでた

俺はとりあえず適当にぶらついていた。

そんなとき俺の耳に金属同士を打ちつける独特の音が聞こえたので、俺はそっちの方に向かっていった。するとそこには、結構な数の盗賊に囲まれた二人の少女が居た。

多勢に無勢とは全くよく言ったもんだな。あんな女の子二人に、あんな数の男共で斬りかかるとは情けねえ。

みつともねえつたらありやしねえ。俺はな、ああいうタイプの奴らが一番嫌いなんだよ。俺はそう思うと、『白羽黒羽』を創り出す。

『行くぜ、ジャック。山賊狩りの始まりだ』

『ほい来た！！ さっすがわいの旦那や！！』

『当たり前だ、行け！！』

俺がジャックにそう叫ぶとジャックは山賊達に向かって走り出した。そして俺はジャックが走った勢いを利用して、山賊を一気に切り裂く。

俺はジャックから飛び降りて、二人の前に立ちながら叫ぶ。

「多勢に無勢とは随分と卑怯な手を使うんだな下郎共！！ そんなテメエらには生きてる価値はねえ！！ その命……天に返すがいい！！」

俺はそう叫ぶと山賊狩りを開始した。

side ????

私は目の前の光景を信じられないでいた。なぜなら私たちがあれだけ苦戦した山賊達を、突然現れた武人が一人で圧倒していたからだ。

突然現れた武人は不思議な白と黒の短剣を、巧みに使い山賊達を圧倒している。そんな彼の表情には全くの焦りもなければ、苦戦している様子もない。

むしろ彼はこの戦いに余裕すら感じていると思わせるような動きだった。振り上げた短剣の動き、とにかく敵を圧倒する彼の動きは一つの演舞を見るかのように美しかった。

「蓮華様、彼は一体何者なのでしょうか……?」

そうやってきたのは孫呉の一軍を勤めていて、私の護衛でもある思春だ。思春は私が息抜きのために、馬乗りなどを誘ってしまったせいで怪我をした……。

私を庇って斬られてしまったのだ。もしあの武人が助けに来てくれば、今頃私たちはどうなっていたか……。

「分からない。分からないけど、彼のおかげで私達が助かったのは事実だ」

私は思春にそう言いながら彼の方をみる。私たちがそんな会話をしている間に、あれだけ居た山賊達もすでにいないと等しくなっている。

そして彼は最後の山賊に持っていた短剣を投げつけ、山賊を絶命させた。彼はやれやれ、と言いたそうな顔をしたあとに体をほぐしたあと、私たちの方に近づいてきた。

彼からは殺気などは感じない。だけど、それでも警戒せざるを得ない威圧感があった。彼の身のこなしからは百戦錬磨も力を感じる……。本当に彼は一体何者なの……。

私がそんなコトを思っていると彼が話しかけてきた。

「あんた達、無事か？」

彼の声は思っていたよりも暖かく、安心させてくれるものだった。

side 桜牙

「あんた達、無事か？」

俺は山賊を片づけたあとに、襲われていた女の子二人に話しかけた。一人は藍色の髪に、吊り目な気の強そうな女の子。一人は桃色の髪に何やら王と言いたげな格好をしている女の子だった。

とりあえず言いたいんだが、何故この世界の女の子はこうも美人揃いなんだろうか……。

「わ、私は大丈夫だが、思春が……」

桃色の髪の女の子がそう言いながらもう一人の女の子を見た。どうやらさっきの奴らに斬られたのか、切り傷があった。

血が出ているもののそれほどまでに傷が深いと言っわけではなさそうだ。

「そのまま放っておくのもマズいな。まずは手当をするか」

俺はそう言いながら保険のために、ジャックの脇に下げておいた包帯と、自分で作った傷塞ぎの塗り薬を取り出す。

「ちょっとしみるかもしれないが、我慢してくれ。えっと……」

「甘寧、字は興覇だ……」

「甘寧、ちょっと我慢してくれ」

俺は甘寧にそう言うのと傷に薬を塗る。すると予想以上に傷にしみたのか、甘寧は顔をしかめた。

一番ヒドいのは今薬を塗ったところで、残りは大したこと無いくらいだな。なので俺は薬を塗ったところに包帯を巻いていく。そんなコトをしている間にもう一人の女の子に声を掛ける。

「君の名前は？」

俺はなるべく怖がらせないように、優しく言う。だが何故か返答が返ってこない。

おかしいな、と思いながら俺がもう一人の女の子の方を振り向くと、何故か顔をポツと赤くして俺を見つめている女の子がいた。

「あ、あのー……。風邪でもひいたのか？ 顔赤いぞ？」

「え、いや!? あ、えと……。ええ、大丈夫よ」

焦りはじめかと思えば咳払いをして、落ち着きを見せる少女A。
表情がコロコロと変わって面白いな。

「そんで君の名前は?」

「わ、私の名は孫権! 呉の王孫策の妹よ」

……マジで? よりにもよってこんなところで孫策ね妹の孫権に
会っちゃったよ? そのうち孫権と戦わなきゃいけないのに、助け
ちゃったよ。

まあ、別に戦っても殺す気はなかったから構わないが、まさかこ
んなところで会うとは……。

「あの……あなたは何者なの……?」

そんなコトを考えていると孫権が訊ねてきた。ここでホントのこ
とを言っても構わないのだろうか? まあ、そんなコトは後から考
えれば何とかなるだろうな。

「俺は龍崎桜牙だ」

「龍崎桜牙……。まさか、あなたが天の御遣い?」

「まあ、そんな風に呼ばれてるな」

俺は甘寧の包帯を巻き終えると立ち上がる。とりあえず今の自己

紹介で俺が《魏》の所属で、自分たちが《呉》の所属。つまりは敵対するもの同士ってのは理解しただろうな。

だったらこの場所で孫権と甘寧と一緒にいるのは得策とは言えないだろう。だったら俺はさっさと立ち去るべきだな。

そこまで考えた俺は二人偽を向けて、立ち去ろうとする。だが何故か孫権に呼び止められた。なので俺はとりあえず振り向く。

「どうした？ 俺達は敵対するもの同士だ。これ以上一緒にいても害はあっても、特はないだろう？」

「確かにそうだが、だったら何故アナタは私達を助けてくれたの？」

孫権は俺の瞳をジッと見つめながらそう言ってきた。

「……困ってる奴を放っておけないだろ」

俺は溜め息混じりで孫権の問いに答える。するとさっきまで険しかった孫権の表情が柔らかくなる。どうやら警戒を解いてくれたみたいだが、そこは警戒したままでいろよ……。

俺は敵なんだから何するか分からないだろうに……。何かをやるつもりはサラサラないんだが、俺以外の奴だったら、斬られてるっつうの。

「だったらあなたには思春や私を助けてもらったお礼がしたいの」

「あのね。あんたが許したとしても、他の奴らが許さないかもし

れないだろ？ 仮にも俺は『魏』の将だ、そんな俺が『呉』の土地に行ったら大変だろ？」

「だ、大丈夫だ。私がなんとかしよう」

どうやら孫権はどうしても俺にお礼がしたいらしい。俺は別に礼がほしくて助けたんじゃない、山賊共が気に食わなかったからぶっ飛ばしたただけなんだけどなあ。

それを言ったとしても多分俺は連れて行かれるんだろうなあ。『孫呉』の土地に……。

「蓮華様、本当にこ奴を連れていくのですか？」

今まで放置気味にあった甘寧が口を開いた。

「助けてもらったのだから、礼をするのが筋だろう」

「蓮華様がそう言うのでしたら……」

甘寧は俺を『孫呉』の土地に連れて行けば、どのようなことになるかを理解しているようだ。別にそんなコトをする気は毛頭ないが、もしものコトを考慮すれば、俺を連れていくのは得策じゃないと考えてるんだろう。

確かにコレが普通なんだが孫権は聞くつもりはないようだ。

「はあ……。分かった、ついて行くよ」

こうして俺は孫権に半ば連行気味に連れて行かれることになった。

どうしてこうなった……。俺は孫権と甘寧に連れてこられて、城のようなどころにやってきたんだが、どうやらその城と言うのは孫策の城だったようだ。

連れて行かれたときは何やら、貴様刺客か！！とか、このような場所にまで来るとは良い度胸だ！！とか叫ばれて斬られそうになったのだが、それを孫権が何とか静めてくれた。

んで現在は孫策、黄蓋、周瑜と言った歴史に名を刻むほどの人たちの前に居るワケなんだが、孫策が俺を舐め回すように、見てきている……。

「ではあなたは『魏』の将で、ここに来た理由は蓮華に連れてこられたから、と言うことかしら？」

「まあな。別にあんた達の土地に何かしようとか、戦いに来たとかじゃなくて、ただ単に休暇を楽しむためにブラブラしてただけだ」

「それで蓮華達が襲われてるのを見て、助けた……」

「そう言うこと。分かってもらえたか？」

俺がそう言うと、孫策や周瑜と言った歴史に名を残した人たちが、話し始めた。すると黄蓋が俺に話しかけてきた。

「ここまで来て何もしないとするのは珍しい者もいるものじゃな」

「そうか？ 別に戦う理由もないのに戦う必要はないだろ？ だいたい今は黄巾党のせいで各地が困ってんに、んなことやつてられねえだろ」

「お主は、真っ直ぐで良い目をしているな。気に入った！！」

黄蓋は俺の言葉を受けて笑いながら、俺の背中をバシバシと叩いてきた。力、強くないか？ つーかいつか敵になるかもしれないのに、気に入られても困るんだけどな……。

あー、やっぱりこの地に来たのは間違いだつたかなあ……。まっ、身内が敵になるとしても敵になつた以上は殺すから関係ないけどね。

そんなやりとりをしている間に、孫策と周瑜の話が終わつたらしくこつちを見ていた。

「あなたの言葉を信じて、少しの間城で休んで行きなさい」

「いいのか？ いつか敵になるかもしれないぞ？」

「いつかでしょ？ それに、今のあなたは敵じゃないでしょ？」

「まあ、そう言うことになるな」

「だつたらあなたは蓮華や思春を助けてくれた恩人なのだから、それくらいさせてもらえないかしら？」

そう言ってくる孫策なのだが、ホントにいいんだらうか……。『呉』の地、しかもその王の『孫策』の城に『魏』である俺が泊まつてもいいのかねえ。

まあ、良いって言ってるんだからとりあえず休みは『呉』の地で休ませてもらおうかな。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうよ。もちろん俺が何かしでかさないように、見張りをつけてもらっても構わない」

「そんなコトするつもりはないんでしょ？」

「当たり前だ。そんなコトやったって意味ないだろ？」

俺が言う満足げに微笑む孫策。何回も言うが、何故にこの世界の女の子は美人なんだろうか……。

「ただ、俺の知識を与えたりすることは出来ないから、そこは勘弁してくれ」

「分かってるわよ。そんなコトしないわ」

孫策は頬を膨らませながら言うてくる。何っ？か、人懐っこいと言うか、話しやすいというか……。とりあえず親しみやすい人だと言うことは間違いないな。

だけどそんな彼女の威で立ちには、かなり強いものを感じる。今は確か袁術の下に就いて居るみたいだが、そんなのには治まりきらないだろうな。

俺が知ってる三国志でも独立していたが、この孫策もそうなのだろうな。

「じゃあ改めて名乗らせてもらっつ。龍崎桜牙、よろしくな」

「私は孫策、真名は雪蓮。呉の王よ」

「……真名、いいのか？」

「ええ、二人を助けてもらったお礼よ。だけど、孫呉の土地にいるときにしか呼んじゃダメよ？」

「分かってるさ」

もしも華琳のところまで孫策・雪蓮のコトを呼んだとしたら、確実に首がとぶ……。死なないとしても、そんなコトは避けたい……。

とにもかくにも俺の休日、『孫呉』で休むことになるのであった。

第拾漆話 『業炎の剣帝、孫呉の王に出会うのこと』 (後書き)

蜀にも行くかもしれませんが、今のところは予定はありません。

感想待っています!!

第拾八話『業炎の剣帝、拾うのこと。ってサブタイ適當すぎるだろ!?!』(前書)

今回はオリキャラが一人出ます。

ではございませー…!

第拾八話 『業炎の剣帝、拾うのこと。ってサブタイ適當すぎるだろ!?!』

side 桜牙

俺が孫策にお世話になりはじめてから、早くも三日が経過した。その間に俺は『呉』の兵士達に見られないように行動していた。

何故かと言えば、未来で戦いになったとき何かがあるかもしれないと思つたのだが、残念ながら俺はかなり兵士達に見られてしまつていたらしい。まあ、別に仲が良くなつたとかではないから、気にしないでおくとしよう。

そんなコトはさておき、現在俺は何故か甘寧と模擬戦の真っ最中である。何故かと理由を訊けば、自分より遙か高みにいる俺と戦うことで、孫権を守りきることが出来るようになるかららしい。

甘寧はあの俺が二人を助けたときのことをかなり気にしていたらしく、わざわざ俺に模擬戦を申し込んできたのだ。怪我が完全に治つてないから嫌だ、と言つたのだが、どうしても聞かずに戦うことになつたのだ。

「さて、甘寧よ。いつでも掛かってくるがいい」

俺はそついいながら事前に創つておいた『白羽黒羽』を構える。俺の言葉を受けた甘寧は持つていた剣を、腰から抜きはなつた。

だが甘寧は剣を抜き放つただけで攻撃を仕掛けてこようとしない。どうやら俺の隙を伺っているようだ。だがもちろんのこと、そんな

打ち込ませるような隙は作ってないから、見つけるまでに時間が掛かるだろうな。

いつまでもそんなコトやってても埒があかねえな、と思った俺はわざと左から打ち込めるような隙を作る。すると今まで動かなかった甘寧が、一気に踏み込んできた。

その速さは並の者では見切れないような速さだったが、俺からしてみればちょうど良いくらいの速さだ。

ガキーン！！ と孫策の城に金属同士を打ち付け合わせた独自の音が響き渡り、甘寧の後ろに甘寧が持っていた剣が突き刺さる。

俺は甘寧が剣を振り上げると同時にそれを白羽で弾き、もう片方の黒羽を甘寧の首筋に当てていた。剣を失った甘寧には既に打つ手はなく、負けが決まっていた。

「今のが戦だったら、首がとんでたぜ？ 甘寧」

「……」

俺がそう言いながら黒羽を甘寧の首筋から離す。甘寧は俺が離すと、後ろに刺さった剣を拾い上げ鞘に戻した。

「なかなか良い動きだが、もう少し慎重に行った方がいい。一撃で相手をしとめるつもりなら、一瞬で相手の隙を見つけるつもりで挑めよ？」

「分かりました。御教授、感謝いたす」

甘寧は俺にそういつと朝の軍議でもあるのか、一礼したあとに城の中に入っていった。すると何故か後ろから声を掛けられた。

振り向けばそこには孫権が居たんだが、軍議があるんじゃないかっ
たのか？ と俺は思いながら孫権に言う。

「おはよう、孫権」

「え、ええ、おはよう。それにしても思春相手にあれだけ出来る
なんて、スゴいな」

いつから見てたんだろうか……と訊ねたいところだが、別に見ら
れてダメってコトもないし、あえて訊ねないことにしよう。

「まあね。一応鍛えてるからな。ところで、どうしたんだ？ 俺
に何か用か？」

「い、いや用と言うわけではないのだが……」

ん？ 何やらもってるみたいだが、ホントにどうしたんだろう
か？ それに会ってからずっと思ってたんだが、なんでわざわざ口
調を変えてるんだろうな。

人にはそれぞれ事情があるから訊かないが、何の用だったんだ？

「用は無いのだけれど、偶然通りかかったから見てたんだが……
邪魔、だったか？」

「別に邪魔じゃないけど、ただ気になったからな」

「そ、そう……」

なんだかぎこちなく話してくるんだがホントに何なんだ……。

「それより軍議でもあるんじゃないのか？ 甘寧が城に入っていたぞ？」

「そ、そうだった。桜牙、またあとで」

「おう、後でな」

孫権は俺にそういうと城の中に入っていった。俺はそれに一言だけ答えて、再び鍛錬を繰り返すのだった。

時間は腐るほどあるし、どうせやることもないんだったらコレに限るな。

アレ？ 休暇のはずなのに休んでないじゃん……。

あのあとしばらく鍛錬を続けた俺は、あまりにも暇になってしまったので、街にでることにした。

鍛錬は日が真上にあがる頃まで、つまりは昼あたりになるまで続けていたんだが、どうにも暇だ。

それに今思えば朝飯も食べてないし、ずっと動きっぱなしだったために俺の腹の虫は今も猛抗議中である。

さて、とりあえず街に出てきたは良いが、孫呉の土地になれるわけじゃないから、ドコになにがあるかが分からないんだよな。

そんなコトを思いながら街をぶらぶらと歩いていると、裏路地のところで倒れている少女を見つけた……………と言つより見つけられた。

何故ならその少女は俺の足をガッチリとホールドして、離さないようにしているからだ。……………なんですか。

「あ、あの……………。そこのお人よ。何故にワタクシの足をガッチリと掴んで、逃がさないとばかりに、力を込めてるんでせうか？」

何故か敬語になってしまったかは分からないが、この際気にしないでおう。

と言うよりこの少女はいつたい何なんだろうか。俺をいきなり掴まえやがって。

「お腹……………空いた……………」

……………。俺を掴まえた奴はいきなり腹が減ったと宣言してきやがった。それアレか、俺に飯を奢れって言うことなのか？

ふざけてんじゃありませんか？ 只でさえ季衣の飯代とか色々なコトに少ない給料がダメージを受けていると言つのに、こいつは他の地に来た俺から金を巻き上げようっていつのか？

グウウウ……………

その間にも目の前の少女の腹の虫は飯を寄越せと、少女自信ではなく俺に対して猛抗議を仕掛けてくる。

くっ、俺の中の悪魔と天使が意見を出して戦い合っているぞ！！

『ワタクシは天使の桜牙です！！ 困ってる人がいたら助けるのが人間でしょう！！』

『俺様は悪魔の桜牙だア！！ グハハハ、なにを言うか愚か者めえい！！ 俺様は人間じゃなくて吸血鬼だろうが！！』

むむむ、確かに悪魔の俺の言うとおりだぜえい……。俺の身体は確かに真祖ハイデイレライカョーカの吸血鬼だ。だけれど心まで吸血鬼になった気は断じてない！！

『人間の心があるのならば助けるべきです！！』

『グハハハハハハ！！ 甘い、甘すぎるぞ！！ ショートケーキに生クリームを掛けた後にハチミツを掛けるくらい甘いぞオ！！』

おおお……。悪魔の俺よ、なんつー胸焼けがしそうな例えを出してくるんだ……。

……。
だけどこのまま少女を助けたとなれば、俺の金は間違いなく天に召されてしまうな。でも助けないってのはなんだか後ろめたいしな……。

『そうです！！ ここは助けてもらった身なのですから、他の人が困ってたら助けるべきです！！ 悪魔のワタクシは消えなさい！

『。』

『グオオオ……』

どうやら天使の俺が悪魔の俺にとどめを刺して決着が付いたらしい。結果的に言えば女の子を助けると言う選択肢になったようだ。

そう思った俺は俺の足にガッチリとしがみついている女の子に向かって言う。

「よしよし、どうしたんだ少女よ。何故にこんなところで死にかけてるんだい？」

「お腹…空いたって言うてる…でしょ」

人にたかろうとしてるくせになんとも偉そうな女の子。やっぱり奢るのやめた方がいいんじゃないのか？

だってせっかく奢ってやろうと思ってるのに偉そうな態度で、しかもその上頼みもせずに、いかにも俺から言い出させたように仕掛ける策略。

頭が良いんだか悪いんだかよく分からないが、とりあえず自分から頼むまで、奢ると言わないようにしよう。フッフッフフ……。

「腹が減ったから何だって？ それだけじゃ分かんないなあ？」

「分からないって……あんだ…バカ？」

腹が減りすぎて言葉を続けられなくせに強気な態度。しかも俺をバカにするとは良い度胸だな、おい。

そう思った俺は無理やり足を振り払おうとするのだが、なかなかふりほどけない。なんつー馬鹿力だ。

「離してくれないかなあ？ 用事があるんだけど？」

「目の前で……女の子が倒れてるのに……見殺しにするわけ？」

「俺には倒れてるようには見えないな。せいぜい遊んでいるようにしか見えん。それに人にものを頼む態度つてもものがあるだろ」

俺は意地悪い笑みを目の前の女の子に向けながら言う。すると女の子はうー、と唸るようにしてこちらを睨みつけてくる。

「正直に言おう、全然怖くないと。そして女の子は腹を決めたように、俺に言ってきた。」

「ご飯……奢ってください」

「わかった」

「えっ!？」

えー、何というか一言で表すならば凄まじいの一言に尽きるようなコトが俺の目の前で発生しております……。

あの拾った女の子が尋常でない速さで頼んだ品を口に運んでいた。頼んだものもメニューの端から端、つまりは全部を頼んで半分ほど

を食べたのだがその速さは未だに衰えることなく、初期の速さのまままで食べている。

いや、初期のままと言うよりは食べる速さ上がってきてるんじゃないね。だって箸の動きが尋常じゃないんですけど、つーかまさかの二刀流で食べてるんですけど。

つーかどんだけ腹空かしてぶっ倒れてたんだよ。今の俺の財布の中身が裕福だったから払いきれるものの、普通だったら払いきれないぞ。

「はあ……。あんた、名前はなんって言うんだ？」

「へっ？ ははひははへは『待て待て待て』ふ？」

俺は口に食べ物を詰めたまま話そうとする女の子の言葉を遮る。

「食ってからで構わない」

「ははっは」

女の子は了承の言葉を発したかは分からないが、俺にさういうと再び食べ始めた。この食いつぷりはうちの季衣にも劣らないな。

それに女の子は季衣よりもかなり年上のようにだ。少しだけ赤みの掛かった髪を、サイドテールにして顔立ちは言わずもがな美人。

スタイルは春蘭や秋蘭と華琳のスタイルを足して二で割ったくらいの極平均的なスタイル。だがかなり華奢で、季衣同様にドコにそんだけの飯が入るんだよと言いたくなる。

そしてそれから数分後、テーブル二つ分を使って並べられていた料理の数々は、もはや姿がなくなっておりブラックホールと言う名の女の子の胃袋に吸い込まれていた。

さて、食いつぷりを見ているのは良いんだが見てるだけで腹が一杯になってくるのは気のせいじゃないだろうなあ……。季衣の時も同じようなことあるし。

そんなコトを考えている間に女の子は食べ終えたのか、満足げな顔をしていた。

「さて、改めて訊ねるがおまえの名前は？ 俺の名前は龍崎桜牙だ」

「私の名前は『太史慈』よ。いやあ、桜牙には助かつちやつたよ。行き倒れのところで、助けてくれたんだからね。あはははははは！！」

軽っ！？ 何なんですか、この現代的なノリの軽さは！？ つーか行き倒れってどんだけの状況だよ！？

見た目的には働けるくらいの年齢なんだから、ちゃんと働いて金稼げば、そんな行き倒れになるような状況にならないだろうつつつの。

と呆れ気味にそんなコトを考えていると、あははははと笑っていた太史慈の動きがピタッと止まった。

「えっと……悪いんだけど、もう一回名前言ってもらえる……？」

「ん？別に良いけど……」

さつきまでなんか現代っ子って感じだったんだけどどうしたんだろつか。

「俺の名前は龍崎桜牙だ。以後お見知り置きを」

「……………ええ……………っ!？」

俺が改めて自己紹介をすると太史慈がいきなり叫びだした。太史慈があまりにもデカい声で叫んだことにより、周りにいた客達が一気にこっちを向く。

俺はそんな客達に向かって愛想笑いでしのが、とうの太史慈は気にした様子もなく目をキラキラとさせていた……ん？キラキラとさせていた？

何故に太史慈は目をキラキラとさせながら、俺を凝視してんだよ。べ、別に照れてなんかないんだからね!!

「あんたがああ『剣聖』の龍崎桜牙!? やったあー、早速目的達成じゃん!!」

イエイ、イエイと踊りながら太史慈は言うが注目を浴びすぎてるのに気づいてないわけ？つーか俺に会うのが目的ってどういうコトだ？

おかしいな。俺が孫呉の土地にいるってコトは誰も知らないはず

なんだけどな。

「ねえ、桜牙。私を弟子にしてよ!!」

「……………はい?」

今こいつ自分を弟子にしろって言ったのか?

確か俺が知ってる三国志じゃあ、なんやかんやで『呉』の将になるはずだが、もしも俺の弟子になるんだったら『魏』の将になっちまうぞ。

「実はさ、あんたの噂を聞いて是非とも弟子にしてもらいたくて探してたのよね」

「で、なんで俺がここにいたと思ったんだ?」

「ここはただ通過しようと思ってただけで、まさかここにいたりと思わなくてさ。でもこんなところで会えるなんて、私つては運がいいなあ。あははははは」

ただ通過しようと思ってただけで『魏』の土地に来るつもりだったのか。何にしても、この外史では俺が知っていることは違うことも起こるみたいだ。

でも考えてみれば当たり前か。俺が居るから云々の前に、この世界での人々は立派に暮らしている。つまりはなにが起こるか分からないと言っことだ。

もしかすれば本来の所属を離れ、別の所属になると言っこともあ

ると言うことだな。

「なんで太史慈は俺に弟子入りしたいわけ？」

「強くなりたいたのに理由なんかいる？ それには、みんな困ってるし私にもなんか出来ることないかなあ〜って思ってたさ」

そう言う太史慈の目には何か決意を固めたようなものが見て取れた。太史慈は軽くこんなことを言ってるけど、もしかしたらほかにも何か理由があるのかもしれないな。

それに、太史慈はおそらく強くなるだろうな。あんだけ軽いノリのおかげに、並大抵の奴なら見つけ出せないほどにしか隙を見せてない。

今の太史慈は大した強さではないかもしれないが、もしかすれば風以上、いや春蘭と同等の実力を引き出せるかもしれない。そんな太史慈が『魏』に加われば、華琳の霸道はより一層強固なものとなる。

「結局私を弟子にしてくれるの？ してくれないの？」

「……。はあ……。分かった。弟子にでも何でもしてやるよ」

「やった『ただし』へっ？」

俺は喜んでイスの上上がる太史慈の言葉を遮り言葉を発する。

「弟子になる以上はここでの飯代は奢りじゃなくて、貸しただけだからな」

「ええ、師匠なら弟子のご飯の代金ぐらい払ってよお」

俺がそう言うと、太史慈は文字通りブーブーと文句を言い始めた。つたく、弟子にならないんだつたらコレ以降は会わないかもしれ
ないが、会うんだつたら金は返してもらわないとな。

「嫌なら別に弟子にしなくても構わないんだぞ？ だいたい俺は
弟子なんかとる気も無かつたからな」

「うっ、分かつた、分かつたわよ！！ 払えばいいんでしょ！！」

俺がそう言うと太史慈はヤケクソだとばかりに叫んだ。まあ、今
払うのは俺なんだけどな。

にしても太史慈はホントにバクバク食べる奴だな。

「すみませーん、杏仁豆腐くださーい！！」

……だつてまだまだ食べる気満々なんだぜ？

はあ……、不幸だ……。

「ふう……。満足満足、久しぶりにお腹いっぱい食べたよ」

「……そうかよ」

結局あのあと太史慈はデザート類を頼みに頼みまくり、俺の財布に大打撃を与えていた。まさか季衣以外にも人にこれだけ出費させてくる奴がいるとは……。

いや、季衣は俺に癒やしを与えてくれてるだけマシだと言うものだが、こいつは自分の腹を満たすことだけを考えていて、俺に癒やしなんぞは与えてくれない。

「桜牙。私達って師弟関係になっただよな？」

そんなコトを思っていると突然太史慈が訊ねてきた。

「ああん？ だったら何だよ、太史慈」

「太史慈じゃなくて『紅葉』って呼んでよ。私の真名で」

「いいのか？」

「当たり前じゃん。だって桜牙は私の師匠なんだよ？ 師匠に真名を教えるなんて当然じゃん」

「そつか。ありがとな。で、ふと思っただが、紅葉は寢床あるわけ？」

紅葉は確か旅をして回ってたとか言ってたから決まった寢床は持っていないはずだ。だったら必然的にどっかの宿に泊まることになるはずだが、紅葉は一文無し。

つまりは止めてくれる宿はないってコトだ。だから訊ねたんだが、紅葉はなにやらモジモジしてやがる。

「そのことなんだけど……桜牙の宿に止めてくれたりしないかなあ〜って思うんだけど……?」

「ふざけんな。飯をたかつた後は宿だと? どんだけ人に頼る気だよ」

「いいじゃん。弟子が困ってるんだよ?」

「つたく。弟子弟子って言えばなんでも解決できると思ってんじやねえよ。」

「弟子の自立を見届けるのも師匠の役目だ。今夜の宿は自分で何とかしろ」

「そんなコト言っただってお金もないから泊まれないわよ!」

「だつたら野じゅ『絶対にイヤ!』……」

「金が無いなら野宿でもしておけつつの。はあ……。客人と迎えられてる俺なんか紅葉の部屋まで貸してもらえるのかねえ……」

「孫策なら頼み込めば貸してくれそうな気もするんだが、そんなに頼ってばっかじゃられないし。だからってこのまま紅葉を見捨てるってのも何だかなあ……」

「そんなコトを思いながらウンウンと唸っていると不意に後ろから声が掛けられた。振り向くとそこには孫策が立っていた。」

「あら、桜牙。どうしたの? こんなところで。あら? その子

は？」

孫策は紅葉を指差しながら俺に訊ねてきた。

「ああ、こいつは……」

とりあえず俺は孫策に先ほどまでの状況を一通り説明した。先ずは俺が街でぶらぶらしてたら、紅葉が行き倒れてた。

それを見捨てておけないで俺が飯屋に連れて行き奢った。紅葉の目的は俺への弟子入りだったので、俺が弟子入りを了承して真名を交換する。

で、そのあとに店を出て、今夜の宿について話していると孫策と会ったと言うことだ。

「なるほど。桜牙はその子のために部屋を一部屋貸してほしいと……」

「そうなんだが『別に良いわよ？』軽っ!？」

紅葉もそうだったけど孫呉の人達ってノリが軽くな？ 寝床を貸してくれて言ったらあっさり承諾してくれるしさ。

「あなたには蓮華と思春を助けてもらったのだから、それくらいお安い御用よ」

「悪いな。助かった」

「いいっていいって。困ったときはお互い様でしょ？」

うん。すげー優しい。けどいつかこんな優しい孫策と戦わなければ、ならなくなるときが来る。そのときに俺は刃を向けることが出来るのか？

いや、甘いことも言っていられない。話し合いですべてが解決するって言うなら戦は起こらないのだからな……。

……やめやめ！！　こんな暗い考えはやめよう。とりあえず紅葉の寝床が決まって一安心だな。

「今夜のご飯はなにかなあ」

とりあえず紅葉には自重と言つ言葉を覚えさせてやる……。

そつ心に誓つ俺であった……。

第拾八話『業炎の剣帝、拾うのこと。ってサブタイ適當すぎるだろ!?!』(後書

この小説での太史慈は魏 となります。

感想待ってます!!

第拾玖話『お前は、お前にしかなれないんだぜ?』(前書き)

今回は主人公が語ります。

ではどうぞ!!

第拾玖話 『お前は、お前にしかねないんだぜ？』

side 桜牙

俺が孫策の城に泊まらせてもらってから早くも6日、紅葉を拾ってから三日が経過した。その間は特に代わったこともなく、ただ俺の財布から金が増えついでに飛んでいくと言う事態があるだけだった。

あれ？ 俺だけすげー損してないか？ いや、俺だけがすげー損しちゃってるよなあ。はあ……、不幸だ……。

そんなコトはさておき、只今絶賛鍛錬中である。相手は三日前に拾った紅葉が相手である。紅葉は二本の棍棒(?)を使った二刀流で一撃一撃の威力が絶大だ。

だがその反面、攻撃を行った後の隙の大きさがあつたため、戦にでるときは一本で出ているらしい。そのために同じ二刀流である俺に頼ってきたようだ。

ただ、紅葉の場合二刀流だから隙が出ると言うことではなく、一本だろうと大振りをし過ぎるため隙が大きいのだ。

「こんのお!!」

「だから大振り過ぎだつってんだろ」

俺は紅葉が思いつき振りかぶってきた棍棒を軽く受け流す。受け流された棍棒は地面に当たり、無駄にデカい音をたてていた。

しかも棍棒が当たった場所は穴を掘ったかのようにへっこんでいた。どれだけ思い棍棒を振り回してんだよ……。こんなんでよく生き残ってこれたなあ……。

いや、この棍棒の一撃を見切れなくて、やられたつつうパターンが多いのかもしれないな。確かに隙は大きすぎるのだが、当たれば一撃の強さが大きいいため一撃でぶっ飛ばせるみたいだな。

「当たれえーっ!!」

「大振り過ぎだっつうの。何回も言ってるだろ」

俺はそう言うとき大きく振りかぶってきた棍棒を受け流した後に、もう片方の短剣を紅葉に向かって振りかぶった。

だが紅葉は棍棒を離して俺の一撃を回避した。ほお、確かに大振りだが身体能力は高いみたいだな。

つーことは当たらない攻撃と当たる攻撃を見切って行動をしてきたってことか。だけど武器を失った今、どうする気なんだろうねえ。

「ぶっ!!」

「おっと」

考え事をしている間に紅葉は俺に拳を振りかぶってきた。なるほど、無駄に重い棍棒を使ってるおかげで、棍棒を持ってないときの自分自身の速さは速いと言っことだろうな。

しかも拳による一撃は囷で本命は棍棒を取り戻したあとの棍棒に

よる一撃ってコトか。だけどさ、そこまでの動きはいいのにそこからの大振りは無いんじゃないのか？

「はっ！！」

そう思った俺は紅葉が棍棒を振り下ろす前に、棍棒を持つ紅葉の手に手刀を喰らわせて棍棒を離させる。

さらに俺は棍棒を離させた後に紅葉の首筋に白羽を突きつける。

「俺の勝ちだな。紅葉」

「うっ、また負けかよ……」

紅葉はそうつぶやくと詰まらなさそうに、棍棒を拾い上げて近くにあったベンチのようなものに腰を掛けた。

俺は白羽黒羽を破棄した後に紅葉の隣に腰を下ろす。

「なんで桜牙に勝てないのよ。ねえ、なんで？」

「……」

もしかしてこいつ、自分が大振り過ぎるってコト気づいてねえんじゃないかねのか。フーかさつきから大振りだっつってんに、聞いてないみたいだな。

はあ……。なんでこんな奴を俺は弟子にしちまったんだか……。

「ねえ、桜牙。何でだと思っ？」

「それぐらい自分で考える。じゃないと意味ないだろ」

「えー、師匠なんだったら教えてよ。弟子がお願いしてるんだよ？」

紅葉は文字通りぶーぶー、言いながら俺に抗議してくる。

「何でもかんでも教えちまったら意味ないだろ」

「いいじゃん、いいじゃん」

「ダメだって言ってるんだろ」

「ったく。少しは自分で考えるってコトをしるってんだよ。だからいつまで経っても大振りだってコトに気がつかないんだよ。」

「教えるって言ってるのよ!!」

「おいおい。教えてくれないからって実力行使に出るってどういうコトだよ。」

「そんなコトを思いながら相変わらずの大振りで振り下ろしてくる棍棒を、俺は創りだした棍棒で受け止める。」

「仕方ない。もう一回だけ鍛錬してやる。お前と同じ武器でな」

俺はそう言うつと再び鍛錬を開始した。俺が紅葉と同じ武器である棍棒を使えば、自分の欠点に気づくことが出来るだろう。

そう思いながら棍棒を振るっていくのだった。

side 雪蓮

マズいことになったわ……。まさかこんなコトが二カ所で同時に起こるなんて思わなかったわ。

今の状況はこの辺りの二カ所の村にて黄巾党が襲っている。しかも数は両方とも八千以上……。隊を分けるにしても完全に村を守りきれるか分からない。

だからって見捨てるわけにはいかないけど、どうすれば……。

「雪蓮、あの者の力を借りてみてはどうだ？」

そんなコトを考えていると冥琳が話しかけてきた。

「あの者って桜牙のこと？」

「そうだ。彼には悪いが、民を守ることには力を貸してもらえませんかもしれない」

確かに蓮華の話だと桜牙は山賊とはいえかなりの数の山賊を一人で倒すほどの力の持ち主。さらには噂によれば、一人で八千以上の黄巾党を相手に戦ったって言う噂もある。

だけど彼はあくまでも『魏』の人間で私たち『呉』を助けてくれるかと言えば、助けてくれるかは分からない。蓮華達を助けたとき

は、蓮華達が『呉』の人間だと言うことが分からなかったから。

「確かに彼なら私たちを助けてくれたように、力を貸してくれるかもしれないけど……」

蓮華はそこまでいって言葉を切った。分かっている、これは私たち『呉』の問題なのだから彼の力を借りるのは間違っている。

ここは私たちの力だけでなんとかしなければいけない。

「策殿、どうやら噂の彼が来たようですぞ？」

そんなコトを考えていると祭がそう言うてきた。そしてみんなが見ている方を見ると、そこには桜牙が立っていた。

「よお、話は聞かせてもらったぜ。良かったら協力させてくれよ」

「いいの……？」

私は桜牙に確かめるように訊ねる。

「ああ。困ってるときはお互い様って言ったのはドコの誰だったかな？」

私はその言葉を聞いて思わず微笑んでしまった。彼にとって『魏』も『呉』も大した問題ではないのかもしれない。

彼はそこに困ってる人が居たら放っておけないのかもしれない。まるで自分の力を他人のためだけに使うみたいに。

彼は思ったよりも、大物になるかもしれないわね。

side 桜牙

「もうダメ……」

あれから鍛錬を続けたのだが、結局紅葉は自分の欠点を見つけれなくて現在進行形グツタリしていた。まあ、あれだけブンブン振り回してたら疲れるわな。

つーか棍棒って慣れてないとかかなり使いにくいみたいだな。俺も棍棒を削りだして使ってみたが、かなり使いづらい。あれを二刀流で使うとしたら、かなりの鍛錬の時間と質を伴うことになるな。

「少し休め。さっきから暴れすぎだろ」

「別に暴れてなんかないわよ。ただ棍棒が重すぎるだけなんだから」

地面に寝ころびながら文句を言ってくるがいつもの迫力がない。

ありゃあ相当疲れてるみたいだな。腕もパンパンに膨れ上がってるし、しばらくはアレを使わせないようにした方がいいかもしれないな。

「はあ……。とりあえず休んどけ。あとしばらくはアレ使つなよ」

「なんでよ！ 桜牙を倒すまでやるんだからね！」

話し方はツンデレっぽいんだが、ツンデレ要素は要らないからね。

「俺を倒したいんなら、自分の欠点に気づくことだな。それが分からない間はいつまで経っても勝てねえよ」

「だから欠点ってなんなのよぉーっ!!」

俺が紅葉をイスに座らせると紅葉は足をバタバタさせながら叫んでいた。

だから棍棒を大振りさせすぎてるって言うてんだろぅが、お願いだから人の話を最後までしっかり聞いてくれよ。

「むう……。欠点のことは後々考えるとしてさ、なんだか兵士たちが慌ただしくない？」

確かに言われてみれば慌ててるみたいだな。まるで予想外のところで戦いが起こったみたいだ。

まさかこの辺りで黄巾党が出たとしても言うのか……。だったらこんなところでチンタラやってるわけにはいかねえな。

そう思った俺は立ち上がり、紅葉に向かって言う。

「紅葉、孫策達のところに行くぞ。もしかしたら何かあったのかもしれない」

「確かにそうかもしれないけど、桜牙はこの将じゃないんでしょ？ だったら他の人たちに任せておけばいいんじゃない？」

「確かにな。だけども……、手を伸ばせば掴めるのに、手を伸ばさない、なんてのはイヤなんだよ」

かつて仲間を失って俺が悲しんだように、人が死ねば誰かが悲しむ。例えそれは俺が斬った奴だとしてもだ。

だが、俺は悪事に身を染めた奴に情けを掛けるような人間じゃない。キレイ事だっつてのは十分承知さ。

だが、これが俺の生き方なんだ。

「俺は孫策のところに行くが、紅葉は待ってる」

「イヤだ。桜牙が行くのに私が行かないわけないでしょ？」

「……」

あの目は言っただけで聞くような目じゃないだろうな。そう思った俺は、孫策のところに向けて足を進めた。

そこで紅葉と共に玉座の間まで行くと、孫策や周瑜たちの話し声が聞こえてきた。

『雪蓮、あの者の力を借りてみてはどうだ？』

『あの者って桜牙のこと？』

『そうだ。彼には悪いが、民を守ることに力は貸してもらえないかも』

『確かに彼なら私たちを助けてくれたように、力を貸してくれるかもしれないけど……』

どうやらお困りのようですね。さて、中に入るとしますか。

そう思った俺は玉座の間の扉を開けて中に入る。

「策殿、どうやら噂の彼が来たようですよ？」

黄蓋が俺のことを見ながらそう言ってきた。

中には孫策、孫権、周瑜、黄蓋、甘寧の五人がいたが一斉に五人の視線がこちらに集まる。

「よお、話は聞かせてもらったぜ。良かったら協力させてくれよ」

「いいの……？」

孫策は俺に確かめるかのように訊ねてきた。

「ああ。困ってるときはお互い様って言ったのはドコの誰だったかな？」

俺が言うと孫策が微笑んだような気がした。

話を聞いたとは言ったが、何のことだか分からなかったのでカッ
コ悪いが訊ねたところ、二カ所の村に八千ほどの黄巾党が現れたらしい。

舞台を二つに分けてしまえば両方ともを片すのは難しいだろうと

のことで、俺の力を貸りたいと思ったらしい。

八千つて言ったら凧達と会ったときの数と同じくらいだな。それだったら俺一人で何とかなるだろうな。

「なら片方は俺に任せてもらおう」

俺がそう言うとは何かその場にいた全員に呆れられたような目で見られた。

「桜牙、さすがに一人じゃ危ないわよ。蓮華、思春、あなた達は桜牙を連れて出てちょうだい」

孫策の言葉にうなづく孫権と甘寧。

俺一人の方がいいんだがこの際大勢で攻めた方がいいか。でも氣による攻撃は控えた方がいいな。孫策の軍に影響を与えたとしたら、華琳になにを言われるか分かったもんじゃない。

「分かりました。思春、お、桜牙。行くぞ」

「はっ！！」

「おお」

俺はそう言うと先に行く孫権についていった。

「桜牙、私は？」

「お前は留守番」

「ガーン!!」

出撃前にこんなやりとりがあったりしたのであった。

俺たちが出撃して数十分後に目的地の村にやってきた。村にはすでに黄巾党がやってきていたらしく、ところどころで火の気が上がっていた。

だが悲鳴が聞こえるってコトは生き残ってるんだろう。聞こえないとなると全員が斬られたか斬られてないかが分からないからな。

「さて、サクッと終わらせるとしますか」

俺はそうつぶやくと『流鎖破月』を創りだしてジャックに付けた手綱に力を込める。

「孫権、甘寧。お前等にだけ見せてやるよ。俺の本当の本気を…」

…

「桜牙の本当の……本気？」

孫権は信じられないとばかりに目を見開かながら言う。

まあ、あんな山賊程度に本気なんか出す必要はなかったわけだからな。もしかすれば俺の本気を見せるのは、華琳を除いて、こいつらが初めてかもしれないな。

はあ……。毎回毎回この類の連中の動きには言ってもやりたいんだが、数で押せば俺に勝てると思っちゃってる辺りが面白いな。

「その命……天に返すがいい!!」

俺はそう叫ぶと殺戮を開始した。

数十分後、あれだけの数を誇っていた黄巾党の連中はほぼ壊滅して、逃げの体制に入っていた。

まあ、逃げ帰ればなんとかなるとか、こうなったら畏にはめてやる、とかほざいていやがった。

「つか、わざわざ畏だと言ってってくれてなのに、引っかかるわけないだろうが。」

「追え!! 一人たりとも逃がすな!!」

はい、ここに一人居ました。畏だと言っててるのにわざわざ追撃をしている孫権さん。

しかも主導権はいつもなら俺にあるのだが、今回に限っては一般兵と変わらない。つまりは兵士を指揮することが出来ないわけで、畏街道まっしぐらって奴だ。

「孫権、さっきあいつら畏だと言ってただろ!! 今すぐ兵士を下げるんだ!!」

「何を言ってるんだー！！ 姉様ならばこうするはずだー！！」

姉様ならば……。確かに将来、孫呉の王になるんだから現王である孫策の真似をしたいのは分かるが、状況を見極めてほしいものだ。

そんなコトを言い合っている間にあいつらは弓兵が居る場所にまでたどり着いてしまった。

しかもすでに矢を放ってきてやがるし。もう後退は間に合わない。

こうなったら全部まとめてぶっ飛ばすしかねえな。

生憎と魔法は使えなくても氣は使えるつまりは『神鳴流』が使えるってことなんだよ。

《神鳴流決戦奥義・真・雷光剣！！》

俺は持っていた流鎖破月で《真・雷光剣》を放つ。俺が放ったことによりほとんどの矢が消え去る。

そして、それをみた両勢力が固まっていた。だがその固まっていた瞬間に事件が起こった。わずかに残った数矢が孫権に向かっていったのだ。

甘寧が動くが間に合うような距離ではないし、孫権も硬直して避けられそうにない。とっさにそう判断した俺は、孫権の前に瞬動で移動して矢の軌道上に自らの腕をつきだして、矢を食い止める。

生憎と武器で守りたかったが、それだとわずかに間に合いそうに

なかったから手で防がせてもらった。

うお……久しぶりに痛え……。腕を貫通してるヨ。血がドバドバ出てるヨ。

「お、桜牙!？」

「俺のことはいいから早く」

「う、うん。わかったわ」

孫権はそう言うと全兵を率いて黄巾党の残りの討伐に向かった。

あの黄巾党の討伐は俺たちの方も孫策の方も無事に終わったようだった。兵士の損害もほとんどなく、俺たちがいた方に至っては俺の腕が矢で射られたこと以外は損害はなかった。

だが孫権は予想以上に俺が矢で射られたことを気にしてるようだ。あれから話しかけているが、全くと言って良いほど反応がない。

「桜牙が射られるなんて、珍しいこともあるもんねえ」

「なんだ紅葉、俺が一回も攻撃を受けないとも思ったのか？」

「うん、ちょっとね」

紅葉は可愛らしく舌を出しながら言う。やっぱりこの世界の女の子は魅力的だな、多分現代に連れて行ったらナンパされまくりだな。

「明日の朝出るが、本当に俺と行くのか？」

「決まってるじゃん。だって私は桜牙の弟子だよ。『魏』だろうと、『呉』だろうと、『蜀』だろうと、どこだってついて行くよ。」

これは下手したらプロポーズの言葉に聞こえなくもないんだが、本人はその気はないんだよな、絶対に。

そんなコトを思っていると紅葉は何かを見つけたようになりながら、その場を去っていった。

いったいどうしたんだ？　と思っていると俺の隣に孫権がやってきた。

「孫権か。どうしたんだ、こんなところに。夜の風は冷えるぞ」

何を隠そう今俺たちが居る場所は城の城壁の上。風もよく当たると、冷たいからもしも孫権に風邪を引かれたら困るからな。

と、声を掛けてみるのだがやはり孫権からの反応はない。やれやれ、隣に来たんだからせめて話し相手になってくれよ。

そんなコトを思っていると孫権が申しわけなさそうに口を開いた。

「あの……桜牙……。その、腕……大丈夫、か？」

「腕？　ああ、大丈夫だ。治療が早かったおかげで大したことないよ。」

「そうか……」

「……………」

それを言った後に再び沈黙がこの場を支配する。わずかに聞こえる風の音がBGM代わりって感じだな。

「まったく、腕のことを気にしてるなら気にしなくても構わないんだが、何故に暗いままなんだよ……」。

「これだと俺までテンションが下がっちゃうじゃねえか。なんか話題ないかな……。あっ、アレにしよう。」

「なあ、孫権。どうしてお前口調変えたりしてるんだ？　なんか違和感ありまくりだぞ？」

「ッ！？　な、何の事だ？」

俺がそう言つと誤魔化すかのように目をそらしながら言つ。

「いや、会ったときから気になってたんだよな」

俺がそう言つと孫権はうつむいた後に、俺の目を見据えながら言ってきた。

「私は孫仲謀。『孫家』の……『王族』として、人の上に立つものとして、毅然とした態度をしなければならぬのだ！！」

「そう言い、孫権は俺の目をじっと見据えてきた。その目には『孫呉』の未来を見据える一人の王としての目があった。」

だがそれは孫権の姉である孫策と同じような目立った。そう現王である孫策と全く、同じ目だ。

「くだらねえ……。そんな考え、そこらの犬にでも食わせてやりな」

「な……っ!?!」

俺は孫権の考えをバツサリと切り捨てた。すると近くにいたもう一つの気配、甘寧が俺に斬りかかってきた。

おそらくは孫権に危害がないように見張ってたんだろっな。

「貴様、言葉を撤回しろ!!」

そう言い斬りかかってきた甘寧に対し、俺は白羽だけを創り出し受け止める。そして腕を掴み、首筋に白羽を当てる。

いわゆる人質スタイルって奴だ。

「教えてやる。戦場で冷静さを欠くのはそのまま死に繋がるぞ」

俺はそう言つと甘寧を離す。

再び斬りかかって来ようとする甘寧を睨みつけ、牽制する。

その後に孫権に向かって言う。

「今のお前の考えはただの幻想だ。仮初めの王に何の意味がある

「？」

俺の言葉を聞いた孫権は拳を握りしめながら叫ぶ。

「なら……なら私はどうすればいいの……！？ どうすることもできないじゃない！！」

そうは言うが、孫権も分かっているはずだ。自分がなりたいものは仮初めだと言うことを。

分かっているても、自分にはどうすることも出来ずに悩んでることを。

だからこそ、そんな王になる前に言わなきゃならないんだ。

「自分のことは自分で決める。それでもまだそれを目指すと言うなら、幻想に溺れて……溺死しろ」

「き、貴様アアアツ！！」

俺が孫権に向かって言い放つと、甘寧は我慢の限界だとばかりに殺気を放ちながら斬りかかってきた。

「思春！！」

だがそれを孫権が制止させた。

甘寧は孫権がそう言うなら仕方がないとばかりに刃をおさめる。だが甘寧の目は、今にも俺を殺そうとするかのような目つきだった。

「確かにあなたの言うとおり私が目指しているものは幻想かもしれない……。だが、幻想だとしても『孫権!!』……っ!？」

俺はまだ言おうとする孫権の言葉を遮ったあとに質問する。

「お前はいつたい何になりたいんだ？ 王の身代わりか？ それとも孫策の代わりにでもなりたいのか？ そうだったなら、やめておけ。お前は他人にはなれねえよ」

俺がそう言うと再び甘寧が斬りかかって来そうになるが、孫権がそれを制したので言葉を紡いでいく。

「確かに今の孫呉は孫策の動きによって成り立ってるかもしれない。だけど、それは孫策だから出来ることなんだ」

「姉様だから……出来ること……?」

「そうだ。仮に何の権限のない兵士が孫策と同じようなことをやって、ついてくるか?」

俺が訊ねると孫権は首を横に振る。

当たり前だ。この動きは孫策がやるから成り立ってることで、他の奴が同じコトをやったからって同じような結果になるとは限らない。

「それと同じさ。孫権が孫策と同じようなコトをやっても、お前は孫策にはなれない」

孫権は俺の言葉をつつむきながら黙って聞いている。

そんな様子を横目で確認した俺は言葉を続ける。

「お前はお前にしかなれないんだ」

「私は私にしか……」

「そうだ。俺がお前になれないように、お前は俺になれない。だから人々は自分に出来ることをやるんだ。孫権は孫策みたいな王にはなれない。だからお前は自分だけの王になるんだ」

俺が言いたいことを言い終えても孫権は黙ったままうつむいていた。

ヤベエな。ガラにもなく説教じみたコトを言っちゃまったなあ……。やっぱり慣れないことは言うもんじゃないよな。

そんなコトを思っていると孫権は顔を上げながら言ってきた。

「桜牙、ありがとう。私、自分にしか出来ないことをやってみるわ」

そう言って微笑む孫権。うん、やっぱり女の子は暗い顔より笑ってた方が良いよなあ。

「そんな顔も出来るんだな。そっちの方が可愛いぜ？」

「か、かわ……ッ！？／／／／お、お休み！！／／／／」

孫権は何故か顔を真っ赤にしながら戻っていったんだが、やっぱり

り風邪でも引いたのか？ 上着ぐらい貸してやるべきだったかな。

「悪いな。あなたの主を貶すようなことを言って」

そんなコトを思いながら、残っている甘寧に言う。

「いや、そんなコトはない。あなたは蓮華様を本当の意味で導いてくれた」

甘寧はさっきのコトを悪く思ったのか、俺と目を合わせないように言う。

「導いた、か。俺はそんなコトをした覚えはないさ。ただ、彼女には自分らしく生きてほしかっただけさ」

そう言いながら俺は月を見上げる。

「あんたも早く中に戻りな。風邪引くぞ」

「…………先ほどは済まなかったな」

甘寧はバツが悪そうにしながら俺に謝ってきた。

「気にすんな。俺もあんなコトを言ったからな。お互い様さ」

「ふっ…………。面白い男だ」

「よく言われる」

そう言い俺は笑った。それに甘寧も心なしか笑っているように見

えた。

「あんたも笑った方がいいぞ。可愛いんだからな。」

「な……っ！？／／／／／」

俺がそう言うと、先ほどの孫権のように顔が赤くなっていた。やっぱり風邪引かせてしまったか。

「もう夜も遅い、風も冷たくなってきた。俺は部屋に戻るが甘寧はどろろするっ。」

「……思春だ」

「真名か。悪いな、今は受け取れない」

俺がそう言うと甘寧は無表情にしては珍しく、残念そうな表情をしていた。

「だが。いつか、な？」

俺は甘寧の頭を撫でながらそう言った。爺みたいかもしれないが、実際には爺を超えた年齢だからな。

「……っ／／／／／」

すると甘寧は恥ずかしそうに手を払いのけながら去っていった。

やれやれ、振られたか。

「お休み、思春」

俺は甘寧の後ろ姿にそう言い、再び空を見上げた。

そこにはキレイな月が、俺を照らしていた。

朝、俺と紅葉は孫呉の将達に見送られながら孫呉の土地を去る準備をしていた。準備と言っても馬に乗るだけなんだが……。

「孫策、世話になったな」

「こちらこそ、助けてもらったしおあいこよ」

孫策は笑いながらそういつてきた。孫呉の奴らは優しいなあ……。

「ずっとこのまま居てくれても孫呉しても、蓮華にしても構わないのよ?」

「なつ!?!?///姉様!?!?!」

孫策が悪戯じみた笑みを向けながら言うと、孫権が顔を真っ赤にしていた。

「悪いな。さすがにそれをやったら、首がはねられる」

「そつかあゝ。残念ね」

ほんとに残念なのかと訊きたくなるような話し方なんだが、これ

が普通なんだよなあ……。

「次会うときは戦うときかもしれないな。そのときは、手加減なしだぜ？」

「分かってるわ。そんなコトやったら怒るわよ。」

「そりゃ怖い」

俺と孫策は笑い合いながら言う。

すると今まで黙っていた孫権が言ってきた。

「桜牙、あなたに私の真名を授けたいんだけど……」

「あー、悪いな。今は受け取れない」

「そ、そうか。じ』だけど『……？」

俺は孫権の言葉を遮り言う。

「今だけ呼ばせてくれないか？」

俺がそう言うと孫権は嬉しそうな顔になりながらうなずいてくれた。

多分それを見た俺の顔はだらしないことになってるんだろうな。

「またな、蓮華」

「こう言って俺と紅葉は『呉』の土地を後にして『魏』の土地に向かうのであった。」

帰りの道中にて紅葉が俺に言ってきた。

「桜牙、お腹空いた」

「ふざけんなあーっ!!」

結局締まらないままの俺なのであった。

はぁ……、カッ「悪い……」。

第拾玖話 『お前は、お前にしかねないんだぜ?』 (後書き)

少々不快になるようなセリフがあったかと思いますが、これが主人公のやり方です。

落として上げる、これがこの小説の主人公です。

次回からは再び華琳のもとに戻ります。

では感想待ってます!!

第貳拾話 『業炎の剣帝、土産を持参すること』 (前書き)

今回から再び魏 再開です!!

ではございませー!!

第貳拾話 『業炎の剣帝、土産を持参すること』

side 桜牙

「『魏』の領地に、私は帰ってきた!!」

「いきなり何言ってるのよ……」

どうも、先ほどようやく『呉』の土地から一週間の休暇から帰ってきた龍崎桜牙です。

いやあ。なんつーか一週間離れてただけでここがこれほどまでに、懐かしいって思える日が来るとは思わなかったなあ。何だかんだ言っただけ俺はこの地が故郷みたいに思えてきてるんだよなあ。

それに紅葉も何だかんだ言っただけこの店の店には興味があるみたいで、キョロキョロしてるしな。

「ねえねえ、桜牙！ 私アレみたい！」

そう言っただけ武器屋を指さしている紅葉。

仮にも女の子なんだからこう言うときくらいは、アクセサリー店とかが見たいって言ってほしいもんだ……。

「後でな。今は華琳…じゃなくて曹操に会いに行かないといけな
いだろ」

「そつか。そこで私がどうなるか決まるもんね」

「そう言うことだ。行くぞ」

俺はそういうと二人で城に向かって歩き始めた。街では俺を久し振りに見たからか、話しかけてくれる人が多かった。

んで一人の老人が俺に『隣のべっぴんさんは桜牙さんの彼女かい？』と訊いてきた。

すると紅葉はいつちよ前に『違うわよ。私は桜牙こぎつの弟子です！！』
って答えてやがった。

まあ、別に本当のことだから構わないけど。そんなコトを思っている
と紅葉が言ってきた。

「ねえ。ホントに曹魏の人たちに、アレ、渡す気なの？」

「何言ってるんだ。当たり前だろ」

こんな会話をしながら、俺たちはひとまず華琳の城に向けて、足を
進めるのであった。

俺と紅葉は華琳の城につくと真っ先に玉座の間に向かった。今の
時間帯なら軍議をしているはずだからな。

ちなみに俺が城に入るとき兵士達が紅葉を見ていたんだが、やっぱり
顔は可愛いから見とれちまうんだろっなあ〜。

「桜牙、何だかさつきから見られてるんだけど……」

「ああ、そうだな」

「そうだな、じゃなくて何とかしてよ！ アンタ、ここの将なんでしょ！ 気持ち悪くてイヤなのよ！！」

ホントに視線が嫌だったらしく身震いをしながら涙目で俺に頼んできた。

「玉座の間までもう少しだ。我慢しろ」

「無理！！」

うるさいなあ……。と俺は思いながら玉座の間を目指す。

玉座の間の前にたどり着くと、中から華琳達の声が聞こえてきた。

やっぱりこの時間帯は軍議をしてるみたいだな。あんまり声が聞こえないから分からないけど、孫策やらなんやらって聞こえるんだけど……。

そんなコトを思いながら俺は玉座の間の扉を開け放つ。すると中にいた全員の視線がこちらに突き刺さる。

「あら、桜牙。ちょうど良いところに帰ってきたみたいね。あなたに訊きたいことがあったのよ」

華琳の言葉に俺は首を傾げたが、とりあえず今回の軍議で一番話

題になったことを、話してもらうことにした。

話とは今日の朝方、だいたい俺が孫策のところを出たところから始まるようだった。

side 雪

私はこの辺りに現れた黄巾党を撃退するために、春蘭さんと凧さん、季衣さんと共に部隊を率いてやってきています。

私たちが到着するとすでに官軍の兵士達が戦っていたようですが、かなり劣性の様子です。

「春蘭さん、官軍の指揮官から連絡文が届いてるようですが、どうしますか？」

内容的にはおそらくは到着が遅いとか、敵を早く蹴散らせとか言う内容が書かれているのでしょうか。

私くらいでも分かるのですから春蘭さんも分かっているはずですよ。ですから私はあえてどうするかを訊ねました。

「見なくてもいい。そのような手紙を見る時間も惜しいわ」

「そうですね。では破り捨てても構いませんか？」

「うむ、構わん」

春蘭さんがそう言うのを確認すると私は連絡文を破り捨てて。私たちがそんな会話をしていると季衣さんと凧さんが、こちらにやってくるのが見えました。

「春蘭さま、雪！ 部隊の展開、完了しました！」

「こちらでも完了しました!!！」

「分かりました。では、官軍の援護は凧さんをお願いします。春蘭さんと季衣さんは、こちらを叩きましょう」

「はっ！」

凧さんは返事をすると思いが率いる部隊を連れて、官軍の援護に向かいました。

「春蘭さん、季衣さん。行きましよう」

「うむ。腑抜けた官軍には荷が重いかもしれんが、真の精兵たる我らには黄巾党など赤子も同然！ 捻り潰せ!!！」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

春蘭さんがそう叫ぶと春蘭さんと季衣さんが率いている部隊が黄巾党に突撃していきました。

はあ……。秋欄さんの苦勞が最近よく分かりました。春蘭さんは、後先考えずに突撃するのでそれからを指示、または援護をするのが大変です。

これが黄巾党のような暴徒の集まりではなかったら、一溜まりもありませんね。畏にはまったりするかもしれませんが。

「はああああああああっ!!」

そんなコトを考えると、春蘭さんの怒声が聞こえてきました。さらには、たくさんの人が中を浮かぶ姿も見えてきました。

それにしても『曹魏』の武人のみなさんはどうしてここまで強いのでしょうか……。うーん、不思議ですね。

「やあああああ!!」

はたまた違う場所では季衣さんが、自分の何倍かの重さを持つ鉄球を軽々と振り回しています。

言わなくても分かるとは思いますが、宙に人が何人も浮かび上がっています。

私も訓練したらあれくらい強くなれるのでしょうか……。ならなくても、良いですね。と言うより私では無理のような気がします。黙って軍師的な立場に居ることにしましょう。

「くっ、撤退だ。撤退ーっ!!」

そんなコトを考えているうちに黄巾党が撤退をし始めていました。

おかしいですね。いかに私たちの隊と黄巾党の力の差があるからと言って、ここまで早い段階で撤退していくのは今までにはありませんでした。

「すみませんが、凧さんに春蘭さんが突撃してしまったので、急いで伝えてくれませんか？」

「はっ！！」

私の言葉を受けた兵士さんは急いで、凧さんの方に向かいました。私も出来る限りのことをしなければなりません。

そう思った私は急いで春蘭さんの後を追いました。

ですが春蘭さん達の隊はさらに速さをあげて行きます。

「除晃さま、向こうの方に砂煙が見えます」

「砂煙ですか？……………ッ！？ 旗印を見て下さい！！ 今すぐ！！！」

「は、はっ！！」

私のいつもは出さないような声に兵士さん達が驚いていたようですが、今はそんなコトをいちいち気にしてる暇はありません。

私の予想が正しければ今私たちがいる領地は……………。

「見えました！ 旗印は『孫』と『袁』です！」

やはり……………。どうやら私たちはまんまと黄巾党の方達に罠にはめられたみたいです。

おそらくは私たちを隣の『袁術の領地』に誘い込み、敵と判断したあちらの隊とこちらの隊を戦わせて、あわよくば相討ちにでもしようと考えたのでしよう。

この辺りには森や沼地も多いみたいですし、隠れることなど造作もないでしょう。その間に黄巾党の方達は本隊と合流する、と言ったところでしょう。

「除晃さま！ 夏侯惇隊と『孫』の旗があとわずかで接触します！」

「分かりました。急ぎましょう！」

兵士さん達にそう言った私は急いで春蘭さんのところに向かいました。

そしてようやく春蘭さん達に追いついた私は春蘭さんに言いました。

「春蘭さん、敵の狙いは……」

「その部隊！ 所属と名を名乗れ！」

「間に合いませんでしたか……」

私たちの隊と接触したのは桃色の髪を持ち、目つきの鋭い女性。さらには物凄い威圧感を持ち、武の方もおそらくはかなり強力……。

なぜここまでの武人が袁術などの客將に甘んじてるか分かりませ

んが、あの方はいずれ……。

「私は除晁。こちらは夏侯惇と許緒。陳留州牧、曹孟徳様のもとで（一応）軍師を勤めている者です」

「陳留……？（桜牙のいるところね……）。ここは陳留の州牧の領地ではないはずよ。そこに軍を率いて踏み込んで、どう説明するつもりかしら？」

今、ボソツとだけ桜牙さんの名前が出たような気が……。

「官軍を助けた後、黄巾党を深く追撃してしまっただけです。あなた方の領地を侵略するつもりはありません」

「そんな言い訳が通用すると思ってる？」

目の前の女性はなぜか私たちを品定めするかのように見ながら、言ってきます。

さっきの桜牙さんの名前が出たことも気になりますが、今はこの状況を乗り切るしかないですね……。

「急に來たせいで私達は何の証も持ってません。同行をしても構いませんので、黄巾党の方達を追わせてはもらえないでしょうか？」

「都合の良いことを言ってるわねえ。まずはこちらの問いに答えなさいよ」

そういう女性の目つきはさらにきつくなり正直スゴく怖いです。こんな交渉みたいなきっかけがあるわけじゃありませんし

……。

「済みませんが本当に急いでるんです！ 今は一刻を争いますし、黄巾党を逃がしてしまえばあなた方の領地も侵略を受けるんですよ！」

そう言っていると白みがかかった髪を持つ女性が出てきて、準備が整ったと言っていました。

おそらくは目の前の女性は時間を稼いでいただけ……。

「消えた敵部隊がドコにいるか知りたくない？」

「えっ……？」

「この辺りは沼地が多いから、身を隠すのにはピッタリなのよ。下手に追いかけると気づかれてしまうわ」

「いいんですか……？」

「ええ。私の寮だったら許しはしないけど、袁術の土地に誰が入ろうと知ったこっちゃないわ。それに、そちらには大きな借りが二つもあるしね。」

大きな借り？ いったい何のことなのでしょう……？ いえ、今はそのようなことより黄巾党の方達を追いかける方が先決ですね。

「あの、あなたの名前は……」

「我が名は孫策。袁術の客将よ」

孫策さん……。この人には一つ借りが出来ましたね。あちらも大きな借りが二つあると言っていました。それは他の方で私には関係ありません。

「どうする？ 除晁ちゃん？」

「決まっています。任務を果たしたらすぐに帰ります。これで良いですか？」

「なら、道筋はこちらで案内するわ。付いて来なさい」

そして私たちは孫策の案内のもと黄巾党達を見つけ出して、討伐任務を成功させました。

side 桜牙

なるほどねえ。俺が帰ってくる前にそんなコトがあったのか。

にしても孫策の二つの借りって言うと、一つは孫権を助けたことで二つ目は黄巾党から村を守ったこと辺りかな。

別にあんなコト気にしなくても良かったんだがなあ。多分言っても気にしてただろうけど。

「そして孫策さんは帰り掛けに言ってきました。『桜牙によるしくね』と……」

雪がそう言うところにいる全員の視線がこちらに突き刺さった。華琳に至っては、射殺すかのような凄まじい形相で正直怖すぎる……。

そんな重苦しい雰囲気の中で華琳が口を開いた。

「桜牙、どういうコトか説明してもらえるかしら？」

や、ヤバい……。口元は笑ってるのに目が笑ってない。すげー怖いヨ……。

「わかったわかった。全部説明してやるから」

そう言っただけは休暇の時にあったことを全て話した。

休暇をもらいドコで何をしようかと考えているときに、孫権が山賊に襲われていたこと。それを助けたお礼に、『孫呉』の土地に入れてもらったこと。

『孫呉』の土地にて俺に憧れて紅葉が弟子入りしてきたこと。そして『孫呉』に協力して、黄巾党を追い返したこと全てを説明した。

「なるほど、龍崎はその孫権を助けて『孫呉』の土地に足を踏み入れたと……」

秋欄が口に片手を当てながらそうつぶやいた。

「そこでお前はさらに黄巾党を撃退して、恩を売ってきた」

春蘭は腕組みをしながらそうつぶやく。

「それで桜牙の後ろにいるその子が太史慈と言っわけね」

「ああ」

華琳は俺の後ろにいる紅葉を見ながら俺に訊ねてきた。それに対して俺は一言で返事をする、この場を沈黙が支配した。

だがそんな沈黙を華琳の笑い声が打ち破った。

「本来であれば罰を与えているところだけけれど、孫策に二つも恩を売り、新しい仲間まで連れてきてくれたのだから、今回の処分はなしにするわ」

あ、危ねえ……。もし恩を売ったつもりはなかったが、とりあえず売らなかつたり、紅葉を連れてこなかつたりしたらどうなったことか……。

か、考えるだけでもおぞましい……。きっと死んだ方がマシだつて言っほどに罰を与えられたのかもしれない……。

「おっと、そう言えばみんなにお土産があつたんだつた」

「やつぱり渡すんだ……。アレ、……」

当たり前だろい。何のために俺が寝る間を惜しんで作つたと思つてるんだ。

「華琳、春蘭、秋欄、桂花、凧、雪」

俺が渡すと六人は何がなんだか分からないような顔になっていた。

まあ、当たり前前っちゃあ当たり前前だよな。なんせ、この時代じゃ出て回ってないだろうからな。

「龍崎……。これは、何なのだ……。？」

秋欄は俺の受け取ったものをマジマジと見つめながら言った。

「そいつはな……。巫女装束って言うんだ」

「みこしょうぞく？」

秋欄は何がなんだか分からないと言ったようにつぶやく。

秋欄に渡したのは巫女装束だ。ちょいとアレンジしてミニスカ仕様だが、この方がぶっちゃけ可愛いだろう。

雪には体操服&ブルマ。桂花には赤頭巾ちゃんセット。凧には、チャイナ服。春蘭にはバニーを、それで華琳にはミニスカ猫耳ナーセットをプレゼントした。

いやあ、ぶっちゃけこれだけ作るのはかなり苦労したよ。なんせ裁縫のほとんど出来ない俺が六人分も作らなきゃいけなかったからな。

まあ、時間的にはあんまり掛かってないけどそこはバグキャラ仕様でなんとかしました。

「よ、よく分からないけど、ありがたく貰っておくわ」

華琳は微妙に戸惑いながら俺に礼を言ってきた。

良いつてコトよ。いつかそれを着てもらって…フフフフフフフフ
フ……。

……最近、なんかアルっぽくなってきたけど、まあいっか……。

第貳拾話 『業炎の剣帝、土産を持参すること』 (後書き)

感想お待ちしております!!

第貳拾壹話 『業炎の剣帝、本拠地発見のこと』 (前書き)

誤字訂正しました

ではどうぞー！

第貳拾壹話 『業炎の剣帝、本拠地発見のこと』

side 桜牙

えー、皆様おはようございます。龍崎桜牙です。只今ワタクシはじっくり熟睡中なのですが、そこはバグキャラ仕様と言うことで眠ったままナレーションをやらせてもらいます。

さて、昨日に『孫呉』から休暇を終えて帰ってきた俺は、朝の軍議が始まるまで眠ることにしました。さすがに最近は、朝が早すぎるので少しだけ寝ることにしました。

今思えば休暇中も鍛錬をやってたから、結局休暇にならないと言う事実を発見したのだった。今更思ったんだが、アホだよ俺……。

つーことで今回はコレで話はお終い。

お休みなさい……………。

「龍崎桜牙!!! いつまで寝ているのだ!!! 早く鍛錬に付き合えーっ!!!」

そうは問屋が卸さなかったようだ……。春蘭の怒声とともに、俺のわき腹に何か突き刺さってきた。

ドガァーン！！とか言う音が聞こえてきたから、多分ドアぶっ飛ばしたんだな。そんで俺のわき腹に突き刺さったのは、春蘭がぶっ飛ばしたドアだな。

はぁ……。何つーモーニングコールだよ、コン畜生。つーか春蘭は人の部屋のドアをぶち破って何が楽しいわけ？

そう思った俺はムクリと起き上がり、寝起きで尋常に悪い目を春蘭に向けながら言う。

「おい、テメエ……。俺がテメエの部屋にテメエが寝てる時に行って、愉快に『Brave Song』のBGMを付け加えながら、ドアをぶっ飛ばすと言うモーニングコールをもれなくプレゼントしてもらいてえのか？ あア？」

「お、おお……。なんだかよく分からぬが、不機嫌のようだな……」

誰のせいで朝からこんな不機嫌になってると思ってるんですか？
あなたのせいでこんなに不機嫌になってんだよ。

三途の川が少しばかり見えちゃったりしちやったりしてたんだよ。ゼクトが俺を笑顔で手招きして迎えようとしてたんだよ。もう少しで渡りそうになってたんだよ。

「しゅ〜ん〜ら〜ん……。そう言やア、鍛錬に付き合っただけか

「ったんだよなア？」

俺は不機嫌だったのを全く包み隠さずに春蘭に向かって言う。

「い、いや。やっぱり止めておこう。昨日出撃したばかりだからな」

「アハ、アハハハ……。と誤魔化しながら言う春蘭はその場から去ろうとするが、そうは問屋が卸さない。」

俺は春蘭との距離を瞬動で一気に詰めると、春蘭の肩をガツチリ掴みながら言う。

「おいおい、逃げんなよ……。鍛錬、やろうぜエ？」

「か、勘弁してく『Let's go』意味の分からない言葉を発しながら連れて行くなあ〜っ！〜！」

春蘭が何かを言っていたが無視無視。俺の神聖な時間を邪魔したことを後悔させてやるよオ……。

side 紅葉

「何だか庭の方で春蘭の叫び声が聞こえてきたんだけど、どうしたんだろ？」

私はそう思いながら華琳が居るはずの玉座の間に向かった。

あつ、ちなみにみんなからは真名で呼んでいって言われてるから問題なし。私も真名で呼んで良いって、言ってるから問題なし。

そんなコトを思いながら私は玉座の間の扉を開ける。そこには華琳がいた。

「おはよう、華琳。私に何か用？」

「ええ、おはよう。あなたは正式に『魏』の将になったのだから、あなたにも仕事をしてもらおうわ」

うげえ……。やっぱりこう言う展開になるわけね……。確かに桜牙はこの将で、しかも優秀な将らしいじゃん。

そんな桜牙のところの将になるんだから仕事は回ってくるよね……。あーあ、めんどくさいなあ。

「とりあえず昨日も言ったとおり情報収集を行ってもらおうわ。最初は分からないと思うから、桜牙と凧の隊について行きなさい」

「分かったわ。それで、桜牙ドコにいるか知らない？」

「そうね。この時間だと庭で鍛錬しているかもしれないわ」

庭って……。確か春蘭の叫び声が聞こえてきた方じゃなかったっけ……。まさかとは思うけど桜牙と春蘭、鍛錬中……？

で、でも私と鍛錬したときはあんな叫び声が出るほどのことはなかったし、どうなんだろ……。

「どうしたの、紅葉？ 震えてるみたいだけれど？」

「え？ な、ななな何でもないよ？」

あ、明らかに動揺しちゃってるよ……。だってあんな叫び声聞いてから、庭になんか行きたくなるわけないじゃん……。

そんなコトを思いながら玉座の間を後にして、桜牙が居ると言われた庭に向かう。

近づく度に春蘭の叫び声がデカくなっていく……。こ、この先で何が……。そう思いながら私は庭を覗く……。

「グハハハハッ！！ 俺様の神聖な時間を邪魔したことを後悔しやがれ！！ グハハハハッ！！」

「わ、悪かった！！ わたしが悪かったから許してくれえーっ！！」

そこには桜牙に追いかけてられている春蘭の姿が見えました……。

side 桜牙

完全に覚醒したワタクシ、龍崎桜牙は現在春蘭を調教ゲフン、ゲフン……鍛錬中でございます。

せっかく春蘭が鍛錬したいって言うからやってるのに当の本人は逃げてばかりだしさ、それじゃあ意味がないと思うんだよね。

「おらおらおらア！！ 逃げてんじゃねえぞ！！」

「ば、バカか貴様は！？ この状況で逃げない方がどうかしてるわ！！」

この状況って連続で白羽黒羽を創って春蘭に投げまくってるだけなんだけどねえ。まあ、投げる力は本気だから当たったらとんでも無いことになるだろうけどなア！！

「人の神聖な時間を邪魔したから悪いんだよオ！！ 美人だったら、何やっても許されると思ってんじゃねえぞオ！！」

「な……っ／／／／ 美人……っ／／／／」

なんか俺が言った途端春蘭の顔が真っ赤になったんだが、今は、んなことどうでもいいんだよ……。

「赤くなってる暇があったらサクサク避けんかい！！」

俺はそう叫びながら春蘭に向かって容赦なくかなりの数の白羽黒羽を投げつける。

ふはははははは！！ 狩人を楽しませるなら狐になりな！！ 食われるための豚で終わってんじゃねえぞオ！！

「愉快に素敵にケツ振りやがって、誘ってんのかア！！」

「べ、別に誘ってなどおらぬわ！！／／／／／」

俺がそう言つと再び顔を真っ赤にする春蘭。

「だから赤くなってる暇があったら、サクサク避けろっつってんだろオ!!」

「ごんのお!!」

ようやく抵抗する気になったのか、春蘭は持っていた大剣で俺の白羽黒羽を弾き返していく。

「だけどなア、春蘭が返せない程度で投げてんだから防ぎきれぬわ
けねえだろ!!」

そして案の定春蘭は防ぎきれなくなり再び逃走を開始した。

「グハハハハハッ!! 俺様の神聖な時間を邪魔したことを後悔
しやがれ!! グハハハハハッ!!」

「わ、悪かった!! わたしが悪かったから許してくれえーっ!!」

許しての一言で済んだらポリスは要らねえんだよ……。さっきも
言ったが美人だったら何やっても許されると思っせんじゃねえぞオ
!!

そんなコトを思いながらもはや半ば遊びで春蘭を調教ゲフン、ゲ
フン……。鍛錬をしていると何かが俺に向かって走ってきた。

「朝から何たかってんのよ!!」

「まるんぼ!？」

そしてそれは見事に春蘭がぶっ飛ばしたドアがぶち刺さったところに当たり、俺に大ダメージを与えてきた。

うおお……。だ、誰だ、人が楽しんでるときに突っ込んできやがったのは……。

と俺は思いながらそれを見ると、どうやら紅葉が突っ込んで来たようだった。

「最ツ低!! 朝から女の人をお、お、襲おうとするなんて信じられない!! / / / / /」

ああ? なんだかよく分からないが紅葉が顔を真っ赤にしながら言ってきた。確かに襲ってたは襲ってたが、なぜに顔を赤くするんだか。

まあ、俺もまだ紅葉の性格を見切ってるワケじゃないし、いつかなんで真っ赤になったか分かるようになるだろ。

俺はそう思いながら立ち上がる。とりあえずなんで突っ込んできたか訊いてみるか。

「おい、紅葉。お前はなぜに俺に突っ込んできた。用事でもあったのか?」

「用事……。そう用事!! あんたと風を連れて情報収集に行くように華琳に言われてたんだっ」

情報収集に俺と凧と紅葉か。華琳のコトだから、仕事がまだ分かってない紅葉に仕事を教えてやると言う意味を込めて、俺と凧を選んだんだろうな。

それに俺と凧がいたらそんじょそこらの奴らには絶対負けないしな。

「そんじゃあ、サクツと情報収集行ってくるか」

「おお！！　じゃあ私は凧呼んでくるね！！」

紅葉はそう言うと、城の中に走って行ってしまった。そこでこの場に残ったのは俺と春蘭だけ……フフフフフ……。

「春蘭、続き……殺る？」

「待て待て！？　やるの字が違ってないか！？」

おっと、本音が出てきちまってたみたいだな。

とりあえず凧と紅葉が来るまで鍛錬と言う名の調教は続きました。

あれから数十分が経過して、俺と紅葉と凧は隊を率いて情報収集を行っていた。

まあ、さつきは言わなかったが凧は昨日帰ってきたばかりなんだから、休んでてもらっても良かったんじゃないかと思うんだよね。

「凧、疲れてないか？ 昨日帰ってきたばっかりなんだろ？」

俺はジャックに乗り移動しながら凧に訊ねる。

「大丈夫です。鍛えてますから」

「鍛えてますからって……。無理して倒れたら元も子もないだろ？」

「自分……。こう言うことしか出来ませんから……」

凧は若干顔を赤らめながらそう言ってきた。

「あのな、こう言うことなんて言うな。こう言うことが出来るから凧はスゴいんだろ？」

「そうでしょうか……？」

凧は未だに若干顔を赤らめながら上目遣いで俺に訊ねてきた。

くっ、やめてくれ……。そんな顔されたらときめいちまうだろうが……。

「そつだ。こう言うことが出来るから華琳も正確な判断を下せるんだ」

「……はい」

凧はすげーきまじめだなあ……。沙和と真桜、あとは紅葉にも見習ってもらいたいなあ……。

と思つてたんだが、それ以降の会話が全然続かない……。なんだか紅葉も暇そうに……。つて寝てる!？」

なんか静かだと思つたら馬の上でお休みしてやがったよ。

「凧、俺つてうるさい?」

「? 別に気にはしていませんが……。どうかしましたか?」

「いや、何つーか俺しか話してないからさ。うるさいのかな、つて思つたんだ」

凧と二人、いや二人つてワケじゃないけど紅葉はおねんねしてるし……。どうにも俺と凧だと凧が話さない分俺が話すことになる。

あー、『千の呪文の男』サウザンドマスターの方のナギはうるさいくらいのお喋りだつただけだなあ……。

「隊長より真桜や沙和の方がよく喋りますよ。自分は喋るのがあまり得意ではないもので……。聞くのは平気なのですが……」

「何つーかあいつらと同じだけ喋るのは無理だ……。紅葉なら出来るかもしれないけどな」

俺は寝ている紅葉を見ながら言う。

『孫呉』の地から帰ってくる時の紅葉の話す量はハンパなかった。正直聞いているのが辛くなりました……。

「ふふ……っ」

そんなコトを考えていると隣でいきなり凧が微笑んだ。

「うーん、絵になるねえ」

「はい？」

「いや、凧は笑ってる方が可愛いと思ってさ」

「か、可愛………／／／／／」

俺がそう言うと凧の顔が真っ赤になった。

なんか分からないけど照れてる仕草もしてるし、照れてる凧も可愛いなあ。と思ってたんだけど、そんなコトを思わせるような暇を与えてはくれないみたいだな。

どうやら敵さんが来たみてえだな。それに凧も、眠っていた紅葉も気づいて臨戦態勢をとっている。

（凧、紅葉。敵の数は少ない。俺が何とかするから、お前等は周りにもないか警戒してくれ）

（分かりました、隊長）

（了解、任せなさい）

俺は二人に小声でそう言うと、あっちもまだ気づいてないみたいだったから、一気に瞬動で接近する。

そして黄巾の連中が言葉を発する前に首に手刀を喰らわせて、全員を気絶させた。

俺たちがいるかもしれないと言うコトを考慮すれば少数で動くのは分が悪い。となればこいつらは偵察か、晩飯でも取りに来たか、または連絡兵か……。

だが仮に連絡兵だとしたらもはや黄巾の連中は作戦行動をとるようになるまでに、強くなってきたことになる。

そんなコトを考えていると、凧と紅葉がやってきた。

「隊長、一応周囲に隊を展開しました」

「ああ。ありがとう」

俺は凧にそう言うと黄巾の連中を縄で縛り始めた。起きて逃げられても困るからな。

「さて、持ち物を調べるか」

「全部引つ剥がせばいいのよね？」

紅葉は準備運動をするかのように腕を回しながら言ってきた。

「お前、丸裸にする気か？」

「……。やっぱりやめる」

俺がそう言うと紅葉は少し考えた後にやめると言ってきた。

さすがに丸裸にさせるのは抵抗あつたんだろうな。

と俺と紅葉が話していると、凧が黄巾の連中の持ち物から何かを見つけたのか俺に見せてきた。

「手紙……ですかね？」

「そうかもしれないな」

「じゃあ開けて見ようよ」

紅葉は俺の手から手紙らしき巻物を取り上げると、それを開いた。

「何コレ、汚なっ……」

紅葉が中身をみた途端しかめっ面になったので俺も中をのぞき込む。

すると確かに紅葉の言ったとおり汚い字で文章と地図らしきものが書き込まれていた。

「集合場所の連絡か。つたく、厄介なことになってきたな……」

「厄介なことですか？ 集合場所が分かったのですから逆に好機なのでは……？」

「確かにな。だが集合場所の連絡をとるようになったってことは、それだけ黄巾の連中が強大化してるってコトだ」

俺がそう言つと凧と紅葉の二人もそれに気づいたようにハツとなつていた。

今まで捕まえた黄巾の連中は口頭での連絡は取り合っていたようだが、これだけしつかりしたのを見つけたのは初めてだな。

まあ、連絡事項間違えてた奴もいたことがあつたけどな。

「とりあえず情報収集の任務は達成だ。引き上げるぞ」

「分かりました」

「了解」

こうして俺たちは情報収集の任務を終えて華琳の城に引き返していくのだった。

そして今日に開かれた軍議はもちろんのこと、俺達が見つけた連絡文書が最重要課題として取り上げられた。

「お手柄ね、桜牙。あなたを将にして本当に助かつてるわ」

「華琳からそこまで誉められるとなんだかすげー照れるな」

「ふふっ、ならもつと照れてなさい」

華琳は微笑みながら俺にそう言ってきた。

ちなみに春蘭を横目でみたんだが俺を見て若干ビビってた。

フフフフフ……。やはりあれがかなり堪えたみたいだな……。

とそんなコトを思っていると秋欄が言ってきた。

「先ほど偵察に出した部隊が帰ってきました」

秋欄の話によると黄巾の連中の物資の輸送経路と照らし合わせ、検証したところ敵の本隊で間違いはないようだった。

「つーことはそこに張角も居るってコトか……」

「ああ。張三姉妹の三人が揃っているとの報告も入っている」

華琳が間違いないかと言うコトを訊ねたが秋欄は何やら意味の分からないと言うように言った。

張三姉妹の歌を全員が取り囲んでいて聞いており、異様な雰囲気漂わせているとのことだった。

「何かの儀式？」

「詳細は不明です。連中の士気高揚の儀式ではないかというのが、偵察に行った兵の見解ですが……」

まあ、あながち間違っていないんだろうな。俺たちの時代からしたらライブに当たるものなのだろう。

「そりゃ、多分ライブって奴だな」

「らいぶ？ 隊長、それはどういうものなのですか？」

「大人数で歌い手の歌を聴く集会みたいなもんさ。娯楽の一種で、今回は士気高揚も兼ねてるんだろうな」

そのあとに俺たちもやってみるか、と華琳に訊ねたが当然のごとく却下された。

別に冗談半分で行っただけだから、構わないけどな。

「感想は奴らにでも聞いてみてくれ」

ライブの概念がないこの時代の人々にライブの説明をするのは骨が折れるからな。

「そうすることにしましょう。ともかく、あなた達のおかげでこの件は一気にカタがつきそうね」

華琳は俺たちを見ながらそう言うてくる。

確かに敵の本拠地が分かったんだから、叩き潰すのは楽勝だな。

つーか敵の本拠地が分かった時点で俺が潰してきても良かったよな……。

「動きの激しい連中だから、これは千載一遇の好機と思いなさい。皆、決戦よ！！」

華琳の一言により俺たちは黄巾党を倒すべく、出撃した。

第貳拾壹話 『業炎の剣帝、本拠地発見のこと』 (後書き)

感想待ってます！

第貳拾貳話 『業炎の剣帝、張三姉妹を掴まえるのこと』

side 桜牙

出撃した俺たちは先ず先発隊として偵察に出かけていた。『龍崎隊』の三人の将と季衣、戦いにも知謀にも長けている秋欄に俺を含めた六人と言うメンバーと、少しの隊で偵察をしていた。

んでさつき、偵察に出ていた真桜達の隊が帰ってきたところだ。そんなコトを考えている俺のもとに一人の兵士がやってきた。

「桜牙様、本隊到着いたしました」

「そうか、分かった。お前は本隊に戻っててくれ」

「はっ！！」

俺がそう言うのと報告に来た兵士が去っていった。とりあえず今のことを秋欄に伝えておく必要があるな。

「秋欄、本隊到着したつてよ」

「そうか、各隊の報告はまとまったか？」

俺の報告を受けた秋欄は先ほど帰ってきた真桜に訊ねる。

「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな」

「やはりな……」

まあ、華琳の予想通りつてところか……。

連中と俺たちとの間では圧倒的な差がある。

「報告を聞かせてくれ、真桜」

「まず、連中の総数やけど約二十万」

真桜の言葉を受けて沙和や季衣が驚いていた。だが真桜の報告にはまだ続きがあり、その中で戦えそうな兵士はだいたい三万ほどしかいないらしい。

武器も食料も元からいた黄巾党の連中には足りていなかったらしく、さらにはどこかの敗残兵のようなものが黄巾党と合流していたらしい。

つまりは先ほどの二十万と言う数は非戦力を遭わせた上での数となっている。さらには内輪同士での小競り合いも伺えたようで、一枚岩ですらないようだ。

そこから指揮系統もバラバラつつうことも弾き出すことが出来る。戦闘力を奪った連中を本拠地にまとめて、わざと戦えない頭数を多くしちまっただろう。

「無駄に大きくなっちゃったら世話ねえわな。受け入れる本拠地もねえんだし、陣内に取り込むしかないわけだ」

「神出鬼没の大熊も太りすぎればただの的、と言うことですね」

「……………」

凧の言葉に沙和と真桜の二人がなぜかフリーズしていた。まあ、女の子が太るとか言う表現を使ったりしたらアレだよな。

「つか凧はこう……体型とか気にしてないのか？ 確かに凧は無駄な肉もないみたいだし、スタイル抜群だし……じゃなくて俺はドコ見てんだよ!？」

「とりあえず華琳の狙い通りだな」

「そうだ。ここまで肥大化すればおのずと動きも鈍くなるし、指揮系統を作らねばならん」

まあ、指揮系統を作れるほどの奴なんか居るワケないし、そうなたらこの程度の相手なんか、そこからウジャウジャしてる野党と変わらないってわけだ。

そんなコトを考えていると凧が言ってきた。

「しかし、当初の予定通りの作戦で大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろ。華琳の本隊に伝令をだせ。皆は予定通りの位置で各個錯乱を開始しろ。攻撃の機は各自に任せるが、張三姉妹だけにはくれぐれも手を出さないように、以上、解散!！」

俺がそう言うともみんなが各隊に戻っていった。俺の隊は凧、真桜、沙和達の隊に均等に分けて、俺単独で動けるようにしてるため、決

まった場所には着かない。

なのでとりあえず今は秋欄の隊についておくことにした。

「龍崎。私の言葉をとらないでほしいな」

「あれ？　もしかして言いたかったのか？」

「そう言うわけではない。ただ、先に言われるとなんだか変な気分だろ？」

確かに自分の言いたいことを先に言われると、微妙な心境だよな。でも秋欄でもそう言うコトってあるんだな。

そんなコトを思っている間に秋欄の隊も錯乱を開始していた。まあ、俺も一応やるが突っ込んだ方が早いと思うんだけどねえ。

「そう言えば龍崎」

「あん？　どうした？」

秋欄はなんだか一方的すぎて悪いくらいに錯乱作戦を出来ている中で、不意に俺に話しかけてきた。

「今朝方から姉者がおかしいのだが、どうかしたのか？　何やら龍崎がどうのこうの言っていたようだが……」

な、なんだか秋欄の目が光ってるように見えるんだが、気のせいだろうか……。

「えつとだな。鍛錬で強くしごきすぎただけだよ」

「そうか。なら良いのだが、あまり姉者をいじめないでほしいな」

うつ、バレてやがる……。さすが秋欄と言っべきか自分の姉の行動なんかお見通しなように、俺が春蘭に何をやったかもお見通してわけか。

つーか秋欄は春蘭のコト好きすぎるんだよ。何かあれば姉者は可愛いなあ〜って感じだし。別に人の趣味にどうこう言っつもりもないけどな。

そんなコトをしていると、後ろから華琳達の本隊がやってくるのが見えた。

やれやれ、上手くできるときに突っ込んできて、一番美味しいタイミングで仕掛けてきたな。

「秋欄、俺は風達に次の指示をしてくる」

「ああ、こちらは任せておけ」

俺は秋欄のその言葉を聞くと急いで元居た場所に向かった。

俺が元居た場所にたどり着く頃にはすでに錯乱作戦を終えたと思われる、風達四人が集まっていた。

「悪い、遅れた」

風の怒声と共に全隊が一気に動き始めた。さて、俺は秋欄達と合流させて右翼から一気に攻めることにするか。

そう思った俺は風達と別れて、動き始めた。

side 紅葉

現在私たちは本隊右翼として秋欄たちと合流した。桜牙は少し起きて来て来るとは思っていたけど、こっちは夏候姉妹がいるし戦力的には十分なのよね。

桜牙の実力は『孫呉』のところで戦ったときは出撃させてもらえなかったから分からないけど、鍛錬の時の強さをみる限り春蘭より少し強いくらいにしか思えないのよねえ。

そう思った私は思い切って隣にいる春蘭に桜牙の強さについて訊いてみることにした。

「ねえ、春蘭。桜牙ってさ、どのくらい強いのか？」

「り、龍崎だと！？ 今その名を出さないでくれ、今朝方のコトを思い出してしまうのではないか……」

春蘭はそう言いながらまるで寒気がするかのように両腕をさすっている。やっぱり朝のコトは相当キツかったのね……。

はあ……。仕方ない、姉の方がダメなら妹の方に訊ねるしかないかあ……。

「秋欄、桜牙つてさ、どのくらい強いのか？　なんか話を聞く限りだけど、スゴい強いみたいだけど？」

「そうだな。あ奴一人で一万の兵士は軽く倒せるだろうな」

「い、一万!？」

一万を一人で倒すほどの実力つてそれじゃあいつもの鍛錬の時は手加減して、あの強さつてコト？

だったら本気を出したらどのくらい強くなるんだろ……？

「それに龍崎が本気を出したら、止められる奴は居るかどうから危ういだろうな」

「そ、それつてバケモノつてこと……？」

「うむ、言い方を変えればそうかもしれないな」

普通に頷かれても困るんだけど……。バケモノつてそんな人を私は師匠にしたつてコト？　でも逆にこれくらいの方が、強くなるにはちょうど良いかも。

そんなコトを思ってる間も春蘭は朝のことを思い出したのか、ブルブル震えてる。確かにあのときの桜牙は怖かった……。

「それほどまでに龍崎の強さが気になるのならば、間近で見ているがよい。見えてきたぞ」

秋欄が言ったとおり、目の前ではたくさんの兵士が何かと戦っているように見えた……ってうおっ!?

人ってあんな高くぶっ飛ばせるものなの!?! と言っかもすい速さで敵の兵士が倒れていくんだけど……。

「ね、ねえ……。アレ、桜牙一人でやってるの……?」

私は若干呆れ気味になりながら秋欄に訊ねてみた。

「そうだな。あんなコトが出来るのは龍崎しかいないだろう。だが、龍崎は強いだけではないぞ?」

「強いだけじゃない? どういうコト?」

「まあ、見てれば分かるさ」

「見てればって、手助けしないの!?!」

私がそう言うと秋欄は思い出したかのような表情になっていた。

「龍崎の動きについていけるのは今のところ姉者しかないさ。だから隊の人数も少なくしてきたのだ。それに姉者でも動きについて行くだけで、精一杯だそうだ」

秋欄の言うとおり右翼の兵士の数は左翼に比べて極端に少なかったけど、そんな意味が隠されてたのね……。

それにあの春蘭が桜牙の動きについて行くだけで、精一杯って言うくらいって、桜牙スゴすぎじゃないかしら……。

「ほら、見えてきたぞ」

秋欄が言ったとおり、黄巾党に対していつもの白と黒の短剣を振るう桜牙の姿が見えてきた。

だけどその二刀流の短剣を振るう桜牙の姿は、いつもの鍛錬の時とは違って、不規則的に動いている。だけどその不規則な動きは、まるで完成された一つの舞のようにも見える……。

血が舞い、人の肉体の一部が斬れていると言うのにそれすらも幻想的に見えてくる。周りにいる人は桜牙を引き立てるためだけに存在するみたいで、桜牙はその舞台の主人公みたいに見える……。

戦いの中だと言うのにも関わらず、戦うことを忘れてしまいそうな姿。そんな桜牙の姿をみた私は思わず呟いていた。

「キレイ……」

「そうだろうか？ あ奴の動きを最初に見たときは、私もそう思ったものだ」

口に出していたことを指摘されたのに、全然恥ずかしくない……。

それほどまでに桜牙の動きがスゴいのね……。

「あの動きに見とれて、心を奪われた娘も少なくはない。お主もそうなのか？」

秋欄はにやにやとしながら私に訊ねてきた。

「そ、そんなわけないでしょ！！ 私は桜牙の弟子で、桜牙は私の師匠なのよ！！」

「ふふっ、そうか。そうならばいいのだがな」

そう言って未だに意味深に微笑む秋欄。私が桜牙を好きになる？
ふんっ、そんなコトあり得ないわ、……………多分。いや、でも、
どうだろう？

て言うか桜牙ってもしかしてモテモテ？ そう言えば凧とかの桜
牙を見る目が乙女っぽかったような……………。

「そう言う秋欄が桜牙のコト好きなんじゃないの？」

私は皮肉げに笑いながら秋欄に向かって言う。

「うむ、そうかもしれぬな」

「えっ？」

そんなコトを思っているうちに桜牙が、最後の一人を切り倒す姿
が見えた。

side 桜牙

「終わりっど……………」

俺は黄巾党と連中の最後の一人を切り捨てながらそうつぶやいた。

結局、秋欄たち本陣右翼がやってくるのに待つてられなくて一人で斬りかかったが、やって正解だったな。春蘭たちがやってきたのは、俺が半分くらい片してから。

途中で春蘭が助太刀してくれたんだが正直に言おう。邪魔だったと。そんなコトを思っているうちに秋欄と紅葉がこっちにやってきた。

「やはり我々の手助けは必要なかったみたいだな」

「それを言ったらお終いだっつうの。ところで、なんで紅葉が唸ってるわけ？」

そう。紅葉は俺が気づいたときから何やら俺をたまにチラッと睨みながら、ウンウン唸っていたのだ。

ない頭で考えたら許容量オーバーしちまうぞ。

「それはだな。龍崎の動きに魅了され、ホの字なの『んなわけないでしょ！』『ふふっ』」

秋欄がなにかを言おうとしたが、紅葉が叫んできた。

「それよりさっきのことあとで訊かせてもらおうからね」

紅葉が何やら秋欄を睨みながら言うんだが、なにかあったのか？

「さっきの『ト』って？」

「あんたは黙ってなさい!!」

なんだかよく分からないが、とりあえず秋欄が紅葉をからかっていることはよく分かった。

「からかうのもそこまでにして、張三姉妹を探し『桜牙さま、夏侯淵さま!!』……なんだ?」

俺たちが張三姉妹を掴まえるために動こうとすると、俺たちの元に一人の兵士がやってきた。

よく見るとその兵士は凧達の部隊の兵士のようにだった。

「報告、楽進部隊、李典部隊、迂禁部隊、許緒部隊が張三姉妹を保護しました」

「そうか。分かった」

俺がそう言っていると、その兵士は去って行ってしまった。

やれやれ、手柄をとられちまったみたいだな。

「引き上げるか。目的も達成できたみたいだな」

「そうだな。姉者、紅葉、引き上げるぞ」

「うむ、分かった」

「う、うん。分かった」

俺たちはそう言いあつと、華琳達のテントに戻ることにした。

俺たちが華琳のところに戻つてくると、そこには視察に向かつてきたときに見た旅芸人の三人が居た。

あ、あれが張三姉妹だったのか……。皆さん、ワタクシが何を言いたいか分かりますね？

はい！！　そこでボソツと呟いたあなた正解です！！　張三姉妹はすげー美人です！！

そんなコトはさておき、俺はさっそく張三姉妹に訊ねてみた。

「張三姉妹、なんでこんなコトをしたんだ？　普通の旅芸人みただが？」

「……色々あつたのよ」

俺が訊ねてみると、張三姉妹のメガネっ子が言ってきた。

「色々を言ってもらわないと困るんだが……」

「話したら斬るきでしょう！！　わたし達に討伐の命令が下つてるのだから！！」

すると今度はロリっ子が俺に叫んできた。

なんつーか、妹みたいなキャラな気がするな。

「それは、話によるな。それにあんたらの正体を知ってるのは、俺たちだけだろっな」

「……へ？」

俺がそう言うと三人が呆けたような顔になっていた。もう少し見ていたいような気もするが、あんまり焦らすのも悪いだろうと思いついて話してみた。

まずはここ最近な張三姉妹が華琳の領から出て行ってなかったことが幸いした。警備が厳重すぎて出れないと言ったこともあり、身を隠していた。

結果、首魁である張角の名前こそ知れ渡ってはいるが、その正体は全くの不明だ。さらに捕まえた黄巾の連中も、尋問されようと誰一人として口を割らなかつた。

さらにはこの騒ぎに便乗した盗賊や山賊は張角の正体を知らない。そのせいもあり、証言が混乱に拍車を掛け正体判明に至らなかつたのだ。

「それで、そいつらの証言を元に書いた構想図が……コレだ」

俺が張三姉妹に見せた紙に書いてあるのは、身長三メートルはあるかと思われるヒゲモジャの大男だった。しかもご丁寧に腕が八本、足が五本、ついでに角に尻尾まで生えていると言う、実に愉快なバケモノが書かれていた。

この何とも目の前のポイン美人とは似ても似つかないバケモノのおかげで、正体がバレなかったと言うこともある。

「え〜。お姉ちゃん、こんなバケモノじゃないよ〜」

ポイン美人が頬を膨らませながら言っている。

なんつーか、俺の知ってる三国志と比べるとすげー変わってるな。

「いや。いくら名前に角があるからって、角はないでしょう」

「確かにな。こんな美人がこんなバケモノになるはずねえよ」

俺が何気なくそう言うとなぜか俺の背中に物凄い殺気が突き刺さってきた。しかも三つとかなり多い……。

「あらあら、美人だなんて。誉めても、なんにも出ないよー」

俺が誉めるとクネクネと動きながら、張角が言っていた。

とりあえず、この殺気をどうにかしてもらいたいんだが……。

「んんっ。……まあ、この程度と言う」トトよ

「何が言いたいの」

唯一冷静そうなメガネっ子が言った。

「黙ってあげてもいい、と言っているのよ」

どうやら華琳はこの三人を仲間に取り入れたらしい。

確かにこの張三姉妹が事件の首魁にはなったものの、この三人の人を集める才能は相当なもの。その力を華琳のために使うというのなら、命を生かしてやると言うことだった。

華琳が大陸に覇を唱えるためには今の勢力では物足りないらしい。そのために張三姉妹の力を使い、兵を集めさせると言うことなのだ。

その代価として、張三姉妹の活動資金を提供して、華琳の領内であれば自由に活動して良いこととなった。

等価交換とでも言うべきだろうか、なんとも華琳らしいって言うたら華琳らしいよな。

とりあえず張三姉妹も納得したようで一段落ってところだろうな。

「おっ、良かった」

アレから少し経過して、俺と真桜と沙和は凧のところに向かっていた。

何やら話に聞くと凧は左翼でかなりの大活躍だったらしく、華琳にかなり誉められていた。

右翼で俺も頑張ったのだが『桜牙はいつもでしょう。あなたに褒賞を与えていたらきりがなしでしょう』と一蹴されてしまった。

くっ、なんという理不尽……。別に気にしてないから構わないがな。

「オッス。お疲れ様、凧」

「隊長、みんな……」

俺が話しかけると凧はこちらを向いたのだが、何やらあんまり嬉しそうじゃなかった。いつも通りの凧だった。

「凧ちゃん、今回は大活躍だったねー」

「そうやそうや。華琳さまもごつつ褒めてたで」

「そうか」

と沙和と真桜の二人に言われるが相変わらず嬉しくないご様子。

「嬉しくないのか？ 俺なんか褒賞も無しだぞ？」

「そんな事ないよな」。凧、めっちゃ喜んでんねん」

「そうか？ ならいいんだが……」

俺には全く表情が変わってないようにしか見えないんだが、付き合いの長い真桜が言うんだから、そうなんだらうな。

「凧。お前可愛いんだからもう少し笑おうぜ？」

「なっ…… / / / /」

俺がそう言うと凧の顔が真っ赤になっていた。

「あー、凧ちゃん照れてるー」

「なんや凧、隊長に可愛い言われて嬉しかったんか？」

そんな顔を真っ赤にした凧を沙和と真桜がからかい始めていた。

戦いの後に女の子がわいわいしてるのを見ると、なんか癒されるな。腐った魂が浄化されるみたいだ。

しかも沙和と真桜が凧の顔を笑わせるために、頬をのばしてるし。

「そんじゃ、帰ったら宴会でもするか。華琳は軍議は明日にするって言ってたしな」

俺はニカツと笑いながら、戯れている三人に言う。すると凧で遊んでいる二人が言ってきた。

「おおー！！ さすが隊長や、話が分かる！！」

「わ、わひゃひは……っ」

俺が言うど何やら断るみたいな言い方をしようとしてる凧がいるが、そうは問屋が卸さない！！

「沙和、真桜！！ 主役が居ないんじゃ話にならん！！ 今日
は凧を縛つてても逃がすなよ！！ これは隊長命令だ！あ！」

俺はドドオーン！　と言う効果音が似合いそうなほどに叫ぶ。

「任じときいー!!」

「沙和にお任せなのー!!」

「ひよんなー!!」

こうして沙和は真桜はマジで凧を縄で縛って連れて行くのだった。

「ごめん凧……。俺冗談のつもりだったんだ。

心の中で凧に謝りながら帰還するのだった。

「で、何なんですか。これは？」

帰ってきたのはいいのだが、俺たちは荷物を解く暇もなく広間に集合を掛けられていた。

集められているのは俺や春蘭や秋欄、桂花。季衣や凧や真桜、沙和。さらには雪や紅葉までもが、集められていた。

もちろん言うまでもないが、俺やそのほか全員はかなり不機嫌だ。あの雪でさえもすげー不機嫌な様子だった。

「華琳、会議は明日じゃなかったのか？」

「私はする気はなかったわよ。あなた達は宴会をするつもりだっ

たのでしょっ?」

「あア、その通りだ」

「どうやら華琳も今夜はお楽しみをやりたかったようなのだが、やむ終えず集めたらしい。」

「で、華琳。そいつは誰だ」

「俺が指さす先には見たこともない奴がいた。おそろくはそいつのせいで集められたんだろうが、どうにも釈然としねえな。」

「こちとら疲れてるときに集められたんだからな。」

「ウチは何進將軍の名代の副官や。すまん、みんな疲れとるのに集めたりして……。すぐ済ますから堪忍してな」

「たりめえだ。早く終わしやがれコノモガモガ」

「俺が言葉を言い終える前になぜだか秋欄と春蘭に羽交い締めにされた。」

「どうやら無礼は働くなと言っことだろう。とりあえず言っのをやめて、怒りを静める。」

「將軍さまが直々に来るんじゃないかねえのか? ああん?」

「ゴメン、怒り沈めれませんでした、テヘッ」

「あいつが外に出るわけないやろ。クソ十常時どもの牽制で忙し

いんやから」

自分の上司にムチャクチャ言う奴だな、おい。まあ、話してみると悪い奴ってわけじゃなさそうだけどな。

そんなことを思っていると雪や桂花や季衣にも負けないほどのチビが入ってきた。

「呂布様のおなりですぞー」

しかもなんだかすげー偉そうにしてるんだけど。

つーか呂布っていきなり大物が出てきたな。別に誰だろうと叩き潰すかな。

「……」

そんで入ってきたのは、濃いピンクの髪を持ちアホ毛らしきものが二本飛び出ている。だがそれでもあいつからはさすが呂布と言わんばかりの、雰囲気がまとわりついていた。

「曹操殿、こちらへ」

「はっ」

華琳はそう言うつと呂布の前までやって来た。あの華琳が何も言わないことから、あいつらが華琳より地位が高いことは分かる。

だからってあんなチビに華琳が言いように言われてると思うと、すげームカついてくる。俺の剣と翼を授けた華琳があんなチビに…

…。

「えーっと、呂布殿は、此度の黄巾党の討伐、大儀であった！と仰せなのです」

「……は」

華琳の顔が不機嫌になっていくが、俺もかなり不機嫌だ。となりじゃあ、紅葉が拳を強く握りしめてるしな。

「して、張角の首級は？ と仰せなのです」

「張角は首級を奪われることを恐れ、炎の中に消えました。もはや生きてはおりませんまい」

「……」

相変わらず呂布は黙りっぱなしだ。少しは自分で話やがれ。

「ぐむう……首級がないとは片手落ちだな、曹操殿。と仰せなのです」

「申し訳ありません」

ぐうう。た、耐えるんだ、俺。今すぐ殴りたくなるこの衝動を抑えるんだ…。華琳も我慢してるんだよ？ ここで俺が殴ったらどうなることが分かったもんじゃない。

「今日は貴公の此度の功績を称え、西園八校尉が一人に任命するという、陛下のお達しを伝えに来た、と仰せなのです！」

「は、謹んでお受けします」

西園八校尉つつうのがなんだか分からんが、とりあえずすげーもんなんだろ。アバウトすぎるが、俺は知らないから仕方ない。

「……」

「これからも陛下のために働くように。では、用件だけはあるが、コレで失礼させてもらう。と仰せなのです！」

と、とりあえずようやくこの『歩く電撃イライラ棒』みてえな奴が帰ってくれるんだな。

ふい〜。危ない危ない。もう少しなんかムカつくこと言われてたら堪忍袋の尾が切れるとこだったよ。

「……………ねむい」

……………プッチン

「ゴラァーッ！！ 呂布、テメエ舐めてんのかァーッ！！」

「龍崎落ち着くのだ！！」

「貴様、落ち着け！！」

「桜牙、やめなさいよ！！」

「隊長、落ち着いてください！！」

「隊長、落ち着きや!!」

「暴れちゃダメなの!!」

これが黙ってられるかつつうの。人がせつかく宴会やろうとして
んのに、わざわざ集められて、クソムカつく言葉聞かされて、挙げ
句の果てに何にも話してない奴がねむい発言だぞ!!

ふざけんのも大概にしゃがれてんだ。もう怒りが収まらん。こ
のまま俺を押さえつけてる奴ら事、あいつをぶん殴ってやる!!

「な、なにやら騒がしいですな。ささ、恋殿!こちらへ」

クソっ、逃げんじゃねえよ。怒りが収まってねえんだよ!!

「ま、まあ、そゆわけや。堅苦しい形式で時間とらせて済まんか
つたな。あとは宴会でも何でもゆっくり楽しんだらええよ」

「ざけんじゃねえ!! ったりめえだろ!!」

俺のその言葉が聞こえたかどうかは分からないが、三人は去って
いった。

そして残された俺と華琳には怒りだけが残った。

あの三人が居なくなつてからの桜牙と華琳の怒りの現れようはとにかくスゴかった。桜牙に至つては、途中から怒りが爆発したのか叫び出すし……。

みんなで抑えに掛かつてんのに、全然抑え切れなさそうだった。多分あと少して完全に抑えきれなくなつてたわね……。

(ど、どうするのよ。スゴい空気が思いじゃない)

(うむ、確かに華琳さまだけならともかく、龍崎までもあれとなると……)

(話しかけたら斬られるかもしれんなあ……)

た、確かに今のあの状態の二人に話しかけたら例外なく斬られそう……。

(で、でもどうするんですか？ このままですと、話が進みませんが……)

(確かに雪の言うとおりだな、ここは誰かが、死ぬ気で龍崎か華琳さまに話しかけるのはどうだ?)

(だったらあなたがやりなさいよ、春蘭!!)

(わたしは無理だ!! よし、季衣行ってこい!!)

(ボ、ボクは無理ですよ!?)

季衣はそう言うところ今度は凧、真桜、沙和の三人を見つめた。

(う、ウチらも無理やで。あんな状態の隊長と華琳さまに話しかけたら……)

(首が元の位置から無くなっちゃうの!?)

(じ、自分も今回ばかりは……)

やっぱりあの二人に今話しかけるのは誰でもイヤなみたいね。そんなことを思っていると、全員の視線が私に突き刺さった。

な、なんなのその期待に満ちた目……。

(私に話しかけろって言うの!? 無理無理、さすがに無理よ!?)

(ええい、つべこべ言うな! 紅葉が一番下っ端なのだから大人しく逝ってこい!~!)

そ、そんなにグイグイ押さないでよ!? それに‘逝く’の字が違っじゃない!? その字だと私死んじゃうから!?

私がそんなコトを思ってる間に、私は桜牙と華琳の前に突き出されてた。後ろを振り向いても、みんなが話しかけろって目で言うてる……。

うう……。こうなったら何だってやってやるっじゃない。

「あ、あの……桜牙? 華琳?」

「話しかけないで（んじゃねえ）！！」

二人の怒声は広間に響き渡り、ビリビリと空間を振るわせるほどのものだった。と言うか桜牙も華琳も怖すぎだよ……。

「悪いけれど、今なにか話し掛けられたら、そのまま斬り殺してしまいそうなのよ……少し黙ってて」

「俺に話しかけた奴は、愉快的ミンチになると思いなア……。今なら、すっぱりキレイに斬れそうだア……」

いつ出したのか分からないけど、華琳は鎌を桜牙はいつもの白と黒の短剣を出していた。

「春蘭、秋欄。戻るわよ！ 気分が悪いって言ったらありはしない！ 今日朝まで飲み直すわよ！」

華琳はそう言つと春蘭と秋欄を連れて出て行ってしまった。

あの二人は華琳といれて嬉しいだろうけど、残された私たちには桜牙バケモが居るわけで、おのずと牙がこっちに向いてくるのよね……。

「雪、紅葉、風、沙和、真桜、季衣ついでに桂花……」

「……は、はいつ……！！」「」「」「」

こ、怖すぎる……。かつてここまで怖い者があつたかしら……。お母さんより怖い者はないと言っけど、今の桜牙はお母さんよりずっと怖いわよ！？

「俺達も騒ぐぞ……。全隊を集めるオ！！ 宴会の始まりだア！」

こうして私たちは朝まで宴会騒ぎをするのだった。

最初は桜牙も怖かったけど、宴会するうちにいつも通りになったので助かったわ……。

今度から来ないでもらいたいわ。特にあのチビは……。

そう思う私たちでした……。

第貳拾參話『えっ？ 何それ？ マジかぁーーーーっ！？』(前書き)

誤字訂正しました

やってしまった……。。

反省はしている、だが、後悔はしてない!!

でほんぞー…

第貳拾參話『えっ？ 何それ？ マジかぁーーーーっ！？』

side 桜牙

あんのクソイライラする事件から数日が経過した。あのクソチビめ、次会ったらギッタギタにしてやるよ……。ついでに飛翔軍と名高い‘呂布’もな。俺に情けを掛けるとか言う言葉はねえ。

まあ、そんなコトはさておき今は太陽が真上に上がっていることから、昼頃だと推測される。さらにワタクシの体内時計が、ようやくこの時代に馴染んできたのか、ちょうどいい時に腹の虫が泣いていた。

なので季衣とでも街に出かけようかと思っるところだ。さすがに紅葉も連れて行ったら、俺の財布が持たないどころか、破産するっつうの。

大食間は季衣だけで十分だ。そんなコトを思いながら季衣を探している、目の前に不審者を発見した。

春蘭だ。いつものあの無駄にバインバインな胸を張った歩き方ではなく、なにかを警戒するように周りをキョロキョロと見渡していた。

いつもならコレぐらいの距離にいれば、俺が気配を消していないときであれば、気づかれるのだが今回は全く見つきりそうにない。

別段隠れていると言っわけでもないのだが、あまりにも警戒しす

ぎて気づいてないって様子だ。

何っーか、友達とかからエロ本を借りてお母さんにバレないように隠す的なノリだぞ、アレは。

飯を食べに街に出向くより、こっちをつけていった方が面白いかもな……。そう思った俺は春蘭の後をつけることにした。

で、つけていったのはいいんだが春蘭が入った部屋は自分の部屋だった。

おいおい、マジでエロ本もらったからお母さんにバレないように隠す中学生のノリじゃねえかよ。でもこの時代にそんなものがあるとは思えないし、第一に華琳のコトが大好きな春蘭に限ってそう言った類のものを持つてくるとは思えないな……。

そんなコトを思いながら春蘭が入った部屋に静かに向かう。鍵は……か、掛かってない……。だと。不用心にもほどがあるんじゃないのか。

「お、おい、これは……」

「……いや、まさか、こんなに……」

む？ この声は秋蘭か？ そう言えば部屋に入る前から気配は二つあったが秋蘭の気配だったか。にしても何やってるんだ。

なんか、驚いてるって言うか信じられないようなものを見るよ
うな感じだな。っーか何見てるんだ？

「……ああ、これは、たまらん……」

「やりすぎだぞ、姉者あ……」

……なんかちよつと夜の営みみたいな声が聞こえてきてるんだが、姉妹でそんなコトをやる趣味があったのか。いや、人の趣味にあれこれ文句を言う気はない。

「うむ、さすがにこれは禁じ手というコトで……」

禁じ手？ 夜の営みに禁じ手もクソもないような気がするんだがな……。つーことはそう言ったコトじゃないのか、じゃあ何やってるんだ？

俺はそう思いながら開いたドアの隙間からそつと中をのぞき込む。

「(つて、華琳居たのか?)」

おかしいな。確かに気配は二つしかなかったんだが……。そんなコトを思っていると春蘭と目があってしまった。

「何奴だ!!」

春蘭はそう叫ぶとどつから取り出したか分からないが、大剣を振り上げながらドアをぶち破ってきた。

ま、マズい。このまま振り下ろされたら死んじゃうよ!?

そつとっさに思った俺は白羽黒羽を創り出してそれを受け止める。さらに受け止めたあとに春蘭から大剣を話させた後に、押さえつけ

る。

さらにそれを見た秋蘭も殴りかかってきたので、とっさに手で防ごうとしたのだが、俺の手は秋蘭の拳を止めることなく、秋蘭の胸を掴んでしまった。

「っ！？／＼／＼／＼」

秋蘭はその瞬間に顔を真っ赤にして、そのまま拳を俺の顔面に決めてきたのだった。

「まろんぼ！？」

そして秋蘭の拳を喰らった俺は盛大にぶっ飛んでいった。

ゴメン、今回ばかりは俺が悪かったツス。そう思いながら、珍しく気絶するのだった。

「おっ、起きたみたいだな」

俺が目を覚ますと、春蘭の顔がドアップで写っていた。周りを見渡すと、どうやら春蘭達の部屋らしく秋蘭もいた。さらには華琳も居たんだが、その華琳からは生気が感じられない。

とまあ、そんなコトはどうでもいいんだが、とりあえず言おう。

俺はベッドから起き上がり秋蘭に向かって言う。

「秋蘭。さつきは胸を触って悪かった!!」

「そのようなことを大声で叫ぶな!! 馬鹿者!!」

俺が誠心誠意込めながらそう叫ぶと、春蘭に頭をぶん殴られた。

「おい、コラ……。また鍛錬するかア？」

俺は春蘭に笑みを向けながらそう言う。

すると春蘭はあのと時のことを思い出したのか、青い顔をしながら首を横に振っていた。

やれやれ、とりあえず春蘭はこれでいじりやすくなったな。今度からもっとからかってやるか。

「龍崎、あまり姉者をいじめてやるな。そ、それに私は気にしていないノノノノノノ。だ、だから龍崎も気にすることないぞ……ノノノノノ」

えっ？ 何これ？ 顔真っ赤にしてる秋蘭すげー可愛いんだけど。お持ち帰りしたいんだけど、どうしよう。普段は冷静な秋蘭がこんな反応するだけで、スゴく可愛いと思うんだな。

ギャップ萌って言うんだろうか、少しだけときめいてしまった。

「秋蘭、可愛いな。うん」

「なっ……ノノノノノ」

「龍崎、貴様いきなり何を言っているのだ!？」

「あれ? 声にでてた?」

「出ていたわ馬鹿者!!」

そうかそうか。まさか声に出てるとは思わなかったな。でも別に言っても困らないコトはないから大丈夫だろう。

まあ、秋蘭にしてはすげー珍しく頭から湯気出して顔真っ赤にしてるけど可愛いものは仕方がない。

「で、その華琳はいつたい何者だ? 人形みたいだが?」

俺は再起不能となってる秋蘭は放っておいて、春蘭にその華琳が何なのかを訊ねてみた。

今思うとラッキースケベが発動したが、当初の目的は春蘭がなんでもコソコソしてたかを確かめるためだったよな。

「うむ、私が作った華琳様人形がどうかしたのか?」

「……………なぬ?」

「聞こえなかったのか? それは私が作った華琳様人形だと言ったのだ」

「いや、聞こえるからね」

いやいやいや、ちょっと待ってくれよ。確かに俺、華琳様人形を

人形ってはいったがそこはさして重要なところじゃない。

重要なのは、この本物と見違うほどに洗礼に作り上げられた華琳様人形を、春蘭が作ったってことだ。いかにも大雑把そうな春蘭が、ここまで繊細な人形を作れるのかってコトだ。

「えつと、本当に言ってるの？ 実は職人に作らせたとかじゃないの？」

「そんなわけなからう。華琳さまをどこその馬の骨かも分からない職人などに、会わせるわけがなからう」

確かに言われてみればそうだな。

見た目じゃなくて雰囲気までもが一緒みたいだ。しかも肌の感じもそっくりだし、玉座に座らせておけば誰も気づかなそうだな。

「……誰がこんなの作ったんだ？」

「だから私だと言っているだろう！！ 何度言えば分かるのだ！！」

こんなの見せられたら何度だって言いたくなるわ。

「万歩譲ってお前が作ったとして……」

「だから私が作ったのだ！！」

「分かった、分かった。んで、どうやって作ったんだ？」

「……普通に木を彫っただけだが？」

「……………はい？」

「だから『いや聞こえてないわけじゃないから』……………ふむ」

「いやいやいや、有り得ないだろ……………。木を彫っただけでここまでスゴいの出きるわけないだろ……………。しかもそれが普通ってとんだけだよ……………。」

夜な夜な華琳そっくりのパーツを探して、街をうろついているとか言う展開の方がしっくりくるぞ……………。」

これって春蘭に備わってるレアスキルか？ 華琳への愛情がなせる技だったのか！？ 俺より春蘭の方がバグキャラじゃないの！？

「よくできてるな……………。正直ビックリだ。ビックリしすぎて腰が抜けたわ」

「そうだろ、そうだろ。我ながらの自信作だ」

そう言いながら胸を張る春蘭。

「いやあ〜今回はっかりは俺も春蘭の凄さを正直にうなずくしかないな。春蘭ってただの猪じゃなかったんだな。」

「貴様、今失礼なことを考えなかったか？」

「さあね。つまりはさっきこそソソソ帰ってきてたのは、この人形絡みか」

「うむ。街の仕立て屋に新しい服を……って何だと!? 貴様、どこから気づいてたというのだ!？」

春蘭は自慢げに話してたのだが、自分がつけられてると言う事実
に気づき、叫んできた。

顔が近い。スゴく近い。目と鼻の先つつうくらい近いんだけど、
気づいてないんだな。

「庭の辺りからかな」

「バカな……。細心の注意を払ってきたと言うのに……」

「いや、あんなコソコソしてたら逆にバレるだろ」

「それもそうだな。今度から気をつけることにしよう」

なんか春蘭が素直だとしっくりこないな。もう少し反論してもら
った方が、からかいがいがあるんだがな。

「それってさ、前に俺が出した案で作らせた奴か？」

あのかきは作れなかったが、今なら仕立て屋なんぞに行かなくて
も俺が作れるけどな。

「うむ。この間お主が土産でも持ってきた、メイド服と言う奴だ。
あと、きやみなんとかとやらも受け取ってきたぞ?」

「な、なん……だと……?」

まさかキャミソールまで作れるとは思わなかった……。だがキャミソールが無ければ始まらないだろう。

「っか華琳のメイド服姿か……。こりゃ春蘭や秋蘭じゃなくても可愛いと思うだろうな。現代に連れて行ったらナンパされまくりだろうな。」

多分春蘭と秋蘭がぶっ飛ばしまくると思うけど。

「で、もう着せたのか？」

「そ、それは……。だな」

なんかキレが悪いな。どうしたんだらうか。

「似合ってたか……。って訊くまでもないか」

「確かに可愛らしかった。だ、だが、アレはマズい、マズすぎる

……」

「なんか問題があったのか？」

「こつ言つときに秋蘭が居ると分かるんだが、秋蘭は現在再起不能な状態なんだよなあ。いや、俺が秋蘭の胸触ったのが悪いんだけどね。」

「すげー柔らかいとか思ったの悪いんだけどさ……。じゃねえよ！？
何考えちまつてるんだよ俺は！？」

冷静になれ。クールになるんだ……。うん、よし大丈夫だ。

「んで、何がマズいんだ？」

「可愛すぎて我々の仕事が手につかんだ」

なんだそんなコトかよ。そいつは俺とか紅葉や雪にはあんまり意味ないな。

多分可愛いと思うくらいだろうな。仕事に差し支えはないだろう。

「貴様には悪いが、あれは禁じ手にさせてもらった。まさか貴様の国の服が、あそこまで華琳さまを可愛らしくするとは……」

「俺の国には他にももつとあつたけどな。こないだお前等にやつたやつもあるだろ？」

「馬鹿者！！ 華琳さまがあんなものを着たら、それこそ仕事に手がつかんじゃないか！！」

「あー、そうツスカ。つーことはもう着せないんだな？」

俺がそう言つと春蘭がジト目になりながら、唇を尖らせながら言ってきた。

「貴様は我々を殺したいのか……」

「いや、そこまで可愛いんなら見せてもらいたいと思つてな」

「華琳さまのあのようなお姿見せられるわけなかるう！！ それ

に着付けをする我々の身にもなってみる……」

春蘭がそう言うので是非とも二人が着付けしたときのことを想像させてもらおう。

まず二人が華琳の服を脱がす。多分ここらには見慣れてるだろうな。次はメイド服を着せる。可愛らしすぎて失神……。

「うん、無理だな」

「そうであろう？ うん、作業はどうするか……」

「作業？」

春蘭から聞いたんだが、当たり前と言うべきか華琳も日々成長している。だからちょうど華琳も出掛けることだし、華琳に合わせて人形を調整でもしようと思った。

だがこんな乱れた心ではとても調整など出来ないだろう。だから飯でも食いに行こうかと言うことになった。

「秋蘭どうすんの？」

「貴様のせいでこうなったのだから、貴様が何とかしろ」

何とかって言われてもなあ。確かに俺が秋蘭の胸をつかんだのが原因でこんなコトになったんだから、俺がなんとかすべきなんだろうな。

でもあんな再起不能になってる秋蘭を見たのなんか初めてだし、

春蘭も初めて見たって感じだからな。

春蘭より付き合いの短い俺がどうこう出きるような問題じゃないと思っんですけど……。

「おい、しゅーっらーん。元気ですかっ!？」

「うおっ!?!」

「元気があれば何でも出きる!?!」

猪 風味で言ってみるんだが、秋蘭は未だに顔を真っ赤にさせながらポーっとしていた。

風邪を引いた時みたいに目もトロンとしてるし、マジでヤバげな雰囲気だな。こんな秋蘭の姿見たことがないだけに、なかなか焦らせてくれるな。

「龍崎、今のは何なのだ？」

「ああん？ 木だ」

「猪？ なんなのだそれは？」

「言っても分かんないと思っから言わない」

だって今そんなコトを言ってる場合じゃないからな。

はてさて、どうやって秋蘭あきを攻略すればいいのかねえ。全然分らないな。

そんなコトを思っていると誰かの腹の虫が鳴った。俺でも秋蘭でもないから……。

「あは、あははは……。は、腹が減ってしまったな」

ばつが悪そうに頭を掻いて笑いながら言う春蘭。そう言えば俺も飯を食いに行くところだったな。

「先に行つてもいいんだぞ？」

「そ、そうか？」

「ああ。秋蘭のコトは任せとけ。あとからすぐに行くからよ」

「うむ。なら任せたぞ」

「ああ」

俺がそう言つと春蘭はよほど腹が減つてたのか走つていつてしまった。

にしても春蘭には早めに行くつて言つたが、どうしたもんかねえ。あれから微動だにしないし、顔真っ赤のままだし。

よっぽど恥ずかしかったんだな。ゴメンナサイ、今は謝ることしか出来ないツス。

そんなコトを思っていると秋蘭が動き始めた。しかもなんか俺の首に手を巻いて……。

「んっ……」

まさかのキスをしてきやがった。何っーか秋蘭にしてはイメージとかけ離れた情熱的なキスだった。

男として秋蘭みたいな美人にキスされて嬉しくないわけがないのだが、状況についていけてないために、受け手となるしかなかった。

秋蘭の暖かい吐息が俺の中に流れ込んでいく。ただ歯の間を割って入っては来ない。

コレを少し残念に思うのは女に対して免疫力のない俺が成長した証だろう。なんか嬉しいんだか、嬉しくないんだか分からない成長だけ。

そして秋蘭の唇は俺の唇から離れる。

「いきなりだな、おい」

開口一番に俺はそう言う。もっと他にも言いたいことはあるが、俺は先にコレを言う。

「ふふっ、こんな気持ちにさせたのはドコの誰だ？」

秋蘭は切れ目を俺に向けてくる。わずかにとろんと潤んだ瞳は、俺を誘うように揺れている。

「さてね。ドコの誰だろうっな」

「つれないことを言うな、龍崎は」

秋蘭はそう言うなり再びキスをしようとしてくるが、それを止める。その行動に秋蘭は不思議そうな顔をすれば、お預けを喰らった子供のような表情にもなる。今日は本当に珍しい日だ。

興味本位でついて行っただけなのに、秋蘭のいつも見れないような表情がいくつも見れた。それは俺の知らない彼女の一面を見れたと言っことだろう。

乱世に身を投じてはいるが、本来の姿は普通の一人の女の子。今日のことを通して、それを改めて実感できた。

「悪いな。春蘭を待たせてるんだ。早く行こ……んんっ!？」

俺がそう言い秋蘭を話そうとするのだが、再び唇を秋蘭の唇によって塞がれる。

だが今度は齒の間を割って舌が入ってこようとする。それを俺は受け入れずに、唇をはなす。

「随分と情熱的だな。どうしたんだ？」

絶対俺も顔が赤くなってるんだろうな。体温が上昇していくのが分かる。

「今は他の女の子の話はしないでくれ。今は……私だけを見て欲しい」

そう言う秋蘭の潤んだ瞳は、今にも溶けてしまいそうだった。

よくは分からなかったが、コレが秋蘭の甘えと言っ奴だろうか。

普段の疲れや華琳だけにしか甘えられないと言っことから出てしまっただろうか。

「秋蘭……」

「んんっ……」

今度はお礼の代わりに俺からキスをする。さっきまでは主導権を握られっぱなしだったので、今度俺が主導権を握る。

俺のキスに対して秋蘭はなにかを求めてくるように、応えてくれる。そして短いキスは終わる。

「龍崎……。私は……」

「悪いな。今は気持ちの整理がついてないんだ」

「……そうか」

秋蘭は俺の言葉にふっと笑うと、いつもの表情に戻る。

どうやら熱が冷めたようだ。何にしてもさっきまでの秋蘭は普段見れない秋蘭で、そうそうに見れる姿じゃないだろう。

「姉者が待っているのだろう？ 早く行こうか」

「そうだな。早くしないと怒られそうだから」

「ふふっ、そうだな」

俺と秋蘭はそう言い合い笑い合つと春蘭の元に向かった。

秋蘭の思いを知つた俺はコレからどうなるんだろうな。

まあ、それは俺自身に掛かってるってコトだな。

俺は青空を見上げながらそう思つたのだ。

第貳拾參話『えっ？ 何それ？ マジかぁーーーーっ！？』（後書き）

どうしてこうなった……。

とりあえず秋蘭はこんなんじゃないと言っ方……、目を瞑ってくだされ……。

感想待ってます！！

第貳拾漆話 『業炎の剣帝、料理人を雇うのこと』

side 桜牙

秋欄との事件から数日が経過した。あれから、俺と秋欄の関係には変化はないのだが、秋欄が夜な夜な襲撃を仕掛けてくるようになった。

それを撃退するために罫を作ったり、身代わりを使ったりとすでに休める時間がなくなってきたしまっていた。

くつ、美人にまわりつかれてここまで迷惑に思うとは思わなかった……。

そんなコトはさておき、現在はようやく得ることが出来た休暇中。そんな俺の視線の先には季衣がいた。

なにやらなんか書いてるみたいだが、季衣にしては珍しいな。

「季衣、何してるんだ？」

俺は季衣に近づきながら訊ねる。

「あ、兄ちゃん。手紙書いてるんだー」

「手紙？ そう言や、手紙を出せるようになったんだな」

黄巾党が暴れている間は危険すぎて引きつけてくれる人なんか居

なかつたらしいな。この時代に電話やメールもないから、直接会わずに連絡を取るしか手紙しかないからな。

だからといって手紙を郵便局とかに出すんじゃないで、地方に行く旅商人とかに預けて渡してもらうんだが、届くかは商人に掛かっているわけで、届かなかつたりもする。

まあ、黄巾党が暴れてるときに比べれば使えるようになったんだから倒した価値はあるだろうな。

「兄ちゃん、楽しみにしてるってどう書くんだっけ？」

「楽しみにしてる？ それって友達に出す手紙か？」

「うん、そうだよー」

「ーことは難しい言い方じゃなくても良いんだよな。とは言え俺自身普通の手紙を出す機会なんかないから、友達同士に出す書き方なんか知らないんだよな。」

「そう言うのは秋欄とか桂花に訊いたらどうだ？」

「あら、どうかしたの？」

そんな会話をしていると不意に後ろから声をかけられた。振り向いてみればいつもの武装した姿ではなく、私服姿の華琳がいた。

別に戦とかがあるわけじゃないから私服姿ってのは珍しくもないか。

「ちょうど良いときにきたな、華琳」

「あら。私にも秋欄にやったようなことでもやってもらえるのかしらっ。」

「……」

なんで俺と秋欄がやったこと（まあ、キスだけだけど……）知ってんだよ。まさか秋欄が言うとは思えないし……。

「私が知らないでも思っただの？」

「この際俺の心を読んだことを訊くのは控えさせてもらおう。そうじゃなくてだな……」

とりあえず俺は季衣が手紙の書き方で困っていると言うことを華琳に説明した。

まあ、説明したはいいが意味深な目で見られたがな。

「手紙って言うと、相手に証拠にされない正しい脅迫文の書き方とかかしら？」

「なんでも物騒な方向に持って行かないでくれ」

このご時世だからこう言うのを考えるのは仕方がないが、季衣と言うことを考えてくれ。

「楽しみにしてるってどう書くんですけどっけ？」

「ああ、それはね……」

華琳は軽くうなずくと季衣に何かしら教えていた。

さすがは華琳と言うべきか教えるのも上手いな。

「季衣はもう少し秋欄について物事を学んだ方がいいわね」

「えー。体動かしてる方が楽しいし、ボク勉強苦手なんですけど……」

「勉強しないと持つてる小遣いでいくつ饅頭買えるか分かんないぞ？」

「ううう……。た、確かに……」

俺がそう言うと季衣が悩み始めてしまった。まあ、若いウチは悩みは勝手でもしろって言うし……あれ？ 苦労だったか？

ん？ 俺か？ 俺は二百歳だからもう爺だからそんなのはいらねえよ。年寄りは大切にしろ、ってな。

「なんか、遠い目をしてるのだけれど大丈夫なの……？ まさか、もう秋欄に骨抜きに……」

「いやいやいや、なんでもそつちにくつつけないでもらいたいんだが。そうじゃなくて、平和になったなって思っただけだ」

「……そつでもないわよ」

「ん？」

どうやら華琳の話によれば市井が平和になると、途端に殺伐としてくるところがある。

宮廷にて、華琳に昇進の話を持ってきた何進が権力争いで殺されたいらしい。

権力を欲しがるのはドコの時代も、ドコの世界も、ドコの異世界も同じのようだった。肉屋のせがれが、権勢を振るうのを面白く思わなかったのだろう。

そして今有力なのは董卓と呼ばれる者らしい……………董卓！？
あー、そう言えば黄巾の乱のあとには董卓が出てくるんだったな。

董卓と言えば有り得ないほどブクブクで毛むくじやらのオツサ
ンで、脂ぎってて燃やせば三日三晩燃え続けると言われるほど……
だったか？

何にしてもこの世界の董卓も女の子なんだろうな。話を聞いている
限りでは、董卓の正体は桂花や秋欄、さらには張三姉妹も戦ったこ
とのある将の中にそんな名前は聞いたことがないそうだ。

だがおそらく董卓は誰かのクグツとして動いていると華琳は言っ
ていた。確かに自分で権力を握った方が何かとやりやすいが、それ
だと自分が悪政を働たらき目を付けられるのがイヤなんだろう。

だがクグツとして動かしている奴に悪政を働かせても、恨まれる
のは黒幕ではなくクグツだから、安心して政を行えるんだろうな。

「とりあえずこのままだと黙っててもとばつちりが来るだろうな」

「そうね。だから桜牙も何かあったときのために準備をしっかりとっておきなさい」

「分かってるさ。そのための軍備強化だろ？」

黄巾の残党討伐にしては気合いが入っているとは思ったが、よく考えてみるとそう言う考えがあっただったな。

「出来た！ 華琳さま、兄ちゃん！ ボク、手紙を出しに行ってくるよ！！ あっちに行く商人、昼間過ぎに出ちゃうって言ったし……」

そんなコトを話し合っていると季衣が言った。

「ええ、行ってらっしゃい」

「気をつけるよ」

「うん！」

そう言って季衣は走って行ってしまった。

あんな無邪気な笑顔をみる限りじゃ、もうじき戦いが起こるなんて信じられないな。

「ところで、桜牙」

「ん？ どうした？」

季衣を見送ると隣の華琳が不意に声をかけてきた。

「秋欄とはどこまで進んだのかしら？」

「いい加減その話から離れてくれ……」

あん？ 読者様もどこまで進んだか知りたいって？ 安心してくれ。華琳や読者様が思っているようなことは一切ない。

「つか頑張って守ってるって言ったじゃねえか。とにかく、やましいことは何にもありません！！」

「くれぐれも泣かせないようにしなさい」

「……分かってるさ」

俺はそう言うしかなかったのであった。

華琳の話聞いてからしばらくの時間が過ぎた。それから俺たちの軍備の強化が続いた。それに秋欄からの襲撃も続いた……。

まあ、最近は雪もいるから自重してくれただようになっただが、それでも雪が季衣や紅葉の部屋で寝るときは躊躇なく襲撃してきやがるんだよな。

「すみません。あなたが龍崎桜牙さまですか？」

そんなコトを思いながら警備をしていると後ろから声をかけられた。振り返ってみるとそこには、旅商人らしき人物が居た。

「どうした？ 道案内か？」

「いえ、そうではなく、『呉』から手紙を受け取ってきました」

「『呉』から？」

『呉』からつつつと孫策か孫権あたりからの手紙だろうけど、わざわざ手紙なんか寄越してどうしたのやら。

俺はそう思いながら手紙を受け取ると、旅商人は去っていった。まった。とりあえず何事かと思ひ手紙を開けてみた。

『やつほー桜牙、久しぶりね。雪華よ。色々と言いたいことがあるけど、いきなり本題に入らせてもらっわ』

相変わらず言ってる姿が目につかぶほどに孫策らしい文だな。とりあえず文を読んでみると、こう書いてあった。

董卓が権力の中枢を握ったことにより、それを討伐すべくに連合軍を立ち上げたらしい。まあ、ホントは孫策を客将としている袁術がそれがイヤならしく腹いせならしい。

本題はそこに俺が参加するかしないかを訊ねる文が書かれてるんだが、そんな話は聞いてないから分かんないんだよなあ。

返事は華琳に聞いてから出すことにするか。これぐらいなら構わないだろうな。

「あのお……すみません。ちょっと教えて欲しいことがあるんですけどお……」

そんなコトを考えていると再び話しかけられた。振り向けばそこには武人のような雰囲気を持つ少女が二人いた。

「どうかしたか？ 道案内か？」

「えっと、お城『の前に、美味しい料理を食べさせてくれるところ教えてくれよ』ちよっ、文ちゃあん！！」

結局城を案内するのか、美味しいものを食いたいんだかはつきりしてくれつつうの。俺ってば警備の仕事なんかやってる暇ないんだから。

そんなコトを思ってる間に目の前の二人は言い争っていた。

「で、ドコに案内すればいいわけ？」

「なら、何かおいしいものを食べさせてくれる『料理屋がたくさん並んでるところ、ドコ！』……」

「料理街ね。はいはい、向こう通りにあるからそこで構わないだろ」

「おお、兄ちゃん気が利いてるじゃんか」

気が利いてるも何もあんたらが店が並んでるところ教えろって言ったんじゃねえか。

と言うことで俺は 二人を料理街に案内することにした。

そんでやってきた料理街。それを見たボサボサ頭はなんだかすげー興奮してるのか、目をキラキラさせている。

とりあえずコレで道案内は終わりだな。さつさと孫策に手紙を書くか。

「じゃあ俺はコレで……」

「何だよ兄ちゃん。あんたも一緒に食べていきなよ。まだなんだろ？ 昼飯」

「ああん？ 確かにただだけど……」

俺は孫策に手紙の返信を書きてえんだよ。今誘われても有り難迷惑だつつうの。

「兄ちゃん。どっかオススメの店、教えてくれよ」

俺と一緒にいくことはもう決定事項なのね……。いつ『呉』に行く旅商人が出て行くか分かんないつつうのに、困ったもんだな。

しかもオススメの店か……。いつもは季衣について行ったりしてるしてるから、オススメの店なんか分かんないんだよなあ。

「あ、兄ちゃん！！」

そんなコトを考えていると季衣の声が後ろから聞こえてきた。

「季衣か。どうしたんだ」

「これからお昼食べるんだけど、兄ちゃんは？」

「俺らも今からだ。そうだ、ちょうどいい。季衣、なんかオススメの店知ってるか？」

今季衣に会えたのは幸運だった。適当な店を教えるより、季衣みたいにオススメの店を知ってる人に案内させた方が確実だ。

「この辺り？ 任せてよー」

「ん？ このちびっ子、詳しいのか？」

それを聞いた季衣の表情がムツとした。

つーか初対面の奴に向かっていきなり失礼な奴だな。

「……兄ちゃん。誰、このぼさぼさ」

「……」

「はあ……」

季衣のさらに挑発的発言にボサボサ頭の隣にいた清楚そうな女の子があーあ、と言ったような顔になり、俺はため息をつく。

「季衣。俺もそう思うが、言っちゃダメだろ。本音は心に閉まるとくもんだ」

「それって兄ちゃんも思ったってコトでしょ？」

なんとも鋭いツッコミだな季衣よ。

「そんなコトはさておき、季衣はこの辺りに詳しいから美味しい店も教えてくれるだろうよ」

「へええ……。良かったね、文ちゃん」

「ふうん……。こんなちびっ子が詳しいのかねえ」

おい、こら。わざわざ「ちびっ子」を強調しやがんだ。んなこと言ったら季衣がまた怒るだろうが。

「この街に来たばかりのぼさぼさよりは、詳しいと思うけどね」

こっちもこっちで「ぼさぼさ」を強調してるし……。まったく、疲れる二人だな……。

「なんだとう……！」

「なんだよう……！」

疲れて止める気にもなれやしない。なんなんだこの二人の相性の悪さは。犬と猿かっつうの。

「とりあえずもう面倒だから、その店に連れてってくれ」

「いいよ！ そっちのさばさに絶対美味しいって言わせてやるんだから！」

「へっ。あたいの舌は厳しいぜ？ そうそう美味しいなんて言わないっての」

「美味い！！」

「っーことでやってきました季衣のオススメの料理店。さっきのさばさは開口一番に美味しいと叫びやがった。」

「なんか美味すぎて感動してるみたいだが、美味しいだから仕方がない。」

「しかもなんか食べ合ってる中でさばさと季衣に友情が芽生えたのか真名も交換して、あだ名で呼び合ってるし……。何っーか結局は似たもの同士は似たもの同士を呼ぶってコトか。」

「お姉さん、おかわりー」

「ボクもおかわりー」

「あん？ って俺のがない！？」

「無駄に早いおかわりだったっつうのに、俺の分まで食ったっつうのか！？ 俺ってばまだ一口も食ってないっつうのによ！？」

「すみません。俺もいいツスカ！」

「はいはい！　すぐ待っていていきまーす！」

何っーか俺的には季衣が二人もいるように見えるのだが、気のせいだろうか……。

そして給仕さん、すみません。ウチの連れの二人が暴食すぎるので働かせちゃって……。

そんなコトを思っている間に給仕さんは料理を運んできてくれた。

「ご飯、おかわり！」

「こっちもおかわり！」

「は、はぁいっ！」

この給仕、お姉さんって言うより季衣と同じくらいの年齢にしか見えないんだが……。にしてもこんな小さいのに、頑張ってるなあ。

手伝ってやりたいが、俺も腹減ってるしここは飯を食わせてもらうとするか。

「で、お前ら何しに来たんだ？　見たところ武人みたいだが？」

俺はニヤリとしながら二人に向かって言う。

「分かるんですか？」

「ああ。雰囲気からな。俺も武人と一般人の雰囲気の区別くらいは分かるからな」

「はい。ええつと、ですな……」

そんな会話をしていると二人の気配が近づいてきた。

振り向けばそこには華琳と秋欄がいた。どっちもいつも通りだった。

「よつ、華琳、秋欄。飯食いに来たのか」

「当たり前でしょう。それで、そちらの二人は？」

「美味しい店を案内してくれて頼まれたんだ。案内したらこんな事になったんだ」

「お兄さんにはお世話になってます」

清楚そうな女の子がそう言うと華琳の表情が何やら意味深な表情になり、秋欄の表情は変わってはいるが俺には分かる。

あの人を射殺すような目と、まるで鬼神のごとくの威圧感。正直に言おう、メチャクチャ怖えよ……。誰か助けてくれ……。

「ふうん……。若い女の子には優しいのね。桜牙」

「いや、仕事だからね。誤解を招くような言い方はやめてね。華琳も秋欄も若くて可愛いから安心してください。そんな怖い顔で睨

まないてください。ゴメンナサイ、スゴい怖いです」

なぜか途中から敬語になっちまったが、秋欄の目がヤバい怖かった。特に華琳も秋欄も可愛い部分を言ったら、殺気すら感じたぞ……。

やべえよ。なんなんだよこの空気……。えっ？ なに？ 俺なんか悪いことしました？

「あ、いらっしやいませ！ 曹操さま、夏侯淵さま、今日もいつものでよろしいですか？」

グッドタイミングだぜ給仕さん。今ほどあなた様に感謝したことはありません……。まあ、さっき会ったばかりだけど。

そんで華琳の名を聞いたとき二人の表情が変化したが、まあいいか。

「ええ、お願いするわ」

「私も同じもので」

「はいっ。すぐお持ちしますねー！」

給仕さんはそう言うのと再び厨房に入っって行ってしまった。すんません、また秋欄の睨みが怖いッス。

「え、えつと、二人もこの店に来たりするんでせうか？」

「まだ若いのに大した腕の料理人よ。お抱えで欲しいくらいなの

だけれど……」

話を聞く限り華琳はさっきの料理人を雇おうと直々に言葉をかけたのだが、断られたらしい。華琳の誘いを断るとは、相当な理由があると思えないな。

その理由と言うのが、友達に呼ばれてこの街に来たんだが、合流出来なかったそうさ。だからその手掛かりが見つかるまでここで働いているそうさ。

「人探しくらいなら俺らがやってやるっつうの」

「あら。やっぱり若い女の子には優しいのかしら？」

「……お二方のお望みも聞いて差し上げましょうか……？」

なんなんだよこの空気……。優しくするってのは別に下心があるからとかじゃないからね……。

そんなやりとりをしてる間に給仕さんがやってきた。

「はいっ。お待たせしましたー！」

給仕さんは笑顔でそう言いながら料理を並べ始めた。

「あの、お嬢さん」

「はい？ ご注文ですか？」

「彼があなたの親友を探してくれるそうよ。良かったら、特徴を

言ってみてはどうかしら？」

「本当ですか!？」

「ま、まあ、そう言うのがし、仕事ですから。そ、そそそれでその子も料理人なのでせうか？」

うおおーっ!! 秋欄すわぁくん!! 何で俺の足のつま先をそんなに踵でグリグリしてくるんでせうか!? 痛い、痛いです、痛いんですよおおーっ!!

「い、いえ、食べる方は大好きなんですけど……。料理の方はさっぱりなんです。ただ、私を呼んでくれたって言うことは、料理屋で働いてるんじゃないかな、と」

「そ、その手紙には仕事のコトは書いてなかったのですか……」

うおおーっ!! 何で善意で話を訊いてるだけなのにそんなグリグリされなきゃいけねえーんだよおおーっ!! 理不尽だぁーっ!!

「住み込みのいい仕事が見つかったから来いとか……。ただ私と呼ばれるくらいですから、彼女も食堂の給仕か裏方をしているのかと。力には自信がある子なので」

ん? 力に自信がある子……。それで給仕さんと同じくらいの背丈の人……。スゴい食う……。一人だけ心当たりがあるんだが、いや、まさかね。

「もしかしてその友達の名前って許緒とか言わないよな？」

「そうですね、なんで分かったんですか？」

それを聞いた華琳たちは一斉に押し黙る。

さらに給仕さんがすげー驚いたような表情をしたので、俺はこの話を全く聞いてない飯をバクバク食っている季衣を指差す。

「あーーーーーっ！！」

給仕さんは季衣をみたと物凄い声を出していた。

ふっ、どうやら俺の推理は間違ってたようだな。

「あー。流琉ー どうしてたの？ 遅いよう」

季衣は季衣で給仕さんを見た途端に、知り合いだとばかりに話し始めた。

「遅いよじゃないわよー！！ あんな手紙よこしてわたしを呼んだと思つたら、何でこんな所にいるのよーっ！！」

「ずーっと待ってたんだよ。城に来いって書いてあったでしょ！！」

なにやら二人が喧嘩を始めてしまったようだ。何っーか修羅場だな。

そして俺の足にも修羅場が訪れてるなあ。なんか指先の感覚がねえんだけど……。超痛いんですけど……。

「あ、あの秋欄さん？ 痛いんだけど？」

「ん？ 何のことかな？ 私は何も知らぬぞ？」

あー、そう言うことですか秋欄さん。俺をイジメて楽しいんですね。ごめん、生憎俺には秋欄をどうこうする勇氣はありません……。

そんなコトをしてる間にも季衣と給仕さんはドツタンバツタン暴れてるし、華琳とかは飯食ってるし。

あつ、さっきの二人が季衣と給仕さんを止めたみたいだ。一件落着だな……俺の足は別の意味で一件落着きそうだが。

「お初なお目に掛かります。私は顔良と申します」

「あたいは文醜。我が主、袁本初より言伝を預かり、南皮の地よりやってまいりました」

「こんな場面で恐縮ではありますが、ご面会頂けますでしょうか？」

「……あまり聞きたくない名を聞いたわね。まあいいわ、城に戻りましょうか」

と言うことで華琳たちは城に戻ることにしたらしい。たぶん話つてのはこのタイミングからして、孫策の手紙にあったことだろうな。

だったら俺はその話を知ってるんだから聞かなくてもいいだろうな。それよりあの二人を止めた方が良さそうだ。

「秋欄」

「どうしたのだ？ 早く戻るぞ？」

「ああ、そのことなんだが多分今から話すことは、俺は知ってるから聞かなくても大丈夫だ」

「どういうコトだ？」

さすがに秋欄も武人だ、こういう話になれば真面目になるんだろうな。

「話はあとでするさ。今はあの二人をどうにかしないとな」

俺は未だに暴れ回ってる二人を見ながら言う。すると秋欄も納得したようで、ため息をつきながら了承してくれた。

とりあえず俺は周りに被害の掛からない場所に二人を移動させることにした。

それでやってきました森の中。ちょうどよく暴れられそうな場所があり、俺は二人をそこまで連れて行くと、一言告げた。

「兄ちゃんこんな所に連れてきて、どうしたの？」

「そうですね」

なにやらお二人は不機嫌そうなのだが気づいてないんだろうか。

あのまま暴れてたら店が崩壊してたと言っことを……。

「はい。ここなら思いっきりやり合っても問題ないぞ。思う存分やりなさい」

無駄にシコリを残すよりも、思いっきり気持ちをぶつけ合った方がいいだろう、と言っのが俺の考えだ。

仮にどっちかが危なくなっても、俺が助ければ大丈夫だろ。

「そう言っこと……」

季衣と給仕さんはニヤリとするといっの間にか持っっていた武器で戦い始めた。

さて、とりあえず他に危害が行かないように見守っておくか……
っつてっおおい!?

なんでではじかれた武器が俺の方に向かってくるんだよ!？ 初っ端からこれだと、命がいくつあっても足りないような……。

ちよっぴりそんな後悔を抱きながら、戦いを見守るのだった。

「あら、桜牙。随分と面白い格好をしているのね」

「華琳……。俺が何回死にそうになっただか教えようか……?」

季衣と給仕さんの戦いが終わった頃に、華琳たちの話も終わったらしく二人が戦ってるところにやってきたのだ。

話の内容はやはり孫策の手紙からあったとおりだった。そのことを華琳に話したら、早く返事を出せと言われた。

「とりあえず、あいつらも終わったみたいだぞ」

「ええそうね」

華琳はそう言うとヘタレ込んでいる給仕さんの元に向かった。

「ようやく決着がついたようね。二人とも」

「曹操さま……」

給仕さんは華琳の存在に今気づいたように顔を上げた。

「立ちなさい、典韋」

「はい」

へー、あの子典韋って言うのか。

「もう一度誘わせてもらおうね。季衣と共に、私に力を貸してくれるかしら？ 料理人ではなく、一人の武人…… 武将として」

典韋は少しだけ考えた素振りを見せると決心したかのように華琳の目を真っ直ぐと見ながら言う。

「わかりました。季衣にも会えたいし。季衣がこんなに元気に働いているところなら、わたしも頑張れます」

「ならば私を華琳と呼ぶことを許しましょう。季衣、この間の約束、確かに果たしたわよ？」

この間の約束とは旗刺し勝負のときの約束のことだ。

俺は休暇をもらったんだが季衣は友達を城に招待することを選んだらしい。

友達思いつて言うか何というか……。今思うとみんな優しいよなあ。

「で、秋欄。あなたはなぜにワタクシの背中を抓ってらっしゃるのでしょうか？」

俺は華琳の話の聞いている間ずっとポーっとしてたかと言えばN Oだ。

俺はずっと秋欄の抓り攻撃に耐えていたのだ。だって武人の抓りだよ？ そんじょそこらの人の抓りとはワケが違うっつもの。

肉が千切れそうなんですよ。マジで。

「すまないな。なぜか龍崎が他の女の子と話しているとイライラしてきてな」

「そ、そうなん痛ででででっ！？ ヤバい痛いからね！？ ハンパなく痛いから！？」

「そうか？」

そうか？ とか言いつつさらに力を込めるなぁーっ！

くっ、嫉妬とは恐ろしいと聞くがここまでとは……。

体を持って実感した教訓だ。女性の嫉妬には気をつけろ、と……。

第貳拾伍話 『業炎の剣帝、連合軍に参加すること』 (前書き)

誤字訂正しました

ではございませう！

第貳拾伍話 『業炎の剣帝、連合軍に参加すること』

side 桜牙

流琉が仲間になってから数日が経過した。その数日の間も俺たちの軍の強化は続き、隊がかなり強化された。ただ、俺がしごきすぎると、相手が人間だってコトを忘れてやりすぎちゃうんだけどね。

だって俺吸血鬼だもの。人間じゃないから少しばかり無理したって大丈夫なもの。まあ、それでも無理しすぎたら動けなくなるんだが、この時代じゃそんなコトにはならないだろうな。

そんなコトはさておき、俺たちは軍を率いて一路、街道を進んでいた。ただ行き先は都ではなく、反董卓連合の集会所だ。

孫策にも呼ばれたし、結局手紙の返事は出さなかったからそこで話させてもらおうかな。

「あー、すげー遠いな……。なあ、雪」

俺はジャックと一緒に乗っている雪に訊ねる。いまさらなんだが雪は馬に一人で乗れないらしい。だから戦に出かけるときは、誰かに乗せてもらってるようだ。

今は俺がいるから俺の馬に乗っているが、俺が居ないときは恥ずかしながら兵士に乗せてもらってるらしい。

「そうですね。ですが西方の馬騰などは私たちの倍以上の距離は

駆け抜けるそうですよ?」

「そりゃ大変だなあ。つーことは俺達はまだマシってコトか」

「そうですね。うう……。お尻が痛いです……」

そう言えば朝から馬に乗りっぱなし立ったからな。どうやら雪は馬に慣れてないみたいだしな。

西方の奴らは騎馬の民だから生まれてすぐ馬に乗るから、慣れるんだろうな。

「だらしないよ、雪。兄ちゃんを見習いなよ」

「でも兄様は慣れてるみたいですね」

そんなコトを言い合っていると馬に乗っている季衣と流琉が言ってきた。

「し、仕方ないじゃないですか!! あんまり馬に乗ったことないんですから!」

そして雪は恥ずかしそうに季衣に言い返していた。でも俺も馬なんかあんまり乗ったことないからね。まあ、ドラゴンとかなら乗ったことはあるけどな。

「てか、流琉はなんで兄様?」

「え? 季衣のお兄様なら、私も兄様でいいかなあ……と」

「いや、確かに兄貴分とは名乗ったけど……」

季衣の本物の兄貴ってわけじゃないし、何よりこんな小さな子にこれ以上兄ちゃん呼ばわりされるのは、何つーかむず痒い。

「……ダメ、ですか？」

そんなうるうるした目で言われたら断れるわけないじゃんか……。

「好きに呼んだらいいさ」

「はい、兄様!!」

まあ、呼び方の一つや二つなんかどうってコトない……ふおっ！
？ な、なんだ、この尋常でない殺気は！？ ワタクシの右斜め後方よりのこの殺気は……。

俺は殺気に怯えながら振り向くとそこには素晴らしい笑みの秋欄がいた。

こここここ怖えよ……。あれから女の子と話すことに殺気が襲ってきてるんだが、怖すぎるよ……。

「兄様？ どうしたんですか？」

「えっ？ なに？ 何でもないけど？」

「でも兄様、スゴい汗ですけど……」

そんなコト言われても秋欄からの殺気が怖すぎるんだよ。戦い以

外でここまでの殺気を感じるなんて思わなかった……。

しかもこの殺気、俺以外の奴には感じれないパターン？ だって同じ馬に乗ってる雪は普通そうだし。まあ、馬に乗って大分参ってるみたいだけだな。

「桜牙さん、袁紹の陣地が見えましたよ」

「他の旗も結構来てるな……」

『孫』の旗も見えるしどうやら孫策も来てるみたいだな。

お？ あいつは確か袁紹のところの顔良だったな。華琳となんか話してるみたいだな。

「おつ、孫策さんも来てるみたいね」

「孫策さん？」

紅葉がそう言つと雪が問いかけてきた。

「そうか、流琉は知らなかったっけな」

とりあえず目的地についたし、指示もまだないから流琉に俺の1週間の休暇の時の話をした。

「そんなコトがあったんですか……」

「まあね。成り行きって奴さ」

俺はあのとときの休暇の口トを思い出しながら言つ。すると華琳が俺に向かって言ってきた。

「桜牙！ 今から麗羽のところに行くわ。ついてきなさい！」

「あ、ああ。みんなはどうするんだ？」

「他の者は桂花、もしくは顔良の指示に従いなさい」

と言うことで俺、春蘭、秋欄は華琳について行くことになった。

「おーっほっほっほ！ おーっほっほっほ！」

で、何こいつ。髪は華琳よりクルクルだしウザイし偉そうだし……。なにかと俺のイライラメーターを上げてくれる要素を兼ね備えてる奴だな。

「久しぶりに聞いたわね。その耳障りな笑い声……。麗羽」

「華琳さん、良く来てくださいましたわ」

「……」

マジでなんなんだこの糞ウゼエ女は……。ぶち殺してやりたいんだが、この気持ちはどうすればいいんだ……。

「さーて、コレで主要な諸侯は揃ったようですわね。華琳さんがびりっけつですわよ、びりっけつ」

はあ……。なんか怒る気にもなれねえ……。秋欄も春蘭すらも何も言っていないし。華琳もスルーしてるし、こんなこといつものことなんだろうな。

そんな感じの挨拶から始まって俺たちは軍議が始まると思われる場所にやってきた。そこにはやはりと言うべきか、孫策もいた。

「それでは最初の軍議を始めますわ。知らない顔も多いでしょうから、まずそちらから名乗っていただけますこと？ ああ、華琳さんはびりっけつですから、一番最後で結構ですわよ。おーっほっほっほー！」

はあ……。アホらしすぎる……。びりっけつだからどうのこうの言いやがって、小学生かっつもの。

何？ ここって小学生の集まり？ いや、小学生はあの金髪クルクルだけだろうな。もちろん華琳じゃない方の。

(なあ、秋欄。あの糞ウゼエの誰？)

(あの糞ウゼエのは袁紹。この集まりの主催者だ)

なにげに秋欄もあいつのこと糞ウゼエって言ったな。まあ、それは俺や秋欄や華琳だけじゃなくて、ここに集まっている奴ら全員が思ってるだろうな。

話によれば三公を輩出した名家の出身で、自身も司隸校尉だそうだ。この中では一番地位が高いようだ。

「そこ、なにくつちゃべってますのー!!」

「あアん？ なんだモガモガ…」

何かを言おうとするとこの間のように夏侯姉妹に羽交い締めになれる。いろいろ地位があつてめんどくさいな。前の世界だったら言いたい放題、やりたい放題だったのにな。

「幽州の公孫贇だ。よろしく頼む」

「平原群からきた劉備です。こちらは私の軍師の諸葛亮」

「よろしく願います」

えっ？ なんでドコの軍師もちっちゃいわけ？ ウチの軍師と軍師見習いもすげーちっちゃいけど、もしかしてこの世界の軍師は小さい運命なのか……。

え？ 女の子だったことには驚かないのかって？ そんなコト慣れました。

「涼州の馬超だ。今日は馬騰の名代としてここに参加することになった」

なにやら西方の五湖の動きが活発で、馬騰自身は来ることが出来なかつたらしい。

「袁術じゃ。河南を治めておる。まあ、皆知っておるうのがの。ほっほっほ」

いえ、あなたのことなど全然全く分かりませんですことよ。

あんたみたいなたびを知ってるわけねえだろ。豆粒と同じくらい小さいから見えないんだよ。

「私は美羽さまの補佐をさせていただいています。張勳と申します。こちらは客将の孫策さん」

孫策は立ち上がり黙礼を一つしたあと、俺に手を振ってから座った。

って秋欄すわぁくん！？ 痛いからそんなに踵で踏まないでくれ！？ お願いだから！？

「次、びりっけつ」の華琳さん、お願いしますわ」
わざとびりっけつを強調してきてるんだが、マジでテメエは小学生かっつうの。

「典軍校尉の曹操よ。こちらは我が軍の夏侯惇、夏侯淵……それから、龍崎」

俺の名前が出た途端、連合軍がざわつき始めた。

ある者は畏怖の眼差しで見つめ、ある者は尊敬の眼差しで見つめてきていた。まあ、孫策だけはなんか友達を見るような目だけ……。

「あーら。あなたが天からの遣いとか言う輩ですの。結構格好が良いんですね」

「天から？ 華琳、これってお前が言ったのか？」

そう名乗るようには聞いたが、まさかここにいる全員からこんなリアクションが来るとは、どんだけ広めやがったんだ。

まあ、孫策は俺から言っただから仕方がないがな。

「適当に噂を流しておいたのよ。それに桜牙の噂は、自分で広めたようなものでしょう。各地で暴徒を無償で追い払ってくれる『天の御遣い』と」

「そうだったのか……」

確かに知らないところで名前を聞かれたときは『天の御遣い』って名乗ってたからな。

「さて、それでは……最後はこのわたくし袁本初ですわね！」

「それは皆知っているから、いいのではなくて？」

「だな、有名人だから、みんな知っているだろ」

華琳と公孫賛がまるで言わせないようにするかのように、割って入る。

「ナイスだ華琳にハム子。俺もそいつのかん高い声を聞きたくなかつたんだ。」

「そ、それはそうですけど……」

「軍議を円滑に進めるための名乗りだろ？ ならいらんんじゃないか？」

さらにナイスだ馬超。そのまま誰か追い打ちを掛けてくれ。

「うう……。三日三晩考えた名乗りですけど……」

ええ……。名乗りに三日掛けるってどういうことだよ……。名乗りなんか適当で良いだろ……。

「では軍議を始めさせていただきますわ！ 僭越ながら進行はわたくし！ このわ・た・く・し・袁本初が行わさせていただきますわ！ おーっほっほっほ！」

「いいから早く始めなさい」

なんて奴だ。いちいちうるさすぎるだろ。あの笑いはどうにかならないんだろうか……。

(秋欄、帰って良いか？ あと踵グリグリやめてくれ)

(ダメだ。今は抜けられん。それと二つ目もダメだ)

くっ。秋欄は分からないんだよ。コレの痛みがどれほど痛いか……。

「さてでは最初の議題ですけど、このわ……」

「現状と目的の確認だろ？」

「え、ええ、そうですね。このわたくしが集めた反董卓連合の目的ですけど……」

「都で横暴を働いているという董卓の討伐、でいいのよね」

それで董卓の正体をここに集まってる反董卓連合の皆に訊ねたが、誰も知らないそうさ。

「じゃ、そいつのことは逐次情報を集めるってことで。異議のある奴は？」

公孫贇が訊ねたところ、誰も何も言わないことから反論はないことが分かる。

「つ、次は……」

「都までどうやって行くかじゃない」

あの糞ウゼエクルクルの言葉がことごとく奪われていくなあ。よっぽどあいつに喋らせたくないんだな。

「そ、そうですね。この大軍団をわたくしがどうやって率いるかですけれど……」

「後でくじか何かで順番を決めようぜ。その順番で行軍すればいい」

確かに馬超の言ってることで大丈夫だな。どうせ戦いが始まれば、配置を変えることになるんだから、それで十分だろ。

「それで、経路は？」

「け、経……」

「七乃、どういう道程になるのじゃ。皆に説明してた漏れ」

もはや糞ウゼエクルクルに話させないつもりだな。

よし、いいぞみんな。まあ、あのチビも糞ウゼエクルクルと同じタイプそうだけど。

それで張勳から話された経路は、この大人数ならば街通に沿った移動になるとのことだった。

また間の大きな関所は『シ水関』と『虎牢関』だ。だからその辺り、もしくはその前後の広い土地にて、戦闘が起こると予想されるとのことだった。

「そ、そうですわね。きっと、その辺りで戦闘になるはずですよ！ それで……」

「関所の将は？」

もう糞ウゼエクルクル話さなくて良いからね。お前居なくても話し合いは進むからね。居ても邪魔なだけだからね。

とりあえず関所の将は『シ水関』に『華雄』。『虎牢関』には『呂布』と『張遼』の二人がいると報告があったようだ。

ただこの情報は連合が出来る前の調査だったため、間者を放って改めて調べる必要があるようだ。

「シ水関の偵察は私の所でやろう。機動力の高い兵もいるしな」

劉備と何かを話し合った公孫賛が言ってきた。

おそらくは何か考えがあって立候補したんだろうな。じゃなかったらわざわざ受けないだろうし。

「ならシ水関の調査は公孫賛たちでいいわね。さし当たり必要なのはそんなものかしら？」

「まつ、まだ、大事な議題が残ってますわ！」

ようやく自分の言葉が回ってきたとばかりに糞ウゼエクルクルは、声を張り上げるがそこまで大事な議題があったか？

「シ水関を誰が攻めるか……かの？」

シ水関を誰が攻めたりするかは、そこまですぐに決めなくても問題はないだろうけどな。

「それは調査のついでに白蓮さんの手勢が攻め落とせばいいんですわ」

「おいおい…そんな無茶な……」

何チームチャクチャな奴だ。確かにそれが出来れば大丈夫だが、確実でもないのに無理やり押し付けるなんて、何を考えてるんだ。

もし失敗すればこっちに被害が来るって言うのによ。

「あら。白馬長史の白馬軍団は、皆の一つも落とせないとおっしゃいますの?」

なんて挑発的な言葉だ。もしアレを華琳に言われてたら、もうあいつの首はあの位置に無かつたらうに。

「所詮、蛮族を相手に野原を駆け回るのが精一杯なのですわねえ。雪が降れば犬だって庭を駆け回りますのに。おーっほっほっほ」

この中で自分の権力が一番上だからって威張りくさりやがって。ああいうタイプは俺の一番嫌いなタイプだ。自身には力がないのに、権力で人を引き吊り回すっつう最悪なタイプだ。

「むー！ 分かった！ やればいいんだろ、やれば!」

「なら決定ですわね。白蓮さん、せいぜい頑張つてちょうだいな。というか、そんなコトなんてどうでもいいんですわ」

ここまで言つといてどうでもいいと来るか。さて、どれだけ重要なことを話してくれるのか楽しみだな。

もし大したことが無かつたら本気と書いてマジと読むほどの殺気を放つてやろう。

「……………で、何」

「この連合を誰がとりまとめ、仕切るかですわ!」

「あんたは連合を仕切るのをやりたくないんだろ？ それに、他にもやりたい奴はいないみたいだし、俺がやってやるよ」

「な、何を言っつて『待ちなさい！』！？」

糞ウゼエクルクルが言っつている途中で華琳が割って入ってくる。

よし、ナイスだ華琳。最高のタイミングで入ってきてくれたな。

「桜牙がやると言っつのなら、私がやるわ」

華琳も申し出たことにより周りがざわついてきている。

あと一息だな。こっちの将から出しても意味はないだろうし、孫策に協力してもらっつか。

そう思っつた俺は孫策に口ぱくと目線で言葉を伝える。

（孫策、俺たちに合わせてくれないか？）

（なんだか面白そうだし。いいわ、協力してあげる）

（ありがとな。恩に着るよ）

そんな会話をやめると孫策も立ち上がり周りに向かって言っつ。

「曹操と龍崎とやらにやらせるなら、私がやるわ」

孫策までもが立ち上がったことによりさらに周りがざわついて来

る。

そして糞ウゼエクルクルに似ている奴…袁術も高らかに手を挙げながら言ってきた。

「なら妾がやるのじゃー!!」

「え、えつと……。じゃあ、私もー!!」

袁術に続いて劉備も立ち上がり言ってくる。

「なら私もやるぞー!!」

「だったらあたしだって!!」

劉備の言葉を受けた公孫賛と馬超も手を挙げる。

よしよし、ここまでで主要メンバーは全員手を挙げたな。あとはあの糞ウゼエクルクルが手を挙げれば……。

「何を言ってますの!! この連合はわたくしがやりますわ!!」

「「「「「「「「「「「」

よっしやーっ!! まさかのギャグがこの時代にも通用したぞーっ!! しかもなんかみんなこう言うときだけ、協力的だし!!

「い、いいんですの!? な、なら仕方ありませんわね。皆がそこまで言うのであれば、袁本初めがお引き受けて差し上げますわ!! おーっほっほっほ!!」

端っからテメエしかやりたい奴なんかいねえつつうの。

だいたい今のもテメエに言われるのがムカつくからやったんだが、結局ムカつくか発言しやがったな畜生。

「……なら、大事な議題とやらも終わったし、これで解散と云うことでいいわね」

華琳がやれやれと言った感じで言う。

「ご苦労様、華琳。悪かったな、こんなおふざけつき合わせたりしてよ。」

「そうですね。なら、かい『解散!』……」

あんまりにもウザかったから俺が解散宣言をしてしまった……。

まあ、いいか。とりあえず呆けている糞ウゼエクルクルをにおいて俺達は解散した。

「おい、孫策」

「あら、桜牙。久しぶりね」

俺が孫策のところまで行くと孫策は笑顔で言ってきてくれた。

「孫権やみんなは元気か？」

「ええ、みんな元気よ。蓮華は桜牙に会えるわよって言ったら、顔を真っ赤にしてたわ」

「そ、そうか」

なんで俺に会えるからって顔を紅くする必要があるんだろうか……。

そんなコトを思っていると孫策にため息をつかれた。

「相変わらず鈍感ね……」

「悪かったな、鈍感で。それよりさっきはありがとな」

「別に構わないわよ。さっきのは何だったの？」

「あれは俺の世界のま……娯楽の一部みたいなもんかな」

俺がそう言うと孫策はふうん、と珍しそうに呟いていた。

「一緒になって戦うかは分かんないけど、一緒に戦うことになったらよろしくな」

「ええ。でも話によると桜牙一人でも反董卓連合と同じくらいの力があるんじゃないの？」

「ないない、そいつはさすがに買い被りすぎだ」

実際のところは分からないけどね。反董卓連合って言ったら華琳

の隊も入ってるからな。

「まあ、なんにしても再会が戦いじゃなくて良かった」

「それもそうね」

ふおっ！？ な、なんだ急に殺気が背中にバンバン感じるんだけど……！？

そんなコトを思っていると孫策がクスクスと笑いながら言った。

「桜牙は随分とみんなに好かれてるのね」

そういつて孫策が後ろを指さしたから振り返ると、そこには秋欄がいた。

「あなたの恋人？」

「残念ながら違う」

「ふふっ、そう。それじゃあ、まだあなたの席は空いてるってコトね」

孫策は楽しげにそう言っていると孫策の後ろから、無駄に甲高い声が聞こえてきた。

「孫策！ 何をしておる！ 早よう来やれ！」

そう言や孫策は袁術のところの客将だったな。

「ちっ……うるさいわねえ……」

「いろいろ大変そうだな」

「まあね……。じゃあ、またね桜牙。曹操と夏侯惇によろしく伝えておいてね」

「おう、分かった。じゃあまたな」

孫策はそういつて去って行ってしまった。

すると後ろから不意に声をかけられた。

「龍崎、孫策は行ってしまったか!？」

どうやら春蘭が孫策を探して来たようだが、一足遅かった。

「もう行った。ただ、華琳と春蘭によろしくって言ってたぞ」

「そうか。なら仮は戦場で返すしかないな」

そう言えば孫策に借りを作ったとか言ってたなあ。

「ああ、そうだな」

俺たちはそう言つと出撃の準備を始めるのであつた。

ちなみに孫策と何をしていたかを秋欄に聞かれたのは言うまでもない……。

第貳拾陸話 『弱気？ 何それ？ 美味しいの？』

side 桜牙

結局あのあと陣地を展開する暇もなく、都に向けて行軍を進める羽目になっていた。俺たちが同盟軍の最後だったということもあり、出発までは時間がなかったのだ。

で、陣地の展開は出来なかったのは仕方がないので、軍議に参加していた俺たちは、参加していない他の将達に軍議の内容を伝えていた。

「シ水関は公孫賛て劉備ですか……」

桂花はさっきの軍議の話聞いて、顎に手を添えながら呟いていた。

「ええ。連合の初戦、我々で受けた方が良かったかしら？」

「いえ、シ水関は華雄一人ですので、その方がいいでしょう」

華雄はそれほど手強い相手でもありませんし、と付け足しながら言った。

確かに相手の主戦力がそれほど強くもない華雄だって言うなら、俺たちじゃなくて他のところに任せて、虎牢関まで温存させた方がいいだろうと言うのが桂花の言い分だ。

俺も今回ばっかりはその言葉に反論のは字もないな。

「虎牢関は天下の飛翔軍の呂布と神速の用兵を使う張遼だろ？」

「ええ。黄巾の時は何進に振り回されていて苦労していたようだけれどね」

そんな言われなくても分かるつつの。あいつらの出で立ちを見て分かったが、あの二人の実力はどっちも一筋縄じゃいかないほどだ。

そんな二人が黄巾党ごときに後れをとるはずがない。

さらにこの情報はさつき戻ってきた斥候の情報だから、今のころは一番最新の情報だそうだ。

「ならその情報、あとで公孫贄と劉備の所にも送ってやりなさい」

「……よろしいので？」

華琳によれば公孫贄は袁紹と違って借りを理解できる奴らしい。

そんな公孫贄に借りを作っておけば、いざというときに力を貸してもらえるだろうとのことだった。

劉備については分からないが、おそらくはシ水関でも実力が分かるし公孫贄が信用しているくらいだから借りを作っておくのもいいだろうと言っ考えた。

確かにその方が後々に使えそうだが、俺が居るんだからそんな必要はないつつの。

「軍議中、失礼します。華琳さま、報告が……」

そんな会話をしていると風がやってきた。

「何？ また麗羽が無理難題でも言い出したの？」

「いえ、そうではなくて……袁術殿が先行して勝手に軍を動き出したそうです」

おいおい、いくら即席の集まりだからって、いきなり連携グダグダじゃねえか。

多分つつーかあの性格からして、袁紹と張り合って独走でもしたんだろうな。しかも先鋒が『孫』の旗。つまりは孫策が先鋒をやらされてるわけだが、あんたも大変だね、孫策。

拾ってもらったのが袁術とかじゃなくて華琳でホント良かったよ……。こんなところで実感する俺であった。

「春蘭、今こそ飯を返すとか思うなよ」

「うっ、なぜ分かったのだ」

「何となく？ とりあえず今軍を動かしたら面倒なことになる。

なあ、華琳」

「そうね。桜牙の言つとおりよ。自制しなさい、春蘭」

俺の考えが華琳にも分かったのだろう。華琳も今にも動き出しそ

うな春蘭を止めてくれた。

孫策を助けるには軍を動かすことになるだろうし、そうなれば俺たちは袁紹から不興を買うだろう。さらに助けられた孫策も袁術から不興を買うことになるだろうし、借りを返すどころか上乘せしてしまうことになる。

ただ俺単独で動けば華琳達是不興を買わなくて済むが、助けられた孫策の方は俺が華琳の軍だと言ったことが分かってるから、どっちにしても不興を買うだろう。

と、ここまで言ったが孫策ならここで負けることなんかはないはずだ。

「桂花、この戦の結果も一緒に公孫賛に送ってやりなさい。共有して損のない情報は遠慮なくね」

華琳は悪戯じみた笑みを向けながらそう言った。

そんなこんなでやって来ましたシ水関。えっ？ 来るのが早いって？ いや、そうだけど移動時間なんかなんにも無かったから、省いても構わないだろ？

んで、シ水関攻略が始まったんだが、同盟軍にしては珍しく劉備と公孫賛の隊はお互いに助け合うように立ち回っている。

「同盟軍を組む前から知り合いだったのでしょうか？」

そんなコトを思いながら待機していると、雪がそう言ってきた。

ちなみに俺たちの隊は華琳の命令で、指示があるまで臨戦態勢のまま待機つてのが命令だ。それにまだこっちの方が有利みたいだしな。

「そうかもしれないわね。じゃないとあんな連携した動きなんか無理よ」

「確かに紅葉の言ったとおりだ。軍議でも仲良くやってたからな。以前からの知り合いなんだろ」

と俺たちが話し合っていると砦の中から兵士が出てくるのが見えた。

おかしいな。仮に俺たちに勝てる自信があるとしたら、出てきてもおかしくはないが、ここは華雄が守ってるはず。

情報によれば華雄はあまり強くないって言ってたしな……。多分さっき砦に向かってなんか言ってたし、挑発にでも乗ったんだな。

「なあ、雪。こつ言つときつて、城に籠もるのが定石なのよね？」

「そうですね。定石通りやれば、少なくとも負けはないと思えますけど……。あっ、黒髪の人が出て行きますよ!!!」

雪が指差しながら言ったとおり、黒髪の奴が一騎打ちをしに向かっていた。

「劉備のところて関羽と言つそうだ」

「あれが関羽か……………ん？」

なぜにここにいないはずの秋欄の声が聞こえるんだ……………？ 幻聴が聞こえるほどに秋欄を意識してるのか？

まさか俺は知らず知らずのうちに秋欄を恋しがるようになってしまったのか……………。

「あつ、秋欄さん。どうしたんですか？」

あれ？ 幻聴じゃなくて本当に俺の後ろにいたんだ。

振り向くとそこには本当の秋欄がたっていた。おかしいな、秋欄は確か華琳と一緒に居るはずだが……………。

「余りに暇なのでな、伝令役を買って出た。それに龍崎の顔も見えておきたかったしな」

「毎日腐るほど見てるだろ……………」

「それでも好いた男の顔は見たいものだ」

秋欄がそう言うと雪と凧の顔が驚いたものになり、真桜と沙和の顔はなぜかキラキラし始め、紅葉は苦虫を噛み潰したかのような表現になっていた。

秋欄よ……………。恥ずかしいから人前で言わないでください……………。

「秋欄さま、隊長のこと好きだったん!？」

「確かに隊長、カッコいいの！ 秋欄さまが好きになっちゃうのも無理ないのー!!！」

「でも意外やな。秋欄さまが隊長狙いやったとはなあ〜」

なにやらあちらの方で盛り上がってるようでござんすが、俺は関係ない。関係ないぞー。だって俺のこと見てないもん。

「で、秋欄。恋話に花を咲かせるのはいいが、伝令役で来たんだろ？」

「そうであったな。シ水関が破られたら、ただちに進撃を開始。劉備達が様子見で引いた隙を突いて、一気に突破する」

「敵に追い打ちを掛けるんですね。罠の可能性は………ありませんね」

途中で雪の言葉に間が空いたのは敵の大将が馬から落とされて、逃げ出したからだ。こんな所で逃げ出すような奴に器用な真似は出来ないってことだ。

「さて、それじゃあ移動するか」

「うむ。先頭は姉者が務めるからお前達も上手く流れに乗るかい」

「了解。じゃあ風頼むぞ」

「……」

あり？ 凧が黙ったままだぞ？ そう思いながら凧の方を見ると
なにやらシヨックを受けたような顔をしていた。

なんだ、何がお前をそんな顔にさせてしまったのだ！？

「あゝ、隊長。今は凧に構わん方がええで？」

「そうなのー。今回は隊長が言った方がいいのー」

「そうか？」

この二人がそう言うんなら仕方ないな。にしても何にそんなシヨックを受けたんだか……。

「総員、移動開始だ！ 門が閉まるまで無理矢理ねじ込め！！」

こうして俺たちは劉備達が引いた隙を突いて、一気に畳み掛けた。

正直、今日の軍議ほど参加したくないものはなかった。今日の軍議を俺の代わりに参加してくれるなら、何だって言うことを聞いてやるって勢いだ。

「華琳さん！！ 何をやってるんですの！！」 俺はこの声を聞いた途端、案の定ため息を突かざるを得ない言葉が来た。

「劉備達は戦闘直後でいったん矛を引いた形だった。そこで反撃を受けると厳しいだろうと判断したから、追撃を引き受けようと思

ったのだけれど？ 現場独断で連絡が行き届かなかったことは謝るわ」

はい。ここまで謝る気のない謝罪を聞いたのは初めてです。です
が構いません。ワタクシでもああやりましたから。

「キーツ！！ 上手いこと言って！ どうせシ水関を一番で抜けたかっただけなのでしょう！」

小学生かよ……。そんなに一番に抜けたいんなら勝手にしろつての。連合軍は俺たちでやるからよ。

「結果的にそうなったことは否定しないわ。けれど、華雄たちの追撃が主な目的だったのも確かだよ」

華琳と袁紹はにらみ合い、まるで火花が散ると思われるほどの睨み合いだった。

「ま、まあ、二人ともそんなに熱くならないで……。結果的にわたしたちも助かったわけだし……」

そんな二人を見かねたのか劉備が仲裁に入ってきた。

そう言えば劉備のところに行っただけ行ったことがなかったな。

「劉備もこう言ってるのだし、いいんじゃないかしら？」

華琳がもう疲れたとばかりにため息をつきながら、袁紹に向かって言う。

「ぐぬぬぬ……っ」

それでも納得できないのかすげー唸ってやがる。

「どうしてもと言うなら、次の虎牢関攻略は私たちが指揮を取っても構わないけど？　ただ、追撃は誰かに引き受けてもらおうと助かるわね」

と華琳が言うと案の定、袁紹が追撃をすと言ってきた。

なんだか一番乗りはわたくしがもらいましたわ、とか言ってたな。

まあ、なんにしても……。よっしゃーっ！！　いいぞ華琳！！
フフフフ……　虎牢関攻略が俺たちになれば、呂布と戦えるかもしれないからなア……。

この前のイライラをたっぷりぶつけさせてもらおうじゃねえか……。

学級会もとい軍議が終わった俺たちは、他の将に軍議の内容を伝えていた。とくに紅葉には虎牢関攻略が俺たちになったことを熱く語らせてもらった。

「虎牢関ってことは呂布もいるのよね……？」

「ああ……。この間の借りを百倍にして返してやらア……」

「そうね……。呂布のせいで私は怒られたのよ……。たっぷりお礼させてもらおう」

俺と紅葉はフフフフ……と黒いオーラを纏いながら言い合つ。そんなコトを言い合っていると華琳達の方から不吉な言葉が聞こえてきた。

呂布と張遼が欲しいと言つ言葉が……。

「か、華琳さん？ それは誠にございますか……？」

「ええ。飛翔軍の呂布に神出鬼没の張遼……。是非ともほしいわね、その力……」

「華琳、それはさすがに無理だ」

俺が真面目な表情で華琳に向かって言うと、さっきまで微笑んでいた華琳も真面目な表情になった。

もちろんそれを見た他の将たちも真面目な表情になる。

「あら。桜牙にしては弱気じゃない。天下無双の名前にあなたとあろう者が怖じ気付いたのかしら？」

「弱気？ 何それ？ 美味しいの？」

「……………は？」

俺がそういつと華琳にしては珍しくすつとんきよな声を上げていた。

「無理だつてのはそれだと呂布を生け捕りにしなきゃならねえだ

る？」

「当たり前でしょう。斬ってしまったては意味がないもの」

「だろ？ それだと思いつきりやれねえじゃねえか」

俺がそういつとピタッと、声がやんだ。みんなの目は点になり呆れるような目で見る奴もいれば、頼もしげにみる奴もいる。

そんな中いち早く回復した秋欄が俺に向かって言ってきた。

「それは呂布を倒せると言うことか……？」

秋欄がそう訊ねると他のみんなも立ち直り、俺の方を見てきた。

「当たり前だろ。俺に不可能はねえ」

すると華琳がいきなり笑い出したんだが、どうしたんだらうか。

「アハ、アハハハ。面白いわね。さすが桜牙だね。なら呂布の方は桜牙に任せるわ」

聞いてましたか華琳さん。わたくしは呂布を倒した言っただけなんですけれども……。生け捕りになんかするつもりはないんだけれど……。

だけど華琳はそんなコト気にしてないんだよねあ。

「呂布の方は桜牙に任せるとして、張遼の方はどうなのかしら？」

「張遼の強みは個人の武よりも用兵にあります。兵を奪い取った上で捕らえると言う命であれば、兵は桂花が。張遼は姉者が何とかしてくれるでしょう」

秋欄が春蘭と桂花を交互に見ながらそう言った。

桂花の方は出来ると言い切ったのだが、春蘭の方はなんとも乗り気ではなさそうだった。

「秋欄、無茶を言うな……」

「あら、してくれないの？ 春蘭。桂花はしてくれるようだけれど？」

華琳はまるで悪戯を楽しんでいるかのような、子供のような表情になりながら言う。

一方、桂花は頼られているために嬉しそうな表情をしていた。しかも胸を張りながら威張ってるし……。

「くう……っ！ 張遼ごときものかずではありません！！ 十人でも二十人でもお望みの数だけ捕らえて参りましょう！！」

さつきまで乗り気じゃなかったのに華琳が言った途端これかよ……。どんだけ華琳のこと大好きなんだよ……。

まあ、春蘭が華琳のことを大好きなのは今までの生活をみてくれば、イヤってほど分かるけどな。

「なら張遼は桂花と春蘭に呂布は桜牙に任せるわ。見事、捕らえ

て見せなさい」

「はっ！！」

と春蘭。

「おまかせを」

と桂花。

「命の限り」

と俺が一言ずつ言う。とりあえず話に聞く限りじゃあ、呂布は黄巾党三万人に対して文字通り一人で全員を撃退したって話だ。

俺が撃退した黄巾党の約三倍の数を一人でやったんだ。少なくとも春蘭よりは強い……。三国志で一番強いのは呂布だったはずだが、こんな世界でも強いのは健在みたいだな。

さて、呂布は俺にどこまで食らいつけてくることができるか……。はたまた俺の喉元を切り裂くか、楽しみだな。

「では、桂花……それと、雪」

「ふえっ！？ わ、私ですか！？」

華琳にいきなり呼ばれたことにより、俺の隣にいた雪がかなり驚いていた。

多分こんな局面で自分が呼ばれるなんて思わなかったんだろうな。

俺も雪が呼ばれるとは思わなかったし。

「桂花、全体の動きの指示を。雪は桂花を補助して上げなさい」

「はっ！！」

「は、はい！！！」

雪は緊張気味にそう答えると、桂花と一緒に全体の指示を始めるのであった。

「ようやく、来たな。虎牢関……」

「お、桜牙……？ 気合いは入り過ぎじゃない……？」

虎牢関につくなり紅葉がそんなコトを俺に言ってきた。

だって仕方ねえだろ。天下無双、飛翔軍の呂布と戦えるんだからな。この間のイライラする事件を抜いても呂布とは一回だけ戦ってみたかった。

何よりも武人の一人として、天下無双の呂布と刃を交えたかったのだ。それが叶うとなると、自然に力が入るのも仕方ねえだろ。

そんなコトを考えると砦の中から隊が出てくるのが見えた。

「旗印は『華』。前回の失態を取り戻そうと思って、華雄が独走したのではないかと……」

「春蘭でもしないわよ、そう言うことは」

華琳が溜め息混じりで桂花に言う。

確かに春蘭でさえもそんなコトをやるとは思えないな。いくら猪でもそれくらいの判断は出来るからな。

「華琳さま、どうしてわたしを引き合いに……」

春蘭はまるで拗ねた子供のように唇をとがらせながら言った。すると後ろから他の旗も見えてきた。

旗印は『張』と『呂』……。呂布が来た!!

「華琳、来たぜ……。『張』と『呂』だ……」

「華雄の独走に引きずり出てきた、と言ったところでしょうね。まあいいわ、桜牙は他の部隊にも通達の指示。本作戦は、敵が席を出て来た場合のみの対応で行う！」

「分かった。行かせテメエら」

俺は俺の後ろに控えていた紅葉、凧、真桜、沙和に向かって言う。

四人はそれぞれが返事をする、各隊に先ほど華琳が指示したことを伝えるように指示した。

すると華琳の叫びが聞こえてきた。

「聞け！ 『曹』の旗に集いし勇者達よ！！」

血がたぎる。本能が叫ぶ。戦わせると、本能に従い剣を振りかざせど。

「この一戦こそ、今まで築き上げてきた我ら全ての風評が真実であることを証明するための戦い！」

心が踊る。強者と戦えることに歓喜する。

「黄巾を討つたその実力が本物であることを、天下に知らしめてやりなさい！！」

全ての雑音が消える。我が瞳に映るは天下無双、飛翔軍の呂布のみ。

「総員突撃！！ 敵軍全てを飲み干してしまえ！！」

第貳拾漆話『業炎の剣帝、飛將軍と刃を交えるのこと』（前書き）

誤字訂正しました。

ではございぞー！

第貳拾漆話 『業炎の剣帝、飛將軍と刃を交えるのこと』

side 紅葉

「邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ、邪魔だアーツ！！ 退け、退け、退けアーツ！！ 死んでも構わねえ奴は、勝手に掛かってきなアーツ！！」

そう叫びながら一人敵陣に乗り込んでいく我がバカ師匠。て言うかあんなコトを叫びながら、双剣を振るってるのに全然勢いが止まらないし、逆に勢いが上がって行ってるんだだけ。

でもあんな桜牙の姿なんか今まで一度も見たことがないわ……。でももしかしたらコレがいつも桜牙の姿なのかもしれない、とか思っただけと違っただけみたい。

私と一緒に隊を率ってる風も真桜も沙和もあんな桜牙の姿見たことがないとはかりに、口をパクパクさせてるし。

桜牙があそこまで戦いに対して感情を剥き出しにするなんて、思わなかった。いつもは感情表現は豊かだけど、戦いの時はどことなく寂しげな感じだった。

本心ではどう思ってるかは分からないけど、少なくとも殺しを楽しんでるような表情じゃなかった。けど今は殺しを楽しんでるとまでは行かないけど、戦いを楽しんでる表情だわ……。

けど今はそんなコトを考えてる暇はないわ。今は私に出来るこ

にまだ一回も攻撃当てたことないし、防御だってあんまりしてもらったことないよ。

いつものほとんどが受け流しばかりで、まともに受けてもらえない。ただ、桜牙の攻撃を私は受け流せないから受け止めるしかない。防御を取るしかない。

だからそのおかげで防ぐのは上達したわ。もうイヤってほどにじめられ……じゃなくて鍛錬させられたわ……。

「おりゃあーっ!!」

私は今までたまってた鬱憤を晴らすかのように、棍棒を振るっていく。みんなの動きが遅く見えてくる。

あれ？　なんだかスゴく早く動けるんだけど、どうしてだろ？　それに相手の動きがスゴく大振りに見えて隙丸出しじゃん。そう言えれば桜牙も言ってたなあ。

『俺を倒したいんなら、自分の欠点に気づくことだな。それが分からない間はいつまで経っても勝てねえよ』

……。もしかして私の欠点って武器を大振りで振りかぶりすぎるってコト？　だとしたら、今まで攻撃が当たらないのも説明が付く……。

よおし!!　欠点が見つかったんだから、あとは直すだけね!!

そう思った私は棍棒を強く握りしめた。

side 愛紗（関羽）

私はいま鈴々と共に砦に向かっていている途中だ。今攻めることが出来れば、この戦いを一気に終わらせることが出来るはずだ。

それにしても曹操のあの赤い髪の将（確か太史慈と言ったか？）あれほど重そうな武器を軽々と、しかも二刀流で扱うとはなんと言う腕力の持ち主だ。

そんなコトを思っていると目の前で顔良殿と文醜殿が呂布によって倒されてしまっていた。

「く……っ！ 遅かったか……！ 大丈夫か、二人とも……！」

私は二人に駆け寄りながら怪我などがないかを横目で確認しながら言う。

「な、何とか……。ありがとうございます」

「ひゃーっ。死ぬかと思っただあ……」

どうやら怪我はないみたいだな。だがさすが飛翔軍の呂布と言ったところか。一人でこんなにも簡単にこの二人を倒すとは……。

この二人の実力もかなりのもの。そんな二人をあっさり倒した呂布はさすが飛翔軍と言うだけはあるだろう。

「愛紗！ 鈴々が行くのだ！」

「待て鈴々！ 一人では無理だ！」

呂布を相手に鈴々一人でやらせるなどみすみす死なせに行かせるようなものではないか。いくら鈴々とは言え、一人では無謀だ。

「大丈夫なのだ！ でえええええいつ！！」

しかし鈴々は私の忠告など無視して、呂布に向かって槍を振るった。だが呂布は持っていた戟で鈴々の槍の一撃を軽々と防いだ。

そのあと鈴々の槍による攻撃は続いていくのだが、ただの一撃いや掠ることすらもせずに呂布によってあしらわれていく。

実力には差があるとは思ってはいたが、まさかここまで強さにあるとは……。私と鈴々が二人掛かりでやったとしても呂布に勝つことが出来るのか……。

「にやにやーっ！？ こいつ、強いのだ……っ！」

そんなコトを考えていたのだが、鈴々の一言により我に返る。

「だから無理だと言っただろう！」

私は鈴々にそう言うつと自らの武器を構える。すると不意に後ろから声を掛けられた。

「……あら、劉備の軍も来ていたのね」

「……お主、孫策……？」

間違いない。『孫』の旗印に何よりもこの威圧感。並の者では出

せるような威圧感ではない。

「これが呂布？ 強いつて聞いてるけれど……こんなぼーっとした子が、そんなに強いのか？」

「……桁違いだ。すまんが助力を頼めるか？」

孫策が加われば勝てるとはいかずとも同等までにはなれるやもしれん。それに、この場ではその選択が一番良いはずだ。

「ふふっ、高いわよ？」

孫策は自らの持っていた剣を鞘から抜き放ちながら言う。

「この場の一番乗りなら譲ってやる」

私は再び武器を握る手に力を込める。手に汗が滲んでいる。くっ、対峙しているだけでここまでの威圧感が……。

「あら、気前が良いこと。……気に入ったわ」

「よし！ ならば三方より一斉に掛かるぞ！！」

「分かったのだ！！」

「ええ！」

私たちはそう言いあつと呂布の三方から一気に攻撃を仕掛けた。鈴々の突きに、私の風払い、孫策の切り裂きが呂布に一斉に襲いかかる。

「遅い」

だがそれらの全ては呂布に当たる前に一つずつ呂布により防がれていく。なんて奴だ、私たち三人が一斉にやっていると言うのにも関わらず表情を一切変えないどころか、苦しそうな素振りすら見せない。

まるで私たちなど取るに足らないと言っているかのような、武器捌き。くっ、これが飛翔軍とまで言われた呂布と私たちの力の差だとでも言うのか……。

「はああああっ!!」

私は再び武器を呂布に向かって振るうのだが、同じように呂布には軽々と防がれる。

「……本気で行く」

呂布がそう言った瞬間に、私の右側より何かが向かってくるように見えた。かろうじてそれが見えた私は、自らの武器を盾のように構える。

それとほぼ同時に私の手には今まで感じたことのないような痺れや痛みが襲ってきた。危うく武器を離してしまうところだったが、なんとか持ちこたえる。

「予想以上の力ね……」

「だから言ったであろう。桁違いだと」

私は呂布から視線をそらさないまま、隣にいる孫策に向かって言う。おそらく孫策も分かっているとは思いますが、私たち三人が束になろうとも呂布には勝てない。

それでも私たちの武は呂布には届いていないのだからな。

「もう一度三方から行くぞ……。もしかしたら崩せるかもしれん」

「分かったのだ」

「確かに他に策があるわけじゃないし、やるしかないか」

私たちはそう言い合い再び武器を構える。そして再び一斉に武器を構え、踏み込む。今度は呂布は、防がない。

間に合わなかったのか？ と私は思ったがそれは見当違いだった。呂布はその場でしゃがみ込むことにより、私たちの武器同士で相打ちにさせたのだ。

呂布の予想外の行動、さらに予期せぬ事態により元々そこまで連携がとれていなかった連携がさらに崩れる。

「……………恋は負けない」

呂布はそう言い持っていた戟の刃の付いていない方で私たちをぶっ飛ばした。私たちは固まっただけで飛ばされるのではなく、三方に飛ばされた。

くっ、マズい。今私たちに追い討ちが掛けられれば間違いなくやられる。私がそう思ったからかは分からないが、呂布は私の方に向

かっってきた。

武器を構えようにも間に合わない。くっ、ここまでか……。

私はそう思いながら死を決心して目をつむった。

ガキーンッ!!

だがそれとほぼ同時に私のすぐそばで金属同士を打ち付けたような独自の音が響いて来た。

鈴々が呂布の一撃を防いでくれたのか？ いや、あの距離をこんな短時間で詰めることなど不可能だ。それは同じように孫策にも言えることだ。

だがそれ以外で呂布の一撃を止められる者などここには居ないはずだ……。なら、一体誰が私を助けてくれたのだ……。

そう思いながら私は目を開いた。するとそこには白と黒の短剣で呂布の一撃を防いでいる男がいた。

「あんた、早く逃げな。こいつの相手は、俺がやる」

「し、しかしそなた一人では……」

「いいからあんたは早く孫策と合流しろ!!」

そう言う彼の迫力に私は恐怖した。今までに感じたことがないような恐怖を身に感じた。そして私は彼の言葉に従い、鈴々と孫策と合流した。

そして彼は呂布となにかを話し合った後に呂布と戦い始めた。

「まさか、桜牙が来てくれるなんてね……」

桜牙……。まさか曹操のところに行った天の御遣いのあの龍崎桜牙だと言うのか……。確か噂によれば呂布にも劣らないほどの武を持ち、さらには近隣だけでなく、少し離れたような場所でも暴徒を片付ける。しかもそれは隊を動かしてでなく、あくまでも個人として動いている。

さらに個人で働けば報酬を受け取ってほしいと言われるものだが、それを一切受け取らない。さらに剣を振るう様子は、まるで舞を見ているかのように幻想的……。

よってつけられた彼の二つ名は『劍帝』……。

「関羽、彼の戦いをよく見ておきなさい。使う武器は違ってても、
武人として彼から学ぶことは多いはずよ」

「……」

まさか孫策にこのようなことを言わせるほどの武の持ち主だとも言うのか……。そう思った私は、彼と呂布の戦いに目をやった。

そこにはハケモノ龍崎桜牙とハケモノ呂布の戦いが繰り広げられていた。

龍崎桜牙の一对の短剣が呂布の戟とぶつかる度に火花を散らす。

呂布はただ戟を振るっているだけに見えるが、龍崎桜牙の動きはまさに幻想的……。

尊には聞いてはいたが、ここまでだとは……。

私たちはあの二人の戦いを見守るほか、選択肢は無かった。

side 桜牙

「邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ、邪魔だアーツ！！ 退け、退け、退けアーツ！！ 死んでも構わねえ奴は、勝手に掛かってきなアーツ！！」

俺はそう叫びながら敵陣に思いっきり突っ込んでいった。こんな雑魚共になんか構ってられねえつつうの。今すぐ呂布と刃を交えたいんだよ。

そんなコトを思いながら、無闇に俺に突っ込んで来る敵を次々にぶっ飛ばしていく。だがぶっ飛ばしていく中で、呂布の姿を探すのだが、中々見つけれられない。

確かに動き出す前に呂布の姿を確かめたはずだったが、いつの間にか姿が消えちまっている。くそっ、こんなところでもたついてたら他の奴と戦うかもしれねえじゃねえか。

ちっ、いちいち探すのも面倒だが探すしかねえな。そう思った俺は一旦立ち止まり、気配を探る。

関所の辺りに呂布の気配があるな……。それにあと複数の気配が呂布と戦ってやがる。一つは孫策、残り二人はよくは分からないが

とりあえず呂布と戦ってるみたいだな。

さて、場所も分かったことだしさっさと向かうぞ。俺はそう思うと、瞬動を使い一気に呂布たちが居る場所に向かってきた動き出した。

いくら瞬動を使っているとはいえ、移動方法は高速に動くだけ。つまりは敵が刃を振るってくるってコトだ。だから俺は瞬動を使っている途中で、それらを斬り伏せなければならぬ。害にはならないが、ハッキリ言っと面倒だ。

すると俺の耳に金属同士を打ち付けるような独特の音が聞こえてきた。そちらの方を見ると、呂布が孫策と残りの二人を吹き飛ばしているのが見えた。

さらに呂布は黒髪の女（確か関羽だったな……）に追撃を掛けていた。しかも関羽は防御の態勢をとれないでいた。

やれやれ、こんなところでこっちの戦力が削られるのもマズいな。そう思った俺は呂布が関羽に戟を振り下ろしたのを、白羽黒羽で防ぐ。

「あんた、早く逃げな。こいつの相手は、俺がやる」

そして呂布の一撃を防いだ俺は関羽に向かってそう言う。

「し、しかしそなた一人では……」

だが関羽は呂布の力を目の当たりにしたからか、俺一人で呂布の相手は無理だろうと判断してか言ってきた。

「いいからあんたは早く孫策と合流しろ!!」

心配してもらえないのは嬉しいが、今に限ってはそんな心配は無用だつての。なので俺はわざと関羽に向かって強く言い放った。

それで関羽達がようやく俺の後ろに回るのを確認すると、俺は呂布を睨みつける。

「よお、俺のこと覚えてるか？」

「……（コクン）」

俺が訊ねると呂布は一回だけ頷いた。

「単刀直入に言う。俺はあんたと刃を交えたい」

俺はそう言うと、白羽黒羽を構える。すると呂布も戟を構えてきた。さつきまでの威圧感のあまりない構えとは違い、今の奴の構えからは戦う意志が感じられる。

これが天下無双の呂布の威圧感か……。おもしれえ、これなら久々に力を出せるな。そう思った俺は呂布に向かって一気に踏み込んだ。

懐に潜り込み、白羽を振り上げる。呂布は体をわずかにずらし、白羽の軌道上から体を逸らす。だが俺は遠心力を乗せた黒羽で呂布の脇から斬りつける。

だが呂布はそれを自らの武器で防ぎ、弾き返す。さらに俺の肩に

向かって戟を振り下ろしてきた。それを俺はまだ弾かれてない白羽で防ぐ。

しかし呂布の一撃は予想以上に重く、思わず膝をついてしまう。そして呂布は再び戟を振り上げ、振り下ろしてきた。戟が俺に当たる前に俺は瞬動で後ろに後退する。

呂布はそんな俺の動きに反応し、瞬動し後退した俺に距離を詰めてくる。スピードは『呉』の甘寧を上回り、パワーは春蘭をも凌ぐ……。

なるほどね。どつりであるの三人が苦戦するはずだ。呂布は一人でおそらくはうちの将の春蘭、秋蘭、季衣、流琉の四人を合わせて同等ぐらいだな。

「だが、それでも甘いな」

俺はそうつぶやくと、呂布の一撃をわずかに身体をそらし避ける。そして俺は連続で白羽黒羽を振るっていく。呂布はそれを弾いていくが、わずかにかする程度には当たってきている。

呂布は俺が見る限りではずっと無表情だった。だがそれでも今はわずかに苦しそうな表情を浮かべている。

「右、がら空きだ」

俺は呂布に向かってそう言うと、俺は白羽を呂布に向かって横風振るう。呂布は後ろに飛躍してかわすが、俺は隙を与える前に一気に距離を詰める。

「決着をつけたいところだが、うちの主があんたを求めているんだ……」

そこまで言うと俺は白羽を振り上げる。

「今は眠れ。……ん？ ちっ」

俺が白羽を振り下ろす前に、誰かが俺に突っ込んで来た。

そいつは華琳の城に来ていた奴だった。確か張遼とか言う奴だったな。

「恋、撤退や！ 早ようしい！ ！」

張遼は呂布に向かってそう叫ぶとなぜか呂布は俺の方を見てきた。

「はあ……。勝負はお預けだ」

「次、決着……つける」

「あぁ」

呂布はそう言つと張遼と共に去っていった。

やれやれ、決着はお預けってところか。

まあ、実際に呂布と刃を交えて分かったが、あいつは有り得ないくらい強いな。おそらくは俺以外で一騎打ちはあいつには勝てないだろうな。

そんなコトを思っていると俺の元に孫策と関羽と張飛が近づいてきた。

「桜牙殿、先ほどは助かった。感謝する」

「別に感謝されるほどのことはやってないと思うんだが。まあいいや。あんたらも早く撤退しろ、矢が来るぞ」

俺がそんなコトを言っている間に城の上から、矢を放とうと兵士が集まってきた。

「分かった。撤退！ 撤退ー！ 皆の上から矢が来るぞ！」

関羽達はそう叫ぶと撤退していった。関羽達は撤退していったのだが、なぜか孫策達だけは残っていた。

「孫策も早く撤退しな。矢が来るぞ」

「分かってるわ。それより桜牙。私たちのところに来ない？」

「悪いな。俺は曹操に剣と翼を預けてんだ」

俺は孫策にそう言うのと残念そうな顔をしていた。

そんな残念そうな顔されても、こっちが困るんだけど……。そんなコトを話している間に、矢が放たれてきた。

「早く退くんのだ！ 矢は俺が撃ち落とす！！」

「分かったわ！ 撤退よ！！」

孫策が叫ぶと孫策達も撤退していった。だが、矢はこちらに向けて放たれている。それを俺は白羽黒羽を連続で創り出し、投げ飛ばして矢を弾き返す。

「ふう……。やれやれ、俺も帰るとするか」

俺はそうつぶやき、華琳の元に戻った。

俺が華琳のところに戻るとちょうど華琳が天幕に戻るのを見つけた。

それに華琳も俺が戻ってきたのを見つけたみたいで、立ち止まってくれていた。

「おかえり、桜牙。どうだったかしら？ 呂布の方は」

「強かったな。少なくとも春蘭よりは」

「そう。それで、呂布を引き込むことは出来るのかしら？」

「五分五分だな。勝つには勝てるが、引き込むとなると別になる」

何を考えてるか分からないし、生け捕りとなると手加減をしないといけないから面倒なんだよね。

「そう。なら期待して待つことにするわ。今日はもう休みなさい。呂布との一戦でだいぶ体力を消耗したでしょう？」

「ごめん。そこまで疲れてないです。少しの間しか打ち合っていないから、体力なんか消費しなかったツス。」

「なら、休ませてもらう」

「だけどこれ以上は動きたくなかったので華琳の言ったとおり休むことにした。」

「そして俺は天幕に向かおうと華琳に背中を向けた。すると華琳が言うてきた。」

「そう言えば、あなた。呂布と戦っていたのよね？」

「ああ？ そうだけど、どうしたんだ？」

「だいたい自分で俺と呂布が戦ってたって言ったばかりじゃねえか。」

「兵士からこんな情報が来たのよ。敵軍の近くで白と黒の短剣を持つ謎の男が、こちらを見下ろしていた、と」

「そうか。だがその時間帯だと、俺は呂布と戦ってるはずだ。関羽が孫策に聞けば分かるさ。あいつらは俺のところにはいたからな」

「分かっているわそんなコト。ただ、あなたに伝えておいただけよ」

「そうか。分かった。覚えとく」

「俺はそう言おうと今度こそ天幕に向かった。」

にしても呂布に白と黒の短剣を持つ謎の男か……。なかなか楽しめそうだな。

そう思いながら俺は眠りについた。

第貳拾八話 『業炎の剣帝、策を用意すること』

side 雪

あれから一日が経過して偵察から入ってきた報告は驚くべきものでした。

「……虎牢関が無人？」

華琳さまが言ったように偵察から入ってきた報告は、虎牢関が無人と言う情報です。袁紹さんが偵察を放ったらしいのですが、呂布さんどころか猫の子一匹居なかったそうです。

呂布さんも張遼さんも健在な今、虎牢関を捨てる価値はドコにもありません。

「都に立てこもって本土決戦をしたいとも考えられませんしね……」

虎牢関が落とされた後ならまだしも今の状況で、それをする意味がありませんから……。

「そうね。それに都での籠城戦となると、民にも心を配らねばならないわ」

「そうであれば、兵士かいない砦で籠城した方が遥かに負担は少ないわ」

「だとすればやっぱり罨かもしれませんね……」

華琳さまと桂花さんの二つの言葉から私はそう予測をたてる。

余所から拳兵があつたとも考えられませんからね。

「いつそのこと、どこかの馬鹿が功を焦って関を抜けに行つてくれれば良いのですが……」

「さすがにそんな馬鹿はいないでしょう。春蘭でもそこまではしないわよ」

「だから華琳さま、どうしてそこでわたしを引き合いに出すのですか……」

そう言う春蘭さんですが、春蘭さんですがには悪いですが、なんとなく華琳さまの言いたいことは分かります。

そんなコトを思っていると、沙和さんが来ました。

「華琳さまー。いま連絡があつて、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けに行つたみたいなのー」

「「「「……」」」」

まさかの行動に私たちは呆れるしかありませんでした。桜牙さんの話によれば、袁紹さんはシ水関の時は華琳さまに散々言つたらしいです。

それなのに今度は自分が抜け駆けですか……。

「で、でも袁紹さんが無事に抜けることが出来れば、畏はないっ

て言うことで良いのでないでしょうか？」

「そうね。たまには馬鹿に感謝するのも悪くないかもね。……袁紹が無事に関を抜け次第、私たちも移動を開始するわよ」

私たちはその華琳さまの言葉に頷くと今すぐ準備に取りかかりました。

すると華琳さまが私に声を掛けてきました。

「雪、桜牙はどうしたのかしら？ まだ休んでいるみたいだけれど」

「はい。桜牙さんは何やらうなされてるみたいでしたので、紅葉さんに面倒を見させてました」

「そう。なら、桜牙をすぐに起こして準備させなさい」

「はっ！ 分かりました」

華琳さまはそう言うと自分も準備するためか、自分の天幕に戻っていきました。

それを見届けた私は桜牙さんと紅葉さんがいる天幕に向かっていききました。

むむむっ、そう言えば一つの密室の空間に男の人と女の人が二人で居る……。

急ぎましよう、よからぬコトが起こる前に行きましよう。

私はそう思いながら二人がいる天幕まで行きました。

『うあああああああああつ!?!?』

すると天幕の中から桜牙の叫びが聞こえてきました。

しかもただ事ではなさそうな叫びでした。なので私は急いで中に入りました。

そこには上半身を起こして頭を抑えながら、スゴい汗を掻いている桜牙さんとスゴく驚いている紅葉さんがいました。

「お、桜牙さん。どうしたんですか!?!?」

「はあ…はあ…。雪か…? いや…何でもない」

桜牙さんはそう言ってますが、いかにもただ事では無さそうな表情です。

紅葉さんも何がなんだか分からないような表情をしていますし…。

とにかく今私が何があったかを訊ねても教えてはくれないでしょうし、伝えるべきコトは伝えましょう。

そして私は先ほどの話を簡単にまとめて、桜牙さんと紅葉さんに話しました。

「袁紹が関を抜けたときのために準備をしておけばいいんだな」

「はい、そうです。そうすれば罨がないと分かりますから」

「分かった。……それで悪いんだが、一人にしてくれないか？」

そう言っただけで笑いかけられる桜牙さんですが、今の桜牙さんの笑みは間違いなく無理をした笑みです。

あんな桜牙さんを見たのは初めてですが、とにかく私たちはその場を去りました。

そして私は準備をしながら桜牙さんを見ていた紅葉さんに訊ねました。

「紅葉さん、桜牙さんに何があつたんですか？」

「そんなの私にも分からないわよ。うなされてたと思ったら、いきなり叫びだしてさ。訊きたいのはこつちよ」

紅葉さんはそう言いながらまだ何か愚痴を言っているところを見ると、本当に分からないようです。

桜牙さんに何があつたんでしょうか……。

side 桜牙

夢を見た……。

荒れ果てた荒野に転がる無数の死体……。

燃えさかる大地を背景に無数の剣が突き刺さっていた……。

まるで、墓を示しているかのように……。

その荒野に一人だけ、君臨していた……。

白と黒の短剣を持ち、華琳の首を切り落とす男が……。

「どうしたの？ 桜牙」

「華琳……」

夢のことを考えていると不意に華琳が話しかけてきた。

あの夢を見てから数日が経過し、攻防戦も同じ日数が経過していた。

「しつかりしなさい。最近のあなたは目に見えて不抜けているわ」

確かに華琳の言うとおり、あの夢を見て以来俺は戦場で隙を疲れることが多くなった。

あの夢を見て以来なぜか動きが鈍ったのだ。切り倒す相手と、夢の中に出て来た華琳を写し合わせてしまってるからだ。

そのことを華琳に言うべきなのだろうか。俺の意志が、鈍ってきていると……。

「まあいいわ。桂花、戦況はどう？」

「あまり芳しくありませんね。袁紹や袁術も攻城戦を繰り返してはいますが、都の城は高く、一進一退の状況です」

さらに今回に限っては華雄も出ては来ないらしい。さすがに今回出てくれば見殺しにされるのは、目に見えているだろう。

「ただいま戻りました」

すると戦況を直接見に行ってきた流琉と季衣と紅葉が帰ってきた。

「お帰りなさい。様子はどうだった？」

「全然ダメでした。上からああも反撃されたら手も足も出ないですよ」

劉備の軍も攻めていたようだが、状況は同じだったらしい。また今は袁紹の軍が攻めてはいるが、状況は変わらないだろうとのことだった。

ちっ、時間がねえってのに面倒なことになりやがったな。

もともと連携がとれていない連合軍の城攻めが長く続くようでは、士気が下がりがただでさえとれていない連携が、さらに悪くなるだろうな。

そうなれば味方同士で戦う、なんて言うことも出てくるかもしれない。そんなコトになってしまえば、全てが台無しになっちまう。

そうなる前にどうにかして、攻略しなければならぬ。

「華琳」

「何？ 桜牙。何か策でもあるのかしら？」

「ああ。とびっきりの策がな」

それから俺の指示で、連合に参加している全諸侯を集めた軍議が開かれた。もちろん全員に、俺の策を伝えるためだ。

「……攻め続ける？ どういうコトだ？」

「今も我が軍は間断なく攻め続けているでしょう。やり方をどう変えらとのおっしゃいますの？」

「間断なくう？」

「……何か文句でもありますか？」

俺がとりあえず作戦方針を掴みながら話すと、周りがざわつき始めやがった。今の俺じゃあんまり説得力はねえが、今ここにいる奴らぐらいなら脅すことは出きるはずだ。

そう思った俺は地面に向かって気弾を放ち、デカい音を立てて無駄話をしてる奴らを黙らせる。

「……黙って聞け」

俺がそう言いながら無駄話をした奴らを睨みつけると、ようやく全員が静かになった。

「もう少し詳しく説明すれば、今の散発的な城攻めの方法を変え、一日を六等分にする」

「……そうして、一つの隊が六分の一ずつを攻め続けると言うことですか？」

するといち早く諸葛亮が俺にそう言ってきた。

「理解が早くて助かる」

横目で諸葛亮を見たあとに諸葛亮にそう告げる。

「一日の六分の一しか攻めないようでは、いつまで経っても城なんか陥ちませんわ」

「今ので分かんなかったのか……。仕方ねえ、もう少し分かりやすく説明してやる」

そして俺は確認の意味も込めて、改めて説明をした。

まず一日を六分の一分に分け、その六分の一分に各隊を割り当て攻め続けさせる。

そうすることにより相手には休む暇を与えることなく、攻め続けることができる。

朝も昼も晩も攻め続けられ、数に劣りのある敵は休む暇がなく守

り続けなければならぬのに対し、数による勝りがある俺たちは攻め続けながらも休むことができる。

つまりは相手も体力が残っている間に勝負を決めに来なければ、いずれにしても負けは確定することになる。

そこまでが俺が考えた作戦だ。

「ここで勝負を一気に畳み掛けるぞ」

その夜、俺は一人で月を見上げながら先日の夢のことを思い出していた。

あの白と黒の短剣を持つ男……。俺の予想が間違っていないなら、あれは俺だ……。

そしてあの夢は夢と言うにはあまりにもリアルすぎた……。そしてあの占い師の言葉……。

道を踏み外せば全てを滅ぼす……。もしかすればあれは俺の未来なのかもしれない。全てを滅ぼす最悪の……。

「こんな所にいたのね、桜牙」

「華琳か。どうしたんだ？ 今は俺たちの隊は割り振られてないはずだぞ」

「私が戦のコトだけであなたに会いに来ると思っているのかしら

「？」

華琳はそう言つと俺が座っている隣に座ってきた。

「汚れるぞ、せめてこれでも下に敷いとけ」

俺はそう言い自らの上着を華琳の下に敷いた。

で、座つたのはいいんだがそれから華琳は何も話さなかった。ただ月を見上げているだけで、時間が過ぎていく。

聞こえてくるのは金属同士を打ち付ける独特の音。人が人を罵倒する声だけ。

それらをBGMに俺たちはどれだけ月を見ていただろうか。そんなコトを考えていると、華琳が不意に訊ねてきた。

「桜牙。あなたは何に恐怖しているのかしら？」

それを聞いた瞬間、俺の鼓動が高まった。

「何のこと言ってるんだ？ 俺は別に……」

「嘘ね。私がそんな嘘を見抜けないとも思つたのかしら？」

……やっぱり華琳に隠し事をするなんてのは無理だったみたいだな。

そう思つた俺は先日の夢について華琳に話した。俺の仲間を、俺が皆殺しにしたあの夢を……。

「そう。あなたはその夢の私と、あなたが斬る敵を重ねてしまっていると言っているね」

「ああそうだ。笑っちゃまうだろ？ 今まで何万人と言っている人間をこの手で斬り殺してきた。だが、たった一回あんな夢を見た程度で、全ての決意が砕け散った」

俺はまるで笑い話をするかのように、鼻で笑いながら華琳に言う。
すると華琳がいきなり抱きしめてきた。

「人を殺すこと恐怖を忘れてしまったら、それは人間の皮をかぶったバケモノよ」

けれど、と華琳は付け足しながら言葉を紡いでいく。

「人を殺すことに恐怖を抱くのは当然のことだわ。けれど、私達は斬ることを覚悟して戦場に出ている」

「……」

「あなたも再び覚悟を決めなさい。あなたが見た夢の通りにならないように、再び剣を振るうと」

そうか……。簡単なことだったな。あの夢のようにするのが恐ろしいければ、あの夢のようにならないように刃を振るえばいいんだ……。

俺はいつたい何に悩んでやがったんだ。答えならすぐそばにあっ

相変わらず地位だけは高くして無能な奴だ。そんな簡単なことでも分らないのか。

「だったらハズレを引いたらどうなるのじゃ!!」

袁術がキーキー騒ぎながらそう言ってきた。

「そりゃ運が悪かったらそのまま決戦に参加するか、撤退するしかないんじゃないか?」

袁術の言葉に対して、公孫賛が俺の言葉を代弁するように言ってくれた。

確かに袁術の言い分は分からなくもないが、こう言つときのために連合を組んでいるんだがな。

「そんな不名誉なコト、妾はイヤなのじゃ!!」

「そうですね! 今日からしばらくあなた達だけで城攻めをなさい! これは連合の総大将からの命令ですわよ!」

袁紹はこんなときにだけ連合軍の総大将とか言つて自分勝手な行動を起こしやがった。

本を正せばこの連合軍も袁紹こいつが董卓が気に入らなかつたから結成された軍だ。

今更に思うがこいつはワガママの塊とでも言つべきだろうな。

さらには袁術までもが城攻めに参加しないと言い出しやがった。

「テムエら……調子乗ってんじゃねえぞ」

「あなたもあなたですわ。『剣帝』とか言われながら、先日までの体たらくは何ですか？」

「そうじゃ！ そうじゃ！」

そうか。こいつらは俺によほど殺してもらいたいみたいだな。

これからの城攻めに加わらないってんなら、こいつら二人を殺したところでなんにも問題はないからな。

そんなコトを思っていると華琳が俺の手を握ってきた。

「自制しなさい。今はあんなのでも戦力に居た方がまだマシだわ」

「華琳がそう言うなら、仕方ねえな」

俺はそう言うと、とりあえずは二人が城攻めに参加しないことを仮定に話を進める。

「袁術の代わりに孫策、悪いが頼めるか？」

「仕方ないわね。引き受けましょう」

孫策はそう言いながらも満更ではないような表情をする。

すると袁紹がまた勝手なことを言い出しやがった。

「なら、私の代わりには……劉備さん。あなたの軍、有能な将が

たくさん居るようだから、隊を二つに分けても何ともありませんよね？」

「え、そ、そんな……。わたしの軍、兵の数はそんなに……」

劉備の言つとおり劉備の軍の兵は周りの奴らに比べると、目に見えるほどに兵の数が劣っている。

それにもかかわらずさらに隊を二つに分けるつてのは余りにも無謀と言つものだろう。だがそんなコトを考えていないのがあの女だ。

「仕方ない、劉備の軍に俺と俺の隊が参加する。構わないな、華琳」

「ええ、かまわないわ」

「曹操さん……。龍崎さん……」

劉備がまるで信じられないと言つような表情をしながら、俺と華琳を交互に見ながら言つ。

ちよつと百面相的で面白いと思つたのは俺と読者様の秘密だ。

「関羽のような逸材に使われるなら、私の兵も本望でしょう。それどころ……」

華琳がそう言つと、劉備は諸葛亮と何かを話し合っていた。

おそらくは城攻めを引き受けるか受けないかを相談してるんだろ
うな。

そして相談を終えた劉備が言った。

「分かりました。お引き受けします」

「なら結構。それでは決戦の布陣を説明してくださるかしら？」

袁紹の言葉に少タイラつきながら決戦の布陣についての説明を始めた。

俺は劉備の助けに行くために俺の隊の兵を集めた。俺の隊の中に
風、真桜、沙和の隊が備わっているがその三隊は華琳達の隊に合流
させた。

結果的には紅葉の隊と本から少なかった俺の隊が残っただけだっ
たが、それでも数は足りるだろう。

「紅葉、お前には悪いが今回の戦いは劉備の軍の補佐についてく
れ」

「分かったわ。なんか考えがあるんでしょ？」

「まあな」

実は隊の中に数名間諜を混ぜているのだ。

間近で関羽や諸葛亮の指示を見ることが出るのは早々にはない
だろう。兵を貸すと言う建て前で、その力を取り込むのが目的だ。

そうでなければ兵を貸す意味なんかないからな。それらを一通り説明し終わると、紅葉が俺に言ってきた。

「やっぱり、今の桜牙の方が桜牙らしくていいんじゃない？」

「ハッ、お前に言われるとはな。まあ、俺もそう思うがな。よし、頼むぞ」

「分かってるって」

紅葉はそう言うと隊を率いて劉備の元に向かっていった。

これでとりあえず戦闘前の俺の役割は終わりだな。あとは、戦いに力を入れるだけだ。立ち直ってからの初陣だからな。

そんなコトを考えていると、門の正門が開くのが見えた。それに少し遅れてから華琳の声が聞こえてきた。

「ここが正念場！ この戦いに勝てば、長い遠征もおしまいよ！ けれど、もし奴らをあの城の中に押し戻してしまったら、この遠征は永劫に続いてしまうでしょう！！」

華琳の言葉を聞き、兵士達が表情を引き締める。

「この戦いばかりの日々を終わらせるわよ！ 総員、戦闘準備！」

そして兵士達が各々の武器を構える。

銅鑼の音が響き渡り、門から敵の部隊がこちらに向かって突撃してくる。

「……さあ、誰が私たちの相手をしてくれるのかしらね……春蘭
！！」

「総員、突撃いいいいいいっ！！」

こうして反董卓連合の最終決戦が幕を開けた。

第貳拾玖話 『偽善？違うな、自己満足だ。なんせ俺は甘ったれなもんでな』

side 桜牙

戦いが始まってから俺は一つの隊を率いて敵の隊と接触するために、進軍していた。この戦いが終われば、ひとまず息を付くことが出来る。

そしたら改めて華琳にあんときの礼をしなきゃな。俺はそんなコトを思いながら白羽黒羽を強く握りしめる。

そしてその数秒後には敵隊と接触したのだが、敵に動く気配はない。それどころか、その隊の頭らしき男が前に出て俺に言ってきた。

「あんたが『剣帝』の龍崎桜牙か？」

「ああ？ だったらなんだよ」

俺に言ってきた頭らしき男は俺がそう言つと、なぜかクククと笑いながら言ってきた。

「話は聞いてるぜ。あんた、今更になって人を斬ることにビビってんだろ？」

そいつがそう言つとギャハハハハ！！ と敵の隊の全員が笑い始めた。

「そんなあんたがここに出てきたって、死にに来るようなもんだ

ぜ？ さっさと帰って、家の隅でビビってる！！」

頭らしき男の言葉でさらに周りが笑い出す。

俺の隊の奴らもそのことを薄々思っていたからか、誰も反論をしなかった。

まあ、そんなコトを言われても仕方ないほどに、そんなときの俺は不拔けてたからな。

「お前らは一つ勘違いしてる」

「なん……ぐぎゃああああっ！？」

俺はそう言うと、頭らしき男の心臓めがけて白羽を投げつけた。もちろん手加減なんかしてないので、白羽は頭らしき男の心臓を貫通した。

鮮血が舞い、敵の兵士達には同様が走る。俺の隊の兵士ですらも、驚いて目を丸くしてゐるくらいだからな。

「確かに、あのとき、俺は人間を斬ることに恐怖していた。だがな……」

投げつけてしまった白羽を新たに創り出し、敵隊に一步步み寄って行きながら言う。

「『今』の俺は人を斬ることに恐怖しても、そのことに躊躇いはないんだよ」

この戦いは連合の動きによりもはや勝利に等しい結果となってきた。
ていた。

そして私と季衣と流琉、張飛に文醜の4人は天下無双の飛翔軍、
呂布と対峙しているのだが、全くと言っていいほどに歯が立ってはいない。

「……くっ！ 呂布め、何という強さだ……！」

自分自身で呂布と対峙してみると分かるのだが、これまでに力の
差があるというのか……。

「流琉！ いっちー、ちびっこ！ もう一度、仕掛けるよ……！」

季衣のかけ声に皆が答え、各々の武勇を振るっていく。

「……何度やっても無駄」

だが呂布は季衣の鉄球による一撃を軽々とかわし、季衣と同じよ
うに一撃の威力が高い流琉の一撃をも何もなかったかのように受け
止める。

そして隙を見ては戟による攻撃を放っている。

「そうかあ？ 背中ががら空き……」

「……無駄」

さらには後ろをとったはずの文醜の攻撃すらも受け止め、逆に斬

り返している。

「甘いのだ!!」

しかしそこに張飛がすかさず槍を呂布に向かって振るう。張飛の攻撃は完全に隙を付いたはずだったにも関わらず、呂布は持ち前の武勇でそれを跳ね返す。

私も矢を放つてはいるのだが、身内が動き回っているために狙いがつけにくくさらには軌道が呂布に向かったとしても、全て弾かれてしまう。

くっ、やはり呂布と対等に戦えるのは姉者が関羽……。いや、龍崎しかいないだろう。だが姉者は張遼の相手をし、関羽の居場所は分からない。

それに龍崎は刃に迷いを感じる。そんな今の龍崎が呂布と戦えるはずがない。

そんなコトを考えていると不意に呂布の動きが止まった。そして呂布は私たちが居る方向ではなく、なぜか誰もいないはずの方向に向き直り武器を構えた。

「……来る」

その場にいた皆は何が来るのだろうかと思っただろう。だがその疑問はすぐに晴れた。

呂布が構えたところに白と黒と短剣がまるで矢のように撃ち込まれてきたからだ。それを呂布は戟を動かして、弾き返す。

「よお。やっと見つけたぜ、呂布」

その声が聞こえた方は我々は一斉に見つめた。そこには、いつものように自信に満ちた龍崎が立っていた。

side 桜牙

戦いがほとんど俺たちの勝ちが決まったので、俺は持ち場を離脱して呂布を探していた。

そして見つけたのはよかつたんだが、前の時と同じようにすでに他の奴らと戦っていた。だが、呂布は突如として武器を収め俺の方向き直ってきた。

なるほど。あんたもあの時の俺の約束を覚えてくれたって事か。

そう思うと自然に頬が緩んでしまっていた。そして俺は弓を創り出し、白羽黒羽を呂布に向かって放った。

だがこちらに気づいている呂布からすればそんな攻撃は意味のないもので、軽々とそれを弾き返す。

それを見た俺は呂布に近づいていきながら言う。

「よお、やっと見つけたぜ呂布」

俺がそう言っていると呂布は武器を構える。前回のこともあり、呂布か

ら感じる鬪牙は並のものではない。

そんな構えを見た俺は白羽黒羽を創り出し、同じように構える。

「龍崎。お主大丈夫なのか？」

すると秋蘭が心配そうに俺に訊ねてきた。

そりゃそうだろうな。秋蘭は俺が復活したのを知らないからな。

「ああ、問題ないさ」

「そうか」

俺がそう言うのと秋蘭は戦いの中だと言うのに、安心したような顔になる。

それを見た俺は思わず笑みを見せそうになるが、それを堪えて呂布に睨みつける。

「龍崎桜牙、推して参る!!!」

「……行く」

俺たちはそう言い合うと、同時に地面を蹴り出す。各々の武器に力を込め、一気に振りかざす。

二つの武器がぶつかると同時に本当に金属同士を打ち付けたのか、と問いたくなるほどの轟音が戦場に流れる。

空気が痺れ、戦いの緊張感を醸し出す。

力では俺が勝ってはいるが、さすがは一騎当千の将と言っべきか見事に俺の一撃を受け流す。

呂布は回転して遠心力を乗せた一撃を俺に向かって振るう。

だが俺はそれを受け止めるのではなく、受け流すことにより回避する。

そして踏みだそうとするのだが、踏み出す前に呂布の蹴りが俺に放たれていた。

まるで俺の動きが読まれてたかのような一撃だった。

だが俺もバカじゃない。それくらいの事態は予測していた。

呂布の蹴りを黒羽の平の部分で外側にはじき、呂布の胸元に向けて白羽を突き出す。

それと同時に呂布が戟を引き戻し、一撃を防いだ後に後ろに後退して態勢を立て直した。

これまでの攻防はわずかに数秒。そこらの奴だったならば、すでに俺に八つ裂きにされていただろう。

だが呂布にはまだ致命的な一撃を与えてないどころか、掠り傷一つつけていない。

「……お前強い」

「ああ、お前もな」

そう言い合った後に俺たちは同時にだが、と呟き地面を蹴り出す。地面が抉れ上がるほどに力を入れた結果、尋常でない速さで俺たちはぶつかり合う。

「勝つのは……俺だ!!」

「勝つのは……恋」

呂布の神速の突きが俺の腕、肩、脚、首、胸と的確に俺を捉えてくる。その一撃一撃には必殺の威力が込められており、当たれば確実に死に至るだろう。

相手が俺でなかったらだがな。

俺は呂布の一撃一撃を完全に見切り最小限の動きだけで全てを回避していく。隙あらば一撃を決め込もうとするが、呂布の動きにはそれがない。

わずかな隙も与えずに俺を叩き潰すかのような目だ。だが俺もそれでは終わる気はない。

終わる気がないどころか、負ける気すらない。否、負けられない。

「はあっ!!」

俺は呂布の戟を弾き返す。そして、小細工なしで俺は一撃で決め

るために全力で呂布を斬りつける。

「く……っ」

呂布は戟で防いだはよかったが、威力を殺しきれずに後ろにぶっ飛ばされる。

それでもなんとかギリギリで踏みとどまった呂布に、俺はさらに追い打ちを掛け呂布をぶっ飛ばす。

今度こそ完全に耐えきれなかった呂布は砦の外壁に向かってぶっ飛ばされる。

すかさず俺はそれを追撃し、呂布が砦の外壁にぶつかった直後に、呂布に刃を振るおうとした。

もちろん呂布を殺す気はない。華琳に連れてくるように言われているからな。

だが突如として呂布の前に誰かが立ちふさがった。

「恋殿は殺せませんぞー!!!」

こいつは確か華琳のどこに来た肉屋のせがれか。

そう思った俺は突っ込むのを止め、立ち止まる。

目の前の肉屋のせがれは震えながらも刃を持つ俺をキッと睨みつけてくる。

大切な人を守るために、自らが犠牲となろうと構わないと言わんばかりに。

「貴様に問おう。呂布は貴様にとってどんな存在だ」

俺は目の前の少女を睨みつけながら言う。

「そんなの決まってるのです。恋殿は大切な仲間なのです!!」

そう言う目の前の少女はただ単に呂布を救いたいただけなのだろう。

今にも逃げ出したいのを堪えて俺と対峙している。

「そうか。ならば二人仲良く……」

俺はそう言い白羽を振り上げる。目の前の少女は目をギュツと閉じ、呂布はもう動かない体を無理に動かそうとしてもがいている。

そんな二人に俺は刃を

「なぐんてな」

振り下ろさなかった。

俺は白羽黒羽を破棄した後に二人と視線を合わせるために膝をつく。

俺がそんな行動を起こしたことにより二人はワケが分からないと言ったような表情になる。

「なあ。お前ら、俺たちの仲間にならないか？」

「どういづつもりなのです……」

目の前の少女は警戒の眼差しを向けながらそう言ってきた。

当たり前だ。ついさっきまで殺し合っていた奴から仲間になれば、なんて言われたら警戒をするのが当たり前だ。

するなって言われる方が無理だっけ話だ。

「どうもこうもないさ。ただ、こんな乱世を終わらせるために二人の力が必要なだけさ」

「乱世を終わらせるためにです……？」

「ああ、そうだ。平和な世を作るために我が主の覇道に協力してもらえないか？」

俺の言葉を聞いた女の子は俯き何かを考えるような素振りを見せていた。

俺が二人を説得してる間に秋蘭達はすでに動き始めていた。

「俺は甘いもんでな。お前らを悪いようにはしないし、兵も助けてやる」

まあ、華琳には呂布を連れてくるようにしか言われてないが、その方がいいだろうな。

そんなコトを考えていると、ドコからか腹の虫が鳴く音が聞こえた。

なんか呂布がわずかに頬を赤く染めてうつむいてるんだけど……。

「……飯にも困らないようにする」

「……ホントに？」

「ああ、本当だ。まあ仲間になってくれるか、くれないかはあんた達が決めてくれ。もう俺に戦う意志はないからな」

俺は手をヒラヒラと振りながら、ふざけながら二人に言う。

「まあ、あんたらが戦うって言うなら別だけどな」

意地悪い笑みを浮かべながら二人に言う。

とりあえず二人には戦う意志は無さそうだから言うってみた。

戦う意志があるってんなら武器を破棄したりするはずがないからな。

「……分かった」

そして呂布は考えた末に俺にそう言うてきた。少女の方も異論はなさそうだった。

「そうか。なら改めて名乗らせてもらう。龍崎桜牙だ、よろしくな呂布」

俺は二カツと笑いながら言う。

よく言うだろ？ 人間、第一印象は大事だってな。まあ、俺人間じゃなくて吸血鬼なんだけどな。

「……恋」

「ん？」

俺が自己紹介をすると呂布はポツリとそうつぶやいた。

この状況からしたらコレって真名なんじゃないか？ 呂布の隣の少女も口をあんぐり開けてるし。

だが会ったばかりだったのに真名なんか受け取ってもいいんだろっか。

「いいのか？ 真名なんだだろ？」

「……（コクン）」

俺の問いに呂布は言葉ではなく、頷いて答えてくれた。

「むむむ、恋殿が真名を授けると言うならば、ねねも真名を預けるのです」

少女は仕方がないとばかりにため息をつきながら言った。

何もため息をついてまで真名なんか教えなくても良いと思うんだ

けど……。

「姓は陳、名は宮。字は公台、真名はねねね！」

「……ねねねね？」

「ねねね！ 真名を間違うなどと失礼にもほどがありますぞー！
」

そんなコトを言われても『ね』が多すぎるんだよ。

間違えたことには素直に謝るしかないけど……。

「漢字だとどう書くんだ？」

「音！ 音！ 音！ 音々音なのです！！」

なるほどね。だからそう言う真名なのか。

「よろしくな。恋、ねねね」

まあ、何にしても俺の役割はこれでお終いだろうな。他の勢力も俺が二人を説得してる間に、あらかた制圧されてるみたいだからな。

俺の復活の初陣にしたら恋を打ち負かし仲間にしたってぐらいの功績がありゃあ十分だろう。なんにしても残りも残りは他の奴らに任せれば、片が付く。

俺は恋たちを華琳のところに連れて行ってあとは休むとしますか。そんなコトを思っていると、恋が俺の服の袖を引っ張ってきた。

「どうしたんだ？」

「……月、助けて」

「月？」

月と言うのは董卓の真名らしい。それで恋とねねから事情を聞いたところ、董卓自体はこのようなことを引き起こすことはやってなかったらしい。

だが裏で董卓はクグツとして良いように利用され、このような自体を引き起こす羽目になってしまったらしいのだ。

まあ、クグツとして利用されてたとかうんぬんの話は、連合が結成される前に華琳と話してたから分かるがな。

「んで、恋を助けたように董卓も助けてほしいと」

「……（コクン）」

「言っちゃ悪いが、そんなんはつけ込まれる方にも問題がある。よって同情する価値はねえ……」

俺は恋を見ながらそう言う。もちろんそれを聞いた二人は俺を睨みつけてくる。

助けるとか助けないとかじゃなくて、董卓を非難するなってコトだろっな。

「……つて華琳なら言うかもしれないな」

「へ？」

「……？」

おどけながらそう言つと二人はキョトンとしたような表情になつていた。

「あいにくと俺は甘いもんでな。頼まれたらイヤとは言えないんだ」

「では助けてくれるのですな!？」

「ああ。こんな甘つたれな性格に感謝するんだな」

と言うことで俺と恋とねねは城の中を動き始めた。

もちろん他の兵士に二人が見つかるわけにはいかないので、コソコソと動きながら董卓を探している。

俺一人でも董卓が分かるように特徴を覚えてもらったんだが、お姫様みたいつてどう言うことだよ……。

そんな奴がいるわけ……………ゴメンナサイ、居ました。すげー居ました。お姫様発見いたしました。なんかもう一人居るけど……………。

とりあえずあれで間違いなさそうだな。

そう思った俺は二人に近づいていく。

「ようやく見つけたぜ」

「だ、誰っ!？」

「うう……」

俺が話しかけるとお姫様はビクツとして、もう一人のメガネっ子が警戒心満点な眼差しで俺に言ってきた。

「さて誰だろうな。一、あんたらの味方。二、天の御遣い。三……
…連合軍」

俺がそう言うと二人はさらに警戒心を高めながら、わざわざ答えてくれた。

「……連合軍」

「三分の一正解」

「えっ?」

と言うことで人目のないところへ行って言ってもそんな場所は限られてくるんだが……)に移動した。

そこにいくと恋とねねねが待っていてくれた。

「どっつ言っこと? 恋にねねまで居るなんて……」

そして仲間である恋とねねねを見たメガネっ子が言ってきた。

「だから言つたる。連合軍で天の御遣いであんたらの味方だつて。順を折つて説明するから聞いてくれ」

とりあえず俺はお姫様とメガネっ子に説明をした。

恋とねねねは俺たちが仲間にする形で救うことにしたこと。そんな恋達の依頼で二人を助けに来たこと。全てを話した。

最初は信じられないと言つた感じだったが、恋とねねねも居たことによりどうにか信じてくれた。

「それで、これからどうするつもり？」

「そうだな。とりあえず董卓とカクカ。お前らには形式上は死んでもらう」

「形式上？ どういう意味よ」

「分かりやすく言えば、名前を捨てろつて事だ」

俺が言いたいのはとりあえず連合内では董卓とカクカの面が割れている可能性は低い。

なんせ、董卓がどう言つた奴かなんて情報は入つてこなかったからな。なので、名前を捨て仮の名前で名乗り董卓に苦しめられていたところを、俺に助けられた。

董卓は俺に討たれ死亡し、董卓に仕えていた恋とねねねにも同じように証言させれば、形式上では董卓は死んだことになる。

その後は俺のメイド係にさせるかなんかすれば、この二人が董卓だなんて誰も思わないだろう。

仮にバレたとしても、俺のそばに置いておけばいくらかでも何とかなる……はずだ。多分、いや、どうだろう……。

とまあ、こんなコトを考えてしまってるわけだが、甘ったれ全開だな。

偽善？ 違うな。こいつは自己満足って奴だ。二人を助けることになんか意味はないが、少なくとも四人の女の子が救われる。

それに形式上だろうと何だろうと董卓が死んだんだから、一件落着だろ。

「二人には悪いが、生き残るためには名前を捨ててもらおう」

俺がそう言つと董卓が俺に言ってきた。

「一つ質問があります」

「何なりと、お姫様」

「……私たちを助けて、あなたに何か得があると言っんですか……？」

「得か……。得ならあるさ。少なくとも、あの二人の願いを叶えてやれる。あんたを助けるっつう願いがな」

俺は呂布とねねを見ながら董卓とカクカに言う。

「さて、本題に入ろう。名前を捨てる件だが、どうする?」

「別に名前なんか捨てる必要はないわ。ボクと月の真名をあなたに預ける。……そうすれば、名を捨てる必要なんて無くなるでしょう?」

「確かにそうだな。だが真名は神聖な名前だ。まだ信用に足りてない奴に預けるのはどうかと思うがな」

「……気づいてたの?」

カクカは疑いの眼差しを俺に向けながら言ってきた。

当たり前だ。一定の距離を保ちつつ、必要最低限の情報を与えない。何より疑いの態度がにじみ出てたからな。

よほどの馬鹿じゃなきゃ気付くつつうの。

「月の真名を知っているのはボク以外には恋やねね、あとはほとんどいない。そしてボクの真名も同じようにほとんど知ってる人はいない。あんに真名を預ければ、呼び名の問題は解決するはずよ」
なるほどね。そうすれば確かに呼び名の問題は解決だな。

「そうか。なら悪いが真名で呼ばせてもらおう」

「董卓……真名は月です」

「ボクは詠。ボクのことはどうでも良いから、とにかく月のコトだけはしっかり守ってあげてよ」

「悪いな。俺は月だけじゃなくて、俺の剣が届く範囲の仲間を守ることしてるんだ。だからあんたも守る。もちろん恋もねねもな」

俺はニカツと笑いながら四人に言う。

「……………」

すると四人がいきなりうつむいたり、顔を逸らしたり、顔を赤くしたりしたんだがどうしたんだろうか？

とりあえず俺はそこまで言うと、周囲の兵士の位置を確認した後、四人に向かって言う。

「今から曹操の陣営に向かう。恋とねねには悪いが、拘束されたフリをするために縄で手を縛らせてもらう」

「……………」

「むむむ、仕方がないのです」

ねねの態度に少しばかり苦笑した後、今度は月と詠に言う。

「二人はあくまでも助けられた身として振る舞うんだ。名前を出されても反応しないように」

「はい……………」

「分かったわ」

さあて、今からは一世一代の俺の演技力が試されるってもんだ。

龍崎桜牙、推して参る！！

第貳拾玖話 『偽善？違うな、自己満足だ。なんせ俺は甘ったれなもんでな』 (後

少しだけ勢力が変わりました！

感想、評価、レビュー待ってます！

第参拾話 『業炎の剣帝、終結に導くのこと』

side 桜牙

ひとまず恋とねねを捕縛したフリをし、月と詠を助けたことにして華琳の元に向かっていた。天下無双の呂布を捕まえた俺は連合軍内からはさすが天の御遣いだ、と唄われた。

俺が不拔けてたときは散々言っただけに、手柄を立てた途端に掌を返しやがって、本当に都合のいい奴らだ。まあ、それが人間の質つてもんだから仕方ないことだろう、と俺は思う。

それは人間と吸血鬼バケモノの二つの視点から物事を見た俺だから言えることだろう。

さて、そんなコトはさておき。現在俺たちは華琳の天幕に恋とねねを連れてきていた。

もちろん仲間にしろって言ってたから連れてきたこと自体には驚いてないはずだが、まさか連れてくるとは思わなかったとばかりに驚いていた。

「華琳、約束通り呂布を連れてきたぞ。もう一人は軍師の陳宮だ。ついでだから連れてきた」

「ご苦労様。そちらの方は連れてこなくても良かったのだけれど？」

「そう言っな。一応軍師だし、呂布の扱いにはなれてるはずだからな」

確かにあのときのことにはイラついてるのは分かるが、兵力が上がるのは良いことだろ。

そして華琳はそこまで言うと、今度は後ろにいた月と詠に目を付けた。

「桜牙、その子達はいつたい何かしら？」

やっぱり言われた。いや、スルーされる方が裏でなんかあるんじゃないかと思っちまうな。

とにもかくにも、ここで月が董卓だって言うことをバレないようにするのが本来の目的だ。

華琳の物事を見通す力は本物だ。少しでも動揺を見せれば即座にバレるだろうな。

「彼女たちは城で逃げ遅れてたお姫様と付き人みたいなんだが、放っておくのも悪いと思って俺が保護したんだ」

「ふうん、桜牙。貴方は今までに何人の女の子を保護してるのかしら？ 雪に紅葉、確かにあの二人は私の覇道に協力してくれるから貴方につけた。だけどその子達はどうかしら？」

役に立つとは思えないわ、と華琳は言い切った。

「確かにそうかもしれないが、俺のそばに置いておけば助けても

問題ないだろ」

「はあ……。桜牙、私が何も気付いてないとも思ってるのかしらっ？」

華琳は全てを見透かしたような目で俺を見据えながら言う。

マズいな。華琳はもう真実に気付き始めてる。もう一押しされたらバレるかもしれない。

「まあいいでしょう。彼女達の名前は？」

「こっちが月で、こっちが詠だ」

「そう。なら『董卓』はどうしたのかしら？」

なるほど。そう言うことか。

「董卓は俺が討ち取った」

「さすがね。ならその功績に免じて、その二人を貴方の願いを一つだけ聞きましょう」

ああ……。華琳。あんた最高だよ。あんたに仕えられたオイラはすげー幸せもんだべー……。

大げさに思いすぎてるな、うん。

「じゃあこの二人を俺専属の侍女にしてくれ」

「ええ。分かったわ。それと呂布と陳宮には貴方が見張りとしてついてもらってもいいかしら？」

「ああ、構わん」

俺は華琳にそう言うのと華琳の元を去り、四人をとりあえず俺の天幕に連れて行つた。他の天幕だと何が起こるか分からないからな。

それに信頼における春蘭や秋蘭もまだ帰ってきてないし、何にしろ俺の天幕に匿うのが一番だろうな。

そこで天幕に全員を連れてくると、詠が俺に言ってきた。

「これでボクと月は助かったの……？」

「ああ。アンタらはもう安全だ。まあ、月が董卓だったのはバレてみたいだな」

「……どう言うこと？」

詠は不思議そうな表情をしながら俺に訊ねてきた。

華琳は途中から月が董卓だと言うことに気付いていた。多分俺の性格を読んで、そう言う結果に至ったんだろうな。

そして俺たちが董卓を匿ったとしても、俺が何か策を用意したと思えば董卓を匿うことを許してくれた。華琳、いやこの連合の一部を除いて董卓を討つたというのは表面上で証明されてるので十分なんだろう。

だからこそ華琳は月を匿うことを許してくれた。仮にバレたとしても、そんなコトを気にするのはないだろうと考えこの結果に至ったのだ。

で、そこまでを説明してあることに気付いた。恋が俺の袖を掴んでいたのだ。

「…………お腹、空いた」

そう言えば腹の虫があんときも泣いてたなあ…………。

「ちょっと待っててくれ」

なんだか季衣と紅葉に似てるんだが、もしかして食費がまた増えちゃうの…………？

そんなコトを思いながら糧食を恋に渡したんだが、さっき思った不安はどうやら正解だったらしい。

はあ…………。不幸だ。

「…………おかわり」

…………誰か助けてください…………。

あの激しい戦いから一夜が明けて、街に出てみるとすでに復興作業が始まっていた。

既に華琳は兵を場内に入れて、道路や倒壊した建物を片づけさせ始めている。

どうやら陛下の側近につながりがあり、すでにそちらから許可をもらい行っているみたいだ。ちなみに今回は桂花ではなく、個人的な繋がりだそうだ。

そんで今は復興作業を見ながら恋達の監視も込めて俺は華琳や季衣、流琉と共にいる。

まあ、なんか知らないが季衣と流琉は恋とねね、月や詠と仲良くなってるし監視なんか必要ないと思うがな。

「見つけましたわ、華琳さん！！」

そんなコトを思っていると、聞きたくもない声が聞こえてきた。

うん。とりあえず恋があいつ等に見つかったら面倒なことになりそうだし、どっかに詰め込むとするか。

「恋、ねね。悪いけどちょっと隠れててくれ。袁紹達あれに見つかる
とめんどろなんだ」

「……（コクン）」

恋は一回だけ頷くと、ねねを連れて近くの店に隠れてくれた。

そう。何を隠そう金色の二人、袁紹と袁術のコンビがこっちに向かってきてるのだ。もしあんな奴らに恋が見つかったりでもしたら、絶対面倒なコトになる。

ねねは軍師で戦場に出てないから分からないかもしれないが、もしもの事を考えてだ。

「華琳さん！ 何ですのこの工事は！ またわたくし達に無断で……！」

「大長秋を経由して陛下の許可はいただいてある。問題があるよ
うなら、確認してもらっても構わないけれど？」

「なっ！？ 大長秋！？」

大長秋と言うのは皇后府をとりしきる宦官の最高位だ。どうやら華琳のお爺さんは依然その地位にあつたらしい。

何にしても大長秋には逆らえないらしい。

「ええい、猪々子さん、斗詩さん！ こんなところにいる場合はありませんわっ！ 行きますわよ！！」

んでなんだかんだ言っている間に騒がしい奴はどっかに行つて……あれ？ 振り返つた？ しかもなんか腕をブンブン振りながら叫んでるぞ？

「この、タマ無しっ！！」

袁紹はそれを叫ぶと砂煙が舞うくらいの速さで走り去ってしまった。つーか仮にも女の子なんだから、タマ無しとか叫んでんじゃねえよ。

「……何だったんだ、あいつらは」

なんかいきなり出て来て、いきなりどっかに行きやがったし。風のように来て風のように去るってのは正にこの事か。

「さあ？ ……あら？」

「あれ……？」

「あつ！ ちびっこ！」

ん？ なんか華琳と季衣と流琉の三人が一点を見つめながらなんかつぶやいたぞ？

そんなコトを思いながら三人が見ている方を見ると、劉備と関羽、張飛の三人が炊き出しをやっているのが見えた。

何っ！ 関羽と張飛が炊き出しをやっているのを見ると、恋と対等までいなくてもかなりの武を誇ったのが嘘みたいだな。そんなコト言ったら、うちの季衣も流琉も同じようなことを言えるけどな。

「彼女達も早いうちから城に入ってたとは聞いたけれど……あの関雲長が炊き出しとはね。けれど、何をおいてもまず民のため……か」

「何言っただ華琳は。お前も公共の道や橋を優先的な直させてるの知ってるぞ？ それってやっぱり華琳も民のコトを大切にしているからだろ？」

「……」

と俺が笑いながら言ったのだが、なぜかいきなり華琳は黙り込み顔を赤くしていた。

あれ？ 俺ってばなんか変なことでも言ったのだろうか？

「あ、華琳さま照れてるー！」

「……………うるさいわね」

おお！？ 季衣に指摘された華琳がツンデレのような言動を！？
こ、こいつはレアものだ……………。これでデレてくれたら完璧なんだけどな……………。フッフッフ……………。

「けれど劉備か……………。その名、心に留めておきましょう。桂花、劉備にこちらの予備の糧食を届けるように手配しておきなさい」

り、糧食だと！？ ま、マズい……………非常にマズい……………。実のところ昨日恋に食べさせてたらあまりにも可愛すぎて、食べさせすぎちゃったんだけど……………。

もしそんなのがバレちゃったらどうしよう……………。ええい！！ 食わせちまったもんは仕方がない！！ 矛先が俺に向かないことを祈るだけだ。

「それは構いませんが華琳さま。あの劉備という輩、いずれ華琳さまの覇業の障害に……………」

確かにそうだな。華琳は天下統一するために動いてるんだ。つまりは今回の戦いに生き残った劉備達といずれ戦うことになる。

「……………でしようね。けれど、その時は正面から叩き潰せば良いだけよ。違つかしら？」

その言葉を聞いた俺は思わず吹き出してしまった。そんな俺を見たそこにいた全員は、不思議そうな表情で俺を見つめてくる。

「相変わらずだな。俺は華琳のそんなところが好きだな」

俺は思わず笑みを漏らしながら華琳に言う。

「な……………っ／／／／／／」

あれ？ また華琳の顔が真っ赤になってきてるんだけど？ そんな董卓軍の皆様になぜか不満そうな顔で見られた。

なんかマズいことでも……………ふおっ！？ な、なんだこの殺気は！？ この久しぶりに感じた殺気はまさか秋蘭か！？

そんなコトを思いながら後ろを振り向くと素晴らしい笑顔の秋蘭が立っていた。

秋蘭さんのその笑顔が素晴らしく怖いんですけれど……………。誰か助けてください……………。

「龍崎……………。いや、今はよそう。実は華琳さまに会わせたい輩が居るのですが……………」

秋蘭がそう言うと秋蘭の後ろから張遼が現れた。

それを見た月と張遼のお互いが、驚いたような顔をしていた。いや、二人だけでなく、月の将だった皆が驚いたような顔をしていた。月に至っては張遼に抱きついていきそうになったので、俺はそれを止める。

(月、今ここで出ていたらお前が董卓だったのをバラすようなもんだ。あとでみんなが居なくなってから、再会を喜んでくれ)

(へう………／＼／＼／)

……なんでそこで顔を赤くするんだよ。別になんもやってないだろ。ただ近くで話してるだけだったのに、何でだ？

一つ言えることがある。何かって？ そんなん決まってるんだろ。さっきの声が可愛いつて事だよ！！

「んんっ……。そう、春蘭は見事に役目を果たしたのね。それで春蘭はどうしたの？」

「それが……」

華琳がそう訊ねると突如として秋蘭の表情が曇った。それを見た誰しもがふざけた雰囲気から、不穏な雰囲気に変わる。

「まさか……冗談、よね？」

華琳がそう訊ねなくなるのも痛いほど分かる。だが春蘭がそんな簡単にやられるはずがない。

仮に張遼にやられたのだとしたら、秋蘭が連れてくるはずがない。春蘭の敵をとるために戦うはずだからな。

「ご心配なく。至極元気です。……が、華琳さまにはもはや顔を見せるわけにはいかない」と

「どうしたの!？」

「少々怪我をしまして……。命に別状はないのですが……」

「っ!！」

秋蘭のその言葉を聞いた華琳は今までに見せたことがないほど焦りながら、春蘭がドコにいるのかも分からずに走り出していた。

「華琳さま! 姉者は本陣の救護所にあります!！」

「分かったわ!！」

そう言った華琳の声は角の向こうからで、華琳の小さな姿はあつという間に見えなくなってしまうた。

そして残された俺たちには重たい雰囲気だけが残った。月や張遼達からしたら、再会でできて嬉しいはずだ。

だが今の空気のせいで嬉しいはずなのに、素直に喜べないで居る。

「うう……」

「季衣。よく我慢した。偉いぞ……」

俺は拳を強く握りしめている季衣の頭を撫でながら言う。

「季衣、後でみんなでお見舞いに行こうね」

「……………うん。今春蘭さまに一番会いたいののは、華琳さまだもんね……………」

「こう言うときだけは空気を読むんだな、季衣は。だがそう言うところだけでもいいだろうな。」

「秋蘭。春蘭は大丈夫なのか」

「それは大事ない。無傷とは言わんが、あれで怪我人と言っては怪我人に失礼だろう」

さっきまでの怒っていたような雰囲気は今の秋蘭にはない。

「すまん、霞。華琳さまにはまた後でにしてみらう」

「えっ、ああ、うん。構わへんよ……………」

張遼は月を見て今にも泣きそうになっている。そうとう月と再会できたのが嬉しいんだろうな。

「俺達も本陣に向かおう。月と張遼はどうする」

「うちは……………。うちもついて行くわ」

「そうか。月はどうする」

「私も……一緒にいきます」

「分かった。じゃあ行こうか」

俺たちは本陣に脚を進めつつも、華琳が春蘭と少しでも長く話してられるようにゆっくりと歩みを進めた。

本陣に向かうまでに隠していても意味はないだろうと思い、俺は月の正体となぜ月達がここにいるかをみんなに話した。

月が董卓だと言うことも、恋の頼みで俺が月を助けたことも、何もかも全部を話した。

「そうやったんか……。ありがとな、月もカクっちも恋もねねも助けてもらって」

「構わないさ。みんなも董卓をかくまう形になるが、構わないか？」

俺がそう言うと皆が快く頷いてくれた。

「ホンマにありがとな。……ウチの真名、あんたに預けるわ」

張遼は本陣に向かう途中でこの事を話すと何回も礼を言ってくれた。

それだけ大切な人だったんだな。

「ああ」

「ウチは霞や。みんなを助けてくれてありがとな」

あんまり礼を言われすぎると照れるな。四人を助けたのはあくまでも俺の偽善ぶりがあったからだ。それに礼を言われてもむず痒いだけさ。

そして本陣のところまで来ると、なぜか沙和と紅葉と雪が本陣でつまんなそうにしていた。

話を聞いたところ、その三人は救護所に居るって聞いたんだけどな。

「お前ら、救護所に居るんじゃないのか？」

「なんだかお邪魔みたいだから出て来たの」

「あそこに居ると言うのは野暮だと思ひまして……」

「私が華琳の立場なら二人にしてほしいと思っただけよ」

沙和と雪と紅葉は口々にそう言う。

「ならもう少し後にしようか」

俺はそう言いながら、本陣を離れようとする。

すると霞が俺たちに言うてきた。

「……ええ主やな。あんたらの主は」

「当たり前だ。俺が認めた主だぜ？」

「ハハッ、それもそうやな」

何にしてもこれで大陸の諸侯達を巻き込んだ反董卓連合の戦いは幕を下ろした。

少しばかり代償はあったものの、かけがえのない仲間とのつながりを得た俺たちは自分たちの城に帰ることになった。

城へと変える道中で俺は霞にとあるコトを訊ねた。

「ウチらの仲間に二刀流の武人が居たかて？」

そう。兵士から情報が来た『白と黒の短剣を持つ男』のことだ。

結局そいつと会うことなく戦いが終わってしまったために、情報が何一つないのだ。

「うーん……。そないな奴居らんかったような気がするんやけどなあ……。恋は知っとるか？」

「……（ふるふる）」

霞が恋に訊ねたのだが、どうやら恋も知らなかったようだ。

「まあ、そのうち会うかもしれないな」

俺は空を見上げながら一人そうつぶやくのだった。

「誰に会うかもしれないのだ？」

ゾクッ

とある声を聞いた瞬間に俺の背筋に悪寒が駆け抜けた。

ちよつと待つてくれよ……。せつかくカツコ良く終われそうだったのに、な、なんで奴が!?

そんなコトを思いながら後ろを振り向くと素晴らしい笑顔の秋蘭がいた。

ま、マズいぞ!? あの笑みは不老不死の俺すらも殺しかねないぞ!?

「え、えつと秋蘭さん? 何故にワタクシに殺気を

ヒュンッ!!

殺気をぶつけてるんだ? と言おうとしたのだが、その前に俺の耳元を秋蘭が放った矢が通過した。

や、ヤバいよこの人!? いきなりどうしだの!? 俺なんか悪いことでもしたのか!?

イヤ待て、何もやってないはずだ……。多分。

「龍崎……。話によると呂布の他にも三人ほど女の子を連れ帰って来たらしいのだが、どうなのだ？」

そ、それが――――！――――！？ まさかそれを根に持ってたのか――――！――――！？

「し、仕方ねえだろ、困って」

ヒュンッ！

再び言葉を言い切る前に秋蘭の矢が俺めがけて飛んできた。しかも今回は俺が避けなかったら、確実にグサツと喋ってたぞ！？

「あ、危ないだろ！？」

「安心しろ。華琳さまからは許可を貰っている」

許可ってなんの許可だよ！？ つーか危ないからマジでやめてくれ！？

「夏侯妙才の一撃、とくと味わうが良い！！」

秋蘭はそう言う俺に矢を乱射してきやがった。

こうして一つの運命の歯車は回ることを止め、新たなる運命の歯車が回り始めた……。

第参拾巻話『台所にでるあいつを一匹見たら、あと百匹は居ると思え!』

side 桜牙

反董卓連合の戦いが終わり、俺たちにはつかの間の平和が訪れていた。

小さな問題や書類などをまとめたりしたりする事などはあるが、反董卓連合の戦い以来俺専属のメイドになってくれた月のおかげでかなり癒されてる。

大事なことからもう一度言うが月のおかげで癒されてるんだからな。詠は何だかんだ言って、月が大好きなので俺に癒しなんか与えてくれない。

まあ、俺の身の回りのことをやってくれるだけでも十分に有り難いんだから、文句なんかは言えるはずもない。

それで恋と霞については、とりあえずは実力は噂と反董卓連合の戦いで戦って十分に証明されているので将として居てもらっている。またねねと一応詠も軍師として働いている。

何にしても戦いが終わって見たらいきなり大勢力だな。

そんなコトはさておき、俺は毎朝の鍛錬はよほどのことが無ければサボったりはしない(よほどのこととは、死ぬほど眠かったりするのだが……)。

なので今日も鍛錬をするために朝早くに城の庭に来ると……

「はあああああ！！」

「甘いわッ！！」

紅葉と霞がすでに鍛錬を行っていた。二人はなんだか意気投合して、一気に仲良くなったらしい。最近では街でも二人で歩いているところをたまに見つけたりする。

余談はここまでにするが、紅葉には何かあったんだろうか……。反董卓連合の戦いの前までは大振りの癖が直ってなかったんだが、今霞と戦っている紅葉は大振りをしていない。

そのおかげで霞はかなり慎重に動かなければならなくなっていた。だがそれでも紅葉と霞の力の差は歴然で、まだ紅葉じゃ霞には勝てなさそうだ。

「おおおおおっ！！」

「く……っ」

霞の神速の槍捌きに紅葉は防戦一方になり、反撃が出来ずにいる。

霞はああいうタイプとの戦いを分かっているみたいだな。一撃必殺タイプの相手は、一撃が重すぎるため早く動こうとしてもどうしても動きが鈍くなってしまう。

そこをついて素早い攻撃を繰り返し、相手に反撃の隙を与えないようする。そこで相手がへばってきたところを一気に畳み掛けるっ

つう戦法だ。

紅葉自身もそれに気付いては居るみたいだが、今の技量じゃ分かってても回避する術がない。この勝負、どっちが勝つか決まってるようなもんだな。

そんなコトを思ってるうちに紅葉の一对の棍棒が弾かれ、槍の切っ先を首に突きつけられていた。

「ウチの勝ちやな。どうや桜牙、ウチと手合わせせんか？」

霞は紅葉の首に突きつけていた槍をクルクルっと回した後に肩に担ぎ、俺を挑発するかのような目つきで言ってきた。

「桜牙、弟子の仇は師匠がとるものなんだからしっかりやりなさいよ!？」

紅葉は立ち上がり、腰に手を当てもう片方の腕で指を指しながら言ってきた。よく分からない人は某SOS団の団長が取りそうなポーズを思い浮かべてくれ。

「なんや、桜牙と紅葉って師弟関係やったんか」

「悔しいけど、桜牙は私よりずっと強いから気を抜いてると一瞬で負けるからね!！」

「氣いなんか抜かへん。なんや、恋に勝ったつちゅう話やからな」

まさかもう霞にまで俺が恋に勝ったことが知れ渡ってるとは思わなかった……。

「まあ、一応な。さて、いっちょ派手にやりますか」

俺はそう言うのと白羽黒羽を作り出して、構える。霞は初めて見た俺の魔法具精製術に驚いていたがすぐに構える。

そんな絡繰りなんか考えても仕方がないってばかりの清々しい開き直りだなあ。

「おおおおおつー!!」

そして霞が一気に踏み込んできた。一撃一撃の威力に恋や紅葉ほどの力はないが、代わりに素早さにしてみれば恋を上回っている。

これに反応してた紅葉は鍛錬に付き合ってた甲斐があるってものだ。しっかりと鍛錬の結果が出てるんだからな。

俺はそんなコトを思いながらも白羽黒羽で霞の槍を弾いていく。刃は潰してるってのにお互いの武器がぶつかり合い度に火花が散り、それだけ霞が本気でやっているとというのが分かる。

使っている武器こそ鍛錬用だが、戦いの雰囲気は本気そのものだ。気を抜けば足下をすくわれかねないな。

霞の槍による猛攻が一瞬だったが、遅れるのが見えた。その隙を俺が見逃すはずが泣なく、一気に切り返しさっきの防戦一方から打って変わり俺の猛攻撃が霞を襲う。

「ほら、どうした？俺はまだ本気なんか出してないぜ？」

俺は霞がギリギリ反応できるか出来ないかくらいの速さで白羽黒羽を振るう。霞はそれを苦しそうに防いでいるが、未だに一撃も致命傷になるほどの隙はない。

なるほど。コレなら紅葉にアレだけ楽に勝てるわけだ。

「おおおおおっ！！」

霞は俺の白羽黒羽を目にも留まらないほどの速さで弾き返し、否叩き壊して俺に槍を突き刺そうとしてくる。

いやはや鍛錬用の強度にしたとは言え、本当に壊されるとは思わなかったな、と俺は思いながら半身になり槍を掴む。

そしてそのまま槍と一緒に霞を地面にたたきつける。その後再び創り出した白羽を突きつける。

「俺の勝『うわあああああつ！』……風？」

風がここまでデカイ悲鳴を上げるなんて珍しいこともあるもんだな。

悲鳴を聞いてなぜ俺がここまで落ち着いてるかというと、風が戦いや侵入者如きに悲鳴をあげるはずがない。つまりはこれは別に緊急事態とかでなく、同室の真桜や沙和になんかされたんだろうと考えられる。

紅葉や霞も同じように考えているため落ち着いている。つか霞は腰打って動けないみたいだな、おい。

「紅葉、悪いけど俺は凧達の様子見てくるから霞を医務室に連れてつてくれないか？」

「えー、仕方ないわね。今回だけなんだからね」

「はいはい」

俺は紅葉のツンデレ喋りに苦笑しながらもその場を後にして凧達の部屋に向かう。

そこで凧達の部屋の前にやってきたはいいが、なぜに凧だけじゃなくて真桜や沙和の悲鳴まで聞こえるんだ？　つかドツタンバツタンやりすぎだっつうの。

「なあと愉快に素敵にドツタンバツタン騒いでやがんだ。入るふもっ？」

そう言いながら部屋の中に入ったんだが、なぜか俺の視界がシャツトアウトされた。

おかしいな。息もすげーし辛いし良い匂いもする。極めつけは柔らかい。何だ何です何なんですかこれはア！？

「隊長！？　ちよつどええところって凧なにしとんねん！？」

「隊長！　！！　あれ、を何とかしてほしいの！？」

そんなコトを言われても視界がシャツトアウトされてるんだから、中で何が起こってるかなんか分かるわけがない。

「つーかこの俺に張り付いてるのって凧だったのか。つまりはこの柔らかいのは凧の胸か。隠れ巨乳の称号を与えてやるでしょう。」

「凧！！ 隊長から離れんと、アレ、を何とかしてもらえんわ！？」

「そ、そんなコトを言われても！？」

「凧ちゃんいいから離れる……うひゃあこっちに来たの〜！？」

「うわぁ！？ こっち来た！？」

「すっげー気になる……。この三人（主に凧）がここまでビビるとは、アレ、つてのはホントに何なんだろうか？」

「凧ちゃんそっちに行ったの〜！？」

「えっ！？ く、来るな〜！！」

「うおお〜っ！？ 人にしがみついたままそんなに暴れないでくれえ〜！？ 酔うから！！ 揺られすぎて酔っちゃうからね！？」

「そんなこんなですがみつかれること数分後、俺はようやく凧（の胸）から解放された。」

「ちなみに視界が戻ってから最初に見たのは、三人の下着姿だったりする。」

「んで、騒ぎの原因は何なんだ？」

俺は凧達の部屋にあったイスに座りながら言っただが、三人は落ち着かない様子ですげーソワソワしてた。

「隊長……、アレ、が出たんです」

「そうや。ついに、アレ、が出たんや……」

「でもまさか沙和達の部屋で、アレ、が出るとは思わなかったの」

「……なぜだ。なぜこいつらは、アレ、と呼ぶんだ。、アレ、の正体がスゴく、スゴーーっく気になるのだが……。」

「、アレ、ってなんだ？」

「「「………(サツ)」「」」

「な、なぜだ！？ なぜお前らはそろいもそろって目をそらすんだあ~~~~っ!?!」

『きゃあああっ!?!』

そんなコトを考えていると今度は流琉の叫び声が聞こえてきた。

この声の響き具合からして部屋じゃなくて、厨房あたりだな。

「凧達ならともかく流琉が叫んでると無駄に危険そうな感じするな。アレ、の正体も分かってないしすぐに行くか。」

「行くぞ、凧、真桜、沙和」

「「「遠慮させてもらいます」(の)」「」」

まさかの三位一体のお断り宣言。「アレ」がよほど怖いから動きたくないみたいだ。

そんなコトはどうでもいいからさっさと流琉の床に向かうか。そう思った俺は厨房に向かって走り出した。

厨房に到着しドアを開けると案の定そこには流琉がいた。そこで流琉は俺を見ると飛びつくように抱きついてきた。

「に、兄様！ あ、「アレ」が出たんです！ 助けてください！」

流琉が今にも泣き出しそうな顔で言ってきたのに対してトキメいてしまったのは爺と読者様みんなの秘密だぞ？

「だから「アレ」ってなんだ？」

「く、口に出すのもおぞましいです……」

うーむ、ここまで頑なに言いたくないと言われるとすげー気になるなあ……。

でも「アレ」ん見てビビってるみたいだがホントに何なんだってんだ？

『ひゃあああー！』

「今度はドコだ！？」

今の可愛らしい声は間違いなく月だ。部屋からはあんまりでない

はずだから、部屋にいるはずだな。

そう思った俺は月の部屋に向けて走り出す。

あれ？　なんか今日俺走りっぱなしじゃねえか？

そんなコトを思ってるウチに月の部屋の前に到着。

「月、大丈夫か!？」

「へう……桜牙さあくん……」

「はづっ!？」

目をうるうるさせている月を見たらお持ち帰りいっ!　って叫びたくなる衝動に駆られるのは俺だけじゃないはず!!

だが俺は紳士だ。もはや変態と言つなの紳士になってしまったてるが、今の月をお持ち帰りしたら確実に詠に何か言われそつだ。

「月、何があつたんだ？」

「あ、アレ」が出たんです……」

おおぅ、やっぱりあなたも「アレ」って言うのでございませぬのね……。もうこの際「アレ」をこの目で拝ませてもらつとするしかない。

そう思った俺は月を俺の後ろに隠してから月の部屋の中身を確認める。

女の子らしい部屋だなぁ……じゃなくて、アレの正体を確認するんだろ!? さて、仕切り直して、アレを探させてもらおうか。

そんなコトを考えていると部屋の隅で何かがカサカサと動くのが見えた。

「へう……」

や、ヤバイよコレは……。月がメチャクチャ可愛すぎる……。だけど今の月の反応で、アレの正体が完璧に分かったぞ。

まさか……まさか、アレがこんなところにまで攻め込んでいるとは……。

「緊急事態発生だな……」

そしてそれからすぐに軍議が開かれた。もちろん議題の一番に上がるのはあの事しかない。

「分かっていると思うのだけれど……、アレが出たわ……」

「……………」

そう言った華琳の雰囲気は見たことがないくらい低いものだった。華琳と一緒にいて、あんな表情を見るのは初めてだ。

それに風を始めとして真桜に流琉。さらにはあの秋蘭や恋、紅葉や季衣ですらも滅入っているような表情になっている。

それだけ‘アレ’がスゴいんだろう。これだけのメンツの士気をここまで下げられるのは‘アレ’しかない。

そんなコトを思っていると玉座の間の扉が一気に開け放たれた。そこに立っていたのは真桜だった。

「隊長、用意できたで！！」

「おお！！ さすが真桜だ！！」

俺たちのこんなやりとりを不思議に思ったのか、雪が言ってきた。

「あの、桜牙さん、真桜さん……何が出来たんですか……？」

「天の国にはこういう言葉あった……」

俺がいきなり語り出したのでその場にいた全員いや、真桜以外が不思議そうな表情をする。

ちなみに真桜は絶望に打ちのめされたような表情をしている。

「ゴキ（ピー）を一匹見たら、百匹はいると思えと……！！」

ドドオーン！！ と言う爆発音が俺の後ろで起こりそんなほどの勢いで俺は力一杯叫ぶ。

そしてそれを聞いた全員にはズガアーン！！ と言う雷音が似合

いそうなほどに驚愕する。そのあとはズズーン……と言つ効果音が似合いそうなほどに落ち込んでいた。

「そう言えば、確かに最近は何レ、を見る回数は多くなったよ
うな……」

「秋蘭さまですか……。実はボクもなんです……」

「秋蘭も季衣もか……。実はわたしも……。もう地獄のようだ
……」

戦ではもはや止める者はいないはずの三人もゴキ（ピー）の前で
は為す術がないようだ。

恐るべしゴキ（ピー）の戦闘力……。しかし、俺にはそんなもの
は無意味だ……！

「と言つことで今日は将を総動員してゴキ（ピー）を駆除したい
と思います……！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

案の定やる気のないメンツ。だけどやらなかったらずっとゴキ（
ピー）と暮らすことになるのを分かってるんだらうか？

「いやならゴキ（ピー）と愉快に素敵にイチャイチャラブラブ新
婚生活してもらつから俺は一向に構わないぞー」

俺がそう言つと全員の目つきがズラリと変わった。

唯一玉座の間に残った華琳が秘密兵器を持ちながら俺に訊いてきた。

「これはゴキ（ピー）を倒すための秘密兵器だ」

「ふうん。これが秘密兵……ひっ!？」

おお、華琳がこんな声出すなんて珍しいこともある門だな。しかも俺に抱きついてきてるし、こつ言つとこだけを見れば普通の女の子何だよなあ。

そんなコトを思いながら華琳が怯えてみている方を見る。するとそこには一匹のゴキ（ピー）がいた。

「フフフフ……。我が主を貶めようとした罪、とくと受けるがよい!」

俺はそう言いながらゴキ（ピー）に秘密兵器もとい殺虫剤を吹きかける。するとゴキ（ピー）は虚しく天に召された。

殺虫剤は俺が真桜に作らせたんだが、なかなかの出来上がりだな。

「こんなのが怖いなんて、華琳も可愛いところあるんだな」

「それではいつもは可愛くないように聞こえるのだけれど?」

「そんなコトはない。華琳はいつでも可愛いぞ」

「……／／／／」

隣で華琳が真っ赤になってたのが気になったが、今はゴキ（ピー）
退治に専念しよう。

こうして今日の華琳の城は、魏の将達とゴキ（ピー）（軍団の戦い
の幕を開けたのだった。

今日も魏は平和なのであった。

第参拾弍話 『業炎の剣帝、舞台を用意すること』

side 桜牙

「ねえねえ、まだつかないの？」

「まったく、天和姉さんは少し浮かれすぎよ？」

「ちい姉さんも浮かれてると思う」

はい、皆様おはよう？ こんにちは？ こんばんは？ とりあえず分からないので、おはようございます。龍崎桜牙です。

さて、もうお分かりだと思いますが現在ワタクシは張三姉妹を連れて、とある場所に向かつてる途中です。

「期待はしてるけどね。やっぱり自分たち専用の舞台が出来るなんて聞いたら、浮かれない方が嘘でしょ」

そう。俺はこの張三姉妹にせつつかれ、彼女たちを大々的に売り込むための舞台と、事務所を準備することになったのだ。

なぜ俺がそんなコトをしなければいけないかというと、実は張三姉妹を捕まえた後にパイプ役としてこの三人に付けられてしまったのだ。

不本意ながらも一応お世話係(?)になっちまったので、やることではないかな、と訊ねたところ事務所作れと言われたので作ったのだ。

んでそれがようやく完成したので、三人を連れて行く途中ってコトだ。

「どんなのかな？ 楽しみだね〜」

「広さとか、設備とか、どんなのかな？ せめて曹操さまのお城の半分くらいの広さは欲しいわね」

何つームチャクチャなことを言ってるんだこいつらは……。

「そんなもん無理に決まってるんだろ」

「そうなの？」

天和は不思議そうに首を傾げて俺を見つめてくる。そんな仕草は可愛いんだが、もう少し思考を巡らせるのと、常識的に考えてあんなバカでかい城の半分なんか無理だってコトを理解してくれ……。

「あのねえ、華琳がここを治め始めて治安が良くなってるのは知ってるだろ？」

「それくらい知ってるわよ。……ちいを馬鹿にしてるの？」

「コレを知らないんだったらバカにしてたかもな」

俺が言いたいのは治安が良くなるってコトは、大陸各地からいろいろな人種がやってくることになる。

今は戦乱の世だから治安の良い土地の方が安全に暮らせるだろう

と、かなりの人数がやってくる。ここに引っ越してくる人が増えると、必然的にその分に使う土地も増えてくる。

そうすると用立て出来る土地が減ってくる。まあ、そのせいもある。事務所を造るのに時間が掛かったのもある。

「まあ、場所を確保できたのは良いんだが……見てガツカリするなよ」

「えっ？ どういうコトよ」

「見れば分かるさ。ほら、着いたぞ」

そんな会話をしてる間にやっとこさ事務所にやってきたのだが、そこにあるのはお世辞でも事務所とは言えないような建物。

どっちかって言うと見世物小屋って言った方がしっくり来るような作りだ。

「「……………」」

「……………ふーん」

そんな自分たちの事務所をみた天和と地和は予想通り言葉を失っている。唯一人和だけはメガネをグイッと動かして一言発していた。

そんな二人に俺は追い打ちを掛けるように言う。

「これがお前らの舞台兼事務所だ」

「えーやだやだ！ もつとおっきいのがいい！」

「こんなの舞台だなんて言わないわよ！！」

やはりと言つべきかさつきまで言葉を失っていた天和と地和が文句を言ってきた。

まあ、俺が逆の立場だったとしたら文句を言うような造りだもんなあ……。

そう思った俺はしゃがみこみ、そこらの木の枝を持ちながら言う。

「んじゃ、どんな舞台が良いんだ？」

「もつと跳んだり跳ねたり走り回ったり出来る広さがいいのー！」

「跳んだり跳ねたり走り回ったり出来る広さ……と」

とりあえずこの土地の広さで出来るくらいの絵を描いてみる。

つーかどう頑張ってもこの土地の広さじゃ、あんまり大きくは出れないような……。

「あたしたち三人を舐めてるわけ！？ こんなところで歌わせようなんて、所詮あなたの期待度もその程度ってコトねー！」

期待なんかしてなさそうなんだが、とりあえずこんな小屋を見せつけられたら怒るのは「もつともなので何も言わない。」

「ぎゃあぎゃあ喚くな。ホントはもつとデカいのわ用意したかったが、無理なんだよ」

予算的にもなんにしてもこいつらが望む舞台は、季衣と恋と紅葉の三人の朝昼晩の食事代の何ヶ月分掛かるか分かったもんじゃねえ。

「やーだー！！ こんな狭いところで歌えないー！！」

「ちいも天和姉さんと同意見よ。こんなところで舞台上がるなんて、恥をかくだけよ」

はて困った。歌われないとなると俺が華琳に大目玉を喰らうことになるな。なんせこの三人が歌えば、兵の士気が上がるやら集まってくるやらでかなり良い。

そんな三人が歌われないとなると俺の首が吹っ飛ぶかも……。

「仕方ねえな。どんな舞台がいいか地面に書いて見る。できる限りお前らの望み通りに、創り直す」

「ホント！？」

「ああ、本当だ」

俺がそう言うと、天和と地和が地面に舞台の絵を書き始めた。まあ、創るとしたら予算はかからないから問題は大きさだな。

あんまりデカいのを言われると、それだけはどうにもならないからな。

「まったく、三人をデビューさせないことには始まらないってのに、こんなシヨボいコトで躓くとは……。この先が非常に不安だ。」

「出来た！！」

「えー、お姉ちゃんもつと大きい方がいいよー」

「見せてみる」

と言うことでこれ以上大きくされたらたまつたもんじゃないので、現段階での大きさを確認した。確認したんだが……。こいつらは容赦なさすぎなんだけど……。

「舞台デカくしすぎだろって……。こんな舞台で三人で歌うのかよ。転生前はライブなんか行ったことないから分からないが、コレが普通なのか？」

「まあ、舞台を小さくして望み通りに創れば問題ないだろう。」

「コレぐらいなら創ってやるか。さすがにこんなシヨボい舞台じゃやる気でないからな」

「そうそう」

「分かってるじゃない」

「まったく、創るとなった途端ご機嫌になりやがって現金な奴らだ。」

「そう思いながら地面に舞台を創り出すための魔法陣を描く。」

舞台の形を設定して、あとは白羽黒羽と同じように創れば舞台の魔法具が完成だ。壁も創れんだから、舞台も創れんだろ。

「何する気なの？」

「ああ？ 舞台創るんだが？」

「落書きしてるだけじゃない!!」

おお、そう言えば地和たちには俺の魔法具精製術見せてなかったな。

そう思った俺はすでにいつも常備している手袋に描いてある魔法陣に魔力を流し込み、白羽黒羽を創り出す。

「うわっ!？ なんか出てきた!？」

俺が白羽黒羽を出すと地和がすげー驚いていた。天和も人和も同じように驚いていた。

まあ今更魔力がどうのこうのって説明しても分かんないだろうし、説明はカット。

「今の剣みたいに舞台も創るんだよ。そうすれば金も掛からないし、俺がいれば気に入らないところはいつでも直せるだろ？」

「さっすがね」

「うんうん、これで広い舞台で歌えるね」

と言うことでサクッと終わらせるとしますか。多分これだけの建物を創るんだとしたら、結構魔力使うと思うからな。

そう思った俺は両手をあわせて、手のひらに魔力を集中させる。そして地面に書いた魔法陣に触れようとすると、何故か人和に止められてしまった。

「どうしたんだ？」

「気持ちは有り難いけど、今はコレで十分」

「人和ちゃん!？」

「人和？ ちょっと正気なの？ ちい達の力はこの程度だと思っ
てたの？」

天和と地和は人和の行動にかなり驚いている様子だった。正直俺もこんなことを言い出すなんて思わなかったな。

人和曰わく最初の一步はこの程度の小屋で十分、あとは自分たちの力で稼いで大きくすれば良いだけのことだった。

「そりゃそうだけど……」

「姉さんたちは私たちにその力はない、って思ってるの？」

そう言った人和の目が光ったような気がするのはい気のせいだろうか。

「そうだよね！ こんなボロ小屋、わたしたちが稼いで大きくす

れば良いんだもんね！」

どうやら天和も人和の言葉に納得したようで、笑顔になっていた。

にしてもこの二人の姉にしてこの妹ってどっちが姉か妹か分からないな。

「いやまあそうだけどさ……。なんかみくびられてるみたいでやだなあ……」

「見くびられていると思うなら、後で吠え面かせてあげればいいのよ」

人和はそう言うと、小屋に荷物を下ろして設備の確認をし始めた。

なんだかんだ言って地和も納得してくれたようで、人和と同じように小屋に荷物を下ろしていた。

にしても人和の言葉でこうも話があっさり進んでしまうとは……
人和、恐ろしい子!?

「それにしても……ほんと、こんなところにみんな来てくれるのかなあ？」

「来てくれるじゃなくて、来させるのが天和姉さんたちの仕事でしょう」

人和は設備の点検をしながらわき目もふらずに天和の呟きに答えていた。

「そーそー！　ちーちゃんの魅力に掛かれば一発コロリでしょ
どういう意味で一発コロリやる気だロリツ子地和よ……。何にし
てもやる気を出してもらったのは非常に助かった。

「宣伝の方は俺も手伝わせてもらうよ」

「……じゃあこれ」

人目が目をキラんと輝かせたかと思うと、俺に一枚の紙を突きつ
けてきた。

少しばかり嫌な予感がするんだが、どうか当たりませんように…
…。

そんなコトを思いながらその紙筒を開けるとそれは宣伝に使った
瓦版屋の請求書だった……。しかも金額がとんでもないことになっ
ていた。

例えるならば軍馬が百頭買えるくらいの金額がそこに記載されて
いた……。

「まさかとは思いが城で払えと……？」

「そうよ。必要経費なんだから、城で払ってくれるんでしょう？」

しれっとそんなコトを言ってくる人知。

この金があれば季衣と恋と紅葉の食事代がどれくらい楽になると
思ってたんだよ……。

「こんなに作ってどうするつもりだ畜生」

「こつというのは、最初に大きく風呂敷を広げる方が効果があるの」

確かにこんな小さな小屋から始める以上チラシを大量に配って人を呼ぶ以外には一気に知名度を上げる方法はないのは分かる。

地味な活動を続けてたとしても、効果が出るのは遅くなってしまふのも分かる。だからってこれだけの金を下ろせるかとなるかが難しいところだ。

「下ろせるかねえ……。すげー不安だ」

「それを説得するのがあなたの仕事でしょ？」

「歌うのはちい達の仕事。これくらい簡単な話よね？」

まあ、確かに歌うのは張三姉妹の仕事だろうな。

「別に歌なら俺も歌えるんだがな……」

「へえ、なら歌ってみてよ」

俺がそうつぶやくと地和が何故か挑発的な目で、俺に言ってきた。あたかもちい達には勝てないでしょ、と言わんばかりの目だ。

確かに張三姉妹の歌は聞いたことはあるが、挑戦されたら受けるのが男つてもものだろう。

「なら歌ってやるよ。腰抜かすんじゃないぞ?」

俺も挑発的な態度で地和に向かって言う。すると地和が鼻で笑って来やがった。

くそう、絶対え驚かせて拍手させてやるうじゃねえか!!

そう思った俺は舞台上がり歌う準備をする。俺が準備すると、三人も舞台に居る俺を見る。

さすが歌手と言うべきか、歌い手を見るときの目は武人が武人を見るかのような目だ。ちよっと違うけど……。

そして俺はギターを創り出して一応演奏を加えながら歌い始めた。

~~~~~

side 紅葉

あー、警備の仕事ってなんでこんなに疲れるのかしら……。

そんなコトを思いながら私は凧と一緒に街の警備に励んでるわ。凧は真面目の塊みたいだからサボることなんか出来ないし、口数も少ないから話しても何となく物足りないのよね……。

からかったりすると反応がスゴい面白かったりするんだけど、警備の途中でそんなコトをやると凧が本気でキれるからダメなのよね……。

「ねえ風……。もうお昼じゃない？ 休憩しようよ……」

「いや、あともう少しだからそれまで我慢してくれ」

「そ、そんなぁ……」

も、もうお腹空いて警備なんかやってられないわよ……。

そんなコトを思っているとドコからか歌声が聞こえてきた。それに街の人がドコカに向かって行っているし、何かあったのかな？

「風、歌声聞こえた？」

「確かに聞こえたが、ドコでやってるんだ？」

「分かんないけど、みんなが言っている方向に行けば間違いないわ！ 私たちも行くわよ！！」

「ちよっ、紅葉！？」

私は風が何か言っていたけど、それを無視して歌声が聞こえる方に走っていった。それで歌声が聞こえた場所に来ると、すごい人集りがあった。

もしかしてコレ全員が歌を聞きにきたってコト？

私はそんなコトを思いながら人集りを掻き分けて一番前までいく。するとそこでは桜牙が歌を歌っていた。



~~~~~

そこで歌っていた桜牙はいつもの戦ってる時のような美しさではなく、ほかの美しさがあった。

それが何か分からないけど、確かに私は思った。

~~~~~

隣で桜牙の歌を聴いている凧も同じように思っているのか、黙って桜牙を見つめてる。

すると不意に桜牙と凧が目があつて、桜牙が笑いかけてくれたよ  
うな気がした。

それを見た凧はいきなり顔が真っ赤になって、うつむいていた。

~~~~~

もう少しで終わってしまう……。桜牙の歌が終わってしまう。

そう思うと何故か私は名残惜しい気持ちになつてしまった。

~~~~~

初めて訊いた言葉とかがたくさんあつたけど、とにかくスゴかつた……。

そして歌を歌い終えた桜牙はみんなに言った。

「前菜は終わりだ！！ こっからが本番！！ 数え役満 姉妹の登場だぁーっ！！」

桜牙がそう言うと張三姉妹が出てきて歌を歌い始めた。

ほかのみんなはスゴく盛り上がってたけど、私は桜牙の歌の方が良いと思った……。

side 桜牙

いやぁ、まさかチラシを配る前にこんなに人が来てくれて助かったぜ。

なんか俺が張三姉妹のために歌ってたらしいの間にか人が集まってたから、ついでに宣伝の意味を込めて張三姉妹に歌わせたが大成功だった。

しかも俺が歌ってるときに紅葉と凧が来てたしな。何にしてもチラシ代が浮いたし、助かったってところだろうな。

そんなコトを思っていると、舞台裏に下がった俺のところに紅葉と凧がやってきた。

「おお、お前らか。どうだった？ 俺の歌は」

「上手かったですー！！」

「桜牙って何でも出来るのね」

まあ、バグキャラですから。歌ぐらいどつってことねえってわけよ。

そんなコトを思っていると今度はライブを終えた張三姉妹がやってきた。

「よお、大成功みたいだな」

「当然！ ちに掛ければこんなもんよ！（桜牙も格好良かったけど……）」

「えっ？ なんか言ったか？」

「な、なんでもない！！」

まあ、なんでもないんだったら良いんだけどね。

何にしてもホントに大成功だったみたいで、みんなでキヤツキヤツと騒ぎ合っている。女の子がじゃれついた姿、福眼福眼……。

「さて、大成功を祝って打ち上げでもやるか」

「やったー！！」

「さっすが桜牙！ 話が分かる！！」

さっきまで疲れてた奴らがいきなり元気になっちゃって、現金な奴らだな。

そんなコトを思いながら紅葉と凧も加えた六人で打ち上げをやった。

余談にはなるが、そのあとに匂いを嗅ぎつけた季衣と恋の参加により俺の財布が撃沈したのは言うまでもない……。

第参拾参話 『業炎の剣帝、アルのようになるの』

side 桜牙

「雪！！ そっち行つたぞ！！」

「ひっ！？」

「避けてどうすんだよ！？ つーかお前えらももうちょい粘れ！！」

現在、俺は雪と新規兵を連れて警備に出ていたのだが、そこでゴロツキが出たが現れたので実際に捕まえさせた方が良いと思いゴロツキを捕まえさせようとしてたんだが、どうにも捕まらない。

雪に至つては危ないから隠れてろつて言ったのに自分からやると言い出したのだが、ゴロツキの見幕に圧されて気絶しちまった。

新規兵の奴らも全然ダメダメで抜かれっぱなしだ。

はぁ……。やれやれ、実際にやってこれじゃあまだ鍛錬が足りてないって証拠だな。しかも何回抜かれてんだつっつの。

そんなコトを思いながらゴロツキを捕まえようと瞬動で近づこうとした瞬間、ゴロツキが誰かに打たれ痛み能耐えかねて地面に転がっていた。

「春蘭か」

そう。ゴロツキを撃退したのは何を隠そう春蘭だった。

手には新規兵から借りたのかは分らんが、警備用の棒が握られている。

「春蘭か、ではない。貴様がついていながら何をやっているのだ。これぐらいワケないだろう」

「まあな。だが俺がちゃちゃっと捕まえたら、ほかの兵士は俺と居れば問題ないと思っちまつたら？」

「むう、確かにそうだな」

春蘭はなるほどと言った感じで頷きながら言う。

とりあえず兵士たちにゴロツキを縛り上げ運ぶのと、雪を城に連れて行くようにと指示した。

「で、どうしたんだ。春蘭が街に来るなんて珍しいこともあるんだな」

「珍しくは悪かったな。私が買い物に来るのがそんなに不満か？」

「買い物、ねえ……」

以前は春蘭と秋蘭に華琳の服選びに付き合わされたが、今回は自分の買い物みただな。

うん。ますます珍しいこともあるんだな。

「何だその含み音ある言い方は。私が買い物に来るのがよっぽど不満なようだな」

「んなこと思ってないし、変な解釈をするな。俺はただ何か探し物なら案内できるかと思ったただけだ」

口から出任せににしてはなかなか上手いことを言えたような気がするなあ。

「そうか。ならば案内を頼む」

「了解、お姫様」

「何を言っているのだ……」

そんな呆れたような目で見られても困るんですけど……。

「まあいいや。今日は何を買いに来たんだ？　また華琳の服か？」

「いや、今回はわたしの下着だ」

「はいはい下着ね。………下着！？」

「そうだ何か問題あるか？」

問題があるかないかと訊かれたら問題はないが、そんな堂々と言われてもな……。

まあ、下着屋やらなんやらも街の内部はだいたい把握してるし問題ないだろう。

「下着屋だろ。さっさと行くぞ」

「ああ」

と言うことで俺たちは下着屋に向けて移動を始めた。

「ほら、着いたぞ」

「ここはダメだ」

「何でだ？」

「前に来たことがあるが、半裸の筋肉達磨が踊りながら接客に出てきて、思わず叩き斬りそうになったぞ」

「あー、そんな気持ち悪いのが出てきたら斬りそうになる気持ちは痛いほどよくわかるぞ。」

「だが悪い奴ではないだろうな。そんな気持ち悪い格好で接客をやるうとするくらいだからな。」

「ただ変態だと言うことは話を聞いた奴なら誰でも分かるだろう。」

「仕方ない。次の場所に行くか」



と言うことで俺たちは次の店に向かっていた。

「ここなんてどうだ？」

「ここもダメだ。この店員は私が何を着てもお似合いですよ、としか言わんのだ」

本当に似合ってたんじゃないだろうか？ 春蘭は性格はともかくスタイルと顔は十分に最上位だ。

だから本当に似合ってたんじゃないだろうかと思っただが、どうやら話を聞く限りそうじゃないらしい。

春蘭が元から着ていた下着を着て出てお似合いですよとしか言わなかったそうだ。それを言われたら確かに微妙だよな。

「ともかく次だ、次に案内してくれ」

「了解」

「ここなんてどうだ？」

「ここもダメだ。この生地は妙に固くて私の肌には合わん」

まったく、連れてつても連れてつても反論しやがって。つーか何だかんだ言っているんな店に行ってるんだなあ……。

「じゃあ春蘭はどう言った奴が良いんだ？ 具体的に言ってくれれば何とかなるかもしれないぞ」

「うむ、何でも良い」

……なんて夕子の悪い何でもいいなんだ……。

こだわりなんないのに何となく嫌だっけって言うのは分からなくもないが、下着に何故そこまで拘るんだか……。

「ともかく次だ、次!!」

「ここでダメなら知らんぞ。そしたら俺は帰るからな」

「……うむ」

「ここに来たことがあるのか？」

「いや、無い……」

なんだか歯切れが悪いみたいなんだが、どうしたんだろうっねえ

まあ、考えても仕方ないだろうっしさっさと中にはいるか。

「ほら行くぞ」

「あ、ああ……」

と言うことで俺たちは中に入っていったんだが、見事に下着屋だ  
なってワケでもなく服もなかにたくさん置いてあった。

だがそれでもメインは下着みたいなんだけどな。

「いらっしやいませ。あつ、龍崎様に夏候惇さま。今日はどうい  
ったお探し物ですか？」

そんなコトを思っていると、店の店員が話しかけてきた。

「彼女が下着を新調したいと言うもんだからな。良さそうなもの  
を見てあげてくれ」

俺が店員に向かってそう言うと、春蘭が何故か俺に言ってきた。

「龍崎！ 何を勝手に話を進めているのだ！！」

「んなこと言われても春蘭に似合うのが何か分からねえし」

と言うか下着なんか自分で選んでくれ。俺に選ばされても困る。

それだったら店員の人に任せた方が何倍もいいだろ。

「あらあら、それでは彼氏が喜ぶとっておきの下着を……」

「ちよつと待て！ どこの誰が彼氏などと！」

どういふ風に解釈すれば俺と春蘭が恋人同士に見えるんだか……。  
まあ間違えられたとしても悪い気はしないけどな。

そんなコトを思ってるウチに春蘭は店員A、B、Cとワイワイガヤガヤ話し始めていた。

しかも紐下着やら透けすぎてる下着やらがあった。

「つーかホントに透けてんな。どうやって作ってんの？」

「うふふ。だから秘伝の織り方です。織工の秘中の秘……ですわ」

「なるほど……。奥が深いな、下着道……」

この世界でフリルやら何やらがある時点で不思議に思ってた仕方がなかったが、また一つ世界の謎が解けたような気がするな。

職人の秘伝の技よ、恐ろしいな。

そんなコトを思っているウチに春蘭は未だに店員と騒いでる。

「お止めなさい！」

すると不意にそんな声が聞こえてきた。その声に春蘭や店員だけでなく、他の客たちまで動きを止めてしまった。

その声に対して振り向くとそこには華琳と秋蘭、あと何故か紅葉もいた。

「まったく、ドコの田舎者が騒いでいるのかと思えば……。呆れともものも言えないわ」

「か、華琳さま!？」

春蘭も華琳の存在に気付いたようで驚いていたんだが、俺はそれどころじゃない。

こっちは秋蘭と紅葉が鬼神も恐れをなして逃げるほどの殺気を身体中にバンバン受けてんだよ。

「桜牙。今日は仕事だと言ってなかった？」

「まあ色々ありました……」

「まあいいわ。それは後できつちり報告するよつに……。で、なに？ 仕事を放り出して、春蘭と買い物？ 隅に置けないわね」

ふおっ!？ ただでさえ殺気がヤバいのに上乗せしないでくれ!？

「だから色々あります」

「まあ、何となく予想はつくが……（納得はいかぬが……）」

ゴメン。なんかそこまで羨ましそうな顔されると、かわいそうになっってくるから止めて……。

「だろう。あろうことかこの馬鹿者が、店員にこんな下着を薦めさせようとするのだ!！」

そう言って春蘭はさっきの紐下着やら、すでにつけてないのと一緒な下着を華琳達に見せつけていた。

ってそれは俺が選んだワケじゃねえだろ!? つーかそんな下着を誰がお勧めするかつつうの!?

「……………」

「悪いが勧めてないからね? そんな下『こんのエロバカ師匠がアーっ!!』まろんぼ!?’

「あれ?’

そんなコトを言ってるウチに紅葉が俺の顔面を蹴りつけてきた。しかも動揺しすぎて避けきれずにぶっ飛んでしまった。

しかもそれを見た華琳達も驚いてるし、蹴った本人である紅葉まで驚いてるし……。つーか久しぶりに痛いんだけど……。

「お、桜牙!? ちょっと大丈夫!?’

そんなコトを思っていると紅葉が駆け寄ってきた。

紅葉にしては珍しくバツが悪そうな表情をしてる。さらには華琳や秋蘭達までもが集まってきた。

「桜牙、大丈夫?’

そう言っつて俺の顔をのぞき込んできた華琳にドキツとしてしまったのは内緒にしておこう。華琳のこんな心配そうにしてくれる表情は、俺相手にだったらめったに見れるもんじゃないからな。

そんなコトを思っていると紅葉が何かを閃いたのか、言ってきた。

「私たちはあっちで春蘭の下着見よ、秋蘭！」

「む、私は『いいから、早く来る』仕方ない。行こうか姉者」

「あ、ああ」

なんか紅葉が春蘭と秋蘭連れてって華琳と二人つきりなっちまったんだが、俺にどうしろと言うんだ？

「では桜牙はしっかり私の相手をなさい。分かったわね？」

華琳はそう言って俺に手を伸ばしてきた。

その手を俺は掴み惨めに転んでた状態から立ち上がる。

にしても霸王って言ってもやっぱり女の子なんだな。武器を扱う手だつてのに、細くて小さい。可愛い女の子の手だ。

「いつまで私の手を握ってるつもりかしら？」

「ん？ ああ、悪い悪い」

俺がそう言うと華琳はムスツとしたような表情になったんだが、俺が何したってんだよ。

そんなコトを思いつつ華琳と一緒に服選びをすることにした。

そんで来たのは華琳も下着選びの最中だったらしく、店の一角に

は華琳が選んだらしき下着がズラリと並べられていた。

「まさかとは思うがコレ全部買うのか？」

「するワケないでしょう。ここから必要な数に絞るのよ」

「参考程度に訊くがどうやってだ？」

俺がそう訊ねると華琳の表情に笑みがこぼれた。

「本当は秋蘭に選んでもらおうと思ってたのだけれど……」

「今は俺しか居ないから……」

「察しが良い子は嫌いじゃないわよ？ 桜牙」

そのからかう気満々の笑みはやはり俺に選ばせる気だったのか。

だが華琳よ、お主はまだ分かっていないようだな。

もはや俺は以前の俺ではないのだ。華琳に似合う下着を是非とも  
選ばせてもらおうか……フフフフフフ……。

「これはどう？」

まず華琳が取り上げたのはシンプルなデザインの下着だった。そ  
れを胸元にそっと押し当てながら俺に問いかけてくる。

「ふむ、それも似合ってるな……」

お世辞ではなくこれは本心だ。と言つか華琳に似合わなそうな  
下着ってのはあるんだろうか。





何故か顔を赤くした華琳は今押し当てていた下着を俺に無造作に渡してくる。

なんで赤くなってるんだろうと思ったが、その前に華琳が何か思いついたのかニヤリとしながら言ってきた。

「それはそうよね。さっきまで私が着ていた下着だもの」

「な、なぬ!？」

どうやら赤くなるのは今度はこっちの番だったらしい。

さすがにさっきまで着ていたものを渡されれば、態勢がついた俺でも恥ずかしくなるものさ。

「ふふっ、まだ暖かいでしょう?」

そう言う華琳が何故か不意にエロチックに見えてくる……。

くっ、俺はそんなものに屈したりしないぜ!!

「……冗談よ」

「心臓に悪い冗談はやめてください」

「あら。それはどっいう意味かしら?」

してやったとばかりに満足に笑いやがって畜生。こっちは無駄にドキマギしてしまったではないか……。

「ほら。次を渡しなさいな、早く」

「へいへい」

間違いない。こいつは俺で遊ぶ気なんだな。

だったらこっちが真面目に華琳が恥ずかしがるような誉め方をし  
てやるうじゃねえか。

「これはどう?」

次に華琳が選んだのはさっきの黒とは対照的な白系の下着だった。

「さっきの色っぽい黒系の下着も似合いましたが、こちらの白の  
清纯系の下着も貴女にはお似合いですよ?」

俺はアルのような口調で華琳に言う。もちろんアルの嫌みつたら  
しいスマイルも忘れずにだ。

「……………っ／／／／／」

すると誉められすぎたのか華琳の顔はゆでだこみたいに真っ赤に  
なった。

フフフフ……………貴女をいじるのも悪くありませんね。では、もう少  
し楽しませてもらいましょうか……………フフフフフフフフ……………。

俺はアルのようなコトを考えながら華琳を誉めまくるのであった。

あつ、似合わないのはちゃんと似合わない言っただけだな。

「……………／／／／／／」

店を出たつのに華琳の顔は相変わらず真っ赤のままだ。フッフッフ、俺で遊ぼうなんてのは二百年早いんだつつつの。

「いかがでしたか？ 華琳さま。参考にはなりましたか？」

「下着選びや服選びにはアナタを誘わないことにするわ……………／／／／／／」

「おやおや、残念。振られてしまいましたね」

俺はアルの嫌みったらしいスマイルを浮かべたままに言う。

「だけどいつまで経っても顔赤いんだけど？ しかも俺のことチラチラ見てくるんだけど？」

そんなコトを思っていると紅葉、春蘭、秋蘭トリオも店の中から出てきた。

そんで春蘭が顔を赤くしてる華琳を見た途端に言っってきた。

「貴様！ 華琳さまに何をした！」

「いえいえ、何もしていませんよ？ ただ下着を選んでいただけです」

「な、なんなのだ？ その話し方は？」

おっと。長いことアルみたいに話してたから癖みたいになっ  
てたみたいだな。

「で、春蘭は買えたのか？ いろいろ理想が高いみたいだが」

「もちろんだ。三枚一組の『……秋蘭、紅葉？』……？」

いつの間にか復活した華琳が春蘭の言葉を遮り、秋蘭と紅葉に問  
いかけていた。

「全身全霊をもって阻止いたしました」

「さすがに、ねえ」

「結構」

うん。確かに三枚一組つてのはいただけねえな、いただけねえよ。

選べたとか言ってたが大方秋蘭と紅葉が選んでやったんだろうな。

すると華琳が再び何かを閃いたように春蘭に向かって言った。

「春蘭、今度は桜牙に選んでもらいなさい」

「おや？ よろしいのですかな？」

はい。再びアルモード。華琳め、分かって言ってるんだな。

アルモードになった俺は誉めて誉めて誉めまくる恥ずかしいモードなのだ。それがドコだろうと関係ない。だって恥ずかしいのは相手だからー！

「ええ、構わないわ。ではもう一件行きましょう」

と言うことで今日はもう一件行くらしい。

フフフフフフフ……、どうやって誉めてあげましょうかね……。

そう思いながら俺はこの日は華琳たちと買い物を楽しんだのであった。

第参拾四話『業炎の剣帝、酒盛りを共にすること』

side 桜牙

ぐうぐゆるるるる……。。

どうも、最近は何かと平和ボケしてきている龍崎桜牙です。ホント最近は何となく平和すぎて、書類仕事をサボりすぎて桂花にこっそり絞られてきました……。

まあ半分くらいが俺に対する愚痴だったことはこの際気にしないでいい。それで桂花にこっそり絞られたあとに、サボった分の仕事が増し付けられ朝からやってまだ半分しか終わってません。

しかも午後からは警邏の仕事もあるし……。はあ……。憂鬱な気分になってくるな、畜生。

とりあえず腹の虫が鳴いているため、俺は街にでも飯を食べに行こうかと思う。ここで恋や季衣、紅葉に見つかったりしたら間違いなく飯代が持つて行かれて、俺が食えるだけの金は残らないだろう。

ふっ、サラリーマンってのは頑張ってるんだぜ？

そんなコトはさておき、さっきも言った三人に見つかからないように庭を横切りショートカットする事にした。ここを通ればかなりの近道になるし、暴食の三人に見つかからない確率が上がるからな。

「……がー……」

そんなコトを思っていると誰かに呼ばれたような気がした。

うん？　もしかして幻聴でも聞いてしまったのか？

そんなコトを思いながら足を止め周囲を見渡して声の主を捜す。

「桜牙、こっちやこっち！」

その声に反応してその声の方を見ると、少し離れた芝生の一角に植え付けられた木にもたれ掛かり、昼間ってのにも関わらず酒を飲んでる霞の姿が目に入った。

このまま立ち去っても良いんだが、どことなく無視するのは気分が悪かったので、俺は霞の方に歩み寄っていった。

「やっと気いついてくれたか〜」

俺が霞の前まで来ると霞は酒をグイッと呑みながら俺に言った。

「昼間っから酒盛りして何やってんだよ。見つかったら怒られるぞ」

別に怒りそうな奴はいないとは思っけどな。

「へへーん、羨ましいかー？」

そう言って霞は手にした盃を揺らして見せつけてきた。



「ウチわなー、今日非番やねんよー」

「羨ましい限りだな」

「ふふーん　せやろ？」

霞は自慢げに言うのと再び盃に入れた酒を見せつけるかのように一  
気に飲み干す。

「おてんとさんの下で飲むお酒は、また格別やな！」

「気持ちいいくらい美味そうに飲むな、霞は」

「せやろ？　どや、桜牙も飲むか？」

そうやって霞は再びこぼれそうになるくらいに入れた盃を近づけ  
てきた。

「今から飯を食いに行くところだ。それに仕事も残ってるしなあ」

もし仕事がなかったら一緒に飲むところだったんだが、こつてり  
絞られたあとにサボるのはさすがにマズいからな。

「メシ？　メシなら侍女さんに言うて、ココに持ってきてもらた  
らええやん」

「むー、確かにそれも一理あるな」

べ、別に酒を飲みたいからとかじゃないんだからね！！　こつち  
の方が良いと思ったただけなんだからね！！

「せやろ、せやろ。おーい侍女たーん！」

霞は俺がそう言ったのを確認すると近くに控えていた侍女の子を呼ぶと、手慣れた様子で料理や酒を頼んでいく。

「つーかこの手慣れた感じからして、非番の時だけじゃなくて、仕事がある日もやってる口だな……。別にやって悪いとは言わないけどな。」

「悪いが俺にも一つ盃頼めるか？」

「は、はい！ もちろんです！／＼／＼／＼／」

「ありがとう」

「／＼／＼／＼／」

俺が笑顔で礼を言うと侍女が顔を真っ赤にしてたんだがどうしてだ……。つーかなんか俺がこつという風になると、結構な割合でこつなるのは何故だ？

「桜牙も罪作りなやつぢやな」

「ああ？ どういうコトだ？」

俺がそう言うと霞は何故か呆れたような顔をしながら言ってきた。

「天然鈍感やったんやな……。まあ、ええわ。ほれ、早よ座りんしゃい。」「おいでー、」「」

霞はすでに酔っているのかうつすらと頬を赤くし、いつにも増して上機嫌なようだった。しかも鼻歌なんかを歌いながら自分の正面を指す。

「…。つーかがキじゃねえんだからそんな扱いをされても困るんだが…。

とは言わずに言われたとおりに目の前に座る。酔っ払いの相手は素直にしておけ、ってな。

「それじゃあ、お邪魔させてもらうよ」

俺はそう言いながら腰を下ろすと何故か霞は目を細め嬉しそうに笑った。そして、まだ酒の残る自分の盃の口縁を指で拭くと俺に差し出してきた。

「ほれ、飲みい。美味しいでえ」

「いや、それ霞のдар？俺のを持ってきてくれるはずだからいいよ」

「なんや桜牙。ウチが酌んだお酒を飲めないっちゆうんか？」

そう言って凄んでくる霞。はあ……やっぱり酔っ払いを相手にするには素直に、ってか。

「いえいえ、飲ませてもらいますとも。霞さんが注いでくれたお酒ですからね」

「せやせや！ 一気に行きや！」

テンションが高い霞に苦笑しながら俺は盃を受け取る。

朱色の盃の中には濃い琥珀色の酒が半分くらい残っていた。

「んぐっ、んぐっ……ぷはぁ。あー、美味しい！」

酒を飲んだときには少しの酸味の後に、まるやかな甘さが口の中に広がった。

そう言えば酒なんか飲んだのはいつ以来だったかな？ この世界に来る前だからかなり前になるな。

「おーっ！！ さすがに天の人間は飲みっぷりがちやうな！」

「ハッハッハ、誉めても何にも出ないぞー。ところで何の酒なんだ？」

「ん？ 桜牙は老酒飲んだことないんか？」

老酒か……。確か蒸した餅米に小麦麵を混ぜてどうたらこうたらして作る米の酒……。だったかな？

「酒はあんまり飲まないからな。初めて飲んだな」

俺がそう言うと霞は驚いたような表情になりながら、力説し始めた。

「あつかんでえ〜！ この世界におって老酒飲んだことないとか……人生の半分、いや、人生丸ごと損しとるで！！！」

酒の一杯や二杯で人生なんか左右されないつつうの。それに不老不死だから人生の半分なんてのは無いんだよ、俺は。

「霞はこの酒好きなのか？ ずいぶん美味そうに飲むしな」

「好き好き、めーっちゃ好き！ さっぱりしてんのにコクと深みがあつて……香りもええし、滅茶苦茶おいしいもん！ 最高やな！」

「美味しいのは分かるが、コクとか分かるのか？」

「うーん、さあ？」

おいおい、適当に言っただけかよ。だけど確かに霞がここまでハマル味つてのは理解できるな。

「同じ原料が元でも日本酒とは味が全然違うな」

「にほんしゅ？ なにそれ」

「日本酒つてのは俺が住んでた世界の酒だ。原料は老酒と同じ米だ。結構美味いんだ、霞も飲んだとしたら気に入ると思う」

「へえ、桜牙の世界のお酒か……。せやったら、絶対いつか飲ませてや？ 約束やで！」

俺は思わず霞の言葉に面食らってしまう。今の俺にとって『いつか』とはかなり重い言葉だ。

この世界で俺がこの先どうなるか分からないし、もしかしたら……

……。だがそれだったとしても大切な人たちは必ず守る……。

「急に黙り込んだりしてどないしたんや？」

そんなコトを思っていると霞が俺の顔をのぞき込むように言ってきた。

「いや、なんでもないさ。じゃあ、約束だな」

俺は盃を半分だけ開けて、さっきの霞と同じように盃の俺が口を付けた縁を指先で拭く。

「ほら、霞も飲んで飲んで」

「お、なんや。誓いの盃か？」

「ああ。そんなもんさ。霞が言う『いつか』が来るようにな」

「へへへ、粹なことしてくれるやんか。有り難くいただくわ」

霞はにっこりと笑顔を見せてくれると盃を俺から受け取り、一気に酒を飲み干した。

「ぶはあ〜……。おし、これで約束完了や」

「ああ、契約完了だ」

ドクン

俺が霞のために戦うって言う契約だな。

ドクン

俺はこの先にどんな未来が待ち受けてようとも、戦いを生き抜いて霞に酒を飲ましてやる。

ドクン

しょうもない契約かもしれないけど、それでも俺は彼女のために戦う……。

「よし、飲め飲め！ 俺が注いじゃうぞ！」

俺が笑みを見せながら徳利の注ぎ口を向けると、霞は嬉々として盃を差し出してきた。

こうして俺たちはしばらく一つの盃で飲み合っていた。

それからしばらくすると先ほどの侍女の子と数人の侍女と一緒に料理が盛られた皿を運んできた。

「っ！ 分量がとんでもなく多いんですけど……。」

「わー、めっちゃ美味しそうや！ 食べよ食べよ！」

「そうだな。冷めないうちに食べるか」

持ってきてもらった料理はカラッと上がったぶりぷりの大海老に、甘辛いトマト色のソースが絡められたエビチリ。さらにたっぷり野菜のピーマンの赤と緑の色がまぶしい八宝菜。

そのほかにも美味そうな料理がズラリと並べられていた。ただ量が多いのだが、二人居るならコレぐらいが妥当かな。

「あーんて食べさせたるか？ あーん」

「いや、一人で食えるから」

俺は霞のあーん攻撃を冷静に避けながら、料理を次々に口に運ぶ。

「早く食わないと全部食っちまうぞ？」

「それはあかんわ！ ウチも食べるわ！」

俺がそう言うと霞は急いで料理を食べ始めた。

食べた後の霞の顔はよほど美味かったのかトロンとしてきていた。

俺は霞が美味そうに食べてるのを見ながら、侍女の子が持ってきてくれた盃で酒を飲む。

「お前、飲むの早くないか？」

俺は不意にそう言ってしまった。

だって酒しか飲んでない俺より、酒を飲むペースが早いし、しかも俺が来る前から飲んでたのにも関わらずでにかなりの量を飲んでるからな。

「何ゆうてんのよ。こんなん抑えてる方やで」



「……際ですか」

「あつたり前やか〜。どうや？ ウチと飲み比べしてみるか？」  
にんまりと笑いながら霞は俺に言ってくる。

「遠慮させてもらうよ。俺じゃ霞には勝てないからな」

正直言つと勝てないこともないのだが、あんまり酒を飲み過ぎて酔つと、‘禁断症状’が出るからな。

もし今霞と飲み比べして禁断症状が出ちまったら取り返しのつかないことになつちまうつつの。

「桜牙様とあろう方が女の子の挑戦から逃げるんですかあ〜？」

「……お前、結構酔ってるだろ？ 大丈夫か？」

「ちよつと桜牙…アンタ…ウチの酒が飲めへんっちゆうんか！  
？」

またこのパターンですか。酔つ払いの酒を断るな、つてな。

「是非ともいただくよ」

とりあえず凄んでくる霞に従つて俺は盃を差し出す。

すると霞は満足げに笑いながら酒を注いできた。

「ほれ一気！ 一気！ 一気！」

ドコの宴会のオッサンだよ……俺はそう思いながらも酒を注がれたら飲み、注がれたら飲んでいった。

「そろそろ終いだな」

あれから何杯飲んだかは分からないが、これ以上飲んだら完璧酔って禁断症状が出てしまうと思ったので、ストップを掛ける。

「なんやなんや、だらしないのう」

「酔っぱらったまま警邏なんか出来ないだろ？」

俺は尤もらしい言い訳を言いながら、霞が背もたれ代わりにしている木に俺も寄りかかる。

わずかに足取りもふらついてるし、ちょっと酔っぱらっちゃったみたいだな。

それに対して霞はまだまだ酔っぱらってないらしく、まだまだ飲めそうだった。現に今も一息に酒を飲んでいる。

「……なあ、桜牙」

「ん？ どうしたんだ、霞」

心地よい風を感じながら休んでいると、霞が不意に真面目そうな

声になった。

「……あのな、桜牙はなんで戦うん？」

「いきなりだな。そう言う霞はどうなんだ？」

「ウチか、ウチは強い奴と戦いたいからや」

霞は言った。剣には心が現れると。

刃に乗っている心を打ち合わせるにより、言葉で語るよりも  
たくさんのことが分かる気がする。

それは心を通わせるために、言葉を交わす以上に大切な意味が込  
められている。

「それで桜牙はなんで戦うん？」

「そうだな。……護るため、かな？」

「なんやそれ？」

霞が若干不思議そうな表情をしながら俺に訊ねてきた。

「なんか嫌なんだよな。手を伸ばせば届くのに伸ばさない、な  
んてのはな」

これは前にも紅葉にも言ったことだ。

俺がそう言うと霞は何かを考えるかのように黙り込んでしまった。

俺は霞が次の言葉を発するまでに再び風を感じながら待つ。

「せやったら、恋もねねも守りたかったから、敵だったのにも関わらず助けたんか？」

「ああ」

「あんたは危険を承知で頼まれただけだったのに、信用できるかも分からないのに月つちもカクつちも助けたんか？」

「まあそう言いコトになるな」

正直言つとあの状況で信じるもクソもなかったからな。

だってあんな真つ直ぐに誰かを助けたいって頼んでくる奴の言葉か嘘なわけないからな。

「桜牙はなんでそんな見ず知らずの他人のために頑張れるんや…」

…?」

「なんで、か。誰かを助けたいと思う気持ちに理由なんか必要か?」

「……」

「俺はな、こんな人を助けることが出来る力を持ったんだから、人を殺めるんじゃないかって助けたいんだ」

俺は青い空を仰ぎ見ながら霞に言う。

「それでも俺は人を殺してる。所詮はただの理想論さ。だけど、自分の信念は曲げたくない。だから俺は手を伸ばすんだ」

俺はアハハと笑いながら霞に向かって言う。

なんだかんだ言っただけで俺が言ってるのは甘ったれの戯れ言だ。

「ええ考えやんか。ウチもええと思うで。……それでな、その……守りたいって人にはウチも入ってるんか……？」

そんなコトを思ってるって霞が俺に言ってきた。

「当たり前さ。俺は霞も華琳も春蘭も秋蘭も、みんなも守る」

俺の命ある限りな、と付け足しながら言う。

そして俺はそこまで言うと、立ち上がり草を払いながら霞に言う。

「そろそろ警邏に行かないと凧達に怒られるからな。もう行くよ」

「えっ、あ、うん」

「じゃあ、今度ゆっくり飲もうぜ」

俺は霞にそう言うのと街に警邏に向かうのであった。

そう。甘ったれなのは分かってる。

それでも守りたいんだ。大切な人たちを……。



第参拾四話 『業炎の剣帝、酒盛りを共にすること』 (後書き)

『魔法少女リリカルなのは』業炎を司りし魔法剣士』もよろしく  
お願いします！

感想待ってます！

## 第参拾五話『俺の剣と翼の在処』

side 桜牙

「お、終わった……。ようやく全てが終わった……。良くやったな、俺……」

現在俺は机に突っ伏しながらようやく纏めることが出来た案を見ながら言う。

頼まれたのは効率的な連絡手段についての案だったが、前の世界じゃ念話とか色々な手段で連絡を取り合うことが出来たため、こう言ったことには知識を絞らねばならん。

そのせいで徹夜になってしまったのだが、あいにくと期限は今日までなのでさっさと案を華琳に出して、俺はさっさと寝ることにしよう。

「あの、お疲れさまです」

「あれ？ 月に詠？ いつの間に入ってきたんだ？」

二人の声が出た方を俺が振り向くとメイド服（もちろん俺が作った）を着用した月と詠がいた。月に至っては茶を入れてくれたらしく、茶が用意されていた。

「あんたが仕事してるときからよ。呼びかけても返事もしないから、あんたが仕事してる間に掃除を済ませたわ」



「あー、そうだったのか。悪いな気付いてやれなくて」

いやあ、全然気がつかなかったな。

「大丈夫ですよ。お茶飲みますか？」

「いただきますよ」

俺はそう言って月から茶を受け取り、少しだけ冷ましてから茶を飲む。

「ど、どうですか……？」

月は不安そうな表情をしながら俺にそう訊ねてきた。

「美味しいよ。いつも使ってるのと違う奴なのか？」

「いえ、皆さんが使ってるのと同じのです」

普段俺が使ってるのと同じなのに月が淹れただけでこれほどまでに味が違うものだったのか……。

うむ、さすが月だつてところだな。

「将来月はいい嫁さんになるな。俺が保証する」

「へう……お嫁さんだなんて……／＼／＼／＼」

なんで赤くなってるかは分からないけど、もじもじしてる月も最

高だな。仕事の後のこの癒やし!! 最高だぜ……。

「あんた月に何言ってるのよ!」

詠がそう言いながら殴りかかって来たので、頭だけを動かして避ける。

ふっ、この俺がド素人の一撃を受けるかつつうの。

「避けるな!」

「無茶言わんでくれえ」

俺は呑気にのほほんとしながら詠のパンチを軽々とかわしていく。

「ハッハッハ 手首の使い方がまだだぞ」

「くうう……。なんで当たらないのよ!」

なんで当たらないのよ、ってそれは俺が強いからさ、ハッハッハ。

さて、詠で遊ぶのも飽きてきたし、さっさと華琳のところにも行くとしますか。

そう思った俺は詠のパンチをかわしながら立ち上がり言う。

「俺は華琳のここに行ってくるから、待っていてくれてもいいし、ほかのここに行ってもいいから」

「ふん、誰がアンタのことなんか待つもんですか、行くよ月」

「う、うん。桜牙さん、またあとで」

「ああ、また後でな」

そう言いながらおれ月と詠の後ろ姿を見送った後に、華琳を探し始めるのだった。

「いないぞ？ どこ行っただんだ？」

あれこれ華琳を探し始めること早数十分。華琳の姿は何故かドコにもなかった。

厨房を探し、玉座の間を探し、失礼ながらも華琳の部屋に向かったのにも関わらず華琳の姿はドコにもない。

……おかしい。あの華琳がドコにもいないだと？ そういえば華琳が玉座の間に居ないときって今までにあったか？ あったとしても仕事のときとか、少しの休みの時だけだったはずなんだが……。

そんなコトを思いながら廊下を歩いていると、桂花の姿を見つけた。

「…………げ」

がしかし、そいつには構うことなくその脇を通って華麗にスルーする。

「ちよつとアンタ！ 無視する気！？」

すると無視されたから気分が悪くなったかは分からないが、桂花が怒ったような口調をしながら俺に言ってきた。

「出会い頭に‘げ’とか言つてあからさまに嫌そうにしてる奴になんか構つてらんねえよ」

「それはそうよ。アンタとなんか話したら感染るもの」

「感染るって何が感染んだよ……」

あまりの桂花の物言いに思わず俺はツッコんでしまった。

「何もへつたくれもあるもんですか！ 感染るって言つたら感染るに決まってるでしょう！」

と俺のツッコミに律儀にも答えてくれる桂花。

根は悪い奴じゃないんだろうけど、男に対してキツイ性格は直してもらいたいもんだ。

「とりあえず華琳の居場所知らないか？ 知らないな？ じゃあな、他当たるわ」

勝手に質問して自己完結させた俺は桂花の脇を通り過ぎ去ろうとする。

「ちよつ、誰が知らないなんて言ったのよ！！」

すると桂花がそう言ってきた。言った後でしまった、と言った風な表情をしていたがもう遅い。

桂花は男に対してはキツイ態度をとるが根は良い奴だ。だからそれを逆手に取る俺の作戦。

ふっ、軍師をも出し抜く我ながら天晴れな作戦だぜ。

「なら教えてくれ。今日までの案を華琳に出さないといけないんだ」

「知ってるけどアンタなんかには教えてあげないわ。それに華琳さまは、あんたなんかにはお会いにならないでしょうけどね」

「どういう意味だ？」

「知ってるとしても教えてあげないって言ったでしょ。胸に手を当てて過去の悪行でも思い出してみたらどうなの？」

「あー、めんどくせえな。このロリツ子娘は……」

俺はそつつぶやきながら言われたとおりに胸に手を当てて過去の悪行とやらを思い出す。

「どう？　これで華琳さまがあんたにお会いにならない理由の一つでも見つかったんじゃない？」

「いや、全く見つからん」

今までで華琳に誉められたことはあれど、叱られたことなんか一

度もない。言われたことは出来る限りやってきたからな。

ん？ いや、今まで叱られたことがないから分からないだけで、何かしでかすとこんな風に会わなくなるのか？

むむむ、何をやったかさっぱり分からん……。

いや、よく考えたら華琳がそんな回りくどい事をするような性格じゃないからな。っーことはやっぱり桂花の出任せか。

こいつと話してても埒があかないな。

「どうした、龍崎」

そんなコトを思ってるのと秋蘭がやってきた。

「秋蘭か。いやな、今日までの案件があるから華琳に出したかったんだが、ドコにもいないし、桂花は知ってるが教えてくれないんだ」

「ふむ、そうだったのか。あいにく華琳さまは今日一日お休みだぞ？」

「……ホントか？」

あの華琳が仕事を休むなんてどうしたんだらうか……。

「本当だ。訊いてなかったのか？」

「ああ。案を今日中に出すように言われてたんだ」

実際にこれは昨日中には出来ないから、明日で構わないかって訊いたからな。

それで華琳が今日で良いって自分から言ったんだから間違いない。

「……やれやれ。また悪い癖か」

すると秋蘭がため息をつきながら言った。

「悪い癖？　なんだそれ？」

「龍崎は華琳さまが一日仕事を休んでいるところ……見たことがあるか？」

「そう言うコトか……」

確かに昼間に休んでいたり、街に遊びにでていたりしているところは見たことがある。だがまる一日休んでいるところは見たことがなかった。

たまに夜に華琳の部屋を通ったりすると、明かりが点いてたりして政務をこなしていたようだしな。

「ご自身の休息と公務を比べれば、必ず公務を優先させるお方だからな……」

「だから秋蘭と……春蘭あたりで無理矢理休ませたってコトか？」

「左様だ。姉者は華琳さまの代理で季衣と一緒に視察に出掛けて

いる」

「軍事関係の視察だったとしても春蘭が華琳を納得させるとは……。いや、多分秋蘭が頑張ったんだろうな。春蘭だったら簡単に裏切るだろうし……。」

「なら今日はお預けだな」

「なんだっいたら預かってあげましょうか？」

明らかに悪意に満ちた笑みをしながら言う桂花。

「お前に預けたらゴミ焼き場に持って行かれるか、墨でグチャグチャにされるかのどっちかだから、遠慮しておく」

「……ちっ」

俺が溜め息混じりでそう言つと案の定ため息をつく桂花。

お前のやることなんかだいたい察しはつくわ、レズ軍師め。

「急ぎでないものなら明日の朝に渡してくれると嬉しいのだが。華琳さまに何か言われたら私の名を出して構わんぞ」

「それぐらい構わんさ。それより華琳にそう言うへたな気を使うと怒るんじゃないか？」

そう言うのは納得してくれないだろうからな、華琳の奴。

「理解はしてくれるだろうが、納得はされないだろうな」



「ですよねえ……。まあ、いいや。街に出て忘れてたことにするわ」

俺だつてせつかくの休暇に仕事の資料なんざ見たくないからな。

「悪いな気を使わせて。……。ああ、そつだ。城を出るなら向こうの庭を通つた方が‘近道’だぞ」

「ちよつと秋蘭!？」

そんな道合つたか？ 近道ならいつも使つてるから分かるがあつちだと遠回りのような……。ああ、そつ言うことか。

「じゃあ近道を使わせてもらおうか」

「うむ、案内しよう」

と云つたことで俺は秋蘭に華琳までの近道を教えてもらうことにした。

秋蘭に案内してもらい茂みを開けた先には、木陰に渡されたハンモックのようなものに眠っている華琳の姿があつた。

多分気配で気付いたりするんだろうけど、眠つてるところを見るとそつでもないみたいだな。

「華琳さあくん？ 寝てるんですか？」

「すう……」

顔の前で手をヒラヒラやったりしてみろんだが、やっぱり眠ってるみたいだ。

それに寝てる華琳の脇には読みかけの無駄に難しそうな本……。

せつかくの休みなんだから、こつ言つときくらいは仕事のことを忘れて休んでもらいたいもんだな。

にしてもホントにぐっすり眠ってるな。まあ、もしかしたら寝たふりなのかもしれないけど……。

「にしても可愛い寝顔だな」

「……／＼／＼／＼／＼」

ん？　なんだが顔が赤くなってきたみたいだな。日射しでも当たって暑かったりしたのかもな。

そう思った俺は近くに木の枝で魔法陣を書いて、そこに魔力を流し込みうちわを創り出す。

扇風機も創れるが電気のない時代にそんなん創ったってただのゴミにしかないからな。

そんなコトを思いながら俺は華琳の顔を扇ぐ。

「……こつしてると、普通の女の子みたいだな」

俺はそうつぶやきながら華琳の顔に掛かって邪魔そうな髪を払ってやる。

警備でよく見かけるような華琳くらしい女の子と言えば、どこぞの常連が美形だとか、ドコの着物が流行だとか言った話をよく耳にする。

間違っても戦略がどうのこうのと云った話は出てこないし、盗賊の討伐だとか言う話はもつと出てこない。

「こんなにも小さいのに、背中には背負いきれない重荷を持っているのか……」

普段はそんな苦しそうな素振りを見せたりしたりはしないが、それでも内心では苦しいと思っっているのかもしれない。

だがそれでも霸王として生きるが故に、そんな弱さをさらけ出せないでいるのかもしれない……。

ただの俺の思い違いかもしれないが、それでも華琳を見ると思ってしまう部分がいくらもある。

そんなコトを思いながら俺は溜め息混じりで、眠っているはずの華琳に向かって言う。

「もうちょい、気を抜いてもいいんじゃないか？ アンタの周りにはアンタを慕ってくれる奴がたくさん居るんだ」

春蘭に秋蘭、桂花に凧に真桜に沙和。紅葉に雪と数えればキリが

ないほどに華琳を慕ってる奴が居る。

「それに華琳が全ての重荷を背負う必要なんて無い。……いくらでも俺たちに分けてくれて構わないんだ」

俺は青空を見上げながら言葉を紡いでいく。

「俺は華琳の頼みなら何だって訊いてやるさ。……なんせ我が剣と翼は華琳のため、我が主のために捧げたのだからな」

青空を見上げていた顔を再び華琳に向けて言う。

「覇道を進む我が主を、命ある限り守ると誓おう」

俺は答えてくれるはずもないのだが、王の前に膝をつく誇り高い騎士のような体勢をとる。

「……約束……よ……」

すると寝ているはずの華琳の口からタイミング良くそんな言葉が出てきた。

一瞬起きたのかと思っただが、目は閉じられたまままだし寝言だったようだ。

「……か夢の中でまで誰かと約束してたのか？ そんなコトを考えて少しだけ微笑んだ後に言った。」

「これより我が剣は主と共にあり、主の運命は我が翼と共にある  
ここに契約は完了した」

俺はそう言つと本当に街に向かうのであった。

side 華琳

春蘭と秋蘭に無理矢理仕事を休むように言われたのだけれど、やることがないと本当に退屈ね。何か面白いことでもないかしら？

私がそんなコトを思っていたからかは分からないのだけれど、桜牙がやってきた。起きたら良いのに、どうして寝たふりなんか……。

「華琳さあくん？ 寝てるんですか？」

「すう……」

なんて間抜けな声を出してるのよ、バカ。

と言うより私が寝たふりなんかしなくても、桜牙くらいなら寝たふりをしてると気付きそうなのだけれど……。

「にしても可愛い寝顔だな」

「……／／／／／／／」

い、いきなり桜牙はなんてコトを言い出すのよ……。私が本当に寝てると思ってるからって、そんなコト言わないでよ……。

だけど、桜牙は私が起きてても起きてなくてもこんな感じだったかしら？

そんなコトを思っていると私の顔に涼しい風が送られてきた。

ちょうど暑くなってきたところだったし、桜牙はいろいろなところに気が利くのね。

ただ、鈍感なところが玉に瑕だけれど……。

「……こうしていると、普通の女の子みたいだな」

こうしているとってどういうコトかしらね桜牙……。それは私が女の子らしくないと言いたいのかしらね？

確かに女の子らしいことはあまりしていないけれど、今はそんな場合じゃないのよ。

「こんなにも小さいのに、背中には背負いきれない重荷を持っているのか……」

こんなにも小さいのについてドコのことを言っているのかしら、桜牙……。

これは後でキッチリと説明してもらわないといけないわね。

それに覇道を背負いきれない重荷なんて思ったことはないわ。

「もうちょい、気を抜いてもいいんじゃないか？ アンタの周りにはアンタを慕ってくれる奴がたくさん居るんだ」

大きなお世話よ。いつもは私の何倍も仕事をこなしてる桜牙に、言われたくはないわよ。

「それに華琳が全ての重荷を背負う必要なんて無い。……いくらでも俺たちに分けてくれて構わないんだ」

桜牙って私なんかより他の子のコトばかり考えてるのかと思っただけけど、ちゃんと私のことも考えてくれてたのね。

そう言えば戦いの時の陣の取り方で桜牙が指揮するとき私はいつも隙がない布陣になっていた……。

「俺は華琳の頼みなら何だって訊いてやるさ。……なんせ我が剣と翼は華琳のため、我が主のために捧げたのだからな」

ふふっ、そうだったわね。あなたの剣と翼は私のために振るってくれる。

あなたは国の未来を、私の覇道をしっかりと考えながらいつでも行動してくれた。

仕事でも例え嫌がる素振りを見せたとしても、引き受けてくれて戦いでは皆が安全でいてくれるように戦ってくれた……。

「覇道を進む我が主を、命ある限り守ると誓おう」

我が主……か。なんだか桜牙に言われるとくすぐったい感じがするわ。

それにアナタはいつでも守ってばかりなのね。

そこが桜牙の良いところであり、優しさなのかもしれないわ。

「…………約束…………よ」

そんなコトを言ってくれるなんて嬉しい限りだわ。そう思った私は思わず言ってしまった。

すると、寝ていた私が答えたのを驚いたのか桜牙の反応が遅れていた。

そして桜牙がフツと笑うような声が聞こえたと思ったら桜牙が言ってきた。

「これより我が剣は主と共にあり、主の運命は我が翼と共にある。

ここに契約は完了した」

桜牙はそう言っていると私が起きているというコトも気付かないまま立ち去ってしまった。

そして私は桜牙が完全に立ち去ったのを確認すると起き上がった。

「これより我が剣は主と共にあり、主の運命は我が翼と共にある…………か。なんだか恥ずかしいわね…………／／／／／／」

私はそう思いながら今度は本当に眠りについた…………。

side 桜牙

はてさて、とりあえずあれから数日が経ち街の警邏に来たんだが、街って平和だからやることないんだよねえ…………。別に事件が起きてもすぐに対処出来るし…………。



そんなコトを思っていると白いローブ姿の人が俺の脇を通った。

白いローブ姿に、感じたことがあるようでないような気配……。  
と言っかあの姿ってまさか……。

そう思った俺は思わずと行った感じで振り返り、叫んでいた。

「アルビレオ・イマー!!」

あいつはまさかアルだったのか？ 有り得ない、あいつが死ぬはずがないし死んだとしてもこちらの世界に来ることなんか出来ないはずだ。

そしてあいつは振り返り、俺の方を見た。よく見れば着ているローブはアルと似てはいるが、感じる魔力は本質から違う感じがする。

なんにしてもあいつからはこの世界では感じない何かを感じる。そう思った俺は街中だったのに白羽黒羽を創り出して警戒しながら言った。

「テメエ……何者だ」

俺のその言葉にあいつは静かに微笑んだ。



第参拾陸話『現れたるは神の一番の部下』

side 桜牙

「テメエ……何者だ」

現在俺は街中で白羽黒羽を両手に携えながら、目の前の人物に向かってそう問いかける。

身長は俺と対して変わらないが、全身をアルが着ていたような口ブ姿のため顔を見ることができない。だが言えるのは、こいつの力はこの世界の誰とも違う。似ているとすれば異世界から来た俺と似ていると言うところだ。

それにあいつの力はかなりのものだ。ただおかしい点はなぜあいつみたいなのがココにいるかってコトだ。

「何者、と訊かれて素直に答えるのは素直な人だけだと思いますよ？ 龍崎桜牙さん？」

「……」

こいつ……。俺の名前まで知ってやがるとは……。ますます持つて怪しいな、こんな怪しい奴をここに野放しにするわけにもいかない……。か。

「別に怪しいものではありません。」

「怪しいものではありませんって言われて信じる奴も居ねえと思

うがな」

俺は白羽黒羽を構えながら目の前の男に向かってそう言う。

それに俺が武器を構えてることによって街のみんなにも不安を与えてるみたいだな……。

「場所を変えるぞ」

「別に構いませんよ?」

お互いにそう言いあうと場所を移動し始めた。だが移動一つでさえ俺は瞬動を連続で使って移動してるのに、あいつは遅れるどころかついてきてやがる。

それだけでもかなりの実力者ってことが分かる。普通なら俺についてこられるはずがないからな。

なんにしてもなんでこんな奴が今まで野放しにされてたかは分からないが、敵であるならばここで全力を持って排除するしかないな。

そんなコトを思っているウチに俺たちは人気がなくて、ちょうど良く荒野が広がっている場所に到着した。

「さて、もう一度訊ねよう。貴様は何者だ」

俺は白羽黒羽を構えながらどんな動きにも対応できるようにする。

「そう簡単に話すと思ってるのですか? それ以前に刃を向けている人に話す気にもなれませんしね」

「そうか。なら素性など話さなくても良い。一つだけ答える」

「なんででしょう？」

俺は男の目をにらみつけながら言う。

「テメエは華琳の敵か？」

そう。俺にとって重要なのはこいつが華琳と敵対するか否かと言うことだ。敵でないのだとしたらこのまま立ち去り、敵だということならば全力を持って排除する。

ただ、それだけのことだ。

「ふふっ。そうですね。なら

敵だと言えはどうしますか？」

俺はその言葉を聞いた瞬間、瞬動を使い一気に距離を詰める。そして刃を振るいながら叫ぶ。

「テメエを……斬る！！」

だがあいつは俺の白羽黒羽による斬激をいとも簡単に回避する。その身のこなしからすでにこの世界でこいつに勝てる奴はいないと悟る。

たった一つの動作。それだけであいつの力量を測るのは十分だった。だとするならば慢心も、油断もそう言った感情は全て捨て去る。

「おやおや。それは困りましたね。それでは応戦させていただきますしょうか」

あいつはそう言うが構えと言ったような構えはとらずに、ただこちらの動きを伺っているように見える。

さらにはあいつには武器らしい武器の存在はない。つまり俺と同系統の武器の出し方か、武器なしの肉弾戦というコトになる。

仮にも奴が武器を使わないのだとしたらリーチによるアドバンテージが俺にはある。ただ、それを過信して無闇に突っ込むのは得策ではない。

なんせあいつは武器に対して素手で挑もうといるのだからな。

ならば様子身をするか。そう思った俺は弓を創り出して、白羽黒羽を矢の代わりにする。

「はあっ!!」

そして弓を引き、白羽黒羽を奴に向かって放つ。軌道上には奴の頭がある。そのまま行けば白羽黒羽は奴の頭を貫くはずだった。

だが白羽黒羽は奴を貫くことなく素通りしたかのように見えた。いや、正確には頭だけを素早く動かして回避しただけだ。

だがただそれだけの動きでさえリミットの掛けられた今の俺ではギリギリでしか見えなかった。

マズい、こいつは俺と同等の力を持っているのかもしれない……。

倒せなくとも動けなくできるまでに出来れば上々か。

それに分かったことがある。奴の戦闘スタイルはカウンター型。俺が攻撃すればそれにカウンターを仕掛けてくるはずだ。

それに遠距離、中距離ではあいつには避けられるだろうな。故に必然的に接近戦……。仕方ねえ。接近戦でしか戦えないなら接近戦でぶっ飛ばすしかねえな。

「行くぞ……」

俺はそうつぶやき、瞬動で一気に接近する。そして連続で白羽黒羽を振るっていく。もちろん手加減なんかしないで、本気で振るっていく。

反撃をさせる暇を与えずに振るっていくのだが、奴は軽々……とまでは行かないがそれでも俺の攻撃を全て避けて行っている。

それでも余分な動きをしないでほとんど動いていない動作で避けているあいつに対して、俺は白羽黒羽を連続で振るっているためどんなに頑張っても動きが奴より大きくなる。

つまりは戦いが長引けば長引くほど俺が不利になっていくってことだ。

「動きが鈍くなってますよ？」

「ッ!?!」

その言葉を聞いた俺は理解をする前に世界が回っていた。そう、

俺はカウンターを喰らい地面に伏してしまっていたのだ。さらに奴はそんな俺に向かって追撃を繰り出してくる。

俺はそれを白羽黒羽を交差させて盾代わりにして防ぎ、その後に瞬動を使い俺はその場から一気に回避する。

「やれやれ、その程度ですか？ 正直ガツカリですよ」

「舐めたことを言う奴だ……。良いだろう、格の違いを見せてやる」

俺はそう言いながら立ち上がり白羽黒羽を破棄する。

「おや？ 武器をなくしてしまったら意味がありませんよ？」

奴は涼しそうな笑みを浮かべながら皮肉げに行ってくる。だがそんなのは挑発だったのは分かっている。

だから俺は敢えてそれを無視して目を瞑る。

《リミットブレイク  
制限解除・魔力！！》

俺が魔力のリミットを解放すると、前の状態の魔力まで一気に増大する。

以前はこれほどまでに強力な魔力を持っていたとはな……。我ながら自らの魔力に驚かされるな。

「さすが《業炎の剣帝》の異名を持つ人物ですね。あなたの本来の魔力は、この世界を破壊させてしまうほどのものです」



「ほお、俺のその二つ名が知られているとはな……」

俺は目を開けた後に言う。今の俺の魔力はさっきの比ではない。

それにもはやこいつはこの世界の住人じゃないのは確定した。

「さあて、そんじゃあ本番開始だ!!」

俺はそう叫ぶと自らの手の魔法陣に今のバカ魔力を注ぎ込む。そしてその魔力を一振りの刃の形に押しとどめる。

想像するは我が古龍が司りし、騎士の剣。その一振りは国を変える。

「おおおおおっ!!」

その刃を俺は振るい、奴を斬りつける。そして奴も今回ばかりはマズいと悟ったのか後ろに大きく飛躍して、俺の一振りを回避する。

「まさか宝具、アーサー王が持つ聖剣

エクスカリバーをも創り出してしまつとは……」

俺が創り出したのは俺と共に旅をしたあの少女（いや、少女と言うには年寄りすぎるな……）が司りし剣。

その刃を持ってして奴を排除する。

「贗作だと思って甘く見るなよ？ 油断すれば、貴様の意識を刈り取るぞ」

「そうですね。ならば、本気で行きましょう」

奴がそう言ったとき奴の目の色が変わった。比喩的な表現などではなく文字通り色が変化したのだ。

だからといって別段魔力が上がったりしたワケではなさそうだ。

虚仮こけあじ威しか、それとも俺が感じれないほどの変化なのか……。分  
からなければ、確かめればよい。

そう思った俺はエクスカリバーを構えながら瞬動を使い一気に接近する。

「はあああああっ!!」

そして俺はエクスカリバーを一気に振り上げた。振り上げたはずだったのだが、奴に当たったはずなのだが、奴には傷一つついていない。

「当たってませんよ？　しっかり狙わなければ当たりませんよ？」

「　　ッ!？」

さらに気づけば奴は俺の死角に回っていた。

おかしい。気配が動くのは分かったのだが、気づけなかった。

「ふっ!?!」

「ち……っ」

奴の攻撃を俺は瞬動を使ってその攻撃を避ける。

奴の目の色の変化……。もしかしたら……。そう思った俺は再び目を瞑る。

《リミットオフ制限設置・魔力》  
《リミットブレイク制限解除・俊敏》

そして俺は魔力に再びリミットをつけた後、俊敏のリミットを解除する。

俺が解除出来るリミットは一つだけだ。いちいち制限を解除したり制限したりめんどくせえんだよな。

そして俊敏の制限を解除したあとに俺は奴の周りをもはやかなりの使い手でも見えないほどの速さで動き回る。

「はっ！！」

俺はもはや見えなくなるくらいにまで動き回った後、奴の隙めがけて一気に突っ込む。

だが奴はすでに俺に向けて蹴りを放っていた。それを俺はエクスカリバーの平で防ぎ、後退する。

だがこれで一つ分かったことがある。今のあいつは視力 人の動きを見切る力が極限までに高まっている。

おそらくは接近戦をやったとしたら、あいつに勝つにはかなりの時間が掛かるな。少なくとも三日三晩は戦い続けないといけない。

だがそんな暇はねえし、そんなコトをやったとしたら負けるのは俺だ。死にはしないが、俺の真祖の力では回復するまでにかかなりの時間を労するだろう。

だったら、避けきれないほど広範囲の攻撃で、あいつをぶっ潰すしかねえってことか。

「一気に片を付ける。『避けるよ』？ 今の俺じゃあ制御しきれねえからな」

俺はそう言うのと再び魔力のリミットを解除して、エクスカリバーに魔力を込める。

「ふむ。さすがにそれは防ぎきれませんね。仕方ありません、奥の手を出させていただきます」

奴がそう言うのと奴の両手に一対の黒い剣が現れた。右手の剣は『氣』で左手は『魔力』の剣か……。

なるほど感卦法の応用技ってコトか……。俺に対抗するってか？ おもしれえ。とにかく、コレで終わらせる。

「<sup>エクス</sup>約束された

」

俺が魔力をエクスカリバーを込めるとエクスカリバーの刀身が光り出した。

「勝利の剣<sup>カリバー</sup>アアアアアアアア！」

そして魔力を込めたエクスカリバーの真名解放をすると強力な斬撃が一気に放たれた。

エクスカリバーの一撃は地を削り、周りの地形を破壊していきながら奴に向かっていく。

そして奴のところまで行くとエクスカリバーの斬撃に込められた魔力が一気に爆発した。

その一撃は世界から光を奪い、音を奪い、全てを奪い去った。

それほどまでに強力な一撃。俺の今までの経験をフルに総動員した技法。

今の一撃を放った後に俺が創り出したエクスカリバーは、空気に溶けるかのように壊れていった。

そしてエクスカリバーの一撃が奪った全てが元に戻ったときに俺がみたものは、ギリギリでエクスカリバーの一撃を避けたとばかりの奴が立っていた。

奴が持っていた一对の刃は半ばほどから折れていた。

おそらくは、奴が何かの技を放ちエクスカリバーの真名解放の一撃を緩和したんだろうが、それでも避けきれなかったんだろうな。

「さて、俺の勝ちだな。どうする？俺に降伏するか？それとも、俺に斬られるか？選ばせてやる」

俺は瞬時に瞬動で奴に近づき白羽黒羽を首に当てながら言う。

「ククク……ハハハハハハハッ！！」

すると奴はいきなり笑い始めた。首に刃が当てられ死に直面して頭がおかしくなったか？

とも思ったがどうやら違うらしい。

「さすが桜牙さんですね。予想以上の力でした」

「はあ……。テメエ、俺を試したのか？」

「試したと言えば試しましたが、全力でやらせてもらいましたよ。それに僕の本気の技『斬卦剣』をもってしても、桜牙さんの一撃は防ぎきれませんでしたから」

なるほどねえ。『斬卦剣』とはよく言ったもんだな。

やっぱり『魔力』と『氣』を合わせた技だったみたいだな。今回は宝具を創り出して真名解放したから威力を上回らせることを出来たが、『ジーク・インパクト』だったら負けてたかもな。

「で、結局テメエは誰だ？ お前は这个世界の住人じゃねえだろ。どこから来た。俺が前にいた世界か？ それとも他の世界か？」

「違いますよ。天国からあなたを迎えにきました」

「……………何ですと？」

今こいつ天国とか言ったか？ つーことはこいつはあれか、天使とか言われてる奴か？

いやいやいや、冗談はやめてくださいよ。只でさえ俺の神様のイメージが崩れたつてのに、天使までこんな無駄にスマイルまき散らしてる奴なの？ そんなものお断りだつづの。新聞はもう要らないつづの。

「現実逃避は終わりましたか？ ではさつさと行きますよ？ 他にも連れて行かないと行けないんですから」

「えっ？ なに？ この世界に俺以外にも転生者が要るってコト？ つーか天国なんか行かねえよ？ 勝手に一人で行けよ」

「わがまま言わないください。子供じゃないんですから。それともアレですか？ おもちやを買ってもらえなくて、ただをこねる子供にでもなつたつもりなんですか？ もうお爺さんなんですから腹を決めてください」

なんだか例えが生々しすぎるんだけど……。つーか天国なんか行かねえし。確かにもう爺だけど不老不死だし！！

「では行きますよ？」

とか思ってるうちに勝手に天国への水先案内人になってくれちゃったりしようとしてるし！？

「冗談じゃねえ！？ テメエとの戦いに勝つたのに天国行きだなんて納得行くか！？ 嘘はエイプリルフールの時だけにつきやがれ

!! 舌抜かれても知らねえぞ、バカヤロオ!!」

「まったく、「冗談でそこまで慌てないでくださいよ」

「冗談かよ!?!」

全然冗談に聞こえないんですけど!?! つーか冗談で何たらかんならこのとこだけ真顔になるなよ!?!

正直ちよつと泣きそうだったし、このままマジで天国に行くってなったらどうなるかと思っただよ……。

「本当は僕はあなたを転生させた神の一番弟子ですよ。あなたを監視すると言う名目で、あなたにつくことになりました」

「監視い? 俺が何やったってんだよ。なんもしてねえだろ?」

「身に覚えがないのですか……? 仕方ありません。やっぱり連れて行くことにします」

「ざけんなよ!?!」

えー……。なにもした覚えがないのに天国に戻されるってどういうコトだよ……。

つーか神のオッサンの手違いで殺されたのに、なんで連れ戻されなきゃいけないんだよ……。

「まあ、冗談ですけどね」



「冗談かよ!? つーかテメエはさつきから真顔で冗談言いやがって!! テメエは俺をそんなに虐めたいのか!?!」

「そうですね何か?」

「何か? じゃねえよ!! 余計に夕チが悪いわ!! 実際には何しに来たんだ!!」

「それはですね……禁則事項です」

「じゃかしいわああああああ!!」

なんなんだこいつは!? 戦いが無駄に強かったり、人をからかったり、拳げ句の果てに禁則事項とか言いやがつてええええええええええ!!

それはアレか!? みくるビムを目から出す気なんですか!?

「僕の名前は松本連です。空<sup>クラ</sup>とでもお呼びください」

「どっから出てきた!? つーか何故に自己紹介を今する!?!」

「特に意味はありませんが?」

……だ、ダメだ。こいつのペースに乗せられたら俺では脱出は不可能だ……。こうなったら逃げることにしよう。そうしよう。

「今日からお世話になります」

「なんでさ!?!」

「あれ？ もしかしてFat 見てました？ そう言えばあなたの武器を創り出す技もアーチャ の投 魔術と似てましたね？」

「……こいつはことごとく人の秘密を暴いて来やがるな……。そうですよ、俺の魔法具精製術はぶつちゃけエミ さんのをパクりましたよ！！ なんか文句あつか！？」

「ぶつちゃけないでください」

「テメエのせいだろうが！！ つーかテメエ帰れ！！ 天国に帰れ！！ それで二度とこっちに来るな！！」

しかめ勝手に人の心まで読みやがって……。

「いえ、あなたにお世話になるつもりですが？」

「それは冗談じゃねえのかよ！？」

はあ……。こいつと居るとなんだか自分が崩れていくような……。とりあえず何を言ってもききそうに無かったので、華琳のところに連れて行くことにした。

「桜牙、ちょうど良いところに帰ってきたわね」

俺が空を連れて華琳の城の玉座の間に行くと何故か桂花、秋蘭、雪と言った軍師勢に春蘭、紅葉、季衣、流琉と言った攻撃力重視武

人勢が揃っていた。

はて、これほどまでに人が集まるような事件があったのか？ それに俺にまで頼るなんてこりゃマジな話だな。

「何があつたんだ」

「実はここより少し離れた荒野で大規模な爆発があつたのよ。もしかしたら敵が攻めてきたのかと思って偵察を出したのだけれど、人影はなし。ただ、そこでは人が戦つたにしては有り得ない傷が残つていたのよ」

ん？ ここより少し離れた荒野にて大爆発？ しかも人が戦つたにしては有り得ない傷があつた？

それつてもしかして俺じゃねえの？ エクスカリバーでぶっ放した奴じゃないの？

「それつて今さっきの話か？」

「ええ、そうよ。何か心当たりないかしら？」

「……それ、俺だわ」

俺がそう言うとその場にいた全員に驚かれた。

そのあとに俺と空が戦つたことを話したらさらに驚かれた。俺と同等に戦える奴なんか居たのか、ってな。

「……ぜひ欲しいわね。空と言つたかしら、私の下で働く気はな

いかしら？」

「構いませんよ？」

はい、出たよ即答。はぁ………つーことは今日からいつとずっと居なきゃいけないのか………。

「なら、桜牙の下につけさせてもらおうわ、構わないわね？」

「ええ、構いません。むしろ大歓迎です」

俺が異議を唱えてもどうせ対応してくれないだろうな。

溜め息混じりで俺は天井を見ながら思う。

俺、やっていける自信ないヨ………ってな。

第参拾陸話『現れたるは神の一番の部下』（後書き）

今回出たキャラは後ほど重要になってきます！

感想待ってます！

## 第参拾七話『業炎の剣帝、再会するの』』

side 桜牙

神の使いとやらが来てから数日、反董卓連合の戦いが終わってからしばらくの時間が過ぎた。華琳の予想したとおり、董卓 月の消えた後漢王朝に諸侯同士の小競り合いを抑える力はすでにもう無かった。

そんな中俺たちは盗賊団だの野党だのなんやのかんやの討伐に向く日々が続いていた。

そんなコトはさておき、現在俺は華琳やその他のメンバーを集めての軍議を開いている最中だ。軍議の内容は先日の公孫賛と袁紹の戦いのことについてだ。

やはりと言うべきが大軍を率いている袁紹が公孫賛を打ち破り、公孫賛は徐州の劉備のところへ逃げ延びたようだった。

「劉備、ねえ……。そこまで力があつたか？」

「平原から徐州に移つたのよ。この間の軍議で話に出たの、聞いてなかつたの？」

俺がそう言うと桂花が珍しく俺に言ってきた。

「悪いな。聞いてなかつたわ」

確かにそんなコトが軍議に挙がってたような気もするが、今のと

ころ劉備の軍勢はとるに足りない奴らばかりだ。関羽、張飛あたりは警戒しなければならぬがこつちには恋がいるから問題はない。

いずれ華琳と対峙するほどまでの力になるのかもしれないが、現時点でそれは不可能だからな。

「桜牙さん、女性の話はしっかり聞かないといけませんよ？」

「うるさい黙れ。お前と話すとイライラする。テメエは歩く電撃イライラ棒だつつうの」

「すみません、意味が分かりません」

笑いながら言うんじゃねえよ！！ ああ〜！！ この間からストレス全開なんですコトよ！！

「んんっ……。それで袁紹の動きは？」

華琳は咳払いを一つ入れると言った。

その言葉に桂花が答えてくれたのだが、どうやら袁紹は青州や併州にも勢力を伸ばし河北四州はほとんどが袁紹の勢力下に入っているらしい。

これ以上北には進むことが出来ないから、後は南に下るだけのことだった。

「となると次に狙われるのは劉備ってことになるな」

河北四州のすぐ南野川沿いの徐州が劉備の領であり、そこから大

陸内部が華琳の領地になっている。そのさらに南にある揚州に本拠地を構えるのが袁術だ。

俺たちと劉備は袁術と袁紹に挟まれる形になっている。

この構図ならば反董卓連合の戦いで力を見せつけた華琳を狙うよりも、最小勢力の劉備が狙われる構図が出来上がる。

「さあ……。どうでしょうね」

「どういうコトだ？」

確か劉備や公孫賛はこの間の反董卓連合では集中攻撃を喰らっていたはずだ。それに定石で行けば、大物より先に小物を叩き勢力を拡大してから大物を叩くのが普通だろう。

さらに河北は幽州を治めていた公孫賛が袁紹に敗れ、領地を失って劉備のところに逃げ込んでいるんだから尚更だろう。

「袁紹さんは見るからに派手好きですから、小さな勢力よりも大きな勢力を先に叩いてくると思うのですが……」

「雪の言つとおりよ。そう言う人なのよ、麗羽は」

確かに鎧も金ピカにして派手だったからなあ……。だからって大きな勢力を先に攻めるのはどうかと思うんだが……。

まあ、自分の力量も分からずに突っ込んできてくれれば潰すのは簡単だから構わないけどな。



「つまりは領地の大きな我々が狙われると言つことですね？」

今話を聞いていた流琉がまとめた意見を述べた。

「そう言つコト。国境の近くの各城には万全の警戒で当たらせるように通達しておきなさい。……それから河南の袁術の動きはどうなつてる？」

「特に大きな動きはありません」

どうやら桂花の話だと、俺たちや劉備の国境を偵察する兵は散見されているみたいだが、所詮はその程度の動きでしかないというコトだ。

「あれも相当な俗物だけれど……動かないというのも気味が悪いわね。警戒を怠らないようにしなさい」

「はっ。そちらにも既に指示は出しています」

華琳の言葉にそう言つ桂花。にしても準備がいいねえ。

「桂花も大変だな」

「これが華琳さまから与えられた私の仕事だもの。名誉に思いこそすれ、大変と思つたことはないわ」

はい、そうでしたね。あなた様は華琳からの指示だつたらどんな指示でも嬉しい人だったものね。

「手の空いている誰かに手伝わせたい所だけれど、秋蘭は色々任

せてるから無理として……」

「「「「「「「「……」」」」」」」

華琳がそう言つと華琳と桂花が今ココにいるメンバーを一人ずつ見ていった。

現在居るメンバーは俺、空、春蘭、秋蘭、霞、流琉、雪の七人だ。秋蘭はさっき華琳が言ったように手伝わせるのは無理で、男である俺と空は無理。

さらに春蘭、霞、流琉の三人は言わば殴り合い専門なので無理。なので必然的に雪と言つことになる。

そしてやはりと言つべきか桂花の視線が雪のところまで止まった。

「では雪をよろしいですか？ 華琳さま」

「ええ、雪なら申し分ないでしょう。なら他の皆はいつ異変が起きてても良いように、準備を怠らないこと。いいわね」

華琳の言葉で会議は終了した。

非常召集が掛けられたのは、あの会議から数日と経っていない日のコトだった。どうやらバカは判断が早いのか、袁紹がもう動き出したらしい。

『袁』、『文』、『顔』と敵の主力は全てそろっているようで、

相手の数はだいたい三万と言うことだった。だが数の割には動きが遅く、奇襲の体勢もとってはいない。

ただただこちらに自らの勢力を誇示したいと言うような印象ならしい。

なんとも馬鹿らしい行動というか何というか……。そんなもん潰してくださいって言うてるようなものじゃねえか。

「それで報告のあった城に兵はどのくらい居るのだ？ 三千か？ 五千か？」

そう。春蘭が言ったとおり報告があった城には兵がいるらしい。

「城におよそ七百と言ったところだ」

「一番手薄な所を突かれたわね……」

桂花の言うとおり七百しかない城など手薄以外のなにものでもない。

「そんなもの、手も足も出んではないか！ 籠城したところで一日と保たんぞ！？」

春蘭の言うとおりいくら籠城したところで数は三万と七百。数の差が有りすぎるため、籠城したところで意味はないだろう。

「桂花、今すぐ動かせる兵士はどのくらい居る？」

「いくら何でも動きが速すぎます。半日以内に二千、もう半日有

れば季衣や凧、紅葉達が戻ってくる予定ですからなんとか二万は…」

親衛隊を加えたとしたら七千ほどなら出せるとのことだったが

「華琳、兵の増援は不要だ」

「何ですって？」

俺がそう言つと華琳が今までに見せたことがないような表情で俺を睨みつけてきた。桂花も春蘭も俺を同じように見ている。

だが空と秋蘭だけはそう言った表情はしていなかった。

「華琳さま、龍崎もそう言ってますが報告をしてきた指揮官も増援の必要はないと……」

「なんですって!？」

「馬鹿な!？ みすみす死ぬ気が、その指揮官は!？」

秋蘭の言葉を聞いた春蘭と桂花はかなり驚いているようだった。

おそらくその指揮官は俺と同じようなことを考えて、この指示を出したんだろうな。

「……分かったわ。ならば増援は送らない」

俺と秋蘭の言葉を聞いた華琳がそう判断した。もちろんさっきま

で驚いていた二人はさらに驚いたような顔をしている。

「城の指揮官は何という名前？」

「はい、程イクと郭嘉の二名にございます」

程イク、か。これも何かの運命なのか、再び会うことになるうとはな。

「なら、その二人には袁紹たちが去った後、こちらに来るように伝えなさい。皆の前で理由をちゃんと説明してもらおう。もちろん、桜牙にもしてもらおう」

華琳は俺は横目で見ながら言ってきた。

「……承知しました」

「皆も勝手に兵は動かさないこと。これは命令よ。……守れなかったものは厳罰に処すから、そのつまりでいなさい」

華琳の言葉で全員が解散した。だが全員が解散したにも関わらず、玉座の間には俺が残された。

「桜牙。なぜ増援が要らなかったかを説明してもらえるかしら？」

「そんなに凄むなって。別にそいつらを見捨てるなんてコトは言っていないだろ」

俺は溜め息混じりで華琳に向かって言う。

そしておそらくは指揮官が考えていると思われる策を華琳に言った。

まず相手は袁紹軍の三万の軍勢が相手だが、おそらく前線の指揮官は文醜がやるはずだ。前に会ったときに文醜は前線、顔良が後衛を勤めていたからな。

つまり今回もそのように布陣されていると予想できた。もちろん俺のは予想でしかなかったが、指揮官の報告によりそれは確実なものとなった。

まあ、あの三人が出てくるなら顔良が必ず補佐に回るとは思ったがな。

そして文醜は袁紹と似て派手好きだろうから、たった七百の相手などしたくないだろう。だがそこで華琳が増援を送ってしまったら、向こうは喧嘩を売られたと思うだろう。

そうすればあいつらの性格からしたら売られた喧嘩は買っただろうな。そうすれば程イクたちは全滅してしまうだろう。

だからここは兵は送らずに、そのまま袁紹軍を撤退させるコトにしたのだ。

「ふふっ、やはり桜牙はお見通しだったようね」

「当たり前だ。お前だって分かってたろ？」

「そうね」

とりあえず俺も華琳も同じコトを考えていたことがわかった。

そして話が終わると玉座の間に雪が飛び込んできた。なにやら焦ってるみたいだが、どうしたんだ？

「華琳さま、桜牙さん！！ スミマセン、すぐに来てください！！」

「何があつたんだ？」

「いいからすぐに来てください！！」

雪の慌てぶりに俺と華琳は頭の上にクエスチョンマークをたくさん浮かべながら、雪について行くのだった。

雪についていき、庭まで来ると春蘭と霞が戦っていた。春蘭の大剣による一撃を霞が上手いこと受け流し、春蘭にカウンターを喰らわせようとしている。

だが春蘭も一騎当千の将。それだけではものともせず、霞に斬り掛かっていく。

「華琳さま、桜牙さん！！ あの二人を止めてください！！」

なるほどね。原因は分からないが、雪が焦つてたのはこの二人を止めて欲しかったからか。何にしてもこのまま戦わせても意味ないし、さっさと止めるか。

そう思った俺は白羽黒羽を創り出して、春蘭と霞が各の武器を振るう間に入り込む。春蘭の大剣を黒羽で地面にたたきつけ白羽で霞の槍を弾き飛ばす。

「今ええ所なんやから、邪魔せんといてな!!」

「そうだ!! 邪魔をするな!!」

はあ……。この二人は揃いも揃って血の気の多いみたいだな……。

「黙れ!! 馬鹿者共が!!」

「ッ!?」

俺がそう怒声をあげると二人が一斉に驚いたような顔をした。

「貴様らはいったい何をしていた。包み隠さず、全て話せ」

俺が二人に威圧感をかけながら低い声で言う。

話を聞いたところ春蘭が袁紹ごときに華琳の領地を怪我されたく無かつたらしく、独断で行動しようとしたらしい。

それを止めさせようと霞が戦っていたのだが、戦っているうちに反董卓連合の時の戦いの決着をつけたくなってしまい、あんな風になってしまったらしい。

「はあ……。春蘭にはもう少し説明するべきだったな、華琳」

「そうね。でも今更言っても意味はないわ。いいわ、春蘭、出



撃なさい」

ただ条件があり、連れていけるのは春蘭の最精鋭の三百人だけだと言っことだった。

しかも城の守備隊と合わせれば千になるとか言い、それで足りなければ春蘭の決死の覚悟で埋めて見せろとか言い出しやがった。

まあ、戦うことは無いはずだから構わないがな。

そして残りの兵は盗賊団の報告が入っているからと、霞を筆頭に討伐に向かえと華琳からの命令が出て出撃していった。

とりあえずいざごきは收拾がつき、俺たちは解散した。

春蘭が出撃してからすでに夜になっていた。その間俺はやることになかったため、部屋で事務仕事をしていた。俺が仕上げないといけない書類はまだまだあるので、時間があるときにやらないとな。

まあ、春蘭が心配じゃないかって言われたら心配と答えるが戦いもないのに心配しても意味ないだろう。そんなコトを思いながら、事務仕事をしているといきなり扉が開け放たれた。

「なんだ、恋にねねか。どうしたんだ、手伝いにでも来てくれたのか？」

そう。扉を開けて部屋に入ってきたのは何を隠そう恋とねねだった。扉をぶち破ったのはねねだろうけどな。

「そんなわけないのです!!　ねねはお前の仕事なんか手伝わないのです!!」

「別に期待なんかしてねえけどな。んで、恋。俺に用事か？」

「なんでねねに訊かないのですか!!」

何でって言われたらねねと話したって話しが進まないと思ったらに決まってるではないですか。

だから恋に訊いてるんじゃないですか。恋だったらふつうに答えてくれると思うからな。

「……空、呼んでた」

「空が?　どこに来るように言われたんだ？」

「……玉座の間」

「分かった」

俺はそう言うのと事務仕事をして肩が凝ってしまったので、肩を回した後に立ち上がり玉座の間に向かうために歩き出した。

「恋とねねはもう遅いから寝な」

「ねねを子供扱いしないで欲しいのですー!!」

両手を振り上げて鷹にでもなっ たつもりなんですか?　とりあえ

ず可愛いから許すけど。ん？ 何を許すんだ？

「分かった分かった。恋、ねねを連れて部屋に戻っててくれ」

「……（コクン）」

俺の言葉に恋はコクンと一回だけ頷いてくれた。

ただ頷いただけなのに、この爆発的な可愛さは何なのだろうか……。思わず抱きしめたくなっちまうぞ……。そんなコトはやらないけど。

「よし、いい子だ。今度飯食べに行こうな」

「……（パアアア）」

俺がそう言いながら撫でると、恋の目が誰が見ても分かるほどキラキラと輝いていた。

ああ、やべ、お持ち帰りしてえ……いやいや、待つんだ俺。今はそんなコトをしている場合ではないだろうが。

「じゃあ、お休みな。恋、ねね」

「……おやすみ」

「むう……おやすみなのです」

俺は二人の言葉に笑みで返すと急いで玉座の間に向かうのであった。

「やっと来たわね、桜牙。待ちくたびれたわ」

「悪いな。ちょっと仕事が残っててな」

俺が玉座の間に行くと主要メンバーの全員が玉座の間に集まっていた。待つ形は違えど、全員が春蘭のコトを心配して起きていたのだろう。

そして主要メンバーの中に懐かしい顔が二つ。俺がこの世界に来て初めて出会った二人だった。

「さて、全員が揃ったことだし、説明してもらおうかしら？ どうして増援がいららないと？」

華琳は華琳の前に立っている二人に話しかける。

「……ぐー」

だがそのうちの一人 程イクがなぜか眠っていた。

「こら、風！ 曹操さまの御前よ！ ちゃんと起きなさい！」

「……おおっ！？」

そしてもう一人のメガネの女の子 郭嘉が程イクにツッコミを入れていた。

なんつー見事なツッコミをやるんだあいつは。お笑い芸人めざせるぞ？

「おはよう。……で？」

今のやりとりをみていた華琳が若干不機嫌になりながら二人に訊ねた。

そして二人が華琳に言ったのは、俺が華琳に説明したのとほとんど同じ作戦だった。

もちろん事前に華琳には説明していたので、全てを理解している。そして華琳はその説明を聞いた後に春蘭に言った。

「……分かった？ 春蘭」

「はあ。だが、お主ら……もし袁紹が七百の手勢を与しやすとしと見て、総攻撃を仕掛けてきたらどうしていたのだ？」

春蘭め、絶対さっきの作戦理解してないだろ？ だってチンプンカンプンだって感じの表情してるもの。

まあ、春蘭の言っていることは作戦の意味を理解してなくても的を射てるから問題ないけどな。

「損害が砦一つと兵七百だけで済みますからね。相手の情報は既にそちらに送っていましたから、無駄死にと言っわけでもないですし。袁紹さんの風評操作にも使えたと思いますけど」

なかなかの策士だな。例え死んだとしても最小の損害と、最大の

利益を与えている。

「ココまでの策を思いつくとは、さすがの一言に限るな。」

「郭嘉、あなたは程イクのその作戦をどう見たの？」

「……」

華琳が郭嘉に訊ねるのだが、なぜか郭嘉はフリーズしたまま動かない。

「つーかちょっとプルプル震えてないか？」

「郭嘉。華琳さまのご質問だ。答えなさい」

「……ぶはっ」

秋蘭がそう言った瞬間、まるで炭酸ジュースの炭酸が噴き出すかのように郭嘉の鼻から赤い液体が噴射された。

「って赤い液体ってまさか鼻血か！？ つーかなぜにこのタイミングで鼻血を噴射してるのこの子は！？」

「ちよっ！？ ど、どうしたお主！？」

もちろんいきなりの事態にさっきまでシリアスだったにも関わらず、全員が驚いたような顔をしている。

「誰か、救護の者を呼べ！ 救護ー！」

「ちょっとボク、お医者さん呼んできます！」

「ち、血ですよ!?!? どんどんど、どうしましゅう!?!?」

「ゆ、雪。あんたおおお落ち着きなさいよ！」

「いやいや、雪も紅葉もどっちも落ち着けよ。戦場で血なんか見慣れてるくせに、なんでこんなところで驚いてんだよ。」

「つーか皆さん落ち着きなさいな。鼻血ごときでそこまで慌てるなよ。」

「あー。やっぱり出ちゃいましたかー。ほら、稟ちゃん、とんとんしますよ、とんとーん」

「……………う、うう……………すまん」

程イクはなんだか随分と手慣れた手つきで郭嘉の鼻血を止めに掛かっている。

「つーかもしかして郭嘉ってそんなに鼻血ばかり出しちゃってるの?」

「郭嘉さん、持病でも持ってるんですか?」

そんなコトを思っていると、流琉が程イクにそんなコトを訊ねていた。

「いいえ、稟ちゃんは曹操さまのところまで働くのが夢でしたから。きつと緊張しすぎて鼻血が出ちゃったんでしょうねえ」

「そ、そうなのか……」

今の程イクの言葉に春蘭でも呆れたように答えるのだから、そうとうだな。

「大丈夫かしら？ 郭嘉とやら」

「は、はい。恥ずかしいところをお見せしました」

頭から血が抜けたのかさつきとは打って変わり冷静そうに話す郭嘉。

違った。鼻から出たから冷静になったんだった。

（桜牙さん。私あんな人、初めて見ました……）

（安心しろ。俺もだ）

普通の人ならあんなタイプの人間を見ることなんかないだろ。

「無理なようなら、あとで構わなくてよ？」

「そ、曹操さまに心配していただいている……！ ……ぷはっ！」

華琳がそう言うと郭嘉は再び鼻血を噴射してやがった。

「衛生兵、衛生兵ーっ！！」

秋蘭が衛生兵を呼んだみたいだが、郭嘉の血液は衛生兵が来るま



で保つんだらどうか……。

とりあえず郭嘉のことは置いて話を進めるとしますか。

「……程イク、代わりに説明してくれるかしら？」

「はいはい」

どうやら郭嘉は最悪の事態になれば、城に火を放ち皆で逃げようとしていたらしい。七百の兵という少ない人数ならばそれも十分に可能だろう。

だから下手に数が増えると動きがとれなくなるからと言う意味も込めて、増援を来ないようにしたらしい。

「どちらにせよ、春蘭の増援は要らなかつたと言うコトよ」

「……ならば、どうして行かせたのですか」

「二人を城に連れてくる護衛は必要でしょう？」

そう。春蘭を向かわせたのは増援のためでなく、程イクと郭嘉と七百の兵を護衛するために行かせたのだ。

俺はそのことを事前に訊いてたんだが、戦いに介入してしまわな  
いかと心配だったのだ。

「華琳さま、今報告が入りまして、袁紹の軍は南皮へと引き上げ  
たそうです」

衛生兵を呼んでいた秋蘭がそうやってきた。

まあ、だいたいは郭嘉程イクの策が上手く行ったみたいだな。損害も無かったみたいだしな。

「郭嘉、程イク。あなた達二人は今後は城に戻らず、ここで私の軍師として働きなさい」

華琳がそう言うつと桂花が何かを言っていたが、雪は何かと嬉しそうだった。

それはそうだろう。いくら秋蘭が手伝っているとはいえ、軍師の仕事は全てが雪と桂花に回ってくる。程イクと郭嘉の二人が加われば、雪に回ってくる軍師の仕事が減るんだからな。

「それでは今宵の軍議は解散よ。程イクと郭嘉は部屋を与えるから、今日はゆっくり休みなさい。流琉と桜牙は彼女達を部屋まで案内してあげて」

「わかりました」

「了解、お姫様」

そして軍議が終わり、俺と流琉は程イクと郭嘉を部屋に案内していた。

「お前らってあのときの二人だろ？」

「おお！　そう言えばどこかで見た顔だと思ったら」

「確かあなたは風の真名をいきなり呼んだ人でしたね」

「その節は済まんかった」

今の俺なら真名の重要性が分かるので、あの子の自分の行動がどれだけ軽率だったか分かる。

「いえいえ、前にも言いましたが気にしてませんよ？」

「兄様、そんなコトしたんですか？　なんか信じられないですね……」

「まあな。色々あったんだ。つーか俺、そこまで完璧超人じゃないし」

俺は流琉の問いかけにこの世界に来たばかりの時のこと思い出す。

……あれ？　そう言えばあの子は三人だったような……。

「そう言えばあの槍使いで青髪の女の子はどうしたんだ？」

「ああ、星ちゃんは幽州のあたりで分かれちゃったよ。路銀が無くなったから、ちょっと仕官してくるとか」

幽州つて言えば公孫贇のところだよな？　公孫贇は袁紹に負けて逃げて劉備の所にかくまってもらったから、今は劉備の所にいるってコトか。

「まあ、あの子がそんな簡単にやられるわけないよな」

「そうですね。ちょっとやそつとで死ぬような人物ではありませんし」

俺が呟くと、郭嘉がわざわざ答えてくれた。

会つとしたら多分戦いの時になるだろうがな。

「まあ、とりあえずこれから頼むぜ？ お二人さん」

「はい。よろしくなのですー、お兄さん」

「別にあなたのために働くわけではないのですよ。私は曹操さまのために……」

はいはい、分かってるでございますコトよ。なんでこの軍の軍師はこんなにも華琳が好きなのかねえ……。確かに華琳は魅力的だが……じゃなくて女同士はどうかと思つて話だよ！？

まあ、人の趣味にとやかくつけるつもりはないけどな。

「で、なんで二人とも真名で呼んで良いって言われたのに、呼ばないんだ？」

「お兄さんも風達を真名で呼ぶことになってましたよねー。気、使わないでいいですよー」

別に気を使っていたワケじゃないんだが、前例があるから迂闊に

呼んではいけないような気がするだけだ。

「それに嫌なコトだったからあんまり覚えてないですし、今は別にそこまで怪しい人とか思ってますから、大丈夫ですよー」

「そ、そうか」

まさか気づかれているとは……。おっとりしてるようで案外鋭いみたいだな。

「まあ、これからは真名で呼ばせてもらうよ。で、問題はなんで稟が華琳のコトをずっと曹操って呼んでるかなんだが……」

「そう言えばそうですね？」

俺の言葉に流琉も気づいたようで便乗してきた。

「そ、それは……そんな、畏れ多い」

「素直に呼んだ方がいいぞ。華琳はそう言ったの嫌いだからな」

「そうですか？ では……か……かり……」

「……」

稟は途中までそう言うとなぜかフリーズしてしまった。

ん？ フリーズしてしまった？ ……………まさか！？

「雪、風……！そこ居ると危ない……！」

俺はそう叫ぶと手を合わせて魔力を手に着けた魔法陣に流し込み、盾を創り出す。

「……………ぶはっ！…！」

それを構えるのと同時に稟は鼻血を噴射しやがった。

あゝ、やっぱりかあゝ。まだ華琳の名前を呼ばせるには耐性をつけさせるしかないなあゝ。

「はあ……………。俺が稟を背負うから早く行くか……………」

「そ、そうですね……………」

「早く行きましょう」

と云うことで俺は稟を背負い、風を二人の部屋に連れて行った。

余談になるが、次の日に俺が創り出して放置していた盾に大量の血が付いていたことにより、城内が騒ぎになると云うのは知る由もなかった。



第参拾七話 『業炎の剣帝、再会すること』 (後書き)

アンケートまだまだ実施中です!!

感想、投票待ってます!!



第参拾八話『業炎の剣帝、劉備を試すのこと』

side 桜牙

軍師達を集めての軍議が終わりかけていたところでその情報が入ってきた。袁紹が、劉備たちの国 徐州の国境を越えたのとことだった。

華琳はあまり驚いてはいなかったようだが、確かに可能性としては有り得たからだ。だが俺的には本当にやるとは思わなかったがな。

おそらくは袁術相手に精一杯の劉備を見て好機だ、とか思ったワケじゃなく、袁術に徐州を独り占めされるのが急に惜しくなったんだろうなあ。

「なんて子供みたいな思考してんだよ……。風、悪いけど茶を一杯」

「はい」

癒されますなあ。世間のゴタゴタなんか忘れそうになっちまうよ。

と思いつながら茶を飲んだ後に華琳に言う。

「で、これからどうするつもりなんだ？」

さっきまでの軍議で決まっていたのは、近いうちに攻めてくるだ

ろうと思われ、袁紹への対応策。

もちろんその策は袁紹がこちらに攻め居ることを前提とした作戦だから、こんなコトになった以上は軍議の内容は全部白紙になったつつつことだ。

はあ……。さっきまでの話し合いが全部パーだよ、まったく……。

「皆の意見を聞きたいわ。これから我らはどうするべきかしら？」

「徐州の遠征軍には袁紹、文醜、顔良と言う敵の主力が揃っています」

なのでこれを機に南波へと攻め入り、徹底的に袁紹を叩きのめすと言うのが、稟の考えだった。

「袁紹も袁術も大軍ではありませんが、先見の明のない小物ゆえ、放っておいて良いでしょう」

だが劉備はいずれ華琳の前に立ちふさがることになるだろう相手。これを期にまずは徐州を攻め、劉備を討つのが妥当だと考えたのが桂花。

なんとも見事に意見が分かれたもんだ。稟は袁紹を叩きのめし、桂花は劉備を叩くのが良い、か。

「桜牙はどう思う？」

しかもそんな場面で華琳が俺に話を振ってきた。

「劉備を寄つてたかつて袋叩きにするか、それとも袁紹のところ  
に火事場泥棒に行くか、ねえ」

「……」

俺がそう言つと稟と桂花が黙り込んでしまった。桂花に至つては  
なんか睨みつけてきてるんだけど……。

だつて仕方ねえだろ、簡単に話をまとめればこんな感じなんだか  
らな。

「俺的にはどっちも反対だ。弱い者イジメも、火事場泥棒をする  
気もねえ」

それよりも今は力をためて、次の動きに最善の一手を打てるよう  
に力をためるのが静観すればいいだろう。

貸しを作ろうにも今のところはそんな気は華琳には無いだろう。  
善の押し売りをしたつて買い叩かれるだけだからな。

そんなコトになつても最低限に俺と空と恋、春蘭がいればなんと  
かなるがな。

「そのとおりだね。今は力を蓄えるように。以上、解散！」

華琳の言葉で軍議は終わりを告げた。

さて俺が知つてる三国志じゃあこの後劉備は蜀に移るはずだ。だ  
が現状では北を袁紹、南を袁術、そして北を俺達にと三国に囲まれ  
ていて逃げ場がない。



「時間通りか。行くぞ、雪」

「え、えっと……ドコにですか？」

「玉座の間だ。だろ？ 真桜」

俺は眠そうにしている真桜にそう訊ねた。

「なんや知つとつたんか……」

真桜は眠い目を擦りながら大して驚いたような顔もせずと言う。

眠くて思考がまだ覚醒してないんだろうな。

まあ、時間的にはそろそろ来る頃だろうと思っていたがな。

「行くぞ。多分もうみんな来てるはずだ」

「は、はい……。でもなんの集まりなのでしょう？」

「行ったら分かるさ」

そして俺たちは玉座の間に三人で向かっていった。

玉座の間に向かうとすでにほとんどの主要メンバーがそろって  
いた。

今から徐州に強襲を掛ける、と言った類のことはないだろう。華  
琳の性格から考えてそんなコトをやるとは思えないし、玉座の側に



「……すう」

沙和と風となぜか雪は全力全開で寝てるし。つーか立ったまま寝れるってこつちもある意味器用だな、おい。

「お前ら、起きろ」

「「「……おおっ！」「」「」

まさか反応までもが一緒だとは思わなかったぞ。

「さすが、桜牙さん。女の子の寝込みを襲うなどと、良い度胸を  
してますね？」

「「「「「ツッ!?!」「」「」「」

いきなり後ろから現れた空に沙和、真桜、凧、雪、風の五人がかなり驚いていた。

しかも空は頭から全体をロープで覆ってるため、ぱっと見敵に見えなくもない。

まあ、俺は本家のビックリマンのアルで慣れてるから驚かないがな。

「誰が襲うって？ ああん？ 調子に乗るなよ？ エクスカリバ  
ーで切り刻むぞ、ゴリア」

「おやおや、それは大変ですね」

そんなコトをはなしていると、ようやく華琳たちが玉座の間に入ってきた。

華琳はピリピリした様子はないが、平気で無茶を言ってくるから参考にはならない。

「全員集まったようね。急に集まってもらったのは、他でもないわ。秋蘭」

そして華琳が話し始めた。

「先ほど早馬で、徐州から国境を越える許可を受けに来た輩が居る」

その言葉にわずかながら集まったメンバーに緊張感が駆け抜ける。

「入りなさい」

華琳の言葉で全員が玉座の間の扉を見つめる

俺の予想が正しければ入ってくるのは

「関羽……っ!？」

やはり俺の予想したとおりになったか。

そう。玉座の間に入ってきたのは艶やかな黒髪を持つ武人関羽だった。



「見覚えのある者もいるようだけれど、一応名を名乗ってもらいましょうか」

「我が名は関雲長。徐州を治める劉玄特徳が一の家臣にして、その大業を支える者」

華琳の言葉を受けて関羽が自己紹介をする。

とりあえずはだいたい俺が予想したとおりになったか。

そして関羽がなぜココに来たかを説明し始めた。

関羽は袁術と袁紹の包囲網から逃げるために、華琳の領地の通行許可を求めに来たようだ。

そして華琳の領地を抜け、その先の益州に向かうと言うわけだ。

袁紹と袁術の二大勢力と正面から戦うよりも、華琳の領地を通り逃げようと言うのは軍師が集まった軍議の話で予想が出来た。

だが俺たちは劉備と同盟を結んでいるわけではない。

「正直、関羽もこの案は納得してないようだね。……そんな相手に返事をする気にはなれないのよ」

確かに関羽の態度を見ればこの案に対して不満を持っているように見える。

「ならば何故、このような決死の使いを買って出たんだ？」

俺は関羽に見向きもしないで、下らなそうに言う。

「我が主、桃香さまの願いを叶えられるのが、私だけだったからだ。それに我々が生き残る可能性としては、これが最も高い選択でもあった」

「主のためやて。どっかの誰かさんみたいなこと言うやん」

霞が春蘭のほづを見ながら言う。

「わ、わたしはこんなに愚直ではないぞ！」

「「「「……「「「」

しかしそんな春蘭の言葉に誰も何も言わなかったのだった。

「だからこれからその返答をしに劉備の元へ向かおうと思うのだがけれど……。誰か、付いてきてくれる子はいるかしら？」

と言うことで城を出発したんだが、やはりと言うべきか全員が華琳についてきた。

しかも夜を徹しての行軍だったのにも関わらず、準備は早いわ誰も文句の一つも言わないわで、少数の行軍だったとは言えいつもより手際が良かった気がする。

華琳は相も変わらず人気なんだなと俺は思った。

「華琳さま。先鋒から連絡がきました。……前方に『劉』の牙門旗。劉備の本陣のようです」

本当に国境ギリギリの所だな。これ以上奥に陣を張ったなら、やこしいことになること間違いなしって感じの所だ。

「なら関羽。あなたの主の所に案内して頂戴。何人が、一緒に付いてきてくれる？」

「華琳さま、この状況で劉備の本陣に向かうなど

「大丈夫だ!!」

俺は桂花の言葉を遮りながら言う。

「俺も別に劉備を信頼してるわけじゃない。確かに畏があるかもしれない。だが……」

俺はそこで言葉を一旦切り、関羽を見てから言う。

「畏だってんなら、俺が華琳を守るし畏だった時点で、俺がそいつらを全員 殺す」

俺は本気の殺気を関羽に放ちながら言う。

すると関羽が膝から崩れ落ちたので、俺はそれを仕方なく支えてやる。

「そう。期待してるわ、桜牙。あとは春蘭、季衣、流琉もついてきなさい。残りはこの場に待機。異変があったなら、秋蘭と桂花、

雪の指示に従いなさい」

そして俺達は関羽の指示に従って劉備の元に向かっていった。

「曹操さん！」

俺たちが本陣に向かうと劉備が出迎えてきてくれた。

「久しぶりね、劉備。連合軍の時以来かしら？」

「はい。あの時はお世話にやりました」

うおおお〜っ!? やめてくれ!? そんな澄んだ瞳で俺を見ないで!? もっと濁った目で接して!?

「それで、今度は私の領地を抜きたいなどと……また、随分と無茶を言ってきたものね」

「すみません。でも、皆が無事に生き延びるためにはこれしか思いつかなかったので……」

「まあ、それを堂々と言うあなたの胆力は大したものだわ」

華琳はそう言うと言行許可を出した。ただ街道はこちらが指定した街道で、米粒一つを強奪したとしても、生きては返さないのとだった。

さらにそのあと華琳はココにいる全員を驚愕させる言葉を口にし

た。

通行料は 関羽だと。

その言葉に劉備は信じられないと言つような表情を浮かべていた。

「何を不思議そうな顔をしているの？ 行商でも関所でも通行料くらい払うわよ？ 当たり前でしょう」

華琳の言いたいことは関羽をこちらに引き渡せば、袁紹と袁術の相手もこちらがやり、無事に生き延びることが出来る。

だが関羽を渡さなければ華琳の領地は通ることが出来ずに、劉備は袁紹と袁術と戦い全滅することになるだろう。

そう。華琳は関羽を引き渡して全員生き残るか、関羽共々全員が死ぬかを訊いているのだ。

「曹操さん。ありがとうございます。でも、ごめんなさい」

だが劉備は関羽を渡すことを良しとはしなかった。

「愛紗ちゃんは大変な私の妹です。鈴々ちゃんも朱里ちゃんも…  
…他のみんなも、誰一人欠けさせないための、今回の作戦なんです」  
だから、と劉備言葉を続ける。

「愛紗ちゃんがいなくなるんじゃない、意味がないんです。こんな所にまで来てもらったのに、本当にごめんなさい」

そう言って劉備は頭を下げた。俺も甘ったれだが、俺よりも甘ったれな奴を初めて見たな。

「そう。……さすが徳をもって政を成すという劉備だね。……残念ね」

華琳は別に残念そうでもなさそうな声でそういった。

そして劉備は華琳の領地を通るといふ手段がなくなったために、諸葛亮に他の経路を調べるように言った。

だがそこで華琳の怒声が劉備の本陣に響き渡った。

「甘えるのもいい加減にきなさい!!」

華琳の怒声にその場にいた劉備の軍勢の全員が縮こまった。

こちらは華琳が絶対にそう言うと思っていたので、別段驚いた様子はない。

「たった一人の将のために、全軍を犠牲にするですって？ 寝ぼけた物言いも大概にするコトね!!」

「で、でも愛紗ちゃんはそれだけ大切な人なんです!」

劉備も負けじと華琳に言い返す。

「なら、そのために他の将 張飛や諸葛亮、そして生き残った兵が死んでも良いというの!？」

「だから朱里ちゃんに何とかかなりそんな経路の策定を……」

「それがないから、私の領を抜けるといふ暴挙を思いついたのでしょう？ ……違うかしら？」

華琳は劉備の言葉を遮るように言葉を発する。

この規模の軍が袁紹や袁術の追跡を振り切りつつ、安全に荊州か益州に抜けられるような都合の良いルートはない。

だからこそ最終手段として、華琳に助けを求めてきたのだ。

もちろんそのことを調べている諸葛亮も分かっていることだ。

「現実を受け止めなさい、劉備。あなたが本当に兵のためを思うなら、関羽を通行料に私の領を安全に抜けるのが一番なのよ」

この場を力のない劉備が切り抜けるにはこれが最善の手と言えるだろう。仮に関羽を失ったとしても全員が死ぬわけではないし、もしかすれば関羽を連れ戻すことも可能かもしれないからな。

そのことを聞いた劉備が何かを言おうとするが、華琳に遮られる。おそらく劉備は自分が関羽の代わりになるうとしたのだろうが、国の頭を失ってしまったては元も子もない。

「……どうしても関羽を譲る気はないの？」

「……」

華琳の言葉に劉備はもはや何も言えないとばかりにうつむいてし

まっ。

「まるでだだっ子ね。今度は沈黙？」

「……」

華琳は呆れたように劉備に向かって言う。現実を見据え未来を築こうとする者と、理想の未来を掴もうとする者。

似たようで似ていない二つの思念の行き先はどちらも平和を望むもの。

「いいわ。あなたと話していても埒があかない。……勝手に通って行きなさい」

「……え？」

「聞こえなかった？ 私の領を通って良いと言ったのよ。……益州でも荊州でもどこへでも行けば良い」

その言葉に春蘭が声を上げるが、それを無視して華琳はただし、と言葉を続けていく。

「先に行っておくわ。あなたが南方を統一したとき、私は必ずあなたの国を奪いに行く。通行料の利息込みでね」

「……」

「そうされたくないなら、私の隙を狙ってこちらに攻めてきなさい。そこで私を殺せば、借金は帳消しにしてあげる」



また無理なことを言いだしてるな、華琳は。仮に劉備の軍だけが攻めてきたとしても、俺が居る限りは華琳を殺すことは不可能だ。

「……そんなコトは」

「ない？　なら私が滅ぼしに言ってあげるからせいぜい良い国を作って待っていていなさい」

なんか劉備が可愛らしいから関羽と一緒に可愛がってあげるとか言ってたような気がするが、聞かなかったことにしよう。

「く……曹操どの！　これ以上桃香さまを侮辱すると、いくら貴方とはいえ……ッ!？」

関羽がそこまで言うと言葉を切った。

当たり前だ。俺が一瞬にして関羽の後ろに回り、白羽黒羽を創り出して首に当てていたからだ。少しでも刃を引けばその瞬間に関羽の首は跳ね飛ぶだろう。

「貴方とはいえ、どうするんだ？　関雲長」

俺は殺気を関羽にモロに当てながら小さくつぶやく。

「やめなさい、桜牙。稟、桜牙。劉備達を向こう側まで案内なさい。街道の選択は任せる。劉備は一兵たりとも失いたくないようだから……なるべく安全で危険のない道にしてあげてね」

なるほどねえ。だから俺を連れてきたってコトか。

おそらく俺がいなくとも戦えるだろうコトから行かせるんだろ  
う。

劉備に現実の厳しさを教えてやれって言う意味も込めてな。

「それでは私たちは戻るわよ。……劉備、あなたがした選択……  
間違っただけならば良いけれどね」

「……間違っただけじゃないです。それを絶対に証明して見せます  
から」

「良い返事だね。……帰るぞ」

そして華琳は残った皆を連れて戻っていった。

残された劉備達はその華琳の後ろ姿を食い入るように見送るのだ  
った。

そして俺と稟は劉備達を安全なルートで案内することにした。

俺と稟が案内するルートのおかげで俺たちは敵に会うことなく華  
琳の領地を抜けることが出来ている。

だが俺たちの後ろからついてきている劉備達からは重い空気しか  
伝わってこない。そんな中俺は劉備に問いかけた。

「劉備、あんたは何のために戦うんだ？」

「ふえっ!? え、えつと私はみんなで仲良くして平和な世の中を作りたいんです。本当は戦いたくなんかないんです。話し合いで解決したいんです」

なるほどねえ。こいつは随分筋金入りの理想家だな。

「仲良くして平和な世の中を作る、か。なら、何故貴様は刃をとったのだ?」

俺は劉備が持っている刀に目を向けながら言う。これは紛れもない戦う意志を込めたものだ。

「そ、それは……」

「話し合いで解決できないから刃をとったのだろうか? それが今さら話し合いなどと、戯けたコトを言うな」

「……」

俺は立ち止まり劉備の目を見据えながら言う。

確かに劉備の理想は俺が基の考えの基盤にしていたものだ。

だがそれでもそんなことは不可能なのだ。俺たちは全知全能の神でもなければ、そんな力を持っているわけでもない。

だからこそ俺は華琳の霸道に加担し、国を平和にすることに力を貸したのだ。

「刃を持ったまま話し合おうと言おうとも、信じられるわけが無かる。」

「た、確かにそうですが……」

「そうですが、なんなんだ？ 理解できなかったのか？」

俺がそう言うときさっきの華琳との話し合いで俯いてしまったように、再び俯いてしまった。

だが今ココで言うておかなければ、いずれにしても現実を理解できないだろう。

何の犠牲もなしに平和など掴めないと言うことをな。

「ならば分かりやすく教えてやる。」

俺はそう言うとき瞬動を使い関羽の後ろに一気に回り込む。そして白羽黒羽を再び創り出して、関羽の首筋に当てる。

もちろん身動きがとれないように手を後ろに回してだ。

「劉備、張飛を殺せ。さもなければ関羽を殺す。」

「そ、そんなコト、早くやれ……！ 関羽を殺されたいのか……！」  
「ッ！？」

俺はそこまで言うとき関羽を離して劉備の元に戻す。

俺がそんなコトをやったことによって全員が警戒態勢だ。張飛に

至っては今にも斬り掛かりそうになっている。

「分かったか？ 話し合いで全て解決できないように、犠牲なしでは平和な世など作れぬ。今回は俺だから良かったが、戦場であれば貴様らはすでに死んでいる」

「……………それでも、それでも私は今の考えを貫きたいんです!!」

劉備は俺のことを睨みつけながら言ってくる。

言っていることは確かに理想論を並べただけだ。だがそんな彼女の瞳には意志が宿っている。この国を平和にしたいという意志が。

「貴様が並べているのはただの理想論だ。理想だけでは何も変えられん。それでもそれを貫くならば、最後まで貫け」

「え……………っ?」

「それがお前の意志なんだろ？ 惑わされるな、前を見る、そして理想を現実にするために動け」

俺は劉備に笑いかけながら言う。

もし、俺が最初に華琳と出会っていなければ俺は劉備のために力を振るっていただろう。

皆がニコニコして平和に暮らせるような世にするために動く劉備にな。

「ココを真つ直ぐ行けば領内を抜けるはずだ。まあ、俺を信じる

か信じないかは自由だ。じゃああとは頑張ることだな」

俺は劉備にそう告げると稟と共に華琳のところに戻っていきつとすると何故か劉備に呼び止められた。

俺は立ち止まり劉備の方に向き直る。

「あの、私、絶対に自分の考えは曲げません!!」

「そうか」

フツと俺は笑いながら答え華琳の元に戻った。

第参拾九話『業炎の剣帝、袁連合軍と戦うの』

side 桜牙

劉備が無事に華琳の領地を抜けてからと華琳が袁紹を追い返してから数日かが経過した。

次はいよいよ袁紹と戦うために本格的な策をたてる軍議が執り行われていた。

話によればどうも袁紹と袁術の両軍が官渡に兵を集中させているとのことだった。

兵力が単純には倍になり、戦うのが辛くなりそうだが指揮系統が整ってなければただ人が増えただけにすぎない。しかも上手く連携が取れなかった場合は、互いの足を引っ張り合い、むしろ味方が不利になることが多い。

黄巾の時や反董卓連合のときがよい例だろう。さらに反董卓連合では主に袁紹と袁術の二人が連携を崩していた。そんな二人が組んだところで、驚異にはならないはずだ。

ともかくにも二面作戦を取らなくて良くなった分、少しだけ楽になったのは事実だ。

「……んーと」

と今まで説明したのだが、季衣は分かってなかったのか唸ってい

た。

「あはは。分かってない顔だね、季衣」

それを見た流琉がわずかに笑いながら季衣に言う。

確かに流琉は季衣よりも物わかりが良いから、理解が早いからな。

「うん。……うー……どっいう意味ですか、春蘭さまあ」

しかもそこで春蘭に助けを求める季衣も季衣だと思っただが……。

「うむ。二面作戦を取らなくて良くなった分、こちらにとっては楽になったということだ」

「どう楽になったの？」

春蘭がそう言つと華琳がニヤニヤとしながら春蘭に言った。

まあ、今の説明だつたら誰でも言えるようなコトだからなあ……。

つーか華琳も分かってない春蘭に対して訊くのはやめてやれよ。

「そ、それは……り、龍崎。説明頼む」

すると珍しく春蘭が俺に言ってきた。最近は割と素直になってくれたから、からかえないんだよなあ……。

今ここで、おい説明してやれ！！とか言われたら絶対からかってたもんなあ。



「二面作戦だと、季衣と流琉は別々に行動しないとイケなかったら？」

「うんうん」

「だが、今敵は一つに纏まってるから季衣と流琉は一緒に戦えるようになったってコトだ」

それに連携が取れていない敵に対して、俺たちは連携が取れているために数が増えてもお互いに足を引っ張り合うようなコトにはならないからな。

「仲が悪い奴ら同士が組んだところで連携が取れないしな」

「仲が悪いって季衣と張飛さんみたいにですか？」

俺がそう言っていると流琉が質問してきた。

言われてみれば確かに季衣と張飛の仲が悪かったような気がするなあ……。なんで仲が悪いかは知らんがな。

「そう言うことだ。流琉も張飛と一緒に戦うより、季衣と戦った方がやりやすいだろ？」

俺がそう説明すると季衣に流琉と張飛を同じように言うな、と怒られてしまった。まあ、その後に説明が分かりやすかったと言われたからプライマイ0だな。

しかも何故か春蘭は俺が説明し終えた後に華琳に俺を見習うよう

に言われていた。

「ともかく。……兵を集結させて戦えるというなら、こちらに負ける要素はなにもないわ。ただ、警戒すべきは」

「袁術の客将の孫策の一党かと」

華琳の言葉を引き継ぐように秋蘭がそう言った。

俺も『呉』のメンバーとは会ったことがあるが、その力は確実に袁紹や袁術などとは比べものにならないほどの力だ。

「そういうことね。だから袁術の主力には春蘭、あなたに当たってもらおうわ。第二陣の全権を任せるから、孫策が出て来たらあなたの判断で行動なさい」

さらに俺、季衣、流琉、恋の四人が春蘭の補佐として選ばれた。

俺が選ばれたのは多分春蘭が暴走したときに止めるためだろうな。

「袁紹に相対する第一陣は霞が務めなさい。補佐で欲しい子はいらる？」

「それなら、風達三人がええな。桜牙、貸してくれへん？」

霞は俺の方を向きながらそう言ってきた。

「ああ、別に構わん。あの三人も霞と一緒に戦った方がいい経験が得れるだろうからな」

俺の所だけで動くよりも他の將の元で動けばその経験は自らの力となり、刃をよりいっそう輝かせるだろう。

「なら紅葉と空は、秋蘭と一緒に本陣に詰めなさい」

「分かったわ」

「わかりました」

と俺が言うと桂花が霞に秘密兵器を持って行けとかなんとか言っていた。

まあ、俺が訊ねたところで桂花が教えてくれるわけがないので、そこは敢えて訊ねないことにした。どうせ戦いになれば、見ることが出来るんだからな。

「袁術は作戦立案には顔を出さないはずだから、相手の指揮はおそらく袁紹になるでしょう」

だから桂花は袁紹の考え方を予測して、基本作戦を立てると言うのが華琳の命だった。

稟、風、雪、ねねの四人は桂花の補佐をして予想が外れたときの対処を即座に出来るように戦術を詰めると言われていた。

「他の皆も戦の準備を整えなさい。相手はどうしようもない馬鹿だけれど、河北四州を治める袁一族よ。負ける相手ではないけれど、油断して勝てる相手でもないわ」

そこで華琳は言葉を一度切ると、息を吸い再び口を開く。

「これより我らは、大陸の全てを手に入れる！ 皆、その初めの一步を勝利で飾りなさい。いいわね！」

一度方針が決まってしまえば出撃まではあっという間だった。二部隊分の準備をまとめて行って良くなった分、出撃までに掛かる時間はいつもよりも早いものだった。

それにしても気になるのが桂花や真桜が言っていた秘密兵器の存在だ。そのことを何度訊ねても教えてくれなかったのだから、戦いの時に見るしかないだろうな。

なんか官途に来たら組立始めたところを見ると、結構な大きさになるんだろうなあ。

そしてようやく官途に辿り着いた俺たちが見たのは辺りを埋め尽くした袁一族の連合軍と巨大な櫓の列だった。

「あの櫓は厄介ね」

華琳の言うとおりの櫓から陣形を読まれたり、矢を射られたりしたらたまったもんじゃないだろう。

いざとなれば『ジーク・インパクト』でぶっ飛ばせば済む話だけだな。

「大丈夫です。この時のための秘密兵器ですから。真桜、用意は

出来てるわね？」

「完璧や！ 任しとき！」

だけど桂花と真桜がなんかやる気だからそれはやらないことしよう。俺の技は秘密兵器の中の最終兵器とでもしておくか。

「……華琳さま、袁紹が出てきました。あの櫓も一緒です」

そんなコトを話し合っていると秋蘭がそう言ってきた。

「動くの！？ あの櫓は!?!」

秋蘭がそう言つと華琳が珍しく驚いたような口調になっていた。

「つか無駄なところに金かけてるなあ……。もっと他にも使い道があるだろって言うのに……」。

「まあいいわ。行ってくるから、準備をしておきなさい。いつでも攻められるようにしておいて」

華琳はそう言つと袁紹と舌戦をするべく前に出て行った。

それで華琳が舌戦に向かったすぐ後に櫓に向かって岩が投げられるのが視界に入った。

まさか秘密兵器が石投機だったとは……。そんなコトを言っているうちに、いつもいつも通り自信に満ちた表情をしている華琳が帰ってきた。

「お疲れ、華琳」

「ええ。桂花、後で真桜には褒美を与えておくように。あの石投機は大したものだわ」

俺の言葉に答えると華琳が桂花にそう言った。

確かにあんなものをこの時代で作るなんてスゴいかもしれない。

「皆、これからが本番よ！ 向こうの数は圧倒的。けれど、向こうは連携も取れない黄巾と同じ烏合の衆よ！」

そして華琳が戦いの前の号令を掛け始めた。

「血と汗に彩られたあの調練を思い出しなさい！ あの団結、あの連携をもつてすれば、この程度の相手に負ける理由などありはない！ それが大言壮語でないことは、この私が保証してあげましよう！」

華琳の言葉を受けて兵士全員が各々の武器を構える。

「全軍、突撃！！」

そして秋蘭の言葉により戦が開戦した。

「ッ！？」

進軍をしていると両側から不意に殺気を感じ、俺は白羽黒羽を創り出して両側に刃を振るう。

それと同時にガキーン！！　と言う金属同士を打ち付けたような独特の音が戦場に響きわたり、白羽黒羽のどちらにも強烈な衝撃が来る。それを振り払うように俺は回転をしながら、白羽黒羽を振るう。

そして相手の姿を確認する。一人は孫権に使っていた将の一人の甘寧。そしてもう一人は見たことがないような少女だった。何とも忍者のような少女だった。

「久しぶりだな。甘寧、反董卓連合以来か」

「そうだな。久しぶりで悪いが、今は敵だ。全力で行かせてもらう」

甘寧はそう言いながら自らの武器に力を込める。それを見てもう一人の少女も武器を構える。

少女が持っている武器は身の丈ほどもある日本刀のような刀。日本刀とは違うのだろうが、作りは大分似ているようだった。

「ハッ、上等オ！！　前回からどれだけ腕を上げたか見てやるよ！！」

俺はそう叫んで、白羽黒羽を構える。

「甘興覇、参る！！」

「周幼平、参ります!!」

そして甘寧と周幼平　周泰が一齐に俺に切り込んできた。その早さはまさに神速の如し、あの速さで迫られたのならば、並大抵の奴ならば消えたようにしか見えないほどの速さだ。

だが俺にとってはただ速いだけで、見失うほどと言うわけではない。むしろこれくらいの速さならば、ちょうど良いと言う速さだ。

俺は切り込んできた甘寧の刃を白羽で受け止め、周泰の刃を身を捻り紙一重で回避する。そして甘寧の一撃の威力を受け流した後に、甘寧の後ろに回り込み甘寧を周泰に向けて突き飛ばす。

しかし周泰はそれを受け止めることはせずに、俺の首筋目掛けて何の躊躇もなしに刃を振るってきた。俺はそれを黒羽で受け止めた後に、もう片方の白羽を周泰に突き出す。

しかし周泰は一瞬にして距離を置くと、今度は甘寧が後ろから横風刃に刃を振るってきた。それに対し俺はしゃがむことによりそれを回避する。

「よっ」と

そして白羽を振り上げて、甘寧の武器を弾き飛ばす。そして完全に無防備になった甘寧へと白羽を振るっただが、それを周泰に防がれる。

しかも周泰はこの一瞬の間に甘寧の武器を回収していたらしく、甘寧の武器を渡していた。



「はああああっ！！」

そして甘寧は俺に刃を振り下ろしてきた。しかし、俺はとっさに身を引いて甘寧に一閃を回避する。

「前よりは強くなったみたいだな、甘寧。だが」

俺はそこまで言うのと瞬動を使い、甘寧と周泰の後ろに一瞬にして回り込む。俺が移動したことに一瞬だけ遅れた二人にはすでに俺に刃を振るわせるだけの隙があった。

しかも俺に対してこれだけの隙を見せたってのは、かなりの痛手だろうな。

「まだまだ俺の刃には届かない」

俺はそう言いながら甘寧と周泰の武器を弾き飛ばす。二つの武器は回転しながら綺麗な放物線を描き、二人の遙か後方に突き刺さる。武器を失って惚けている二人の喉元に俺は刃を突きつけながら言う。

「俺の勝ちだ。甘寧、周泰」

俺がそう言うが二人はまだ諦めたような目をしていなかった。

それを見たからと言うわけではないが、俺は二人の喉元に突きつけていた刃を引き白羽黒羽を『時空の歪み』にしまう。

そんな俺の行動に不思議がったのか、周泰が警戒しながら訊いて

きた。

「何故、私たちを殺さないのですか……？」

普通だったならこんな反応だろうな。敵と対峙して、あと一歩いや、すでに詰め段階に来たというのにも関わらず、刃を引いたのだからな。

もちろん俺は最初からこの二人を殺す気はなかったし、第一に甘寧からは「敵意」を感じることは出来ても「殺気」を感じることはできない。

つまりは甘寧も敵として俺と対峙はしているが、どちらにしる殺すつもりはないと言うことだ。

「何故って、こんな下らねえ袁連合軍のお前らに勝ったって意味ないからな」

そう。今の『呉』の実力は数には劣るものの、個人の力量では袁術などには負けはしないからだ。言い換えればこれからいくらでも強くなると言うことだ。

それだったらこんな雑草どもに埋もれている蕾を摘むよりも、雑草から蕾を出してやった方が良くいらな。蕾はいつか花を咲かせるように、努力した者はいずれその努力が実る日が来る。

互いの目的は国を治めること。王たる資質を兼ね備えた者同士が戦うことにより、互いに分かりあえるから今は助けるんだ。

「それにウチの第二陣の全権は俺にじゃなくて、春蘭にある。何

をやったか知らんが、春蘭と戦ってるはずの孫策が撤退していくぞ？」

俺が言うように孫策達が撤退していくし、すでに俺が甘寧達と出会った時点で戦いはすでに中盤で俺たちが優勢だった。

そしてすでに現在は負けが決まったような戦だったため、撤退して行ったんだろうな。甘寧と周泰にも撤退するように伝令が来たみたいだしな。

おそらくは前の借りとやらを返すために見逃したんだろうな。それに、このまま行けば孫策達は袁術を潰せるだろうな。

孫策達の隊は全体的に見ても被害が少ないが、袁術の被害はかなりのものだ。『孫呉』が袁術の元から離脱するなら今が好機だろう。

「早く行きな。孫策が待ってるはずだ」

俺が言つと甘寧と周泰は俺に一回だけ礼をすると急いで撤退していった。

さて、俺は残りの袁紹の軍を潰すことにするか。

そう思った俺は再び白羽黒羽を創り出して、戦場に身を投じた。

あれから少ししか時間は経ってはいないが、俺が袁紹の兵士の残りを始末している間に秋蘭と空、それに紅葉が袁紹の本陣を落としてきたようだ。

さらに霞が南波を向かって行軍師ているらしい。まあ、とにかくこれに袁紹は何の力もなくなったな。おそらくは袁術も孫策にやられてる頃だろうし、実質的には俺たちが一番の力を持った国になったわけだ。

ちなみに現在俺は華琳の元に戻ってきている。逃げ出した袁紹を凧達三人が追撃したらしいのだが、どうにも逃げられてしまったらしい。

「……そう。麗羽は逃がしたか」

それを聞いた華琳がいつもとあまり変わらない様子で言った。

「……申し訳ありません。こちらの予想以上に素早い相手だったもので……」

まあ、逃げ足だけは速いとも言っからな。普通に走ると逃げるのとは違うんだらうな。……逃げたことないから分からないけど。

「まあいいわ。ここまで兵を失っては、再起は困難でしょう。捨て置きなさい」

華琳の言つとおり俺が袁紹の兵はほとんど殲滅した。だから兵は残っていないのだ。

真名で呼び合っている仲みただが、敵になった友を斬る覚悟もない人物が人の上に立つことなど到底不可能だろう。

今の世は乱世。友と、戦友と、悪友と、戦っていかなければならない敵はたくさん居る。それが天下を治めると言うことだけ

「さて、軍を撤収させるわよ。半分は私と共に南波へ進撃。残り  
は桂花と共に、城に戻って事務処理をしておきなさい」

「御意！」

華琳の言葉に返事を返す桂花。

さて、南波への進撃には空も行くと思うから俺は事務処理でもする  
か。空は何だかんだ言って信頼できる。俺が言わずとも皆を守っ  
てくれるだろう。

その前に守られなきゃならなくなるような事態には、陥らないと  
思っけどな。

「それから……春蘭」

そんなコトを考えていると華琳が春蘭のコトを呼んだ。

「……何が言いたいかわかるわね？」

華琳の言いたいことは何故孫策たちに追撃を掛けなかったのか、  
と言うことだろう。あの状況で追撃を仕掛けていれば確実に孫策た  
ちを倒すことが出来ていただろう。

しかし春蘭は借りを返すと言う名目で、追撃の指示が出ていたに  
も関わらず孫策への追撃をやらなかった。おそらく華琳が言いたい  
のはそう言うことだろう。

「は。いかような処罰でも……」

「いずれ孫策とも戦うことになるでしょう。……自分のしたことに後悔はない？」

「わたしはあ奴に預けたままだった借りを返したに過ぎません。この後に奴と交える刃は、全て華琳さまの意志によって振るわれるでしょう」

華琳の言葉に春蘭は堂々とした態度で言った。嘘偽りのない真っ直ぐな言葉だった。

「ならいいわ。南波への指揮を任せるから、先行した霞と共に見事制圧してごらんなさい」

「はっ！」

それを聞いた春蘭は早速隊を率いて先行した霞に続いて、南波を制圧するために動き出したのだった。

そして俺と数名の軍師勢と半分の兵士たちは華琳の城へと向かって行った。

華琳の城へと帰る道中で俺と桂花、雪はため息をつく羽目となっていた。何故なら偶然にも見つけた近くの村にて、族が暴れていたからだ。

こちらはようやく袁紹との戦いが終わり、休めるかと思った矢先

に起こったことなので指揮はただ下がり。誰一人としてやる気のあ  
る奴など居なかった。

「桂花……。なんか作戦ある？」

「聞かないでよ……。あんな連中、アンタが何とかしなさいよ…  
…」

うわあ……。こつちもかなり滅入ってるみたいでいつもの毒舌に  
キレがないな、おい。

「仕方ねえ……。テメエら！！ 気合い入れろ！！」

「……………」

俺がいつも怒鳴ればビビって声を出すんだが、今回に限ってはそ  
れはない。もしいつもの状態だったら、ブチ切れるところだが今回  
だけは許す。

「これに勝つたら、太志滋と徐晃と旬イクの色っぽい姿を見せて  
やるぞ！！」

「……………」

あー、男ってどうしてこんなにも扱いやすいんだろうか……。や  
っぱエロ方向に行くと男って活力出るんだなあ……。

「ちよつとアンタ！！ 何勝手なこと言ってるのよ！？」

「そ、そうですよ！！ い、色っぽい姿って……恥ずかしいじゃ

ないですか！！！！！！！！！！

やはりと言うべきか、桂花と雪が怒鳴ってきた。

「減るもんじゃないんだからいいだろ？ だいたい実際には見せるわけねえだろ」

「減るわよ！ 少なくとも感染うつるわよ！！」

いや、前から気になってたんだが何にだよ……。

「とりあえず行くぞ！！ サクッと終わらせて帰るぞ！！」

と言うことで俺たちは賊狩りを開始した。

はい、終了了了。えっ？ 速すぎるって？ いや、だって男共の燃えたぎる力のおかげで相手にならなかったし。

と言うか袁紹と戦ってきた俺たちにとって賊なんかただの雑魚でしかなかったし。

そんなコトを思いながら賊が残ってないかを、街を探し回ってたのだが早速発見。しかも弓で誰か狙ってやがるな。

放たれてからじゃ面倒だから、さっさと片を付けるか。そう思った俺は白羽黒羽を創り出して、高いところより矢を射ようとしてる奴に近づこうとした瞬間、奴は矢を放ちやがった。



しかも矢の向かう先は 桂花だと!? マズい、桂花も気づいたみたいだが普段は慣れてないコトのせいで動けないみてえじゃねえか!!

クソ、こんな下らねえことで大切な仲間を失ってたまるかよ!!

そう思った俺は瞬動をフルに使い桂花の元へと急ぐ。瞬動を使つたとしてもかなりの距離があるから、届くかどうかと言つたら五分五分だ。

だが、華琳を悲しませないために俺は 。

「おおおおおっ!!」

俺は足の裏に全ての氣を集中させて爆発させる。そのおかげで間に合いそうだが、桂花をその場から退かせるほどの時間はねえ……。

それをとつさに判断した俺は白羽を矢を射つた奴に投げて即死させ、空いた手で桂花を守る。

さすがに掴むことは出来なかつたから、孫権を守つたときのよう  
に自分の腕を貫通させて威力を弱めるつつう手段だったかな。

あー、戦いじゃ怪我しないってのにどうしてこんなときばかり  
怪我しちまつかねえ……。

「怪我はないか、桂花」

「な、何言つてんのよ!? 怪我してるのはアンタの方でしょ!」

「こんなの怪我したうちに入らねえつつう、の!!」

俺はそう言いながら腕に刺さった矢を引き抜く。肉やら何やらが裂けちまったが、三日もありゃ治るだろ。

「早く手当しないと……。急いで戻るわよ！」

いきなり焦りだした桂花の言葉を受けて全員が急いで城に戻った。

城に戻った俺は衛生兵に怪我の手当をしてもらっていた。幸いに矢に毒は塗られてなかったようだ。

まあ、あんな奴らにそんな芸当が出来るとは思われないがな。

そんで手当してもらってる間桂花がずっと俺の側にいた。しかも嫌みの一つも言わずに。

ここまで黙られると逆に気味が悪いな。

「アンタ……腕、大丈夫なの……？」

そんなコトを思っていると桂花が不意に口を開いた。

どうやら口調からして嫌みを言い出すような雰囲気でもないらしく、本当に心配してくれていたようだ。

「ああ、大丈夫だ。それより桂花が無事で良かったよ」

「だからってあんな無茶しなくても……。あれくらい私でも避けられたわよ」

「……ビビって動けなくなってたみたいだったけど？」

俺がそう言つと桂花の顔が耳まで真っ赤になっていた。

どうやらかなり恥ずかしかったらしい。と言つか俺に対してこんな表情するなんて、激レアなような気がするなあ……。

「何ジロジロ見てるのよ」

すると桂花が顔を真っ赤にしながら俺に言ってきた。

「いや、桂花がそんな顔するなんて珍しいなと思ってな」

「私だつて恥ずかしいときくらいあるわよ！！！！！！何か文句でもあるの！？！！！！！！」

桂花はイスから立ち上がりながら、俺に叫んできた。

「別に。可愛いなと思っただけさ」

「ふ、ふん。そんなコトみんなに言ってるくせに！！！！！！」

そして桂花は顔を真っ赤にしながらそういったあとに部屋を出ていこうと扉に手を掛けたのだが、不意に動きが止まる。

「 ありがとう」

桂花は消え入りそうな声でお礼を述べるとさっさと去ってしまっ  
た。

なんにしてもこれで桂花と少しでも仲が良くなれたかな。

そう思う俺なのであった。

ちなみにそのあと事務処理をしている間に、春蘭があつという間に袁紹の本拠地を陥落し北方四州が華琳の支配下におかれたと言っ  
情報が入ったのは言うまでもないだろう。

#### 第四拾話『秋の季節に咲く桜』

side 桜牙

袁紹との戦いも終わり、その帰りの道中で腕に受けた傷もすっかり癒えた俺は、久しぶりに部屋でゴロゴロしていた。特に書類などをやる必要もないため、こうしていられるのだ。

それに朝の鍛錬も自分の戦いの勘を取り戻すための鍛錬だったため、戦いの多い近頃には必要ないため今日は休みにした。

さて、そんな俺の部屋では同居人である雪がせつせと郡司としてのみ仕事をこなしているところだった。雪は最近は仕事が無くなった、と喜んでいたのだが、華琳の領地が増えてしまったために、分割しても前とさほど仕事量は変わらないらしい。

「うう……。桜牙さん、寝てるなら少しは手伝ってくださいよう……」

そんなコトを思っていると雪が机に向かったまま俺にそう言ってきた。

「んなこと言われても俺は自分の仕事は終わってるからなあ。自分の仕事は自分でやってくれ。」

俺はベッドでゴロゴロしながら雪に言っ。

「確かにそうですけど……。少くらい手伝ってくださいよ。皆

さんの鍛錬付き合ってるみたいにな、私の仕事にも付き合ってください  
い」

「んなムチャクチャな……」

鍛錬と事務処理ではジャンルが違うつつの。っーかそんなに大変なら少しは休めばいいじゃねえか。

と言ってやりたいところだが、今日中に終わさなければならぬ仕事、文字通り山ほどあるのでそんなコトはとてもしゃないが言えない。

しかも雪が泣きそうな目で見てくるし……。はあ……。仕方ねえな。

そう思った俺はベッドから起き上がりながら言う。

「少しだけだぞ。俺も今日明日は休みたいんだ」

「はい！　ありがとうございます…！」

まあ、この癒やしの笑みが見れるんだったら少しは手伝ってやる気にはなれるな。

「じじは」

「ふむふむ、なるほど。そう言う考えもあるんですね……」

「で、じじはじじすねば」

「そうですね。それだとかかなり良くなりますね……」

「あとここをこうして」

「あっ、それは気づきませんでした」

と言った具合に俺は雪のサポートをしていたのだが、不意にくううう……、と言う間抜けな音が聞こえてきた。

「そう言えばもう昼だな」

そんな腹の虫が鳴く音が聞こえて、改めて日が高く上がっていることに気づく。これを始めたときはまだ朝になったばかりだったのに、もう昼になってるなんてな。

まあ、それだけ集中してたってことなんだろうが、まんまと雪の奴にはめられたな。あんまりにも無視できない案件が有りすぎてつい手伝わちまったよ。

「じゃあ、息抜きも込めて昼でも食いに行くか」

「桜牙さんの奢りですか？」

「自分でなんとかしろ」

俺はそう言いながら人差し指で雪の額を軽くつつく。

そんなやりとりをしながら部屋を出ると、時期を見計らったかのよように空が現れた。

「僕も一緒に行っても構いませんか？」

「勝手にしろ。奢らないからな」

「分かってますよ。それぐらいは自分で払います」

本当か？ と訊きたくなるような笑みを浮かべているのだが、訊いたところではぐらかされたりするだけだろうから、敢えて訊ねないことにした。

そんなやりとりをしながら、門に向けて歩いてしていると秋蘭を見つけた。

「お〜い、秋蘭〜」

俺が秋蘭にそう言うのと秋蘭がこちらを振り向いた。

最初はなにやら嬉しそうな表情だったが、何故か雪と空を見た途端に何故か残念そうな表情になっていた。

う〜む、何故に残念そうな表情になるのだろうか？ そんなコトを思いながら俺は秋蘭に近づいていく。

「秋蘭。今からみんなで飯食いに行くんだが、一緒に行かないか？」

「みんな」で、か。すまん、まだ仕事が残っているのだ」

「そうか。じゃあまた今度な、仕事頑張れよ？」



そして秋蘭が去っていく後ろ姿を見送った後に、俺たちは飯を食いに街に向かっていった。

街にやってきた俺たちは最近出来て美味しいと評判のラーメン屋に来ていた。

俺たちは三人とも同じメニューを頼み、食べていたのだが確かに評判通りかなり美味しいな。

「桜牙さん。孟徳殿から聞いたのですが、才妙殿の思いを聞いているんですよね？」

ラーメンを食べていると隣に座っている空が不意にそんなコトを訊ねてきた。

「ん？ まあ、な。一応は」

あのときに俺は秋蘭から一応は思いを聞いたからな。

「それで、桜牙さんは何と答えたんですか？」

「今は気持ちの整理が整ってない、とか答えたような気がするな」

「はあ……」

俺がそう言うとは何故か空に盛大にため息をつかれてしまった。

何故だ、何かため息をつかれるようなコトでもやったというのか

？ とそんなコトを思ってる内に空が立ち上がりながら言ってきた。

「用事を思い出しましたので、僕は帰らせてもらいます。あっ、お支払は桜牙さんに任せます」

「任せますじゃねえよ、おい！ 行っちゃったよ……」

何なんだよ、勝手についてきた拳げ句に人に奢らせるようなコトやらせやがって。

結局あいつの言ったことで本当だったことは大してねえじゃねえか。

「つたく、何なんだよ……。うん、美味しいな」

「桜牙さんって鈍感なんですね……」

「はあ？」

「いえ、何でもないです」

雪はそう言いながらラーメンを食べ進めていた。

つたく、どいつもこいつもワケの分からんコトを言いやがって。

秋蘭と鈍感に何の関係があるんだか……。

だいたい鈍感鈍感言われるが、別にそこまで鈍感じゃないと思うんだがな。

そんなコトを思いながらラーメンを食べ進めるのであった。

あれから時間が経過して、夜になった。街から帰ってきた俺たちは残っている仕事の処理を行っていた。

あれ？ いつの間にか俺も働いてるじゃねえか。せつかくの休みが台無しになっちまったじゃねえか。

そんなコトを思いながら仕事の処理をしていると、いきなり部屋に空が入ってきた。

「桜牙さん！」

「ああ？ なんだよ」

空が何故か顔を近づけてきながら人の名前を呼んできた。

「明日、才妙殿とデートしてもらいます」

「はあ？ お前、何言ってるんだ？」

なんで俺が秋蘭とデートしなきゃいけないんだよ。

いや、嬉しいか嬉しくないかで言ったら嬉しいよ？ だけど何故にこのタイミングでデートが出てくるんだっつう話だ。

「だいたいお前が勝手に決めてもあつちにもあつちの都合があるだろ」

「その点は抜かりありません。明日、才妙殿は完全にオフです」

そう言えばこいつはこの世界の住人じゃなくて、天界の神の一番弟子だったな。だから外国語を使っても問題ないか。

じゃなくて、なんでこいつは無駄に準備が良いんだよ……。

「では、明日の昼過ぎに門の前で才妙殿を待つようにしてください」

「ちょっと待て。何勝手に話進めてんだ」

「ならデートに行かないと言っているのですか？」

「いや、そう言うワケじゃないが……」

せつかくのオフ何だから秋蘭とデートはしたいが、あつちは知ってるのか？

「なら良いではありませんか。では、明日の昼過ぎに門の前で待つようにしてください」

空はそれだけを告げるとさっさと帰って行ってしまった。

まったく、いきなりデートしろって言われても何すれば良いかわからないっつうの。

そんなコトを思いながらさっさと事務処理を終わらせて、眠りについた。

次の日の昼過ぎ、空に言われたとおりに門の前にやってきていた。デートって言うことだから少しオシャレでもしようと思ったのだが、生憎と俺がいつも着ている黒の外套しか無かったために、いつも通りの服装で来てしまった。

こんないつもの姿でデートの気分なんか出るんだろうか……。

「龍崎、済まない。待ったか？」

そんなコトを考えていると不意に後ろから秋蘭の声が聞こえてきた。

「いや、今来たと……ころ……だ」

秋蘭の声が聞こえたので、俺は振り向いたのだが、そこで俺は言葉を失ってしまった。

なぜならいつもの秋蘭の服装ではなく、オシャレで女の子と言わんばかりの格好をしていたからだ。

「ど、どうだ？ / / / / / 似合っているか？ / / / / /」

そんでいつもに増して破壊力抜群の秋蘭が頬を赤く染めながら、上目遣いで俺にそう言ってきた。

「あ、ああ、似合ってる。可愛いよ」

俺はそんな秋蘭の姿から目をそらしながら言ってしまった。

だって仕方ねえだろ。ここまで美人だった奴がさらに破壊力抜群になったんだから、いくらなんでも正面からなんて見れねえよ。

どんな奴だったら今の秋蘭を直視できるんだろうか。

「ほ、本当か？／＼／＼／＼」

「あ、ああ。もちろんだ」

やめて！？ そんな破壊力抜群な姿で言わないでくれ！？ さすがの俺でも恥ずかしくなって来ちまうじゃねえか。

そんなコトなので俺は秋蘭を見ないで言う。

「じゃあ街に行こうぜ。今日は俺と秋蘭の二人つきりだからな」

「あっ……」

俺はそう言いながら秋蘭の手を握る。デートって言ったなら手を握るもんなんじゃないかと俺は思う。

ついかデートなんか生まれて、転生して、波乱万丈な人生を送ってる中で唯一経験してないことだったっつうの……。

上手く行くことを祈りながら俺は秋蘭の手を握りながら街に出た。

最初は秋蘭も戸惑っていたのか、俺に握られるままになっていたのだが、しばらくすると自分から握り返してくれるようになった。

それにしてもすげー細い指だな。それに思ったよりも小さくて、  
武人って言うより女の子って言う感じの手をしてる。

いや、女の子なんだけど武人ってのがあるからもっとゴツゴツし  
た感じの手を想像してたんだが、全然違うんだな。

「どうしたのだ？ 何か考え事か？」

そんなコトを考えていると秋蘭が俺にそう言ってきた。

どうやら俺が秋蘭の手の感想を思ってるのを、楽しくないからと  
かと勘違いしたようだった。

「つか歩き始めたばかりで詰まんないも何にもない。その前に  
秋蘭と歩いてて楽しくないはずがない。」

「いや。秋蘭って戦だとスゴいけど、やっぱり女の子何だなと思  
ってさ」

「あ、当たり前であろう。私だって女だ。服装にも気を使うし、  
色恋も気になるものだ／＼／＼／＼」

「うっ、そ、そうだよな。アハハ……」

ヤバい。秋蘭の顔を直視できない……。

ん？ 今服装にも気を使うとか言ったよな？ だったら服屋にで  
も行けば自然と話題が出てくるんじゃないのか？

そう思った俺は秋蘭の手を握りながら言う。

「服が気になるならさ、見に行ってみないか？」

「うむ。そうだな。ついでに華琳さま『違うだろ？』……？」

つたく、こんな時でも華琳のコトを気に掛けるのは華琳に仕える武人としては良いんだろうが、こう言うときくらいは忘れてもらいたいもんだ。

そう思った俺は恥ずかしがるのを我慢しながら、秋蘭を見つめて言う。

「秋蘭、今は俺のことだけ考えてくれ。俺も秋蘭のコトだけ考えるから」

「う、うむ……／＼／＼／＼」

あゝ、すげー可愛いなあ、おい。やっぱり癒しを与えてくれる女の子も良いが、こういふ感じの女の子の方が良いな。

そしてそのあとに話しながら服屋に向かい、話が弾んだおかげがあつという間に服屋に到着した。

「ここが俺が知ってる中では一番品が揃ってる店だ。ここなら秋蘭に似合う服もたくさんあるはずだ」

「そ、そうか？」

「ああ。秋蘭は美人何だから似合うのはたくさんあるはずだ」



「……っ／＼／＼／＼」

俺はそう言いながら店の中に秋蘭と共に入っていく。

「あーら、いらっしやうい」

だが俺は店をそのまま出て行く。だって仕方ねえだろ、気持ち悪い筋肉達磨が踊りながら出てきたんだからな。

確か春蘭もここに来たときに、気持ち悪い筋肉達磨が踊りながら出てきたとか言ってたな。そのときは俺は別に悪い奴じゃないだろうと言ったが、さすがにあんなキモさじゃ話す気にはなれねえわ。

「すまん。この店の店員がバケモノだった…」

「だあれが時代遅れの露出狂よりも悪趣味なの筋肉ダルマですってええええっ!?!」

だがその筋肉達磨がいきなり店から出てきて、俺達を店の中に引き込みやがった。

なんだよ。勝手に引き込むなよ。気持ち悪い筋肉達磨なんかに世話はねえよ。

「ずいぶん美人を連れてるのねん　　いいわ、私が彼女の服を選んであげるわん」

「別にいいよ。秋蘭の服は俺と秋蘭で選ぶから」

俺は筋肉達磨にそう言っと、筋肉達磨からなるべく離れた位置にて服選びをすることにした。

「ただ、筋肉達磨が俺のことガン見してきてかなり気になるんだがなあ……。まあ、服選びしてる間に忘れることが出来るだろうな。」

「こんな感じの服はどうだ？」

俺はそんなコトを思いながら、秋蘭に似合いそうな服を選んでいく。

美人に似合いそうな服はたくさんあるが、秋蘭に似合う服を選ぶとなるとかなり難しい。ほとんどの服を着こなしてしまいそうだから、その中からさらに良いものを探すとかなり高ランクだ。

「うむ、なら着てみるから少し待っていてくれ」

「ああ」

秋蘭はそう言いながら試着室の中に入って行ってしまった。なので俺はほかにも秋蘭に似合いそうな服を探すことにした。

色っぽい服から清楚そうな服、何から何まで似合いそうでどれを着せたら良いか分からねえな。それに秋蘭がいつも着てるのはチャイナ服っぽい服だからな。

たまにはほかの種類の服とかも着てもらいたいな。今着てる服もいつもの比べればかなり女の子らしいけど、やっぱりチャイナ服系の服だったからな。

そんなコトを考慮しながら次に秋蘭に着てもらう服を選んで、試着室から秋蘭が出てきた。

「ど、どうだ？ 似合ってはいるか？」

秋蘭が何やら恥ずかしそうな素振りをしながら俺にそう訊ねてきた。

うむ、確かに似合うことは似合っているんだが、なんか一押しが足りないなあ。

「似合ってるけど、今度はこっちを着てみてくれ」

俺はそう言いながら秋蘭に新しい服を渡した。

秋蘭は俺からそれを受け取ると、再び試着室の中に入っていった。

「で、何か用か？」

秋蘭が試着室の中に入ったことを俺は確認すると、俺の後ろに立っている筋肉達磨に話し掛ける。

ただの気持ち悪い筋肉達磨かと思っていたが、何故かこいつからは言葉では言い表せないような違和感がある。

普通の奴だったら後ろに立たれた程度じゃ何にも言わないんだが、こいつには何故か言わなきゃいけないような気がした。

「あらん？ まさか気づかれるとは思わなかったわん」

「ああ、そうかい。それで俺に何か用でもあるのか？」

俺は筋肉達磨に向き直りながら、筋肉達磨の目をまっすぐと見据えながら言う。

「いいえ、用なんてないわん。ただ、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「……龍崎、桜牙だ」

俺がそう言うと目の前の筋肉達磨はまるで、信じられないものを見たばかりに目を見開いていた。

「そう。あなたが龍崎桜牙だったのね」

「ああ。で、あんたは誰だ」

「私？ 私は貂蝉よん。よろしくねん」

は？ こいつが貂蝉だって？ 確か貂蝉って言えば女だったよな気がするんだが、もしかしたらこの世界は全員の性別が逆転するのか……。

にしても貂蝉がこんな筋肉達磨だったなんて……。恋と一緒に出てこなくて良かったわ……。

「あなたに一つだけ言っておくわん。後悔しないようにしなさい」

「は？」

貂蝉と名乗る筋肉達磨はそれだけを言うと俺の返答を聞く前到店の中に消えていった。

それにしても後悔しないようにしなさい、か。これからどんな結末が待ってるのかは知らないが、俺は後悔なんかしねえよ。

「龍崎、どうだ？／＼／＼／＼」

貂蝉と話をしている間に秋蘭が着替え終わったのか試着室から出てきた。

そして試着室から出た来た秋蘭を見て俺は再び目を背けてしまった。何故かって？ 訊くだけ無粋と言うものだ。分からないか？

秋蘭が可愛すぎて俺の濁った目じや直視できないんだよ！！

今日だけで何回目のそらしだよ！？ ここまで秋蘭が可愛いとこれ以降も直視できないかもしれねえじゃねえか！！

「スゴく可愛いです……」

「そ、そうか／＼／＼／＼ なら私はこれを買うことにするよ」

秋蘭はそう言うと試着室に再び戻ったあとに着ていた服を脱いで、城から出た服に着替え直していた。

「あつ、秋蘭。それは俺が買うよ」

「良いのか？ かなり良い値段がするんだが……」

秋蘭がそう言ったので値段を見たが、確かにかなりの値段だった。

「ただどいつももの季衣や紅葉、恋の食費に比べたら大したことの無い額だった。」

「大丈夫。これは俺からの贈り物さ」

俺は秋蘭に笑みを見せながらそう言い、秋蘭が気に入った服を買った。

「ちゃっかり俺が秋蘭に着てもらった服も買ったんだが、秋蘭には内緒だ。ドッキリって奴だ。」

そして服を買った俺たちは服屋をあとにするのであった。

あれからいろいろな場所を俺たちは回った。アクセサリー店から日用品のある店、ちよつと息抜きに団子屋などと実に充実した一日を過ごしてきた。

現在は夕日を背景に川に来ていた。この場所は自然がそのままに残ってて、かなり落ち着ける場所だ。

「この場所は俺がよく昼寝をするために来たりする場所で、あんまり誰にも知られてない場所だ。」

「秋蘭。今日はホント楽しかったよ」

「ああ、私もだ。最初は何事かと思ったが、空にも感謝せねばな」

「空に？」

秋蘭の話によれば今日の秋蘭の仕事を空がすべて引き受けてくれたらしい。

なるほど。昨日の空の用事ってこのことだったのか。気の利く野郎じゃねえか。

それに空がここまでしてくれたんだから、俺の気持ちを秋蘭に伝えるしかないな。

「秋蘭。俺、前の秋蘭の気持ちに対しての返事をしたと思って思うんだ」

「急にどうしたのだ？ 別に急がずとも良いのだぞ？」

「いや。気持ちはもう決まったんだ」

俺は秋蘭にそう言つと秋蘭に抱きつく。

「好きだ、秋蘭」

そう。俺の秋蘭に対する気持ちは日々変化していった。秋蘭の気持ちを知ったからではなく、毎日を過ごしている間に俺の中にある秋蘭と言う存在が大きくなって行っていた。

そしてようやく気づいたのだ。俺は秋蘭が好きだってコトに。

「ああ、私もだ」

秋蘭も俺の体を回して力を込めてくれた。

そして俺たちは  
いや、これからあったことは俺と秋蘭だけ  
の秘密だ。



#### 第四拾巻話『業炎の剣帝、張遠の願いを聞くのこと』

side 桜牙

あの出来事から数日が経過した。別段と秋蘭との関係が変わったワケではないのだが、アレがバテて皆に茶化される日々が続いていた。何故か一部からは、冷たい目で見られたりしたのだが、俺が何したってんだよ……。

別に秋蘭とイチヤイチャしたただけじゃねえか。ん？ まさかそれが悪かったりするのか？ もしかしてあっち系の趣味をご持ちの御方達だったのか？

そいつは悪いことをしたなあ。さすがに今後は華琳以外の奴に秋蘭をどうこうされるわけにはいかねえな。秋蘭に色目を使おうってなら、片っ端からブン殴ってやるよ。

そんなコトはさておき、現在俺はようやく仕事を終わらせたのだが、何故か華琳に呼び出されたので俺は華琳の部屋に行く途中だ。

大方秋蘭とイチヤイチャやったときのことを詳しく訊くつもりなんだろうな……。別にイヤじゃないんだが、ちつとばかり照れるよな。

そんなコトを考えていると廊下を歩く先に女の子をテコテコ歩いているのが見えた。あんな格好してるのはこの城では一人しか知らない。

まあ、顔はハッキリとは見えないんだけどな。

「お〜い、霞〜」

俺は手をブンブンと振りながら、霞と思われる人物を呼ぶ。

俺が霞と呼んだ人物は俺が呼んだ瞬間に顔を上げたことから、俺の目は間違ってたなかつたと分かる。

間違ってたはなかったのだが、どうやら霞はまだ俺のことを見つけてはいらしく、周りをキョロキョロと見渡していた。

「こっちだ、こっち!」

とりあえずまだ分かってないようなので、さらに声を張り上げながら霞を呼ぶ。

そして霞はようやく俺のことを見つけることが出来たのか、まるで飛び跳ねるかのようにこっちに走ってきた。

「桜牙や〜ん! 偶然やな〜〜!!」

確かに偶然って言えば偶然なんだけど、そこまで喜ぶものだったのか?

「こんなところで、何してんの? どっか行くん?」

霞はまるで子供のようにウサウサと動きながら俺にそう問いかけてくる。

「ああ。華琳に呼ばれて華琳の部屋に行くところだ。霞は?」

「ウチは本日の業務は終了したからな。何しようかなあ、って」  
「んでブラブラしてるってわけか」

「ブラブラちゃうよ！……仕事を探しとるねん」

棒読みで言っても説得力は皆無なんだが……。しかもそう言いながら、霞の視点はフラフラと有らぬ方向をさまよっている。

「仕事、ねえ。まあそう言うことしといてやるよ」

「おおきに！ 桜牙のそう言うところ、めっちゃ素敵やと思うぞ」

そう言いながら霞は全くと言って良いほど悪びれもない。

「誉めてもなんも出ねえぞ。金欠なんだよ」

貯金してた金は全部食費に吹っ飛んで行くし、今月はちょっとばかり多めに使っちゃまったからな。

「あ、可愛くない。そう言うところは好かんわ」

「どうしてそうなるんだよ。別に俺は悪くないだろうって……」

「…」

「まったく、調子が良いんだからよ。まあ、そう言うところは霞の良い所なんだろうけどな。」

すると霞はチツチツと指を振りながら俺に言ってきた。

「桜牙もまだ青いな。そこはこう裏拳入れつつ『なんでやねん!』  
や」

霞はそう言いながら俺の胸にベシベシとツッコミを入れてくる。

「ほれ、こつやで、こつ。桜牙もやってみ？」

霞はそう言いながら未だに俺にツッコミを入れ続けている。

「悪いが、霞の漫才に付き合ってる暇はない」

俺はそう言つと、クルリと回つて霞に背を向け歩き出す。

「ああっ、ごめん！ 待って！ ウチが悪かった！」

霞はそう言いながら歩く俺の身体にしがみついてくる。

俺の歩く妨げにはならないが、さすが武人と言っただけあつてかなりの力がある。

「ええい、離せ！ 早くしないと華琳に怒られるだろうが！」

しかし華琳に呼ばれたのは俺だけなのに、霞まで連れて行けば何か言われてしまうだろう。

「分かつとる分かつとる。ウチかて大将怒らせるんは本意やないから！ だから止まってえな！」

そう。俺は霞が話している間も歩く足は止めてないわけで、端か

ら見れば俺が霞を引きずってるように見えなくもない。

とりあえず霞の話を聞かないと一人で行けそうにもないので、俺はため息をつきながら立ち止まり言う。

「んで、何だ？ 手短に頼むぞ」

で、立ち止まったのだが霞は俺の服の裾を一向に離してくれそうにない。

「あんな、桜牙は華琳のトコに何しに行くん？」

俺は疲れてるんだろうか……。霞の頭に突如として猫耳が現れたんだが……。

「知らねえよ。俺は華琳に呼ばれただけだからな」

嘘は言っていない。予測は出来るが、具体的には何の用事なのかを聞いたワケじゃないからな。

「楽しいことがあるんちゃうを？」

猫耳を装備した霞は大きな猫目をさらに丸め、興味津々と言った様子で俺の顔を覗き込んできた。

なるほどね。つまりは面白そうなコトがあるなら着いて来ようって思ってるみたいだな。

「なあなあなあ、隠さんと教えてえな」

霞はよっぽど暇何だろうなあ……。面白そうなコトを探してさまよっているくらいだからなあ……。

「隠すも何も俺はなんも知らされてねえんだよ。ただ、一人で来いってだけ言われてんだ」

「一人、で？」

そこで何故か一人でと言う単語に食いついてくる霞。

「ああ。一人で部屋に来いってよ」

「一人、で、部屋、？」

何故か声を荒げながら、一人、と、部屋、の単語に食いついてくる霞なんだが、何故にそこまで食いついてくるんだか……。

そんなコトを考えている間に霞の俺を見る目が、ニヤリと細められる。

「それはアレやる？ ア・レ」

わざとらしく、アレ、を強調しながら霞は言ってくる。

「アレってなんだよ」

「あほっ！ アレ言ったら一つしか無いやる！」

霞はそう言うのと俺の肩を容赦なく叩いてくる。しかもグフフとかなりヤバい奴のような笑みも浮かべている。

「こりゃそうそうに撤退した方が良くかもしれねえな。

「なあに、カマトトぶってんねん！ アレ言うたら、秋蘭とやったアレに決まってるやろ」

「なるほど。秋蘭とやったアレ……………はぁーっ!?」

霞が言おうとしてることに気がついたのだが、気づいたせいで俺はすつとんきよな声を上げてしまった。

いや、だっていきなりあんなこと言われたらさすがにビビるだろうが。

「イヤイヤないからね？ そんなコト華琳に限ってないからね？」

「ふふうん、そうかなあ？　ウチはそれしか思い浮かばんけどなあ」

「まただ、また幻影が見える……。いやアレはスタンドか？　待てよ、落ち着くんだ俺。この時代にそんなのが有るわけない。」

「それに桜牙が秋蘭とイチャイチャやったから、焦つとるんとかやうか？」

未だに猫耳ねこみみを装備まといした霞がそう言ってくる。

そう言ってくるのだがそんな霞の言葉に一つの疑問が浮かび上がる。

「華琳は何に焦るってんだ？」

「……」

俺がそう訊ねると霞に呆れたような目で見られた。

え？ なに？ 俺ってばなんか呆れられるようなコトしましたか？  
？ ただ単に疑問を言っただけなのになんでそんな目で見られない  
といけないんですか？

確かに秋蘭とイチヤイチャやっちゃったけどさ、だからって華琳  
が何を焦るって言うんだよ。うゝむ、ワケが分からねえ。

「……なあなあ、桜牙」

そんなコトを考えていると不意に耳元に温かい息が掛かり、思わ  
ずと言った感じにビクンと飛び上がる。

隣を見るといつの間にか霞がぴったりと俺に近づいてきていて、  
まるで耳元でコソコソと内緒話をするかのように囁いてくる。

「つか顔が物凄く近いんですけど……」。

「なんよー。そない驚かんでもいいやん」

「……別に驚いてねえよ」

なんか今の霞に言われるのはなんだか癪に障るので、とりあえず  
とぼけてみる。



「嘘やん！ だってビクツとしてたで？」

どうやら誤魔化しきれないようだった。よくよく考えれば、別に隠しても隠さなくても良いことなので素直に言う。

「霞がいきなりくつついてくるから驚いたんだよ。つーかなんで、そんなにくつついてんだよ」

「……もしかして桜牙、ドキドキしてる？」

はい。この人俺の質問を華麗にスルーしましたよ。

もちろん、ドキドキしてるよ。ビククリしてかなりドキドキしてるよ。心臓バクバクで飛び出そうだよ、全く。

「なんでやねん！」

とりあえず先ほど伝授してもらった（と言うか勝手に）ツッコミを霞の肩に繰り出す。

「お、ええやん！ 今の間を忘れたらあかんで。手首の動きもバツチシヤ」

何故に霞はさっきからツッコミ談義を繰り返してやがるんだよ……。

「んなもん、どつでもいいわ。良いからさっさと続きを言わんかい」

「あ、そやな。時間もなしな……あー……けどなあ……うーん

……」

「どうやら俺には残された時間が少ないことを思い出してくれた霞だったが、いつもポンポンと何でも軽快に話す霞にしては珍しく歯切れが悪い。」

「まさかあんまり人には話せないような内容だったりするのか。そんなコトを思っている間にも霞は口元に手を添えたまま、うんうん唸っているだけ。」

「うーんと、えーっと……あの……」

「とりあえず相談(?)に来てくれたみたいなんだから、無碍に追いつ返すわけにも行かずに俺は立ち止まっている。」

「どうしたんだ？　なんか霞らしくないぞ？」

「俺は胸の前で指をツンツンさせて、もじもじしている霞の顔を覗き込みながら言う。」

「……せやかて、しゃーないやんかー」

「何がしゃーないのかは知らないが珍しいこともあるもんだな。」

「そんな言いにくいことなのか？　俺と霞の仲なんだから遠慮しねえで、なんでも言うてくれよ」

「……うん……えっと、その……笑わへん？」

「当たり前だ。人の悩みを笑うほど俺は性根の腐った奴じゃねえ」

「よ」

「その……そう言うのって、どんな気持ちなん？」

「そう言うのって……」

うむ、この話の流れからして男の女の人間関係について、かな？

「好きとか嫌いとか、要は色恋話か？」

俺がそう訊ねると、どうやら見事にドストライクだったようで霞がコクンと頷いた。

しかも今までに見たことがないほどの真剣な表情だった。

「あのな……ウチ、そう言うことにあんま免疫無いねん。……あんまうちゅうか、全然。まったく」

「全然無いつて言うと、恋をしたこともないとか？」

俺の質問にこれまた頷く霞。俺はあまりの事態に少しだけ思考がシャットアウトされた。

だつて霞だぜ？ こんな美人なんだぜ？ 恋したこと無いつて言っても言い寄ってくる奴は居るんじゃないのか？

「ホンマか？」

「ホンマや」

俺の問いに霞は少しだけ、怒ったかのように可愛らしく唇を尖らせていた。

さらに恥ずかしいのか霞の頬は僅かに赤みが差している。

これだけを見たら陥落する男は少なくはないはずだ、と俺は思う。

「霞が、恋愛未経験？」

俺の呟きにすら律儀に頷いてくれる霞。

「ウチは元々武官の家の生まれやんか？　せやから子供の頃からずうっと、武芸一筋でやってきてん。何の疑問も持たんと、それを極めることだけを考えた」

そこまで霞は言うと一旦言葉を切り、溜め息混じりで続きを話す。

「そんで氣いついたときには、軍に仕官してて……あれよあれよつちゆう間に一軍を任せてもらえるようになって……ほんで今やから」

「なるほどねえ……」

とりあえず恋愛なんつー言葉は今までの霞には一切無かったっつうことか。

「それはそれで勿論ありがたいって思うてるけど……いっぺんもそう言う甘〜い経験をしたこと無いんは、ちよっと切ないわ」

霞は腕を組み再びため息をつく。

なるほど……。こいつは随分難しいことを相談されたもんだ。

俺は不老不死のおかげで何百年と生きてはいるが、あいにくと恋愛なんか経験はほとんどない。むしろ秋蘭が初恋の相手と言って良いかもしれないほどだ。

そんな俺が霞に言ってやれるコトなんてあるんだろうか……。

「いくら軍人つても霞も女の子なんだから、恋の一つや二つした  
いってわけか……」

「当ったり前やんか。花も恥じらうオトメやで。ぱーっと一花咲  
かせたいっちゆうねん」

「だよなあ……。っーかホントに経験ゼロなのか？ 一度もない  
のか？」

どうにも霞の話信じられないで居る。別に霞が嘘を言っていると  
言いたいワケじゃなく、こんな美人が恋をしたこと無いのかって言  
う意味でだ。

「自慢や無いけど、ホンマに一度もない」

マジで自慢にならねえわ。っーかそんな真顔で言われてもこっち  
が困るんだが……。

「霞は美人だから、男が放っておかないと思っただが……」

「まー、そもそも出会いがないな」

「男ならゴマンと居るだろ」

「自分より弱い男は嫌いやねん」

「んなこと言ったらほとんどの男が恋愛対象外になっちまうだろっが……」

そう思ったのは俺だけではないはず。

「つか霞より強いって言ったら自慢で言うわけでないが俺だろ、あとは俺よりは弱いがかなりの力を持つ空。あとは　　いない？ あれ？　誰も居ねえじゃんか。」

「そやねんよなあ……。問題はそこやねん。……理想が高すぎるんやろか？」

霞はそう言って大きなため息と共にがっくりと肩を落とした。

この反応を見る限り、ホントに誰も居ないみたいだな。

「……俺じゃダメなのか？」

「ダメや、ダメや」

冗談で訊いたつもりだったのだが、見事に玉砕されてしまった。

「ちなみに理由は？」

「桜牙には秋蘭が居るやろ？」

確かにそう言われればその通りなだけだな……。

そのあとに空のことを訊いてみたんだが、あのスマイルが気に入らないらしくダメだそうだ。

「そんじゃあ霞より強いって言ったら」

「ウチの陣営やったら、惇ちゃんやろ？ ほんで秋蘭。あつ、秋蘭には桜牙が居ったからダメやな」

……。どこからツッコんでやればいいんだ。

と言うかドコからドコまでが本気で言ってることなんだ……。

「あとは……そやな、恋とか関羽とか……ああ、関羽う……」

霞はそう言いながらうつとりと頬を染め、両掌を頬に添え、心はもう遠い国へと旅立っていつてしまったようだ。

「関羽ええよな……かわええよな。最高や……」

ダメだこりや。霞は妖精の国もとい関羽との二人だけの愛の世界へと行っているようだ。

関羽と霞。別に人の恋沙汰をどうこう言うつもりはサラサラない。だってうちの大将もあんな感じだしな。

「……ああん、アカン……それ以上は……」

こりゃマズい。なんか霞がビクンビクンいつてるんだが……。

さすがにピンク色の妄想世界に墮ちてしまった霞の相談に乗る気はないんだけど……。

「おーい、現世に帰ってこーい」

俺はそう言いながら霞の額にデコピンを繰り返す。

「ハッ!？」

俺がデコピンをすると霞はようやく現世に帰ってきたようだった。

「おかえり、霞」

「桜牙？ ウチ……」

「関羽とのピンク色の世界に旅立ってたみたいだぞ」

「あー、せやせや！ ごめんなあ。ウチ、アレ始めると止まらんねんよ」

別に謝るようなコトじゃないと思うんだが……。つーかやるかやらないかの問題じゃなくて、そう言うのは自室でバレないようになっつてくれ。

「なんにしても、そこまで愛に飢えてるのか？」

「そうやねん！ 男でも女でもええからさ、なんかこっつ……甘っい時間を過ごしたいねん！」



霞は両手を握りしめ、熱く力説する。その表情はまさに真剣そのもの。

ただ、俺としては霞には普通の恋愛をしてもらいたいっつうのが本音だ。

「妄想かて楽しいし、幸せな気分を味わえる。やけど、それじゃ体も心も温まらんやん？ もっとくつついて、人の温もりを感じたかって……無性にそう思うときがあるねん……」

「霞って、結構、甘えん坊か？」

そんな霞の話を聞いていた俺はふと思ったことを口にした。

……。  
なんか誰かに甘えたいって言うてるようにも聞こえるんだよねあ

違つと言ってくるのだが、俺はそうとしか思えないと言い返す。

「……そうなんかな？ 子供の頃からあんま甘えたりした覚えがないから、自分ではよー分からんけど」

「話を聞く限りじゃあ、そんな感じだ」

霞にそう言つとよく分からないといった風に首を傾げられた。

さて、ここまで来るとどう攻略したら良いか目処が立っても良い頃なんだが、全然分からん。

そんなコトを思っていると、霞は若干頬を赤く染めながら言ってきた。

「なあ桜牙……。そう言うのがどういう気持ちか、ウチにも教えてや」

「……」

「桜牙は秋蘭やほかの子達と、甘い時間を過ごしてるんやろ？」

「確かに秋蘭とは甘々だったが、他のみんなとは仲良くしてるだけだぞ？」

その言い方だと俺がとつかえひつかえしてるみたいじゃねえか。

「ほれみい！ な、お願い、教えて！」

「教えるって言われてもな……」

こつ言つのは教えてどうにかなるようなもんでめ無いと思っただけどねえ……。

「そこを何とか！」

何とかねえ……。とりあえずいきなりあんな甘々なコトを教えたりはできない。と言うか俺が教えたりなんか出来ないつつの。

「んじゃあ。時間があるときにでも二人で過ごすってのはどうだ？」

「お、やる気なつたん？」

さつきまでしかめっ面だったのが、俺のたった一言によりパアアッと明るくなる。

「まあな。悩んでるのも放っておけないしな」

「でも、秋蘭に言わんでええんか？」

うつ……。確かに言われてみれば秋蘭に言わないと話が進まないよじな……。

前までは俺の気持ちを伝えてなかったから、あの程度のコトで済んだが今あんなコトやったら死ぬかもしれない……。死ねないんだけど。

「そこは何とかするさ」

「やったー　いよっ、桜牙すってきー！」

調子の良い奴だ。なんか霞を見るといちいち小さなコトに悩んでる俺がバカバカしく思えてくるな。

「ななな、それで？　二人つきりで過ごして、そんでどうするんやっ。」

「どっつて……。とりあえず雰囲気作って、なんやかんや？」

「雰囲気を作るんかいな」

「雰囲気つつうのも大事だろ？」

「……分かん」

まあ、期待はしてなかったがな。適当にはぐらかされるよりもハッキリと言ってもらった方が、俺的には助かる。

「とりあえず俺に任せときな」

「さっすが桜牙！ いつにも増して男前やで」

霞はそう言いながらびよんぴよん飛び跳ね始めた。

「やったー！ 嬉しいなあ、楽しみやなあ」

こゝ、ここまで期待されると逆に困るんだけど……。

にしても霞にもこんな女の子らしい悩みがあったんだな。いつもはサバサバしてるし、色恋沙汰にも抵抗無くのってくるし。つーか霞にも茶化されたしな。

まあ、なんにしても、霞の期待を裏切らないように気合い入れて頑張るとしますか。

「そろそろ俺行くけど構わないか？」

何だかんだ言っただけでかなり話し込んでしまった。

「ああ、ええよ。引き止めてもて悪かったな。はよ行きや、華琳かかんかかもしれへんで？」

「さすがにそれはマズいな」

俺はそう言っていると歩き始めたのだが、すぐに立ち止まり後ろにいる霞に向き直る。

「霞、楽しみにしとけよ？」

「おう、楽しみにしとるわ！」

霞の満開の笑みに思わず俺も頬を緩めながら、華琳の部屋に急ぐのであった。

にしても甘い気持ちか……。俺としてもこういった気持ちを知るには良い機会だ。

いい加減なことはしないようにしないといけないし、こいつはだいぶ難しいことになったな。

なんにしても霞の期待だけは裏切らないようにしよう。

俺はそう心に誓うのだった。

余談だが、華琳が俺のことを部屋に呼んだのはやはり秋蘭絡みだったことは言うまでもないだろう……。。



第四拾貳話 『曹操VS劉備』将の不在』 (前書き)

今回から四話に渡り曹操VS劉備をお送りいたします!!

さらにこの章で紅葉の秘密が少しだけ明らかになります!!

さて、前置きはここまでにして、本編をどうぞ!!

第四拾貳話 『曹操VS劉備』將の不在』

side 桜牙

「どっせえーいッ!」

そんな間抜けなかけ声をあげながら俺は白羽黒羽を振るっていく。俺が白羽黒羽を振るう度に戦場に血が流れ、肉塊が宙を飛ぶ。

現在、俺は近くに現れた豪族の連合が偵察して回ってるとか何とかつつ報告を受けて、出勤してきている。

他のみんなも出勤などをしており、最近では将全員が揃うのが珍しいと思えるほどに出勤が増えてきているのだ。出勤が増えてきたおかげで、それに駆り出される俺たちにはストレスが溜まってイライラするときがかなり多くなった。

大したことはなかったのだが、この間は凧と季衣が国境を越えてきた相手を、どこまで追いかけるかで軽い言い合いになっていた。この前の言い合いは軽いものだったから良かったけど、回を重ねれば深刻な事態に成りかねないことは、容易に想像できるだろう。

さらには紅葉と春蘭で戦い方でかなり喧嘩になり、戦場だと言うのに仲間同士で争いそうになっていたこともあった。さすがにその時は仲裁に入ったんだが、戦が終わったあとで二人は華琳にこっぴどく絞られていた。

袁紹の河北四州を手に入れることで華琳の勢力範囲は一気に倍増



した。そこまでは予定通りだが、それは同時に華琳が周囲の諸侯から今まで以上に、警戒される存在になった。つつつコトも示している。そのおかげで国境あたりは常に警戒されっぱなし、その対処に出掛ける春蘭や霞。そう言った類の仕事があまり回らない俺や恋ですらも休む暇がなくなってきた。

華琳曰わく、『弱者の相手を任せるよりも、文官などの仕事を任せの方が効率がいいのよ』とのことだった。

まあなんにしても、さっきも言ったがそのせいで皆がイライラする羽目になっているのだ。

相手にしばらく休みにするから攻めてこないでください、なんつーバカなコトを言えるわけもない。んなもん回したら、攻めてきてくださいって言うてるようなものだからな。

それに袁紹を倒して間もないわけだから、袁家の縁のある豪族の制圧などもやらなければいけない。コレが落ち着けばもう少し余裕が出来ると思うのだが、生憎とそんな暇はまだまだ作れそうにない。

「はあ……。考えるだけでため息が出るな……」

俺は戦場で首をポキポキと鳴らしながら一人つぶやく。豪族の数はまだまだたくさんいる。今回は俺の隊の半分が新兵なので、鍛えるつつつ意味も込めて、俺はあまり動いていない。

そのせいでいつもよりは動きが遅くなっただけはいるものの、新兵の動きは悪くない。むしろ、戦い慣れしている兵士よりも動きがよく見えるくらいだ。さすが俺が天塩に掛けて育てた兵たちだな。

「よつと……」

そんなコトを考えながら必要最低限の働きはする。

さすがに全部を任せっきりにするわけには行かないからな。

そんなコトを思っていると俺に一人の兵士が近づいてきた。

「報告！ 近隣の村にて暴徒が暴れているとの情報が入りました  
！」

「はあ……」

兵士のそんな報告に俺はため息をつかざるを得なかった。

だって仕方ねえだろ？ 戦ってる最中にまた敵が現れたなんて言われたらかなりテンション下がるわ……。だいたい俺が引き連れてきてる隊はいつもより多いとは言え、それでも普通の隊からしたら少ない方だ。

それを分けるとなるとどちらもかなり厳しい戦いになることは間違いないだろう。だとすれば、そっちの村の方には俺が行った方が  
良いだろうな。

そうすればこっちの負担はそこまで高くなることはなくなる。指揮は雪に任せてあるから、俺が抜けたとしても動揺などは起こりは  
しないだろうしな。

「徐晃にもこの情報は送ってるのか？」

「は！　すでに他のものに向かわせております！」

「よし、なら俺は近くに現れた暴徒を何とかすると伝える。お前らは徐晃の指示に従って動け」

「は！　分かりました！」

兵士は俺にそう言うと、雪に今のことを伝えるために急いで駆けていった。

それを見送ったあとに俺はジャックにまたがり、暴徒が現れたと言う村に向けて走り出した。

村の近くまで来ると報告にあつたようになりかなりの暴徒が暴れていた。目測でしかないが、五千くらいはいるだろう。さらに辛いなコトに村で暴れていたと言っても、まだあまり中には入ってないようだった。

なら、好都合だ。さっさと片を付けて華琳のところに戻るとするか。そんなコトを思いながら俺は暴徒の群の中に突撃する。

「あんまり抵抗するなよ？　あと選ばせてやる。諦めてさっさと帰るか、それとも　ここで全員殺されるかをな」

俺はそう言うと殺戮を開始するのであった。

私は今自分の部屋でゴロゴロして休んでる真っ最中。さっきようやく出勤から帰ってきたばかりで、休んでいるところよ。

最近は何かと出勤が多くて疲れちゃうのよね……。まあ、今がそう言う時期でみんな同じように頑張ってるから、嫌とは言えないけどね。

それに最近はあるまり春蘭や季衣とかと顔会わせてないなあ……。みんな忙しすぎてまともに会えてないのよね。会えると言ったら華琳に桂花に風に稟、月に詠に真桜くらいのものかしら？

「紅葉ちゃん、居ますかー？」

そんなコトを考えていると私の部屋のドア越しから、おっとりとした口調の人物が話しかけてきた。

あれだけおっとりとした口調の人ってこの城じゃ一人しか居ないわよね……。

「居るけど、どうしたの？ 風」

ベッドから立ち上がりドアを開けながらそう言う。

それで話しかけてきた人物を見れば案の定、風だった。

「お疲れのとこ悪いんですけど、霞さん見ませんでしたか？」

「霞？ ううん、ごめん。見てないわ。それで霞に何か用でもあったの？」

「はいー。実はですね」

風の話だと、コレから霞と風と稟で出撃しなければならぬのだが、ドコを探しても霞が居なかった。

だから帰ってきたところ悪いんだけど、私にも霞を探すのを手伝ってほしいらしい。

……本当は疲れてるから嫌なんだけどなあ……。

「分かったわ。私も探してみる」

「すみません。では風は稟ちゃんと一緒に探しますので。ではー」  
相変わらずのおっとりとした口調で私にそう言いながら風はどこかに行ってしまった。

私も早く霞を見つけ出して一眠りしたいわ……。と私は思いながら、霞を探し始めた。

「何やっとなねん!」

「せやかて、これだけは譲られへん!」

しばらく探していると、真っ先に探しに来そうな庭のあたりから真桜と霞の声が聞こえてきた。

「何やってるのよ、あんた達……」

私はそんな二人に近づいていきながら、二人にそう言う。

なんか霞はいつも持つてる槍　飛龍堰月刀を真桜に見せてる  
みたいけど、どうしたのかしら？

「ん？　なんや紅葉かいな」

「それでどうしたの？　何かもめてるみたいだけど？」

真桜の言い方にちょっとムツと来たけど、今はツツコんでる余裕がないからそのまま流す。

「ええ所に来たな、紅葉！　ちょっとウチの話聞いてくれへん？」

「別に良いけどさ霞、これから出撃のはずでしょ？　風と稟が探してたわよ？」

「それにも必要なことなんや！　二人は待たしとつたらええ！」

「そんなに大事なコトなの？」

「せや！　これ、見てみ！」

霞はそう言って私にいつも霞が使っている槍　飛龍堰月刀を、  
私の顔の前にズイッと突き出してきた。

そんなに近づけられても、私が使つのは槍じゃないから槍のこと  
なんか全然分からないわよ……。と言うか近すぎて壊れてるのか、

何なのかすら分からないわ……。

私はそんなコトを思いながら堰月刀を押し返してから言う。

「これがどうかしたの？ 別に刃こぼれもしてないみたいだけど？」

改めて堰月刀を見たけど、別に刃こぼれがしてるわけでもなかった。

「これのドコに不満があるのかしら？」

「見て分かるやろ！ こないだの遠征で折れてしもつたから、真桜に新調してもらってん！」

そう言えば霞の堰月刀が真ん中からポツキリ壊れてたわね……。

ちなみに私の棍棒 『虎僕欧狼』も片方が根元からポツキリ逝っちゃったから、真桜に直してもらってたりするのよね。

「真桜、私のも出来てたりする？」

「紅葉のは、もうちょい時間掛かるわ。全部、一から見直しとるさかい。紅葉のはかなり重量があるからな、少しでも軽くして威力が出るようにしてんねや」

「そつかあゝ。じゃあ霞のも強くなつたんじゃないの？ どこか不満なトコでもあったの？」

私はそう言いながら霞の方をみる。真桜の言う限りだと、霞の武

器も強くなってるはずだけど、強くなって不満でもあったのかしら？

「別に不満うちゅう不満はないんや。けどな！　ここの龍の角が一本増えとるのはどないなっとなねん！　説明してもらおか！」

霞はそう叫びながら、堰月刀についてる龍の頭の角を指差した。

あれって角増えてたんだ……。て言うか怒ってたのってもしかして角が増えたから……。じゃないわよね？

「せつかく関羽の堰月刀と同じ拵えにしとったのにどうしてくれるんや！　台無しじゃないか！」

「ご名答……。やっぱり角が増えてたから怒ってたみたいね……。

「せやかて、強化したんやから、角は増やさんと強そうに見えるやろー！」

「何が強そうにじゃー！！　はよ直しー！！」

「直さへん！　どうしてもそこ直せうちゅうんなら、牙の数は倍にさせてもらうでー！」

「アホかー！　っ！！　そんな事したら、直させる意味ないやろがー！！　もっと台無しやー！！」

何故か堰月刀の装飾で喧嘩を始めてしまった二人……。

関羽と同じ数にしてたって言ってたけど、どうやって調べたのかしら？　て言うか、角ぐらい別にどうでも良いと思うけど……。



「一つ訊くけど、それって武器の性能としてドロカ問題でもあるわけ？」

「「ないよ」「

私の問いかけに声を合わせて答える二人。

別に武器としての性能が変わらないんだったら、角の一つや二つどうだって良いじゃない……。

「紅葉、霞は見つかりましたか……？」

そんなコトを思っていると、後ろから声をかけられた。振り向いてみればそこには風と稟が立っていた。

「見つかったは見つかったけど……見ての通りよ」

溜め息混じりでそう言いながら、喧嘩をしている二人を指差す。

「ウチの士気に関わるんや！ さっさと直し！」

「いやや！ 強化するんなら強化する作法つちゆうもんがあるんや！ せっかく強うなったんやから、それなりの格好はせんとあかん！」

「あかんもオカンもあるかい！」

相変わらずの喧嘩を繰り広げている二人、に稟は思わずと言った感じにため息を漏らしていた。

「とりあえず華琳呼んできて……。そうじゃないと終わりそうにないから……」

「そうですねー」

風がそう言うと風と稟の二人が華琳を呼びに城の中に戻っていった。

「なあ、紅葉はどう思う!？」

「へ？」

そんなコトを思っていると不意に後ろからそう言われた。

「強うなったんやから、それなりの格好はせなあかんよな!！」

「いや、そう言うのは本人のこだわり任せの方がええんや!  
! 紅葉もそう思うやる!？」

二人は私の肩をガツチリと掴みながら言う、と言うより私に叫んできた。

て言うか二人近すぎ……。しかも顔がすごく怖いことになってるんだけど……。

「ど、どっちでもいいんじゃない?」

とりあえずどっちかに加勢すると、大変だと思った私はどちらにも加勢しない道を選んだ。

「どつちでもええワケあるかい!!」

だけど私の選択はどちらからも矛先を突きつけられる道だった。

あー、早く帰ってきて私を助けて……。

二人に揺さぶられながら私はそう思うのだった。

「まったく。何をやっているの」

「私に言われても……。て言うか私被害者だし……」

結局霞は華琳に諭される形でしぶしぶそのまま出発していった。

西方の国境あたりを西の豪族連合が偵察して回るとかで、稟と一緒に牽制して回る任務らしいわ。

最後まで堰月刀のコトでぶつぶつ言ってたけど、武器の装飾なんてどうでもいいと思うんだけど……。

「みんな出勤ばかりでイライラしてますねー。この間も凧ちゃんと季衣ちゃんが喧嘩してましたしー」

凧の言うとおりで、最近はぶつかってばかりね。凧と季衣の喧嘩って言うのは、国境を越えてきた相手をドコまで追いかけるか……って内容だったかしら？

そう言う私も春蘭と、戦い方について喧嘩になって華琳に怒られ

たわね……。あのときは私も自我を押しすぎちゃったかな。

「あれは風が大人気ないで。ボクっ子はまだおこちゃまやないの」  
真桜が言えるコトじゃないでしょ……と言いたかったけど、私も人のことは言えないので言わない。

休みたいのは山々だけどそんな暇は全然ない。

霞と稟は出て行ったばかり。秋蘭は風と沙和をつれて、袁紹の関わりのあった豪族連中と折衝に出てるし、季衣と流琉も領内の盗賊討伐に走り回ってる。

恋とねねも近くに現れた敵の撃退だし空も近くに偵察。

桜牙も国境あたりに出てきた豪族連合と戦ってる……って言うってたかしら？

……あれ？

「そう言えば春蘭はどうしたの？」

これだけみんなが駆り出されてるんだから、休みつてコトはないと思うけど……。

「春蘭がどうかしたのかしら？ 一昨日から南で変な動きがあったと聞いたから、見に行かせてるけれど？」

「南って言つと……」

「孫策さんのところですねー」

私が言おうとすると風が代わりに言ってくれた。

「昨日って言うと私も桜牙も誰も居なかったから、相手に出来るのは春蘭くらいしか居ないもんね。」

「もしかして今城にいる将って私と真桜だけ？」

「ウチ、将やったん？」

「そうですよー」

「なんやてっ！？ 気づかんかった……」

……。今まで自分は何の位置付けになってたと思ったのかしら……？  
絡繰技術者？ もしかしたらこれで合ってるかもしれないわ……。

「て言うことは、今攻められたら危なくない？」

「そうね。とても危険だわ」

と真顔で言う華琳。ってそんなコト平然と言わないでよ!？

「慌てなくても大丈夫ですよー」

「へ?」

私が内心スゴく焦っていると、風が私にそう言ってきた。

風の話によると華琳自身を餌にして周りの諸侯を釣り上げるために、有力な将を出撃させてるみたい。

そうすることで、華琳を守るものが居なくなっただと思わせて、攻めてきたところを逆に打ち負かした異みただった。

「分かったようね。これだけ隙を見せれば、本気でこちらを狙いたい誰かが、動いてくれると思うのだけれど……さて、誰が連れるのかしら?」

「趣味悪いで……大将」

「私も同感……」

私は真桜の言葉に便乗して言う。いくら釣りたいからって、こんな危ないと思うわ……。

「ふふっ……。それは誉め言葉として受け取っておきましょう」

「誰も誉めてないわよ……」

私のつぶやきは突如として吹いた風にかき消された。

それから数日後、結局みんなと会えたとしても少しだけだったし、桜牙も帰ってきては出て行つての繰り返しだった。

さて、そんな私はあれから特に任務が入ることがなく、割とゆっ

くりとした数日を過ごすことが出来たわ。

ただ今は警備の仕事のために街に出向いてきてて、ちょうど往復地点の門の所に差し掛かっている。するとそんな私の元に、一人の兵士が駆け寄ってきた。

「ほ、報告！ 南西の国境を『劉』の牙門旗が通過するのを確認しました！」

「偵察とかじゃないの？」

「はい！ 規模は明らかに攻め込んできている規模です！」

本当につれたわ……。しかも『劉』って言ったら、劉備のところね。あそこには関羽や張飛と言った強力な将が多いし、私たちだけで相手を出来るかしら……。

「分かったわ！」

私は兵士にそう告げると、華琳のところへ走り出した。

「華琳！！ 大変……よ……って、えええええっ！？」

「あら、どうしたの？」

あら、どうしたの？ じゃないわよ！？ いった桂花と何やっているのよ！？

桂花は華琳の足首を愛おしむように両手で包み込み、うつとりと口づけをしていた。

うつ……。話には聞いてたけど、見るのと聞くのとは全然違うわ……。あれは私じゃあ絶対無理……。

「いろいろと言いたいことはあるけど、用件だけ言っわ。劉備が攻めてきたわ」

「そう。思ったより早かったわね。さて、紅葉。戦の準備は？」

華琳は桂花に足を舐めさせたまま、私に言ってくる。

「もう真桜と風、雪が始めてるわ。各地に散ったみんなにも伝令を出したけど、相手がここまで来る方が早いだろうって言ってたわ」

「そう。なら、軍は私が率いるとして、将は真桜と紅葉、風、雪、桂花もいるわね」

そこまで言つと華琳は桂花から足を離して、玉座から立ち上がった。

「さて、桂花も戦の支度に加わりなさい」

「ああ……。華琳さまのおみ足がぁ……」

華琳が立ち上がると心底残念そうに甘い声を出す桂花。

ゴメンナサイ。本当にあなたと分かり会える日が来るとは思えなくなつたわ……。



「ふふっ。その怒りと苛立ち、全て劉備に向けなさい」

「……はい。分かりました」

そう言う桂花の背後になんかバケモノが見えた気がするの、きつと気のせいじゃないわね……。

「良い子ね。それでこそ私の桂花よ。この戦が終わったら、また呼んであげるから安心なさい」

「あ……本当、ですか？」

「ええ。だから私に、勝利を捧げてちょうだい。いいわね？」

「はいっ！ 我が全身全霊をもって！」

さつきまでシュンとしていたのに、華琳のその言葉で一気に立ち上がる。

「紅葉も、頑張り次第では呼んであげないことも無いわよ？」

華琳が私にそう言うのと桂花に殺されそうな目で見られた。

「え、遠慮しておくわ。桂花に殺されそうだし……」

だいたい私はあんなコトはしたいと思わないわ……。だから睨まないでよ桂花！？

「あら、残念。なら、紅葉は風達の指示に従いなさい。劉備達は

待ってはくれないわよ?」

「り、了解」

「ふふっ。何を惚けたような声を出してるのかしら?」

「え、えっと……話に聞くのと実際に見るのとだと全然違うんだなあ、って思ってた……。じ、じゃあ私も準備に向かうわ!」

私は無理やり話を切り上げると、急いで玉座の‘魔’から出て行った。ちなみに表記は間違ってるから注意してね……。

そんなコトより玉座の‘魔’から出て来た私は途中で膝をついてしまった。

「アハ、アハハ……。さ、さすがに免疫がないとキツイわね、アレは……」

私は自嘲気味にそう呟いて、たまに桜牙がやってるように空を見上げた。

ホントにここでやっていけるのかしら……。

半ば本気で私はそう思った……。



第四拾貳話 『曹操vs劉備』將の不在』（後書き）

えっと、お知らせになります。これから一日一回更新を二日に一回更新に切り替えます……。

理由はリアルが忙しいために一日で仕上げるのは難しくなってきたためです……。

完結まで頑張りますが二日に一回更新に切り替えます。

ストックがたまってきたら一日一回更新に戻すかもしれません！

感想、投票待ってます！！

#### 第四拾参話 『曹操VS劉備』目覚めた人格』

side 蜀

「そう。曹操さんは近くの出城に移ったんだね」

曹操の城に向けて進撃している『蜀』の面々。その中の一人、桃色の髪を持ち優しい顔立ちをしている少女 劉備がそう言った。

周りには関羽、諸葛亮、趙雲と言った『蜀』の有力なメンバーがいる。そのうちの関羽は、眉間にしわを寄せて何やら不機嫌そうな表情をしている。

「はい。そちらに手持ちの戦力を集中させているようです」

劉備の言葉に諸葛亮がそう答えた。すると劉備は安心したとばかりの息を吐きながら言葉を発する。

「良かった……。さすが曹操さん。これで街に住んでいる人は、籠城戦に巻き込まれずに済むね」

劉備が言ったとおり、曹操はすでに現在城に残っていた兵を全て引き連れ、近くの出城に移っている。

もちろんそれは劉備が言ったとおり、籠城戦に一般市民を巻き込まないようするためだ。

「あの曹操がそこまで考えているかどうか……。単に少ない戦力

を有効に使えるよう、場所を変えただけではないでしょうか？」

しかし関羽は曹操がそう言った考えを持ってして移動したとは考えてはいなかった。

それもそうだろう。以前に関羽達は袁紹から逃げるために曹操に領地の通過を頼んだときに、散々言われたからだ。

「もう。愛紗ちゃん、曹操さんのこと悪く言い過ぎだよー」

そんな関羽の言葉に劉備は頬を膨らませながらそう言った。

劉備も以前に曹操に同じように言われたはずなのだが、あまり気にしている様子はなかった。

「そうでしょうか？」

相変わらずの不機嫌そうな表情のまま、劉備にそう言う。

それをみた劉備は関羽にバレないようにこつそりとため息をついた後に、関羽と同じように近くにいた諸葛亮に言う。

「けど、朱里ちゃん、本当に曹操さんと戦わなくちゃいけないの……?」

元々、劉備と言う少女は戦いを好まない見た目通り優しい性格をしているため、例え相手が相手だったとしても、戦うことを躊躇ってしまう。

だからこそ、ここまで来たのにも関わらず、そう訊ねてしまった

のだ。

「曹操さんはこちらを攻めると既に予告していますから。現状、曹操さんに万全の状態で攻め込まれては、私たちの戦力では一分の勝ち目もありません」

「それに、向こうから隙を見せたら噛みついてこいと言われてい  
るのです。その相手がわざわざ首筋を見せてくれているのですから、  
ここは誘いに乗ってやるべきかと」

諸葛亮の言葉に趙雲が便乗して言う。

諸葛亮の言うとおり曹操の配下には、『魏』の大剣である『夏侯  
惇』にその妹の『夏侯淵』。神出鬼没の騎馬隊を率いる『張遼』に  
飛將軍の『呂布』。

そしてその実力は今や『蜀』だけではなく、『呉』の面々も認めざ  
るを得ない『剣帝』の『龍崎桜牙』。さらにその弟子である『二刀流  
棍棒の』大史慈』。

あまり名は知られてはいないが、実力は折り紙付きの『松本連』

どの将達も一騎当千の力を持ち、それが全て集結すれば間違いな  
く勝ち目はないだろう。

しかし現在その面々のほとんどが城にはおらず、今の曹操の勢力  
は本来の半分以下となっている。今、曹操を倒さずして好機はもは  
や回ってはこないだろう。

「それって畏じゃないのかー？」

張飛の言つとおり、曹操には何か策があるのかもしれない。それは軍師である諸葛亮だけではなく、他の将も考えていることだろう。

「少なくとも、主力の将のほとんどが城を空けているのは間違いない。向こうも相応の危険を承知で仕掛けているのだろう」

関羽はギョツと拳を握りしめながら言う。

「虎の穴に入らなければ虎の子は手には入りません。けれど、そこを乗り越えることが出来れば、得られるものはとても大きいはずです」

確かにこの有力な将のほとんどが城を空けているのは、畏かもしれない。

だが今を逃せばさつきも言ったとおり、曹操を倒す機会は失われるに等しいだろう。

「それに、龍崎桜牙が来るかもしれぬ」

関羽は以前に桜牙に呂布から助けてもらったことがある。さらにはその武を間近に拝見し、その実力を確認している。

「あのお兄ちゃんが来る前に倒すのだ!!」

さらには張飛もが桜牙の実力を知っている。彼は関羽、張飛、孫策で掛かって傷一つ付けられなかった呂布を倒した。

だがそれでも実力を出し切っていないと思わせるほどの武だった。



(彼が戻ってくれば間違いなく我々は )

### 全滅

関羽の脳裏にその二文字が浮かび上がった。

「みんな、頑張ろう!」

劉備の言葉に皆が頷いた。

その頃、出城に移った曹操や大史慈などの準備がようやく終わったところだった。

side 紅葉

「本陣の設営終わったわ」

私は設営が終わると、出城に移りその城壁の上に上がっている華琳にそう言った。

「ご苦労様。なら、すぐに陣を展開させましょう。向こうは既にお待ちかねよ?」

華琳はそう言いながら、城壁の向こうを指差した。

「……スゴい数ね」

私は華琳の言葉を思わず息をのみながらそう言った。

「そうかしら？」

出城の城壁の向こう。平野に広がるのは私たちを攻めてきた劉備の大軍勢。翻る端は『劉』に『関』、『張』、『趙』と勇将名将が勢揃いだった。

華琳がそうかしら？　と言ったようにいつもだったら大した数じゃないかもしれないわ。だけど、今の私たちからすれば立派な大軍勢……。

それに対しての将は私と真桜であとは軍師の三人に大将の華琳……。

「けど籠城戦じゃないの？　春蘭が戻るのって明日の朝くらいでしょ？　……桜牙はいつ来るか分からないけど」

出城は城より南にあるわ。劉備たちを城の手前で迎え撃てると同じ時に、南方に出ている春蘭がより早く合流出来るように、と移動したわ。

もちろん住民なんか人っ子一人いない城だから一般市民への影響もなし。

それで桜牙がいつ来るか分からないのは、任務を早く終わらせた遅くなったりいつも時間が決まってないから、正確な時間が分からない……。

だからこそ帰る目処が分かる春蘭が早く合流出来るように、と言うのも兼ねて南の出城に移動した。

「最初から守りにはいるようでは、覇者の振る舞いとはいえないでしょう。そんな弱気な手を打つては、これから戦う敵全てに見くびられることになる」

「でもこれで負けたら元も子もないわ。劣性で攻めに出た暗君、なんて言われるかもしれないでしょ？」

「だからこそよ」

華琳のその言葉に私は首を思わず傾げてしまった。

華琳が言いたかったのは、逆に劣勢なこの状況下で勝つことが出来れば曹魏の強さを、いつそう天下に示すことが出来る。

さらにはこちらを牽制している連中にも、良い牽制になると言った。そうすれば必然的に私やみんなの負担が経ることに繋がる……。

華琳って一つの行動でも一手も二手も先を読んでるのね……。

「華琳さま！ 出陣の準備、終わりました！ いつでも城を出たの展開が可能です！」

そんなコトを考えると桂花が走りながらこちらにやってきた。

「さすが桂花。すべき事がよく分かってるわね」

「はっ。各所の指揮はどうなさいますか？」

「前曲は私自身が率いるわ。左右は桂花と風、雪で分担なさい」

華琳と桂花は次々と戦いに備えての話を進めていく。

「紅葉は真桜と共に後曲で全体を見渡しておきなさい。戦場の全てを俯瞰し、何かあったらすぐに援護を回すこと」

「分かったわ」

華琳の言葉に私は一言だけ答える。

「先日の反董卓の戦で、諸葛亮と関羽の指揮の癖は把握しております。……必ずや連中の虚を突いて見せましょう!」

そう言えば私も諸葛亮や関羽の指示を受けて動いたわね……。

「華琳、絶対に勝つわよ」

「ええ、当たり前よ」

勝てる勝てないを考えるんじゃない。

私たちは絶対に　　勝つ!!

side 蜀

一方、曹操たちが戦の準備を調えたあたりに、劉備たちは話していた。

「この戦力差で野戦を挑むか……。無謀と言つか自信過剰と言っべきか……」

関羽は嫌みたらしく、曹操が展開した陣を見ながら言う。

「初めから城に籠もりたくはないのだろう。振る舞いの潔さだけは、見事なものではないか」

一方、趙雲はそんな曹操をあざ笑うかのように言う。

「桃香さま！ 曹操さんが出てきました！」

すると諸葛亮が焦ったように劉備の元に駆け寄ってきた。

諸葛亮が言ったとおり、曹操がこちらに向かって歩いてきていた。

「そっか……。なら、行ってくるね」

そして劉備も前に出て行き、曹操と舌戦を繰り広げるのだった。

曹操と劉備の舌戦が繰り広げられている頃、太史慈と李典は工房と呼ばれる場所にいた。

side 紅葉

私は今、真桜がいつつも変な絡繰を作ってる確か……。工房とか呼ばれてる場所に来てるわ。

外では華琳と劉備が舌戦をしてると思うけど、私はその舌戦が終わる前にどうしても貰っておかないといけないものがあった。

「真桜、私の武器まだ直ってないの!？」

そう。私は二刀流棍棒を使う武人で、その片方が前に根元からパツキリ……ってこれは前に言ったけど、とにかく折れたのを真桜に直してもらってただけど、まだ直ってないってどういうことよ!？

「そんな怒鳴らんといてな」

「うっ、ゴメン……」

私は真桜の言葉で自分が叫んでいることに気づいた。

ただどうしよう……。ようやく二刀流で慣れてきたって時に、今の状況下で一本で戦うのはかなりマズいわ……。

いつもの戦力だったら一本でも戦えかもしれないけど、今の状況下だったら私は人一倍働かないといけない。それにも関わらず不慣れになってしまった一刀流で戦うのは不利……。

「紅葉の武器は素材から見直して、なるべく良い組み合わせにしようと思ったんやけど、この類の武器は初めてでな。いろいろと調整が難しいんよ……」

「そっか……。大丈夫！　なんとか一本でやってみるから！」

私は真桜にそう言うと、ついでに調整してもらおうと預けてた棍棒を握りしめて、工房を出ようとした。

「ああ！ ちょい待ち！」

「どうしたの？」

私は真桜が焦ったように呼び止めてくるから、立ち止まり振り返る。

「実は、隊長からこれを預かってたんよ」

真桜はそう言いながら、いつも桜牙が使っている白と黒の短剣を持ってきた。

これって桜牙はいつも創り出している二刀流の短剣ね。でもどうして真桜が持つてるのかしら……。

「どうしても隊長がいつも使ってる武器を解析してみたかったんやけど、なんやよく分からん素材で出来とったから、結局分からず終<sup>じ</sup>まいやったんよ……」

「それは分かったけど、それをどうして私に？」

それが今の私の一番の疑問だった。

「隊長も紅葉も二刀流なんやから、もしかしたら使えるかもって思てな」

真桜はそう言いながら私に一对の短剣を渡してくる。

「代わりになるか分からへんけど、無いよりはましや。持ってい

き

「……うん。ありがとう」

私はそう言いながら真桜から桜牙の一对の短剣を受け取る。

だけど受け取った瞬間に、私の頭の中にいろいろな記憶が浮かび上がってきた。

そうか、‘ボク’の役目は

「紅葉、そろそろ華琳さまが戻ってくる頃や！ 行くで！」

「うん。分かったわ」

真桜の言葉を受けて私は戦場に戻っていった。

そして戦場に戻ってくると、既に華琳が舌戦から戻ってきていた。しかも嬉しそうな顔をしてるって事は、舌戦で劉備を圧倒的に打ち負かしたとかそんなところかしら。

「紅葉、全軍を展開するわよ！ 弓兵を最前列に！ 相手の突撃を迎え撃ちなさい！」

「分かったわ！」

「その後、紅葉は後曲に。第一射が終わったら、左右両翼は相手を攪乱なさい！ その混乱を突いて、本体で敵陣を打ち崩すわよ！」



華琳が次々と戦いの前準備を着々と進めていく。

「華琳。華琳の背中には、ボクが守るよ」

「ええ。桜牙の代わりはあなたに任せるわ」

華琳は私に小さく笑いかけると、兵の方を向いて大音声の号令を放つ。

「聞け！ 勇敢なる我が将兵よ！ この戦、わが曹魏の理想を誇り賭した試練の一戦となる！ この壁を越えるためには、皆の命を預けてもらうことになるでしょう！」

華琳の言葉を受けて私は桜牙の愛用の一対の短剣『白羽黒羽』を強く握りしめる。

「私も皆と共に剣を振るおう！ 死力を尽くし、共に勝利を謳おうではないか！」

華琳がそこまでを言うと、敵軍が動き出した。

それを見た桂花も華琳にそのことを告げる。

「これより修羅道に入る！ 全ての敵を打ち倒し、その血で勝利を祝いましょう！ 全軍前進！！！」

こうして本格的に戦いが始まった。

side 桜牙

ようやく豪族の相手や、暴徒の集まりを撃退した俺の所に一人の伝令兵が駆け寄ってきた。

しかもその表情からはただならぬ雰囲気が出されており、戦いが終わり気が抜けていた兵に緊張が走る。

「で、伝令です！！ 劉備の軍勢が南西を通過、現在曹操さまが応戦しております！」

「なっ！？」

さすがの俺ですら今の伝令の言葉に驚愕してしまった。

今、華琳の城に残ってる将は真桜と紅葉のみ。あつ残っているのは軍師の三人だけだ。

もともと、華琳は劉備を釣るために有力な将を外に出してつてもあるが、何にしても動くのが早すぎる。

今の紅葉やそのほかの戦力じゃあ関羽などを率いている劉備に勝てるわけがない……。関羽とともに戦えるのは春蘭や恋くらいだろう。

だが今はそのどちらもが不在で、城に戦える奴は残っていない。だったらもう任務の終わった俺が急いで戻るしかねえじゃねえか。

「伝令は他の将にも回したのか？」



「紅葉！ 風がもう少し兵を送ってくれって！」

「さすがにこれ以上は無理よ！」

戦いが始まってからしばらくが経つけど、やっぱり予想通り展開はどんどん劣勢になっていくばかり。

「分かっとなるけど、それを何とかするのが隊長の代わりの紅葉の役目やる！！！」

「無茶言わないで！ 予備の兵力が無い状態でどうやって援軍を送るって言うのよ！！！」

そんな文句を言っても現状は好転しないのは分かっている。だけど兵が足りないのは風の所だけじゃなくて、桂花や雪のところも劣勢……。

「華琳のところはどうなってるの！？」

「押されとるよ！ やっぱり兵隊が足らんのが響いとるみたいや」

こっちに増援の要請はこないけど、華琳が相手にしてるのは関羽の部隊。この兵数が足りない状態で増援の要請が来ないのが不思議なくらいだわ。

くっ、こんなところで終わりだって言うの？

『いや、そんなコトは‘ボク’がさせないよ、紅葉。』

ドクン

「ここで華琳を失うわけにはいかないわ！ 真桜ここは任せるわ！」

私は真桜にそう言うのと真桜の返事も聞かずに華琳のところへ走り出した。

こんなところで華琳が死んじゃいけない。だったら霸道が何たらの前に、撤退するのが大事に決まってるわ。

そして私が華琳のところに向かうと、華琳が関羽と戦っているのが見えた。

「やらせないわ！！！」

私はそう言いながら、華琳と関羽の間に体を割り込ませて関羽を『白羽黒羽』で連続で切りつけていく。

しかし関羽はそれを見事に全てを防ぎ、私から距離をとる。

「邪魔をするな！！！」

関羽は私にそう叫びながら堰月刀を私に連続で振るってくる。

私はそれを『白羽黒羽』で何とか受け止めているけど、もともと攻撃範囲の全然違う武器を使っているため、間合いがなかなか掴めない。

そのせいで私は押され気味になっているが、ここで引くわけには  
いかない。

だって、桜牙がない今は私が華琳の盾となり翼とならなければ  
ならないからー！

『なら、ボク、にかわれ』

ドクン……

誰よ、アンタ……。

ドクン……

『今は知らなくていいさ。ただ今は、ボク、に体を委ねろ！』

ドクンー！！

そんな謎の声と会話をしているウチに関羽が堰月刀を振り下ろし  
てきた。

だが、ボク、はそれを白羽で受け止める。そして堰月刀をはじき  
返した後に、ボク、は関羽に向かって言う。

「悪いけど、今は、曹操、に退場してもらおうわけにはいかないん  
だよねえ」

「貴様、何を言って」

関羽が何かを言い終える前に「ボク」は関羽に向かって言う。

「だからさ、今はちょっと眠ってなよ」

「ボク」はそう言う。関羽の鳩尾に黒羽の刃がない方で殴りつける。

気絶はしないまでもあれなら、しばらくは動けないね。

さて、ようやく「目覚める」コトが出来たけどこっからは  
あなたの役目だよ「紅葉」

「逃げるよ「華琳」」

私は華琳にそう言うと、その場から華琳をつれて逃げ出した。

「紅葉、なぜ貴女がここにいるの!? 後曲での指示はどうしたの!?」

私がいや 『彼女』が助け出した華琳からの第一声はコレだった。

「もう遅れる兵なんかいないのよ!! もう限界なの……。いったん、城まで下がろう」

「ここで兵を引けというの!? 劉備を相手に負けを認めると?」

「そうよ。まだ死んだワケじゃない。城まで戻って、みんなの合

流を待てばいくらでも活路は開けるわ」

私は空を見上げながら華琳にそう言う。

「嫌よ！ あの子のような甘い考えに膝を折るなんて この私の誇りが許さないわ！！」

「……。アンタの考え方が甘いよ。この兵数で正面からなんか戦えるわけ無いじゃない。ばかげてるわ」

「馬鹿で結構。理想を貫くことを馬鹿というなら、それは私にとっては誉め言葉だわ。それで野に散ったとしても、それこそ本

「  
ふざけるなア！！」

私は華琳の言葉を遮るようにそう叫びながら、持ってきていた棍棒を華琳の脇に思いつき叩きつける。

ドゴォーン！！ と凄まじい音が響き渡り、棍棒を振り下ろした場所には巨大な穴が出来上がっている。

「この一戦負けただけで、アンタが劉備に負けたことになると思ってるわけ！？ そんなコトないでしょ？ まだ拳を握れる、武器を取れる。それに華琳は生きてるじゃない！！」

私は華琳の肩を掴みながら叫ぶ。

「負けて言うのは、膝を折って命を取られたときこそが負けじゃないの？ 理想なんか貫けたって、死んだら終わりなのよ？」



「……」

「生きていれば負けじゃない。今は一旦城に引くだけ。城に戻って体勢を立て直して、籠城して、みんなが戻ってくるまで持ちこたえれば　勝てる、絶対に!」

私は華琳の目をジッと見据えながら言う。

すると華琳は一度だけふつと笑うと、私に言ってきた。

「どうやら劉備との舌戦で少し頭に血が上っていたようね」

「そう言うときは誰にでもあるわよ」

「ふふつ。桜牙ならまだしも、あなたに言われるなんてね」

華琳はさっきまでと違っていくらか落ち着きを取り戻したように言う。

それにいくら華琳の頭に血が上ってたって言っても、よくよく考えてみるとあんなコトしたら普通は処刑ものよね……。

な、なんか考えたらだんだん怖くなってきたわ……。

「安心なさい。さっきのことであなただをどうこうしたりするつもりはないわ」

「よ、よかつたあ……」

私は思わず安堵のため息をつく。

「では紅葉の言うとおり、一度しろに引きましょう」

「えっと、もう桂花と風、雪には撤退の指示出しちゃったんだけど……」

「あら、戦いだけかと思ったら桜牙みたいに機転が利くのね」

華琳は私にそう言うけど本当は『彼女』のおかげなのよね……。

それに、私の中にいるもう一人の私……。どうして私の中にもう一人いるのかしら……。

「本隊にも撤退命令を出しなさい。真桜に作らせてあるはずの、煙幕をあるだけ使って一瞬でも時間を稼いでちょうだい。一兵でも多く城に帰らせるわよ！」

「分かったわ！」

それから私は華琳の指示通り真桜が作った煙幕玉を使いながら、本隊に撤退命令を出した。

これからが籠城戦。みんなが帰るまでは私（ボク）が 華琳の盾となり、翼となる！！



第四拾参話『曹操vs劉備』目覚めた人格』（後書き）

どなたか『直死の魔眼』について教えてください！

連載を書くわけではないですが、予告第二弾で『直死の魔眼』を  
持った主人公を書きたいので……。

アンケートは今日いっぱい締め切りです！

感想、投票待ってます！

## 第四十四話 『曹操vs劉備』太史慈の猛攻』

side 蜀

「ゴホツ…ゴホツ……。くっ、今のは何だったのだ……」

関羽は鳩尾を抑えながらそうつぶやく。さっきまで関羽は曹操と斬り合っていた居たのだが、突如として乱入してきた太史慈により曹操を逃がしてしまったのだ。

さらには太史慈相手に一撃も決めることが出来ずに、逆に自分が隙を見せる羽目になってしまう失態を犯していた。

それにしても、と関羽は思う。

（以前見たときは、あそこまでの武を持ち合わせていなかったはずだが……）

反董卓連合の戦い時に無理難題を押しつけられたときに、関羽は曹操より太史慈の隊を借り受けていたのだ。曹操が関羽や諸葛亮の動きを盗むように、関羽側も曹操の隊の力を見極めていたのだ。

その時点での関羽の太史慈への評価は『一撃一撃を見切れば、大したことはない』だったのだ。

しかし今回で関羽の太史慈への評価が変わった。いくら太史慈がいつも使っていない武器を使っていたとしても、自分が見逃されるほどまでに追いつめられたのだ。

仮に太史慈が双剣の鍛錬をしていたのならば、関羽を圧倒できたかもしれない。しかし太史慈は双剣を使った経験は皆無だ。それにも関わらず太史慈は関羽を圧倒した。

(それに何だったのだ……。あの違和感は……)

関羽は太史慈について疑問を覚えていた。見た目は確かに太史慈だった。だが実際に武器を交え、言葉を交わした末に太史慈に違和感を覚えた。

言葉にすることは出来ないが、何か人ならざる違和感を関羽は感じていた。

「愛紗！ 曹操の軍が撤退を始めたぞ！！」

関羽が堰月刀を支えに立っているとそんな関羽のもとに趙雲が駆け寄ってきた。

「……そうか。なら、このまま追撃を掛けるぞ！！ 皆のもの、我らに続け！！ 一気に曹操の首級、挙げて見せよ！！」

関羽はさっきまでの考えを振り払うかのようにそう叫んだ。

side 紅葉

私は関羽の追撃が来るのを視界の端で捉えながら、華琳に害が行き届かないように警戒しながら撤退している。

あのときは『彼女』のおかげで関羽を圧倒出来たけど、また戦うとなったらおそらく勝つことは出来ないわ……。

「華琳さま！ ご無事で！」

すると私が先に撤退するように言っておいた桂花が華琳と私を見つけて、駆け寄りながらそう叫んできた。

「すぐに関羽の追撃が来るぞ！ 兵を全て収容し、城門を閉鎖しろ！！！」

「既に収容は完了しています！ 城門閉鎖も終わりました！」

相変わらず動きが良い桂花に私は感心していたのだけど、そこであることに気づいた。

「桂花、真桜は？ 真桜はどこにいるのよ！？」

そう。あたりを探すのだが、真桜の姿が全然見当たらない。後方で退路を確保してたから戦ってないはずだけど、いつものあの元気な声がどこからも聞こえてこない……。

「大丈夫よ。真桜なら別の作戦があるからそちらを任せてるだけよ」

「よ、よかった……」

私は桂花の言葉を聞いて思わず安堵の息を漏らす。

「よし！ 総員城壁の上に待機！ 籠城戦で敵を迎え撃つわ！  
何としても春蘭や桜牙が帰ってくるまで耐えきってみせるわよ！」

華琳の声が城に響きわたる。そして私は私の中にいる『彼女』に話しかける。

あんた、何で私の中にいるわけ？

《今それ訊く？ この状況下でよく平然と訊けるねえ》

『彼女』は笑いを堪えたように私にそう言ってくる。

そうは言われても戦いの部分においては私よりも確実に強い。もしも『彼女』の力があれば、華琳を確実に守ることが出来るわ……。

《安心しなよ。この戦いの間は、力を貸してあげるからさ》

……なら戦いが終わったら、アンタのことを教えなさい。

《戦いが終わったらかは分からないけど、いつか教えてあげるよ》

それで十分よ。

私は『彼女』にそう言うと、空を仰いだ。

side 蜀

「曹操め。ようやく籠城戦か……」

関羽は趙雲などと言った面々と、曹操が立てこもった城を見上げ



つばやいた。あのあとに追撃を掛けたはいいが、白い煙幕により追撃を阻まれ、ほとんど追撃の意味を成していなかった。

「愛紗！ 朱里から作戦の指示を貰ってきたのだ！」

すると諸葛亮から指示を受け取るために諸葛亮のところに行っていた張飛が、趙雲や関羽の元に駆け寄ってきた。

その手にはなにやら紙が携えられていた。

「朱里は何と？」

「覚えられないから紙に書いてもらってきたのだ！ 星、読んで！」

この時代にまだメモは存在してはいないはずだが、どうやらそれをやるうと言っくらいには知識はあったようだ。

張飛はメモを一番近くにいた趙雲に渡しながら言う。趙雲はそれを受け取りながら、何枚かにまとめられた作戦表をみる。

そして一通り見終えた趙雲はクスリとしながら言う。

「なるほど、軍師殿も可愛い顔して、なかなかにお人が悪い」

趙雲はいつも「はわわ」と言っているちびっ子軍師を思い出しながらそうつつばやく。

「どつするのだ？」

「まずはな」

side 紅葉

「急いで組み立てなさい！ 敵は待つてはくれないわよ！」

「桂花、これはドコ！？」

「それはそつちよ！」

現在、私たちは真桜が考えた秘密兵器を急いで組立始めている。大きな丸太に私の腕よりも太い綱、さらには巨大な歯車や回し手、木製のなんかよく分からない大きなものがゴチャゴチャと置かれていて私たちはそれを組み立てている。

原理としては丸太を落として引き上げる装置らしいんだけど、こう言うのに詳しくない私から見たらただのガラクタにしか見えないわ……。

「連中が攻めてくるまでに組み終えるのよ！」

「分かったわ！ えっと、ちょっと誰かこれ持つの手伝って！」

こうして私たちは休む暇もなく、せつせと動き回る。

side 蜀

一方、諸葛亮から作戦を聞いた趙雲と張飛は城の外れに来ていた。

「さて、軍師殿の指示だと確かこの辺りに使われなくなった小さな用水路が……」

諸葛亮の指示は使われなくなった用水路から奇襲を仕掛けると言うものだった。おそらくは誰も気づいていないと思いつきそこから奇襲を仕掛ければ、いきなり現れた敵隊に混乱して倒しやすいと言うことなんだろう。

趙雲と張飛は兵士からもらった灯りを持って、用水路の中に入っていた。

「真つ暗なのだ。もう誰も使っていないのかな？」

張飛の言うとおりに用水路を進んでいけば進んでいくほど暗闇が濃くなっていき、灯りが無ければ本当に何も見えない状態になっている。

ポチャン、とところどころから水滴が落ちる音が響き渡り、それを耳にしながら趙雲と張飛は先に進んでいく。

「こんなところに用水路があること自体、忘れ去られているのだろう。軍師殿も資料が無ければ気がつかないと言っただろう。」

どつやった手段でこちらの地図を手に入れたかは分からないが、そこに目を付けるとはさすが諸葛亮と言ったところだろう。

すると、不意に張飛の足元でプツンと糸が切れるような音が聞こ

えた。それと同時にガラガラガラと用水路が崩れ落ちてきた。

「……しまった、畏か！」

趙雲はやられた、とばかりに顔をしかめながらそう叫ぶ。

「撤退、撤退なのだーっ！」

そして崩れ落ちてきた用水路から趙雲と張飛は急いで撤退を始めた。おそらく、諸葛亮はこの場所にだれも気づかないと思ったようだがそれは違う。

地図さえあれば気づけるような場所を曹操の軍師勢が見逃すはずがなかった。

一方、関羽が率いる隊は曹操が立てこもる城に向けて火矢を放っていた。

「撃て、撃てえっ！！ 狙いは適当で構わん！ とりあえず、城の中に届けばいいっ！！！」

関羽にそう叫ばれた兵たちは続けざまに火矢を城の中に撃ち込んでいく。確かにその火矢の六割ほどが中に撃ち込まれていた。

しかし残りの四割ほどが一人の将 太史慈によってたたき落とされていた。普段自分の体重よりも重い武器を使いながらも、普段の生活と同じくらい動いている太史慈は武器が無ければかなりの早さで動くことが出来る。

太史慈の現在の武器は双剣。そのため城に撃ち込まれる火矢を目

にも留まらぬ早さで動き、たたき落としているのだ。

ただ、それだけの無茶をしていれば必ずガタが来る。関羽はそれを狙い火矢を撃ち込ませ続けている。

実際関羽の思惑通り当初から比べれば太史慈の動きは鈍くなり、体力が切れかかっていることが分かる。しかしそれでも太史慈は迫り来る矢を物ともせず、文字通り身を削る思いで火矢をたたき落としている。

(くっ、なんとという集中力だ。あれでは火矢の意味がほとんど無い……)

火矢を撃ち続ける命令を下しながらも関羽は太史慈を見ながら苦虫をかみ殺したような顔になる。

「あ、愛紗ああ……」

するとそんな関羽のもとに泣きそうになっている張飛や、してやられたとばかりの表情をしている趙雲などがやってきた。

「どうしたんだ、お前達」

「連中にしてやられた。抜け穴を封鎖しおったわ。そちらはどうだ？」

「こちらあまり効果は出ていない。……アレを見てくれ」

趙雲の問いかけに関羽は太史慈ではなく、城に取り付けられた力ラクリを指差す。

カラクリは丸太を落としては昇っていき、落としては昇っていく。単純な動きなのだがそれだけで蜀の猛攻が防がれている。

「どうも向こうには、ああいう絡繰に詳しい輩がいるらしい。昇る場所を変えても、城壁の上を動かせる上、何度も落ちてくるからどうにもならん」

あの丸太に兵を掴まらせてみてはと趙雲が意見を出したのだが、関羽は首を横に振る。どうやら既にそれは行ったようだが、昇る間には良い的になるだけだったらしい。

あの太い綱を切ろうとしたが、同じように狙う間はずっと的になり続けるだけだったようだ。さらには火矢が当たっても随分と頑丈な綱を使っているらしく、全く効果がないらしい。

「さらにはあ奴だ」

今度こそ関羽は太史慈を指差しながら言う。

「あ奴は確か太史慈だったか……？」

「ああ。太史慈のおかげでこちらの火矢はほとんどが無意味だ。太史慈を何とかしないことには、始まらないかもしれん」

関羽は先ほど自分と戦い、圧倒した太史慈を思い出す。

「ならば、誘い出してみてはどうだ？」

趙雲のその言葉に関羽と張飛が耳を傾けた。

side 紅葉

「華琳！！ 敵軍から突っ込んでくる三つの影があるわ！！」

「関羽に張飛に趙雲？ 何を考えている……」

多分、あの三人は邪魔な丸太を一気に壊すために突っ込んできたのね。三人居れば、誰か一人が矢を弾き残りの二人が綱を切り落とす。

そして一気にこちらの戦力を大幅に削る作戦に出たってわけね……。このまま弓兵に矢を放つように命令しても多分忌みはない……。

「華琳、私が出る！！ 援護を頼むわ！！」

私は華琳にそう言うのと華琳の返事を聞かないまま丸太に飛び乗り、そのまま城壁の下まで降りる。そして三人の前で『白羽黒羽』を構える。

「やはり出て来たな、太史慈」

すると関羽が堰月刀を構えながらそう言うてきた。張飛と趙雲も同じように武器を構えて、最初から三対一で戦う気は満々みたいね……。

「ふん、さつき私に負けたからって今度は何人掛かり？ 上等だね。全員まとめて掛かってきなさい！！」

「もとよりそのつもりだ、行くぞ鈴々、星!!」

関羽がそう叫ぶと三人が一気に私に切りかかってきた。関羽は私に向かつて堰月刀を突き出し、趙雲は右から張飛は左から私に向かつて各の武器を振るってくる。

私は後ろに身を引きながらも関羽の突きを受け流すために、白羽黒羽の刃をたてて後ろに勢いを受け流す。そしてそのまま回転して、趙雲に切りかかる。

「ふっ、甘い!!」

しかし趙雲はすぐさま武器を手元に戻して、横風振るった私の一撃を防ぐ。趙雲が防いでいる間に関羽と張飛はいつの間にか私の両脇に回っており、同時に槍を突きだしてくる。

それに対して私は再び身体ごと回転させ、足りない分の力を遠心力で補い二つの突きを外側に受け流す。さらにそのあと残っている趙雲からの反撃をさせないために、趙雲に蹴りを放ち牽制する。

「はあああああっ!!」

そのあと、私はこの三人の中で一番厄介な関羽に連続で切りかかっていく。とりあえず、関羽だけは何とかしなければと思い白羽黒羽を振るうんだけど、いつもより一撃に重みがないため関羽にあまり攻撃が効いてないように見える。

「貴様一人で、我々三人を相手に出来ると思うな!!」



関羽はそう叫ぶと私の一閃を身を屈めることにより回避して、堰月刀を私に向かって振り上げた。咄嗟に狙われた顔を引いたけど、完全には避けきれなかったみたいで、頬に斬られた痛みが駆け抜ける。

頬から血が流れて顎を伝い地面に落ちる前に趙雲と張飛の猛攻が私を襲う。さっきまでの体力消費が今になってかなり響いてくる。足が震え、二人の攻撃を受け流そうにも踏ん張りきれずに上手く受け流すことが出来ない。

段々と腕も痺れてきて白羽黒羽を握る握力が無くなってくるのが容易に分かる。それに白羽黒羽の刀身にも輝が入ってきて、あと何合と受け流すことが出来るか分からない。

「隙ありなのだ!!」

そして集中力が途切れてきた私の右側より張飛が槍を突きだしてきた。私はそれに対して黒羽で受け流そうとしたが、上手く行かず黒羽の平の部分に張飛の槍が突き刺さり黒羽が砕け散る。

《さすがにマズいな。ボクに代われ》

『彼女』がそう言ってきたが既に遅かった。もう片方の白羽も趙雲によって砕かれ、棍棒を持ってきていない私にはもう武器がない。

それと同時に蜀の敵陣の後方から巨大な砂塵が上がるのが見えた。それを見た私はまだ諦めまいと、近くに落ちていた兵士の剣を二本手に取り振り下ろされる関羽の一撃を防ぐ。

「まだ、まだアアアアアッ!!」

私はそう叫びながら関羽の堰月刀を弾き返して、関羽に一閃を繰り出す。今ので私を殺す気だった関羽はそれを避けられないで、腕に私の一閃を喰らう。

その衝撃で関羽はよろめき、追撃を繰り出すには絶好のチャンスだった。

「愛紗！？　こんのお！！」

しかしその追撃は許されることはなく、張飛によって防がれる。関羽と張飛の一撃ずつしか受けてないって言うのに、普通の兵士の剣が呆気なく碎け散る。

私はすぐさま新しい剣を二本手に取り、趙雲に切りかかる。しかし趙雲は私の動きを見切ってたかのように、私の一閃は避けるが避けた先に居た関羽とぶつかり合って体勢を崩す。

そこを狙い私は二刀を振り上げ、同時に振り下ろす。しかし張飛が再び私の前に立ち槍を横に構えて私の一撃を防ぐ。

「くっ、邪魔をするなチビ！！」

「鈴々はチビじゃない、のだ！！」

張飛はそう叫びながら持ち前の力で私を押し返してくる。いつもなら負けるわけ無いのに、今はさすがに分が悪すぎるわね……。しかもなんか視界が揺れてきたわ……。

だけど私は負けるわけにはいかない、否負けちゃいけない！！

私はそう思い自分を奮い立たせ大地を踏みしめる。

「我が名は太史子義！！ 我が主、曹操の盾にして方翼となる者！！ このような所で我が盾は砕けぬ！！」

私はもう立っているのも辛いのに叫び、関羽達を睨みつける。

「我が盾を砕かぬ限り、我が主のところに行けないことを知りなさい！！」

私はそう叫ぶと両手に剣を構えながら三人に向かって走り出した。

「我が名は関雲長！！ ならば我が堰月刀を持って、貴様の盾を貫こう！！」

関羽も私に向かってそう叫び走り出してきた。そして私たちは走ってついた勢いを殺さないまま、自らの武器に勢いを上乘せして振るう。

私の武器は関羽と刃を一回交えるだけで砕けるけど、砕ける分腕に余計な衝撃が掛からない。私は周りにある剣を拾い上げ、関羽の喉元に突き出す。

関羽はそれを難なく回避して、堰月刀を振り下ろしてくるけどまだまだ甘いわ。私は堰月刀の一撃を避けて、堰月刀の刃の部分を踏みつける。

「終わりよ！！ 関羽！！」

そう叫びながら剣を突きだしたが、脇から来た一撃により剣は砕

かれる。そして私の腹に衝撃が来て、二歩三歩と後ろに後退する。

しばらく何も食べてなかったのが幸いしたか、吐くまでには至らなかったわ。だけど、そんな私の首もとにヒンヤリとしたものが突きつけられた。

「ここまでだな、太史慈」

突きつけられたのは趙雲の刃。それを弾こうにももう剣は落ちていない。

「太史慈、覚悟!!」

そして趙雲の槍が振り上げられ私は死を覚悟した。

だけどいつまで経っても私の身体には痛みがやって来ない。来たのは浮遊感だった。

「勝手に死ぬ覚悟してんじゃねえよ」

掛けられた声はいつも身近に感じていた師匠の声。

瞑っていた目を開ければそこには 桜牙が居た。

「主人公つてのは遅れて登場するって相場が決まってるだろ？」

桜牙はいつもの笑みを浮かべたまま、私を城壁の上に居る華琳のところ以降ろす。

そして桜牙は再び城壁に足を掛けて戦場を見下ろしながら言う。

「ありがとな。お前達のおかげで華琳は怪我一つしないで生きてる。こっからは俺達、の役目だ」

桜牙は私たちにそう言うと、城壁を降りて戦場に向かっていった。

それと同時に私は意識を手放した。

第四十五話 『曹操vs劉備』 決着と発見』

side 桜牙

伝令から華琳が劉備と戦っていることを聞いてから既にかなりの時間が経過してしまっていた。俺と恋は全力で馬を走らせているために、ついて来れている兵はかなり少なくなってきた。

途中まではねねもついてきてたみたいなんだが、さすがに軍師が全力で駆けている俺や恋についてこられるわけが無く、途中から段々と俺達から遠ざかって行ってしまってた。

だがそれだとしても俺はスピードを緩めるわけには行かない。今こうしている間にも華琳の命が危なくなってるかもしれない。

そう思った俺は手綱を持つ手に自然と力が入る。するといきなり恋が俺に言ってきた。

「……大丈夫、華琳に、紅葉ついてる」

「……ハッ、確かにな。華琳には紅葉がついてるからな」

それに華琳の側には桂花や風、雪と言った軍師勢もいる。それだけ揃っていれば、俺たちが来るまで何とか持ちこたえてくれるはずだ……。

「桜牙……っ!!」

「兄ちゃん〜ん!!」

「隊長!!」

そんなコトを話していると後ろから声が聞こえてきたので振り返るとそこには、かなり大きな砂塵が舞い上がり、俺たちのところに向かってくるのが見えた。

そして近づいてくる牙門旗は俺が知っている物ばかりだった。

「霞、季衣、凧!、それにみんな!! 間に合ったみたいだな!!」

俺は近づいてくる華琳に仕える将達にそう言う。

「当たり前だ! 華琳さまの危機だと言うのに来ないはずが無かるろっ!!」

「そうです! 隊長!!」

俺に答えてくれる春蘭と凧。どうやらメンバーは一人も掛けることなく全員が揃ってくれたみたいだな。

ただ全員が集まってくれたんだが、集まったときに感じた違和感が二つあった。その違和感って言うのは、この世界では有り得ないものだった。

俺が感じた違和感は前に俺が居た世界だったならばそれこそ普通だった力 『魔力』を感じたんだ。

そんなコトを思っていると、いつもの笑みをまき散らしている空ではなく難しい表情をした空だった。

「……桜牙さん、あの二人に何かしたのでですか？」

空はそう言いながら秋蘭と霞の二人に一瞬だけ視線を向けた後に、俺の目を真っ直ぐに見据えてくる。やはりと言うべきか、魔力の存在を知っていて感じる事が出来る空はそう訊ねてくる。

だが訊ねられても俺も何で魔力があのに二人に発現したのかは分かるわけがない。つか分かるんだったら気にしないんだつつの。

「分からねえ。ただ、魔力が発現したのは間違いないな……」

「そうですね。張遼殿の方は分かりませんが、妙才殿の魔力……明らかに魔法使いとしてやっていけるほどの魔力です」

魔力つてのは誰にでも有るんだが、それを持つてるのと実際に使ってみるのでは訳が違う。

何かキツカケが無ければ魔力を使うことなんか出来ないはずだ。さらに言えばこっちじゃ魔法が使えないはずだ。

「妙才殿は無意識に自分が放つ矢を魔力で強化しています」

だからこそ俺は空のこの言葉に驚いたのだ。魔法が使えない云々の前に魔力の存在すら知らなかった秋蘭が魔力を使えるようになったんだ。驚かない方が無理だって言うんだ。

とにかく秋蘭が魔力を使えるようになったら、魔力を制コントロール



御のやり方を教えないといけないな……。

使い方も分からない魔力が暴走オーバードライブされちまっても困るからな……。

「そう言えば妙才殿と桜牙さんは体を重ね合っただけでしたね？」

「ぶっ！？ て、テメエ！！ 今はそれとコレとじゃ関係エねえだろ！！」

俺は思わず叫んでしまった後に秋蘭の方を向いたのだが、秋蘭は顔を真っ赤にして俺から視線をそらしてしまった。

それに他のメンバーも顔を真っ赤にしたり、俯いたりと反応は様々だった。つたく、何でこんなときにんなこと訊いてくるんだ、と思ったんだが空の表情は至って真面目なものだった。

「関係大あります。もしかすれば、あなたとそう言う行為をした方、もしくはそれに準じた行為をやった方に魔力が発生してるんじゃないですか？」

「……どういう意味だ？」

その後空に説明してもらった。魔法使いには血液、唾液と言ったあらゆる体内にある物質には魔力が存在している。その物質を何かの行為により交換することにより、魔力的なパスが繋がることがあるらしい。

そうなれば元からその人物に存在していた魔力が覚醒し、さらに相手により増幅されることがあるようだ。ただ、それは魔力が溢れる世界では有り得ない現象で、魔力の存在があまり感知されていない

「いこの世界だからこそ発生したことらしい。」

「ともかくにも俺や空と言ったメンバーが無闇にこの世界の人物達と接吻キスなどをして不用意に体液などを交換してしまえば、魔力が発現してしまう……。」

「まったく、たかがキスでなんでこんなコトに……。」

「思ったのですが、張遼殿ともキスをしたのですか？」

「いや、してない。多分前にちよつとあつたんだが、そんなとき偶然に魔力が発現するキツカケになつちまつたんだと思う。」

「多分あの酒を飲みあつたときに一つの盃で酒を飲んだから、おそらく間接的にキスしちまつたんだろうな。それで霞も魔力が発現したんだな……。」

「そんなコトを話している間に籠城戦をしている華琳の城の前にやつてきた。」

「……ん？ 誰かが門の前で戦つてる……。あれは関羽と張飛と……。最初にこの世界に来たときに助けてくれた青髪の子か……。あの三人と戦つてるのは」

「隊長……！」

「そこまで考えて俺の思考は強制的にカットされた。不意に真桜が叫んできたのだ。」

「しかもかなり焦つた様子で、ただ事ではないことは確かだった。」

「隊長！ 門の前で紅葉が関羽と張飛と趙雲の三人を相手に戦つとるんや！！ 早く助太刀に行かんと」

俺は真桜の言葉をそこまで聞いてジャッククから降りて瞬動を使つて、一気に駆けだしていた。やっぱりあそこで戦つてたのは紅葉だったんだ。

クソツ、紅葉があの人を相手に保つかどうかなんて明白だ……。このままじゃ紅葉を失つちまう……。そんなコト、絶対にやらせるわけにはいかねえ……

急げ、風よりも速く……

急げ、音よりも速く……

急げ、光よりも速く……

俺の視線の先にはもはや生きるのを諦めて、趙雲に斬られそうになつている紅葉の姿。三人の合間をかくぐり、俺は趙雲が紅葉に刃を振り下ろす前に紅葉を抱きかかえ城壁の上に飛び上がる。

「勝手に死ぬ覚悟してんじゃねえよ」

そして未だに目をつむっている紅葉に俺はそう言う。すると目を開けた紅葉は驚いたような表情をしていた。まるで幽霊でも見たような眼だった。

そんな紅葉を安心させるように俺は笑みを向けながら言う。

「主人公つてのは遅れて登場するって相場が決まってるだろ？」

俺はそこまで言うとは紅葉を華琳の側に降ろす。華琳の安全を確認した後、華琳に紅葉を任せるように眼で合図する。

そのあとに華琳達に背中を見せながら言う。

「ありがとな。お前達のおかげで華琳は怪我一つしないで生きてる。こっからは俺‘達’の役目だ」

俺はそう言うと城壁から降りて敵に向かっていく。そこには関羽、張飛、趙雲の三人が既に武器を構えていた。

「よお。また会ったな」

「そうだな。だがお主がここまでの武人だとは、あのときは思いもしなかったがな」

趙雲は軽口を叩くように言うが、実際には警戒心バリバリで俺の隙を探るように言葉を発してくる。他の三人も趙雲が俺と話してる間に、俺に隙があれば斬り掛からんとばかりに構えているが、生憎と俺はそんな分かりやすい隙は作ってねえんだよ。

とりあえずそんな三人と話しながら周りを見渡すと、そこには砕けた一般的な剣の山に一对だけ一際変わった砕けた短剣が落ちていた。

どうやら真桜に『白羽黒羽』を預けてて正解みたいだったな。

「さて、無駄話はここまでにしてさっさと始めようぜ」

俺はそう言いながら『白羽黒羽』を作り出して、挑発するように指を動かしながら言う。周りでは他の武将達が戦っている。

だが三人は動こうとはせずに俺の動きを伺っているようだった。

「来ないなら　こっちから行くぞ!!」

「ッ!?」

俺はそう叫んだ後に一瞬で三人の間に入り込む。おそらく三人には、俺がいきなりその場から消えたように見えただろうな。その証拠に俺が間に入っていることに三人は、少しばかり遅れてから気づいたからな。

そして持っていた白羽黒羽を回転しながら一気に三人に向けて斬りつける。ガキイイインッ!!　と言う金属を打ち合わせる独自の音が三つ重なり、戦場に響く。

俺の一撃を受けた三人はまだ体勢を整えきれなかったために、後ろに二歩三歩と後ずさる。そこに俺はすかさず追撃を繰り出す。

白羽黒羽を三対創り出して一人に対して一対ずつ投げ飛ばす。三人はかるうじてそれらを防ぐのだが、そのせいで体勢を整えるのがさらに遅れてしまう。

そこで俺は一番体勢を整え切れていない関羽に向かって瞬動で接近する。

しかしそこでいち早く体勢を整えていた趙雲が、俺に向かって神

速の一撃を突きだしてくる。それを俺は白羽で僅かに軌道をそらすことで直撃を回避した後に、趙雲の槍を掴みそのまま趙雲ごと槍を地面に叩きつける。

「それで終いか？ まだまだそんなもんじゃねえ、だろ！！」

俺がそう言っている間に関羽と張飛が斬り掛かってきたので、関羽の槍を受け流し張飛の槍を鷲掴みにする。そして槍ごと張飛を関羽にぶつける。

「ぐっ！？」

「にやっ！？」

関羽と張飛はお互いに予想外の行動をされたからか、反応できずにモロに正面からぶつかり合い転がる。

それで転んだところに予め創り溜めていた武器の数々を二人が動けないように、『時空の歪み』から取り出して地面ごと突き刺す。

「さて、どうする？ 関羽と張飛は動けない。趙雲も俺の足の下……あれ？ ドコ行った？」

いつの間にか俺の足の所に倒れていたはずの趙雲が居なくなっていた。

あの状態から動ける訳ないし、第一に今の完璧の戦闘状態バトルモードの俺から気配を感じさせないほど動ける奴なんか、そうとうな腕前の奴だけだ。

しかも振り向けば関羽と張飛まで居なくなってるし……。まさかとは思うが、あいつじゃねえだろう……。俺はそんなコトを思いながら周りを見渡すと、少し離れた位置に三人を抱えている（一人は担いでたけど……）空がスマイルをまき散らしていた。

「おい、コラー！ テメエは何してんじゃあああああああ！」  
戦場だったのも忘れていつものほのぼの状態で叫んでしまった。

「何って人助けですが？ あのままで桜牙さんに斬られていましたからね」

「誰が斬るか！ んな気はさらさらねえよ！」

そうだったんですか、と言いながらとりあえず納得してくれたように、三人を降ろす。

「こんのボケエー！っ！！」

そこを見計らって俺はライダーキックを繰り出す。まあ、華麗に避けられてしまったんだがな。

「倒したフリでもしとけば簡単に逃がせたのによおー！！」

「そうだったんですか。すみませんね、邪魔してしまって」

「はあ……。まあ、いいや」

俺は溜め息混じりでそう言つと三人の方に向き直る。するとそこにはやはり武器を構えている三人と、隣では何故か関羽と趙雲を見

つめる空。

よく分からんが、とりあえず言うコトだけはさっさと言うつもりか。

「お前ら、さっさと撤退しな」

「……我々を逃がすと言うのか？」

関羽は信じられないと言った表情をしながらそうやってきた。

「そうとも言えるな。さて、どうする？ このまま戦って主の夢を達成できずに潰えるか、それともここで俺から尻尾を巻いて逃げる代わりに夢を続けるか……」

そんなコトを言っている間に赤髪の奴が三人に駆け寄ってきた。おそらくはもう勝てないと悟った諸葛亮やそこの伝令を伝えに来たんだろつな。

そこで赤髪の奴の言葉を聞いた関羽は悔しそうに俺を睨みつけると、そのまま隊を連れて撤退していった。それを見送っていると空が言ってきた。

「追撃はしなくていいんですか？」

「あんな、逃がしたばかりの奴に追撃するってどんな奴だ……。とりあえず追撃は他の奴に任せとけば良いんだよ」

俺は空にそう言うと踵を翻して城壁に向かっていく。



「おや？ 子義殿にでも会いに行くんですか？」

空は俺の背中に言葉を告げてくる。そんな空に俺は片手を挙げて答えた。

side 紅葉

私はいつもの自分の部屋で体中を包帯だらけにしながら、ぼんやりと天井を眺めていた。体を少しでも動かせば無理に動かしただからスゴく痛いし、さっきまで眠ってたから眠れなくてスゴく暇なのよね……。

話によると私が気絶した後に駆けつけてくれたみんなが劉備の軍を撃退して、撤退していったところを秋蘭を筆頭に春蘭や季衣や流琉、霞と言った武将が劉備の追撃に向かった、って言ってたような言っていないような……。

《人の話はちゃんと聞きな、紅葉。それで合ってるよ》

あんたねえ、勝手に心読まないでくれる？

あの戦い以降に私の中にいる『彼女』と普通に話せるようになってたわ。ただ、意識と記憶は共用だから私が思ったことも『彼女』に分かつちゃうのよね……。

『彼女』の考えてることは分からないけど……。これって不公平じゃないかしら……。

それで、あんたは何者？

《ボクかい？ まだ言えないなあ。あと少し、この外史が進んだら分かるようになるさ》

外史？

『彼女』の口（？）から出てきた外史って何のコトかしら……。もう少しで分かるようになるって、何が分かるの……。

そんなコトより私はいつたい何者なの……。私とは違う独立した『彼女』が私の中に居るってコトは少なくとも私は人間じゃ、ない。

《おっと、今のは忘れてくれ。君にはまだ早いよ。それに気にしなくても君は立派な人間さ》

『彼女』は楽しげに私にそう言うてくる。

……いつかちゃんと教えなさいよ。

《分かってるよ。それより、君にお客さんだよ》

お客さん？

『彼女』の言葉を私が聞き返すと、コンコンと扉をたたく音が聞こえたあとに扉が開き、桜牙が入ってきた。

あの戦いのあと華琳に聞いた話によれば、紅葉は華琳のためになり無理をして戦っていたようだ。確かに紅葉を助けたときのあの異常なまでの体力の消費だったら、そうとしか考えられないからな。

なので俺は紅葉の お見舞いのために紅葉の部屋にやってきていた。扉をコンコン、と二回叩いたあとに俺は紅葉の部屋の中に入る。

するとそこには体中を包帯だらけにして、ベッドに横になってい  
る紅葉の姿があった。

「お、桜牙!? いったいどうし 痛っ!?!」

紅葉は俺が来たからか急いで起きあがろうとしたみたい何だが、あんな傷でいきなり起き上がったら痛いのは当たり前だろ……。

そんなコトを思いながら紅葉がベッドにたたきつけられる前に紅葉に一瞬で近づき、倒れないように体を支えてやる。

「大丈夫か? 怪我人なんだから大人しく寝てなきゃダメだろ」

俺はそう言いながら怪我に障らないように、ゆっくりと紅葉をベッドに寝かせる。

「ありがとう……」

「どういたしまして。それで、なんか飲むか?」

俺は紅葉の部屋にあった椅子に腰掛けながら、紅葉にそう訊ねる。

「えつと、じゃあお茶で……」

「あいよ」

俺はそう一言答えるとお茶を入れ始める。まあ、月よりは上手くできないと思うけど、そこそこいけるだろ。

とりあえずお茶を入れたあとに再び紅葉をゆっくり起こしたあとに、紅葉にお茶を入れた湯呑みを渡す。

「……熱いの飲めないの」

「そうだったのか。じゃあ少し冷ましとくか」

俺はそう言いながらお茶を机に置いて本題に移る。

「紅葉。華琳のこと守ってくれてありがとな」

「えっ?」

「紅葉が居たから華琳は無事で済んだんだ。ホントに感謝してるよ」

俺はそこまで言った後に言葉を一回切る。そして紅葉の目を見たあとに言っ。

「だけどあんま無茶すんなよ?」

「……っん」

紅葉の言葉に俺は満足してうなずいたあとに、部屋の窓から見える空を見る。

今回は紅葉のおかげでホントに助かった。だから今度は、俺が紅葉のために頑張る番だな。

そんなコトを思いながらこのあと紅葉と笑い合った。

こうして曹操と劉備の戦いは幕を閉じ、新たな物語の歯車が回り始めた。

## 第四十六話 『平和な董卓軍』

side 桜牙

「ちよっ！？ 痛たたたたっ！？ もうちよっとなしくしてよ  
！！」

「これでもずいぶん優しくしてるんだけど……」

華琳と劉備の戦いが終わってから早くも数日が過ぎようとしていた。あれから華琳の強さを周りに示したからか、俺たちが出撃する回数が少なくなり平和な時間を過ごすことが出来ていた。

もちろん出撃するコトが無いとは言え、書類仕事などはあるわけで平和な時を過ごしながらも、書類と戦っている。まあ、血が流れないだけ良ししよう。

それで現在、俺は紅葉の部屋にて紅葉の怪我の治療をしている最中だ。あの戦いで紅葉の疲労・怪我は通常の戦いの何倍のものだった。

さらには使い慣れていない武器で、あの三人と戦い抜いたのだからこの程度で済んだのは上々と良いところだ。

「うっ！？ ギャアーーーーッ！！ 痛い！？ 無理無理、もう無理ーーーーっ！！！」

「我慢しろよ……。じゃないといつまで経っても夜に唸りっぱなしだぞ?」

「べ、別に唸ってなんか無いわよ!」

そう言いながら痛みにも暴れ回っている紅葉。そうは言っても、毎夜毎夜唸ってるのが俺の部屋まで届いてきてうるさいんだけどねえ……。多分本人はホントに唸ってることに気づいてないんだろうなあ……。

「つーか暴れてるといつまで経っても治療を終わせないんだけど……。」

「紅葉、動くな」

俺は紅葉の顔をのぞき込むように見ながら、そう言う。すると不意に紅葉が動かなくなった。

とりあえずそれを好奇と見た俺は速攻で紅葉の治療を終わらせていく。さっかまでドツタンバツタン暴れてたつてのに、ずいぶんと大人しくなったもんだな。

「ほら、終わったぞ」

そんなコトを思ってるうちに治療をあっという間に終わらせたあとに、紅葉にそう言う。

「え、あ、うん……。ありがとう……」

「このまま大人しくしてれば、あと数日で治ると思うよ」

「あと数日って、どのくらい?」

紅葉のそんな問いかけに俺は指を二本立てて、ピースの形にする。

「二日?」

「違エよ。二週間だ」

「ええーっ!?!? 二週間!?!」

俺がそう言うと、紅葉の絶叫が城の中に轟いた。その叫びを聞いて、近くにいた兵士が駆けつけてくれたんだが、それを俺は笑って誤魔化して追い返す。

とりあえず紅葉が絶叫した理由は紅葉の机の上にある書類が原因だろう。怪我をして戦えないなら、せめて書類仕事ぐらいやりなさい、との華琳ではなく桂花の指示だった。

華琳は別に休んでも構わないと言っていたらしいが、休まれると大変だからと書類仕事はやれとのことだった。

「二週間も書類仕事なんかやってたら、腐っちゃうわよ!?!」

「何が腐るんだよ……。腕か? 頭か?」

「どつちもよ!! あああ……。助けて……」

とりあえず肉体派の紅葉にとって事務仕事なんてのはさぞや苦しいことだろう。最近では慣れてきた俺でさえやれば疲れるんだから、



あんまりやらない紅葉にしてみれば生き地獄だろうな。

まあ、手伝う気なんか毛頭ないし手伝う余裕なんか今の仕事量からしたら不可能だからな。

「じゃあ、あとは頑張れよ。警備の仕事してから、また来るからな」

俺はそう言いながら紅葉の部屋をあとにした。とりあえず部屋を出た俺は盛大に欠伸をする。

正直言うと、二日前辺りから紅葉の唸りがうるさすぎて、勝手ながら夜に治療させてもらってるんだよな。しかも数時間置きに……。

この時代じゃ長持ちする湿布的なものは無いから、数時間置きに取り替えないと意味がない。効き目がなくなってくると、紅葉がまた唸り出すからそのときにとっかえる。

そのために寝てすぐに起こされるから、眠すぎて眠すぎて……。今にも倒れてしまいそうだ……。

「ふわぁ……。眠……」

俺はそんなコトをつぶやきながら、街に行くための近道を通ろうとする。あの道を通ると結構時間を短縮出来るんだよな。

さつさと警備の仕事して紅葉の治療をして、さつさと寝ちまおう。書類仕事なんか明日の朝にやれば問題ないだろ。提出期限は明後日までだからな。

ワンッ！！

そんなコトを考えていると、ドコからともなくそんな声……と言  
うよりも鳴き声が近くから聞こえてきた。

この声と言ったらあの動物しか居ないよな。そんなコトを考えな  
がら、近くの茂みを探す。

すると少し開けた場所にその動物　　セキト犬がそこに居た。ただ、  
セキトは気持ちよさそうに眠っている恋に抱かれている。

気持ちよさそうに寝ている恋の周りには、どっから来たかは分か  
らないが他の動物が恋にくっついていたり、乗っかかりしてこれまた  
気持ちよさそうに眠っている。

「わうー！」

セキトはまるで俺に撫でると言わんばかりに頭を突きだしている。  
かの名馬の名前を拝しているには、人懐っこすぎるような気がする  
よ君は。

「きゃうううううん」

そんなコトを思いながらも俺はセキトに近寄り首の周りをくしゃ  
くしゃと撫でてやる。するとごらんのの通り至福の声で鳴いてくれた。

すると周りにいた犬やら猫やらがセキトの声につられて起きてし  
まった。つーか来たばかりだったのにメチャクチャ増えてないか？

「……………？」

しかもその中にいたボス（恋）までもが目を覚ましてしまった。重そうな瞼をぱちくりと瞬かせている。つーか寝ぼけてるのかは分からんが、武器を手に握りしめているのは何のためなんだ……？

もしかして寝ぼけて敵と俺の区別が出来てなかったりするのかな？恋が潰しに来たら宥めるのには骨が折れるぞ……。つーかこの疲れてる状態でそんなコトをしたいとも思わないし、思えない。

「……………桜牙」

しかしそれは杞憂に終わったようだ。こちらを見た恋は近くに来たのが敵ではなく、ちゃんと見方であることを理解してくれたようだ。その証拠に手に持っていた武器を無造作に放り捨てている。

ただ放り捨てた武器が俺に突き刺さりそうになったのには、恋は全く気づいてはくれてないんだらうなあ……。そんなコトを思ってるうちに恋は目を擦るとすぐに丸くなってしまふ。

「今日は仕事とかないのか？」

とりあえず警備に向かう前に恋の隣に座り、気になったコトを訊ねる。いくら戦いで本領を発揮する恋とは言え街の警備や、他の仕事が回ってくることはあるはずだ。

ただ今日は恋の警備の仕事は入ってないのを知っているため、あえて仕事とかとアバウトに言う。

「……………忘れた」

まさかの忘れたの一言。俺だったら絶対文句の山を桂花に言われてるところだろうが、恋ならきつと大丈夫だろう。何っーかこのほのぼのオーラで何だかんだなりそうだからな。

そんで最早半分が寝た状態にありながらも、何か言ってるが全然意味が分からん。

「おやすみ」

とりあえず今は寝かせておいてやるとしよう。

眠っててまるで小動物を思わせるような可愛らしい恋を観察ゲブ  
ン、ゲブン……もとい見守ってやりたいところだが、生憎と俺も仕事  
事がまだ残ってる。

もし仕事が終わって帰ってきててもまだ寝てるようだったら、見守  
ってやるとしますか。見てるとすげー癒されるし……と言うかコレ  
が本音だけ。

そんなコトを思いながらも立ち上がるうとするのだが、不意に肩  
と腰にずっしりとした重みを感じた。首だけを動かしてみれば、  
恋が俺の腕にしがみついていた。

「ちょっと落ち着こうぜ？ そのままやったら肩が愉快でステキ  
なコトになっちまうぜ？ いやいや、恋は痛くないかもしれないけ  
ど、俺からしたら強烈に痛ったあー！ー！ーっ！？ ちよっ、ギブ  
ギブ！？」

ってギブギブなんて言ってもこの時代じゃ通用しねえんだっ！？

「……………一緒」

恋はそう呟いたかと思えば俺の掴んでいる手を思いっきり引っ張ってきた。

いつもの俺だったら例え一騎当千、飛將軍の呂布が全力で引っ張ったとしても倒れたりはいないだろう。しかし今は立ち上がるようにして後ろに力が掛かっている状態からの、後ろへの力。

ドスン！！

それを今のほのぼの状態で耐えきれはるはずもなく、そのまま恋が寝ている隣に引きずり倒されてしまった。恋は俺が倒れても何故か手を離してくれる様子はなく、くっついたままで寝ていた。

「……………すぴー、すぴー」

くっついたままで寝ていたつつつか人の腕を枕代わりにして寝ちまったよ…………。おいおい、これから警備の仕事があるつつつのに枕代わりにされたら動きたくても動けないつつつ…………。

「枕が欲しかったのか何なのかは知らんが、人の腕を枕しにないでくれ…………」

俺は動けなくなってしまうたので、仕方なく空を仰ぎながらそう一人呟く。警備の仕事の時間まではおそらくはあと一時間くらいは時間があるだろう。

だからと言って今の状態で寝てしまえば確実に夜を越えて明日の朝になっちまうぞ…………。つまり今のこの状態は当に生き地獄だ。

こうなれば誰かが通り過ぎてくれるか、恋が起きることを祈るしかないな。ただ前者も後者もあんまり期待は持てない……。

「ん……」

「ッ!?!」

そんなコトを考えていると、恋が腕の中で身じろぎ只でさえ近かった俺の体と恋の体との距離がさらに縮まった。

いきなりのことと思わず声を出しそうになってしまったが、気持ちよさそうに寝ている恋を起こすわけにはいかず、声をぐつと堪える。

にしても恋って女の子何だな、と当たり前な感想を思い浮かべてしまう。恋の体は引き締まってこそいるもののひたすらに柔らかく、髪の毛からは日向の良い匂いがする。

よくよく見ると睫毛も長い。こんな姿を見ていると、戦場で鬼神の如く武器を振るっていると言われても嘘だと言いたくなってしまう。

「……………」

「ん~~~~…っ、すっ、すっ」

そんな姿の恋を見た俺は思わず空いている右手で恋の頬をついてしまう。だが恋が起きてしまいそうだったので、ツンツンとする手を引っ込める。

恋が呂布だつて知らない人に『隣に寝てるのは、かの飛將軍の呂布だ』と言つたところで信じる人は誰一人としていないだろう。

軽やかに流れる風の吐息をその身に受けながら、そんなコトを考える。上の瞼がだんだんと下の瞼とバッタリと出会そうとしてやがる……。

やっぱり寝てなかったのがここに来て答えちまつたか……。ダメだ、寝てはダメだ。と思う俺の意志とは裏腹に二つの瞼はくっついてしまった。

もうこうなつてしまつては再び目を開けるのは不可能。俺は意識を睡魔にただ委ねることとした……。

『ちんきゅー……』

誰だ……？ 俺に近くで愉快にステキに騒いでる奴は……。まったく、こんな時くらい静かにしてくれよ……。

「きいいいいいっくー！ー」

「じっふうっ！？」

突然腹に来た大打撃により俺の意識は強制的に現実リアルに引き戻され

た。しかも何の対策もとつてなかった挙げ句に、まさかの不意打ちにより俺が受けたダメージは相当なものだった。

クソツ、誰だ！！ 俺の至福の時間を邪魔しやがる奴は！！ 俺はそんなコトを思いながら起きあがるうとするが、何故か腹の辺りに重みがあつて起き上がれない。

なので腹の方に視線だけを向けるとマウントポジションを確保しているねねが居た。しかも心なしが怒ってるような気がする。

「おまえ！ 恋殿に何をしてるですか！！」

なるほど、俺の至福のひとときを邪魔してくれたのはねねだったのか。全く、助けてやった恩を仇で返すつてのは当にこの事だな。

「お前こそ何やってんだ。人がせつかくスヤスヤ寝てるのに邪魔しやがって」

「邪魔しやがって、ではないのです！ 大方恋殿の寝込みを襲うために寝たふりをしていたに決まっ『シー……………』？」

俺は勝手に決めつけてんじゃねえ、と言っ言葉を飲み込み人差し指だけを立てて、口の前に持って行きそう言う。ねねが叫んだことにより、気持ちよさそうに寝ている恋も起きそうになっていたからだ。

そのことに気づいたねねも慌てて声のトーンを落とす。どうやらギリギリで恋を起こさずに済んだようだ。

(で、何の用だよ)



(別に用などないのです！ 強いて言えば、恋殿を襲おうとするお前を成敗しに来てやったのです！！)

ねねは両手を思いっきり振り上げながら、まるで驚を想像させるようなポーズを取る。たださっきのこともあり、声のトーンはかなり低い。

しかもそんな風に威嚇されても全然怖くないわけで、逆に可愛いとすら思えてくる。

(そうですか。はい、高い高い)

俺はそんなコトを言いながら、腹の上に乗っていたねねを持ち上げて、まるで赤ん坊をあやすかのように『高い高い』をやってやる。

(な、何をやってるですか！？／／／／／ 今すぐ降ろすです！！／／／／／)

声のトーンは先ほどと同じように低いんだが、顔を真っ赤にしながら俺にそう言ってくる。

もちろんそんなねねの姿を見ることが出来るのは余りないので、降ろす気はサラサラない。

(恥ずかしがることないだろ。ハッハッハッ、可愛いぞ)

(良いから早く降ろすです！！／／／／／)

ねねはそう言いながら俺の腕から逃れるためにバタバタと暴れま

わる。

(お、おい!? そんなに暴れたら )

落っこちるぞ、と俺が言い終える前にねねは俺の腕からすり抜け  
て地面に真っ逆さまだ。俺の身長と手を伸ばしてる分を合わせれば、  
軽く二メートルを越えている。

つまりはそんな高さからねねが頭から落ちてしまえば怪我をして  
しまうわけで、俺としたらそれは非常にマズい。なので俺は咄嗟に  
自分をクッション代わりにするようにねねの落下地点に入る。

そして俺は落ちてきたねねをしっかりと受け止める。

(だから言わんこっちゃない……。大丈夫か? 怪我とかしてな  
いか?)

(な、なな、なななな……。///)

(あ?)

なんかねねが顔を真っ赤にして固まってるんだけど、どうしたん  
だろうか?

「ど、ドコを触ってるですかぁー……っ……っ!」

「ぐぼらっ!?!」

ねねはそう叫ぶと俺の顎を思いっきり殴りつけてきた。どうやら  
俺はねねの胸を触ってしまったらしい。

発展途上と言うか何とというか、あんまりにも堅かったからなんだか分からなかったぞ。

「……………うるさい」

「うおっ!?!」

そんなコトを思っている間に、寝てた恋がねねがうるさくしたことでにより加減を悪くしたのか、近くに置いていた武器で俺とねねに攻撃してきた。

しかもこれが寝ぼけてるだけだって言うから質が悪い。とりあえずねねを抱き抱えて、恋の武器の射程範囲から転がって回避する。

「あ、危ねえ……………」

俺はギリギリで回避した恋の武器を見ながらそう言う。

「い、いい加減離れるです!」

「お? 悪いな」

とりあえず俺は抱きしめてしまっていたねねを離れたあとに、体に付いてしまった汚れをパンパンとはたく。

「まったく、ヒドい目に遭ったのです……………」

ねねは疲れた様子でそう言う。こっちとしたらお前が来なかったら恋の甘い匂いを堪能しながら寝てれたってのによ……………。

はあ……。起きたあとにねねからの『ちんきゅーきつく』に恋からの一閃。完璧に眠気が吹っ飛んじまったぞ。

「ヒドい目ってどんな目や？」

そんなコトを思っていると後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。振り向くとそこには霞が立っていた。この時間に武装も何にもしていないところを見ると、どうやら今日の霞は非番らしい。

にしてもよくこんな隠れた場所見つけることが出来たな。

「オッス、霞。実はな……」

とりあえず霞にも分かりやすいようにさっきまでの経緯を説明した。

「はははっ！！、確かにそれは災難やったな。にしても恋の奴、相変わらず気持ちよさそうに寝とるなあ……」

霞はさっきまであれだけ騒がしかったのにも関わらず、ぐっすりスヤスヤと寝ている恋を見ながらそう言う。

しかも俺がやったように頬をツンツンとしている。まあ、恋が起きそうになるとツンツンするのをやめる。昔からの付き合いのようで、そこら辺は心得てるようだ。

「ねねも相変わらずやな。でもあかんよ？ 桜牙は大事な将なんやから、怪我でもされたら華琳さまに大目玉になるわ」

「そ、それは困るのです……」

霞の言葉をねねは想像したのか顔を真っ青にしながら霞にそう言う。

「さて、じゃあ俺は警備の仕事に行くから二人は恋を見ててくれ」

「えー、せつかくお酒持ってきたんやから、一緒に飲まへん？」

そう言いながら霞は、いつぞやの非番のときのようにこっさり拝借してきた酒を俺に見せてくる。

「ねねとでも一緒に飲んでくれ」

「でも料理も持ってきてもらうから、二人やと食べきれへんで？」  
恋を起こせばどうとでもなるだろう、と俺が言う前に後ろから料理を運んできたらしき侍女が現れた。

しかもその中には俺の専属の侍女となつていたはずの月や詠までもが居る。ただ他の侍女と違うのは、料理を運んでいないって所だ。

「それに、みんなで食べた方がきつと楽しいで？」

霞はニヤリとしながら俺にそう言ってきた。どうやら月と詠は霞が誘ったようだ。しかもこうも『董卓軍』が揃ったところを見る限り、霞は偶然ここに立ち寄ったわけではなく、最初から恋がここにいることを知った上で来たみたいだ。

ただ、あとで誘うつもりだったねねがここにいたので嬉しい誤算

だったらしい。

「久しぶりにみんなが揃ったんだから、俺が居ない方が良いんじゃないのか？」

最初は散り散りになると思ってた仲間のほとんどがこうして集まって、離す機会が作れたんだから部外者の俺が居ない方が良いと思う。

「そんなコトないですよ」

すると月がゆっくりとした口調でそう言ってきた。

「月の言つとおりよ。アンタのおかげでボクも月も恋もねねも霞も無事で居られるんだから」

詠も月の言葉に上乘せするようにそう言ってくる。

霞は俺がどうこうしたわけじゃないんだけど……。と言つ言葉は  
この際飲み込む。

「みんなこう言ってるんやし、断るのはどうかと思つて？」 桜牙

「……………分かったよ。みんなが良いって言つなら居させてもら  
うよ」

俺はそう言いながら、話してる間に並べられた料理の周りに座る。  
同じように霞も月も詠も料理の周りに座る。

「……………良い匂い」

すると気持ちよさそうに寝ていた恋が、料理の匂いに釣られてムクリと起き上がり、料理を視界に収めてロックオンしていた。

「恋もこつち来い！ 早くせんとなくなっまってまうで！」

「……………（コクン）」

霞の言葉に恋は無言で頷いて料理の周りにやってくる。ねねもちよこんと恋の隣に座っている。

「それじゃあ……………」

「……………いただきます！！」「……………」

side 紅葉

「桜牙つたら、ドコにいるのよ……………。うう、痛い……………」

私は痛む体を動かして桜牙を探していた。やっぱり自分に与えられた仕事はちゃんとやらないといけない、って思ったから書類を整理してたんだけど分からないところがあったのよね。

だから最初は秋蘭や桂花に訊こうと思ったんだけど、そのどつちも居なかったわ。だからもう桜牙に頼ろうと思って探してたんだけど、桜牙も居ない……………。

そんなコトを考えると侍女達が茂みに行くのを見つけた。何が

あつたんだろ？ と私は思いながら近くにいた侍女に訊ねる。

「ねえ、あつちで何かあるの？」

「あつ、太史慈さま！ 実はですね、あちらでスゴいものが見れるんです！ 太史慈さまも行きましよう！」

「う、うん……」

私は侍女に言われるがままに茂みの中に入っていく。

するとそこには桜牙を中心に、桜牙の広げた両手を腕枕の代わりにして寝てる恋と霞と詠に、桜牙を抱き枕代わりにして寝ている月とねねがそこにいた。

どうやらみんなコレを見に来たみたいね。見てるだけで癒される光景だけど

「はいはい、みんな。桜牙達は疲れてるんだから、見せ物みたいに見ないの。持ち場に戻って」

私は手をパンパンと叩きながらそう言う。すると侍女達はしぶしぶ持ち場に戻っていった。

『君も見れて嬉しいんじゃないか？』

出てきてほしいときに、出てこないのにこいつ言つときばっかり出てこないでよ……。

『そう言わないでくれ。ボクだってああ言った仕事はやりたくない』



いのち』

まあ、あんな仕事は誰でもやりたくないわよね……。

とりあえずあの六人をみた私は一人で頑張ってみようと思った。

## 第四十七話 『甘々な二人と涼州連合』

side 桜牙

「はあああああああつ!!」

俺は創りだした『白羽黒羽』を両手に持ちながら架空の敵に向かって刃を振るう。振り上げては振り下ろし、風払い、突き出し、最終的には『白羽黒羽』を木に向かって投げ飛ばす。

木に当たった『白羽黒羽』は勢いを止めることなく、分厚い木を貫通して数メートルほどしてようやく地面に落ちる。そのあとに再び『白羽黒羽』を創りだし、目を閉じる。

この世界だったら今の武のまま大丈夫だろうけど、なんだか胸騒ぎがする。ここ最近になって良く感じるようになった不思議な感覚……。何か嫌な感じがしてそれと一緒に不思議な声が聞こえるような気がする。

ただ気がするだけで声が届いてるわけじゃないから気味が悪い。いや、そんなコトはどうでも良い。強敵が華琳の前に現れるというならば、俺はそれらを全て叩きのめす。

そのためにイメージするのは常に最強の自分だ……。ただ一つの際もなく、ただ一つの躊躇いもなく、ただ一つの迷いもなく、ただ一つ迷いもなく斬る。

ただ速く、全てを凌駕し、何よりも速く刃を振り抜き……。

ただ鋭く、全てを凌駕し、何よりも鋭く刃を工程し……。

ただ強固に、全てを凌駕し、何よりも固く刃を創造し……。

ただ強く、全てを凌駕し、何よりも強く敵を殲滅する自分をイメージに！！

「はあああああつー！！」

そこまでをイメージして目の前に架空の敵としてイメージしていた幻影を一気に切り裂く。

「……こんなもんか」

そこまでをして俺は白羽黒羽を破棄して一息をつく。改めて俺が鍛錬に費やした時間を太陽の位置を見て確認してみると、どうやらかなりの時間を鍛錬に費やしてしまっていたようだ。

確か、朝のまだそんなに日も高くない時から太陽が真上に来るくらいまで鍛錬やってたから、だいたい4・5時間ぐらいは鍛錬をやっていることになるな。

はあ……。集中してたとは言えまさかこんなに鍛錬をやっているなんて思わなかったな……。

ぐう〜ぎゅるるるる〜……。

どうやら昼も近いつてコトで腹の虫が俺に猛攻義を仕掛けてきたようだ。

「腹減った……。そう言いや朝から何も食ってねえ……」

俺はそんなコトをつぶやきながら、とりあえず飯が食べそうな場所に向かおうとした。すると、どこからともなく良い匂いが漂ってきた。

ん〜？ どうかこの匂いが来てるんだ？ あー、ヤバイ……匂いに釣られてフラフラと足が……。

ドンッー！

「きゃっ！？」

「おっと……」

フラフラとしながら匂いをたどって城の角を曲がると、不意に誰かとぶつかってしまった。ただぶつかった場所がかなり低いところだったから、だいたいは察しが付くな……。

そんなコトを思いながら下を向くと強かに尻を打ってしまったのか、痛たたた……と痛そうな表情わしている流琉が居た。

「大丈夫か？ 流琉。ゴメンな、良い匂いに釣られてぱーっとしてたらぶつかっちゃった」

俺はそう言いながら倒れている流琉に手を差し伸べる。

「だ、大丈夫です、兄様」



つまりは必然的に流琉が上目遣いであんなコトを言ってくるわけだから大変ドギマギしてしまうわけで、簡単に言えば可愛いと思っただけよ。

「どうしたんですか？ 兄様？」

「いや、何でもないよ。それより急いでたみたいなんだが、何かあったのか？」

俺が流琉と視線を合わせるようにしゃがみながらそう言うと、流琉が思い出したかのようにあっ、と呟いたあとに言ってきた。

「お料理を作ったので兄様も食べないかな、と思ったので……」

「なるほど。この良い匂いは流琉の料理の匂いか。さすが流琉だな」

「そ、そんな……大したことないですよ」

流琉は少し照れた様子で、だけど嬉しそうな表情でそう言ってきた。

ただ、流琉の料理で大したことがないって言うなら、並大抵の料理人は見習い以下ってことになるけどな。

「ちょうど腹減ってたんだ。あと、紅葉のところに持って行ってくれないか？」

あれからかなり時間が経つけど、紅葉の怪我はまだ完治していな

い。少し前までは出歩けないほどだったけど、今は松葉杖みたいな支えを使えば出歩けるようになった。

だけど戦いに出るにはまだまだリハビリが必要で、少しでも安静にしてもらうために部屋から出ないようになってしまう。だからおそらくはこの料理のことについては分かってないだろうな。

今頃は書類仕事と戦ってる頃だろう。

side 紅葉

「うがぁーっ！　また間違えたーっ！」

『何回目だい？　こんな仕事何回もやったる？』

う、うるさい！！　必要なときは出てこないのに、要らない時に出てこないでよ、もう！！

私は『彼女』に心の中でそう叫びながら、書類仕事をこなす。

『分かった分かった』

『彼女』の適当臭い返事のため息を思わず漏らしてしまう……。

あう……。誰か、助けて……。

side 桜牙

「ん？」

「どうしたんですか、兄様？」

「いや、何でもない」

なんかドコからか助けに来てくれて言うSOS電波が来たような気がするのだが、気のせいかな？ まあ、電波が来たとしても空腹には勝てない。

よって俺は腹を満たすために流琉の後ろをついて行く。食欲には勝てません。そんなコトを思いながら流琉について行くと、そこにはテーブルがありその上に料理が並べられていた。

その周りには華琳や秋蘭、季衣、恋と言った将が揃い踏みだった。そのことに流琉が驚いてないところを見ると、どうやら俺が来る前から居たようだ。

その中に春蘭が居ないのだが、そのことには誰も驚いたりはない。春蘭は凧と沙和と風を連れて馬騰のところに降伏するように交渉しに向かっている。

ここは秋蘭が行くのではないかと思うが、馬騰と同格の漢の將軍が行くのが礼儀と言うもの。つまりは馬騰と同格の位を持っている華琳が春蘭が行くしかないのだ。まあ、交渉の方は風がやるんだろうな。

秋蘭は華琳の元では高い地位にあるが、外側からしたら秋蘭も季衣も大差ない地位なのだ。

そんなコトはさておき、みんなが俺と流琉が来たことに気づき、こちらに視線を向けてくる。



「兄ちゃん、襲いよ。待ちくたびれちゃった」

俺が席に着いたときの季衣の第一声は、やはりと言うべきか待ちくたびれたと言う言葉。もしかして流琉、俺のこと結構探してくれたのか？

「待ちくたびれたって、兄様を探し始めてからそんなに時間経ってないでしょ？」

「え、そうだったけ？」

「そうだよ！」

前言撤回。どうやら季衣の気が短かっただけで、俺は案外早く見つけたみたいです。

そんなコトを考えていると季衣が俺のところにととととやってきて

「よいしょ、っと」

何故か俺の膝の上に座ってきた。大した重みではないのだが、女の子らしい柔らかい感じが俺に伝わってくる。

重みがどうのこうのの前に前が見えん……。このままでは料理に手をつけることが出来ないんだけど……。

「ちょっと、季衣。行儀悪いよ」

「にゃ？ でも兄ちゃんの膝の上座り心地良いよ？ 流琉も座る？」

座り心地良いよじゃなくて、座られてると前が見えないからね。しかもそれなのに、さらに座られると余計に前が見えなくなるわけよ。

まあ、流琉のコトだ。そんなコトを言われたとしても、そんな誘いに乗るわけがない。

「え？ えつと……じゃあ……」

ポスツ……

前言撤回パート2。どうやら俺の考えは甘かったようです。つか何故に行儀悪いよとか言ってた流琉まで俺の膝の上に座ってんだよ……。季衣同様に重みはないから良いけど、これじゃあ食べるときに前が見えないんだけど……。

しかもよくよく考えてみるとかなりマズい状況だぞ！？ いつもパターンからして秋蘭にやられちまうぞ！？ ってあれ？ いつもなら殺気の一つも感じるような展開なのに、殺気の一つも感じない……。

どういうコトだ、と俺は思いながら秋蘭の方を見るが怒っているような気配は全くない。むしろいつも通りだ。しかも心なしかチャンス、と言わんばかりの表情をしている。

「兄様。重く、ありませんか？」

「ん？ 大丈夫だ。流琉も季衣も軽いから重いとは感じないよ」

「なら、良かったです」

流琉は満面の笑みを向けたあとに料理に手をつけ始めた。

ちよつと待てよ……。そのままだと俺がいつまで経っても食べられねえじゃねえか。そんなコトを思っていると秋蘭が俺に近づいてきた。

「り、龍崎……。そのまま食べれるか……？」

「ご覧の通りさ」

俺は二人にバレないようにしながら秋蘭にそう言う。

「う、うむ。なら、私が食べさせてやるっ……／＼／＼／＼」

秋蘭は顔を赤くしながらそう言うと、料理を摘んで俺に差し出してくる。

「あ、あーん……／＼／＼／＼」

……。え？ 何コレ？ ヤバイよ、コレ……。破壊力抜群ですよ。アナタは俺を殺したいんですか？ キュン死（キュンとして死ぬ）でもプレゼントさせてくれるんですか？

ならそのプレゼント、この龍崎桜牙がしかと受け取るのではないか……！

「あ、あーん……」

俺が口を開けるとその口の中に秋蘭が入れてくれたらしき料理の味が広がる。ただ今のこの状況で味の善し悪しを考えている暇はない。

理由は分かると思うが、今のでだいぶキュン死ポイントが上昇してしまったのだ。

「うまいか……／＼／＼／＼」

「うまいッス……」

本来は流琉が作った料理なんだけど、そこは空気を読んで流琉は何も言っていない。それどころかこの甘々な雰囲気顔に顔を赤くして、居づらそうにしてるよ。

季衣は未だに飯食べ続けてるけど、とりあえず気づいてないみたいです……。

そんな雰囲気のまま、食事は続いていくのであった。

「あ、華琳さまなのー!!」

「あら、沙和、凧。遠征ご苦労さま……」

「ただいま戻りました。隊長は……」

風はそこまでを言うところらを見て固まっている。

何故かって？ 甘々な雰囲気すぎて直視できないからだろうよ。いや、具体的には秋蘭だけが甘えてるだけ何ですけどね？

「華琳さま、ただいま戻りました。つて龍崎！ 秋蘭に何をやってるのだ！！」

「いや、何やってるも何も秋蘭とイチヤイチャしてるだけです。何か？」

「何か？ ではない！！ うらやま……ではなく、秋蘭にそのようなコトをしてるではない！！」

今、羨ましいって明らかに言おうとしたような気がするが、ここはあえてスルーさせてもらおうか。

「んんっ、それで春蘭。結果は……芳しくなかったようね」

咳払いを一つ入れた華琳の言葉に春蘭は慌ててさっきまでの話を  
する。

とりあえずこのあと甘々な雰囲気を発してました（主に秋蘭が）  
……。

あれから時間がいくらか過ぎ次の日になった。さすがに一日が過ぎれば、甘々雰囲気から脱出しているわけで現在俺たちは玉座の間に集まっている。

もちろん昨日に馬騰のところに交渉しに行った結果を軍義で詳しく報告するためだ。

「己は最後まで漢の臣である。……それが馬騰のこちらに対する回答でした」

「そう。予想できてはいたけれど、残念ね。……で、馬騰はどういう人物だった？」

風の言葉に華琳は本当に残念そうにしながら、風に馬騰の人と成りについて訊ねていた。

馬騰は公平にして勇敢、五胡の間にも有名を轟かす豪傑。風達も旅の間に聞いていたらしいが、実際に見て噂に違わない高潔な人物だと印象を受けた、と言った。

さらには西方の民を相手にしているだけあり、戦慣れした騎兵が主体だ。機動力に関して言うならば、俺たちの軍よりも上らしい。

「しかし華琳さま」

そこまで話していると凜が割って入ってきた。

「どうして今のこの時期に涼州なのですか？」

凜がそう言うのも無理はない。南方の孫策や益州の劉備も力を蓄えている。もしもその二勢力が共闘してきた場合負けはしないもの、官渡以上の苦戦を強いられることになるのは、間違いはないだろう。

「もしも二勢力が共闘したとしても、西方から奇襲を仕掛けられたらどうなるかしら？ 彼らの機動力なら、数日もあればここまでたどり着くでしょうよ」

つまりは最後の相手になるのは劉備か孫策のどちらかになるはず。ならばその妨げになる戦力は、今のうちに退場してもらった方が必要があるとのことだ。

それを華琳が説明すると桂花を筆頭に皆が了承する。

「皆も良いわね。桂花たちは騎馬に有効な戦術を準備しておきなさい。霞の戦い方が参考になるでしょうから、霞もそれに加わって」

「おう。任しとき！」

あの軍義から数日が経過した。慌ただしい準備の後、俺たちは大陸の西の果て、涼州への街道を進んでいた。とりあえず涼州って言ったら実力のある多くの諸侯が緩やかな共闘態勢をとってるとか何とか、凜が言ってたような気がする。

そんなコトはさておき、俺の隣では無駄にウサウサしている赤髪サイドテール二刀流少女 紅葉がいた。軍義の日から出撃する間に紅葉の怪我が完治したらしく、戦に出ることになったのだ。

俺的にはもう少し経ってから出撃してもらいたかったんだが、鍛錬で動きを確かめたところ以前と同じくらい、もしくはそれ以上の動きを出来るようになっていたので、仕方なく出撃を許可したのだ。

「紅葉。あんまウサウサしてると落ちるぞ?」

「大丈夫よ。いくら動いてなかったからって馬から落ちるわけ  
」

そんなコト言ってる間に紅葉は頭から落ちそうになってやがる。  
だが、それを近くにいた恋が助けてくれた。

「あ、ありがと……助かったわ……」

「……………(コクン)」

紅葉の言葉に無言でうなづく恋。照れているのか若干頬が赤くな  
っている。

そんなコトを思っていると前方の方が何やら騒がしいのに気づい  
た。しかも何やら焦ってるような表情をしている真桜がこっちにや  
ってきた。

「隊長、やっと見つけたで!!」

「どうした、何かあったのか?」

「奇襲や、奇襲! 涼州連合の連中、いきなり攻撃仕掛けて来て  
ん! ホンマに馬ばっかりやで!」

「そうか。他の二人はもう準備を始めてるのか?」

俺の言葉に真桜は無言でコクン、と一回だけうなづく。敵の旗を



聞いたところ、どうやら旗がないらしい。ったく、とりあえず急いだ方が良くもしいないな。

そんなコトを思いながら俺は紅葉と恋と真桜を連れて、前線に向かった。

俺たちが真桜の指示で敵部隊が現れたと言うところに向かうと、そこは両側が崖に挟まれた場所だった。駆けつけると奇襲を受けたにも関わらず、部隊は陣形を保ったままだ。おそらく霞が先頭じゃなかったら、部隊が切り崩されてたところだ。

上の動きはともかく馬の動きを何とかしないコトには、何ともならないな。

「よし、上の動きはある程度は無視して構わない！ 騎馬の動きに注意しつつ敵を刈り取れ！！」

「……オオオオオオツ！！！！！！」

俺がそう叫ぶと周りにいた兵士がそれに答えるように叫んでくる。

「恋！！ 飛將軍の実力、敵に見せつけてやれ！！」

「……（コクン）」

恋は俺の言葉に無言でうなずき、自らの武器を構えて前を見据える。

「紅葉！！ こいつはお前の復帰戦だ！！ 無茶はするなよ！！」

「分かってるわ！！」

紅葉は二刀棍棒を構えながら、好戦的な笑みを浮かべながら言う。

「さあて、それじゃあ……行くぞ！！」

第四十八話 『曹操VS涼州連合』前編』 (前書き)

誤字訂正しました

ではございませー！

第四十八話 『曹操VS涼州連合』前編』

side 桜牙

二つの崖に挟まれた場所で、俺たちは涼州連合と戦っていたのだが、思いのほかあっさりとは撃退できてしまった。理由を言えば飛將軍の恋と復讐戦として戦ってた紅葉がボッコボコにしまくったおかげで、俺が動く必要がなかった。

良かったと言っべきか良くなかったと言っべきか悩むところなんだが、被害が少なかったつつうコトを考えれば良かったと言っべき何だろうな。

そんなコトはさておき今は夜。実のところあの戦いがあっさりとは終わりすぎて、なんか語るのも面倒だったんだよな。まあ、それはいいんだがあれから数日が経った今、俺は絶賛寝不足中である。

何故かと言えば、あの日から涼州連合がドコからともなく夜な夜な奇襲を仕掛けてくるため、快適な安眠を取れるかと訊かれたら『ノー』と即答してやりたいくらいだ。

「……………おはよ」

「ああ、おはよう」

やはりと言っべきかたっただ今起きてきた恋も髪は乱れてるし、いつにも増して気怠そうに見える。

昨日は珍しく奇襲が来なかったが、奇襲が来るのはほぼ毎日だ。さつきも言ったように昨日は来なかったんだが、奇襲が来るんじゃないかと警戒してるために寝れるはずもなく、結局奇襲が来ても来なくても眠れる時間は夜明け前の数時間くらいしかないのだ。

「……桜牙、元気そう」

「残念ながら寝不足だ。夜明け前から起きてたから、眠そうに見えるだけさ」

俺は自嘲気味に笑いながら恋に向かって言う。ちなみに何故起きてたかと言えば夜の見張り番だったからだったりする。

「隊長ー、眠たいのー」

そんなコトを思っていると、一緒に見張り番をしていた沙和と真桜が帰ってきた。あの二人は眠すぎて足取りが遅かったから置いてきたんだっとな。

「ご苦労さん。少しだけ時間があるから寝てきな。残りは何とか回しておくからさ」

「隊長……。でもええんか？ 隊長やて眠いんとちゃうんか……？」

俺がそう言うのと真桜は眠たそうな目を俺に向けながらそう言うてくる。確かに眠いと言えば眠いんだが、この二人が寝不足で戦いの中でへマした、なんてコトになったら取り返しがつかないからな。

「気にするな。今はお前らの『体調』の方が心配だ。お前らの『

隊長』なだけにな」

「「「「」」」」」

……ちょっとしたギャグのつもりだったんだが、そんな哀れみた目で俺を見ないでくれ……。

何っーか見られてるだけで、ガラスのハートがガリガリ削られていくんだけど……。

「そ、そんなコトより隊長ー。沙和のそばかす、ヒドくなってないー？」

ありがとう沙和よ……。この空気の流れを良く変えてくれた……。ワタクシはあなた様に心より感謝いたします。

「って、近いぞ。そんなに近づけないでくれ……」

「近寄らないとちゃんと見えないの。どうなのー？」

そんなコトを言いながら真桜はグイグイと顔を近づけてくる。端から見ればキスをする直前にも見えなくないわけで、こんなところを秋蘭に見られたら確実に矢が飛んでくるぞ……。

「大丈夫、大丈夫だ。だから離れてくれ」

「んもう！ 隊長、適当に言わないでほしいのー！」

沙和はさっきまでの眠気をもものもしないように、頬を膨らませながらそう言ってきた。

んなこと言われても俺はそばかすなんか、どんな感じだったらヒドい状態なのか分かんないんだよ。

「おはようございます」

そんなやりとりをしていると、相変わらずいつも通りの凧が俺たちのところにやってきた。

「おはよ、凧」

「……………おはよ」

「おはよう、凧。凧はどうしたんだ？ 見張り番か？」

俺は挨拶をしながら凧にこんな朝早く起きているかを訊ねる。すると凧は少しばかり不思議そうな表情をしながら言ってきた。

「見張り番と言っわけではありませんが、この時間はふつつ皆起きていますのでは？」

「…………いや、それはない」

まだ夜明けギリギリってくらいだし、俺が鍛錬を始める時間もう少し遅めの時間帯だ。それをふつつと言いつつ切り切るくらいだから、いつも凧はこの時間帯に起床してるんだらうなあ…………。

「凧ちゃん。わたしのそばかす、ヒドくなってない？ 見てみてー」

沙和はそう言つと風をグツと近づける。対して風も顔を近づけて、沙和のそばかすの状態をジックリ見ている。

「つか近づきすぎる。見てるこっちの方が恥ずかしくなってくるんですけど……。」

「……すまん、沙和。自分はこう言うのは良く分からないから、隊長か真桜か恋さまに訊いてくれ」

「どうやらアレだけガン見してたのにも関わらず、風は分からなかったらしい。」

「もう、みんな知らないの……っ！……っ！」

沙和はそう叫ぶと、まるで好きな人に振られたモブキャラの如く駆けだしていた。つか沙和の奴、メチャクチャ足速いな……と場違いなことを考える俺。

「ああ、行つてもうた。隊長のせいやで？」

「……………？」

真桜の言葉に首を傾げる恋。とりあえず俺も同じように首を傾げてみる。

「恋さまの真似せえへんでも……。隊長。隊長も男やつたらあそこで沙和の腰くらいこう、グツと抱いてみてやな！」

「お、おい、真桜！？」



真桜はそついい放つやいなや、凧の腰をグイッと抱き寄せる。まるで恋人同士がキスをやるかのような格好になった。

「沙和、お前の美しさは、そばかすくらいで損なわれるものじゃないよ。んちゅー」

「こら、真桜、ちょっと、やめ……っ！」

……それはまさかとは思うのだが俺の真似なのか真桜よ。お前の目からは俺はそのようにキザったらしい感じな人に見えてるのか、おい。

俺はいきなりそんなコトをやるような奴じゃねえっつうの。

とりあえず真桜に抱き寄せられた凧はうまく体勢を整えられてないようで、真桜の言いようにやられている。

「んー」

「ひゃ……やだ……っ！」

そんで真桜は凧にキスするフリをしている。それを嫌がる凧なんだが、なんて可愛らしいんだ……挿んでおかなければ……。

「……とまあ、このくらいしてもバチは当たらんところやで」

とりあえず本気でキスするつもりはなかったらしく、直前で凧を解放して俺に言ってくる。

「このくらいしても、ねえ……。んじゃ」



きれるわけないやんか!？」

「え!？ なに!？ やっぱり嫌だったのか!？」

さすがに嫌なことをされたら嫌がるかもしれないが、まさか気絶するほどだったとは……。

そんなコトを俺が思っていると、真桜に凄まじいため息をつかれってしまった。……なんでため息をつかれなれないといけないんだよ……。

俺は心の中でそう思いながら、凧を救護室に運ぶのであった。

アレからまた時間が経過したのだが、相変わらず涼州連合からの散発的な襲撃は続行されつつあった。一番面倒なのは、涼州兵がまとまった一軍と言うわけではなく、小集団の同盟ってコトだった。

追い払えたとしても、それはその小集団にだけ損害が出るだけで他の小集団にとっては何の損害にもなっていない。つまりは追い返したとしても、またすぐに別の集団が攻めてくると言うことだ。

そこで今からは俺が見張り番をするから、後退するために今見張り番をやっている凧と霞のところに向かっている。

「おっ、居た居た。おーい、凧」

「……」

返事がない。まるで屍のようだ。

とか微塵も思っていないから気をつけるように。そ、そそ、そんなこんな場合なら、誰でも言いそうなことと思う訳ないだろ？

とは言ったものの、対して距離の離れてないところから風を呼んだのに返事がないってのはおかしいな。そんなコトを思いながら風の前に回ってみると、後ろの壁にもたれ掛かるように風は眠っていた。

規則正しい肺の動きに何よりも目をつむっているからな。

「風なら見てのとおりよう寝取るで。声掛けんというて」

「ああ、そうみたいだな。にしても悪いな。霞一人にやらせるみたいになっちまって」

今の風はいても居なくても同じ扱いだ。つまりは事実上、霞が風の分も見張り番をしていることになるからな。

「かまへんて。遠征始まってからずーっとこんなやしな。特に風は気を張っとつたみたいやし、疲れが出たんやろ」

霞の言うとおり、風はこの遠征中ずっと、‘いつも通り’だった。それが意味するのは風が無理をしてるってコトだ。

その疲労が今になって出てきたんだろう。それに風だけじゃなくて全兵の全体的にこんな感じを受ける。それだけ奇襲が多いってコトだ。

「ま、ウチらの流儀だけじゃ世の中は成り立たんっちゅうことや」

「そうだな。俺もこっちに来たときは肝を冷やしたな」

特に真名のコトを知らないでうっかり真名を呼んじまって、殺されそうになったコトがな。

「何にしてもこの戦も慣れが大事ってコトだな」

「せやな。それにここしばらくは夜襲の数が明らかに減ってる。今日もないんじゃないかな？」

霞が言ったとおり涼州連合からの夜襲の数は明らかに減ってきている。今日もないんじゃないかと思わせるほど当初からしたら減ってきている。だからと言って見張りを怠ることが出来ないから、結果的には疲労度は変わらないというコトだ。

霞の言うとおり俺もないとは思うが、見張り番は欠かせない。欠かしたときに夜襲が来たらたまったもんじゃねえからな。

「すいませんっ！ 寝坊しましたーっ！」

そんなコトを思っていると不意に後ろから季衣の声が聞こえてきた。

「　　っ！？ 夜襲か！！ はあああああっ！！」

しかもその季衣の声を夜襲と勘違いした風が寝ぼけたまま氣弾をぶっ放そうとしてやがる。

やれやれ、こんな場所でそんなもん使われたらこっちの損害しか

でねえぞ。そんなコトを思った俺は凧には悪かったが、首筋に手刀を喰らわせて気絶させる。

「はあ……。じゃあ今からは俺と季衣で見張り番やるから、霞は休んでてくれ」

「分かったわ。んで、凧はどうするんや？」

「起きたら寝直すように言っせ」

俺がそう言うと言は分かったと言告げて戻っていった。

「今日は季衣と一緒にだな。頑張るか」

「そうだね。頑張ろ、兄ちゃん！」

「おう」

こうして俺たちは見張りをやったのだが、やはりその日の夜も夜襲が来ることはなかった。

それから数日が経過し、俺と霞と凧、季衣に流琉に紅葉と言った面々で涼州のとある街にやってきていた。なんか俺の涼州のイメージだと、遊牧民みたいな天幕ばかりだと思ってたんだが、ちゃんとした街みたいだった。

やっぱり見てみないと分からないコトってたくさんあるんだな。

「涼州に来るのも久しぶりねえ」

紅葉は伸びをしながらまるで懐かしむように周りを見渡しなが  
らそう言う。

「なんや、紅葉も来たことあるんか？」

「ええ。旅してたときに立ちよったことがあるわ。ここで泊ま  
った宿の人が優しくして……。思い出したら泣けてきたわ……」

霞の言葉にそう言った紅葉だったんだが、なにを思い出したのか  
は知らないが、目を潤ませていた。

……なにがあつたかはとりあえずは訊かないようにしておこう。  
なんか地雷を踏んじまいそんな気がする……。

「霞はここに来てなんかやったのか？　もしかして霞も旅して  
たときがあつたとか？」

「ちやうちやう。ちよつと通りかかっただけやねん。あんたらは  
……来たことなさそうやな」

霞は珍しそうに涼州の街を見渡している流琉と季衣の方を見なが  
らそう言う。

「はい、馬がたくさん居ますねえ……」

流琉の言ったとおり周りを見渡せば、必ずと言って良いほど馬の  
姿が見え、馬と共に生活していると言っても違和感がなさそうだ。

「何かおいしいものあるかなあ……?」

「二人ともあんまりキョロキョロするな。恥ずかしいだろ」

「つか季衣はドコに言っても頭の中には食べ物のことしかないんだな……。」

「この二人を連れてきたの、失敗だったのでは?」

「そう言っな。良いじゃないか、あんな姿を見れるのも平和なときだけだ」

それにあの二人にも良い息抜きにもなるだろうから、連れていけっというのが華琳の考えなんだからな。

「んで補給物資を渡す相手ってのは誰なんだ?」

俺たちがこの街に来た目的は息抜きが本来の目的ではない。本来の目的は、この街に潜んでいる作業員と接触して情報と物資のやりとりをすることだ。

凜とかは作業員が誰かを教えられてるみたいだが、俺はまだ教えてもらってなかったりする。だから凜に訊ねて確認するしかないのだ。

「ああ、あそこに」

凜はそう言いながら少し前にいる人物を指差した。

「……」  
「ちらへ」



「お前は……」

その工作人員は俺もよく知っている人物だった……。

『ほあああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああつ……!』

「……」

俺たちが案内されたのはむさ苦しい男共が野太い声を発しながら、  
舞台上上がっている女の子を眺めているという舞台だった。そこに  
集められた人たちは、数えるのがバカらしく思えてくるほどの数で  
あった。

そして舞台上上がっている女の子にも俺は見覚えがあった。その  
舞台上上がっている女の子達と言うのは……張三姉妹だった。

「みんな……!」 元気……!」

『元氣いいいいいいいいいつ……!』

天和の相変わらずの天然そんな言葉に、男共がむさ苦しい声を上  
げる。

「ちーほー達の歌、聞きたい……!」

『聞きたあああああああああああああああ……!』





て張三姉妹の歌が始まると、会場のテンションは最高潮までに高まった。

しかも俺の目がおかしくなかったら、流琉や季衣と同じくらいの子の女の子もこの会場に居たような気がするんだが……。

「ほあー！」

「ほああー！！！」

「つてあんた達まで……！」

会場に集まった奴らと同じような反応を季衣と流琉がすると、紅葉が呆れたようなうんざりしたような何とも言えない表情をしながら、二人にそう言った。

とりあえずコレが華琳の策とやらなんだろう。この年頃の男に対しての張三姉妹の歌は効果絶大はだろう。おそらくはこの張三姉妹の活動により、夜襲の数が少なくなってきたんだろうな。

「これを決戦前に俺たちの陣でもやってもらえれば、確実に士気があがるだろうな」

「そうですね。それは妙案かもしれません」

とりあえずこの策が通用すると分かった俺たちは、娯楽を楽しんだ後に華琳達のところに戻った。

アレから時間が経過して出現前になったんだが、マジで張三姉妹の歌を聴かせて士気の上昇を謀っていた。

もちろんその効果はすでに立証済みであるため、言わずとも効果のほどは分かるだろう。そんなコトを思っていると、華琳が俺のところによってきた。

「桜牙。あなたの案の結果はどうかしら？」

「ご覧の通り効果覲面さ。自分で言っただが、ここまで上手く行くとは思わなかったよ」

ある程度はいけると思ったが、まさかここまでとは思わなかったんだよねえ……。

「ふふっ、あなたの策で効果が出なかったコトはないでしょう？」

「その言葉は信頼されている証ととっても構わないのか？」

「さあ、どうかしらね？」

華琳は意地の悪い笑みを浮かべながら俺にそう言ってくる。

「それでわざわざ華琳が来るなんてどうしたんだ？」

「あなたに頼みたいことがあるのよ」

華琳の頼みたいことは戦が始まってから華琳のところに張三姉妹を連れてこいと言うコトだ。

戦が始まってしまえば安全な場所と言えば華琳のところだけ、街に戻せば良いと言うコトもあるが、この陣に入ったところを誰かに見られてしまえば、張三姉妹が華琳と関係していることがバレてしまう。

そうなれば討たれてしまう可能性もある。なんとしてもそれを避けたい俺たちからしたら戦いの間は、一番安全な華琳のところにて、戦が終わってから護衛をつけて城に返すのがベストだろう。

「分かった。始まったらすぐに連れて行くよ」

華琳は俺の言葉に満足げにうなずくと、戦が始まるまで張三姉妹の講演を見続けた。

「おい。天和、地和、人和」

戦がようやく始まり、各隊が配置を行っているときに俺は張三姉妹のところに行ってきていた。目的はさっき華琳に言われたことを果たすためだ。

「あつ、桜牙！　ちい達の歌聴いてくれた？」

俺の存在にいち早く気づいた地和が、俺に駆け寄りながらそう言うてきた。

「ああ、相変わらずスゴかったよ」

俺が誉めると地和はえっへん、と胸を張って威張っていた。俺と

しては胸を張るのは胸が大きい人にしてもらいたい……じゃなくて！！今は三人を安全な場所に連れて行くのが先決だろうが！！

「三人とも、俺についてきてくれないか？」

「それは構わないけど、どうして？」

人和がメガネを上げながら俺にそう言ってきた。

「その説明はあっちに行けばしてくれるはずだ」

「……分かったわ」

人和は納得してなさそうだったが、とりあえず三人を華琳のところに連れて行った。

「華琳、連れてきたぞ」

俺は戦の最後列に居る華琳のところに張三姉妹を連れてきた。その場には桂花や凜、雪と言った軍師勢が勢揃いしていた。

「待っていたわ。では桜牙は自分の部署に戻って構わないわ」

「了解」

俺は華琳の言葉にそう言つと、踵を翻し自分の持ち場に戻るために歩き始める。俺の隊には紅葉とか凧が居るから、俺が直接指示しなくても大丈夫だとは思うが、確認だけはしないとな。

「え、あ、ちょっとアンタドコ行くのよ!」

「ん? 俺は自分の持ち場に戻るだけさ。心配しなさんな、そこにいれば少なくとも危険になる心配はねえからよ」

「そうじゃなくて……アンタも戦うの……?」

そう言った地和の瞳には心配の色を見て取ることが出来た。

俺を心配してくれるのは嬉しいが、心配するだけ無駄だって言うもんだ。

「心配すんな。俺は負けないからよ」

「べ、別に心配なんかしてないわよ」

地和のその言葉に俺はそうか、と一言答えると自分の隊のところに戻っていくのだった。

「……心配するに、決まってるじゃない……」

などと地和が言っていたことを、その場から去っていた俺には知る由もなかった。

「隊長、準備整いました」

俺が自分の持ち場に戻ってくると真っ先に尻が俺のところをやっ





第四十八話 『曹操VS涼州連合前編』 (後書き)

最近モンハンの擬人化小説(?)が活動報告で流行ってますね…  
…。

(私の方では)

私も短編でそのうち出してみようかな……? ?

感想待ってます!

第四十九話 『曹操VS涼州連合』後編』

side 桜牙

「はああああああああつ!!」

現在、俺と恋と紅葉の三人は自分の隊から少し離れた場所にて交戦していた。本来であれば単騎ではなく、隊で動くのが普通だが俺たちの場合、隊で動くよりも単騎で動いた方が都合がいいのだ。

誤って味方を斬ってしまうとか言うコトはないが、それでもいくら動きが制限されてしまう。だからあえての単騎での行動をしている。

それにそろそろ相手の流儀にあわせて戦ってるのも、疲れてきたからな。ここら辺から一気に攻めさせてもらおうとするか。

「真桜!! 工作部隊の指揮を任せる!!」

「合点や!!」

俺は後ろで隊を率いている真桜にそう叫ぶと、真桜はいつも使っている武器と工作部隊を連れて策を実行し始めた。

真桜に頼んだのは、真桜の持っているドリルと工作部隊による地面の溝やぬかるみの作成だ。騎馬による攻撃は幾つかの条件が整って、改めてそれが成功するものだ。

幾つかの条件があるが、とりあえず一番重要になってくるのが、地面の動きやすさの確保だ。コレがあつてこそ初めて騎馬の本領を發揮する。ならば逆に騎馬の動きを鈍らせるには、地面に溝やぬかるみを作り馬の足を鈍らせることで成立する。

「恋、紅葉。作戦を成功させるために真桜と工作部隊を援護してくれ」

「……（こくん）」

「分かつたわ!!」

二人は各自で俺の言葉に答えると、そのまま二方向に分かれて半分ずつ真桜や工作部隊に迫ってきている部隊に反撃を繰り出していく。

紅葉の一撃は近づく者をことごとく打ちのめし、相手に恐怖を与えていく。近づいてしまえば自分もあの棍棒にぶっ飛ばされてしまふ。そして飛將軍である恋の動きはまさに鬼神。相手のわずかな隙をも見逃さず斬り掛かり、相手に武器を振るわせるどころか、握らせることすらさせない動き。

まさに一騎当千とはこのことだろう。俺が動かなくてもこれだけの動きが出来るとなると、かなり頼もしい。だからって動くのと動かないのでは話が違ってくるけどな。

「さあ、死にたい奴は迷わずこちらに来るが良い。痛みもなく、地獄へと導いてやろう!!」

俺はそう叫ぶと神速の如く敵兵の合間をはいくぐり、進んでいく。

もちろん俺が通り過ぎた場所にいた敵兵は一人残らず地に伏せて居るがな。

俺は神速で動きながらも敵兵の急所を斬りつけ、絶命させながら進んでるんだからな。真桜と工作部隊による策の準備はまだ完了してはいない。

馬超や騎馬と戦うための策なんだろうが、もう視界の先には馬超の隊が見えてきてる。……馬超の隊、だけだと!? おかしい、馬岱の隊がドコにも見あたらないだ!??

まさか馬岱の隊は伏兵として潜んでいるのか……。だったら馬岱の隊が行く先と言ったら俺たちの総大将である華琳が居る本陣への進行のはず……。

そんなコトを思っていると、俺のところにも一人の兵士が駆け寄ってきた。その表情からは、ただならざるものを感じる。

「伝令!! 本陣付近より馬岱の隊が出現!! 本陣よりすぐに援軍に来てくれとのこと!!」

ちっ、やっぱり馬岱の隊は本陣を狙うために伏兵として潜んでやがったか……。

「分かった。恋! 俺は一旦本陣を援護してくる! 俺が帰るまでこの隊の全権は恋に預ける!!」

「……分かった」

俺が近くで戦っていた恋にそう叫ぶと恋が頷きながら了承してく

れた。なので俺は急いで本陣に向かった。

side 華琳

桜牙や皆の働きにより我が軍がかなり優勢になっている。桜牙が率いている風や沙和、恋もスゴく言い動きをしてくれているわ。

これって桜牙が率いているからってわけではないわよね？ でも桜牙の周りにいる子達は、桜牙に良いところを見せようとして、頑張っているようにも見えるのだけれど、気のせいかしら？

よく考えてみればあの秋蘭でさえも桜牙に夢中だし、周りでも桜牙に気を持っている子はたくさん居るわ。ただ、桜牙が鈍感すぎて気づいていないようだけれど。

……戦いの最中に私は何を考えているのかしら？ ふふっ、これも桜牙が居ると言う安心から出たことと言うなら、問題はないでしょう。

私がそんなコトを考えていると、桂花が私に言ってきた。

「ヘンです、華琳さま。先ほどから馬岱の軍が見えません……」

「馬岱が？ 大方劣性を悟って逃げ出したのでしょ」

そう。我が軍による猛攻は圧倒的。いかに馬岱が居たとしても我が軍の勝利は揺るがない。だからこそ、私は油断していた。

本隊の一番守りの薄いところから馬岱の隊が突撃してきた。くっ、馬岱は逃げ出したのではなく伏兵として潜んでいたというわけね……。私としたことが見誤ったわ……。

「ふ、伏兵です！ 危険です、華琳さまっ！」

「慌てるな、桂花。桜牙の隊に至急本隊に戻るように伝えなさい！……」

「御意！……」

私が桂花にそう言うと、桂花は急いで桜牙に伝令を出しに向かった。

「皆の者は龍崎隊が駆けつけるまで本陣を守れ！！ 馬岱を近づけるな！！」

とは言ったはいいのだけれど、兵士たちに動揺が走ってて予想以上の速さで進行されてしまっている……。

このままでは本陣を落とされるのも時間の問題かもしれないわね……。

そんなコトを私が思っていると馬岱の隊に向かって行く一騎が私の目に入った。

本陣からの伝令を受けた俺は急いで本陣に向かっていった。伝令の時点で分かっていたが、やはり馬岱の隊が本陣へと猛攻を仕掛けていた。

しかもこちらの隊はいきなりの騎馬による奇襲だったため、かなりの速さで撃退されてしまっていている。ただ、本陣を守るために残っていた秋蘭や流琉や季衣達の隊のおかげで、それもある程度は抑えられている。

そんなコトを思いながら俺は馬岱の隊に突っ込んでいく。そして事前に創りだしていた『白羽黒羽』で敵を切り倒していく。奇襲したのにさらに奇襲されたためか、馬岱の隊の動きが一瞬だけ止まる。だが俺を相手にして一瞬だけでも隙を見せてしまったのが間違いだ。俺はその隙を見逃すはずもなく、さらに敵を切り捨てていく。そして俺は三人に近づき、馬岱の隊の対峙するように立ちながら言う。

「秋蘭、季衣、流琉。大丈夫だったか？」

「うむ、大丈夫だ」

「全然へっちゃらだよ!!」

「大丈夫です、兄様」

三者三様の答えだったが、それだけでも三人が無事だったというコトと本陣がまだ無事だったというコトの二つが分かる。その二つ



さえ分かれば、何の心配もねえ。

「馬岱の隊は俺と季衣に任せて、秋蘭と流琉は華琳のところについててくれ」

「にや？ ボク？」

「ああ。今は季衣が近くにいる方が効率がいい」

秋蘭は攻撃型と援護型で言えば援護射撃による援護の方が向いている。それにいつも季衣の援護をしている流琉にも言えることだ。だが今この場に俺が居ることにより、その援護は必要なくなる。

だからこそ二人には華琳を守るために華琳の側についていてもらいたいのだ。

「うむ、分かった。無茶だけはするな」

「季衣も兄様に迷惑かけないようにね」

二人のまるで母親のような言葉に俺と季衣は苦笑しながら、二人の後ろ姿を見送った後に、馬岱の隊に向き直る。今の会話をする間に馬岱の隊は幾らか体制を整え直したようだった。

「さあて。行ukse、季衣」

「うん！ 頑張ろつね、兄ちゃん！」

「ああ！...！」

俺と季衣はそう言いあうと一気に駆け出して、馬岱の隊に突っ込んでいく。季衣の鉄球による重たい一撃が人を打ち上げ、大地を抉り、周りにいる者達を全て蹴散らしていく。

俺は季衣の動きで倒しきれなかった奴らを白羽黒羽で切りつけていき、初めて同じもち場で戦ったつてのに、やりにくさは感じなくむしろ動きやすいように感じた。

「はあああああああああつ！！」

季衣の一撃によりもはや戦意を喪失しかけている敵をぶつ飛ばしていく。それをみた兵士が戦意を喪失し、さらにそれをみた兵士が戦意を喪失していくと言う負の連鎖が馬岱の隊に出来上がっていく。戦意を喪失してくればその分だけ相手の兵士の間隙が大きくなり、それを狙って俺の白羽黒羽が鈍く光る。もはや最初に本陣に奇襲を仕掛けていた馬岱の隊とは思えないほど衰弱しきり、逃げだしているものさえ居る。

本来であれば追撃を仕掛けるところだが、馬岱の隊全部を撤退させるためにやあもうちよいびびらせる必要があるな。

「さあ、ご覧の通り貴様等にはもはや勝ち目はない。それでも戦うという者はいるか！！ もし居ると言うならば『天の御使い』の俺が相手をしてやろう！！」

「ここにいるぞっ！！」

俺がそう叫ぶと一人の女の子がそう叫びながら、勢いよく手を拳げていた。……ん？ あの子、確か張三姉妹のライブに居た子じゃないか……？

「つーかあの子が馬岱だったみたいだな。」

「たんぽぽが時間を稼ぐからみんなはお姉様のところへ!!」

なるほど、本陣への直接攻撃は無理だと判断して他の隊と合流させて一気に叩き潰そうって言う魂胆か。その時間稼ぎ役に買ってでるとはなかなか肝の据わった女の子だな。

「やっばやめた。あんたもお姉様とやらのとこに合流しな」

「へっ?」

「兄ちゃん!？」

俺の言葉に馬岱は間抜けな声を出して、季衣は驚いたような声を出す。

「いいの……?」

馬岱は自らの武器を構えたまま、警戒心を崩さずに言う。

「ああ、構わん。ここで各個撃破するより一気に撃破した方が楽だからな」

なぜ俺が教えたかと言えば、教えたところで本陣へと直接攻める手だてを馬岱は持つてはいない。馬岱の隊が生き残るにはここを突破するか、馬超の隊と合流するしかない。

つまりは合流して戦うしか馬岱が生き残る手段はないのだ。それ

にこんな小さな女の子と戦えって言われても、戦いにくいだけだからな。ただでさえこの世界で強いのは女の子だけだからな……。

そして馬岱は一気に駆け出して、馬超の隊と合流しに向かった。それを俺は季衣と共に見送るのだった。

「兄ちゃん、追撃しなくても大丈夫？」

すると隣にいた季衣がそんなコトを訊ねてきた。

「大丈夫だ。今ごろ恋達のところに向かわせてる春蘭が霞が、馬超と馬岱の相手をしてくれてるはずだ」

俺は本陣に合流する前にこうなることを予測して、兵士に春蘭と霞にあの二人の相手をするように伝礼させていたのだ。手が空いているならば、今頃は恋と春蘭と霞のどっちかが戦ってる頃だろうな。

「さて、そんじゃあ華琳達も動き出したみてえだし、俺たちも動くとしますか」

「うん！」

こうして俺たちも華琳の本隊に続いて、敵の本隊を叩くために動き出した。

「……日が暮れる前に陥落って、おい」

あのあと攻城戦に俺と季衣が参加した後に、春蘭たちから馬超た

ちの相手はこちらに任せろ、と言われた真桜や恋たちも攻城戦に参加した。恋に俺の隊の全権を任せてたはずなのだが、どうやら春蘭に任せてきたらしい。

「どうやら馬超の隊が本隊だったようね。まさかここまで城の守りが手薄とは……」

そんなコトを考えていると華琳が俺の言葉に答えてくる。本来であれば城を陥落させるまでには何日かが掛かるのだが、あまりにも手薄すぎてこつもあつさりと終わった。

現在は風を筆頭に城の中にいた非戦闘員を一カ所に集める作業を行っている。にしてもさつきから俺たちに飛びかかってくるこいつらは何なんだろうか？

「でやあああああああつっ!!」

「うぜええええええええええつ!!」

とりあえず俺はそいつらを片っ端からぶっ飛ばしまくっている。

「本当にあなたの側にいるとやることがないわね……」

「んなこと言われても華琳を守るのが俺の役目だからな」

俺がニカツと笑いながらそう言うと華琳の顔が真っ赤になっていた。それに風も真っ赤になっていたんだが、なぜに真っ赤になるんだ？

ゾワッ!!

そんなコトを思っていると久しぶりに凄まじい殺気を感じた。振り返るまでもない。こんな殺気を出せる奴は一人しかいないからな。

「華琳さま、馬騰が御使ったとの報告が……」

そう。こんな殺気を出せる奴は俺が知る限りでは秋蘭しかいない。だがいつもならば殺気+抓りかなんかが来るんだが、今回に限ってそれがこない。つまりは何かあったつつうことか……。

「そう。案内なさい」

そして華琳と共に秋蘭の案内で馬騰のところに向かっていた。

「……」

華琳が馬騰が居るといふ部屋に入ってからしばらくの時間が過ぎた。部屋の中には華琳と秋蘭、あとは馬騰が居るはずだ。ただ、近くにいるにも関わらず内容までは聞こえないが、秋蘭と華琳の声しか聞こえないところを見ると、中で馬騰はもう……。

そこまで考えると俺はもたれ掛かっている壁から背中を離して、華琳と秋蘭、そして今は亡き馬騰をあとにするために動き出そうとすると、不意に秋蘭に呼び止められた。

「中でなにがあったのか、訊かないのか？」

「ああ。だいたいは分かってる。俺の居た世界でもそう言うのは

あつたからな」

「……そうか」

「……俺は凧達の手伝いをしてくる」

そして俺は秋蘭の言葉を聞かないまま、凧達のところに向かった。

馬騰の埋葬を済ませた俺たちは涼州を併合した後、早々に城への帰路に付いていた。涼州が手に入ったとは言え、遠征中の慣れない敵の動きにより兵の疲れは手に取るように分かった。

さらには華琳の気分が優れていない。言葉で俺に言ったことはなかったが、華琳は馬騰との戦いを楽しみにしてるかのように見えた。だが、こっそりと馬騰の兵士から聞いた話によれば、馬騰は華琳の手に掛かることを潔しとせず、自ら毒を煽ったらしい。

戦に勝ったとは言え華琳からしたら胸くそ悪い結果のことこの上ないだろう。

「正面から戦って勝ってたら、華琳もあんな感じにならなかつただろうに……」

「どうやら馬騰は体を煩っていたらしくてな。それもあって我らに膝を折るくらいなら……」と思ったのだろう」

どうやら春蘭と会ったときもすでにかなり無理をしていたように見えたらしい。

「馬超、馬岱はどうなってる？」

「張三姉妹が戻ってしまったおかげで、情報収集が難航しているな……」

春蘭たちから逃げた後の足取りは掴めてはいないらしく、劉備のところにも身を寄せたと言う噂もあるらしい。これは別段と驚くようなコトではない。

黄忠は分からないが、すでに関羽に張飛に趙雲。ここで馬超が加わり劉備のともには諸葛亮と五虎将が『蜀』としての形が着々と揃いつつある。

おそらくはすでに黄忠も仲間になっているのだろう。ならば黄忠の動きには注意しなければならない。

秋蘭を守るために。

「戻ったら、また忙しくなるわよ」

そんなコトを思っていると不意に華琳により話しかけられた。

「大丈夫なのか？」

「さすがに落ち込んでばかりはいられないわ。これで劉備のもとには、馬超と馬岱という勇将が二人も加わったことになる。……涼州の騎兵が諸葛亮の指揮を得ると考えれば、相当な脅威よ」

そんな華琳の言葉に皆が頷く。今回戦った涼州には軍師が居な



った。つまりは軍師を欠いた状態であれだけの強さを誇る騎兵に諸葛亮の知謀が加わったとなれば、どれだけの強敵になるかなど分かったものじゃない。

「帰ったらずは軍義を開きましょう。全てはそれからだわ……」

華琳は誰の目から見ても分かるほどに疲れを見せながらそう言う。

それをみた俺は華琳が乗っている馬から華琳を持ち上げ、俺の前に座らせる。

「お、桜牙!? 何をしているの!? / / / / /」

俺のいきなりの行動に顔を真っ赤にしている華琳だったが、俺はそれを気にせずに言葉を続ける。

「華琳……。無茶は良いが、自分のことも考えるよ?」

「……分かってるわよ、そんなコト…… / / / / /」

「分かってたら俺は言わないつつの。……少しの間だけ、ゆっくりしてくれ」

俺はそう言うと、華琳を俺に寄りかからせて楽な姿勢にさせる。

「……ありがとう…… / / / / /」

俺の言葉に華琳は一回だけ礼を告げると、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきた。

そんな華琳の寝息を聞きながら、俺は澄み切っている青空を見上げた。

**第四十九話 『曹操VS涼州連合』後編』 (後書き)**

もしかしたら次回の更新の予定の2月13日に更新できないかも  
しれません……。

なので次回の更新は2月15日になります。

感想待ってます！

第五十話『約束の月明かり』（前書き）

更新出来た……。

と……と……と……と……！

## 第五十話 『約束の月明かり』

side 桜牙

さて、読書様方みんなにはいきなりだがワタクシ、龍崎桜牙の一日をご紹介したいと思う。え？ そんなんはどうでも良いから本編を進めるって？ まあ、待て待て。コレを言わないとこれからの話が進まなかったりするんだ。

ゴホン……では早速だが紹介させていただきます。まずは日が昇り始めた辺りの朝、城の庭にて俺は日課の鍛錬を行っている。鍛錬の相手はほとんどの場合が紅葉か風、春蘭の三人だ。

誰も来ないときは一人でイメージを相手に鍛錬を行っている。まあ、最近は割と忙しい日が続いてるから、朝は眠くて人があんまり来なくなっただけだな。

俺はもう日課だから眠いなんてコトは……少しあるけど、サボらないようにしている。それで次は朝食を取っている。ここらは特に言う事はないので、割合。

次は午前の仕事だ。ほとんどの場合は俺は書類仕事がたまっているので筆を片手に書類と格闘をしている。たまに雪の仕事を手伝ったりしてるが、とりあえず普段は午前は書類仕事をしている。

午後は風や真桜、沙和や恋や紅葉などと街の警備に励んでいる。風や紅葉と一緒に場合は、スムーズに警備が進む。

しかし沙和と一緒にだと、服屋やらアクセサリー屋やらに連れてかれて警備どころでは無くなる。真桜と一緒にだと、絡繰関係のコトで警備どころでは無くなる。

そして恋と一緒にだと……分かるとは思いますが、財布の中身が羽をつけて飛んで逝きます……。夜は残った書類仕事を終わらせるか、かなり遅くまで何かしら仕事をしているかだ。

今までの俺の話で分かってくれたとは思うが、俺の一日には自由時間が全くとないのだ。

だがしかし!! 今日俺は仕事は全くなし!! 書類仕事とは寝る間を惜しんで格闘を繰り返して、警備の仕事も皆から順番を代わってもらいすでに今日の分を終わらせている!!

フハハハハハハハハハハア~~~~!! 今日俺は完全に休みなのだア~~~~!!

……とハシヤイ達は良いが本当は約束を果たすために俺は今日を空けたのだ。読書みんな様方も覚えているかもしれないが、以前に俺はある人物と約束をした。

『その……そう言うのって、どんな気持ちなん?』

今のセリフで分かった人もいるだろうけど、霞に恋心について教えてほしいと頼まれたのだ。

本来であればすぐにでも教えてあげたかったのだが、いかんせん俺に恋の知識はあまりなく、さらには劉備との戦いや涼州連合との戦いやらでうやむやになっていた。

それにコレからのことを考えると戦いはさらに激しさを増し、それに伴い俺と霞の時間が合わなくなったりする。だから霞が完全に休みの今日を空けるために仕事を頑張ったのだ。

「さて、夜までには時間がない。さつさと準備を進めるか……」

俺は一人そう呟き、雰囲気を作り出すための準備を始める。さて、今夜は少しばかり楽しみになってきたな。

俺はそう思いながら人知れず準備を始めるのだった。

あれから早くも夜になったが、時間が進むのが速いだろ！！とか言うツツコミは一切受け付けない。

さてそんなコトはさておき、現在俺はいつも来ている川の近くの木にもたれ掛かるように月を見上げていた。普段は動物は虫達がさざめき合うこの場所も、今はしん……と息を潜めてくれている。

それはまるで今この世界で起きているのは俺以外には、夜空にひとときわ大きく輝く満月だけなのではないかと思わせてくれるほどだ。

それはまるで、この場の生物達が俺と待ち合わせの人物に、気を利かせてくれたかのようにさえ思える。

「もうそろそろかな……」

俺は夜空に浮かぶ満月を見る瞳を閉じ、耳を澄ます。すると小川

が流れる涼しげな水音に混ざって木々の枝木が揺れるような音が、俺の耳に届いてくる。

そしてその音はだんだんと俺の近くに近づいてきている。

「桜牙く？」

そして聞こえてきた声の主は俺の待ち合わせの相手である霞の声であった。

「霞、こつちこつち」

俺は木の陰から片手をあげて、自分はここにいるぞと言うコトを示す。

「桜牙くく！ お待たせくく。どないしたん？ いきなりこんなところに……っ……っ」

俺の存在に気づいてくれた霞は俺のところに近づいてくると、驚いたように息を潜める。霞が見ているのは小川の周りにはたくさんろうそくが立てられ、その一本一本には火が灯っている。

闇の中に無数に丸い光が浮かび上がり、水面で幻想的に揺れるその光景に、霞は目を見開いて動きを止めている。

「……綺麗だろ？」

俺は動きを止めている霞に静かにそう訊ねる。

「綺麗、やけど……え、これなに？ どうかしたん？」



「どうかしたんって……この前の約束忘れたのか？」

俺は少しばかりだが呆れたように霞に言う。

「約束……」

しかも俺が言ったにも関わらず、霞はまるで思い当たらないらしく、ポカンと口を開いたまま首を傾げてしまった。まさか本当に忘れちゃった、とかつてのは無いよな……？

「……この時期、なんか祭りでもあったかいな？」

「はあ~~~~~……。ホンマでつか……」

霞の今のセリフに俺は盛大にため息をつきながら、思わずそう訊ねてしまった。ため息と一緒にさっきまでのキメていた雰囲気<sup>が</sup>体全体から抜けてしまったのか、へなへなと力が抜けていくのを感じる。

せつかく休みを作って何時間も掛けて準備したつのに、このザマか……。ふっ、我ながら泣けてくるぜ畜生……。

「ちょ、ちょっと待って！ 思い出す！」

「……いや、もういいや」

「や、お願いやからへこまんとして！！ 絶対に思い出すから！！」

俺がかなり落ち込んでいるのをみた霞はすげー慌てながら、何のために俺が準備したのかを考えている。

祭りが違うんなら、祝い事……？ などと一人でぶつぶつ呟いている辺り、本当に霞の脳内からはあの会話は削ぎ落とされてしまったようだ。すると霞が閃いたかのような顔をしてくれたので、ようやく思い出してくれたのか、と思ったのだがそれは杞憂に終わる。

「ほかにも誰が来るん？」

「……残念ながら華琳どころか誰一人として来ない。二人っきりじゃないと、意味ないからな」

「意味ないからなって……もしかしてそこんところが重要だったりする？」

「さて、どうだろうな」

霞の質問に俺は適当に答えると俺たちを照らしている満月を見上げる。そこには相も変わらず綺麗な月が、浮かんでいる。すると何かを思いついて、少し恥ずかしいのかもじもじしながら俺の名前を呼んでくる。

「ウチの勘違いかもしれへんし、思い上がりかもしれへんし、違ったらすっごい恥ずかしねんけど……これって『雰囲気』やったり、する……？」

「……それ以外に何かあるか？ それともコレではご不満かな？」

俺はイタズラっぽく霞にそう言う。

「ちやう！　ちやうよ！！」

俺の言葉に霞は大げさなくらいに首を振り、否定してくる。

「だってまさか、あんな約束、桜牙が覚えてくれてるなんて思わへんかった……」

霞は頬を僅かに紅に染めながら罰が悪そうに俺に言ってくる。

「覚えてるに決まってんだろ。俺だって今日を楽しみにしてたんだ」

「……どうしょ。……めっちゃ嬉しい……」

「正面から言われるとなんか照れるな……。何にしても喜んでもらえて何よりだ」

俺は岩場の多いところで、比較的座りやすい俺の特等席となっている木陰に霞を誘い座らせる。

「ちゃんと霞の好きな酒と、美味しい料理も用意してるよ」

俺が準備したというのはろうそくだけではなく、料理等なども準備したのだ。さすがにこれだけの量を一人で運ぶとなると、時間が結構掛かってしまったが、こんなコトは大したことではない。

「つまみ系のもんばっかになっちまったが、勘弁してくれ」

「ううん。ウチはこういうん方が大好きや。……なあ、コレ全部

桜牙が運んできてくれたん？」

「まあな、大したことはないさ。あとはコレだな」

俺はそう言いながら隠しておいたとっておきを茂みから取り出す。

「さと、やっぱりコイツがなきや始まらないよな」

「わーい お酒やお酒や〜！」

霞は酒を見た途端急に子供のようにハシヤギ始める。そんな霞を俺は微笑ましく見つめながら、盃に酒を注ぐ。

て柔らかかなろうそくの灯りを受け、黄味を帯びた液体がゆらゆらと煌めく酒を俺は霞に渡す。

「ありがとう」

霞の礼に俺は笑みを浮かべながらどう致しまして、と答えて霞の隣に腰を下ろす。そして自分の盃にも酒を注ぐ。

「じゃあ乾杯だな」

盃を霞に向け差し出すと、霞は上目遣いに悪戯っぽく笑みを浮かべながら言ってきた。

「乾杯っ……何にやの？」

「そうだな。……じゃあ……目の前にいる美しい女性に、乾杯」

「桜牙、言つてて恥ずかしくないんか…… / / / / /」

どうやら言われた霞も恥ずかしかったのか、顔を赤くしながらそう言ってくる。

「確かに恥ずかしいな。じゃあ、世界に生きるありとあらゆる全ての生命に、乾杯」

「うん、乾杯」

薄闇に盃と盃を合わせあつ小さな音が響く。俺たちは微笑みをかわしながら、盃を傾け酒を口にする。口の中に酒の味が広がり、ゆったりとした時間が二人に流れ始めた。

「……うん、美味しい。いい香りの黄酒やね」

霞は盃に注いだ酒を飲んだあとにそう言う。

「そりゃ良かった。霞のためだけに買ってきた酒だからな」

「ウチのためやて……いややわそんな、うまいことゆつても、なんも出えへんで？」

「別に構わないさ。霞のために全部準備しただけだよ」

俺はそう言ったあとに盃に注いだ酒を一気に飲み干す。二人の間にはなぜか小川の音しか聞こえなくなる。

「……なんかさ、雰囲気ってスゴいな。桜牙が前にまずは雰囲気を作るってゆうてたんが、なんでか分かった気がするわ」

「この前約束したときのことか」

確かに雰囲気がこのこの言ったが、まさか自分でもここまで  
雰囲気がスゴいとは思わなかった。

「そう。こうやって銀の月とろうそくの灯りに照らされると、  
なんか……こう、不思議な気持ちになってくるわ」

「わかってもらえて光栄です、お姫様」

「お姫様って、桜牙は恥ずかしげもなく恥ずかしい言葉言っんね  
……。でも桜牙がもてる理由、改めて分かった気がする……」

「俺がもてる？ まあ、お世辞でも嬉しいよ」

「お世辞ちゃうよ！ 秋蘭を筆頭に名前を挙げたらキリないで」

謙遜とかじゃなくて俺の場合は秋蘭以外には本当に好かれている  
という実感はない。好かれているという実感と言っのはあくまで恋  
愛対象としてではあるが、とにかく霞は俺がモテていると言っ話を  
前提で進めるようだ。

「最初は桜牙のことは、強いけどチャラチャラしとるだけの優男  
やと思ったんやけど、そうやないんやね」

最初のイメージとして俺はそんな風に見られてたのか……。正直  
自分ではそんな風にしてるとは思ってないんだが、端から見るとそ  
う言っ風に見えるのか……。

「桜牙の魅力は戦いの腕っ節とか顔とか言う次元やないんやね。まあ、少しくらいは影響してると思っけどな」

「うゝむ、よく分からんままなんだが……」

「にはははっ そーいうんのも桜牙のええところやと思っで」

霞は笑みを浮かべながら俺にそう言ってくる。

「それだと女心が分かってないって言われそうだが……」

まあ、実際に全く持って分かってないわけだから言い訳は出来ないがな。

「ちやうよ！ ……ウチ、こういう会話慣れてへんから巧いこと説明できんけど……」

霞は眉根にしわを寄せむっ、と唸りながら真剣に考えて言葉を選びながら話してくれているみたいだった。そして霞は言葉を選び終えたようので、盃を片手に月を見上げながら言う。

「……あのな桜牙。ウチが『甘い気持ちがどんなもんか知りたい』って頼んだんは、相手が桜牙だったからや。誰でも良かったん違っで」

「……そうなんだ？」

疑問系になってしまったが、なぜ俺だから頼んだかが分からん。

「当たり前や！ ウチは理想が高いんや！ こんなコト心の底か

ら認めた相手にしか頼まへん!!」

霞の真剣な言葉に俺の頬にわずかに熱くなるのを感じる。雰囲気にも酔ったのか、とも思ったがどうやら雰囲気酔ったのとは違うようだ。

「……ウチがここまで言うてるんや。どうして自分がモテモテなんか、そろそろ理解した？」

「モテモテかどうかは分からんが」

俺はそこまで言うと、隣に座る霞の肩をグツと抱き寄せる。霞を抱き寄せたのだが予想に反してその肩は、簡単に俺の腕の中に崩れ落ちてきた。

それにさっきの言葉を聞いていくら鈍感と言われ続けている俺でさえ気づくことが出来た。

「霞が俺のことを想ってくれてるのは、分かったよ」

俺は霞の耳元で内緒話をするかのように小さく、そして優しく囁く。すると霞が驚いて振り返ろうとしたので、俺は後ろから抱きしめる。

「今はダメだ。今だけは見ちゃいかん」

「見ちゃいかんってなにを……」

「俺の顔だ。……見なくても分かる。絶対みっともない顔してるはずだ……」



「みつともないって、なんで？」

……いつもは人のことを鈍感鈍感言ってくれるくせに自分も気づけてないじゃんか。

なるほど、これが鈍感な奴を相手にするもどかしさって奴か……。

「霞が嬉しくなるようなことばかり言うからだろ」

「それ、つまり……もしかして、桜牙が照れてるってゆつこと？」

「もしかなくてもその通り、」名答

「うそ。桜牙は秋蘭とかでこんな慣れてるんちゃうの？」

こういう時に他の女の子の名前を出したりはしてもらいたくないんだが、確かに秋蘭とは慣れてるから言い返しようがない。

「秋蘭は秋蘭、霞は霞だ。……ほら、聞こえるだろ」

俺はそう言いながら、ちょうど胸の位置にある霞の小さな頭を優しく撫でると、耳元が左胸にあたるように引き寄せた。

引き寄せると、真っ直ぐで綺麗な霞の髪の毛が、さらさらと俺の指先を流れる。

「……すごい速さでどっきんどっきん言うてるわ。大丈夫なん？ これ」

「大丈夫じゃない。ここまでドキドキするのなんか、秋蘭のとき以来だ」

秋蘭のときは初めてすぎてあんまり覚えてないけど、一回ああいう経験をしたから少しばかり余裕が出来たのかドキドキ言うのを感じる。

だからと言って慣れるというのはワケが違うので、おそらく今のドキドキは今までで最高潮だろう。

「うそ」

「むう、さっきからうそうそ言ってるけど、そんなに俺のこと信じられないか？」

「ううん……そんなことは、ないけど……」

俺がそう訊ねると少しだけ困ったように言ってくる。少し意地悪に言い過ぎたかな。

そんなコトを思いながら言葉を紡いでいく。

「なら素直に聞いておきな。今俺は霞にスゴくドキドキしてる」

「うん……。ありがと、桜牙はホンマにウチにドキドキしてくれてるんやね」

霞は俺の霞に回した手を少しだけ抱きしめながらそう言ってくる。

「ああ。俺がモテモテかは知らんが、霞も自分の魅力を自覚した

方がいいぞ」

ちよつとと言うかかなり霞に俺がトキメいてしまってるからな。もしこんなコトが秋蘭に知られたりしたら、まさに蜂の巣だな。

「……桜牙はウチのこと、女の子って思ってくれるん？」

「当たり前だ。霞のコトを女の子じゃないなんて思うわけ無いだろ？」

こんなに可愛い霞が女の子じゃないんなら、そこらにいる女の子なんてのは女の子の皮をかぶった男としか思えん。

「だって、こんな格好やし、女らしいコトなんて、これっぽっちも出来ひんし……」

俺はそこまで聞いて霞の体に回していた腕にやんわりと力を込める。緊張しているのか俺の腕を抱きしめている霞の細い腕や体が少し強ばっている。

「霞は自分が思ってるより女の子だ。確かに戦場じゃ勇ましいけど、さつきから俺は霞の女の子らしさにドキドキさせられまくりだ」

「そっか……、なんや桜牙に言われると嬉しいわ」

俺はそんな霞の言葉にさらにドキドキさせられながら言う。

「だからあんまり自分が女の子らしくないとか言うな」

「うん……分かった」

霞の言葉に思わず笑みを漏らしていると、霞の体からゆっくりと力が抜けて心地よい重みが掛かる。俺は霞の髪に顔を埋める。するとやはり女の子らしい甘くて匂いが漂ってくる。

さらにはピッタリとくっついた俺たちの体はまるで繋がっているかのように、鼓動さえもが重なり合う。俺と同じように霞もドキドキしてくれているんだな。

「……スゴいな。こうしてくっついてるだけなのに、まるで桜牙と一つになってるみたいや」

……その表現は誤解を招くかもしれないから、あんまり言わない方が良いと思うぞ、と言う言葉を俺は飲み込む。

すると霞の細く小さな手がだんだんと伸びてきて、俺の手を握りしめてきた。

「うちも女にしたら手は大きい方やと思うんやけど、やっぱり男の人には敵わへんなあ」

「十分可愛いよ、霞は」

「……恥ずかしくないんか？ そう言うん……。でも、こうやって大きい手え握っていると、なんか安心するわ……」

霞は俺の手を包み込むように握りながら、そう言ってくる。キュッと握りしめた霞の手からは霞の暖かさが伝わってくる。

そして霞は何かを考え込んだあとに、意を決したように口を開い

た。

「あのな、桜牙。ちょっとだけウチの話聞いてくれるか？」

「いくらでも聞いてやるさ」

霞が俺に話してくれたのはさっきも話してくれた俺の魅力とやらについてだった。霞自身は俺も知らない俺の魅力に気づいていたんだが、それで別段俺と特別な関係になろうとは思ってなかったらしい。

特別な関係ってことはつまり『男と女』の関係のコトだ。どうやら霞は俺は女の子に苦労してないし、霞のコトなど眼中に無いものだと思っただけらしい。

だからこそ、あのときに俺にあんなお願いが出来たんだろうなあ、と言うことを話してくれた。今思うと恥ずかしいわ、と笑いながら言ってくれた。

「けどな、お願いしたことは後悔してへん。だって、あのときああ言ったから、今の……この時間があるんやもん。そやる？」

霞は言葉をそこで一旦切ると、顔を動かして夜空に輝く満月を見上げる。霞が動いたことにより、綺麗な髪が俺の胸をくすぐり、甘い匂いが俺に伝わってくる。

霞が動く度に女の子らしい柔らかさが伝わってきて鼓動が高鳴り、バレないかヒヤヒヤさせられている。

「こつやって過ごしてるからこそ、ウチは、自分の気持ちに気が

ついた」

ドクン!!

今の霞の言葉に高鳴っていた鼓動が一際大きく高鳴る。今のは絶対にバレたな、とか思いながらも俺の意志には反して鼓動はさらに強くなり、速さを増していく。

「ウチのために……って桜牙が一生懸命考えて、こうして約束守ってくれて……。それに女として接してくれて……ホンマにすごい嬉しかった」

霞の言葉に俺はただただ鼓動が速くなるのを感じた。

未だかつて俺の鼓動がここまで高鳴るコトなどあっただろうか、と思わせるほどに霞の魅力はスゴかった。

「コレまでウチはこんな気持ち味わおうたコト無かったから、自分が女やって意識したこと無かってん。けど桜牙がウチの女の部分を取りから覚ましてくれた……。」

きつと桜牙はウチの『特別』なんや……」

そんな霞の言葉を聞いた俺は無言で腕の中の霞を抱きしめていた。

「あつたかいな……。こんなに良いもんやったら、もっと早く魅力に気づいとけば良かった」

「今からでも遅くはないさ」

とは言っても未だに俺自身の魅力なんてのは分からない。

「ええ男に抱かれ、うまい酒に綺麗なお月さん……。最高の宴会や」

そう言い再び月を見上げた霞の表情は月明かりに照らされ、幻想的にすら見えた。

思わずそんな霞に見とれてしまっていると、霞が俺に言ってくる。

「桜牙も飲んどるか？」

「ああ、貰ってるよ」

実のところ霞が来る前に適当に勝ってきた酒を二、三本飲み干している。多分そこらを探せば出てくるだろうな。

「でも同じ味やとつまらんやろ？　せやったらコレを使えば良いよ」

そう言いながら霞は持っていた盃の酒を一気に飲み干したあとに、そのまま俺に盃を渡してくる。使っているのは俺と同じはずなのだが、受けとらないのは失礼だと思い俺は盃を受け取る。

霞から受け取った盃に視線を落とすとあることに気づく。盃には霞の口紅のあとがうつすらと彩られていた。俺がそのことに気づいたか気づいてないのかは分からないが、霞はその盃に酒を注いでくる。

「……………分かってやってるだろ？」

「何のことかなあ。ささっ、注いでもらった酒は残さず飲むのが礼儀やで?」

そうはいうがこのままでは間接キスになってしまふ……。まあ、前にも間接キスしたことはあったが、あの時と今とでは訳が違うわけ……。けで……。

ええい、どうとでもなりやがれっつんだ!! と半ばやけになりながら、口紅がついているとこを避けて飲む。

「良い飲みっぷりやけど、それじゃあお酒の味は変わらんよ?」

と言いながら霞はさっきまで手元にあつたはずの盃を俺に渡してくる。どうやら俺もかなり酔いが回つたみたいだな。

霞に盃を取られたことに全く気づけなかったわ。

「はい、ご返杯」

とりあえずこのままでは霞の策にハマってしまうと思い、自分の盃を探すがドコにもない。確かに置いたと覚えている場所には既に俺の盃の姿はドコにもあらず、あるのは笑いを堪えている霞の姿のみ……。

俺がジト目で霞を見つめてみるが、やはり霞は笑いを堪えているのみ。

「桜牙の盃が無くなったんなら、ウチので飲むしかないよな!。代わりばんどで」



そう言った霞の笑みを俺はこれから先一生忘れることはないだろう。そして徐々に盃を彩っていく唇の花びら……。

今まではまだ花卉が咲いていないところから、酒を飲んでいただけが今回ばかりはそうはいかない。

「はい。ご返杯」

遂には花が完全に満開で開いてしまったために、よけて飲むところが一切ない。

今までジワジワと追いつめられてきたために、動機が激しい……。

「なあ、桜牙……飲んで」

ほんのりと桜色に染まった顔で盃を差し出す霞。その表情からは今までの悪戯っぽい笑みは消え、一人の純粋な女の子としての霞の姿があった。

その姿を見た俺は霞を愛おしいと思い、この純粋な女の子の気持ちを守ってあげたいと思った。そして俺は遂に花卉の一つに口を付け、酒を一気に飲み干す。

その味は霞が言っていたように、辛口だった酒がどこか甘くなっただように感じる事が出来た。

「えへっ……やっと飲んでくれたわ」

今の霞の笑顔を見たとしたら、霞が一騎当千の将だと言っても誰一人として信じてはくれないだろうな。

「……な、どんな気持ち？」

霞のそんな言葉を聞いたあとに俺は至極自然な流れで、霞の体を引き寄せる。

そして俺は唇ではなく頬にキスをする。唇を頬から離し、俺は霞の顔をのぞき込むように陣取る。

「こんな気持ちさ」

俺は悪戯っぽい笑みを向けながら霞に言う。

「分かるだろ？ この動悸が激しくなるの……。追い詰められれば追い詰められるほど、気持ちが高ぶっていくんだ……」

追い詰められて気持ちを言うのはカッコ悪いな……。にしてもここまで追いつめられたのっていつ以来だろうな……。

「言わんでも分かってるよ……。うちもそうやし」

霞も盃を俺に渡してくれる度に心臓が飛び出しそうなほど高鳴ってて、誤魔化すために茶化してものを言ってみたりと……。

「心臓の音もちゃんと伝わってきたし。せやから桜牙がどんな気持ちで口づけしたのかも……」

「言つとくが、酒の勢いとかで口づけしたんじゃないからな」

もしそんなことでキスなんかしたとなれば最悪だ。霞の気持ちを

たかが勢いごときで踏みにじったことになるからな。

「分かってる言うたやる。勢いでしたって思われなくなかったから……だから、頬にしたんやる?」

どうやら全てお見通しらしい。おそらく今の霞の気持ち手が取るように分かるように、霞も俺の気持ち手が取るように分かるんだろうな。すると不意に霞は俺から視線を逸らした。

何事かと思えば耳まで霞が赤くなってきてる。俺と同じように霞も照れてるんだろうな。

「なんや、めっちゃ恥ずかしい……。さっきまで平気やったのに、桜牙の顔まともに見れへん……。心臓がバクバクしたままやし、汗も出てくるし……」

顔を逸らしたままだが、霞らしい率直な言葉。そんな霞の頭を俺はポンポンと軽く撫でながら言う。

「焦らなくても良い。霞は今日、女の子としての一步を踏み出したんだ。焦らずゆっくり、その道を進んでいけばいい」

背中から抱き寄せるようにしながら、俺は霞の頭を撫でる。

「焦らず、ゆっくり……。そやな、うん。それがウチらしいかもしれん!」

霞はそう言うてくる深く安心するかのよように息をはく。

「なあ、桜牙。一つだけお願いがあるんやけど……」

「なんだ？ 俺に出来ることならなんでも聞くぞ？」

霞は俺の目を真っ直ぐに見据えながら言ってくる。

「もし、ウチが次に進む決心がついたときは、秋蘭だけじゃなくて、ウチの心を奪ったんからな、ちゃんと相手してな」

「……ああ、分かってる」

たった今交わした新しい約束。それがいつになるかは分からないが俺はそれをずっと待っていていようと思う。

「じゃあ俺からも一つ良いか？」

「うん？ 何なん？ 今のウチに出来ることなら聞くけど」

この先にどんな運命が待ち受けていようとも、俺はきつと霞を守ってみせる。

なあ〜んてことは今考えるコトじゃないか。だけど今は

「もう少しこうやって霞のこと撫でてても良いか？」

「な、な、いきなりなに言うねんな。深刻そうな顔して言うから一体何の話やと思ったよ……」

霞はそう言いながら顔を真っ赤にさせている。

「ダメか？」

「ううん。ええよ、好きなだけ頭撫でてくれても……」

そう言いながら霞は甘えるかのように胸に頭をすり寄せてくり。

そんな霞の頭を撫でてやると霞は気持ちよさそうに、笑みを漏らしている。

いつか霞がもう一步踏み出したとき、俺はそれを受け止めるかは分からないけど、多分受け止めるんだろうな……。秋蘭には怒られるかもしれないけどね……。

まあ、何とかなるだろ。だけど今はこの一人の女の子を守ろうと、夜空に浮かぶ満月を見ながら誓うのだった。

第五十話 『約束の月明かり』 (後書き)

次回から番外編をやります！！

ちょっと長くなって三話が四話くらいになります。

えっ？ 内容？ ふっふっふ、禁則事項です(笑)

とりあえずお題としては『もし恋姫達が現代にいたら』であるイベントをやります！

どんなイベントに絡ませるかはお楽しみで……。

感想待ってます！

第五拾巻話『秋蘭の心配事』会わない二人』（前書き）

なんだか外伝はあまり好評だったようではなかったなので、誠に勝手ながら外伝を削除して、本編の更新をします。

お詫びと言うわけではありませんが、以前にとったアンケートの第一位の秋蘭の話を一話に渡しお送りいたします！！

ではござぞー！！

第五拾巻話『秋蘭の心配事』会わない二人』

side 秋蘭

今は朝。いつもであれば龍崎が鍛錬している時間帯に、城の庭にやってきたのだが、龍崎の姿が見当たらなかった。私はどうしたのだろうか、と思ったが私にも仕事が残っている。

いつまでもここで来ぬ龍崎を待っていても仕方ないだろう、と私は自分に言い聞かせて自分の仕事をするために自室に戻る。いつもであれば、わざわざ龍崎を探したりしないのだが、今日は探してしまった。

なぜかと言えば最近、龍崎とまともに話をする機会がないからだ。前であれば好きなときに好きなだけ会える、とまではいかないものの、一日で十分に話せるだけの時間はあった。

だが最近話せないどころか会うことすらまもなくなくなっていった。仮に会えたとしても話せるほどの時間はなく、一言二言しか話せない。

私に余裕がある日であっても龍崎に暇がなく、龍崎に余裕がある日であっても私には暇がないのだ。そのせいで、龍崎が忙しい日に私が話しかけたとしても素っ気ない返事しか返ってこないのだ。

寂しくないと言えは嘘となる。龍崎は私が唯一認めた男。私の心を奪った男……。そんな龍崎が他の女の子と話していると、胸が張り裂けそうな気持ちになる……。



なぜ私ではなく他の女の子なのだ……。どうして私とは話してくれないのだ……。そんな思考が頭の中を支配する。

「秋蘭さん」

どうして私とは会ってくれぬのだ……。皆とは街に食事に出掛けたりしているというのに……。

「秋蘭さん！」

確か少し前は龍崎が休みのはずだったが、せわしく動き回っていた……。夜には確か霞と会っていたはず……。

「秋蘭さんってばー!!」

まさか龍崎は私のことが嫌いになってしまったのか……。

「秋蘭さん!! 秋蘭さんってばー!!」

「ッ!? ゆ、雪か。どうしたのだ？」

私はいきなり聞こえてきた声に驚きながらも、私の前にたっている雪にそう言う。

「どうしたんですか？ さっきから呼んでも、反応なかったんですけど。考え事ですか？」

「いや、大したことではない」

さつきから呼ばれてたようだが、全く気づけなかった。それほどまでに私は考え込んでしまっていたのだろう。

「そうですか？　なら良いんですけど……。それより今日って午後から新兵との模擬戦でしたよね？」

「ああ、その通りだ」

午後からは龍崎が大将を勤め、その下に凧と真桜と沙和と紅葉の四人の将と新規兵の軍と私たちの正規軍の模擬戦があるのだ。もちろんその模擬戦には私は姉者、季衣や流琉、それに華琳さまも参加する。

恋やねねや空は今回は参加はしない。こやつらが参加すると力の差が開きすぎるために、参加させなかったのだ。

「だがそれがどうしたのだ？　雪も龍崎の隊の軍師として参加するのだろ？」

雪は軍師としての基礎を固めるために、龍崎の隊で指揮をしてもらっている。

普段は桂花や風達に劣るものの、ここ一番の時には持っている以上の力を発揮する。だからこそ、逆境に立っていることで隊を指揮し、その力をいつでも引き出せるようにしてもらいたいのだ。

「はい。そうなんですけど……。実は桜牙さんまだ起きてないんですよ……」

「？　ならば起こせば良いではないか」

「そうなんですけど……えっと……」

なにやら言いづらそうにしているのだが、龍崎を起こすことで何か問題でもあるのか？ 以前に姉者が龍崎を無理やり起こしたときは、かなりしごかれていたが今回は違う。

あときは姉者の都合であったが、今回は軍全体に関わることで無理やり起こしたとしても何も問題は無いはずなのだが……。

「と、とにかく秋蘭さんに桜牙さんを起こすのを頼んでも良いですか？」

「うむ、分かった。任せておけ」

「ありがとうございます！ では私も仕事があるので、失礼します！」

雪は私に笑顔を見せながらそう言うと、私の元から去っていつてしまった。さて、ならば私は龍崎を起こしにいくとしよう……ん？ 龍崎を起こすと言うことは、龍崎の部屋の中に入ると言うことか？

な、何を今さら私は恥ずかしがっているのだ……。私は龍崎とあんなことまでしたのだ……。部屋に入るくらいどうと良いことはないではないか……。

いや、しかし龍崎の部屋に行くのは初めてだな。龍崎の部屋……。……って私は朝から何を期待しているのだ！？ 私にはまだ仕事が残っているし、ただ起こしに行くだけだ。そのようなことが起こるはずがない。

私がそんなコトを考えているうちに、龍崎の部屋の前に到着した。私は深呼吸したあとに、部屋の扉を二回叩く。

「龍崎、起きているか？」

「……」

部屋の中に問いかけるのだが、中からは返事が返ってこない。となると、まだ寝ていることになるな。

……こ、これは龍崎を起こすためであって、別に他意はないのだ。と私は自分に言い聞かせながら、部屋の中に入る。

「すう……すう……」

するとそこには気持ちよさげに寝ている龍崎の姿があった。戦場であれば、鬼神のごとき動きをすうと言うのに、寝ている姿は可愛らしいものだ。

この者が『剣帝』の龍崎桜牙だと言ったとしても信じてくれる者は何人いるか……。私はそんなコトを思いながら龍崎を起こすために、龍崎の体を揺すりながら言う。

「龍崎、起きろ。午後からは模擬戦があるのだぞ」

「あと……もうちよい……」

「早く起きぬ」

「



なぜに俺の目の前に秋蘭の寝顔があるんだ？ おかしいな、夢でも見てるんじゃないの、とか思いながら頬を抓ってみるが見事に痛い。

つーことは俺の目の前にいる秋蘭は夢じゃないってコトか。だとしたら昨日に何かあったことになるな。確か昨日は頼まれてた書類を真夜中までまとめ方して、終わってベッドにダイブするとすぐに意識がなくなった。

全く分からん。今の流れだとどつからどう見ても秋蘭が入ってくる余地はないはずだ。つまりあれか、俺は寝ぼけて秋蘭をここまで連れてきたってコトか？

「うおおー………っ！！ 何やってんだよ俺エー………っ！！」

俺はそう叫びながら、部屋の壁に頭を何回も打ちつける。だって部屋に連れ込んじゃまったんなら、寝ぼけてたとしても多分あんなことやっちゃまったんだぞ！？

しかも秋蘭の気持ちも聞かずに無理やりやっちゃまったって最悪だ！！ くそっ、好きな奴に無理やりやるなんてなんて最悪なんだ……。

「んっ………龍………崎………？」

「し、秋蘭………おはよう」

俺はキョドってるのがバレてしまつのではないかと思うほどに、キョドリながら秋蘭に言う。

「俺、覚えてないんだけど、もしかして秋蘭になんかやっちゃった、か？」

俺は秋蘭の目を真っ直ぐに見ながら言う。もしもやったとしたら、謝って許してもらえるかは分からないが、謝るしかない。それで嫌われたとしても、文句は言えないしな……。

「い、いや。私が龍崎を起こしたら、連れ込まれただけで、何もされてないぞ……？」

「よ、良かった……」

秋蘭の嫌がるようなことをやってなかったとは言え、また寝ぼけて人を自分のベッドに連れ込みまうクセが発動してしまったのか……。やれやれ、いつかこのクセも直さないといけないなあ。

そうじゃないと起こしに来てくれた秋蘭みたいなコトになっちまうからな……。朝からこんなスリリングな展開はゴメンだからな。

「……あれ？」

よくよく考えてみると、秋蘭が起こしに来てくれるってコトは、いつもの鍛錬の時間はすぎてるってコトだよな？

そんなコトを思いながら窓から、太陽の位置を確認するとすでに太陽は真上に行き着こうとしていた。

「マ、マズい！？ 今日模擬戦の会議をする予定だったんだ！？」

そう。俺は今日の午後にある模擬戦の作戦会議を凧達五人と打ち合わせをする予定だったのだ。

だが太陽の位置が真上に行き着こうとしているってことは、明らかに集合時間を過ぎてるってコトで、簡単に言えば遅刻してるってコトだ。

大事な作戦会議に大将である俺が遅れていったとなれば、将の指揮が下がることに繋がるのだ。

「ゴメン、秋蘭！　今から作戦会議があるからまた午後な！」

俺は急いでいつもの黒い外套に着替えると、部屋をあとにした。

結局、大事な作戦会議に遅れてしまい大した作戦を練ることは出来なかった　　と思いきや、俺が居なくても対応できるようになるために、集まっていた五人で作戦会議をしていた。

その機転が利いたおかげで、俺は立てられた作戦を見直しをするだけで済んだ。にしても、俺が居なくてもこれだけ出来るってのは、心強いな。

とりあえず作戦は立案できたので、模擬戦を行うために演習場のようなところに俺たちは集まり、布陣を済ませていた。済ませていた、と言ったがほとんどが雪の指揮で布陣したんだがな。

「さて、今回の相手は正規軍の中でもかなりの強さの相手だな」



「そうですね。ですが、布陣の仕方、戦い方を上手くすれば勝てるかもしれません」

俺の隣にいる雪が向こうにいる正規軍を見つめながら言う。右翼には季衣の隊、左翼には流琉の隊があり、中央には春蘭の突撃部隊。本陣には華琳と軍師勢と秋蘭が詰めてるってコトか。

対してこちらの右翼は沙和と真桜の隊、左翼は凧の隊で中央は紅葉の部隊を配置している。とりあえず紅葉の隊は春蘭が相手だから、兵士の数を多めにしている。

「さて、雪。今の布陣で最も注意すべきはドコの隊だ？」

「えっと……。やはり突撃力のある春蘭さんでしょうか？」

「残念ながら不正解だ」

俺がそう言うと雪が驚いたような顔をしていた。

「確かに突撃力のある春蘭は強力だが、やはり春蘭や季衣を補佐している流琉だ」

「流琉さん、ですか……？」

あの突撃猪である春蘭と季衣をサポート出来る流琉の動きはさすがと言うところだろう。いくら本陣からの軍師勢の支持を受けたとしても、あの二人では突撃してしまう可能性もあるだろう。

そんな二人をサポート出来る流琉を先に動きを封じてしまえば、

あの二人を罫にはめるのは容易いだろう。だからこそ流琉のところには罫を送ったのだ。

「流琉を抑えたとしたら次はどうする？」

流琉を抑えたとしたら突撃を遮られない二人は確実に突撃してくるだろう。季衣の方は抑えられるかは五分五分だが、春蘭はおそらくは無理だな。

「えっと……弓兵隊や罫を張るのが妥当かと……」

さっきの不正解のことがあってか、かなり不安そうに訊ねてきた。

「まあ、それが今の精一杯だろうな。じゃあ最後の質問だ。もし伏兵が本陣のすぐ後ろに控えてたらどうせる？」

「伏兵が『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』……  
…桜牙さん。もしかして……」

「そのもしかしてだ」

俺はニヤリとしながら雪に言う。確かに恋やねねや空は参加していないが、霞は参加している。つまりは後ろの伏兵は霞の隊と言つことだ。

この前の戦いで伏兵が何回も出たことよって、かなり険しい戦いになったからな。

「さて、さっきの質問だが答えはどうだ？」

「えっと……どうすればいいのでしょうか？」

「簡単だ。俺が出れば良い」

「えっ！？ 大将の桜牙さんが出てはダメですよ！？」

俺がそう言うと雪は再び驚いたような顔をしていた。まあ、これは正当な答えではないがな。

「じゃあどうする？ 今回軍師としてのお前に与えられた課題だ」と言うことで模擬戦が開始された。まあ、本当は俺も本陣に伏兵として攻めるように言われてるんだけどな。とりあえず事前に話を付けていた兵士に大将になるように言ったあと、またもや事前に控えているはずの隊のところに向かった。

ゴオオーン！！　ゴオオーン！！

模擬戦をしている土地に銅鑼の音が響き渡った。どうやら新規兵は負けてしまったようだ。新規兵はやはりいきなりの伏兵にやられてしまい、正規軍は伏兵が居たのにも関わらずある程度は戦えていた。

だがある程度は戦えていたとは言え、かなりの速さで進行を許してしまっているところを見ると、やはり伏兵に対応するための策をいくらか考えないといけないみたいだな。

「桜牙、もう少し攻めても良かったのではないかしら？」

そんなコトを思っていると華琳が俺に言ってきた。

「あのね。俺があれ以上攻めてたら相手にならないだろ？」

「それはそうだけれど、そうじゃなければ意味がないでしょう？」

確かにそう言われてみればそうだが、ある程度相手にならなかつたら意味ないだろっつうの……。

「とりあえず今回の模擬戦で反省点が色々あったな」

「そうね。ひとまず皆の良い経験になったわね」

「だな。はあ……疲れた……。とりあえず帰って休んだら報告書出しに行くよ」

俺はそう言つと引き上げるのであった。

さて、現在は入浴中。そう言えば今日は俺が風呂に入れる日だったと言つことを思い出して、風呂に入っているのだ。どうやら戦いで掻いた汗は結構あったようでベタベタしてたから、ちょうど良かった。

だけどこれだけ広い風呂に一人だけつてのは何だか不自然な感じがするな……。露天風呂だと思えば何とでも思えるがな。

そんなコトを考えるとなぜか風呂の扉の向こう側がガヤガヤ

し始めたんだが、どうしたってんだ？ この時間帯だともうみんな入り終わったかと思ったんだが、もしかしてまだ入ってない奴がいるのか？

………ちよい待とうぜ、俺。

よくよく考えてみるとこの城にいる男って俺と空以外に誰か居たか……？ 見張りの兵士とかは見たことあるが、あいつらは城に寝泊まりしている訳じゃないから風呂に入れる訳じゃない。

つまりはこの城には空以外の男はいない。まあ、そこはどうでも良いんだ。だってガヤガヤしてるってコトは、少なくとも二人以上いると言うことだ。

ここまで考えて分かることは一つ。ここに入ろうとしてる奴は確実に女の子ってことになるのだ。

「………マズい、非常にマズい」

ここで女の子に入ってこられてしまえば、混浴状態になってしまう……。

仕方ない。服はあとで回収するとして、今はさっさと撤退するに限るな。戦略的撤退つつう奴だ。

そんなコトを思いながら、腰に布を巻いて撤退しようとする風呂の扉が開かれて女の子が二人ほど入ってきた。

「に、兄様!？」

「あつ、兄ちゃんだ!!」

入ってきたのは体にタオルを巻いてこちらを見て驚いている流琉と季衣だった。

「お、おう。季衣に流琉か。き、奇遇だな、じゃあ俺は上がらせて」

俺は二人を見ないようにしながら風呂場を去ろうとした。

「せつかくだから一緒に入ろうよ、兄ちゃん!」

だが季衣に捕まえられてしまい、風呂場から脱出することが出来なくなってしまった。無碍に振り払うわけにもいかないので、そのまま捕まえられてるんだがどうするよ、俺……。

とりあえず季衣を説得しないことには始まらないわけで、このままの状態を保つのは非常にマズい。いくら季衣が幼児体け……ゲフンゲフン……未発達とは言え、女の子であるコトには変わらない。

そんな季衣の体はわずかに布一枚の遮蔽物しかないために、女の子らしい柔らかさを感じてしまうわけで……纏めると非常によろしくない状況にあると言えるのですコトよ!!

「待つんだ、季衣よ。いくら季衣が良くても流琉が嫌かもしれないだろ?」

ふつ、我ながらなんとナイスな言い訳だ。常識人である流琉にこの話を振れば、必ず流琉は俺の思っているはずの答えを言ってくれるはず!!

「え、流琉も兄ちゃんと一緒にの方がいいよね？」

さあ、流琉よ！ 一気に断って玉砕してください！！ そうすれば俺は撤退することが出来るのだから！！

「う、うん……。兄様となら……。／／／／／／／」

……前言撤回。どうやら流琉もダメなようです。

この状況、読者様ならどうやって切り抜けられますか？ 上目遣いで目を潤ませている流琉に怪力で俺を逃がさんとする季衣。

僕はこの状況から脱出したいのです。バレれば秋蘭に殺されてしまつから。

もし、この状況を打破できるのならば誰か教えてください。

それが私、龍崎桜牙の願いです。

「はあ、気持ちよかつたあ！ ね、流琉」

「うん！ 兄様も気持ち良かったですよね？」

「うん……。まあね……」

結局あのあと脱出することが出来ずに、二人と一緒にいることになってしまった。なんやらあの風呂は背中がゴツゴツしてるから、

とか言う理由で二人は俺を背もたれ代わりにしてきたことにより、俺は風呂に入りながらも一時も安らぐことはなかった……。

ま、まあ、とにかく体の汗や汚れは取れたんだから問題はないよな……うん、問題はない、はず……。なんかやつちまった感があるのは何故なんだろうか……。

はぁ……。とりあえず風呂も上がったことだし、さっさと華琳に報告書を出しにでも向かうとするか。

「季衣、流琉。俺は華琳に報告書を出しに行くから二人はすぐに寝るようにな」

「分かりました、兄様。おやすみなさい」

「おやすみ、兄ちゃん！」

「おう、おやすみ」

俺がそう言うと流琉と季衣の二人は自分の部屋に向かって駆けていった。その後ろ姿を見送った俺は、自分の部屋に報告書を取りに向かった。

そして部屋に戻ると今日の模擬戦を振り返っている雪が居た。しかもかなり集中しているのか、俺が返ってきたことにすら、気づいていないみたいだった。

そんな雪に親が子供を見るような気持ちになりながら、報告書を持ったあとに静かに部屋をあとにした。



それで華琳の部屋の前にやってきた俺は、部屋の扉を二回ノックする。

「華琳、居るか？」

「ええ。入っても構わないわ」

華琳がそう言ったので部屋の中にはいると、普段の服ではなくパジャマらしき服を着ている華琳が居た。

「報告書まとめてきたぞ」

「あら、以外と早かったのね。明日まで掛かると思ってたわ」

「いや。お前、今日までって言ったろ……」

「ふふっ、そうだったわね」

そうだったわね、じゃねえよ。あんだだけの量を三日で仕上げろなんて言われてかなりキツかったんだぞ？

一昨日は出撃によりまとめる暇がなくて、昨日は訓練があつてまとめる暇がなくて、今日は模擬戦のせいでまとめる暇がなくて、マジでギリギリになったんだよな。

「それと、一つ訊きたいことがあるのだけれど？」

「ん？ 俺に答えられる範囲なら答えるぞ」

「そう。ここ最近秋蘭が元気がないようなのだけれど、何か知ら

ないかしら？」

「秋蘭が？」

うーむ、秋蘭が元気がないってどうしたんだらうか……。そう言えは最近秋蘭とまともに話す暇が無かったな。

朝もなんやかんやで話す暇がなかったし、こりゃ秋蘭と話す機会を作るしかないな。

「こんど秋蘭と話してみるよ」

「ええ。頼んだわよ？」

「ああ」

俺はそう答えると華琳の部屋をあとにした。

にしても秋蘭が悩み事か……。全く想像できん。

俺は天井を見上げながらそう思った。



第五拾巻話『秋蘭の心配事』会わない二人』（後書き）

最近意欲がネギま！<恋姫>リリなのになってきています……。

なので更新が三日に一回更新になるかもしれませんが、完結まで頑張りますので、温かい目で見守ってくださいるとうれしいです……。

『魔法少女リリカルなのは』業炎を司りし魔法剣士』もよろしく願います！

感想待ってます！

第五拾貳話 『秋蘭の心配事と涙の理由』

side 桜牙

「はあ……」

最近何かとため息の多くなってしまったワタクシこと、龍崎桜牙でございます。何故ため息が多くなってしまったかと言えば、理由は二つある。

一つは現在、俺が向き合っている書類の山のせいだ。勢力が拡大しすぎてしまったために、書類仕事をこなさなければいけないのは当たり前なのだが、その量がとてつもないほどの量なのだ。

朝から昼までやっているのにも関わらず、書類の山は消えることなく俺の机の上にどっしり構えてやがるのだ。いい加減にしてくれ、と言いたいんだが言ったところでなくなるわけないので言わない。

さらに言えばコレは少ない方で、桂花あたりは俺よりも数をこなしているはずだ。それなのに投げ出しては、桂花に嫌みを言われちまうな。

んで二つ目の悩みってのが……秋蘭のコトだ。華琳に秋蘭を頼むと言われてからすでに三日が経過しているのだが、その三日間で俺は一日たりとも秋蘭と会っていない。

なんて偶然なんだろうか、俺が出撃する日は秋蘭が書類仕事とかで、俺が書類仕事のときは秋蘭が出撃と全くと言って良いほど都合

があわないのだ。

こんなんでは秋蘭から悩みを聞くことの前に話をすることすらま  
まならない状態にある。俺としては好きになつた人とずっと話せな  
いのは嫌なわけで、今すぐにでも会いたいところだ。

だからと言って仕事を放り出せるわけもなく、せつせと書類仕事  
をこなしているのだ。

はあ……。秋蘭、早く返ってきてくれないかなあ……。そんなコ  
トを思いながら窓の外をふと見上げる。すると太陽の位置はちょう  
ど真上に来ていた。

つまりは昼時つてコトだ。ちょうどよく腹も減ってきたことだし、  
息抜きついでに街にでも飯を食べに行くか。俺はそう思うと財布を  
ポケットに突っ込み、イスから立ち上がる。

朝から座つて仕事をしてたから、かなり肩が凝つちまつたな、畜  
生。

コン、コン

すると不意に部屋の扉が叩かれた。誰だろうか、と俺は思いなが  
ら扉を開けるとそこには凧、真桜が立っていた。

「って、あれ？ 沙和はどこ行つたんだ？」

そう。いつもであれば三人一組であるはずのコイツ等の中の一人、  
沙和の姿がドコにもなかったのだ。いつもなら真桜&沙和コンビが  
騒がしくやってきて、それに凧が巻き込まれる感じなんだがな……。

「沙和なら秋蘭さまと一緒に出撃していきました」

俺の問いには凧が答えてくれた。

なるほど、秋蘭と一緒に出撃してるんだっいたらココに居るわけないか。夜明け前に出発したから、だいたい今日の真夜中くらいには返ってくるはずだな。

「で、どうしたんだ二人は。鍛錬にでもつきあつてほしいのか？それとも警備の交換か？」

「ちやうよ。てかなんでウチらと会つと仕事関係ばっかなん？」

俺の言葉に真桜がそうツツコミを入れてきた。

ウチら、と言うよりも凧とあつちまうとなんか真面目だから仕事関係のコトかと思つちまうんだよなあ。仮に真桜と沙和だけで部屋に来たんだつたら絶対に仕事関係の話はない。これはもう断言できる。

「隊長……。今なんか変なこと考えんかった？」

「……ナンノコトヤラ」

「目エ逸らしながら言つても説得力ないわ！」

だつて真桜が仕事関係のコトで俺の部屋に来るだなんて思えないからな。もしも仕事関係で来た日じゃあ凧でも起こるんじゃないかねえか？

「んで実際はどうしたんだ？」

「そうやそうや。今、昼休みやから隊長のことをご飯に誘いに来たんや」

「そうだったのか」

まあ、やはりと言うべきか真桜の口から出てきた用事ってのは仕事関係ではなかった。

「私は隊長は仕事をしているかもしれないから、と止めたのですが……。ご迷惑ではなかったですか……？」

風が俺のことを心配そうに見上げてくるんだが、それが何とも俺の心を撥ってくる。

……って待てよ、俺。今は秋蘭の問題が残ってるじゃねえか。仮にも秋蘭とはうっふーん、あっはーんなコトをした仲で両想いだつて言うのに、他の女の子にうつつを抜かしてる場合ではないだろう！？

まだ悩みの解決も出来てないのにトキメいてる場合じゃねえつつつの！！ そんな幻想は俺がぶち殺してやるぞ！！

「まあ、俺も飯食いに行くところだったし、一緒に行こうか」

「さっすが隊長！ 話が分かるやないの！」

「まあな」



この二人には訊きたいことがあるもんでな。一緒に飯も食えて情報を得ることが出来るんなら一石二鳥だろう。

「ところで何食いにいく？」

俺は部屋から出て街に向けて歩きながら、隣を歩いている凧と真桜に訊ねる。

「では麻婆で」

「即答かよ……」

俺が訊ねた途端、まさに間髪を入れずと言う表現が似合いそうなほどに凧が答えてくれた。

もしかしてそこまで麻婆が好きだったりするのか？ 即答してしまっただけに麻婆が好きだったりしてしまうのか？

「実はな、隊長。凧は激辛料理が大好きやねん！」

真桜は勢いよく立ち上がると、凧の後ろから抱きつき、首に腕を回してちょんちょんと指先で頬をつつきながら言う。

真桜のその行動に凧は嫌がる素振りを見せるが、なかなかふりほどけないでいる。

「そうか。んじゃ今日の飯は辛いものにするか」

「はいっ……」

そう返事した風の笑顔は忘れる、と言われても忘れることなどとうてい出来なさそうなほどに、輝いている笑顔だった。

……。……。……。……。

と言うことで俺たち一行は風のオススメの店に来ていた。やってきたのは飲食店の立ち並ぶ一角で、風に案内されたのは一見すれば他の店と変わらないのだが、なかなか人が入っているみたいだった。

料理は見た目では決まらない、と言うがこりゃマジで期待できそうな店だな。そんなコトを思っていると風が、手慣れた様子で空いたテーブルを見つけ腰を下ろした。

俺と真桜もそれに続き席に腰を下ろす。

「らっしゃーい！ 何にしましょー!？」

俺たちが全員腰を落ち着けた頃に、店主がまるで見計らったかのように俺たちがいるテーブルにやってきた。

壁に掛けられたメニューを見てから真桜が言う。

「おっちゃん。うち、麻婆豆腐と炒飯」

真桜続いて風が注文をしたんだが、どうやら俺はここまで風の激辛料理が好きだと言うのを、完全に甘く見ていたらしい……。

「麻婆豆腐、麻婆茄子、回鍋肉、全部大盛り唐辛子ビタビタで」

「……」

凧が頼んだ料理はどれもこれも激辛とまではいかないが、それなりの辛さを誇っている料理だ。それに大盛り唐辛子ビタビタにすると言つのはまさに激辛。

どうやら大食らいには慣れていたつもりだったが、俺の認識はまだまだだったようだ。ふっ、世界は広いな……。

「どうしたんですか？ 隊長」

「……いや、なんでもない。じゃあ俺も麻婆豆腐で」

俺がそう言つと店主はいよいよ、と一言だけ答えて去って行ってしまった。

さて、店主も居なくなつたことだし、料理が来る前にさっさと訊くことを二人に訊いてみるとしますか。

「凧、真桜。二人に訊きたいことがあるんだ」

「訊きたいこと……ですか？」

「なんや隊長に改まられると、緊張するな……」

別段改まつたつもりはなかつたんだが、どうやら知らず知らずのうち我真面目な雰囲気になつてしまつていたようだ。そのせいでさつきまで楽しそうにしていた二人の表情は、緊張しているようになつて変わった。

「まあ、大したことじゃないんだがな。……実は秋蘭についてなんだ」

「秋蘭さまですか？」

「なんや秋蘭さまのことかいな……」

俺がそう言うとは何か安心したような表情になったが、何でなんだよ……。

まさか秋蘭が絡んでくると真面目なコトではないとも思われてたりするのか？

「秋蘭さまがどないしたん？ 隊長と秋蘭さま、喧嘩でもしたんか？」

「喧嘩したってワケじゃないんだが、最近秋蘭と話す機会がなくなかなくてな……」

俺は溜め息混じりで真桜にそう言う。

「で、華琳に聞いたんだが秋蘭、最近元気ないって言ってたんだが何か心当たりないか？」

「確かに隊長の言うとおり最近の秋蘭さまは、どことなく元気がないようでした」

やはりそうだったのか。華琳だけじゃなくて夙までそう言うってコトは、落ち込んでるってのは確実だな。

「心当たらないか言われても、ウチらから秋蘭さまと話す機会はあるまいんやけどな……」

「だよなあ……」

ダメ元で訊いてみたんだが、見事に玉砕したな……。

「そう言えば二日前ほどに、秋蘭さまが隊長の部屋の前に居たようなのですが、何か関係があるのでしょうか？」

二日前って言うところか俺が書類仕事で部屋に籠もってた日のことか？ 確かあの日は俺の部屋に来たのは、掃除をするためにやってきた月と詠。

鍛錬に付き合え、とか言って部屋の戸をぶち壊しやがった春蘭。もちろんそのあと調教致しました。んで最後に恋を探しにきた、ねぐらいのもんか。

なんかよくよく考えてみると仕事が捗らないのって、部屋に来訪者が居すぎるからじゃねえのか？

「それで部屋の前にいた秋蘭は何してたんだ？」

「いえ、特に何もするわけではなかったみたいです。ただ部屋に入るか入らないか迷ってるみたいでした」

「……」

凧の言葉でいよいよもって分からなくなってきたぞ……。何かを

相談するつもりなら、そこで躊躇しないで部屋の中に入ってくれるはずだ。

だが何故入るのを躊躇したんだろうか……。まさか俺の部屋に入りたくないほど、嫌いになっちまったのか……？

「もし秋蘭さまのコトで訊きたいことがあるのでしたら、春蘭さまか沙和に訊いてみたらどうでしょうか？」

「確かにそやね」

凧の言うとおりだな。秋蘭と同室である春蘭も何か聞いてるかもしれないし、秋蘭と一緒に出撃している沙和も何か聞いてるかもしれないな。

ただ、沙和は秋蘭が返ってきてからしか聞けないから、この場合は春蘭に訊くのが妥当だな。

「へいつ！ おまちー！」

そんなコトを話し合っていると先ほど頼んだ料理が運ばれてきた。

まあ、なんと言うか凧が頼んだ『唐辛子ビツタビタ料理』何だが、あれはホントに食べられるものなのか？ と訊ねたくなるような真っ赤な料理……。

豆腐の白が赤一色に染まってるじゃねえかよ……。そしてそれをあたかも当然かのように食べる凧……。

凧さん、あんたパネエよ……。

結局風はアレだけの激辛料理を汗の一つも掻かずに、全部平らげていた。正直あの料理を食べていて舌は大丈夫なのか、と訊ねたくなるほどだった。

そんなコトはさておき、俺は街から戻ってきて春蘭の部屋の前に向かってきていた。理由はもちろん秋蘭のコトを訊くためだ。

「春蘭。居るか？」

「ん？ 龍崎か？ 居るぞ。入ってこい」

どうやら春蘭が居たようで、入って良いと言われたので俺は部屋の中に入る。すると目に入ってきたのは、自らの武器の手入れをしている春蘭の姿だった。

いつもはバカバカ言われているがさすがは武人。自らの武器の手入れは抜かりがないようだ。

「龍崎の方から訪ねてくるなど珍しいな。何かあったのか？」

「ああ。最近、秋蘭が元気ないって聞いてさ。何かあったのかな、と思って」

「ふむ。実は私もそこは気になっていたのだ」

どうやら春蘭の話しによれば、ココ最近部屋にいてもため息ばかり。書類仕事でもミスがかなり目立っているようで、皆心配してい

るらしい。

春蘭が秋蘭に何かあったのか、と訊ねても何でもない、と上の空で答えてくるらしい。明らかに何かがあることは明白のだが、秋蘭は何でもないで押し通しているらしい。

「落ち込んでるとか、そんな感じはするか？」

「いや、落ち込んでいるより、なんと云うか……寂しい、と云うように感じるのだ」

「寂しい？」

寂しいって何が寂しいって言うんだ……。別に誰かが居なくなったりするわけじゃないってのに……。

「うむ。何やら謔言のように龍崎の名を呼んでいたから、もしかしたら龍崎が関係してるのかもしれない」

「俺が関係してる、か」

……まさか秋蘭の寂しいって言うのは。

俺がそこまで考えると、春蘭がいきなり立ち上がり言ってきた。

「このことにお前が関係しているのは間違いないのだ。どうかして、秋蘭を元気づけてやれ」

「……ああ、分かってる。それに原因はもう分かった」



俺の予想が正しいならば、今の秋蘭は俺と同じ感情を抱いているはずだ。そのために元気がなくなっていると言つなれば、今までのことに全て説明が付く。

「なに！？ ならばわたしにも教える！！」

「し、春蘭！？ そ、そんなに揺らすな！？」

春蘭は俺の肩を掴んできたかと思えば、前後に激しく俺を揺らしながらそう言ってきた。んなことされてたら言いたくても言えねえよ、とも言えずに春蘭になすがままにされている。

するとあまりに秋蘭が落ち込んでいる原因が知りたくて夢中になってたのか、足元に置いていた自分の大剣に躓き転びそうになっていた。

とりあえず転んだら大変なことになりそうだと思った俺は、春蘭が転びそうになっている方向と反対方向に押し返す。

後ろはベッドになっているから、大して衝撃はないはずだからな。だがここで問題が発生してしまった。転ぶと咄嗟に判断した春蘭が俺のことをガッチリホールドしていたために、俺までベッドに倒れ込む羽目になってしまったのだ。

俺と春蘭との顔の距離はほぼ無いのに等しい。端から見れば俺が春蘭を押し倒したように見えるだろう。

「き、貴様！！！！いきなり何をするのだ！！！！」

「わ、悪い」

春蘭は顔を真っ赤にさせながらそう言ってきたので、俺が離れようとすると部屋の扉が開かれた。

そしてそちらの方を見ると、そこには信じられないようなものを見るような  
秋蘭が立っていた。

「秋……蘭」

最悪だ。あんな気持ちの春蘭の目の前でこんなのを見せちゃったんだからな……。

「ッ……」

そして秋蘭はぎゅっと拳を握りしめたあと、走って行ってしまった。

「待て、秋蘭……!」

俺はそうとっさに叫ぶのだが、あの状態の秋蘭が止まってくれなわけがなく、俺との距離はだんだんと広がっていくばかりだ。

グラッ……

「うおっ!?!」

俺はいきなり来た目眩のようなものに転びそうになるが、何とか膝をつく程度で治めることが出来た。

「つーかこの目眩って、さっき春蘭に揺さぶられまくったのが原因とかじゃねえだろうな……。ったく、恨むぜ春蘭。まさかこんな状態なんぞにしてくれるなんてな……。って、んなこと言ってる場合じゃねえか。」

「春蘭、秋蘭を追いかけるぞ」

「う、うむ。分かった」

俺は立ち上がりながら春蘭にそう言うと、秋蘭を追いかけ始めた。

だが開きすぎていた秋蘭との差をなかなか埋めることが出来ない。もともと足の速い秋蘭をこのかなりの差で追いかけてるんだから、追いつくまでに時間が掛かるのは当たり前だ。

しかももう城を出て、街へと続く門のところまで行っちまいそうじゃねえか。仕方ねえ、少し反則気味だが今はこいつを使うしかねえな。

そう思った俺は足の裏に氣を集中させていく。そして足の裏に凝縮させていた氣を一気に爆発させて瞬動を使って秋蘭に近づいていく。そしてようやく秋蘭に追いつくことが出来た俺は秋蘭の腕を掴む。

「待てよ秋蘭!!」

「うるさい!! 離せ!!」

秋蘭にしては珍しく叫びながら俺の手を振り解こうとしてくる。だが一回掴んだ秋蘭の腕を離してしまったら、秋蘭はまた逃げ出し

てしまうだろう。

だから秋蘭の腕を今は絶対に離すわけにはいかない。話を聞いてもらうために。すると俺の頬を何か濡らした。それを手で拭いてみるとそれは水のようにだったが、今は雨などは降っていない。

そんなコトを思いながら改めて秋蘭の顔を見て俺は驚いてしまった。

「泣い……てるのか……？ 秋蘭」

俺の頬をぬらした液体の正体。それは秋蘭の瞳から流れ落ちる涙だった。

「泣いてなどおらぬ！ だから手を離すのだ！！」

「……イヤだ」

そんなに涙を流しながら泣いてないって言われても、説得力ねえつつの。

「離せと言うのが分からぬのか！！ 私は貴様の顔など見たくないと言っておるのだ！！」

「……イヤだ。絶対に離さねえ」

俺は涙で顔を歪める秋蘭に向かってそう言う。

「貴様は私などより姉者や他の女の子の方が良いのだろう！？」

秋蘭のその言葉を受けて、俺の心がズキリと痛む。

「私とは話してはくれぬと言うのに他の者とはかり話して……私など、もういらぬのだろうー!」

「……」

俺は秋蘭の言葉を黙って聞き続ける。いつの間にか、秋蘭は抵抗するのをやめて、俺の方に向き直っている。

「要らぬなら面と向かって言えばよいではないか!! なぜ……何も言わぬのだ……。ただ一言……不要だと言ってくれば、こんな思いはしないで済んだのだ!!」

「……言いたいことはそれだけか？」

すべての話を聞き終えた俺は秋蘭に向かって静かにそう問いかける。

「な……に……?」

「言いたいことはそれだけかって訊いてるんだ」

「……」

秋蘭は答えない。俺はそれが答えだと受け取ったあとに、秋蘭を抱き寄せた。

「俺が……秋蘭を要らなくなるわけねえだろ……」

「……」

「ゴメンな……。今まで、寂しい思いをさせて……」

そう。秋蘭が悩んでいた原因はただ単に寂しいってコトだったんだ。さらに言えば嫉妬などの念があり、そのせいで元気がなくなっただと思える。

すべては俺が秋蘭のことが好きだと言いながら、秋蘭をないがしろにしてきたことが原因だ。今回の騒ぎは俺のせいだ。

「……怖かったのだ」

「何がだ？」

俺は涙で声を震わせている秋蘭に優しく問いかける。

「龍崎に……嫌われたかと思ったのだ……」

「そうか」

俺はそう言いながらクスツと笑う。

「な、何がおかしいのだ！！／／／／／」

「いや、あまりにも秋蘭が可愛くてな。……安心しろ。俺が秋蘭の口トを嫌いになるときなんかねえよ」

「……本当だな」

「ああ、本当だ」

俺はそう言いながら秋蘭を力強く抱きしめる。

優しい女の子。甘えん坊で、怖がりな女の子を俺は改めて守りたいと思った。

こうして一つの騒動は終焉を迎えるのだ。

「桜牙」

迎えるはずだったのだが、突如として俺の背後よりとある人物の  
声が聞こえてきた。

しかもそれと一緒に複数の殺気も感じるのだが、これはどうい  
うコトだ……。と俺は思いながらギギギ、と首だけを動かして後ろを  
見る。

するとそこには素晴らしい笑顔の　華琳と愉快的仲間達が居  
た。

「桜牙。前に言ったわよね？　秋蘭を泣かせないようにしなさい、  
と」

華琳はそう言いながらドロコから取り出したかは分からないが、い  
つもの鎌を構えてきた。

しかも後ろに構えていた恋、ねね、紅葉、春蘭、霞と言った面々  
も武器を構えている。春蘭だけは済まない、と言うジェスチャーを  
してくれていた。

「……泣かせたら？」

「分かっているでしょう？」

華琳はそう言つと俺に鎌を全力で振るってきた。

やっぱりそうなるのかよ！？ ええい、こうなったら全力で逃げるしかないよな！！ 俺はそんなコトを思いながら秋蘭をお姫様抱っこする。

「り、龍崎！？／／／／／」

「逃げるぜ、秋蘭！！」

俺はそう叫びながら虚空瞬動を使い、城の頂上に逃げていく。

そして俺は逃げる途中で秋蘭に言う。

「秋蘭、愛してるぞ」

「う、うむ……私もだ／／／／／」

こうして月夜に照らされながら、一つの騒動は幕を閉じるのだった。





第五拾弐話 『秋蘭の心配事』涙の理由』（後書き）

最近ネギま！ブームが再来してきました……。

もしかしたらこっちを一時停止してネギま！を書くかもしれないが、とりあえず2月一杯は続けます！

まあ、2月以降も続けますがね。

感想待ってます！

第五拾参話 『華琳の気持ち』理不尽な物言いの裏には……』

side 桜牙

現在、俺は鍛錬をしているわけでも書類仕事をしているわけでもない。庭にて流琉と季衣と一緒にいる。

テーブルの上に置かれた皿からは香ばしい匂いが漂ってくる。キツネ色に焼き上げられた、手の平にすっぽりと収まるサイズのお菓子。クッキーが乗せられていた。

「だいたあ兄様のお話通りに作ってはみたんですが、こんな感じで合ってますか？」

そう。俺は流琉にクッキーの話をしたら作りたいたいと言ってきたので、試しに作り方を教えたのだ。

「完璧だ。俺の世界でもここまで美味そうなのは作れないな」

「なら良かったです。どうぞ、冷めないうちに試してみてくださいさい」

「では、いただくとしよう」

「いただきますーす！」

と言うことで俺と季衣がテーブルの上に置かれているクッキーにスツと手を伸ばした。

「お？　なんかええ匂いしと思うたら……」

するとそこに霞がやってきた。しかも後ろから春蘭と秋蘭が来たというコトは、まだ勤務中と言ったところだろうか。

そんでなんやかんやで秋蘭達も休憩がてらに流琉が作ったクッキーを食べることとなったらしい。まあ、量はかなりあるから少しぐらい人数が増えたとしても大丈夫だろう。

んで俺がそんなコトを考えていると、背中に突き刺さるような視線を二つほど感じる訳なんだが、この気配は多分あの二人だろうな……。

「恋、ねね。お前等も食べるか？」

俺が後ろの茂みにそう言うと茂みがガサガサ、と揺れてそこから恋とねねが出てきた。予想外なコトに二人の他に動物が数匹出てきた。

「……………いいの？」

「……………流琉、大丈夫だよな？」

「はい、季衣がたくさん食べると思いましたし、恋さんも来ると思いましたのでたくさん作っておきました！」

流琉の言うとおり何故かクッキーは三人で食べるにはかなりの量があった。なるほど、そう言うところまで考えてこの量を作ったというコトか。

そこまで話をしたあと俺達はテーブルの周りに集まった。

「では改めて……」

「いただきまーす!」

俺が言うよりも早く季衣がそう言うと、クッキーを食べ始めた。皆もそれに続きクッキーを食べ始めたので、俺もクッキーを食べ始める。

白砂糖のない世界だから甘さは少しばかり薄かったが、糖分控えめのクッキーだと思えばその再現度は限りなく完璧だ。

「腕を上げたな、流琉」

そしてそんなクッキーを食べた秋蘭は流琉にそう言う。

「そ、そうですか？ あ、その……えっと、ありがとうございます」

「わーい。流琉、照れてやんのー」

照れている流琉を季衣が茶化している。まあ、仲良くしているのはとても良いことなんだが、目の前ではスゴイ光景が写っている。

「恋……。えっと、美味しいか？」

「……………」

恋はクッキーをかき込むように食べながら、律儀にも頷いてくる。ただ、食べているのを見ると胸やけしそうになるのが難点だな。

そんなコトを考えていると、何故か後ろでいきなりドンパチやり始めていた。つーか怪力の二人がこんなところでドンパチやり始めたら、クッキーが大変なことに……ならないように守りますか。

「で、霞。なんでドンパチやっちゃってるわけ？」

「それはやな、流琉が愛しの秋蘭に部屋においでー、って言われたらどないするって話しやったんけど……」

「ようするに照れた流琉を季衣がからかってこうなった、と」

俺はクッキーをつまみながら話をまとめる。まあ、あれは照れ隠しのつもりなんだろうが、もう少し穏便にやってもらいたいんだがな。

やらないに越したことはないんだが、あの二人だとやるんってのは無理があるよな……。

……ってなんか客観的に考えてしまっている訳なんだが、このままだと庭の草木に多大なダメージが施されてしまうわけで、それを直すための経費をドコから出すかと言えば資金からで、それを管理しているのは俺……。

つまりはこの争いによって俺の仕事が次々に増えていくことに繋がるのですコトよ。……って止めた方がよくな？

「止めた方が良いのではないですか？」

そんなコトを考えていると、恋と一緒にクッキーを頬張っているねねがそう言ってきた。

なんと言うか恋も恋だがねねも食べてる姿が可愛いなー、なんちやって。

「まあ、止めた方が良さんだけど、あれん中に入っていく勇氣は俺にはねえ」

「ふん、情けないにもほどがあるのですー！」

「はいはい、どうせ俺にはそんな勇氣はありませんよ。つーか頬についてるぞ」

俺はため息混じりでねねに頬についているクッキーのコトを言うんだが、よくあるパターンで顔を手でペタペタと触っている。もちろんお決まりのパターンで、クッキーがついている場所には手が当たってない。

「ここだっつうの」

俺はそう言いながらねねの頬についているクッキーを取り、自分の口に運んでいく。

「な、なな、何をやってるですかー！ーっ！！／／／／／／／／」

するとねねが何やら顔を真っ赤にしながら、俺に向かってそう叫んできた。

「何って、クッキーの零れかす取って食っただけだが？」

「むむむ、気づいてないのが余計に質が悪いのです……」

「よく分からんがもうちょい落ち着いて食え」

俺はそう言いながらじゃれている二人に目を向ける。

あの一件以来、女絡みで秋蘭が殺気を送ってきたりはしなくなつた。どうやらあの一件で俺のことをさらに信頼してくれたようで、多少のことでは動じなくなっていた。

すると恋が俺の外套を引っ張ってきた。何事かと思いつながら恋を見ると、何やら恋がこつちをジーツと見つめてきていた。

「……………」

「……………」

「……………」

何をすれば良いか分からないまま見つめ合うこと数秒間。ねねもよく分かってないのか、次の恋の行動に注目している。

「……………あ。もしかしてこう言うことか……………？」

俺はそう呟きながら恋の頬についているクッキーのかすを取って、口に運ぶ。

「……………（パアアア）」



すると恋の表情が嬉しさでかは分らないが、かなり輝き始めた。まさかこれをやってもらいたかったのか？

よくは分らんが、これをやって嬉しそうな表情をしているってコトは、そう言うことなんだろう。

「……何をやっているの、あなた達」

「龍崎の国の菓子を流琉に話して作ってもらったとか」

「……そう。なら一つ頂こうかしら」

そんなコトをしていると、騒ぎを嗅ぎつけたのか華琳がやってきた。だが相変わらずあの二人を止める様子はなく、むしろ気にとめていないと言った表情で秋蘭達と話をしている。

こんなことをどうこうしてる間にも、あの二人のバトルはますますヒートアップしており立木が飛ぶやら何やらで大変なコトになっている。

大切なことだからもう一回だけ言うが、この後始末は俺がやらなければならぬと言っていることを覚えておいてほしい。

「季衣のばかああああああ！ もうお菓子作ってあげないんだからあああ！！」

「なんだとう！ そんなコトさせるもんかあっ！！」

……コレって話題的にはズレてるような、ズレてないような感じ

なんだがもう少し静かにやってもらえないだろうか……。

さっきから軌道が逸れた季衣の鉄球しかり、流琉のヨーヨー（？）しかりとこっちに向かってきている。もはや狙ってるんじゃないかと思えるほどだ。

それを弾かないとクッキーがただのミンチになっちまうから防がないといけないんだが、少しぐらい自重しろよ、この野郎。

「あー。お腹空いたー！」

するとようやくじゃれ合いが終わったのか、手に持っていた武器を地面に落としていた。どちらの武器もかなりの重さのため、地面に落としたときにドシン、と鈍い音を立てている。

しかもどちらも華琳が来たことに気づいていなかったらしく、華琳の存在に気づいた二人は華琳と何かを話している。まあ、大したことじゃないはずなので割合。

「疲れたー！ 兄ちゃん、ちょっと座らせてねー。よいしょっと」

季衣はそう言いながら俺の膝の上に座って来やがった。

「ん？ ああ……構わん」

俺は季衣を膝の上に座らせることを秋蘭に目で訊ねてから言う。秋蘭が頷いたことから、俺は季衣を膝の上に座らせた。

すると霞が俺に話しかけてきた。

「なあ、桜牙。昨日、夕飯食べたあの店、なんて言ったかな……」

「ん？ ああ、あのラーメン屋か？ あそこがどうかしたのか？」

「あそこごつつ上手かったやろ？ 今度の警邏の帰りにまた寄らへん？」

「まあ、別に構わんが」

確かに霞の言ったとおりあの店のラーメンはかなり美味かったな。流琉の料理には至らないものの、街で働いている料理人からしたらかなりの腕前だろうな。

「今度は桜牙の奢りでな」

「アホか！？ ただでさえ恋とかの食費で金掛かるのに、奢れるかよー！？」

霞の食費は恋ほどじゃないにしても金が掛かることには変わらない。むしろこういう場合は節約したほうが良いんだよ。

「……桜牙」

すると華琳が俺の名前を不意に呼んできた。つーか何故か華琳から覇気(？)みたいなを感じるんだが、気のせいだろうか……。

「昨日は、霞と一緒に夕飯を食べたの？」

「霞だけじゃなくて凧達も一緒だったがな」

警備隊の隊舎に遊びに来て、そのあとで沙和も連れてみんなで夕飯で食べに行った。途中で大食らいの紅葉も混じってきたから、大して俺は食えなかったんだけどなあ……。

とにかくいつも通りのたわいもない日常だった。

「それから……その膝の上は何？」

華琳が俺の膝の上に乗っている季衣を見ながら言う。

「季衣がどうかしたのか？」

なんか居心地が良いとかなんとかでたまに乗っかってくる。これも別に珍しいことではなく、食事の時とかも乗ってきたりする。

「ん？ 季衣、行儀悪いから降りような」

「えー。仕方ないなあ……」

季衣はそう言いながら俺の膝から降りる。とりあえず華琳が言いかけたのってこういうことなんだろう……って違うのか？

なんか華琳の表情がいつにもなく険しいんだが……。

「桜牙。ちょっと来なさい」

「あ？ これ食ってからじゃダメなのか？」

「良いから来なさい……」

「ちよつ！？ 待つ！？ 痛たたたたたつ！？」

華琳はなんか怒ったように俺の耳を引っ張りながら、どこかに向かつていった。

何なんだ今日の華琳は……。

華琳に耳を引っ張られながらやってきたのは玉座の間だった。広間を抜け、階段を上がり一番上まで来たところで、ようやく耳の痛みが消えた。

まだ耳が聞こえることから何ともなっていない（吸血鬼だから大丈夫だけど……）がかなりジンジンする。

「で、こんなとこまで連れてきてどうしたいわけ？」

「桜牙……。そこに座りなさい」

そう言って華琳が指さしたのは魏の玉座。この椅子一つ守るために華琳が……そしてこの国と春蘭たちがどれだけの犠牲を払ってきたか、俺はその身を持って体験している。

戦場に立ち、霸王に仇なす者を俺たちは全て切り捨ててきたのだから。そんな場所に座れと言われても素直に座れるはずがない否、座ることは許されないのだ。

「早く座りなさい」

「断る。そこに座することは俺には許されない。分からないとでも思っているのか？」

「良いから座りなさい！！ 私の命令が聞けないって言うの!？」

ギリツ、と俺は思わず強く歯軋りをしてしまう。

「ふざけるな。そこに座れるわけがねえだろうが！！ 何考えてんだ!！」

「良いから！！ 早く座りなさい！！ 何度言わせれば気が済むの!！」

「……お前、変だぞ」

俺は華琳にそう言いながら仕方なくそこに腰を下ろす。華琳のためだけに作られたそれは、俺には少しばかり小さかった。

しかも長い間座っていても疲れないように、しっかりとクッションが効いていた。

「桜牙。さつきあなた、この座につくのは許されなかったわね？ それは何故かしら？」

「……んなもん魏の王である華琳のための席だからに決まってるだろ」

「なら、どうしてあなたは座っているの？」

華琳は自ら俺をこの席に無理やり座らせてきたにも関わらず、俺

にそう問いかけてきた。その華琳の瞳は真っ直ぐに、まるで俺を睨みつけるかのように見据えている。

そんな華琳からは王としての霸王としての威圧感を感じるほどだった。

「お前が無理やり座らせてきたからだろうが」

「私の臣なら、何があっても断るべきだったはずよね。そうではなくて？」

「……」

こいつはマジで何を言ってるやがんだ。自分から座れとか言ってるながら、座ったら座ったで理不尽なことを言いつけて来やがる。

今日の華琳はいつもと何かが違う。言うことがメチャクチャで、筋が通っていない。

「何があるのと突っぱねるなり、舌を噛みきったり、自害するなり、出来ることは他にあったはずよね？ 違うかしら？」

「……」

ここまで理不尽な物言いをされたことがないだけに、何を言えば良いかさっぱり分からん。

「……あなた、自分が何様になったつもり？」

「あア？」

「秋蘭や恋を侍らせて、季衣を膝の上に乗せて……後宮の王にでもなったつもり何じゃないの？」

……もう我慢の限界だ。

そう思った俺は華琳を睨みつけながら言う。

「おい、華琳……いや曹操。貴様は何を言っているんだ」

「な、何よ……」

俺が本気の殺気を華琳にぶつけながらそう言うと、華琳はわずかに後退しながら言う。

「俺がこの座に座ったのは許されることではないだろう。しかし、なんだ貴様の言葉は。理不尽にもほどがあるだろう」

「……」

「何をそこまで苛立っている。理由もなしにそこまで言われるのであれば、キレルぞ？」

「………何よ」

「あア？」

華琳は何かをボソツと呟いたが、今の半ギレの俺にとってはイライラをためるだけの言葉にしかならないわけで、案の定キレたような口調になりながら華琳に訊ねてしまった。



「何よ何よ何よ!!」

華琳はそう叫びながらパンツ、と玉座の肘置きに手を叩きつけながら言う。目の前にあるのは華琳の顔で俺の両手は玉座の肘置きに押しつけられてしまい、動かすことも出来そうにない。

それに今の華琳の姿は今までで一度も見ることがない。

「どうして気づいてくれないの!? 私は……私はあなたのこと  
が……」

「……俺のことが?」

なんかこのパターン以前に体験したことがあるような気がするんだが、気のせいだろうか……。

「……………なのよ」

もうココまで来れば鈍感と言われ続けてきた俺でさえわかる。

ようするに今の華琳は以前の秋蘭とは少しばかり違うが、同じようなものなんだろうな。そう思った俺は端から見れば絶対にサディスティックな笑みを浮かべながら言う。

「何だつて? 聞こえないな」

「あなたが……好きなのよ」

改めて言われるとなんだがむず痒いな……。よくよく考えてみる

と、俺には秋蘭が居るわけでそんなコトを言われてもどう答えれば良いか分からない。

そこまで考えると不意に俺の唇に柔らかい何かに押さえつけられた。俺の唇を押さえつけたのが華琳の唇だったことに気づいたのは数秒と掛からなかった。

「か、かり……ン……っ!？」

ようやく唇を離してくれたので何をやってんだ、と訊ねようとするが再び唇が塞がれる。しかも華琳の舌が俺の唇を割って入ってこようとする。

マズい。これ以上やってしまえば、秋蘭や霞のように華琳にも魔力が発現してしまうかもしれない。そうなれば制御の方法を教え込まなければならなくなる……。

そして華琳は華琳を受け入れない俺に対して、怪訝そうな表情を浮かべながら言う。

「何よ、桜牙……。秋蘭は受け入れられて、私は受け入れられないというの?？」

「いや、なんと言うか……。いろいろあるっつつか……。」

「いいわけをしない」

「ン!？」

華琳はそう言うつと無理やり自らの舌を俺の舌と絡ませてこようとする。

する……つて秋蘭!?

秋蘭が扉越しにこちらを見てらっしやるんですけど!?! ヤバい  
つてこれはさすがにあとで殺されちま……え? 受け入れてやれっ  
て?

えっと……まあ、別に魔力が発現しても困るつつうことはないし、  
あとで秋蘭たちと一緒に制御の仕方教えれば問題ない、よな?

そう思った俺はいきなり華琳の誘いに乗り舌を絡める。もちろん  
秋蘭と色々やつて培ってきたテクニクを使つてだ。

「……ちやう……っ、んふ……っ。……んちゃ……ぶはっ……」

「さて、どうかな? 俺の唇は」

俺はいたずらじみた笑みを浮かべながら言うんだが、華琳の様子  
がおかしい。なにやら支えを使つて立っているのがやっとなばかり  
に足が震えていた。

……俺のDSな心をくすぐるようなその行動……。誘ってるんで  
すかア? そんなコトを思いながら華琳の手を離させる。

「ちよっ!?!? 桜牙!?!?」

華琳はやはり俺の予想通り手を離させた途端へタレ込むように座  
り込んでしまった。

俺はそんな華琳に視線を合わせるようにしやがみながら言う。

「いかがでしたかな？ 我が主のために全身全霊を尽くしました」

「お、桜牙……。これを秋蘭にやったと言っの……？」

「まあね。最近じゃあ秋蘭、結構耐えるぜ？」

「……どつりで最近反応が悪くなったと思ったわ……」

反応が悪くなったと言っより、俺ので耐性がついたって言っ方が適切のような気がするんだが、まあ良いだろう。

「立てるか？」

「誰のせいで立てないと思ってるの……？」

「悪いな。さっきの言葉にちつとばかり苛ついたもんでな。ついいじめちまったよ」

俺はそう言っつと華琳をお姫様抱っつこで抱きかかえる。

「な、何をしているのよ！？／＼／＼／＼／＼」

「今さら恥ずかしがることもないだろ？ 動けないんだったら俺が部屋まで連れてっつてやる」

さっきのお返しだぜ、と意地の悪そうな笑みを華琳に向けながらそう付け足す。

そして俺は華琳の部屋に向けて足を進めるのだった。ちなみに部屋の外にいた魏の面々は俺たちが部屋から出てくると、全員が全員

揃って赤面していたのは言うまでもない。

ちなみに余談になるが、この騒ぎにより俺は魏の面々に『接吻魔<sup>キス</sup>』と呼ばれることになるとは知る由もなかった。

第五拾四話『恋の甘えく安らげる場所』

side 桜牙

「あんた……。自分のやったこと、分かってるの？」

「……すみません」

俺は只今現在進行形で桂花より『O H A N A S H I 』中  
でございませす。いつもの俺であれば桂花なんぞに屈伏したりするわ  
けではないのだが、今回は俺が完全に悪いために素直に説教を聞い  
ている。

「あんたがサボればサボるほど仕事がたまっていくの。分かって  
るの？ コレだから男ってのはグズで能無しで、年中いやらしい妄  
想してるだけの役立たずなのよ」

途中からはテメエの男に対する嫌みでしかない訳なんだが、今の  
俺に反論出来るかと言えば出来ないと言うわけで、黙って桂花の説  
教、もとい嫌みを聞いている。

まあ、ずっと桂花の嫌みを聞いているのも良いんだが、読書様みんか  
らしたらそんなものは聞きたくはないと思うので、とりあえずここ  
数日の出来事をダイジェストでお送りさせてもらおう。

とりあえず一日目、秋蘭との喧嘩みたいのがあってから久しぶり  
に俺と秋蘭の休みの日が重なったので街でデートをした。夜に何が  
あったかはご想像にお任せしましょう。

二日目、春蘭や霞や凧、紅葉などと言ったメンバーと鍛錬をしてたんだが、いつの間にか武道大会が開催されていたらしく、朝から夜まで戦い尽くしだった。ちなみに俺が一回も負けなかったのは言うまでもない。

三日目、前の日の武道大会により凄まじい眠気が襲ってきたために一日中爆睡。

四日目、任務が入ったために少し遠くまで遠征したために朝から夜までの時間がなくなる。帰ってきてからももちろん爆睡。

五日目、昼間で爆睡したのちに何故か霞と酒盛りをすることになってしまい結局仕事をする事が出来なかった。

と、今までのダイジェストで分かってもらえたかと思うが、ここ数日は書類仕事を全くやっていなかったために、書類仕事がたまってしまったのだ。

もちろん俺が普段こなしている書類仕事の量は他の者と比べれば、かなり違うために俺がサボったような日じゃあ書類仕事が軍師勢に回っていく。確かにそれが一日ぐらいなら大したことはないんだが、それが多くなると軍師勢も耐えきれなくなるわけで……こうして怒られているわけだ。

自業自得だから仕方ないんだけど、さすがに正座をしながら小一時間桂花の説教を聞いているのは、肉体面でも精神面でもかなり厳しいわけで、メチャクチャげんがりしてしまっているわけよ。

「ちよつとあんた聞いているの!？」

「聞いてますよ。そう怒鳴りなさんな、老けるぞ」

「うるさいわね!! 誰のせいで怒鳴ってると思ってるのよ!？」

あー、桂花の甲高い声が俺の耳の至近距離で発せられて鼓膜が破裂しそうですよ。コトよ。

「桂花。ようするに書類仕事すりゃ良いんだろ？ 分かったからさっさと帰ってください」

日本式で最上級の頼み方であり礼儀である土下座をしながら俺は言う。

ふっ、今の俺にとって土下座など大したことはないのだ。桂花の嫌みを切り抜けるためには、これぐらいしなければならぬからな。

「ふん。私だつてあなたの顔なんか見たくないけど、華琳さまに言われてるから仕方ないのよ」

「……際ですか」

桂花が来るのはおかしいとは思ってたが、まさか華琳直属の命令だったとはな。これなら男嫌いの桂花でも行かざるを得なくなつたというコトか……。

そんなやりとりをしていると、わずかに開いた部屋の扉からピョコとこちらを覗いているのが目に入った。今更ながら桂花が嫌みを言い散らしている場所は俺の部屋だったりする。

そして俺の視線に気づいた桂花がそちらを見たあとに、額に青筋



を浮かべながら言ってきた。

「あんた……本当にどうしようもない役立たずね。今日もサボろうとしてたなんてね……」

「待て桂花。今日は真面目に仕事する予定だった。……あくまで予定だが」

「じゃあなんで恋が迎えに来てるのかしら？」

そう。わずかに開いた扉からこちらを覗いているのは恋だった。何用かは分からないが、恋が俺の部屋に訊ねてくるなんて珍しいこともあるもんだ。

「悪いが心当たりはないな」

これは本当だ。昨日は別に誰かと一緒に過ごす、とか言う予定を立てたわけではなくさつきも言ったように仕事をする予定だけは立っていたのだ。

もう一回言うが予定だけなので、実際にやるかは分からなかったけどな。まあ、桂花が来た時点で仕事をやることが決定してるから予定じゃなくて、もはや決定事項になっちまってるがな。

さて、無駄は話はさておき。現在の問題は何故恋が俺の部屋にきたかと言うことだ。いつもならねねが俺の部屋に恋を探しに来るが、実際にはねねが思うほど恋は俺の部屋には来ていない。

来的时候はせいぜい重要な話がある時だったりするので、何もないう日に来るのは珍しいのだ。

「それで恋。何しに来たんだ？」

俺は額に青筋を浮かべピクピクとさせながら、分かりやすく怒っているというコトを恋にアピールしている桂花を横目で見ながら言う。

「……………」

イマイチ感情が読めないいつもの目つきで室内を見回す。

「……………とりたてて用はない」

「嘘だー!!」

俺は思わず某Kさんのようなセリフを叫んでしまう。

「……………（フルフルツ）」

まるで野生動物のような動物的直感で何か不吉なものを感じ取ったのか、頑なな否定だった。

「用もなくアナタがこいつの部屋に来るわけ無いでしょう。大方、こいつと遊びにでも行こうとしたんでしょう？」

「……………（コクン）」

恋はたっぷりと時間をかけて考えた後に首を一回だけ縦に振る。恋は基本的に素直なのだ。故に訊ねられた質問に嘘の答えを言うような機転を利かせられるはずもなく、素直に頷くしかないのだ。

だけどそこが恋の良いところなんだよなあ。なんか見てると癒されるし……。

「ダメよ。こいつは今日はいえ、まる二日は働いてもらわないといけないの。誘うならまた今度にしなさい」

「……………仕事が終わるまで、待ってる」

恋はわずかに頬を膨らませながら俺の部屋に入ってくると、部屋の隅までトコトコと歩いて膝を抱えて座り込んでしまった。何ともいじめられた子供がやりそうなポーズだな……………。

「っーか恋さん、あなたは桂花の話しちゃんと聞いていましたでございますか？ 桂花はまる二日は仕事をやらせるって言ったんですよ？ つまりは仕事が終わるのは二日後になるわけで、それまで部屋に居られても俺が困るんだが……………。

「（ちよつとあんた。何とかしなさいよ）」

するとそんな恋を見かねたのか、桂花が俺に小声でそんなコトを言ってきた。

「（何とかしろって言われてもな……………）」

あの状態の恋だったら確実に仕事が終わるまで居続けそうだな……………。説得なんかしても無駄そうだし……………。

「（女たらしなんだからなんとかしなさいよ！！）」

「（女たらしじゃねえよ）」

たらしって言うが俺に行為を寄せてくれてるのは秋蘭と華琳と霞ぐらいのもんだが、別にたらしたってわけじゃないんだが……。まあそこところは今はどうでもいいわけで、恋をどうするかって話だ。

仕事が片づかねえんだったら恋の相手をしてやることなんざ出来るわけねえし、仕事をしながら相手をしてやれって言われてもそしたら仕事が捗らなくなる。

「はあ……。なあ、仕事っていつまでやりゃいいんだ？」

「そんなの期限までに決まってるじゃない！！」

なるほど期限までね。ようは期限までに終わらせればそれまでの行程はどうであれ、どうでも良いって話だ。

「分かった。期限は明後日までで構わないな？」

「華琳さまからはそう言われてるわ」

「なら決まりだ。今日は遊ばせてもらおう」

俺がそう言うのと桂花が驚いたような顔をしていたが、後にニヤリとしやがった。おそらくは遊んで期限までに間に合わなくなって、華琳に怒られればいいんだとも思ってるんだらうな。

だがあいにくと俺の作業スピードは他の者に比べれば、かなりの速さで出来るんだよ。本気を出せば二日分の書類仕事なんか半日で

出来るんだよ。

そんなコトを思っているウチに桂花は俺に与えられた書類を全部俺の机に置いていくと、去って行ってしまった。

「じゃあ遊びに行くか、恋」

「……………」（コクン）

俺は恋にそう言つと街に向かつていった。

それは良かったんだが……………なんで俺の手に抱きついてるんだろうか？

「……………」

「……………モぐ」

街に来てから一時間ほど経つたんだが、まさかここまで恋がスゴいとは……………俺は今までの恋を侮っていたのかもしれない否、侮っていたな。これは断言できる。

何故かって？ そりゃ隣にいる恋が手一杯に街の人からもらった肉まんやら桃まんやらを食べまくってるからさ。しかも食べでも食べても街の人からおすそ分け（？）的なものをもらっているために、ぜんぜん減らない。

まあせめてもの救いがコレだけの食べ物を買いながらも、誰一人

として金を受け取らなかつたことだ。もしも金がとられたりしたら、今頃俺の財布は空になっているだろう。

それにしても恋は歩いてるだけで幸せをまき散らしてるな。俺も幸せだ。

「美味いか？ 恋」

「……………（コクン）」

「そうかそうか」

俺はそう言いながら思わず恋の頭を撫でてみる。

「……………／／／／／……………食べる？／／／／／」

すると何故か恋が顔を赤くしながら、俺に食べかけの肉まんを差し出してきた。恋の歯型が肉まんにくつきりつついていたが、恋は気にしてる様子はない。

「ありがとう。……………うまっ!？」

俺は恋から受け取った肉まんを食べたあとに思わず叫んでしまった。

でも何なんだろうな。なんか食べたコトがあるんだが、なんかよく分からない食感だな……………。

「ん？ 具は何なんだ？」

「……たけのこが、入っている」

「おおー!! たけのこかー!!」

食ったことがあるような食感だと思ったらたけのこだったか。

「……………これは完成品。この肉まんには足りないところがない」

「そうか。じゃあまた食べに来ような」

「……………」

俺がそう言っていると恋は何かを確かめてくるような表情をしながら、俺を見つめてくる。ん〜？ 何を確かめたいんだ？

「……………二人で？」

「ん？ ああ。二人でも構わないよ」

「……………（パアアア）」

俺がそう言っていると恋の表情が一気に明るくなった。いやあ、こりゃマジで癒されるわ。

……………このあとに書類仕事なければ最高だったんだけどなあ……………。

楽しい時間ほど早く過ぎると言うが、それは間違っではないだろ。今日の太陽は急ぎすぎだと俺は思う。

そして俺と恋はちょうど街が見渡せる場所にある山に来ていた。  
俺は街を見ながらつぶやく。

「にしても賑やかになつたもんだ」

俺が来たときはここまで賑やかではなかった。俺達が戦つていくうちに街も比例して賑やかになっていつていた。

「……………それは桜牙が、頑張つてるから」

恋は俺の隣に座り、俺の体にぴったりと体を合わせながらそういう。体が合わさっていることにより、女の子特有の良い香りや柔らかさが伝わってくる。

ただそれも俺の顔を撫でる風と同じで心地よいものだ。

「別に俺だけの力じゃないさ。華琳や春蘭やみんなの力があつたからこうなつたんだ」

「……………でも、桜牙のおかげでもある。桜牙はえらい」

そう言いながら何故か恋は俺の頭を撫でてくる。頭撫でられるのなんか何百年ぶりだろうな……………。

「恋も、ねねも……………本当だつたら斬られてる」

そう言った恋の背中はいつになく小さく見えた。そして恋は俺の手をそつと握ってくる。その手はどこか怯えているようにも思える。



「……そうだな。戦争するのはそう言うもんだ」

だけど、と俺は付け足しながら言葉を紡いでいく。

「俺は違つと思う。俺と恋が分かり合えたように、分かり合えるもんだ」

華琳が今の俺の言葉を聞いたら、なんて言うだろうな。甘いと切り捨てるだろうか、それともそんな理想論無理だと鼻で笑ってくるかな。

まあ、どっちにしても俺の考えは劉備みたいな考え方だな。だが俺の考えは考えだ。誰にも反論はさせねえよ。

「……………桜牙と恋」

「ああ、でも恋だけじゃない。月や詠、霞だつてみんな分かり合えた」

俺はそう言いながら恋が握ってきた手を改めて握り返す。

「なあ、恋。みんなが仲良く暮らせる世界が作れたらいいな」

「……………（コクン）」

俺が恋が頷いたのを見ると思わず微笑んでしまう。みんなが仲良く暮らせる世界、か。自分で言っておいて嫌気がさしてくるな。

だが、それを目指して奮闘するってのも悪くはないがな。つーかこれだつたら劉備のところにも落ちてても良かったかな。

俺はそんなもしもの口トを考えてしまう。だが、俺のこの世界での今までの経験から推測するとこの世界は……創られたものだと分かる。

だからこそもしものことを考えることが出来る。そう言えば創られたこの世界の行く末はどうなるんだろうな。全てが終わったあとみんなはどうなるんだろうな……。

ドクン……

終わったらこの世界も終わるのか？ いつぞやの占い師も言ってたな。この物語は終わらないはずだったって……。

ドクン……

終わったら俺は消えるのか？ みんなも消えちまうのか？

ドクン……

そんな関係のないことを俺が考えていると、ぴったりとくっついていた恋の体から重みを感じた。そちらの方を向いてみれば、恋の頭が俺の肩に乗せられ恋は目を瞑っていた。

「……桜牙の近く、なんだか落ち着く」

「そうか？」

「……月もみんな言ってる。なんだか、落ち着く」

……俺からは動物が好むような匂いでも発せられてるんだろうか  
……。良い匂いと言うよりも、むしろ汗くさいと思うんだけどな。

確か俺が風呂に入ったのは五日くらい前で、その間はなんやかんやで汗臭くなる。女の子からしたら汗臭いなんてのは嫌なんじゃないのか？ あつ、そう言えば今日風呂の日じゃねえか。帰ったら入るか、みんなが入る前か入った後に。

そんなコトを思っていると隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。そちらを見てみれば恋が俺に寄りかかりながら眠っていた。つたく、なんて嬉しそうな顔して眠ってたんだか。

「やれやれ、仕方ない奴だな……」

俺はそう呟きながら恋を背負うと、城に向かって歩き出した。決して背中当たる二つのメロンを堪能してたとかじゃないんだからな！！

城に帰ってきてからの俺の作業は実に早かった。まず恋を恋の部屋に運んだ。そのときにねねが何か言ってきたが、それを全部スルーしてそのまま部屋に戻る。大方恋とどこに行ってたんだって聞きたかったんだろうな。

で、部屋に帰ってきたら呼んで時の如し書類の山と格闘だ。なんか適当に出来ない案件が無駄に回ってきてたんだが、こいつは桂金の差し金か？ とにかくかなり大変だ。

まだ山の一つしか片すことが出来てない。あと山は一、二、三……

…ああーっ！！ もう数えるのも馬鹿らしい！！ はあ……… やっぱ  
り恋と遊んでないで書類仕事をしてれば良かったか……。

くそう、桂花の勝ち誇った顔が目には浮かぶようだ……… ってマジで  
出てくんじゃねえよ！！ はあ……… もうダメ。風呂でも入ってリフ  
レッシュしよう。もう遅いから全員入ってるだろうしな。

俺はそんなコトを思いながら風呂に向かうための廊下を歩く。外  
を見るとすでに月が俺を見下ろしていた。やれやれ、帰ってきてか  
らだいぶ時間が経つちまったみたいだな。

そんなコトを思っているとすでに風呂場に到着した。服を脱ぎ、  
早速湯船につかる。

「あ………。やっぱり日本人は風呂だよなあ……。あれ？ 俺って  
日本人？」

前世（前世と言っても良いのか微妙なところだが………）じゃ一応  
魔法世界出身だったからな。初めっから魔獣の森だったしな。まあ、  
前々世は日本人だったからな日本人で構わないよな………。

それにしても一人で入るには無駄に広い風呂だな……。露天風呂  
くらいの大きさはあるぞ。しかも背中ゴツゴツしてるし……。と、  
俺が風呂を堪能しながらそんなコトを考えると、風呂場の扉が  
開け放たれた。

誰だ、こんな時間に入ろうとする奴は……。俺はそう思ってたん  
だがよくよく考えてみると、この城にいる男は俺と空だけ。確か空  
は遠征あるって言ってたから、必然的に入ってきたのは女の子……。

……マズくね？ 秋蘭だったら別に構わない（それで良いのか、俺……）が他の女の子だったら非常に気まずいぞ。そう思いながらギギギ、と扉の方に顔を向ける。

「……………桜牙？」

するとそこにはさっき別れたはずの恋が立っていた。しかも湯気で見えてはいないが、体に布を巻いていないようだった。ヤベツ……息子が……。バレないように気をつけないと……。

「れ、恋か。まだ入ってなかったのか？」

「……………今まで、寝てた」

あれからずっと寝てたのかよ……。それじゃあ風呂にも入ってるわけないよなあ……。

「じ、じゃあ、俺もう上がる」

「……………一緒に、入る」

俺は上がるうとしたのだが、いつの間にか接近してきていた恋によりそれが阻止されてしまった。何故だ、さっきまで一緒に居たではないか！？ そして布を巻け布を！！ 危ないところが見えちゃうんだよ！？

「……………？？」

分かってないのね。まあ、分からないなら分からないでいつまでも純粋な恋で居てくれ……。とりあえず上がらせてもらえそうにな

いので、俺は恋に背を向けながら風呂に入る。

「……………どうして、そっち見てるの？」

「そっちを見ると俺の理性が吹き飛ぶからだ。もしくは木っ端微塵に砕け散る」

「……………??？」

良いよ頑張って理解しようとしなくて！！ 君はその純粹無垢、誰からでも愛されるようなマスコットのなキャラ、そしてそのクーデレが魅力的なのですから！！

「……………びとっ」

「うおっ！？」

そんなコトを考えていると俺の背中に何かがかくつついてきた。いや、何かと言う表現は間違いだ。何がくつついてきたのかは、誰がどう考えても恋としか言いようがない。

「れ、れれれ恋さん！？ 何をしてるんですか！？」

いかん。思ってる以上に動揺してるみたいだ。敬語になってやがる……………。

「……………桜牙の背中、広い」

「そうか？」

「……温かくて、優しい背中」

恋はそう言いながら俺に体重を預けてくる。

「……桜牙の背中色んなものを、背負ってる」

「そうか？ 別に何も背負ってないとは思っけどな……」

厳密に言えば現在進行形で恋の体を背負ってるけどな。まあ、そこは言わんでも良いだろうな。

「……（フルフル）」

俺が答えると恋は何故か首を横に振っていた。見えないのに何故分かるかと言えば、背中がくすぐったからだ。

「……桜牙はみんなの命、背負ってる。……華琳や秋蘭、みんなの」

恋にそう言われるとなんか無駄に説得力があるな。確かに恋の言ったとおり俺はみんなの命を知らず知らずのうちに背負ってるのかもしれない。

みんなを守りたい。自分の命に代えても大切なみんなのコトを守りたいって思ってるな。だけどその命つてのは華琳や秋蘭だけじゃない。俺が守りたいのは、守りたい人が守りたいものもだ。

「言つとくが俺は恋も守るぞ。背負ってるとか堅苦しいのはなしで、純粹に恋を守りたい」

「……………／／／／／／」

「恋は強いって言っても女の子なんだ。いくらでも俺に頼りな」

「……………ありがとう」

「あゝ」

俺は恋の言葉にそう答えると空を見上げた。そこには俺たちを見守るかのよつに、月が浮かんでいた。



第五拾五話 『外史の管理者達の会話』 (前書き)

今回はテラ短いです。

そしてあとがきにてお知らせをします……。

## 第五拾五話 『外史の管理者達の会話』

ここは外史と外史の狭間。言わば管理人と呼ばれる人物が、外史を管理するための空間だ。見渡せば白、白、白の一色で統一されており、あるものと言えばたかさんの本が詰められている本棚だけだ。

そんな空間に二人の人影があつた。一人は銀髪を無造作に切りそろえており、瞳は全てを見透かすような真紅。顔の左半身、いや、体の左側全体を一直線に自らを戒めるかのような青色の文字が刻まれている男。

もう一人はわずかに赤みのかかった髪をサイドテールにまとめている女。この女は見た目は『外史』に登場する『紅葉』の姿を象っているがそれは違う。『紅葉』が『彼女』の姿を象り、『外史』に現れているのだ。

「そろそろ、奴がこの外史について気づいてきたみたいだな」

男は現在開かれている外史を見ながらそう呟く。

「全くだよ。ボクが近くに居るのに、全然気づかないしな」

「……貴様は目覚めるのが遅いのだ」

「それを言わない。ボクの管理でない『外史』に介入するにはこうするしかないのさ」

『外史』に現れた紅葉。紅葉はこの『彼女』によって本来は現れ

ないはずのところを、この『外史』の『天の御使い』と『彼女』が接触するために動かされたにすぎない。

『紅葉』と『彼女』は同一人物であり、一つの体に二つの魂を共有する事により『彼女』は間接的に『外史』に介入したのだ。

「本来であれば私の管理する『外史』に他の管理人が介入するなどあつてはならないのだ」

「仕方ないじゃないか。『奴』があんたの『外史』に紛れ込んでるかもしれないんだからさ」

『彼女』は飄々とした感じで言うのだが、その。すでに何百と言ふ『外史』が『奴』に乗っ取られているのだ。

「で、貴様は復讐のために『奴』が現れやすい私の『外史』に介入したのか？」

「それもあるけど（ ）の元となつた奴を見てみたくてね」

「……どうだった。奴は」

男は一瞬だけ面を食らつたかのような表情をしたあとに『彼女』に向かつてそう訊ねた。

「ダメダメだね。あいつは考えが甘すぎるよ。『奴』が現れたとしたら、ほぼ『外史』に乗っ取られるよ」

「そうか。だがそうさせないために私が居る。管理者、兼、『守

「『守護者』である私が『奴』を再び封印する」

自らを『守護者』と言った男は以前に『奴』を一度封印している。以前に『奴』が現れたときも同じように『外史』を乗っ取り続けていったのだ。

それを見かねた外史の管理者と『守護者』である男が協力し『奴』を外史と外史の狭間。だが管理者が居る場所ではなく永遠の苦しみを与える狭間に封印したのだ。

だがその代償は少なくはなかった。『奴』を封印にかかった管理者の大半と『奴』に乗っ取られた『外史』の半分ほどが消滅した。

「まだ『奴』と戦った傷も癒えてないのにまた『奴』と戦っても、今度こそ死ぬよ？ もうあんたには（ ）の力はないんだからさ」

「分かっている。それに私の限界も近づいてきている」

男はそう言いながら自らの手を見つめる。その手には魔法陣の書かかっている手袋がはめられているが、そのわずかに見える肌はわずかに透けていた。

「これじゃあやっぱり『奴』とは戦えないね。ならボクに『守護者』の力を引き継ぎしなよ。そうすればまだ希望はあるよ？」

「バカを言うな。以前は恐怖で動けなかったと言うのに、大層な口を叩くものだな」

「だからこそさ」

『彼女』は以前の『奴』との戦いの時もすでに管理者の任に就いていた。しかし管理者となっただけの『彼女』にとって『奴』との戦いは恐怖の塊でしかなかった。だからこそ『彼女』は以前の自分を捨てるために『奴』と戦いたいと思うのだ。

『守護者』。この力は『奴』と戦う上でおそらくは一番重要になってくる力。この力があつてようやく『奴』と渡り合える。

「どうでも良いが『守護者』の力を与える人物はもう決まってる」

「はあ……。結局自分の後始末は自分でつける気なのかい？」

「当たり前だ」

男は外史が今現在も刻まれ続けている『外史』の一冊を片手に言う。

「今の私では自らの『外史』にすら干渉することが出来ぬ。今は君に私の『外史』を任せよう」

「分かつてるさ。あんたの『外史』には想定外イレギュラーが多すぎるからね。一番の想定外イレギュラーが……」

「神の使いだともいっつもりか？」

男の言葉に『彼女』が頷く。神の使いが想定外イレギュラーとして現れたことにより男が管理する『外史』はかなり複雑に絡みあってきている。

本来であれば発現することの無かった魔力が恋姫に発現し、『外史』自身が自ら変化しようとしてきているのだ。それにより他の管理人からも一目を置かれているのだ。

「まあ、神の使いの介入は分かっていた。想定外なのは魔力発現だ」

「これが吉と出るか凶と出るか……」

「さあな。だが『奴』はどうかせねばならない。頼むぞ」

「了解。じゃあそろそろ戻らないと『紅葉』に感づかれるからね。次はいつになるか分かんないけど、会えるのを楽しみにしてるよ」

『彼女』はそう言うとその場から消滅した。『紅葉』の中に戻っていったのだ。

外史の狭間に取り残された男は何もない空を見上げながら呟く。

「任せたぜ。『俺』が介入するまでの間な」

男はそう呟くとページをめくった。



## 第五拾五話 『外史の管理者達の会話』（後書き）

えー……まずは……すみませんッ！！ 来月までコレの更新をストップします！！

理由としてはストックを溜めることと、少しこちらがスランプ気味ということ……。

更新を楽しみにしていた方には申し訳ありませんが、来月まで更新をストップします……。

それでその間にいくつかアンケートを実施します。

1、外伝をやるとしたらどこの世界が良いか。

- ・ Fate / stay night
- ・ 魔法少女リリカルなのは
- ・ ゼロの使い魔

の三点から選んでください。

2、 Fate / stay night を選んだ場合誰のサーバーにするか。

- ・ 正義の味方こと衛宮士郎！！
- ・ うっかりスキルの遠坂凜！！
- ・ 新婚生活が夢なキャスター！！
- ・ ダメツト？ いえバゼットです！！



の四人から選んでください。

3、魔法少女リリカルなのはを選んだ場合どの時期が良いか。

・無印

・A's

・striker's

4、ゼロの使い魔を選んだ場合誰の使い魔にするか。

・ツンデレ姫のルイズ

・ホントに学生？体型が……のキュルケ

・静かすぎるぞタバサ

の三点から選んでください。

5、コラボしたい方はドシドシお願いします。

の五つです。期限は今月いっぱいになります。

では待っています！

第五拾六話 『定軍山の戦い』 理性を失う吸血鬼』（前書き）

久しぶりの投稿です！！

スランプ＆ストック溜めはまだ終わってませんが、投稿します！

## 第五拾六話 『定軍山の戦い』 理性を失う吸血鬼』

side 桜牙

その日の軍義は久しぶりに劉備領から戻ってきた間諜の報告から始まった。間諜の報告によれば劉備は、益州の周りを次々と取り込んでいくらしい。荊州の大半は魏が抑えているし、益州の一部も先日の反撃で手に入れることが出来た。

しかしそれが諸侯の反感を買い黄忠や糜顔、魏延といった主要な将は劉備に降ったようだ。これで劉備側には五虎将が揃ったことになるが、そこはさして警戒するところではない。

現在劉備は南蛮の連中と戦っているらしい。既に何度か大きな激突があつたらしいがそのたびに劉備側が南蛮を打ち破っているようだ。それは別に南蛮の将の層が厚い、と言っわけではない。

南蛮の首領格の人物が捕まっているのだが、劉備が逃がしているらしい。俺が知ってる三国志だと八回目だけに猛獲が捕まるんだつたな……。

とにかくその行動は俺たちのように力だけで屈服させたくない、戦で負けた方が勝った方の言うことを聞くと言う当たり前が嫌なんだろう。まあ、なんと云うか理想論をよくもこれだけ並べられるな。

「華琳さま。劉備が南蛮と戦っていると云うなら、これはまたとない好機かと……」

桂花の言つとおり劉備がこれ以上勢力を拡大する前に、こちらから攻め込んでしまうのが得策かもしれないねえな。

「劉備側の話ばかり聞いて判断しても仕方ないわ。南方の孫策はどうなっているの？」

ちょうど劉備の方に送っていた間諜が戻ってきた数日前に、孫策の方に送っていた間諜も戻ってきていたのだ。

「現状、孫策に大きな動きはありません」

華琳の言葉に秋蘭が答えた。現在は遠術に奪われた江東の自領を制圧したあと、周辺にいる遠家筋の豪族達を平定すべく戦っているようだ。

まあ、孫策の陣営にはかなりの戦力もあるし江東の将を加えれば平定が終わるのも時間の問題だろうな。団結力なら俺が見る限りじや俺たちにも劣らないからな。

「どちらも背後は隙だらけね。ならばどちらを先に倒すべきかしらっ。」

「劉備かと思われませう」

華琳の問いにまずは桂花が答えた。桂花の言い分は俺たちにとってはただの妄想でしかないコトでも、庶民にとっては甘い蜜となる。放っておくのは危険だというコトだった。

「孫策ですかねえ……」

そう言ったのは風だ。今の勢いを維持したままこちらを攻められるくらいであれば、これ以上勢いが付く前に叩いておいた方が良く、と言うことだった。

どちらの意見にも一理あるが、俺的には先に孫策を叩いておいた方が得策だと思う。今の勢いからさらに勢いづけば、負けないにしてもかなりの大打撃を喰らうことになる。それは孫策のところに住た俺だから言えることだ。

孫策の心に宿る虎は時として龍すらも食い散らすバケモノとなりえるものだ。勢いづく前に叩いておきたい。

「桜牙、あなたならどう考えるかしら？」

そんなコトを考えていると華琳が俺に話を振ってきた。しかも華琳の方を見れば、何か良い意見を頼むぞとばかりの期待の目を向けている。

「俺なら……孫策を攻める」

「待つてください、桜牙殿」

「何だ？ 稟」

「確かに勢いづいてる孫策を叩くのも良いですが、劉備はどうするのですか？」

稟が言いたいののはもしも劉備と孫策が通謀し攻められた方が持久戦に徹している間に残る一方がこちらに総攻撃を仕掛けてきたとすれば、俺たちにその戦略を打ち破る術はない。要するに相手の持久

戦に巻き込まれたら、反対側に殴られこっちの負けってコトになる。

ならば劉備と孫策、二人が同盟し一緒に攻めてくるのを待った方が良いのではないかと稟は言う。この二人が同盟すればお互いに攻撃の機を牽制してくれるかもしれない。その間も魏の成長するだろう。そうすることにより二面作戦を展開させることが可能になり、有利にしかも二勢力同時に攻め落とすことが可能になると言うことだ。

「なるほどねえ。今回は俺の負けだ。ここは稟の案に乗らせてもらう。構わないな、華琳」

まあ、二面作戦の研究は継続して行っているはずだからな。試す機会が賊の討伐程度にしか無かったがな。それに二つの勢力を同時に攻めれば、互いの連携を絶つことが出来る。

「ええ。ならば、今後の大方針は劉備と孫策の二面作戦と言うことにするわ。では、解散」

そして今回の軍義も終わったのだが、俺は何故か華琳に呼び止められてしまったので、みんなが去るまで黙って待っていた。そしてみんながようやく去った後、俺は口を開く。

「どうしたんだ？ 華琳。俺になんか用事か？」

「用事と言うほどでもないのだけれど、珍しく言い負けたと思ったのよ。あなたにしたら珍しいわ」

「そうか？ 俺は前に孫策達と触れあったせいで劉備達よりも孫策を優先してしまった。だけどそれよりも良い作戦があると稟に言

われただけだぞ？」

「……そう。いずれ孫策と戦うことになるわ。それなのに、あなたは孫策相手に本気で戦えるのかしら？」

「何言っつてんだ……」

俺はそう言いながら踵を翻して玉座の間から遠ざかっていきながら言う。

「当たり前だ。なんせ俺は華琳に仕える身なんだからな」

俺はそう言つと玉座の間を後にした。

side 秋蘭

「……ここが定軍山か」

あの軍義から数日が経過し、私は流琉や兵士を連れて定軍山の視察に来ていた。周りは深い森に覆われていた。

「秋蘭さま。周囲を偵察してきましたが、特に変わった様子はありませんでした」

偵察から帰ってきた流琉が私の元に来ながらそう言ってきた。このようなところで敵に待ち伏せなどをされていれば、一溜まりもないな。

流琉の話しによれば念のために近くの村人にも話を聞きに向かったらしいが、見慣れない騎馬が数奇うろついているだけで、特に変わった様子はないとのことだ。おそらくは連中もいつもの偵察だったのだろう。

「無駄足でした……かね？」

「来てすぐにその報告ではな。……まあ数日は留まって情報を集めてみよう。何か変わった動きがあるやもしれん」

私と流琉は定軍山を移動しながら話す。この分だと予定よりも早く終われそうだな。

「正直もつと時間がかかると思っていましたけど……お肉、もう少し待った方が美味しくなるかなあ」

「そうか。その件もあったな」

確か季衣が街で肉を買ってきたから、流琉に調理してもらいたいと言っていたな。だがまだダメだと言うことで我らが偵察が終わったら流琉に調理してもらうはずだ。

「私たちまで入れてあれで足りるのか？」

季衣が買ってきていた肉は到底あの大人数で食べられるものではないだろう。それに今は賊の討伐に向かっている龍崎に空に紅葉の分を合わせれば、とてもじゃないが足りないな。

「季衣が買い足すって言うてましたから。きつと山ほど買い足してると思えますよ。ふふ……作り甲斐がありそう」



「手が足りなければ私も手伝おうか？」

「ホントですか!？」

私がそう言うと流琉は嬉しそうに答えてくる。流琉一人であの人数の分を作るとなれば、かなり大変だろうし私は龍崎に手料理を食べてもらいたいしな。

龍崎は私の手料理を食べてどのような反応をしてくれるだろうか？

「うむ。だからまずはこの任務を無事に」

私がそこまで言うと突如として後方より悲鳴が上がった。そちらの方を向いてみれば、一人の兵士の胸に矢が突き刺さっていた。

「伏兵が居たな。敵襲だ!! 皆、敵の攻撃に備えよ!!」

私は弓を構えながらそう叫んだ。

「く……っ。何人……残っている？」

私は周囲を警戒しながらそう流琉に訊ねる。

「ほぼ半分ほどかと……。散り散りになった人達もかなりいると思いますけど……」

「たった一晩でこの様か。それとも、この手勢でよく保ったと言

うべきか……」

たった一晩で兵士がほぼ半分まで減らされた。夜の動きではなるべくうまく逃げていたつもりだったが、それでも被害はかなりのものだ。敵が居ることが分かっていれば、もう少し兵士を連れてきていたのだが、今それを言っても仕方がない……。

くっ、このままでは全員が討ち取られるのも時間の問題かもしれない……。昨晩に援軍の伝令を複数出したが、果たして間に合ってくるか……。

「敵がいなければ、探して回りたいですけど……」

「こつ言つときの訓練も受けさせている。敵に囚われたのでなければ、上手くやるだろうさ」

「……ですね」

私がそう言つても流琉は相も変わらず不安げな表情をしている。龍崎であればこのようなときでも皆を安心させてくれるのだろうが、今この場に龍崎は居ない。居ない者に頼っても仕方がない。

今は私が龍崎のように皆を安心させなければならぬ。

「いたぞ!! 夏侯淵だ!!」

私がそんなコトを考えていると緑色の鎧に身を包む兵士 劉備軍の兵士が現れた。私は舌打ちを一つだけしながら、劉備軍の兵士に向かって矢を放つ。

私が放った矢は的確に劉備軍の兵士の心臓に突き刺さり、力なく崩れ落ちる。心臓を狙ったのだから確認などせずとも絶命したと分かる。

「流琉、急ぐぞ！！ 皆も私に続け！！」

私は残っている兵士にそう叫ぶ。

「もはや森の中を逃げ回っていても埒が開かん……」

おそらくこのまま森の中を動き回っていたとしても、我らが疲れ果てたところを狙い撃ちされるのが良いところだろう。

「なら、でますか？」

「仕方あるまい！！」

ならばせめて森の外まで脱出し体勢を立て直すしかあるまい。

だが森の外を出るとそこには我らが森から出てくるのが分かっていたかのように、大量の劉備軍の兵士が待ちかまえていた。劉備軍の兵士が放った矢は我が軍の兵士に次々と命中し数が少なくなっていく。

「っ！ 総員」

「止まるな！！ 駆け抜ける！！」

「と、止まらないで！ 駆け抜けてください！！」

「このまま立ち止まってしまえば奴らの良い標的になってしまう。ならばこのまま立ち止まらずに、一気に駆け抜けるのみ。」

「させないよー!! てやあああああつ!!」

「きゃっ!?!」

すると横から一人の兵士が流琉に向かって槍を突き出してきた。あ奴は……馬岱か!? くっ、やはり馬岱は劉備に降っていたか……。となると馬超が近くにいてもよしれぬ。

「やらせぬぞー!!」

だが今は馬超のことまで気にかけている余裕はない。今は馬岱を何とかするしかない。私はそう思いながら、馬岱に向かって矢を放つ。それと同時に横から何かが放たれ、私が放った矢を叩き落とした。

これは私が外したのではない……。これは他の者によって撃ち落とされたか……

「良い判断ね。止まっていたなら、私たちが全員射抜いていたところより」

私がそんなコトを考えていると敵の隊より一人の女が現れた。おそらくはこ奴が私の矢をたたき落としたのだらう……。

「その腕前……そうか。貴様が……」

「ええ。初めまして、になるのかしら?」

「そうだな。だが名前は聞いているぞ……黄漢升」

これほどまでの腕前を持つのだ。ほぼ間違いはない。

「こちらこそ、弓の名手と言う名は聞いているわよ。夏侯妙才」

「ならば、どちらが大陸一か……」

「ええ。勝負……と言いたところだけど、残念。今日は一番を競いに来たのではないの」

くっ、時間稼ぎはどうやら無理のようだな。

私があるようなことを思っているウチに黄忠は私に向かって矢を放ってくる。私はそれを体をずらし、自らの弓で弾き返しながら黄忠から距離を取り自らの射程距離をとる。

そして私も黄忠に対して二矢、三矢と連続で黄忠に矢を放っている。しかしさすがに場数を踏んである将だ。たかが二、三矢程度では致命傷にはならぬか。黄忠は私が放った矢を的確に防いでいく。

「あらあら、やるわねえ……」

黄忠は余裕の笑みを向けながら私にそう言ってくる。くっ、このままではこちらが負けるのは目に見えている。

「秋蘭さま……」

「流琉！ 目の前の敵に集中しろ……」

私が劣性と見たのか流琉が助けに入ってこようとするが、私はそれをやめさせる。流琉の相手は馬岱だ。私を援護しながら戦うのはさすがに無理がありすぎる。

私が黄忠、流琉が馬岱の相手をして時間を稼いでくれれば援軍に期待できるかもしれぬ。そんなコトを思っていると、向こう側より砂塵が上がっているのが見えた。

牙門旗の旗印は『桜』に『空』に『紅』……。龍崎達か！？ これならばまだ勝機はある。

「それは貴方も同じでしょう！ 翠ちゃん！」

「夏侯淵！！ はあああああああつ！！」

すると马超が私の横から槍を振るってきた。しかしそれを私は回避する。马超がどこかに潜んでいるのは分かっていた。だから私は黄忠と戦いながらも周りを警戒していた。だからこそ避けることが出来たのだ。

だが砂塵に気を取られていたのもまた事実。だからこそ気づけなかったのだ……。黄忠の放った矢が……。私の胸に迫ってきていることに……。

前を向けば龍崎がこちらに来ているのが見える。手を伸ばすが、私とその手を、掴む前に、私の意識は、闇に、沈んだ。

side 桜牙

俺たちは賊の討伐とやらの任務で定軍山より少し離れた場所に来ていた。敵の賊は思ったよりも層が厚く、兵士達だけで戦わせていたことによりだいぶ時間を喰っちまった。

しかも今回の賊退治では空と紅葉と言ったメンバーで来ているために、俺たちが動けば半日と掛からずに終わらせることが出来ただろうな。

「にしても空。お前、最近変だぜ？」

「変とは何がですか？」

空は俺にいつもとは少し違う笑みを向けながらそう聞き返してくる。

「何がですかって言われても、何か分かんないから言ってるんだろ」

「……………そうですか」

そう言う空は再び空を仰ぎながらため息を一つ。正直言うと、こいつがため息なんかついてるのを見ると、槍の雨が降るんじゃないかと思っちまう。

「桜牙ってやっぱり鈍感ね……………。この反応って言ったら、恋に決まってるでしょ！ こ・い・い……！」

「恋、ねえ」







「空、どうなってんだ……。俺が知ってる三国志じゃ定軍山で夏侯淵が討たれるのは赤壁の後だぞ……」

「僕が知っている中でもそうですよ。ですが、この世界の出来事は僕たちが知っている三国志で、説明できないことが多々あります。確かにこの世界じゃいろいろと順番がゴチャゴチャだ。だからってこの戦いを先にしなくてもいいだろうが……」。

「グダグダ考えても仕方ねえ。今は早く秋蘭のここに行かねえと……」

「そうですね。このままでは妙才殿が危険です」

「分かってる。全軍！！ 定軍山に向かう！！ 敵は劉備軍！！ 夏侯淵を救い出すぞ！！」

俺はそう叫ぶと定軍山に向かって動き出した。

定軍山の近くまで来ると、そこにはあらかじめ俺たちが来ると予想していたかのように関羽、張飛、超雲の隊が待ちかまえていた。

「テメエら……退け」

俺は三人を睨みつけながら言う。

「悪いが退くわけ』もう一度言っ……」

俺は関羽が言葉を発する前に言葉を遮るように言う。

「退け」

俺はそう言いながらこの世界で初めて本気の殺気を放つ。それに関羽達だけでなく、紅葉も恐怖しているように見えるが、今はそんなことはどうでもいい。

今は秋蘭を助けるだけだ。それを邪魔するってんなら神様だって殺してみせる。

だが俺がそんなコトを思っていると、視界の端で秋蘭と誰かが戦っているのが見えた。同じように流琉も馬岱と戦っているのが見える。

「桜牙さん、この人達は僕と子義殿に任せてください」

「任せた」

俺はそう言ってくれた空にただ一言だけを告げると瞬動を使い関羽達の脇を駆け抜けた。

「ちっ、逃がすと」

「すみませんね。あなた達の相手は僕たちですよ」

俺の後ろの方でそんな会話が聞こえてきたがすぐに聞こえなくなる。急げ、このままだったら本当に秋蘭が……。

ッ!?! 秋蘭の脇から馬超だと!?! 秋蘭は目の前の女)

おそらく黄忠」と対峙してるんだから、避けられるはずがねえ！？

だが俺のその予想とは反して馬超の一撃を回避した。……だが、黄忠によって放たれた、一本の矢が、秋蘭に迫っていく。そして黄忠が放った矢は　貫通した。

それと同時に俺は秋蘭の元に辿り着いた。秋蘭は目を瞑ったままピクリとも動かない。俺は秋蘭を起こしながら呼びかける。

「秋蘭？　目を覚ませよ……」

周りで何かを言っているようだが、耳に入っていない。

「こんなところで寝たふりなんかするなよ……」

秋蘭は動かない。嘘だ、秋蘭が死んだなんてあるはずがない。だが秋蘭は起きない。

俺は守れなかったのか？　何よりも守りたいと思った一人の女性を……。失ったのか？　初めて好きになった女性を……。

「八八……」

俺の中で。

「八八八ッ……」

何かが。

「クハハハ……」



第五拾六話 『定軍山の戦い〜理性を失う吸血鬼〜』（後書き）

前話のあとがきにアンケートがありますので、回答お願いします  
ッ！！

相変わらず不定期ですが、どうかよろしくお願いしますッ！！

現在は新しいネギま！小説の『その竜族は狙撃手なり』を基本的  
に更新してますので、そちらも見ただけだと嬉しいですよ。

では感想待ってます！！

第五拾七話『定軍山の戦い〜二人目の吸血鬼〜』（前書き）

はい、言ったとおり四月になりましたので投稿します。

ではごんぞー！





出来たことにより私は少しだけ恐怖を和らげることが出来た。

「よく分からないわ。だけど、この人を討ち取ることが出来れば……」

あの人の願いに近づくことが出来る。噂では夏侯淵のことを愛人にしている人物が居ると聞いたことがある。多分この人が夏侯淵の愛人で『天の御使い』なのでしょう……。

「翠ちゃん、行くわよ」

「あ、ああ……」

私はそう言うのと手に持っていた弓を構え、翠ちゃんは槍を改めて構える。震えは止まらない、だけどこの距離からなら確実に討ち取ることが出来る。

私がそんなことを思っていると殺気まで笑っていた笑い声がピタッと止まった。その瞬間、私は言葉には表せない恐怖を感じた。翠ちゃんも同じようで、警戒心を高めている。

すると男の目がこちらに向けられた。その瞳はさつきまでは黒かったのにも関わらず今は全てを見透かすような真紅の瞳、猛禽類を思わせるような縦割れの瞳孔と目があった。

「……オマエガ、シュウランヲ、コロシタ」

まるで感情が籠もってない言葉で私たちにそう言ってくる。怖いなんてものじゃない、殺されると私は確信した。それだけ彼の言葉は死を感じさせるものだった

「ナラ、オマエヲ、コロス、コロス……コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス……コロス!!!」

彼がそう叫ぶと彼の体から不可思議な光が放出された。さらにはドコから取り出したかは分からないが、とても巨大な両刃の剣を私たちに向かって振り上げてきた。

そこにいてはいけない。そこにいたら死んでしまうと分かっているのに体が動かない。そして両刃の剣が振り下ろされた。

side 紅葉

「ほら関羽!!! まだまだこんなもんじゃないわよねエ!!!」

私は真桜に直してもらった棍棒を関羽に向かって振るう。私の一撃は前に戦ったときに比べたら桁違いに強くなってるわ。普段から大して思い一撃に慣れてなかった関羽は、私の一撃を受けてよろめく。

ふふっ、前の戦いではボコボコにされちゃったけど、今回は逆に関羽をボコボコにしてやるわ。私はそんなコトを思いながら連続で棍棒を振るっていく。

右側から横風に振るった棍棒を関羽は体勢を低くしてかわすが、私はそんな関羽に向かってもう一本の棍棒を振り上げる。それを関羽は槍を盾代わりにするようにして受け止める。

だけど無理な体勢で私の一撃を受け止めたからか関羽の体は後ろに吹っ飛んでいく。ただ関羽も百戦錬磨の武人、地面に落ちる前に体勢を立て直して難なく着地した。

「やるな太志慈。だが私は負けるわけにはいかんのだ」

関羽は槍を私に向けながらそう言う。

「私だって負けるわけにはいかないのよねえ」

私も二丁棍棒を構えながら関羽に言う。さっきまでは私の動きで戦いが動いてたけど、今は関羽が体勢を立て直したから勝負は振り出し。となると速さで劣る私は慎重にいかないと、反撃を食らいかねないわね。

そんなコトを思いながら隣で張飛と趙雲と戦っている空を見る。空は相変わらず出鱈目な強さね。あの二人を相手に余裕そうにあらってるわ……。

「戦いの最中に考え事とは随分と余裕だな!! 太志慈!!」

「ちっ……」

私が余計なことを考えたせいで関羽に攻撃の隙を与えてしまった。マズい……このまま関羽の戦いに流されてしまえば、私が劣勢になるわ。

「はああああああああっ!!」



ちの些細な敵対関係なんか無意味……。

「分からないわ……。だけど、アレは、バケモノよ……」

言ってから気づいたけど私は今の桜牙のことを人間として見ていなかった。それは間違いだと頭では判断できるのに、本能が、アレは人間でないと叫ぶ……。

《眠れ、深淵の底に……》

『彼女』のそのような声が聞こえたと思った次の瞬間、私は意識を失った。

……ふう。

ようやく意識の交換が出来たか。だけどこれはかなりマズいねえ。ボクの知ってる彼の『外史』で一番マズい状況に陥ってるよ。ちつ、なにもこの『外史』で最悪の結末にならなくても良いじゃないか……。

ボクがそんなコトを思っていると神の使いがボクのところに来た。

「止めますよ、紅葉さん。いえ、今は『陸葉』<sup>りくは</sup>さんと呼んだ方が良いですか？」

「……いつから気づいてたんだい？」

「そうですね。あなたが出てきたときからでしょうかね」

さすが神の使いと言ったところか。ボクが『陸葉』だと気づけるなんてね……。

「今は無駄話をしてる場合じゃないよ。さっさと、アレ、を止めないといけないんでね」

「ええ、今回は冗談では済まされませんか」

ボクたちはそう言いあうと、<sup>バケモ</sup>桜牙のところに向かって動き出した。

side out

桜牙を目の前にした黄忠は確実に死ぬと思った。今までに見たこともないような、全てを恐怖に陥れる感覚に動けずじまっていた。桜牙が振り上げた両刃の剣　レーヴァテインが黄忠に迫ってくる。

黄忠は死ぬと思った。目を瞑り、自分に降りかかるもう避けることの出来ない死を待った。

ガキイイイイイインツ！！

だが避けることの出来ない死は黄忠には来ず、ただ金属同士を打ち付けたような独特な音が聞こえただけだった。黄忠や馬超は恐怖に吞まれ動けずにいる。

同じように馬岱も流琉も動けずにいる。第一に彼女たちでは桜牙の一撃を受け止められないだろう。ならば誰がその一撃を受け止め

たのか？ 答えは実に簡単だ。

「怖がってるところを……申し訳……ないの……ですが……っ、早く逃げてもらえますか……っ!?」

黒い二本の短剣 黒刀二ノ太刀を交差させるようにして、桜牙から振り下ろされたレーヴァティンを防ぐ神の使いである空が居たからだ。神の使いである空ですらも桜牙の一撃を受けながら、冷や汗を流している。

黄忠はそのことを理解するまでに数秒を要した。それだけ目の前で起こった事態が信じられなかったのだ。

「早くしな。あいつもそんなには保たないよ」

そんな声をかけたのは関羽や趙雲、張飛と一緒にいる陸葉だった。最初は陸葉と関羽達がなぜ一緒にいるのかと疑問に思った黄忠だったが、今はそんな事態ではないことを即座に思い出し、頭を切り替える。

「翠ちゃん、今は退きましよう」

「あ、ああ……。たんぽぽ！ 戻ってこい！」

馬超の言葉に一瞬だけビクツとした馬岱がそそくさと馬超達の前をやってくる。

「早く兵を連れて撤退するのが無難だよ。じゃないと今の桜牙はあんたらを全員殺すからね」

陸葉の言葉に誰一人として反論できなかった。それだけ陸葉の言葉には現実味があり、今一番現実で起こりそうな事だったからだ。

「……………なぜ貴様らは揃いも揃って敵である我らを助けるのだ」

陸葉の言葉に関羽がそう訊ねていた。今はそんなコトをしている場合ではないだろうと頭では理解している。だが、関羽はそれがどうしても理解できなかったのだ。

大切な人を殺されたにも関わらず、なぜ怒りに任せて刃を振るう桜牙を止めるのか、なぜ自分たちを殺せる余裕がありにも関わらず殺さないのか……………。

疑問をあげていけば様々あるだろう。しかしそれに対しての陸葉の言葉は実にシンプルだった。

「あんたらを殺すよりアレを止めるのが先決。ただそれだけなんだよねえ」

陸葉はそう言いきった。陸葉は殺さないのではない、関羽たちを殺すのは二の次だと考えているに過ぎないのだ。

「……………例は言わんぞ」

「うるさい奴だ。さっさと消えなよ。ボクも加勢しないといけな  
いんだからね」

「……………撤退だ!!　すぐに撤退するのだ!!」

関羽のかけ声と共に蜀の兵が一斉に撤退を始め、すぐにその場か



ら全員が居なくなつた。そしてその場に残されたのは魏の兵士に流  
琉と空と陸葉、そして桜牙バケモノだけとなつた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

桜牙は撤退していく関羽たちを視界の端に捉えると、それを追いかけてようと空に背を向ける。長時間桜牙の一撃を受け止めていた空はそれに反応できずに、逃がしてしまいそうになるが、そこですかさず陸葉が逃がすまいと反撃を繰り返す。

陸葉が横凧に振るつた棍棒は的確に桜牙の脇腹を捉えた。ゴキゴキッ！！と骨が折れる音が響きながら桜牙は森の入り口から弾き飛ばされる。おそらくは肋のほとんどが砕けただろう。

「助かりました陸葉さん……。ですがアレを僕たちで止められるんでしょうか……？」

空にしては珍しく笑みを浮かべずに、苦しげな表情をしながら陸葉にそう問いかける。神の使いである空でさえも魔力暴走オーバードライブを起こした桜牙を止められないと思つているのだろう。

「止められる止められないの前に、止めないといけないんだよ。アレが暴走した成れの果てを知つてるからね。……ほら、また力が上がるよ」

陸葉がそう言いながら先ほど吹き飛ばされた桜牙を指差す。するとそこには赤黒いオーラを爆発的に放出している桜牙が居た。漆黒だった髪は金に染まっていき、真紅に染まった縦割れの瞳孔にも鋭さが増している。

「バグキャラが魔力暴走したら止めるのも骨が折れますね……」

オーバードライブ

「ああ、下手したらどっちも死ぬねえ」

「ならどうします？ 僕たち以外で今の桜牙さんを止められるのは居ませんか？」

空はそう言うが、今の状態の桜牙を止めることは不可能に近い。今の桜牙は魔力暴走した結果、本来の力となっている。

つまりこの世界に来て世界より掛けられた鎖が千切られ、完全に最強の真祖の吸血鬼と化している。世界を救った『業炎の剣帝』は今や世界を滅ぼす悪鬼羅刹となりつつあるのだ。

「別に正攻法じゃなくてもいいのさ。神の使いならなんか出来るだろ？」

「あなたこそ、外史の『管理者』ならなんとか出来るんじゃないですか？」

「まあ、何とかしてみよう。あんたも何とかしなよ」

「分かりました！」

二人はそう言いあうと桜牙に向かって二手より攻撃を仕掛けた。陸葉は持っている二丁棍棒で全てを粉碎する一撃を、空は全てを貫く必殺の一撃を。

しかし桜牙はそれを片手で受け止める。しかもそれを何事もなかったかのように弾き飛ばし、桜牙は空に向かって瞬動で接近する。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！  
！！」

そして桜牙は接近して何の迷いもなく空に向かってレーヴァティンを振り下ろす。その刃には理性など全く宿っておらず、まさに獣の一撃となっている。

「く……っ!？」

空はそれを何とか回避するのだが、レーヴァティンが地面に叩きつけられた際に発生した衝撃波により空の体が吹き飛ばされる。さらには地面にレーヴァティンを叩きつけた際に衝撃波と共に発生した、石片が空に飛来していく。

黒刀二ノ太刀でそれを幾らか弾いてはいくのだが、石片の量が多かったためにすべては捌ききれず空の身体のおちこちに石片が突き刺さる。だがそれに気を取られている暇はない。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

なぜなら空の着地地点に先回りしていた桜牙が、空を一刀両断せんとばかりにレーヴァティンを構えている。空は無理矢理に体を捻り、桜牙に反撃させまいと黒刀二ノ太刀を振るう。

結果的に空の一閃は桜牙の右肩をざっくりとえぐり取る。しかしそれだけ。今この場で完全に『真祖の吸血鬼』として覚醒した桜牙の前ではその程度の傷はないに等しい。

いや実際にダメージもなにもないのだろう。すでに空が切り裂い

た右肩は再生している。

（くっ、再生が速すぎる……。これでは手傷を与えることは不可能ですね……）

空は考える。ならばこの最凶の吸血鬼をどうやれば正気に戻すことが出来るのか、と。最強の武を持ちながらも大切な人を失ったと言う現実に耐えきれない精神を持つ男をどうすれば止められるのか、と。

そんなコトを考えている合間にも空の身体にはレーヴァティンによる一閃が迫ってくる。しかし不意にその一閃の刀身がブレる。それを見逃さなかった空は一瞬にしてその場から離脱する。

それと同時に桜牙の体が宙を舞う。桜牙が居た場所には棍棒を振り抜く形で構えている陸葉がいる。

「ぼやっとするな、神の使い。アレを止めるなどと考えない方がいいよ。殺す気でいかないとね!！」

陸葉はそう言いながら吹っ飛ばされた桜牙の方に走り出す。

それを見た空も黒刀二ノ太刀を十字に構える。すると左手に持っている魔力を司る黒刀が刀身から柄までが真っ白な弓に変わり、気を司る黒刀が光を宿した剣の矢へと姿を変形させた

空は変形させた矢を弓に引っ掛け、ギリギリまで引く。ギリギリ、と弓が軋む音がして空は狙いを定める。そして矢の軌道と桜牙の軌道が重なった瞬間、空は矢を放つ。

弓から放たれた光を宿した矢は真つ直ぐに桜牙の心臓に向かい、一気に貫く。桜牙の胸から赤い鮮血が舞う。

「はああああああつ!!」

そんな桜牙に追撃を仕掛けるように陸葉が、桜牙の体に二丁棍棒を振り下ろした。ゴツ!! と鈍い音がしたかと思えば、そのまま真下に勢いよく落下した。

落下した衝撃で大量の砂埃が舞い、桜牙の姿が見えなくなる。それにも関わらず陸葉は宙から棍棒を思いっきり振り下ろす。さらに空は連続して矢を作り出し、桜牙が居ると思われた場所に放つ。

しかし、陸葉は手応えにわずかな異変を感じる。

(何だ? この奇妙な感覚は……。 ツ!?)

陸葉はそう思った直後に陸葉の首が何かに締め付けられた。

「ぐ……っ、かは……っ、ま……さか……」

ギリギリ、と陸葉を締め付ける何かの力はどんどんと強くなっていく。砂埃が晴れてくると、それが桜牙の腕だと言うことが理解できた。

(物理障壁か……。 くっ、魔法が使えないのになぜ……。!?)

この世界では魔法を使うための精霊が存在しない。それにより魔法が使えないはずなのだが、桜牙は魔法を使っていた。よくよく考えてみればこの『外史』には想定外イレギュラーだらけだった。

天の御使いと称される『龍崎桜牙』に始まり、神の使いである『空』、そして外史の管理者である『陸葉』。さらには発現しないはずの魔力の発現。

（まさかこの『外史』を桜牙が改変している！？　だがそうじゃなければ魔法が仕えるはずがない……）

陸葉は有り得ないと言うのを切り捨てる。実際、この『外史』の天の御使いは『龍崎桜牙』ではなかったのだ。本来の御使いを押しつけ、桜牙が入り込んできたのだ。

「ふっ！！」

陸葉がそこまで考えていると空が桜牙の腕を切断しに来ていた。それを察知した桜牙は陸葉を突き飛ばし、その場より回避する。

「ごほっ、ごほっ……助かった」

「大したことはありません。ですが……」

空はそこまで言うのと桜牙をみる。このままでは桜牙は悲しみ、怒り、憎しみといった負の感情に押しつぶされ、復活することが出来なくなるだろう。

（神の力を使えば止める程度は出来るんですが……。……神の力を使っても止める程度ですか、彼もずいぶん強くなったものですよ）

空は桜牙の最初の転生からのいきさつを全て見ている。だからこそ、空は桜牙が強くなったことが分かるのだ。

そんなコトを空は考えながら黒刀二ノ太刀を振るっていく。一方、空達が戦っている頃、流琉は倒れている秋蘭の元にいた。

秋蘭の出血は止めようとするのだが一向に止まらず、血が湧き出てきている。もう死んでいると分かっているにも関わらず、流琉は必死に血を止めようとしている。

（兄様……兄様、秋蘭様がこんな風になってるのに何をしてるんですか……）

流琉は桜牙の変わってしまった姿を見ながら、そんなコトを思う。空と陸葉が戦ってはいるが、すでに決着は見えている。

（もう、見てられない……）

今にでも泣き崩れてしまいそうになる流琉は戦いから目をそらし、秋蘭に顔をうづくめる。顔をうづくめると秋蘭はまだ、温かった。

（温……かい……？ もしかして……！？）

温かいことに疑問を持った流琉は急いで秋蘭の脈をはかる。脈はゆっくりであったが、秋蘭の命の炎はまだ消えようとはしていないかった。

それを確認した流琉は空達の元に急いで走り出した。今すぐにごそのことを伝えようと、全力で駆け抜けた。

「兄様……！」

そして流琉は空達と桜牙を遮るように立ちはだかり、桜牙の目をまっすぐに見据えた。

その行動に空と陸葉の二人がギョツとする。並大抵なコトでは驚きはしない二人が驚くほどに流琉は危険なことをしでかしたのだ。だが流琉はそれだけ桜牙に伝えたいことがある。

「秋蘭様はまだ生きてます!!」

流琉のその言葉に桜牙の動きがピタツと止まる。赤く縦割れだった瞳孔が人間のような瞳孔に変わっていく。それと一緒に桜牙の雰囲気荒々しい獣の雰囲気から、いつもの雰囲気変わりつつあった。

「シユウランガ……生きてる?」

「そうですね!! ですからこんなことをしている場合じゃありません!!」

流琉は強く言い切った。すると桜牙が持っていたレーヴァティンの刀身に輝が入る。その輝は徐々に広がっていき遂にはレーヴァティンが砕け散った。

「う、があああああああああああああつ!?!」

桜牙は頭を抱えながら絶叫した。さっきまでの金髪だった髪が元に戻っていき、真紅の瞳も元に戻る。そして全てが元に戻ると桜牙は膝をついた。



秋蘭が生きている。その言葉で俺は正気に戻ることが出来た。俺は何をやってたんだ……秋蘭が死んだと勝手に思い込んで、仲間を斬りそうになつて……もし流琉に言われなかったら俺は確実にみんなを殺していた……。

俺の目の前に立っている流琉も恐怖で涙を浮かべている。立っている二本足も震え、今にもヘタレ込みそうになっている。それだけさっきまでの俺はバケモノみたい、いやバケモノだったんだろ……。

我ながら笑えてくるな……。仲間を守るとか言いながら逆に殺そうとするなんてな……。

「悪かったな、流琉……」

「良いんです、兄様」

俺にそう言つて笑いかけてくれるんだが、どことなくぎこちない。当たり前だ、さっきまであんなだった俺を信じられるわけがないからな。

「僕たちにも謝罪は無いんですか？」

「そつだ。ボクたちにも謝罪しな」

そう言ってくる空と紅葉、いや確か『外史』の管理者の陸葉とか

言ったな……。だけどどつちにしろこの二人もボロボロだ。

「二人とも済まなかった……」

「なんか本当に謝られると気持ち悪いです……」

「なんか吐き気が……」

こ、こいつら……人がマジでへこんでるときにその物言いはないんじゃないのか？ と口には出さない。そんなコトを言ってる暇があるんだったら、秋蘭を助ける方法を考えないといけない。

そして俺たちは秋蘭のところに来てきた。流琉の言ったとおり秋蘭の息はまだあった。どうやら黄忠が放った矢は心臓を貫かず、その脇のギリギリのところを貫いたようだ。だがそれでも命が危険に晒されてるってことには変わらない。

どうにかして助けないと……。だがどうやって助けりゃ良いんだ……。さっきの戦いの覚えがある中では物理障壁の魔法を使っていたことから、魔法が幾らか使える環境になっていることが分かる。

だが俺自身に自動回復能力があったから回復魔法は大して知らない……。クソッ、どうすれば良いんだ……。

「空、どうにか出来ねえか……？」

「残念ながら僕の方ではどうにも……」

陸葉も管理者とか言う力を持つてるようだが、同じようになんとも出来ないようだ。

「クソッ……。何とかしねえと……。だがどうすれば……」

考える、考えるんだ。俺だったらどうなっても構わない。だから秋蘭を助ける手だてを……。そこまで考えて俺の頭にとある単語がよぎる。

『不老不死』『自動回復能力』『真祖の吸血鬼』。

「なあ、空……。俺の……。『真祖の吸血鬼』の力を秋蘭に与えるにはどうしたら良い……」

「！？ 桜牙さん、あなたは妙才殿にその力を与える気ですか！？」

「……………ああ」

秋蘭に『真祖の吸血鬼』の力を与えれば、秋蘭も不老不死になりこの怪我也自動回復能力のおかげで治すことも可能だ。ただそうした場合は秋蘭は不老不死になり一生涯死ぬことのない、死の螺旋を回ることになる。

それで秋蘭に恨まれようと、俺は構わない。一生、俺は秋蘭の側に居るのみだ。

「ですが良いのですか？ 確かにそれで救うことは可能ですが、それでは……」

「分かってる。例え恨まれようと俺は構わない。秋蘭を救えるなら……」

俺は自嘲気味に薄く笑いながら天を仰ぐ。この青空は雲一つない晴天だったのに、俺の心には雲でいっぱいだ……。

「……………始めるぞ。……………術式展開」

俺がそうつぶやくと秋蘭の周りに青白い魔法陣が展開される。どうやら本当に魔法が使えるようになったみたいだな……。

俺が創りだしたのは『真祖の吸血鬼』の力を打ち消すために秘密裏に考えていた魔法陣だ。だが結果は俺が考えていたのと真逆の、『真祖の吸血鬼』を作り出すと言うものだったがな。

だがその魔法の発動には真祖の吸血鬼の血と身体の一部を移植することが必要になる。そしてその素材は揃っている。

「肉体変更、発動媒体、我が血と我が身体……………術式開始」

俺はそうつぶやく秋蘭の首に噛みつく。もちろん血を吸うのではなく、そこから血を流し込むためだ。吸血鬼つてのは便利だ。血を流し込んでも無くならない、無限にあるみたいにな……。

そのあと俺は皮膚の一部を切断して、秋蘭の体に移植する。本来なら副作用が働くはずだが、その副作用は全く起こらない。何故かは分からなかったが、副作用が起きないに越したことはない。

そして俺は秋蘭に突き刺さった矢をゆっくりと引き抜く。無理やり引き抜いたら他の肉とか血管を巻き込みかねないからな。

だがそんな心配の必要はなかった。術式を行ったばかりだったので

に、秋蘭の胸に空いた穴はゆっくりとだったが、再生していった。どうやら術式は成功したみたいだ……。

「ど、どうなってるんですか……?」

今の状況についてこれてない流琉がそう問いかけてきた。

「そのうち話すよ……。今は……」

あれ？ 視界がブレてる？ いや、違うな。俺の身体が傾いてるんだ。それを理解したときには、俺の意識は闇の底に沈んでいた。

第五拾七話『定軍山の戦い〜二人目の吸血鬼〜』（後書き）

まず最初に スミマセンッ！！

前回1ヶ月と言いましたが、あと1ヶ月時間を下さいッ！！

いいわけにしかありませんが、筆が乗りません……。

出来るだけ早く更新しようと思いますが、間違いなく不定期になります……。

どうか調子が戻るまで私、ダメ作者を見守りくださいッ！！

第五拾八話『定軍山の戦い〜真実を知る仲間〜』（前書き）

投稿してほしいというメッセージまで来たので、書き終えていた  
ストックを卸します。

手直しもしてないので、他のと比べると若干文がおかしいかもしれ  
ません。

また、このときの私は何を考えていたんでしょうね。

わけの分からない設定までww

最後に。

更新が遅れて申し訳ありませんでしたっ！

では、どうぞっ！

## 第五拾八話 『定軍山の戦い』 眞実を知る仲間』

この日の華琳の城は非常に慌ただしかった。定軍山よりやってきた援軍要請の伝令により、兵士だけでなく将すらも慌てていた。定軍山で待ち伏せを食らえばどうなるかはだいたいは予想は出来ていた。しかしそんなコトは絶対に起こることはないだろうと慢心し、もしもの時のための準備を怠ってしまったのだ。

その有様がコレである。いつもであれば華琳の喝で皆が落ち着きを取り戻すが、今回に至ってはそれだけでは収まらなかった。それだけ今回の事件は危険な物だったのだ。

(くっ、このままでは取り返しのつかないことになるわ……。こんなときに限って桜牙も居ないし……)

華琳は慌てている将達をみながら思う。春蘭は妹の危機だ、と叫び一人出撃しているこうとしている。それを三羽鳥である凧達が止める作業にあたり、霞は早く兵士を落ち着かせるために動いている。軍師勢は定軍山に行った際の作戦について話し合っている。

いずれにしても全員が落ち着いているとは言い難い。霸王・曹孟徳ですらも今の状況に焦っている。故に考えてしまう。すでにこの軍の大黒柱となっている人物 龍崎桜牙であればどのようなにしてこの場を終息させるのかと。

(いったいどうすれば……)

華琳はこの状況に苛立ちを抱きながらそのようなコトを考えてい



ると、慌ただしい玉座の間に一人の兵士が飛び込んできた。いつもの状況でそのようなことをする兵士が居れば、打ち首か何かしらの罰を与えるなどをするのもかもしれない。

しかしこの状況下の玉座の間に飛び込んでくるといふ人物が居るとすれば、今の状況について何かしらの情報を持っている人物だということになる。だからこそ、その場にいた将達が一斉に玉座の間に飛び込んできた兵士に視線を集めた。

「失礼します！ たった今、定軍山より夏侯淵様の部隊、さらに龍崎様の部隊が帰還しました！」

「（帰ってきたのね……。良かった）それで秋蘭は大丈夫なの？」

「は！ それが」

兵士が華琳の前で掌に拳を当てながらさっきまでの状況を説明していると、そんな兵士の声を遮るように一人の男の声が聞こえてきた。

「そのことについては僕から説明させてもらいますよ、孟徳殿」

そう言ったのは桜牙の隊と一緒に出撃していた空だった。空が着ているローブのあちこちには切れ目などがあり、その場にいた一同は何事かと思議に思っている。空の実力は全員が知っている。そんな空がボロボロになっているのだからこそ、不思議に思っていたのだ。

「分かったわ。ならあなたは下がりなさい」

「は!！」

華琳の言葉を受けた兵士は一言だけそう答えると、玉座の間を去っていった。玉座の間の扉が閉まり、少しの間沈黙が支配する。そしてそんな沈黙を華琳が壊す。

「空、秋蘭はどうなったの？」

「結論から言えば過程はどうあれ妙才殿は助かりました」

「……どういう意味かしら？」

華琳は空の言葉の言い回しに妙な違和感を感じた。助かったのであれば、ただ助かったと告げれば良かったはずだ。それにもかかわらず空は何かを言い含めたような言い方で結果を報告していた。さらに過程はどうあれ、と言う言い方が華琳は引かなかった。

「そうですね……。今回あったコトを説明するには、桜牙さんの世界の話からしなければなりませんね」

「龍崎の居た世界？ それは天の国と言うことか？」

「まあ、そう言うことになりますね」

春蘭の問いに空はうなずきながらそう答える。実際は微妙に天の国と言うことは違うのだが、この世界からしたら桜牙の居た世界は天の国と言っても過言ではないために、空はあえてそれを否定はしなかった。

「まず彼は人間ではありません」

「……あなたは何を言っているの？ 私達をバカにしてるのかしら？」

華琳は空がそう言うのと、空に殺気を飛ばし睨みつけながらそう言い返した。普通の者であれば華琳が放つ殺気、覇気に吞まれてしまふところだろうが仮に空も『神の遣い』。その程度のことでは全く動じない。

しかし華琳の言うことももつともだろう。桜牙は空が如何に人間でないと言おうとも、誰からみても人間のそれと変わらない。だがそのことを理解していなくても仕方ないだろう。

「話は最後まで聞いてください。彼は見た目こそ人間ですが、桜牙さんの居た世界、これからは天の国としましょう。とにかく彼は天の国で『真祖ハイデイルイトオーカーの吸血鬼』と呼ばれる存在でした」

「はいでいらいと……うおーかー……？」

空が発した『真祖ハイデイルイトオーカーの吸血鬼』という言葉に季衣が首を傾げながらそう問い返す。

「はい。色々定義はありますが、今はこの『真祖の吸血鬼』という種族は不老不死、そしてその力を持つ桜牙さんはバケモノとも呼ばれる存在とだけお伝えします」

「不老不死……バケモノ……」

空が発した不老不死、バケモノという単語にその場にいた全員が驚愕の色を示していた。不老不死と言うのは永久に死なずにさらに

は歳を取らないという人によつては良くも悪くもある力だ。だが華琳は思う。確かにこのコトが嘘か本当かは分からないが、本当であれば驚くべきコトだ。だが今の秋蘭の話と何の関係があるのかと。

さらには桜牙がバケモノと言うことにも少なからずその場にいた全員が動揺していた。そしてそんなコトは華琳だけが思ったことではなく、その場にいた全員が同じようなことを考えていた。それだけ皆秋蘭のコトが心配なのだ。

「話はこちらからなのですが、まず妙才殿は黄忠殿の矢により貫かれました」

「どういうコトやねん！ 矢で貫かれましたって秋蘭は助かったんとかやうんか！？ それに流琉はどないしたんや！？」

霞は空の言葉に理解できないとばかりに叫ぶ。確かに空は秋蘭は助かったといったが、今の話を聞く限りではとても助かったようには聞こえない。さらには話題には上がらなかったが、流琉の姿も見あたらないことが気にかかっていた。

「典葦殿であれば怪我一つありません。今は妙才殿の側に居るはずです」

「あの……隊長はどないしたん……？」

真桜が霞の言葉に便乗するように言つて来た。空が帰ってきたのであれば、一緒の隊であり桜牙も帰ってきていることになる。しかし現に桜牙は玉座の間には現れず、状況を空が説明している。これはいつもの桜牙からしたら異常な事態であると言える。しかし真桜のその問いに空の表情にわずかに雲掛かる。

「彼の容態については後ほどに話します。話を戻しますが妙才殿は矢で貫かれました。ですが彼女は生きています」

「だからどういうコトなのだ！！ 我々に分かるように説明しろ！！」

空の説明に春蘭は今にも嘔みつきそうな勢いで叫ぶ。それも仕方がないだろう。実の妹である秋蘭の容態を知りたいのにも関わらず、空が言わないことにイライラとしているのだ。

もちろんそのことでイライラしているのは春蘭だけではない。この場にいる全員が今すぐにでも秋蘭の容態を聞き出したのだ。

「慌てないでください。確かに妙才殿は矢で貫かれました。もうすぐにも命を落としてしまいそうな状況でした。そこ先ほどのこと思い出してほしいのです」

「はいでいらいと、うおーかーとか言う奴のコトかしら？」

「ええ。その力には不老不死だけでなく、傷を即座に癒やす力もあります」

「え………っ」

桂花が空の言葉を聞いてそう呟いていた。桂花は以前に桜牙に助けてもらい、その際に桜牙は腕に矢を貫通させていたのだ。医療に詳しくない桂花でさえもその怪我が治るのに数週間は掛かると思っていた。

しかし実際には二日ほどでその怪我は完治し、何事もなかったように桜牙は振る舞っていた。そのとき桂花は何も思っていないかったが、今にして思うと空の言ったとおりだった。

「矢で貫かれた妙才殿の命は絶望的でした。そこで桜牙さんは自らの体の一部、つまり不老不死の肉体を妙才殿に与えたのです」

「……つまりは秋蘭も……不老不死になった、と言うことかしら……？」

華琳は恐る恐ると言った感じで空に問いかける。華琳はあえて『バケモノ』とは言わなかった。その問いに空は一回だけ頷いた。するとその場に再び沈黙が訪れる。それも仕方がないだろう。その話が本当であるならば、桜牙だけでなく秋蘭もバケモノとなってしまうこととなる。

そうなればどのように接して良いか分からなくなってしまったのだ。見た目は人間であるにも関わらず、人間を凌駕した存在である桜牙と凌駕してしまった存在である秋蘭の二人。真実を知ってしまった皆は恐らく知らず知らずのうちに前とは違う接し方になってしまっただろう。

「そう……。それで秋蘭は無事なのね？」

「未だに意識は戻りませんが、無事であるコトは僕が保証しましょう。ただ、いつ目覚めるかは僕にも分かりません」

「分かったわ。……それで、桜牙はどうなったの……？」

「彼も無事ですよ。と言うより彼が負けるなどとコトは絶対にあ

りません。ただ、彼にはしばらく近づかないようにしてください」

「何故かしら？」

華琳は秋蘭が無事だと言うことと、吸血鬼バケモになってしまったと言う動揺を抱えたままに空にそう訊ねる。今の華琳の動揺は周りにいる皆が分かるほどで、尋常でないコトだと自然に皆が悟る。

「彼の力が真に目覚めたからです」

「真に目覚めたから？」

「はい。知られざる力 『神祖の吸血鬼』についてお教えしましょう」

そこで空は『真祖の吸血鬼』がいる世界ですら知られなかった力 『神祖の吸血鬼』について説明した。『真祖の吸血鬼』の力を持つ者は好むと好まざると一生き続けなければならなくなる。そしてその一生の人生の中で一つを除いて全てのことを体験、理解することが出来るだろう。

唯一体験できないことと言うのは 『死』を体感すると言うことだ。実際に死んでしまえば『死』と言うのは理解することは出来ない。しかし意識では理解することは出来なくとも、その身体は『死』を理解したことになる。そして死ねないとなれば『死』を体験できない。

そして『神祖の吸血鬼』の力を得るには死ねないにも関わらず、死を体験するというのが条件なのだ。故にこの力の存在は誰にも認められることがなかったのだ。しかし『神』と付くだけあり、神達

の間ではそれは知られている。

そして桜牙は一回目の転生した世界にて『死』を体験した。その状態のまま桜牙はこの世界に転生した。しかしこの時点ではまだ『神祖の吸血鬼』には覚醒していない。

覚醒するきっかけになったのは『愛しき人の死』だ。これにより桜牙の『神祖の吸血鬼』の力が発現し、御しきれずに暴走してしまつたのだ。その力は強大ではあるが、その力自体が人格を持ち覚醒したとしても力に認められなければ力に振り回され暴走してしまうのだ。

「ですから暴走に巻き込まれないためにも、あなた達は絶対に近づかないでください」

「……分かつたわ」

さすがの華琳も今の話を聞いて完全に桜牙とどう対応すればいいか分からなくなつてしまつた。おそらくこの場にいる全員が同じ心境だろう。いや、全員と言つにはおかしかった。ただ一人だけ、そうでない者が居た。

「よく分からなかつたのだが、龍崎が困っているのならば助けてやれば良いではないか」

その言葉を発したのは春蘭だ。彼女も自分で言つたように空の話を理解してないがそう言つたのだ。おそらく理解してたととしてもそう言つてたかもしれないが……。

「……ですから今は危険ですので近寄らないでください」



「案ずるな。今の私は龍崎になど遅れは取らん！ 暴走だかなんだかは知らぬが、あ奴が困っているならば、今までの借りを返すためにも助けてやらねばならんだろ？」

春蘭のその言葉に皆が頷いた。その春蘭の言葉に皆が思った。バケモノになったからなんだと言うんだ。今まで彼はいつ何時も自分たちのことを守ってくれていた。ならばその借りを今返そうじゃないかと。

「はあ……（桜牙さんが苦勞するのも分かった気がしますね……）分かりました。ただし、面会などをするときには僕を連れて行くようにしてください。それが条件です」

「そればかりは仕方がないわ。秋蘭の面会の方はあなたを連れて行く必要があるのかしら？」

「いえ、彼女の場合はいつ目覚めるか分からないと言っただけで、危険はありません」

「分かったわ。なら今のことを城の侍女、皆に伝えなさい。話を知らないままであれば、危険があるかもしれないわ」

「……………はっ！！」「……………」

華琳のその言葉により報告は終わり解散となった。そして解散すると空はすぐに桜牙の部屋に向かった。

空が桜牙の部屋に行くとそこには紅葉いや、陸葉が桜牙の部屋の前でまるで門番をやるかのように居座っていた。さらには先ほどの戦いの疲れが溜まっていたのだろう。目をつむり規則正しい寝息をたてていた。

しかし空が近づいてきたことを察知すると目を開け、ゆっくりとした動作で空の方を見る。

「彼女達に説明してきたみたいだね。ボクも紅葉には説明していたよ」

「そうですか。……ところで、桜牙さんの容態はどうなっていますか？」

空は部屋にいると思われる桜牙の方を見ながら陸葉に訊ねる。

「まだ安静にしてるよ。まあ、もうじき始まるだろうね。神祖との戦いが」

「……あなたはどこまで知ってるのですか」

空はいつにもまして真面目な表情を浮かべながら陸葉に訊ねる。空が『神祖の吸血鬼』について知っているのは『神の使い』だからと言うことで説明することが出来るだろう。しかし陸葉はどうだろう。

外史の『管理人』とはいえそこまでの情報を知っているとは思えない。今にして思えば本来、外史に無理やり介入してきた空が想定外と判断できたとしても、『神の使い』ということはどうやって知ったのだろう。

「どこまでって言われても知ってることしか知らないさ。別に良いじゃないか。知ってようが知ってまいが」

「……」

確かにこれを知ってようが知ってまいがどうでも良いことだ。だが知ることが出来ないはずの情報をドコから取り出したのか。もしそれが神の居る世界になんらかの影響を与えたとしたならば、『神の使い』としてそれを見過ごすことは出来ない。

元々空は桜牙の生き方に憧れ、桜牙の元にいたいと思い介入してきたが、それと同時に神の居る世界に影響を与えないようにと監視も含めて桜牙の側にいる。だが今のところ桜牙にはその力はない。だが陸葉がもし影響を与えかねない存在であるならば、排除しなければならぬ。

「はあ……。安心しなよ。別に君たちの世界に関与してるわけじゃない。外史とは無限に存在するんだ」

「……」

「その無限に存在する外史のページにコレと似たような事例があったのさ。故にボクはこの力について知っているだけさ」

「……」

溜め息混じりでそう言う陸葉を空はジッと見据える。確かに嘘を言っているようには見えないが、本来の御使いを押しイレギュラーのけ想定外として介入してきた外史が他にも存在することが俄かに信じられなか

った。

「信じるも信じないも勝手だけど、早く結界を張らないと始まるよ。本能（神祖）との戦いが」

陸葉がそう言ったとたん、桜牙の部屋より莫大な魔力が放出された。しかもこの魔力は全盛期の桜牙すらもはるかに上回り、その魔力は明らかに尋常な魔力でないことが分かる。

さらに言えば、おそらくは魔力を発現していないものであってもこの魔力に当てられれば、身体に影響を来すだろう。その例が陸葉だ。冷や汗がにじみ出てきて、苦しそうに顔を歪めている。

それだけ今の桜牙の魔力は濃度が濃く危険だと言うことだ。その魔力にも驚くべきコトなのだが、空は他にも驚いていることがある。

（バカな……。なぜ、神力を桜牙さんが……！？）

空が感じ取ったのは神がいや、神しか持っていないはずの力、神力を感じ取ったのだ。本来であれば神しか使えないはずの力を桜牙が使っている。コレには驚かざるを得なかった。

（驚いている場合ではありませんね。今はこの魔力を部屋内に押しとどめる……！！）

空は神力を全て解放するとそれを立方体に固定する。神力で削った壁ならば例えチート能力者であっても破壊することは愚か傷を付けることすら出来ないはずだ。しかし桜牙はその壁すらも破壊しようとしている。

(く……っ!? このままでは……。 ツ!?)

空がマズいと思っていると、不意に魔力の流れが遮断された。神力で造り上げた壁も正常に働いている。しかしこの壁は空が創ったのではない。

(スゴい……。これほどまでのモノは老師クラスでなければ創れない……)

老師というのは桜牙を転生させた神のことだ。確かにミスをした神であったが、戦いとなればその力は全神の中でもトップクラスだ。その神と同等の力を出せるとなるならば驚かざるを得なかった。

しかしそうなるとコレを誰が創ったのか。空はそのような疑問を抱きながら後ろを振り返ろうとする。しかしその前にきた衝撃により意識を失った。空が最後にみたのは銀髪をなびかせ、真紅の瞳を持っている男だった。そしてその男は空が倒れる前に抱きかかえる。

「ようやく介入出来たと思えば、いきなりこれが」

「助かったよ( )。呼んでみて正解だったよ」

そう。この男はこの外史を管理している守護者と呼ばれた男だ。

「全く……。面倒なことになったものだ」

「まあ、これで生きるか滅ぶかは彼次第かな」

「そうだな。ちっ……。まだ完全ではなかったか……」

守護者は忌々しげにそう呟き自らの体を見る。すると足元から守護者の体が透けていつていた。

「仕方がない。陸葉、結界は奴が真に覚醒すれば自然に解除される。その間に誰も近づかぬようにしろ」

「了解。任せておきな」

陸葉がそれを言うのと同時に守護者は消滅した。そして陸葉は澄み切っている青空を見上げた。

第五拾八話 『定軍山の戦い〜真実を知る仲間〜』（後書き）

この小説は、予定としてはあとは来春までは更新しません。

その頃なら、ネギま！の小説も終わっているでしょうし、何よりも手直しがかなり必要ですからね。

元となった小説もリメイク中なのに、更新してませんから……。

来春までに残ったストックを二つほど落として、あとは凍結扱いです。

強い要望がありましたら、もしかしたら合間を縫って最新話を書くかもしれません。

では。

次に会うときまで！

ちえりお！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3485p/>

---

我が業炎は霸王の剣

2011年11月16日11時09分発行